
とりかえっこ漫遊記

ふとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とりかえっこ漫遊記

【Nコード】

N48400

【作者名】

ふとん

【あらすじ】

運だけは誰よりも悪い私。

けれど生まれてこのかた命に関わるような事件に巻き込まれたことはないし、勢い余って悪事に手を染めたこともない。

そんな平凡な私にこれは何の冗談ですか？

トラブル巻き込まれ体質な私の異世界漫遊記。

世界とわたし

あなたは、パラレルワールドというものをご存じだろうか？

自分が生活している世界とは異なる、しかし同じ次元に存在するという世界。

似て非なる世界のことを指す。

らしい。

そういう世界に何かの手違いだか偶然の産物に巻き込まれて入り込んでしまうやつは相当運が悪いということだけは、わかるつもりだ。

つまり、

「…ここ、何処…？」

真っ青だがコスモスらしき花畑のど真ん中でこんなセリフを呟いている、私のようなやつが放り込まれる世界のことだ。

迷子と黒マント

その日は、相も変わらず最悪な日だった。

近所の犬に吠えられ生ゴミを出し損ねて遅刻しそうになって正社員に睨まれ、残業必至の仕事を渡されたかと思えば定時に帰れと叱咤され、泣く泣く昼休みにも仕事をして終わらせたかと思えば同僚に「あの人使えない」扱いされ、やけ酒を飲もうにも次のバイトが控えていて慌てて退社し、他のバイトが居ないと店長に泣きつかれるまま深夜まで居酒屋で客の注文を取り続け、家に帰って寝る時間もないと疲れきっていた帰宅途中。

信号を見ていなかったのが悪かったと思う。
けれど、アクセル全快に踏み込むかフツ？

わたくし、君島葉子が最期に見たのは交差点を傍若無人に突っ込んできた車のヘッドライトでした。

自分の持ち物を確認しながら、ここまでの経緯を思いいたって、
がつくりと項垂れる。

なんて運の悪い。

気がついたらお花畑に座ってたなんて、どんな死に様したんだ私。
お父さんお母さん先に死んじゃってごめんなさい。

弟よ、今まで貸したお金ちゃんと返しといて。葬式代の足しになるから。

あ、でもどうして死んでるはずなのにこんなに現実感ありありの、
コンビニで買ってきたビールがあるんだろう。

雲一つない青空のもと、あまりにもだだっ広い花畑に放り込まれていたので、近場にあった大きな木の下に避難して、こうしてお店を広げているのだ。

くたびれきったバイト帰りだからロクなものは持っていない。

財布と携帯、手帳にハンカチ、化粧直しのポーチ。あとはコンビニ袋の中身のビールにおかかのおにぎり。

辛うじてジーンズと薄手のセーターに安いコートを羽織っているけど、トレッキングに向いた格好とは言い難い。

この不安な装備のまま、果ての見えない地平線の向こうに、居るかもしれない第一村人を探して歩くのは無謀に思えた。

そもそもこのお花畑には天国だが浄土だからっていう雰囲気があるけど、それにしたってお迎えらしきものもない。

今まで一度も死んだことも川の向こうに渡りかけたこともないから、詳しいことはわからないけど。

まさかここは地獄か？

このまま飢えて干からびろの刑？

今まで一度も手が後ろに回ったことのない私になんて無体な最期！

「なんだ、マヨイビトか」

低い、くぐもった男の声だった。

思わず悲鳴を上げそうになった口を押さえて、ゆっくりと振り返る。

自分で思っていたよりもパニックだったらしい。

この気配に気がつかないなんて、気が動転していると思えない。

それほど近くもないのに、影の長さに圧倒されるほどの長身。

明らかに怪しい人型だった。

日光を避けるためなのか黒に近いマント姿で頭から目深にフードを被っている。

声がかぐもっていたのは、昔のお代官様みたいに口元にも布があってあるからだ。

そのため、この人型の容貌は全く知れない。

ただ、物騒なことにマントの下からは平和な現代日本ではまずお目にかかることのないだろう、剣らしき鞘の先が見えている。

怪しい。

怖い。

思わず地面に座り込んだまま後ずさった。

それを見てとったのか、怪しいマントはゆったりとした、それでいて隙のない動きでその場に片膝をついた。

「……大丈夫だ。お前に危害を加える気はない」

カチリと音がしたかと思うと、差し出すように地面にマントが置いたのは、腰に佩いてたらしい剣だった。

柄には滑り止めの皮なんかが巻かれていてとてもよく手入れされて、使い込まれているようだ。

いやいやいや！

こんなの差し出したって、素手で十分負けますよ私！

首をぶんぶん横に振ると、困ったように（マントだからわからな
いけど）黒マントは首を傾げる。

「俺の言葉が通じる、運がいいマヨイビトなんだぞ。お前は」

……マヨイビト？

そういえば、さっきもそんなことを言っていた。

私の疑問符が見えたのか、黒マントは小さく肯いた。

「お前は、この世界に迷いこんだ人間、マヨイビトだ。わかるか？」

小さな子供に言うように言われて、私はこの黒マントと出会って初めて会話らしいことを口にした。

「……ここ、何処？」

お花畑と恐竜

「世界の名前は、神ではないので知らないが、大陸の名前はパンゲア。四つの国が四分割されている戦争続きの大陸だ」

なんて物騒な。

「私は誰？」的な漠然とした疑問にも親切に応えてくれた黒マントの説明に、思わず顔をしかめると、黒マントは苦笑したようだった。

「もっと地理的なことを言うと、このシガンバナ畑はトウゴク、コウトの郊外だ」

黒マントは確かめるように、地面に黒手袋の指で文字を書き出した。

此岸花。

東国。

皇都。

「読めるのか？」

読めもするし、意味もわかるが聞いたことがない言葉だ。

此岸。

「……私って、死んだんじゃ……？」

「生きてるぞ」

独白に応えてくれたのは黒マント。

「お前はマヨイビトで、あちらの世界からこちらの世界に迷い込んだだけだ」

黒マントは律儀に迷い人と地面に書いてくれたらしい。
ひらがなの部分が見たことのない文字で読めない。

しかし、だけ、とは言ってくれるねお兄さん。

こちらの世界とあちらの世界。

私は車にひかれて連れ去られた揚句、担がれているのだろうか。
庶民の我が家から身代金は取れないよ。

「どうすりゃいいんだろ……」

前門の未知世界、後門の車にひかれて御臨終。

あんまりじゃないか。この運命。

ここが世界の何処かだとしても、帰る手段が見当もつかないこと
だけは確かだ。

「心配するな。お前は運の良い方だ。この国じゃ言葉は通じるし、
文字もある程度読めるのなら、生活に慣れれば仕事だって見つかる」

黒マントの慰めは見当違いだが、車の運転手に幽霊になって文句
言うよりはマシだ。

うん。

マシなはず。

……たぶん。

「……あの…私これからどうしたらいいですか？」

溺れる者は藁をもつかむ。

この黒マント、見た目より親切みたいだから人の居る場所ぐらい
教えてくれそうだ。

「俺が町まで連れて行ってやってもいいが…」

いえいえ遠慮します。

そこまで信用はできないから。

断りを入れようとしたら、木の枝葉が風もないのにざわりと揺れた。

と、思ったら、目にも留らぬ速さで黒マントがこちらに差し出して
いた剣をつかんだ。

今度こそ悲鳴を上げそうになったが、黒マントはほとんど予備動作
もなく立ち上がってこちらを見下ろす。

「あとは自分で何とかしろ。殺されはしないだろうから」

「えええええ！？」

恐怖とは別の悲鳴を上げた私を尻目に黒マントは顎をしゃくって、
花畑の地平線を指す。

うながされるまま、視線をやると、真っ青な花の海の向こうから、
奇怪なものがこちらにやってきている。

あれは、なんだ。

つるりとした鱗の頭に、胴体はふさふさした長めの毛。まばたきするたび明滅するみたいな猫目に、獰猛そうな大きな口。

言葉を作るなら、恐竜もどきといったところか。

およそ人で飼いならせるような生き物にも見えないが、鉤爪のついた小さな前足にはしっかりと、馬であれば轡らしきものを握ってふさふさの胴体には鞍まで乗せている。

それに乗っているのが、また西洋ブリキの等身大のおもちゃみたいな甲冑着た人間なんだから、なんだか微笑ましくもある。

そんな一団が馬車（この場合は何と呼べいいのかわからない）を伴ってこちらにやって来るのだ。

なんだかよくわからないが、あまり良い予感はない。

黒マントに町まで案内してもらう方がまだマシだ。

急いで広げていた荷物をカバンに突っ込み、さあ、黒マントさんよろしくと振りかえったが、

「……いないし」

肝心の黒マントは忽然と姿を消していた。

ブリキとスーツ

もうちょっと居てくれても誰も文句なんか言わないと思うんだけど！

私は半泣きで声にならない悲鳴を上げた。

かよわい乙女を放り出していった黒マントに恨み事を呟きながら、覚悟を決めて、花畑の向こうからやってきた一団と向き合う。

彼らは砂埃をあげて私の前で一時停止したかと思えば、五、六人のブリキのおもちゃは重さなどないように恐竜もどきから飛び降りて、あっというまに私を取り囲むと、

「……ええと、とにかく話し合い必要だと思うのですが……」

問答無用に、腰に佩いている剣を抜いてこちらに突き付けてきた。私は迷わずホールドアップだ。

言葉が通じるんじゃないかったのか！ ばかの壁かこれ！

しかもこれ以上喋るなど言わんばかりに剣先が近くなるし。

ええ、ええ、もうしゃべりませんとも！

しかし、この人はほんとデカイな！

私も身長低いわけじゃないのにさっきの黒マントといいものすごい威圧感だよ！

腐った気分で口を閉じると、ざっと隊列が分裂して、馬車から何やら人が現れた。

お？

おお？

見たことのあるよそのお姿！

「乱暴はやめてくれ」

巨人サイズのブリキのおもちや達に劣らない長身が、なんとも透る声で私を牽制する剣先を下げさせた。

さらさらの黒髪に茶色に近い切れ長の黒瞳、しかし顔立ちは私が知るどの日本人よりも外国人ぽく整っていた。何とも違和感。でもとんでもなく美形だ。

何よりその美形は、ビジネスシーンではお馴染みの、スーツを着ていた。

「た、助けてください！」

馴染みのある格好を目にできて、すがらないわけにはいかない。

ほら、やっぱり私、あの黒マントに担がれてただけなんだよ！

そのカッコいい（助けだと思おうと後光が見える）美形に思い切りヘルプを叫ぶと、彼は少し困った顔で頷いた。

「俺といっしょに来てくれ。事情は説明する」

……何、そのなんだか嫌な予感のするセリフ。

要塞と面接

素敵なお兄さんと一緒に予想外に低反発な馬車（ということにしておく）に乗せられ、花畑を抜け、森を抜け、湖の真ん中に続く跳ね橋を渡って、連れてこられたのは、尖塔が乱立する、

「……もしかして、お城ですかここ」

頑丈そうな壁の張り巡らされた様子は城というより要塞のようだった。

中身は迷路のような要塞の一室にブリキ兵士に案内された。ベージュが基本の応接セットにふかふかカーペットとチェストが一つ。ほかにはランプらしきものが置いてあるだけの部屋だ。

案内してくれた兵士さんはドアの前まで来て部屋には入らないから誰かほかの人が来るのかと思ったら、一緒に連れてきてくれたお兄さんが応接セットのソファを私に勧めた。

促されるまま腰掛けると、前置きすら省いてお兄さんは話しだす。

「君は、ここが異世界だと認識しているか？」

いいえ、とも、はい、とも応えにくい質問だ。

沈黙を持って答えとすると、

「理解できないかもしれないが、ここは君が暮らしていた世界とは異なる世界だ」

えっとー、なんか出てきましたよ？ この非常識事態に非常識発

言が。

お兄さんはまっすぐこちらを見ながら話を続ける。

「君はもう戻れない」

……ええと、頭の悪い私でもここがさすがに天国や地獄ではないことは理解しましたよ。

いくら美形でも質問ぐらいはさせてもらおう。

「えっと、お兄さんは、日本人ですよね？」

「そうだよ。北城清司。君は？」

あら、質問返された。

「……君島葉子です」

「いくつ？」

「……二十四です」

なんだか会社の面接みたいでかなり緊張するんですけど。

「仕事は何してたの？」

お見合いかこれは。

「派遣社員で事務を」

おおいお兄さん！　いくらお助けキャラだからって仕事聞いて溜

息つくなよ！ 派遣なめるな！

「俺は、北城コーポレーションのCEOだった」

あんだすたーん？

しーいーおー？

つまりは、社長さんですか。

私より年上っぽいけどまだ三十路にも届かないほどの年齢ですよね？

美形で社長でお金持ち？

マンガだ！ リアルに二次元が紛れ込んでる！

はじめて見たー…こんなマンガな人。

物珍しげにガン見していたのか、お兄さん、北城社長は苦笑した。

「もう社長じゃないよ」

私が帰れないのならお兄さんも状況は一緒ってことだ。

でも、その威圧感の意味がわかりました。そっか、社長さんだったのかー。

「過労寸前の日々から解放されて、ちょっとほっとしているんだ」

セレブ会話あ。

来る日も来る日も働かなきゃ食ってられない私には、うらやましい限りです。そんなセリフ。

「あの日も忙しくてね」

少し遠い目で北条社長は続けた。

「本当に突然だった。車に乗って家に帰る途中、眩しい光に包まれたと思ったら、俺はこの城の神殿にいた」

……ん？

「神官から、この東国のために異世界から召喚したと告げられて、とてもじゃないが納得はできなかったが、帰る手段はないと言われた」

さも自分は不幸だというような顔されていますが、文明の真ん中に落ちたんですからまだマシじゃないですか。

社長は異世界でも社長待遇なんですね。私なんて野っばらで第一村人は正体不明の黒マントでしたよ。

「……君には、悪いことをしたと思っている」

はい？

「俺があるとき、車であの交差点を通らなければ、君はここにはいなかっただろう」

あー…。

「……あの車、北城社長だったんですか」

社長の話を引き継ぐと、社長自ら運転されていた時に不幸にも目映い光に包まれて、運悪く交差点に差し掛かった。

つまり、私は、この世界に召喚されたわけでもなく、巻き込まれたということだ。

全て話し終えたのか、社長がホッと一息つくと、

「失礼いたします」

タイミングを計ったように、ノックが鳴り、返事を待たずに扉が開いた。

つかつかと音がするほどキビキビと入ってきたのは、紺の詰襟男だった。

マンガでしか見かけないような長い銀髪が緩く結わえてあって、色白長身の姿は、それはそれは美しいが雰囲気は絶対零度。

話しかける気も失せる拒絶反応で、北城社長だけに手を胸にあてて礼を取る。

「セージ閣下。会議のお時間です」

おいおいおいおい。

「わかった」

納得しちゃうのか社長。

北城社長はソファから立ち上がりかけて私に目を配った。

「君の身元は保証する。生活も私が保証しよう。この件についてはまた話し合いの機会を持とう。今日はゆっくりこの城で休んでくれ。」

案内をつける」

そう言い残して、社長はこの殺風景な部屋をいそいそと出て行った。

この長身の国でも社長は見劣りしないのね。重ね重ねうらやましいわ。

残された私かというと。

「……あ、ビール」

いつまでも手に持ったままだったコンビニのビニール袋から、ビールを取り出した。

冷えていたはずの三百五十ミリは、すっかりぬるい。かまわずプルトップの封を切って、一気に飲んだ。

飲まなきゃやってられない。

お酒とメイド

東国の人は何かに困って異世界から人を召喚した。

社長は眩しくてブレーキを踏み損ねた。

私は疲れてて交差点の信号を見忘れた。

みんな自分の都合で、運の悪いことが重なっただけだ。

でも、この中で一番割りを食ったのは、私であることは否めないと思う。

だって、必要だから召喚されたわけでも、要は不注意で車に轢かれそうになった（ぶつかる直前にこちらの世界に飛ばされたらしい）のも、私には何の罪もないことだ。信号見てなかったけどね！

あの交差点を歩いていたことが悪いと言われたら、それは理不尽というやつだ。絶対認めないよ！

「もっと酒もってこーいっ！」

私付きだという栗毛の可愛いメイドさんに空になったグラスを向けると、クリスティーナというやっぱ可愛い名前のメイドさんは何やら困ったように、でも私に逆らうことはせず、次のお酒を持ってくるのか部屋を出て行った。

異世界だというのに、唯一助かったのは言葉が通じることだ。それは、あの黒マントの言う通りだと思うことにする。

あの黒マントは薄情だったけど。

私があのだに社長に言われて用意されたのは、ベッドと机といすだけがある、六畳ほどの部屋だ。トイレは陶器製の水洗で、部屋について清潔だった。得体のしれない人間にこの待遇はまだ良い方だろう。洋食だったが一汁一菜（パンだったけど）の夕食が出たし、食後にはこうしてお酒も飲ませてもらえた。

ここのお酒がまた美味しいんだなこれが。

気に入ったのは甘い果実を使ったらしい風味の甘いお酒。

淡いピンク色の透明なお酒は気分をほぐすのに持ってこいだった。飲みやすいが、アルコール度数も高そうだし。

嫌な考えは忘れてしまうに限る。

これからのことは、明日考えよう。

どのみち、もう私は元の世界に帰れないらしいから。

たぶん、探せば方法はあると思う。

社長の言う事が全てなんて思えない。派遣社員、馬鹿にするしね。帰ったら百年後でうらしま太郎とかシャレにならないけど、きっと私があのだに時間に戻ったら、無人になっても勢いだけはついてる車に轢かれて想像できる範囲でも良いことは起こらない。

だったら、せめて私は戻れないけど元気にしてるところこちらの世界から伝えられる方法を探そう。

……あーあ、あのビール、ぬるくてももつと大事に飲めば良かった。夕食前に一気飲みしちゃったよ。

ふ、と視界が霞んだと思ったら、控え目なノックが鳴った。
クリスティーナさんかな。まだ十代だというのに（聞き出した）

マナーが行き届いているものだ。

「はい。どちらさまでしょうか？」

言葉に反して格好が椅子にだらんと座ってるだけなのは勘弁してほしい。だって誰も見てないし。

「セージ閣下がお見えです」

来客にはメイドのクリスさんがお声をかけてくださるらしい。

おっと、元凶のお越しか。

私はのっそり体を起こして椅子にきちんと座りなおしてから「どうぞ」と声をかけた。

すると、クリスさんがゆっくりとドアを開いて、社長が男を伴って入ってくる。社長は昼間のスーツと打って変わって黒基調の詰襟服の装いになっていた。マント羽織れば舞台役者ですね。

フェロモンと椅子

うわあ、この世界は美形しか生きられないのか。

社長に付き添って入ってきたのは、濡れたような藍色の髪に、髪よりも濃い藍の瞳の男だ。社長と同じぐらいの長身痩躯でしなやかに歩く様子はまるで黒豹。私の視線に気付くと、世の女性が卒倒しそうな甘いマスクで艶然と微笑むのだから侮れない。

なんだ、あの歩くフェロモン。

フェロモン男を側に立たせて、社長は鷹揚に私の正面の椅子に座った。誰も勧めてないよ。

クリスさんはさも当然のようにワゴンに運んできたお酒をテーブルに並べるし。社長の前にも私と同じグラスですか。まあ私の方が不審者だから良いけどさあ。

「ご機嫌だね」

社長は、自分は仕事してきたのに、私だけ酔っ払いなのが気に入らないらしい。いや飲むぐらいしかやることないしね。

そういえば、

「北城社長は、お仕事だったんですか？」

会議がどうのとか言ってたなあ白い冷血仮面。

「北城でいい。——そう。宰相に抜擢されてね」

異世界に流れ着一て一日目の異邦人がもう宰相か。大丈夫かこの

国。

意外な表情が顔に出てたのか、宰相社長は昼間省いていた説明を続けるみたいだ。この酔っ払い相手に。

「俺の曾祖父が同じ役職だったらしい。……俺は、この世界の血筋らしいんだ」

社長はクリスさんかお酒を注いでもらって、一口なめた。予想外のアルコールに少し目を眇めてる。お酒は苦手？

「血筋で役職を決定するわけではないようだが、俺と親戚の本家がもう八十の爺さま一人になってしまったらしくてね。傍系も縁遠いから、俺が召喚される羽目になったらしい」

らしい、らしい、と続くのは、社長も本当は半信半疑なのだろう。でも曾祖父、ひいおじいさんが居たってことは確認してるみたいだ。やけに具体的な続柄出してきてるしね。

「この国は、戦続きの大陸の中で唯一中立を保っていた国らしいけれど、政治内部の腐敗が進んで危うい時期なんだそうだ。――まあ、予算をざっと見ただけでも危ないことは充分わかった」

あーあーあー、そんな危ない話は聞きたくありません。お酒のせいにして忘れよう。

私は相槌を打たずにピンクのお酒をグラスに注いで一気にあおった。

なんだかクリスさんもフェロモン男も驚いたような気配がしたけど無視だ無視。

飲みながら「社長は大変ですねー」と言ってやると社長は微妙な顔をした。あんたの気持ちをおもんばかるほど人間出来てないもので。

「そーいや、どうしてこの世界に自分だけが来たんじゃないって分かったんですか？」

いくら社長が元凶でも、私がこうして寢床にも食糧にも事欠かず、ぐだぐだと美味しいタダ酒を飲めるのは社長のお陰だ。

「召喚を行った技術者たちが、どうももう一人喚んだみたいだと言って、召喚したときに現れるらしいエネルギーの元を辿っていたら、君を見つけた」

「それはわざわざありがとうございます」

まあ社長に見つからなければ、今頃あの怪しい黒マントの世話になっていただろう。あの黒マントの言うことを信じるのなら、きっとこの要塞にも近づくはず、うまくすれば仕事を見つけられたかもしれない。

「……どうしてそう、君は俺に反抗的なんだ？」

社長は私を睨むように切れ長の目を細めた。

反抗しない方がおかしくないか？ 人として。

「俺の召喚に巻き込まれたかたちでこちらの世界に飛ばされたことは同情しよう。だからといって、俺と君のどこが違うんだ？ 俺だって元の世界では会社も、家族も、婚約者も居た。離れ離れになっ

たのは同じじゃないのか？」

うっわ婚約者までいるんだ。さすが坊ちゃん。

「それって、自分だって被害者だから自分は悪くないってことですか？」

酒を手酌で飲みながら、社長を見遣ると彼は少し目を見開いた。意外な発想だって顔ですね。これから大丈夫かこのひと。

「私は、バイトもしないと一人暮らしもままならない派遣社員で、同僚にも運勢にも見放されてる、ただの運の悪い女ですけどね」

だからって、

「だけど、両親は元気だし、弟はたまに優しいし、友達だっていて、それなりの暮らしをしてました」

だから、

「でも、もう、あの世界に帰っても、この世界に居ても、私はすぐ死んじゃうかもしれないですよ」

たとえ帰れたとしても、死んでしまうかもしれない。

そして、この世界に居ても、宰相が同じ世界の出身でも、何のしがらみもない私は、いつ死んでもおかしくない。

異邦人の私を保護する義理は誰にもない。

殺されても、おかしくはないのだ。

こんなことってあるのだろうか。

誰からも、何からも、必要とされないなんて。

生きるには、自分が頼りだというのに自分自身すら役立たずで。

運が悪すぎるにもほどがある。

ああ、駄目だ。

飲みすぎた。

明日はきっと良い日になると信じていたい。

そうやって今までもやってきたんだから。

全部明日だ明日！

何杯目かわからない酒杯を飲みほして、私は意識を手放した。

新人宰相閣下

「……まあ、私としては、彼女の言い分の方が正しい反応のように思えますけれどね」

藍色の髪 of 騎士は、そうゆったりと微笑むと、テーブルにつつぷして酔いつぶれた彼女を抱きあげた。

「あなたは少し、世間知らずが過ぎるところがありますね。セージ閣下」

清司よりも少し年上だという、この騎士にからかわれるように言われて清司は渋面を作った。

この世界に来てからというものの、思いもよらないことばかりだ。

その一端は、騎士に抱えられている女によるものだった。

君島葉子という女は、奇妙な女だ。

清司の周辺にはまずいないタイプだ。

染めていない黒髪は肩より少し長いほど。背はあるがコートにジーンズという風体のせいでまるで少年のようだ。顔の造りは平凡そのもので化粧つけもない。

素直に他人に感謝しようとしなない物の見方は、ひねくれているとしか言いようがない。

そして驚くほど酒に強い。

清司が飲み込むのも精一杯の酒をがぶがぶと水でも飲むように飲んだかと思えば、満足したかのようにテーブルに突っ伏して寝てしまった。

こちらの世界に飛ばされてきた人間がいる。

そう聞いて、清司は素直に嬉しかった。

清司自身はこの世界に三日前に飛ばされてきて、あらかたの事情は呑み込んだあとだったから、花畑で彼女を見つけたときには、天使を見つけた気分だった。

女性だとわかって、自分が守らなければと思った。

清司のせいで異世界に飛ばされてきて、たとえ元の世界に戻っても清司の車に轢かれて死ぬかもしれない。

そう言われて、彼女にはそれ相応の責任を負うことを決めた。

だが。

当の本人の態度はこちらの手伝いなど大きなお世話と言わんばかりだ。

挙句、被害者面をするな、と。

本来は、何の恩も義理もない彼女を助けてやろうとしているというのに。

「この子がもう少し大きければ、私が愛人にしてさしあげるんですけれどね」

抱きあげられても抵抗もしない君島葉子をベッドに寝かしつけて、騎士は微笑ましそうに彼女の頬を撫でた。

「は？」

彼女はすでに成人しているから、このフェミニストが興味本位で手を出しても問題はないはずだが、

「彼女、いったい幾つなんですか？ 十三歳ぐらいかな」

この世界の成人は十七歳だ。

そして、未成年の飲酒は禁止されている。

二十四歳という本当の年齢を教えてやって、はたして彼女は幸せになれるのだろうか。

そもそも彼女のいう幸せは、清司の感覚とはかけ離れていそうだ。

清司は迷ったまま、口を噤んだ。

ペンとワンピース

異世界に落ちて二日目。

「うえええええ気持ち悪いいいいいいい」

「大丈夫ですかヨーコさま！」

私は二日酔いでした。

うん、まあ、さすがに飲みすぎたからね。覚えてる限りじゃ、あのピンクのお酒をボトル三本は空にしてたし。

クリスさんに洗面所で介抱してもらってます。

最低ですね。私。

いや一度は断ったんですよ？

でも甲斐甲斐しく背中をさすられたら嫌とは言えないじゃない？

胃はほとんど空だったからほとんど吐くものなんかなかったんだけど、この頭痛と嘔吐感はどうしようもない。

もう飲みすぎませんごめんなさい。

ほどほどにします。

小一時間は洗面所で脂汗をかいて、お風呂に入って（これも部屋についてたらしい。昨日は部屋の探検なんかせずにすぐお酒飲んだからね！）一息ついたところでクリスさんに頼みごとをした。お

世話になりっぱなしですみません。

「ええと、宰相閣下に手の空いた時間でいいから会いたいって伝えてくれませんか？」

昨日はほとんど泥酔してて何話したのかなんてさっぱりなものですから。

今度はシラフでこれからの手続きもろもろ交渉しないと。

「かしこまりました」

クリスさんは嫌な顔ひとつせず笑顔で言ってくれた。
メイドの鑑ですね。

「着替え、用意してもらってありがとうございます」

用意してもらったのはシンプルな濃い紫のワンピースすね丈。このお洋服はドレスが基本らしいんですが、ひざ丈が一般的な現代人は裾踏むから。デザインはクリスさんの黒のメイド服にフリルを若干足した感じ。

「ヨーコさまには不自由なくお過ごしいただくよう、仰せつかっております。何でもお申し付けくださいませ」

再びクリスさんにつこり。

こんな可愛いメイドさんつけてくれるなんて、宰相閣下さまさま。

「ありがとうございます。とても快適に過ごさせていただいています」

余談だけど、この人たちはあんまりお辞儀したりしない。礼を払うにしても胸に手を当てたり軽く会釈。常識非常識覚えていかないなあ。

宰相閣下に面会の申し込みをして、あと二日酔いにいいお茶を用意してくれると言って、クリスさんは出かけて行った。

ドアに鍵を閉めて。

小さく二人ぐらいの重い足音もするからきつと兵士だろう。

すみませんねえ、こんな庶民に人員割いていただいて。

「まあ当然なんだろうけどね」

大事な宰相閣下と一緒にやってきた女なんて、物珍しただけで用はないし厄介なだけだ。

社長との話をうすばんやり思い出す限り、この世界は厳密な身分制度で成り立っている。

良い悪い云々抜きで、身分のはっきりしないやつは薄気味悪いんだろう。身分って良く言えば、要はおおよその身元証明だし。

もしも身分制度に組み込まれるなら、私は庶民だし、生活に困らなくても貴族なんてまっぴらですけどね。社交と政治がお仕事なんて、人付き合いの良いやつしかなれないよ。

さて、クリスさんが帰ってくるまで暇だな。

今のところ衣食住保障されてるんだけど、窓から見える景色は山

と湖ばかりなんだよねー。綺麗だけどちょっと見飽きた。バルコニーはないし、窓は小窓が開く以外、嵌めこまれてるから開けることはままならない。

もしも私がスパイで、外と連絡取ろうとして小窓から何か投げ込んだら湖に落ちるから何かやったとすぐ分かる。

そういや、ここってランプ生活なんだけどマッチや火打石一つ部屋にはない。クリスさんが部屋の外から持ち込んでる。

おお、これってもしや監禁ですか。

まあ、もともとインドア派だから気にしないでおう。
気にするだけ損だ。

私はベッドの脇に放り出してあった自分の小さなバッグの中を漁った。

携帯電話は役立たずだけど、これを入れてて良かった。

小さな手のひらサイズの手帳とペンだ。

本当はスケジュール帳だけど、書けるものがあるって素敵。
これで、日記をつけることにしよう。

これは、私の生きた証になる。

……死ぬつもりなんかさらさら無いけどね！

お茶とティーカップ

備え付けのテーブルでぐだぐだと日記をつけていてふと思い出した。

昨日の不届きで親切な黒マントは、社長たちがやって来たから逃げたのではないのだろうか。

確かにあの黒マントはかawaii乙女を問答無用に放り出すような薄情者だと思うのだが、それでも直前まではここがパンゲアという大陸で東国の皇都の近くで、あの青い花が此岸花だということを教えてくれ、私が迷い人だということを教えてくれたのだ。しかも、ありがた迷惑だったが、近くの町まで連れていってくれようともしていた。

それなのに社長たちの気配を感じたと思ったら（私にはわからなかったが）態度を急に变えて逃げたのだ。

何者なんだ。あの黒マント。

スパイなのか？ 実際私にはスパイ容疑かかってるみたいだけど。

あーあーそういうことか！ 黒マントのせいでスパイか私！

ちくしょう、あの黒マント！

……まあ、スパイなんかじゃないし、出来ないし、今まで会った異世界人の中で黒マントはクリスさんの次に親切だった。クリスさんは命令されて、だけどさー。よくしてくれてると思うの。可愛いし。

日記をもうちょっと書こうかなあとペンを握ったら、ノックが鳴

って

「ヨーコさま。第一騎士団、ウィリアムさまがお見えです。よろしいでしょうか？」

ウィリアム…？ 誰だそれ。

「昨夜はご挨拶もせず失礼いたしました。私は第一騎士団所属近衛分隊、宰相付き護衛官を務めております。ウィリアム・フミヅキ・バークランドと申します」

宰相付き。ということは、あの歩くフェロモンか白い鉄仮面だろうか？

「えっと、白い方の人ですか？ 黒い方の人ですか？」

我ながらこの尋ね方はアホだと思うけどさ！ 仕方ないじゃない！

やっぱりアホだと思われたらしく、ドアの外で小さく噴き出す声が聞こえた。聞こえてますよー。知ってるんだろうけど。

「昨夜、セージ閣下と共にこちらにお邪魔した、黒い方です」

おお、大人。フェロモンの方か。

でも何の用だろう。

クリスさんがこちらにお伺いしてるってことは別に悪い用でもないようだけど。

すっぴんでワンピース着てるだけだけどまあいいか。

「どうぞ」

声をかけると、お茶のご用意セットを積んだワゴンを押したクリスさんと一緒に、昨夜の歩くフェロモンが優雅に現われた。

色の形容はあんまり間違っていないんだよ？ 濃い藍色の髪だし、ごついわけじゃないけど体格いいし、全身真っ黒の詰襟だしね。ひきしまったお腰に佩いたいぶし銀の剣がよく映える。それにしても背高いよねえ。

私が見上げると、歩くフェロモン、もといウィリアムさんの方はテーブルの上の私の日記に視線を滑らせていた。

「日記、ですか？」

おおっと、こちらの世界って漢字はあるんだった。

「記録をつけておこうかと思って」

といいつつ、手帳を閉じる。何にも悪いことなんて書いてないけど、日記読まれるっていい気分しないじゃない？

ウィリアムさんは少し考えるような顔をしたが、すぐに笑顔で隠された。やるな。

「そうでしたか。……座っても？」

はいはいどうぞどうぞ。どうぞと手を差し出すと、ウィリアムさんはやっぱり優雅にそれほど上等ではない椅子に腰掛ける。その間にもこちらに微笑むことを忘れずに。あの社長と違って女性の扱い心得てるな。

「本来ならば、淑女には親愛と礼儀として手の甲に一度ご挨拶申し上げなければならぬのですが」

なんだその映画の世界。やめてー。

一瞬で青ざめた私の顔色を汲み取ったのか、ウィリアムさんは苦笑した。

「セージ閣下から、同じような習慣はあるが、生粋のニホンジンであらう貴方にそういう免疫はないだろうからとうかがっております」

そうかそうか！ あの社長、外人顔だと思ったら、キスハグ大好き文化の落とし子でもあったか！

お察しのとおり、わたくしめはそんな文化持ち合わせておりませんとも！

「北城社長……北城宰相にはよくしていただいております」

とりあえず心の叫びは封印しておく。大人だし。

「北城、はここでは複数おります。どうぞセージ閣下とお呼びください」

……えーめんどくさいな……。

それにウィリアムさんの笑顔が限りなく胡散臭い。

「わかりました、善処します」

「はい。是非」

気が向いたら宰相閣下と呼びします。名前は呼ばない。
ウィリアムさん、漢字わかるけど日本人をよくわかりでない。
善処はすべて否です。

「ところで、セージ閣下にご面会をご希望ということでしたが」

おお、クリスさん、ちゃんと伝えてくれたのね。

そう思ったところへ、ふんわりと花のいい香りがするティーカップが目の前に差し出された。

お茶なんだろうけど、よくみると淡い黄色だよ。

ウィリアムさんの方にも出されてるけど、さっき言ってた二日酔いによく効くってお茶かな。

ありがとうってお礼言うと、クリスさんはふんわりと笑ってくれた。

でも、私はすぐには口をつけなかった。

必要なことをちゃんと話してからだ。

「宰相閣下は私の身元を保証してくださるとおっしゃっていました。そのことについて少しお話をしたかったのです」

「よくわからない世界に飛ばされて、ご不安でしょう。ヨーコさまはおいくつなのですか？」

ウィリアムさんは始終笑顔だが、この人ほんとに侮れない。

気遣うふりをして巧みに年齢を聞き出そうとするし。

しかも、憶測交えてないからちゃんと数応えないといけないし。

社長から聞いているかもしれないけど、ここはひとつ。

「十七歳です」

七歳ほどサバを読んでみました。
本家の女子高生のみなさまゴメンナサイ。

でもねーなんかねーウィリアムさん異常な笑顔だよこれ。

「お若くして大変なことに巻き込まれましたね。私でよければ何でもおっしゃってください。必ずお力になりますよ」

ウィリアムさん、非常に笑顔なんですけれどね。
なんか、怖い。

ほら、あの背中が寒いっていうの？ あれですよ。

「でも、あなたにはご不幸でしたが、愛らしいあなたのような方に
出会えて、私は幸運ですよ。この僥倖を恵んでくださった神に感謝
したいほどです」

ウィリアムさんのゆつくりと微笑む姿は艶やかそのもの。たちの
ぼる男の色気？ ていうのが部屋全体を覆うようだ。その矛先はす
べて私に向けられていて……

……………。

……え？

ちょ、私、女子高生って言ったよね？
じゅうななさいデースって言ったよね？

それに外人から見たら日本人って若く見えるっていうけど十七歳
ってきついよね？ 自分で言ったけど自分がいたたまれないよ！
それにウィリアムさん、あなた、フェロモン駄々漏れの大人だよ

ね？ 少なくとも三十路だよね？

まさか、あの、少女にいつっちゃうクチですか…！

「――…ごめんなさい。二十四歳です！」

思わず本当の年齢白状してしまいました。私の意気地無し。

案の定ウィリアムさんは驚いた顔をした。すっぴんですけどそこまで驚く？

……そしてなんで次に極上の笑顔なんですか。あなた。

「そうですか。二十四、でしたか」

ウィリアムさんの甘い声が更に深味のある声色になった。

ええええええ？ 少女大好き主義なんじゃないの？

「申し訳ありませんでした。ただでさえ不安なあなたの警戒心を煽らせてしまって……。ですが、あなたの力になりたいというのは本当なのです。そして出来ればあなたのその神秘的な黒い瞳に私を閉じ込めてほしいと願っている憐れな男の一人です」

今後、ウィリアムさんの戯言には耳を貸さないことにします。

小心者と罵らないように。

そんなこと言う子はあのきらきら笑顔に睨まれた蛙状態になればいいんだ！

映画かマンガでしかお目にかかれないような二次元美形から舞台役者顔負けのセリフがするする出てくるなんて誰が予想できようか。

私も負けじと笑顔を張り付けることにした。

私は女優…！

「それで、宰相閣下にはお会いできるんですか？」

声がなんだか強張ってたけど上出来だよ自分！

ウィリアムさんは少し心外そうな顔をしたけれど、大人だから微笑んで応えてくれた。

「ええ。本日の夕食の後にでも時間を設けるそうです。その折の飲酒はほどほどにと」

ええええええお酒飲んじゃだめって？ 昨日は飲みすぎただけだ
ってばー。

「昨夜は失礼いたしました」

「いいえ。もう少しお若いと思っていたので、あれほど強い酒をたしなまれるとは驚いていたのです」

と、笑顔のウィリアムさん。

いったい幾つと思われていたんだ私…。未成年だと思ってたんなら、未成年の飲酒見過ごすんじゃない。だめ！ 絶対！

「お酒が好きなんですね」

「ええまあ…」

女でお酒大好きとかなんか偏見持たれそうだからやめてよ。好きだけどさ！

「またの機会にご一緒させてください」

この人の笑顔ってなんでこんなに眩しいかな。

返事は適当に笑ってごまかしておいた。

「皆さんには、良くしていただいて本当に感謝しております」

改めて藍色の瞳を見据えて言うと、柔らかく見つめられた。やめてー。

「あなたは、私の国の事情に巻き込まれただけの、いわば被害者です。あなたへの責任は、宰相始め我々一同が負うところと認識しております」

静かな声が告げる謝罪は、きっと国を代表してのではなく、この人の謝罪だろう。ウィリアムさんはわかっているのだ。

責任はあっても、保護義務はない。

国の方針は、きっと、社長と同じだ。

「私は」

こんな性格だから、私は上手く媚びることができない。女失格です。すね。

「親切にしてくださったあなたとクリスさんを信じています。もちろん私を助けてくださった宰相閣下も」

信頼と親愛は別物だ。

けれど、私にとって今できることは目の前にある人を信じることだけなのだ。

私が相手を信じることと、相手が私を信じることは全くの別のことなのだから。

私は目の前のティーカップに手をかけた。

ウィリアムさんは口をつけていない。

私は、黄金色のお茶を口に含む。

ああ、やっぱりついてないな私。

——ふわりとした花の匂いと一緒に、私の意識は途絶えた。

薬と枕

「……うえええ気持ち悪い」

目覚めるたびにこんなセリフって乙女としてどうなのよ。二十代はまだ乙女なのよ。

起き上がったベッドの上でうなだれた。

あ、昨日眠ったベッドだ。このベッド。だったら元居た部屋か。

支えがなくてまだぐらぐらする体をどうしようかと思っていると、すつと背中に枕が立てかけられた。

ふと目をやると、栗毛の巻き毛が複雑な顔で私を見ている。メイドのクリスさんだ。

「ありがとう」

そう言うとな度は怒ったような顔で何も言わずに部屋を出て行ってしまった。

なんだなんだ？ どいつもこいつも責められた顔して。

君たちの思い通りに感謝したり怒り出したりしてやんないよ。

「水ぐらい置いてってよねー…」

まだ体がだるいし、頭が働かない。ふかふかの枕に背中を預けて目を閉じた。

何飲まされたんδρο。

……そう、きっと、あのお茶に何か入っていたんだ。

ウィリアムさんがお茶に口をつけなかったのだってわざとだ。

彼らは、私を試していた。

部屋は何らかの方法で監視されてて、日記をつけてたからウィリアムさんが確認しにきたんだな。

こんなことされ続けてたらいつか死ぬわ。その前に精神が持たない。

大きく溜息をつく、目の前に気配がして億劫だけど確認に目を開いたら、社長が水の入ったコップをこちらに差し出していた。

飲めって？

相変わらず横暴ですね。

無言で受け取ったら、何やらバツの悪そうな顔だった。全く、めんどくさい人たちばかりだ。

「私、何飲んだんですか？」

問うと、社長は険しい顔で私を見た。すぐには答えが帰ってきそうもないな。

こっちは体調悪いんだからとっとと済ませてよねえ。

「私の持ち物から、何かわかりましたか？」

この気分の悪さからして、何か別に変な薬とか飲まされてそうだな……。

もしかして、何もお茶に入ってなかったら、と思ったんだけど。

運悪いのは異世界に来ても健在で何よりですよ。
食べ物にトラウマついたらどうしてくれる。

「……君が、二十四歳で、君島葉子という女性で、俺と同じく日本からここへ飛ばされてきたということがわかった」

要は嘘ついてないことが分かったんですね。良かった良かった。
大事な宰相閣下ですもんねー。

「それで、私どうなりますか？」

胃の中がすっからかんだ。吐いたらしい。水が美味しいわ。
昼間来ていたワンピースでなく、淡い水色のネグリジェみたいな
ワンピース着せられているしね。あのワンピース可愛かったんだ
けな。

「……君はどうしたい？」

昨日と同じような黒の詰襟姿の社長は、すっかりこの世界の住人
だ。だけど私は異世界人のまま。

「あなたの側には居たくありません。命がいくつあっても足りや
しない」

少しこちらから目を逸らしていた社長は、おもむろ私を見つめる。
美形だけどそわそわしないわー。

私と同じ色の瞳と髪の色をしているけれど、社長と私は全く違う。
こればかりは仕方のないことだ。

「……君は、変わっているな」

そりゃ、社長の周りにはいないタイプでしょうね。こんな不幸女。幸運の女神さまに愛された人ばかりが社長の周りに侍れるのですから。

「社長とお知り合いになれて、天にも昇る気持ちですよ。ですが死にたくありませんので」

「……そのよく回る皮肉な口さえなければな…」

その苦々しい声に驚いて私は思わず社長を見上げた。
可愛がってやるってこと？ 冗談じゃない。

「皮肉な口さえなければ何だと言うんですか？」

「……………言いたくない」

社長はあからさまにこちらから視線を逸らせてしまった。親に問い詰められた中学生か。

そういやこの人いくつなんだろ。

「そういえば社長っておいくつなんですか？」

「二十八だが」

「ああ、やっぱり」

三十路はいつてないような感じしてたのよね。

「やっぱり？」

「三十歳には届いていないようにお見受けしましたので」

なんかね。社長の貫録あっても年齢の貫録ないというかね。

「ウィリアムに本当の年齢を教えたそうだな」

喋ったな。あの百戦錬磨め。

「何か問題がありましたか？」

貞操の危機だったんだよ。少女にいけるクチだと思わなくて。

「——いや」

その間が気になるわ。

「一度は十七歳だと答えたら、とても嬉しそうな顔をされたので」

そう言ったら、今度は社長が顔をしかめた。だからなんでよ。

でもいちいちかまったら夜が明けるわ。

「二十四歳から働く場所はあるんですか？ この世界の事情にはまだまだ疎いので、そのあたりのことを社長にはまだ助けていただき
たいんですけれど」

「働く気、なのか？」

社長は意外そうな顔だ。

当たり前でしょうが。いい大人がぶらぶらしててどうする。

「それなら、この城で仕事を用意できるが…」

「いやです。死にたくありません」

「……君を確実に守れるだろう？」

なんだろう。この人自虐趣味のある人なのか？

失言だとしても容赦なんかしてやらない。

「自分を殺しかけた人に守っていただく趣味はありません」

大きな声ではないが、はっきりと言ってやった。

案の定、社長は傷ついた顔をした。だからなんだって言うんだ。はつきりしない人だな。

自分は私が信じられないから、ありとあらゆる手段で調べたんだろうに。

それこそ、私を傷つけてまで。

嫌われない方がおかしいと思わないのか？

「私に、何を、飲ませたんですか？」

今度こそ、言い逃れはしなかったのだろうか。

社長は重い口を開いた。

「――睡眠薬と、自白剤、だ」

飲み合わせの悪そうな薬ですね。

下手したら死にそうだ。

「……ウィリアムは反対したが、クリスティーナとハイラントは君を取り調べるべきだと強弁した」

クリスさんと、あの白い鉄仮面のことかな？ ウィリアムさんは、

まあ、あの人フェミニストっぽいから。

でも、

「最終的には、あなたが許可を出したから、今ここにあなたが立っているんですよ？」

決断は社長だ。

「他人の意見に迎合するなどは言いませんが、決断には責任を持ってください」

ほんとに大丈夫か。こんな人、宰相にして。

「……本当に君は変わった女性だな」

あんたに苦笑してほしいわけじゃないよ社長。反省しろ反省。

「私は、この先あなたが何しようと思ってもないし、邪魔するつもりもないですよ」

ただ、あんたに宰相任せたこの国の人たちが不憫なだけで。

まあ、私が考えてるよりずっと上手くやるんだろう。何せ社長だから。

それに、

「私は、あなたを信じています」

まっすぐに自分と同じ黒瞳を見つめる。社長は切れ長の瞳を少し見開いた。

「私は、あなたが私を傷つけないことをこれからも信じていますし、あなたが私に嘘をつかないことを信じています」

クリスも、ウィリアムも、この人を守ろうとしているのだ。

私に社長を守る気はまったくくないが、悪い人ではないと思っている。

「――俺が、君を信じていないとしても？」

「信じることと、信じられることはまったく別のことです」

運が悪い私のことだ。万全ということがないので、信じる以外にあまり出来る事がない。

社長は少し溜息をついた。

「……長生きできないタイプだな。君は」

そうかもしれない。

「まず自分が信じていないと、生きていけないんですよ」

私が少し笑うと、社長は目を細めた。

「――最初に言ったとおり、君を悪いようにはしない。それだけは信じてくれ」

「殺されないうちに、身の振り方を考えておきます」

「その皮肉も慣れてくるといっそ心地いいよ」

ゆっくり休めと言って、社長は私の頭を撫でて部屋を出て行ってしまった。

しまった。社長ってエムの人だったのか。

紐パンとパン(前書き)

情操教育上、よろしくない表現が混じっています。ご注意ください。

紐パンとパン

社長と話してからすぐまた寝てしまつて、起きると朝だった。

昨日だったら、クリスさんがおはようございますと言つてくれたんだけど、今日は無人で、朝ごはんだけがテーブルの上に乗っていた。

おお、なんだ随分、応対変えてきたな。

でも、湯気が立つててまだ美味しそうだし文句はないよ。

何の卵か知らないけどハムエッグにパンにサラダにスープに紅茶。たぶんこちらの世界の食べ物から私にとって違和感ないものをわざわざ選んで出してくれているのだ。

顔を洗いに洗面所へ行ったらきちんと着替えも用意してあった。

本日のお召し物は淡い新緑色のアオザイによく似た服。スリット入った上衣にクリーム色の七分丈パンツ。靴も用意してあつて、布製の柔らかくて履きやすそうな靴だった。そういや私、履き古したスニーカーだもんね。

そうそう！ 下着は紐式なんだよ！ こう要所要所を紐で繋ぐ感じの。たぶん色々デザインあるんだろうけどご想像にお任せします。でも色気のあるパンツなんか持ってないから紐パンは初体験です。

（お食事の方失礼）

歯ブラシはないのかなあと思つてたら柔らかいブラシがメモ付きで置いてありましたよ。歯磨き粉は塩なんだね。昨日は洗面器とお友達だったから顔洗っただけだったし夜は吐いて寝ただけだったから。……こう説明するとすごい二日目だったな。

今日は天気もいいし健康的に洗濯でもしようかな。洗面所に自然素材ばい石鹸あるし。これぐらいは見逃してくれるだろう。

朝ごはんの冷めないうちにと身支度を整えて部屋に戻ると朝から
けばけばしいまでに極彩色な笑顔をたたえた詰襟服の男性が一人、
私の朝ごはんと向かい合って座っていた。ノック鳴ったつけ？

「……ウィリアムさん、おはようございます？」

「おはよう。ヨーコ」

外人から名前呼ばれるとほんと違和感あるな。いつのまにか何か
気安い言葉づかいだし。私はまだ慣れないから敬語のままでいかせ
てもらおう。

挨拶して席に着く間もウィリアムさんの暑苦しいまでの視線にさ
らされている。おおい。さすがにうっとおしいよ。

「どうしたんですか。こんな朝早くから」

言外にこんな朝っぱらから何の用だよおっさん！ という念をこ
めてみるが通じていないようだ。七色の笑顔は衰えをしない。

「もう酉の刻だよ」

確かに日はだいぶ昇ってるな。というか外人ばかりなのに時間
の数え方江戸時代ですか。すごいな異世界。

「体調は、もう平気？」

「ええ」

すでに二つ目のパンに手をつけていますよ。

「良かった」

にこやかにウィリアムさん。

何が？

と、思ったけど口には出しませんよ。ええ。大人ですからね！

「今日は君に提案があつてきたんだ」

「はあ……」

サラダを頬張りながら生返事。食事中に話しかけないでよねー。

「私のところに来ませんか」

………はあ？

意味がわからなくてキラキラの笑顔を見返すと、ウィリアムさんは心得たように頷く。

「セージ閣下はお忙しい方だから、君のことも後回しになるだろう。だから、代わりといってはなんだけど、私が君の後見人になろうかと思って」

続けられた話を要訳すると（装飾が多くて話長かったので）ボクが君の後見人になって衣食住提供してあげるから、

「要は、あなたの愛人になれと？」

朝ごはんをパンのひと欠片まですっかり食べ終わって満腹ですよ。ごちそうさまでした。

手を合わせている私を不思議そうに眺めていたウィリアムさんにうっかり口が滑りました。だってさー話長いんだよ。いくら歩くフエロモンの塊でも、そんなだとモテませんよ。

私のあからさまな発言に一瞬驚いた顔をしたけど、さすがウィリアムさん、顔の崩れをすぐ修正。大人だ。

「君の戸籍自体は閣下が用意してくださるだろうけれど、あとの生活の保障ははっきりいってままならないと思うよ」

愛人になれ推測に弁解がありませんね。ということはマジか。マジで愛人なのか。

「はぁ……」

そんなに非力でか弱くて可愛い女に見えるのか私。すごい異世界。

そんなありがたいお申し出をしていただけるとは、まだまだ私も捨てたものじゃないな。容赦は捨てて行こう。

「面白半分で私みたいなのを愛人にしたって、すぐに飽きますよ」

グラマラスでもセクシャルでもない棒っきれみたいな体の背だけ高い私にそういう女性的な魅力を見出すのは難しい。

はつきり言って彼氏いない歴イコール年齢の私にすごいテクニク的なものもない。……自分で断言できるってむなしい人生だわ。

「そんなことは、神様だってわからないことさ」

ウィリアムさんはことさら艶然と微笑む。
おお、美形が言うときまになりますね。

「黒髪が珍しいとか」

よく聞くじゃないですか。セクシー美女に飽きて珍しい女の子集めたいとか。

「セージ閣下のご親戚がいることは知っているね？ だからあまり珍しいことはないよ」

あっさり否定きたー。

「黒眼が珍しいとか」

「前述と同じく」

うーん……。

「だったらどうして愛人なんですか？」

「君が欲しいから」

直球！

思わずおののくと、ウィリアムさんは笑顔が続けた。

「君の白い肌がどんな味がするのか、細くて長い足がどんな風に絡むのか、その可愛い声がどんな風に啼くのか、見た目よりも質量のありそうな胸が……」

「もういいです」

爽やかな朝からなんでこんなセクハラ発言延々と聞かされにやならんのだ！

言い足りなさそうな顔するんじゃない！

そんなこと聞かされて嬉しがるのはよっぽど自分に自信のあるお姉さんだけだ！ 玄人相手にしてろエロおやじ！ 今日から歩く十八禁と呼ぶことにします。

「到底私には務まらないことがわかりました」

「どうして？ 今からでも相性確かめようか？」

きゃー助けて襲われる！

「謹んで遠慮いたします」

ろくでもないな異世界。てか私の運勢、どうやったら上向くんだ。対人運が最悪なのは充分理解した。

「申し訳ないんですが、私、とても夢見がちな性格でして」

話し始めるとウィリアムさんは面白がるような顔をする。馬鹿にしてるなこの色魔め。

「白馬に乗った王子様がいつか迎えにきてくれて夢のような恋をして夢のような結婚をして一生一人の女性として愛されることが夢なのです」

これぞ乙女の夢だ。どうだ参ったか！

「ですから、ちゃんと奥さんにしてくれない方にホイホイとついてはいけません」

愛人なんてもってのほか。それにウィリアムさん愛人多そうだしさあ。私に昼ドラ出演は無理だと思うんだよね。まず恋人にすがりつけないと思う。いびられたら夜逃げする。

「あははははははははっ！」

……おいおいおいおい。爆笑しちゃったよウィリアムさん。美形がお腹抱えて笑ってるよ。

乙女の夢を全力で爆笑しちゃったらいくら美形でも、全世界の乙女、敵に回しちゃうよ？

「やっぱり面白いね！ 君は！ それとも異世界の女性はみんな君みたいな感じなの？」

「……いいえー、それほどでも。それと私は特殊だと思われます」

世の女性がみんな私のような女だと思われたら私タコ殴りじゃないか。みんな可愛い女の子ですよ！ ええ！

ひとしきり笑ったら、ウィリアムさんは今度は思わずといった風な柔らかい笑みを浮かべた。こんな顔初めてじゃないかな。こんな笑顔ならお兄ちゃんみたいでいいのにな。

「三十越えたら結婚しろと周りがうるさくてね。君を正妻に迎えても面白そうだな」

口を開かなければお兄ちゃんでしたよええ。というかやっぱり三十路は超えてたんですね。その美形っぷりに貫録があると思いました。た。

「ウィリアムさんには、年下で明るくてウィリアムさんが大好きな可愛いお嬢さんがお似合いだと思いますよ」

要は私とは正反対の女の子だ。それにウィリアムさんって社長と話すより話して楽しいから好きだけど、胃の痛くなるような会話はすっかりで疲れる。

ウィリアムさんはちょっと考え込むような顔をしてるから、思い当たるお嬢さんがいるのかもね。

陰ながら応援しておきますよ。本当に陰ながら。

「それより今日はどうしたんですか？ お仕事は？」

人の恋路を邪魔すると蹴られますからね。そつと話題を変えようじゃないか。私を愛人にする発言も一緒に。

案の定、ウィリアムさんはこちらの話題に乗ってくれるようだ。改めてこちらに微笑んできた。

「護衛官の仕事は今日は昼から。午前中は非番でね」

貴重なお休みに私のお相手とは御苦労さまです。

「今日は君を誘いにきたんだよ」

「え？」

まさか昼からうにゃーんな場所じゃないだろうな。
ウィリアムさんは私の予想に反して爽やかな笑顔で続けた。

「街に出かけてみない？」

回廊とお小遣い

一度じゃ決して覚えられない回廊の迷宮をいくつかくぐって、ウイリアムさんに連れられてきたのは幾つかあるらしい跳ね橋の出入り口。まあ私の身支度なんてたかが知れてるから歯磨いて髪とかしてきただけだよ。

衛兵の控える石造りの出入り口に居たのは、今日の私と同じような赤茶のアオザイ姿の、

「クリスさん！」

可愛い栗毛のメイドさんでした。今はメイド服じゃないし、笑顔でもないけどね。

でも嘘でも親切にしてくれたんだし、素直に可愛い女の子に会えるのは嬉しい。セクハラおやじから解放されるよ！

駆け寄った私にちよっと面喰った顔したクリスさんだけど、一応会釈はしてくれた。元はこんな子なのかもね。

「朝の用意ありがとうございます。朝ごはん、美味しくいただきましたよ」

私の本心だけど、クリスさんの方は嫌味か皮肉か測りかねているようだった。まあ判断は本人にお任せします。

「ヨーコ。彼女が街を案内してくれるからね」

私の後ろで様子を見ていたらしいウイリアムさんが振り向かせる

ように手まねきした。

「これは心ばかりのお小遣い」

私の手を取ってウィリアムさんが乗せたのは手の平大の皮包み。何かずっしりしてるんですが。そういや私この世界のお金なんか持っていないよ。もしやこれ買収？　これで私買われちゃう？

「この程度のお金で君を買おうなんて考えてないから。本当に気持ちだよ。素直に受け取って」

顔に出ていたらしい。ウィリアムさんは苦笑しながら、包みを私に握らせる。

そういえば、この人は私の心配してくれていたんだっけ。下心ありだったけどね。

この皮包みも絞り紐の先に綺麗な飾り玉がついててさりげなく可愛い。その気遣い、社長に煎じて飲ませてやって欲しい。

「ありがとうございます」

素直にお礼を言うと、ウィリアムさんはほっとしたような息をついた。

「元気でいてくれて本当に良かったよ。女性は笑顔が一番だからね」

眩しい笑顔で言うと、ウィリアムさんはクリスさんに目配せして踵を返すと元来た通路を帰って行った。

これから仕事だもん！。

私もクリスさんに振りかえると、彼女はちょっと困ったような顔

で私を見ていた。栗毛に碧眼のぼりぼり外人の女の子がアオザイって結構面白い組み合わせかも。

「よろしく願います。クリスマスさん」

「……はい」

うなずくけれど、動こうとはしないクリスマスさん。ん？

「……閣下から、お聞きおよびなのでしょう？」

「何を？」

「……私が、あなたを……」

ああ、そのこと。

「いきなり出てきた私のことを信じろなんて、そんなおこがましいことは言いません」

衛兵が少し聞き耳立てているような気配がしたけれど、お構いなしだ。聞かれて困ることはない。

「あなたは命令されて私のお世話をきちんとしてくれたし、親切にもしてくれました」

出会って二日目の人の二日酔いの世話なんてなかなか出来ないよ
うん。ごめんね。

「だから昨日も言ったように、私はあなたが私を傷つける人ではな

いと信じているし、嘘も言わないと信じています」

なんか同じようなこと言ったな昨日の夜も。

「でもあなたが私を信じるかは、あなたの心ひとつなので私の及ぶところではないと思っています」

信じるのはクリスさん次第。

信じられなくて私を陥れるようなことがあるのなら、それは何か足りなかったただけだ。

「……信じられない」

クリスさんは私をじっと見つめて、呻くように呟いた。

奇麗な碧眼でこちらを遠慮なく睨んでくる。

「そんな奇麗事が、通じると思っているの？ 誰もがそう言ってやればあなたを信じるとでも？ じゃあ、私に殺されたって文句言わないっていうの？ 馬鹿じゃないの！」

おお、そう来たか。

「言っているんですか？ 文句」

「え？」

可愛い子だなほんとに。

人間の真なる裏表を知らんな？ ではお姉さんが後学のために披露しようではないか。その一端。

「てめえの手違いで勝手に異世界なんか他人巻き込んでおいて謝罪の一つもないのか馬鹿野郎どもが誰がてめえらなんかの言う通りにするかボケ大人しくしてりゃ薬だの尋問だの繰り返しやがって何様だそんなことされて誰がてめえら好きになんかなれるか阿呆そのすっかすかな脳みそ洗って出直してこいこの木偶の坊が」

一息ですこれ。

あらあらクリスちゃん呆気にとられていますね。

ついでにその衛兵さんたちも唾然としてますね。頭鈍いなこの人たち。私より鈍くて城勤めなんて大丈夫か？

こんなの朝飯前に言えますよ。

「と、まあ。普通はこのような文句が出てくるものですよ」

「普通！？」

そんなに驚かなくても。普通ですよええ。

にこにこしていたら何だか引かれた気がしますね。

正直な感想、申しあげましょう。

「奇麗事も何も、あなたが私を信じる信じないは、知ったこっちゃないって言ってるんですよ」

信じるのは私の勝手。信じないのはあなたの勝手。

結局そういうものなんじゃないのかな。

「これから街へ連れていくと言ってどっかの誰かに私を売りつけたとしても、私はあなたが親切にしてくれたことを感謝しますよ。一

宿一飯の恩義ぐらひは払う分別はあるつもりですから」

言い切った私をクリスさんは何だか怖いものを見るような眼で見えています。

怖いことなんか一つも言っていないんだけど。まだ。

しばらく迷ったようにクリスさんは視線を彷徨わせていたけれど、ようやく私を上目づかいに伺った。

クリスさんの方が私よりちよつと背が低いんだよね。異世界に来てまで背が高いのか私。ここに来て出会った男性陣は意外と異分子だったのかもな。

「……あなたを、裏切るようなことはしません」

絞り出すような小さな声だった。

クリスさんは不服そうに、でも決心したように言った。

「私は、あなたを裏切るようなことはしません」

続けて言ったことにはがっくりきたけど。

「今回のことは、宰相閣下の御采配です」

そうなんじゃないかなーとは思ってたんだよ。ウィリアムさんがお迎えに来たからね。でも大人だから知らない振りしてたおいたの。でもバレちゃったよー。締まらないな社長。

きつと、昨日の罪滅ぼしのつもりなのだろう。

「ご厚意に感謝します」

そういうことにしておいてあげよう。社長拗ねちゃうしね。

屋台と飾り玉

湖面に張った跳ね橋をのんびりと渡るあいだ、クリスマスさんは私の質問に嫌がらずに答えてくれた。

このアオザイと洋式の生活様式は、大陸の四つの国の文化が複雑に混ざり合った結果なのだそうです。

元来は東洋式の生活様式、このアオザイなんかが東国の基本で、一般の人たちにはそれが一般的で、貴族社会になるにつれて私にすれば西洋式の風習が入りこんでくるそう。キスとかハグとかね。でも外は日差しがきついからって、今の私は時代劇に出てくるような編み笠かぶっているんですよ。

跳ね橋を渡り終えたところでまた城の門があって、クリスマスさんが手続きしてくれて大きな門をくぐるとそこは石畳の街が広がっていた。

どうやら私が連れてこられた側は山側というやつで、街があるのは海側らしい。城はなだらかな丘の上だから、こげ茶色の瓦屋根の向こうに紺碧の海が見える。

懐かしいけれど、どこか違うのは道を通う人々の髪の色であったり、見たことのない看板の文字であったりして、ここがやっぱり自分の住んでいた世界とは違うのだと実感した。

街の大通りに入る前にウィリアムさんにもらった包みの中身を確認してみてもびっくり。だってなんか金色の棒みたいなのがゴロゴロしてたんだよ？ 誰だっけびっくりだよな？

クリスマスさんによると、良い二頭立ての馬車がぽんっと即金で買えるぐらいのお金が入っているらしい。現代人の感覚的には実感ないけど、価値換算したら庶民の四大家族が一か月食べれるってさ。ひえー。

貴族の感覚ってよくわかんない。初孫できた爺ちゃんだってこんな金額はいはいくないよ！

大通りに出るとスリとかザラらしいから、まずはこのお金を預けておけるところに行くことにした。

城の外門（湖面の向こう側の門ね）からほど近いところに大きな出入り口をした大きなお屋敷みたいな建物に連れられて行くと、ずらっと並んだ受付口。まるで銀行ですね。

その名も商業連合組合。通称ギルド。

おお、なんか異世界ぽい。

この大陸のどこの国にも支部があって、一度作った口座はちゃんと保証してくれるのだそうだ。

戦争続きの大陸にあって、このギルドは中立を貫いてて、どこの国もこの組合に文句は言わないんだって。

まあ、お金かかるもんね。戦争って。

「このギルドに登録しておけば、日雇いの仕事も紹介してくれますし、旅券の発行もしてくれます」

とクリスさん。

旅券ていうのは、各国にある関所を通るのに必要な手続き書みたいなもので、要はパスポート。

あと本当に食うに困ったりしても、何か代償差し出す契約すれば借金で助けてくれるらしい。身元引受人にもなってくれるから定住して働くときや家借りる時にも便利。

後見人いない私からすれば、なくてはならない場所になりそうです。

で、その契約方法にまたびっくり。

受付の白いアオザイ着た金髪のお姉さん（アオザイじゃなくてチャリムっていうらしいけど）に手を出してくださいって言われて手を出したら、石版に手を置かれて、ぼやっと光ったんだよ！ それで名前書いてギルドに登録完了だってさ！ 漢字は書けるから名前は直筆ですよ。

この石版よく見れば幾何学模様が彫られてて、この石版から全国各地のギルドに私の情報が行くんだって。もしも借金してもまさしく世界の果てまで追いかけられるね。こういう魔法の技術がいろんなところで活用されているそうです。すごいな！

金の延べ棒一つを一般的なお金の銅貨（こっちも棒）に変えたら六十本ぐらいになります。銅貨三十本で銀貨が一本です。銅貨一本でパンが一つ買えます。

……もらった金額がいきなりずっしりきました。

普通に買い物するなら小銭と小さなカードみたいな木板持つておくんだって。木板にも魔法の術式（？）が刻まれててお店で出したらそこから金額引き出してくれるんだってさ。こんなところでお財布ケータイ持つことになるうとは思いませんでした。

そういう諸々を説明してくれたクリスさんの出生は聞かなかったけど、まああんまり言いたくなさそうだから聞かないことにした。旅のことにも詳しいから、きっと長い旅をしたことある子なんだろう。まだ十代なのに人生波瀾万丈だね。

「何か食べますか？」

そう聞いてきたのは、私が大通りの美味しそうな屋台を物欲しそうに眺めていたからかな。まあ、あの焼き鳥みたいな串焼きとかさ

鮮やかな瓶詰の液体とか気になりますよ。

「うんうん何か食べたい！」

宰相のおごりだ！ 何でも好きなものを食べようじゃないか。

素直に言うと、クリスさんは思わずといった風に苦笑した。女の子は笑顔が一番だよ。どっかで聞いたセリフだけど。

「では、少し待っていてください。何か簡単にみつくりてきます」

まあ、私が下手にうろうろしても迷子になりそうだしね。

城下町というのか、大通りは人でごった返している。昼も近いせいか張り出した屋台はどこも盛況だ。店をちゃんと構えているが、こういう飯時には屋台を張り出すのが一般的らしい。老若男女、肌の色も髪の色も様々な人がみんな楽しそうに食事をしている。こういう喧噪、嫌いじゃないよ。

クリスさんは私を手近な屋台のベンチに座らせて、人の波に乗って屋台街へと出かけていった。

うわあ何買ってきてくれるんだろ。小銭は私が持っているけど、木板は渡したからあれで買ってきてくれるだろう。

わくわくしながら人波を眺めていると、ふいに、口元を覆われた。

さらわれる。

そう思ったときには遅かった。

男の手だと思われる武骨な腕が私の体を軽々と抱えている。

とっさにウィリアムさんから貰った皮包みについていた飾り玉を
引きちぎった。

男に気づかれないようにそれを落とした。

私って、ほんと運が悪い。

荒縄と森

運が悪いけど平凡な人生、苦節二十四年。

怪我と犯罪にだけは巻き込まれたことがないのが唯一の自慢だったのに、こちらの世界にやってきてから命の危険にさらされ続けている。

どういうことだ。責任者出てこい！

猿轡なんて初体験ですよ。

それと荒縄ってマジで痛いんですね。今にも手足が真っ赤になりそうです。

男に抱えられたまま路地を抜け、その先に止めてあった荷馬車に乗せられて、ただいま真っ暗な森の中でございます。

光源はサバイバルな感じの焚き火が一つ。

野性味溢れるワイルドな顔つきの方々が焚き火囲んで私を遠巻きに眺めてお話し合っています。

「珍しい風体だから買い手ぐらいはつくんじゃないか？　まだ子供だろ？」

「さらった後は好きにしろと言われていただろう？　面倒は避けろよ」

「そうは言ってもあんなはした金で割に合うかよ。国境超えて売っぱらっちゃえばバレやしねえよ」

物扱いも初めてです。

これといった抵抗もしなかったからまったくのお人形扱いで殴られもしなかったんだけど、どうやらこのお兄さんたち依頼で私さうったみたいだな。しかしお腹空いた。屋台料理食べ損ねたもんね。

「しかし大人しい娘だな」

私が座らされている木の向こうから、またワイルドなお兄さんが出てきましたよ。服は着物に近いけど、明るい茶髪と色々ついた貴金属が日本のチンピラ思い出します。

「縛ってるあいだにも悲鳴一つあげやしねえ」

面白がるようにお兄さんが私を覗き込む。うわーおやつぱり今まで会った人たち規格外だったんですね。お兄さんたち私と身長近いもん。

品定めするみたいに顎つかまれてるからって現実逃避ではごさいませんとも！ ええ！

「いっちょ、やってみるか？」

笑うとヤニが見えますねお兄さん。若いときからの喫煙は早死にしますよ。

「まあ、好きにしていいいとは聞いてるからな」

売る売らない言っていたお兄さんたちが一樣にこちらに視線を向けてくる。

「娼館に売るにしたって味見したぐらいでガタガタ言わねえだろ」

おいおいおいおい傷ものは安く見られますよ！　　というか無精ひげ剃れこの野郎！

茶髪の兄ちゃんも気安くヒトの太もも触るんじゃないよ！

耐えられなくなって思わず両足を振り上げる。

お兄ちゃんの急所に向かって。

「うお！」

私の思わぬ抵抗で兄ちゃんの手が顎から外れた。けれど、

「この！」

血がのぼりやすい兄ちゃんだな！　あっという間に拳が振り上げられた。

まずい！

まともに殴られたら骨ぐらいは折れる。

だから全力で地面に自分から倒れた。拳は私のこめかみを強打するだけで倒れた衝撃の方が大きい。

あんまり勢いよく倒れたから左肩が馬鹿になったみたいだけど無視だ無視！

運よく木の向こうに倒れたけど、そんな私の上にお兄ちゃんが乗りかかってきた。とっさに足を抱えるように小さくなる。

「このアマ！　大人しくしてりゃあいいものを！」

そういう男尊女卑発言はよろしくないよ！

誰だって不条理には噛みつきたくなるもんでしょうが！

男の力で両肩をつかまれて、痛めた左肩が悲鳴を上げる。でも叫ぶもんか！

私は必死になって足の荒縄を掴んで、引き抜く。

人間やれば何でも出来るもんだ。薄皮と靴を巻き込んで荒縄から私の足はすり抜けた。

悪運強いな私。

全身の力を込めて私は押し込めようとしている男の腹付近に向かって足を振り上げる！

その足は、腹をそれて男の急所に決まってしまった。

そのまま足を起点に引き倒れてきた男の胸倉をつかんで、地面に寝転んでいる自分の頭の上の方へ男を放り投げる！

蛙が潰れたみたいいな声でお兄ちゃん転がっちゃったよ。自業自得だこの野郎。

「おい何やってる！」

男たちがわらわらとこちらにやってくる。

この機会を逃してはいけない。

無我夢中で体を起こして、私は立ち上がると即座に走り出す。

「追え！ 逃がすな！」

男たちの怒号が響く。

私は裸足のまま、暗い夜の森へと駆け出していった。

平坦に見える森は、案外走りにくい。

木の根は見えず、小さな小枝が足を突く。

どこをどう逃げていいのかわからず、けれど足を止めてはいけなかった。

運動不足の体を、無理やりに走らせる。

どこへ走っても不安だった。

しばらく走って、暗い洞のようになった草むらを見つけて飛び込むと、息を殺す。

腕の荒縄を外していると、男たちの気配がやってくる。今、猿轡を外せば、歯の根が合わないほどの震えがやってきそうだった。だから舌を間違って噛まないために、そのまま轡を噛むことにした。

きっと、探すのならこういう草むらを探すだろう。

こわばった体を叱咤して、私はさらに暗い場所を選んで、手近で一番大きな木に登ることにした。

落ち着いて、でも音を立てないように。

幸い裸足であり滑らない木のように。

できうる限り高く、しかし私の重さで木の枝を揺らさない程度の太い枝を見つけて、幹の方へとしがみつく。

やがて、走ってきた方向から松明らしき光がやってきた。

木の葉に遮られて男たちの姿までははっきりと確認できないが、それならあちらもちちらをちゃんとは確認できないはずだ。

明るい緑色のアオザイは目立つだろうか。

彼らは私の服の色を覚えているはずだ。

少し迷ったが、私は服を脱いで木の枝にくくりつけることにした。

夜の森は寒い。

手足の感覚がなくなりかけるので、手に荒縄を巻きつけて滑らないようにした。

「おい、見つけたか！」

「女の足だ。そう遠くには行けないはずだ」

男たちの会話が足元にやってきては消えていく。

本当に、私はどうしてこんなことになっているのだろうか。

何もわからず異世界に飛ばされ、同郷人には疑われ、殺されかけ、そして今度は追いかけまわされ、夜の森で凍えている。

私は、あの車に轢かれて死んでおくべきだったのだろうか。

そうであったなら、私はこんなにも理不尽なことにも巻き込まれずに済んだのだろうか。

こんな冷たい森の中で、死ぬこともなかったのだろうか。

すでに私の手の感覚はない。

木の幹にしがみついているのは、もはや動けないからだ。

ああ、お腹空いたなあ。

私は切実でくだらないことに、小さく溜息をついた。

松明と木登り

どれほど経っただろうか。

まだそれほど時間は経っていないのかもしれない。

夜の寒さは増すばかりで、木の下を歩き回る男たちの気配も消えない。

はい。ただいま絶賛逃亡中です。

このまま半裸で木の上で一晩過ごすのか…。

このままだと本気で死ぬ。

降りて走るか。このまま待つか。

誰かが言っていたように、私にそれほど長距離を走り切る余裕はない。

すぐに誰かに見つかるだろう。

かといって、このまま木の上で過ごすのは無謀だ。

………なんかこういう選択、この世界に来てからもあったような気がする。平凡な私の人生返せ。

頭の中ではいろいろ考えているんですけど、意外ともう体力も気力も限界です。

手は痺れているし、体は限界まで冷えてて今にも震えが止まらない。

猿轡噛んでなかったら歯がカチカチですよ。

——あーもうここで終わりかな。私。

諦めかけた私を襲ったのは、身の毛もよだつような気配でした。

ざあ！

と、森全体の木々がざわめいたかと思えば、ふいにそのざわめきが収まって、暗闇よりも暗いような森の静寂の奥から何かの気配が湧いて出てくるではありませんか。

怖いよ！

ホラーって駄目なんだよ！

死にかけながら泣きそうになって光源求めて松明に目をやると、男たちも異様な気配の出現に足を止めている。

彼らが見つめている先は私の死角になってて気配の正体はわからない。

わからないってことが怖い。

「……何者だテメエ」

男の一人が果敢にも声をかけた。

その疑問はもっともだけどあなたそれだけで死亡フラグだよ。

ナイフ抜いちゃったらほんと駄目だって！

案の定、リアルホラーからは返答がない。ほらあダメだってばー。

私と同じようなことを感じた人がいたらしく、別の男が別の質問

を投げた。

「俺たちは女を探してるだけだ。見なかったか！」

今度はまともに返答があったらしい。

「おい、行くぞ！」と男たちは声を掛け合ってこちらとは反対方向へ向かっていく。

……ええと。

一難去ってまた一難ってことでしょうか。

だってさ、足元にリアルホラーが居るんだよ！ シャレにならない！

「——おい」

え。

「降りてこい。迷い人」

なんか、聞いたことあるなこの声。

低くて何だかこもった声。

「降りられないのか？」

いつのまにか私が登っている木の根元から声がかかる。

見下ろすと、見覚えのあるマントが表情のわからない顔でこちらを見上げていた。

あーっ！

猿轡で声を出せないからあんぐりと口を開けると、マントの中は苦笑したようだった。

そう、あの、薄情な黒マント。

お姫様だつことアオザイ

「……まったく、無茶をする」

黒マントはかじかんで動けないでいる私を見て、両腕を広げてきた。

「来い」

あなたに向かって落ちろということですか。
いやいやあなた。そんな少女漫画みたいなこと言われましてもね。
こっちは半裸で動けません。

無理だとジェスチャーすると、黒マントは溜息をついて（そういう風に見えた）今度は自分が木に登り始めた。

ええええ私の倍の速さで巨体が登ってくるよ！

思わず身を竦めるが、体が動かない。ですよねー。

あつという間に私の座っている木の枝まで来ると、黒マントは少し驚いたようだった。半裸で居るとは思いませんよねー。
でも、

「ふが！」

うわってことですよ。

だって問答無用に引き寄せられたら怖いでしょう！ 落ちる！

片手で枝つかんで、片手で私抱えて。

怖い怖い怖い！

面白いほど力強い腕に支えられているとはいえ、唐突に足が宙に

浮くっていうのはいただけません！

そしてそのまま、

「ひやああああああ！」

とすっ！ と案外軽い音しましたけどね！

落ちた！

この人私抱えたまま飛び降りたよ！ 軽く三メートル以上はある高さから落ちたよ！

わたくし既に涙目です。

膝が笑い転げてる！

支えられたままマントを掴んでますよ。藁をもつかむ思いなんだよ！

ずるずるとそのまま地面に座り込むと、黒マントも私に合わせて膝をついた。

そして、やたら優しい手つきで手に巻きつけてあった縄と私の猿轡を取った。

あー苦しかった。いやいやあなたがヨダレなんか拭わなくて結構ですから！

黒手袋が私の口元を彷徨うように汚れを拭い、覆うように頬を撫でる。

その手つきがさっき地面に叩きつけてやったお兄さんに触られたときよりも何だか生々しくて、背筋が思わず強張った。なんだこれ。寒いのかなやっぱ。

「あの」

おお、声かすれてるわ私。

「……なんだ」

マントのフードは目深で口元はしっかり覆われてるけど、近くで聞くとやっぱり低くて透る声ですね。子供あやすみたいに甘く感じるのは気のせいだろう。

「服を、木の上に置いてきちゃったんですけれど」

さすがに服着ないと寒いわ。この格好。下着だよ？ 紐だよ？
この寒い森の中。

「……自分で脱いだのか？」

自分で脱がなきゃ木の上なんか忘れてきません。

「はい。見つかるといけないと思って」

ええ、もう生死かかると恥もかき捨てですよ。

素直に答えたのに黒マントは大きく溜息をついた。口元見えないからってあからさま過ぎると思うんだけど。

黒マントはそれ以上何も言わずに、また木に登ってくれて（なんであんな早く登れるんだろ）くくりつけてあったアオザイ（チャリムだっけ）を取ってきてくれた。

「歩けるか？」

アオザイもといチャリム一式を私に渡して、黒マントは私の足に視線を落としている。

あーそういえば靴は捨ててきちゃったのよね。
でも歩けないこともないだろう。

しかし、歩けるといふ前に、黒マントがざっと私の前に屈んだと思ったら下着姿の私をそのまま抱えてしまった。

「歩けますよ！ たぶん」

「憶測で物を言うな」

だってさ！　だってさ！　一生に一度あるかないかのお姫さまだっこのなに下着のままじゃ格好つかないじゃない！

私の抗議も空しく黒マントの頑丈な腕が私を降ろしてくれる気配はない。こっちは疲れきってるのに余計な体力使わせてくれるな…。

黒マントは何の明かりも持たないで、迷うことなく森を進む。

まるで、視えているかのようだ。

森に明かりは一切ない。

月も出ていないらしく、暗さに慣れた私の目にも木がそこにあるぐらいしか分からない。

そこそこ背のある私を身じろぎもしないで抱えて、黒マントの足取りは揺らぎもしない。

それにこの黒マント、剣だけ腰に下げてるわけではないようだ。

私の背中と膝裏にある腕には硬い金属の籠手が袖の下にあるようだし、時折私の頬に当たる胸元には細かい鎖を編んだみtainな感触がある。これ、鎖帷子ってやつですかね。重いらしいよこれ。

何者なんだ。この黒マント。

口元の覆いはちょうど首元まで隠すようになって、マントを広げて見えるのは、あの人さらい兄ちゃんたちが着ていた着物みたいなとチャリムを合わせたような渋い色の服。

「珍しいものは見つかったか？」

私が観察してたのを面白がってたな？ 性格悪いなマントのくせに！

「これは珍しいですよ」

このときの私は気が立っていたに違いない。

まあ、普段危ないものには手を出さないから。

だから、この黒マントの顔を隠してる布を引っ張ってうっかり外してしまったのは、不可抗力だと言いたい。

「…………お兄さん、狼に似てるって言われませんか？」

思わず聞いちゃうのも、仕方のないことだと思うのよ。

だって、本当に、マントの下に隠れてたのが、狼の顔だったんだから。

狼と湖

灰色の毛並み。

突き出た鼻面。

牙の並んだ大きな口は私の頭ぐらいならひと呑みに出来そうだった。

どこをどう見ても狼の頭だ。尻尾はどこですか？

でも、それを否定するように底光りする蒼の双眸が私を映している。

不思議とそれが理性をたたえているようにも見え、私は深刻な混乱には陥らなかった。

ただ呆前と、目の前に現われた顔を見るばかりだ。

首のあたりまで灰色の毛並みに覆われているが、体は人のようだった。

「あの」

何を訊こうというんだ。

わからない。

わからないが、沈黙に耐えられずに口を開くと、狼マントは歩く速度を上げた。

ざっざっと木々の隙間を抜けて、マントがようやく立ち止まったのは大きな岩のある小さな空き地だった。

私を何も言わずに降ろすと、私の肩を抱いたまま自分のマントの

留め具を外して頭から私に被せてくる。

そのまま私をその場に置いて、辺りの小枝や木の葉を集め出したから、ここで焚き火でもやろうと言うのだろうか。

彼は、今のところ私に危害を加えようとか、怒ろうとかいうわけではなさそうだ。

こうして見ている限り、手が肉球というわけもなく、意外と裾丈のある彼のチャリムの隙間から尻尾が生えているわけでもない。狼の存在は本当にあの顔だけらしい。ピンと立った耳が時折こちらをうかがっている。

木の葉を敷いて、小枝を組んで、狼マント（マントは私が被っているが）は腰のベルトに備えている箱から火打ち石らしい石を取り出して、ひときわ乾いた木の葉に向かって打つ。ほとんど一度でついた炎を木の葉の束に放り込んで、ようやく狼お兄さんは私を見据えた。

ぼんやりとした焚き火の明かりで、彼の顔が浮かび上がる。
精悍な狼の顔だ。

「――驚いたか」

狼がおもむろにその牙の並んだ口を開いた。
驚かない方がびっくりです。

「ええ、まあ……」

「その割に、落ち着いて見えるな」

焚き火を囲んで改めて正面に立つと、やっぱりこの人背が高い。しかも隆々ってわけじゃないけど、体格いいから余計に大きく見える。

普段あまり見下ろされることがないので、改めてその事実を確認すると何だか落ち着かない。

ほら、城じゃみんなほとんど座って話してたしね。

「俺が、怖いか」

怖くない人はいないと思うけど。

その何か威圧的な雰囲気。

でも、

「怖くありません」

この世界に来て最初に出会ったからなのか、こんな状況でも幸か不幸か不安を煽られるほどの恐怖を私は彼に對して感じない。

冴えた蒼の双眸を見つめていると、不思議と落ち着く。

彼はそんな私を見つめていたかと思うと、ゆっくりと、何かを確認するように私の方へと歩み寄ってきた。

その静かな動作を私も見つめて、動かないでいた。

ここで逃げれば、この美しい湖面のような蒼い瞳が傷つくような気がした。

動かない私の前まで来ると、黒手袋がそっと私の頬に触れる。
長い指がゆっくりと目尻をなぞって、鼻筋を辿り、唇をなぞる。
まるで壊れ物でも扱うような動きで確かめるように私のほつれた
髪をゆっくりと撫でる。

なんか、恥ずかしいんですけれど。

だってさ、あの、この人背が高いから私、胸元しか見えないしね。
こう包まれてる感じがいたたまれないというか。

逃げだしたくなるというか。

いや、待て！

ここで逃げたら女が廃る！ 何かが廃る！ わかんないけど！
ここは一つ場の空気を変えねば！

「あの、今更なんですけど、あなたのお名前は？ 申し遅れました
がわたくし、君島葉子と申します！」

狼お兄さんは私の必死こいた様子に笑ったようだった。

「シュンラン、だ」

ウィリアムさんみたいな長ったらしい名前は貴族だけなのかな。
疑問に思ってたら、シュンランは、俊敏の俊に、藍色の藍と書いて
俊藍と書くと教えてくれました。私の名前の漢字も尋ねられたの
で答えたら見事なイントネーションで発音してくれましたよ。

そういや城の人って私の名前の漢字知らないからカタカナ呼びなのかな。

「葉子」

いきなり名前ですか。

それだけでなく、ゆったりと私の髪撫でられている何だか甘い空気に耐えられないんですけれど。

そわそわしだしたのが分かったのか、狼お兄さん、もとい俊藍お兄さんがくすりと笑った。

おおい恥ずかしいからやめれ！ マジでやめて！

私の焦りをよそに俊藍さんの動きはどんどん大胆になってきた。

私の首筋を撫で、足を絡めるように長靴を履いた長い足を踏み出してくる。

いやいやいや待てって！ 落ち着け！

やっと腰が引けて後ずさりしたら容赦なく追いかけてくる。
ぎゃー！

とうとう大岩の元まで追い詰められて、いよいよ逃げられなくなったからそのまましゃがんでやろうと尻もちつくようにしゃがんだら、俊藍さん、覆いかぶさるようにして追いかけてくるじゃないか！
いや待てよ！ マジで！

ほとんど半泣きです。

目尻からこぼれおちそうになっていた涙を、大きな口が開いて、べろん。

べろんって。

うわああああ何か舐められた！ 舐めたよこの人！ どうせならホントのワンコに舐められたい！

泣きたいやら叫びたいやらで、もう頭の中はカオス。

俊藍さんの狼顔出てきたときだってなかった未だかつてないほどのパニック状態の私の腕をつかんで、むき出しの肩をまたべろん。そういや今、私、下着のまま！ 服を手にとってるとマント被せられててあったかいからうっかり意識がお留守だったよ！ 舐められた箇所がひりひりするのは小さな擦り傷になってたらしい。

そんな私の頭の理解もよそに、正真正銘の狼は肩に、肘に、腕に、荒縄で傷だらけになった手首をべろべろと舐めていく。

「や、やめ…っ」

もう止めてと舐められてない方の手で俊藍さんの狼顔を遠ざけようとしたら、その手もべろん。ひーっ！

俊藍さんは思い切り怯んだ私の両腕を掴んで、今度は首筋に、その鼻先を埋めた。

べろん。

うわああああ近い！ 近すぎる！

首筋を辿って、胸の際ぎりぎりまで。

私の足元を押さえこむように、下着の隙間の脇腹へ。そのままへその辺りを撫でられまくって、

「いや、駄目…！」

太ももを撫でられるように舐められて、変な声が出そうになった。思わず口を押さえたなら、蒼い瞳に伺われたような気がしたけれど、そのまま足を持ち上げられたよ！

いやいやいや泥だらけですよ！ この足！

引き抜こうとする抵抗も空しく、足首を取られて直にお兄さんの吐息がかかった。

膝から脛、そして無理やり縄を剥ぎ取って血まみれになった足首にまで俊藍さんがたどり着くと、ことさら丁寧に拭われた。

いやあああ止めてよ！ 何か布とかいたただければ！ 適当にやりますから！

う、うううう…全部舐められた…。
信じられない…。

もう泣いてますよ。私。

いい大人なのに。鼻水出てきた。

あんまりだ。

もうお嫁にいけない。

涙目で顔を上げた俊藍を睨むと（もう呼び捨てでいい）、ふっと優しく笑いやがりましたよ。

ちょっと待て！ 反省しろや！ かawaii乙女が泣いてるんだぞ

！ 鼻水垂らして！

つかんでいた私の足を放すと、俊藍は今度はこちらに覆いかぶさってくる。

え。

ちょ。

待つて。

散々私の体辿った長い指で私の顎支えて、大きな口近付けて、べろんって。

おおおおおいしいいいい！

今度こそ盛大に抗議しようと思ったら、ふんわりとした風に包まれた。

それは一瞬で、瞬きしたら、目の前には、見たことある服を着た、お兄さんが居ました。

漆黒の滑らかな髪は私より長い。優雅だけど日に焼けた顔は精悍で整っている。

何より見覚えのあるのは、静かな湖面のような蒼い双眸。

ええと？

啞然とした私と同じぐらい、目の前のお兄さんも呆前としている。年のころは私よりちょっと年上。社長ぐらいかな。

いや、それより何より、

「……俊藍…？」

狼の顔はどこにいったんだ。
もしかや別人か？

でも、目の前のお兄さんは私の呟きに目を細めて微笑んだ。

「葉子、お前は、幸運の女神だな」

驚きのあまり、耳が幻聴おこしているようです。
生まれてこのかた、幸運なんて言葉とは無縁でやってきたというのに、人生最悪を更新し続けているわたくしに何の冗談でしょうか
ふざけるな。

あれ、でもこの声、俊藍…？

そう思った瞬間、唇がお兄さんに塞がれた。

岩とキス

息が出来ない。
眩暈がする。

「……っは」

ようやく放されたと思ったら、その拍子に開いた口からあろうことか舌がいたずらに入り込んできた。

髪には長い指が入りこんで、私をなだめるように梳いていく。
逃げる私を追い詰めて、非常識な舌は逃げる私のそれを追って、絡める。

「うう、んん…」

息ができないのをなだめるように、口を放して、また覆う。
そして、口の中のあらゆるところを舐めつくして、

「長いわあああああ！！！」

また口を放した隙に、今度こそ渾身の力で覆いかぶさってた不屈
き者の体を押す。ほとんど動かないってどういうことだよちくしよ
うめ！

「なにすんですか！ こっちは全力疾走で逃げてきたっていうのに
！」

なんかこっち見て口元拭う仕草が卑猥だよ！ あんた歩く十八禁よりタチ悪い！ 出てけ！ ここから出てけ悪霊退散！

「このエロエロ大魔神！ こちとら恋人いない歴二十四年だよこの野郎！ そんなだから狼になっちゃうんだよ！ 反省しろ反省！」

こっちは必死でわめいてるのに、なんだその余裕顔は！ このエロ俊！

「道理で男を知らないわけだ。でも二十四で？」

「なに嬉しそうな顔してんですかワケわかんないな！ 余計なお世話ですよ！ 私は、いつか白馬に乗った王子様が迎えにきて、夢のような恋して夢のような結婚する予定があるんですよ！ 美しい夢を壊さないでください！」

「白馬なら調達すれば誰だって手に入るだろう。夢で結婚は出来ないぞ。夢に見るほどのことはしてやってもいいが」

「何いってんですかこのすつとこどっかい！ 白馬があればいいってもんじゃないんですよ！ 愛情もないのにこんなことするなって言ってるんです！ 乙女の夢をぶち壊すな馬鹿野郎！」

微妙に論点がずれてきている気がしないでもないが、パニック起こした頭は何を言っているのか悪いのかさえわからない。

「愛情が、あればいいのか？」

「はあ？」

真剣な顔で聞いてくる、この俊藍という男が気に入らない。
なんでこう、私には運がないのか。

「誰が、初めてのキスを見ず知らずの狼もどきに奪われて喜ぶと思いますか！」

どうしてもこいつも馬鹿にして！

「私がなんにも言わないことをいいことに、誰もかれも好き勝手なこと言って！ 私はそんなに馬鹿ですか！ あなたの思い通りになれば満足なんですか！」

誰だって、そういう理不尽なめに遭っている。

だから、我慢だってするのが、社会人の努めだと。

そう思うのに。

「私が、泣かないから、怒らないから、こんなことするんですか！ 殺されそうになれば文句の一つも出ますよ！ 理不尽は嫌です！ どうしてこんな、こんな……っ」

こんなに、

「怖くて、不安なのに……」

私は、マントにくるまって、この世界にきて初めて大声で泣いた。

涙と指

いつだって、私は不安だ。

どんなに順調に進んでも、その先には落とし穴があるのではないかと疑ってしまうのだ。

実際、そういうことが多かったし、自分の予想を上回る悪意にさらされることもある。

それでも腐らずやってこれたのは、家族がいたり、友達がいたりしたからだ。

彼らが私を励ましたり、からかったりしてくれるから、私はそれほど深刻な事態を招かずに済んでいた。

でも、ここは違う。

私の知る人は、私を知らず、私の方も誰も知らない。

命の危機にまでさらされて、私のそばにいるのは、ろくなことを知らないろくでもない男。

「葉子」

長い指が私の頬を遠慮がちに撫でる。泣いてるんだからあんまりこすらないでほしい。痛い。

触らないでほしいから丸くなっているのに、つくづく人の心を察しない、空気読まない男だ。

そういえば、私がこいつのマントを取っているんだった。

マント返してほしいならそう言え。

私は涙も鼻水も止まらないまま、マントを返すべく自分の肩からマントを引き抜いた。

突っ返そうとマントの端を目の前の非常識男に突き付けたら、何を思ったのか男はそれを無視。

ひとの良心まで無視して、あろうことかマントごと私の体を抱きこんでしまった。

「放してよ!」

決して小さくはない私の体が俊藍の腕に中につっぱりとおさまってしまう。

不愉快だ。

不愉快で堪らなくなって、俊藍の胸を叩いた。くそ、なんでこんなに硬いんだ!

悔しいのと恥ずかしいのとで涙も止まらないというのに、この黒髪の頑丈な男は私を余計に抱き締めてくる。

「やめろ。お前の手が傷む」

そういやコイツ鎖帷子なんか着こんでたんだ。痛いはずだ。

俊藍が体を放さないから、結局私は彼の肩に顔を置くしか術がなくなってしまった。

耳を頑丈そうな肩につけると鼓動が聞こえる。それが自分の鼓動なのか彼の鼓動なのかわからない。

規則的な音を聞いていると、急上昇していた頭の血の気は潮が引くように引いていった。

でも涙と鼻水は止まらない。

腕も動かせないほど押さえつけられているから、こいつの着物で拭いてやる。

ぐりぐりと顔をこすりつけると、大きな手で頭を撫でられた。手が大きいから私の頭が急に小さくなった気さえする。

あんたの子供か私は。こんな頑丈で美形の親父だったら確実にグレてる。

「……やめて」

鼻声で言うと、背中に回っていた腕が緩んだ。

すぐに逃げてやろうと思ったら、大きな両手が今度は私の両頬をつかんでくる。

好き勝手に扱ってくれるな兄ちゃん。

「私、あんたのお人形じゃないんだけど」

だから、なんで私の憎まれ口で楽しそうに笑うかな。

形のいい薄い唇、形のいい鼻筋。落ち着いた理性を宿す切れ長の瞳に長いまつげ。長めの黒髪はよく見れば腰にまで流れる長さだ。

お姉さんだったら喜んで言うこと聞いたよ。

でも顔のパーツも体のパーツも、女性的な形は一つもない。男の黄金比で固められた美しい造形。

むかつく。

これなら私の頭をひと呑みにしそうな狼頭の方がまだ可愛げがあった。

「そんな、虫けらでも見るような眼で見られたことはなくてな」

ささくれだった気分で睨んでいたら、非常識な美形は苦笑した。そりゃそうでしょうよ。神様に愛された人間を誰が虫と比べます

か。

虫以下だと言ったら世の人に怒られそうだ。

「――止まらないのか？　これは」

形のいい唇が私の目元に寄せられて、流れて止まらない涙を舐めてくる。舐めるの好きだなこの男は！

気でも失うことができれば楽なんだろうけど、この男が近くにいるから不安で眠気もやってこない。

「どうでもいい！　疲れた！　お腹すいた！」

「まるで子供だな」

生理的な欲求を叫んだだけなのに、面白がるように笑われて、すでにぼさぼさの髪を丁寧に梳かれた。

お腹の虫すら疲れて鳴らない。この緊急事態に休むなよ。

俊藍はそれが当然だというように頬を流れている私の涙を舐めつつ、目を細める。

「今は眠れ。明日になったら話してやる」

初めて会ったときからそうだけど、なんだかんだと偉そうなんだよ。

そう思ったら、

「んん！」

また口づけられた。

今度は、さっきの行為が遊びだったのではと思うほど噛みつかれ

ているようで息ができない。

無理矢理、唇を割られて、蹂躪される。

「んあ…っ」

時折、空気を送られて、鼻から空気が甘えるような声で抜けていく。

この男、ほんとに許せない。

泣いてる女を追い詰めて楽しいか！

さっきまでの涙とは別の涙が零れていく。

聞こえてくる水音に身がすくむ。

頭を包みこむ手が煽るように髪を梳いて逃げられない。

まるで無理矢理に溶け合わせるように全てを絡めとられて、眩暈がする。

ああ、最悪。

最悪の日をまた更新して、私は混濁の渦へ放り込まれた。

黒衣の男

浅い吐息を繰り返して、彼女はゆっくりと体の力を抜いていった。最後の意識まで吸い尽くすように快樂を与える口づけを繰り返すと、ようやく彼女は意思を飛ばした。

「この、サイテー男……」

憎々しげに腫れた唇から零して。

余韻の残る唇を再び舐めとって、細い体を抱き締めた。
意識のない彼女を欲望のままに貪れば、今度こそかつてないほどの剣幕で彼女は激怒するだろう。

それでも構わないとも思うのは、自分が今までにないほど歓喜に満たされているからだ、俊藍は思う。

彼女、葉子に出会ったのは、俊藍にとって幸運以外の何物でもなかった。

それは、今までの辛苦を一掃するほどの僥倖であり、希望であった。

彼女と出会ったとき、俊藍は絶望の淵にあった。
せめてもの慰めに、と眺めに立ち寄った此岸花畑で彼女は茫然と座っていたのだ。

さして、美しい娘ではない。

顔立ちも、体つきも平凡で、背は世の女性よりもすらりと高く、肩より少し長いだけの髪を交えても、一見すれば少年のようにも見えた。

口を開けば、憎まれ口。

しかし、まっすぐに物事を見通す漆黒の瞳に俊藍は吞まれた。

彼女の瞳の判断は実に的確で、思いもよらない言葉が愛らしい唇から飛び出てくる。

したたかな娘だ。

だが、ただの娘だ。

平凡で、平和で、孤独が不安な。

不安に泣く姿を見て初めて、出会った木の下で感じていた僅かな違和感の正体を見せられたような気がした。

天女のようにも感じていた娘だが、こうして触れれば異世界から舞い降りただけの、ただの娘。

いとしい。

何の根拠も、何の理由もなかった。

彼女の不遇を思えば心が痛む。俊藍には必要な女だったといえれば運命と片づけられよう。

しかし、そのどれも普段厳しく律された俊藍の理性を崩す衝動の

理由にはなり得なかった。

そして、この衝動は、俊藍には許されない。

とめどない涙の跡を唇でなぞる。

無防備に眠る彼女が愛おしい。涙を流す姿が狂おしい。こちらを睨むその瞳に映っていたい。

心に触れれば、瞳に映れば、声を聞けば、頬を包めば、冷たく凝った心の奥が温かく灯る。

その全てが許されないというのなら、せめて今宵だけ。

柔らかな体を胸に抱いたまま、俊藍は目を閉じた。

せめて、今夜だけは心のままに。

滝とヨーグルト

異世界に来て四日目です。

殺されそうになったり、追いかけまわされたり、最低男にキスされたりびっくり仰天に毎日ですが、幸いにして、死んでません。

でも自発的に眠った記憶がないっていうのはいかがなものでしょうかね。

本日も起きたら恐ろしく整ったご尊顔の美形に抱かれて下着姿で眠っておりました。

貞操は平気でした！

初めては痛いっていうからね！（ごめんなさいね！ でも重要なことだから！）

鎖骨の辺り見たらなんか、虫さされみたいに赤く腫れた個所がところどころありました。

とりあえずどんな手入れているのかきらきらしい黒髪の頭をグーで殴っておきました。二十四にもなると耳年増でいけません。

ああちくしょう。殴られて痛そうにしても美形って美形だ。むかつく。

まだ朝早いようで、森は朝もやと朝日に彩られて幻想的な空気が漂っています。肌寒いです。

それに、朝もやの中、辺りの薪拾う姿も美形ってさまになる。腹立ちますね。

朝ごはんにしようと言われましたが、お忘れですか。私、下着姿

なんですよまだ。

それに、その、

「俺の感触が体に残っているのは嫌か」

きいいいいいいいっ！ 問答無用に舐めてかかってやがる！ 恥
じらい持ってとっとと狼頭に戻れ！

「……狼には、もう戻らないんですか」

恨み事のつもりで言ってやったら、優しく微笑まれた。いっぺん
死んでみるといいよ。

「あちらに滝がある。ついてこい」

昨夜の今日だし、一人で行く勇氣はなかった。…どんなに意地張
っても怖いんですよやっぱり。

文句も言わずに大人しく長身についていったら、意外な顔をされ
た。何でよ。

マントは羽織らされたままで、チャリム持って後をついていくと、

「うわぁ、すごい！」

五メートルぐらいから落ちる滝壺だった。落差はあんまりないか
ら小さな滝だけど、水がきれい。

岩場に立って浅瀬を見たら、自分の顔がキラキラ映るよ。

マイナスイオンに誘われるまま、水に入るとまだ寝ぼけて
いたらしい体が跳ね起きるほど冷たい。

いい感じじゃないか。

そのまま顔を洗って、口をゆすいだ。なんかさーものすごい口の中が変なんだもん。顔もかぴかぴするし。

……昨夜のことは、とっと忘れよう。うん。

拭くものなんかないからぶんぶん頭でも振っておこう。

どうせすぐ水浴びするし。

その前に。

「はい」

私の後ろで岩場に腰かけてた俊藍にマントを渡すと、眩しそうな顔をした。

あなたの顔の方が眩しいですよ。ええ。

「なんですか。まるで犬みたいだとか思ってます?」

「いや。昨日、抱いておけば良かったと思って」

セクハラ反対!　そして私の顔を見て笑うな!

「冗談だ」

「――冗談に聞こえませんでした」

「半分だけ冗談だからな」

ああ言えばこう言う。慣れない言葉に顔が熱い。本当に嫌だこの男。

「水浴びがしたいんだろう?」

俊藍が手渡してきたのは、綿布を縫い合わせただけの手拭いだっ
た。わーお。外人から手拭い渡されたよ。

「いいんですか？」

「それとも、体が乾くまで俺にさらしているつもりか？ 襲うぞ」

……この人、口開かなきゃ神秘的な美形なんだけどなあ。

大人しく手拭い受け取ると、俊藍は私に背を向けた。どこへ行く
のかと見ていたらすぐ近くの岩場の影に、こちらに背を向けて座り
込んだ。あら、常識的。離れてるけど居てくれるだけで安心感があ
る。

最低男なんだけど、ヒナの刷り込みみたいに俊藍が居ると安心す
るんだからしょうがない。

余計なことを言えば、容赦なく覗きをするつもりだろうから、私
は手早く下着を外して滝に向かって岩に腰掛ける。

朝日の当たる岩にさっきもらった手拭いと着替え一式置いておけ
ば水から上がったときにちよつとは暖かいだろう。

そろそろと足首をひたすと、まだささくれた傷がしみる。

結構、ひどい怪我だったみたいだ。

滝壺近くの少し広い水場はそれほど深くない。

ゆっくりと水を浴びて、つかると私の腰ほどだった。

手首の傷にも水をひたすと始めはしみたが、心地良い水の感触に
慣れてくる。

気持ちいい。

大自然を満喫してる感じだ！

ろくでもないことばかりだけど、これはいいな！

でも、脱水症状になりかけてたのかもね。生理現象が一向にないですよ。（お食事中の方失礼）

相変わらず色気のない思考してるわ私。

適当に潜ったりして冷たい水を満喫してから岩場へ上がって手拭いで体を拭く。ああ、やっぱり日当たり良いところに置いといて良かった。指先震えてるもんね。

下着はもうしょうがないからそのまま身につけてチャリムを着る。ものすごい久しぶりに服着た気がする。文明万歳。手拭いだけで奇麗にしておく。一応マナーですよ。今日はよく晴れてるから干しておけばすぐ乾くだろう。

ふと気配がして振り返ると俊藍が岩場の影から出てきてこちらを伺っていた。何してんのあなた。

「帰るぞ」

決してこの男は旦那じゃないけど、亭主関白って嫌いなんですよね。だから微笑みながら手差し出すのやめてよ。

差し出された手には洗ったばかりの手拭いを乗せてやった。

「ありがとうございました」

不服そうな顔をしたけど、なんで面白そうに笑うかな。わかんない。

「これを履いておけ」

手の代わりに俊藍が差し出してきたのは丈夫そうな皮の長靴だった。なめした皮をしっかりと縫い合わされて頑丈そうなわりに足首の部分を紐で結んで履くようになっていて、まるで柔らかそう。

「裸足で森を歩くわけにはいかないからな」

確かに。素直にお礼を言うべきだろう。

「ありがとうございます」

「素直だな」

いつも素直ですよ。だから不思議生物を目の当たりにしたみたい
に笑うんじゃないよこの美形！

昨日寝ていた（寝かされた）大岩のところに戻るにしても、靴は
履いておくべきだろう。

私がいそいそとその場で履き始めると何故か俊藍もかがんで、足
首の紐を手慣れた様子で結んでくれる。……いや、それぐらい出来
るから。

言いたいことはあったけどあえてそれは言わずに、大人しく俊藍
のあとをついて大岩へ戻った。

俊藍はすぐに焚き火の準備を始めたけど、それは黙って見学。だ
って出来ることないしね。

でもなんだか干し肉みたいなものを木の枝に刺して焼きだしたか
らそれは手伝った。

ナイフで切れ目を入れながら木の枝に刺して燃えだした焚き火の
周りに刺していく。

その作業しているうちに今度は包みの中からパンみたいなものも

出してきた。それを火であぶると膨らんでくるんだよ。

「美味しそう」

昨日から何も食べてないもんね。ナンぐらいに膨らんだら手拭いに挟んで渡してくれた。俊藍は手袋してるからそのまま。

肉がいい具合に焼けたらそれをパンに挟んで、今度は竹みみたいな筒取り出したと思ったら白いドロツとしたソースをかけられる。匂いを嗅いでみたら、ヨーグルトみたいな発酵物の香りがする。

どんな味なんだろ。

俊藍をうかがったら、躊躇なく食べてるし。

ええい。空腹は最高のスパイス！

「……美味しい！」

肉とパンの香ばしさといいヨーグルトの酸っぱさといい絶妙！

お腹空いてたしね！

そんな私をまた穏やかな顔で見てるんだよね俊藍は。

あんたは私のお父さんか。

あつと言う間に食べ終わると、心からの感謝をこめて手を合わせる。

「ごちそうさまでした」

「それは、お前の世界の習慣なのか？」

「そう。色んなものに感謝して食べるんですよ。もちろん俊藍にも感謝してます。まあ、私の国限定の廃れつつある習慣ですけど」

そう言うと、東国にもフルに唱えたら五分ぐらいかかる経典があると俊藍。うげえ。お腹が鳴るよ。

食後に竹筒から水を一口もらった。俊藍と回し飲みだけど、この食事でも元々俊藍のものだしね。文句は言わない。

水を飲んで一息つくと、俊藍はその蒼い双眸を私にひたと合わせた。

「さあ、何から聞きたい？」

……何から聞こう？

うーん。あ、

「どうして、狼から人になったんですか？」

狼の方がまだ可愛げあったよあなた。

俊藍は少し口の端を上げると、肉を指していた小枝を焚き火に放り込みながら

「俺は元来、人間だ」

俊藍はこちらを見ない。

何となく手持無沙汰で、そこら辺に放ってあったマントを私はたたみかける。

「呪いによって、狼になりかけていた」

それはまたファンタジー。

「そういうことは、よくあることなんですか？」

「ないこともない」

詳しいことは言いたくなさそうだな。

「……それが、どうして戻ったんですか？」

「お前と体液の交換をしたからだろうな」

だから、その神々しい見て呉れを台無しする言葉使うのはやめてよ。美形に幻滅する。

「……………どうして、私とその…あれで戻る条件に含まれるんですか？」

「契りを結べばいいと言われていた」

なんか、この人ともう会話してたくないんだけど。逃げていいかな？

こちらら生粋の恥じらいの文化の国民なんだぞ！　ちょっとは氣遣ってよ！

「東国の端に魔女がいる」

俊藍はこちらの気まぐさとか色々無視して、けれどこちらに視線を向けないまま手に持っていた小枝を全て火に投げ入れた。

「俺はその導師にこの呪いの解き方を尋ねに行った」

簡単な言葉で、ぼつりぼつりと言うが、彼の声には深い感慨が含

まれている。

その、彼の呪いを解くための旅はきつと長いものだったのだろう。

「導師が言うには、異世界の女と交わり、彼の人の力であればこの呪いは解けるだろうと、いうことだった」

それは、

「解けない、ってことですか」

こちらとあちらが繋がることはある。あるにはあるが、そうしょっちゅうあることじゃない。

だから、社長のひいお爺さんが来たってことだし、私は元の世界に帰れないと言われたのだ。

思わずたたんだマントを握った私を見て、俊藍は目を細めた。

「お前と出会えたのは、俺にとっては奇跡に等しい」

ああ、だからか。

この人が、私を見てこんなにも嬉しそうに微笑むのは。

「最初に出会った時から、お前が迷い人だと分かっていたが、彼が迎えに来たからな」

「彼って……北城社長のこと、ご存じなんですか？」

尋ねたら、また形のいい唇を閉じる。これも言いたくないのか。

「彼とは、まだ会うわけにはいかなかったからな」

名前も、姿も知っていても、やっぱり胡散臭いなこの人は。

「だから、このまま運命に身をゆだねることも考えていた」

そんなときに、私が木の上に居たと。

元の姿に戻りたいなら、そんな幸運逃がすはずもないな。

なあんだ。

「良かった」

「何？」

顔を疑問に歪めた美形に向かって、私は笑ってやった。

だって、私が来たことが、俊藍の幸運になったのだ。

私がこちらに巻き込まれて来たことは、無意味じゃなかった。

「巻き込まれてきて良かった」

それが、神様に愛された人のおこぼれであつたとしても、それは、私に意味があつたということ、

「ありがとう、俊藍」

必要としてくれる人がいてくれて、良かった。

髪と手拭い

もしも、神様がいるのなら、私は神様の視界から外れているのだろう。

でも、私はちゃんと生きていて、今まで少ないながらも誰かに必要とされて生きてきた。

自分自身の意味は、自分で作るべきだと思うけれど、それでも一人はやっぱり不安で怖い。

こちらの世界に落とされて、その理由が限りなくゼロになった。

だから、一つでもいいから理由をくれた俊藍に、私は最大限感謝をしたい。

でもね、だからってね、

「……っ！ 放して！」

いきなり抱き締めてベロチューはよくないと思うんだ。というか、

「も、もう必要ないんでしょ！」

交わりとやらは完了したから、人に戻れたんでしょうが！

息次ぎに（最悪だ）離れた俊藍の顔を思いきり両手で覆ってやった。

どうしてそんなに不服そうな顔をするんですか。

「女欲しいなら他当たって！ あなたなら選り取りみどり！」

せっかく提案してやったのに、目の前のキラキラしい男は顔をしかめただけだった。

「お前がいるのに、どうして他をあたねばならない」

呟くように言うから吐息が手の平をなぞってくる。いーやーだー！
せっかく水浴びしたのに！

「どうして他をあたっちゃダメなのよ！」

「お前が良いからだろう」

あーもう嫌だ！ 話すのも嫌だ！ どっかに埋めてくんないかな
この美形さま！

「お前は どうして俺では気に入らない？」

さも意外そうに聞いてきますね。ムカつくな。

「気に入る気に入らないの問題じゃない！」

くそ！ 腰を抱くな！ 近寄るな！

俊藍は私を自分の足の間に抱きこんでこちらが油断するとゼロ距離に持っいてこうとしている。

だから、私は全力で腕を突っ張らないといけない。この馬鹿力め！
どうしてこんな爽やかな朝っぱらからこんな労力使わにゃならん！

「私は、白馬に乗った王子様が迎えにきて素敵な恋して素敵な結婚

する予定があるのに、どうしてアンタに森のど真ん中で私をくれてやらないといけないの！」

結構本気なんですよ。これ。

そしてものすごく驚いた顔をするんじゃないこの無駄美形。

「アンタは私のことなんか何にも知らないし、私もアンタのことなんか全然知らない！」

だから、一夜の恋なんてやつが出てくるんだろうけど、弱い私にはそんな刺激は強過ぎる。

「きつと、アンタみたいな奇麗な人に抱いてもらえれば、私にとっては幸運なんだろうけど、そんな幸運なんかこれから来ない私は快樂に自分捨てるわけにもいかないし、アンタに色んなことをこれ以上、希望するのもまっぴらゴメンよ」

命を助けてもらった。ご飯をくれた。靴だってくれた。充分じゃないか。

「アンタは行為の意味を知っているのかもしれないけれど、私は知らない。頭が良ければうまく遊ぶこともできるんでしょうけど、私は無理！」

こういう行為はお互いを確かめるための作業であって結果じゃない。体繋いだところで何がわかるというんだ。

処女の屁理屈だと思うなら笑え！ モテない女の自意識過剰だと思っつけ！

お遊びで触れてくる野郎のどこまでが遊びで済むのか境界線なんて分かったもんじゃないだろうが！

「冗談だって言うなら、ここでキレイさっぱり忘れるから、冗談はやめて」

というか、頼むから冗談と言ってくれ。

正直なところ、これからどう付き合いがあるかわからないこの男と気の迷いで関係持って、この先どんな顔して文句言えいいのか分からない。

どういうわけだか、この俊藍という男は信頼できる人物としてずっと置いておきたいのだ。

その思いがなんなのかはわからないけど。

……なんか、考えてる間も、ものすごくジッと見られてて居心地悪いからこういうこと思ってるわけじゃないんだけどさ。

睨み合いにも近いほどしばらく見つめあって、俊藍は何を思ったのか私の手首を掴んだ。

痛い！

そういや、手首ってこすれたままじゃないか！ 思い出したら痛い！ 馬鹿力でつかむな！

思わず身がすくんだ私の額にこすりつけるほど顔を近づけたかと思ったら、俊藍はひどく冴えた瞳で私を見つめてきた。

「ならば、お前は、私が奪うまでその貞操を守れ」

……はあ？

「何、それ」

思い切り顔をしかめちゃったよ。眉間のしわが気になるわ。

「言葉のままだ。私が、お前を奪うまで、その貞操を、何びとたりとも、犯させるな」

この男にこんなことを言われる筋合いはない。

そう言ってやろうと思ったら、あまりにも真剣な双眸に言葉を呑んでしまった。

「もしも犯せば、その男を地獄へ突き落して、どんな手段を使っても、お前を手に入れる」

訳が分からん。

何言ってるんだこいつは。

「俊藍以外にも、助けてやった女、誰でも良いから手籠めにしようって人なんか幾らでもいると思うけど」

そんな野郎の言うことなんか聞く気はないけどね。

言っでやると、ふいに俊藍は項垂れた。

「………いったい、どう言えばいいんだ…」

よく分からないが、手首つかんでる力が緩んだからとっとと放してもらおうじゃないか。

あーくそ、せっかく治まってたのにまた痛い。

顔をしかめていたら、今度は俊藍がゆっくりと私の手首を取って、視線を落とした。

なんでアンタが痛そうな顔をする。痛いのは私だ。

しばらくそうしていたかと思ったら、俊藍は腰の箱から布包みを取り出してきた。そういえば、この筆箱みたいな大きさの箱から色々出てくるもんだ。出てくるもののほとんどが、小さくまとめられているから出てくるんだだろうけどそれにしたってよく入る。

私が大人しく不思議そうにしているのを尻目に、俊藍は今度は私が渡したはずの手拭いを取り出して、一息に裂いた。

布目って方向あるっていうけど、こんなに簡単に避けるものなのか。

半ば啞然としている私を放って、今度は布包みから緑の絵の具みたいなのを裂いた布に塗りつける。そうして、その布を私の手首に問答無用に巻きつけた。

うわ、冷やっとする。ちょっと湿ってるし。

怪我をしていた両腕に布を巻きつけると、俊藍は私から少し離れて、地面に座り込んで私の足元に膝まづいてきた。おい。なんかイケナイことしてる気分になるよ。

「足も出せ」

………手当て、なのか？

「………言葉足りないってよく言われませんか？」

大人しく靴の紐をといて俊藍に足を差し出したら、黒髪の頭がちょっと揺れた。ああ、言われたことあるんだ。もしくは自分で思ってるのか。

結局黙秘を貫いて、俊藍は手首と同じ要領で私の足首にも薬らしきものを巻いてくれた。

「ありがとうございます」

思わず微笑んでお礼を言った。

なんだかんだと世話焼いてもらってるしね。信じられないほどの肉食系だけど。

ふと顔を上げる俊藍の美しい髪が地面にこすってるのを見て、思わず声を上げたくなった。もったいない！

せめてものお礼に、確か持ってた荷物の中に私が髪ひつつめるのに使ってた結構奇麗な飾りのついたヘアゴムがあったから、それ差し上げたい。似合うと思うのになあ。

でも、今、手持ちはまったくくない。ウィリアムさんにもらった皮包みもない。不可抗力だけど、今度会ったときどう弁解すればいいんだ。大金はギルドに預けてたし、その証明の木版はクリスさんに預けてるから、お金の大半は大丈夫だろうけどね。

靴を元通り履く作業中も、俊藍はじっとこちらを見つめて喋らない。

慣れはしないけど、まあ、かまうことはない。

「その髪、地面にこするほどになってますけど、何か結うもの持ってます？」

あんまりにも綺麗な髪だから気になるんだよねえ。でも俊藍は別のことを悩んでいたらしい。

「……その言葉使いは、癖なのか？」

「言葉使い？」

「その、敬語とそうでない言葉が混じる話し方だ」

ああ。

「敬語得意じゃなくてすみません」

「そうじゃない。どうして敬語なんだ」

どうして？ その方がどうしてだ。

「目上とか、よく知らない方には敬語が普通でしょう」

俊藍には文句言うことが多いからだいふ敬語でなくなってはきていますけれどね。そんなことは言わない。

「……まあいい」

「それより、結うもの持ってます？」

「ない」

実に簡潔に答えて、俊藍はすらりと立った。この人ほんと鍛えて

るんだわ。動きにほとんど無駄がない。

「この山を下りてすぐに街がある。そこで必要なものを揃えよう。街で一泊する」

街に。

「出ても、いいんですか？」

すでに色々なことがありすぎて忘れがちだが、私はさらわれてきたのだ。あの男たちが私を探しているかもしれない。

人を探すならその街へ出ている可能性もある。

でも、もしかしたら、万が一でも、クリスさんが私を探していたら。

「私は、無事だって伝えたい人がいるんです」

義務感の強い子だったから、いらない心配をしているかもしれない。

見上げた私を俊藍は目を細めて見て、頷いた。

「探されていると思うのなら、なおさら山を下りた方がいい。女一人と思っっているだろうから、姿を変えて人にまぎれてしまえば探すのは容易じゃない。街へ出れば、皇都の城へも連絡がつけられるだろう」

俊藍はその大きな手をこちらに差し出してきた。乱暴なんだか紳士なんだかわかんない人だ。

手を借りて立つと、やっぱり自分の背が縮んだ気がした。慣れな

い。

「彼も心配しているだろうからな」

ぼそつと頭の上で呟かれた。

彼？

「誰ですかそれは？」

「……お前と、一緒にこちらへ来た男が居ただろう」

ああ、社長のことか。

「社長が私の心配なんかするわけないでしょう」

私のこと、図太い変な女だと思ってるからなあの人。

「さらわれた時に、城下町案内してくれてた女の子が居たんです。その子、とっても責任感の強い子なので、連絡とって無事だつてこと知らせておかないと」

可愛い子にストレスなんて貯めさせちゃ駄目だし。

「……そうか」

心なしか俊藍が笑った気がした。変なの。

高度を上げた太陽はそろそろいい具合に森に光を届け始めている。二人で焚き火の始末やらをしたあと、俊藍は私にマントを被せて、山を後にするべく私たちは道など見当たらない鬱蒼とした森を歩き

始めた。

取り残されたメイド

「報告を」

手元から全く目を離さずに、宰相閣下は静かに告げた。

クリスはその簡潔な指示に従って、手に持った報告書を読み上げる。

「ヨーコ様が行方不明になられたのは、城下の屋台街です。ウィリアム・文月・バークランド護衛官が渡されたチガプについていた飾り玉が座られていた木椅子の下から発見されました。――私がお側を放れた隙に、何者かによって連れ去られた模様です。申し訳ございませんでした」

ほんの、本当に数瞬だけ閣下のペンを持つ手が止まった。

しかし、続けるというようにペンがまた作業を再開する。

だから、クリスも気がつかないふりをして報告書の続きを読むことにした。

「探索の結果、城下から騎竜車が東へ暴走していったという報告があり、今朝方、東のハイアンの森でこちらが発見されました」

クリスが取り出したのは、クリスが用意した、ヨーコの靴だった。

「荒縄と一緒に投げ捨ててあり、縄についていた血痕から、ヨーコ様のものだと分かりました」

ヨーコにとっては不幸以外の何物でもなかったが、不幸中の幸いか、ヨーコの体を無理矢理に調べた調査報告が皮肉にも役に立った

のだ。彼女が自ら逃亡したのではなく、何者かに連れ去られたことの証明にもなった。

「周囲には複数人の男の物と思われる足跡と争った形跡がありましたが、ヨーコ様は発見できませんでした」

ヨーコが居なくなつて、二日経った。

たった二日だが、クリスにとっては長い長い二日だった。

彼女は宰相閣下の客人、いわば国賓だったのだ。それも、極めて特殊な。

クリス自身にとっての彼女は、平凡な、ただの怪しい女性だった。

何かをしてやれば必ず礼を言い、笑顔を絶やさない、礼儀正しい女性。

それは彼女の暮らしてきた国での習慣だと聞かされていたが、好感が持てた。

だから、危険だと思った。

国の一大事に、国家の一大計画として召喚した宰相閣下にまとりつく女。たとえば、彼女が計画の被害者だとしても、予想外の訪問者は、計画に波紋を呼びかねない。

ウィリアムは反対したが、クリスとハイラントは彼女の取り調べを強く求めた。

閣下にも彼女に対して不信感があつたらしく、ヨーコ・キミジマ

の取り調べは、彼女に睡眠薬を飲ませたうえで執り行われることになった。

睡眠薬で意識が朦朧としている彼女に自白剤を飲ませ、ひたすら眠ることを許さず、吐かせるだけ吐かせた。

これは、拷問だ。

立ち会って青褪めた宰相閣下が呟いた。

結局、彼女は、彼女が自分で証明した通りの人物だということが持ち物からも分かり、その日のうちに解放されることになった。

彼女は、睡眠薬を飲む前に、私たちを信じると言った。

彼女は睡眠薬がお茶に入っていることに気づいていた。そのことが分かったから容赦なく彼女を取り調べた。

目覚めた彼女に、罵声を浴びせられなければならないと思ったのは、結果が出た罪悪感からだった。

しかし、彼女はクリスに怒鳴るところかお礼まで言ってきた。

妙な女性だ。

しかし、クリスはヨーコが自分の第一印象の通りの女性で、不思議と安堵していた。

お人好しで、礼儀正しくて、クリスが好感を持てる女性。

できることなら、クリスの立場でもできうるのであれば、ヨーコ

ともっと話しをしてみたくなった。

そんな彼女が、目の前から居なくなった。

裏切られた、とは思議と思わなかった。ただ、クリスは思いがけないほどの不安と焦燥に駆られただけだった。

信じると言った、彼女の言葉をこんなにも信じていたことに自分が驚いた。

聡い彼女が千切ったと思われる飾り玉を見つけて、血の気が引いた。

報告を聞いたハイラントは、彼女が自ら姿を消したと切り捨てた。ウィリアムはどちらか測りかねたように黙り込むだけで、発言を避けた。

宰相閣下はただ、捜せとクリスに命じただけだった。

たとえば、誰も信じなくとも、彼女のことは自分が信じる。

ヨーコは何も告げずに居なくなるような女性ではない。礼なら礼を、悪態なら悪態を、必ず残していくはずだ。

（無事でいて）

彼女は、こちらの世界では赤子のようなものだ。何も知らない彼

女が、どんな目にあっているのか。

想像するだけで眠れない。

眠れなくなるから、クリスはその分、彼女を探した。

ただの人さらいにしてはほとんど手がかりがない。周到過ぎる手管が、ヨークだけをさらうように計画されていたようにも思えて、町の噂程度の小さな手がかりを辿って、ハイアンの森から靴を見つけて出した。

血のついた縄と一緒に。

不安が現実となった心地がした。

クリスの報告が終わると、宰相閣下はただ肯いただけだった。それから、報告書と証拠品は残していけと言って、クリスを執務室から追い出した。

ハイラントは閣下のそばから異物が消えた程度にしか思っていないようだったが、ウィリアムは仕事の合間に何かを調べているようだった。クリスは靴の見つかったハイアンの森をひたすら調べた。

そこで分かったことは、ヨークが複数人の男に連れ去られたこと。そして彼らと争ったこと。

それから、再び、何者かに連れ去られたこと。

森の奥で何者かの焚き火の跡が見つかった。そこには二人分の足跡があった。男と、女の。

ヨークはきつと無事だ。

宰相閣下への報告に、一度城へ戻って執務室にうかがうと、珍しいことにハイラントと閣下が言い争いをしていた。

閣下がここ数日ろくに休まれていないというのだ。

ハイラントは、普段冷静沈着だが一度頭に血が昇ると手がつけられない。

クリスはハイラントを執務室から追い出して、備えてある茶葉から鎮静効果のあるお茶を入れることにした。

クリスは知っていた。

執務室の書庫の隣の棚に、小さな靴が置いてある。

真新しいが、泥に汚れた女物。

あの日。

ヨーコが消えたあの日、彼女が着ていたチャリムは、宰相閣下が選んだものだ。

命令されて用意したものの本当に似合うのかと半信半疑だったクリスが驚くほど、若草色のチャリムは、ヨーコを優しく美しい女性にしていた。

ヨーコ。

無事なら、早く戻ってきて。

ここに、あなたを待つ人がある。

――彼女からの一報が入ったのは、それから二日後のことだった。

お粥と宿

やっぱりな。

宿についた途端にぐらっときたからヤバイなーと思ってたんだよ。

異世界に来てえーと、一週間経ったかな。
またベッドの上です。

まあ、度重なる心労と疲労のおかげさまで結構キてたらしい。年はとりたくないもんです。

体が丈夫ということが唯一の自慢だったのに、街についてご飯食べて宿とって、買い物行こうとしたら、気を失うとかいうのをやらしましたよ。

山を下るのは結構楽しかったんですよ。気持ちいいし、俊藍は大人しいし。

自分のことは全然話さない俊藍だけど、森で見つけた鳥のこととか（こちらでは青い鳥が一般的でぜんぜん珍しいこともないらしい）薬草のこととか（これがものすごく詳しいんだ）話してくれて優秀なガイドをつけて山歩きが出来た。私のペースとか体力とかも考え、て休憩いれてくれるしね。街についたときは感動ものでしたよ。文明って素敵。

でもまあ、意外と？せ我慢するタチだったのか自分でもびっくりするほどの勢いで倒れました。

ああビックリしたー。

それが一昨日のことで、丸二日は寝込んでました。今度は意識がありましたよ。

だからさあ、

「もう自分で食べられますからそのお粥の鍋ごと私にください」

れんげ持って私がパクつくの待つのでそろそろやめてくれませんかね俊藍さん。

卵とミツバみたいなのが入った美味しそうなお粥なんだよ。ゆっくり食わせてくれ。

布団の上にお盆を置くとポンポンやってたら渋々置いてくれた。なんでそんな残念そうな顔するか。

「もう大丈夫なのか？」

俊藍はテーブルに備えてある椅子をベッド脇まで引っ張ってきて座った。だからじつとこっち見るクセ治してくんないかな。

それを無視してフーフー言いながらお粥を食べる。ああ、五臓六腑に染みわたる。美味しい。

「大丈夫です。ありがとうございました」

この二日というものは甲斐甲斐しく俊藍は世話してくれた。食べさせてくれるは、着替え手伝ってくれるは、お手洗いにいきたいと言えばおぶってくれてねえ。恥じらいは捨てました。ホントに動けなかったから。

宿もそんな安宿ではないらしくて、ほとんど木製だけどベッドもチェストもテーブルも椅子もついている。広くはないけどいい部屋

だ。唯一萎えるのが、俊藍が同じ部屋だということだけ。まあ、介護には必要だっただろうけれども。

「ちゃんと食べて少しずつ動けばどうにかかります」

本格的に旅が出来るほど動けるようになるには今日一日ぐらいは無理できなさそう。二十四にもなると自分の体調管理ぐらいはしないかね。無理は出来ないんです。

「そうか」

俊藍の言葉は少ないけどほんの少し微笑んでるようにも見えるから、私の回復を喜んでくれているようだ。でも美形のくせに昭和の親父かアంత。

「これから、どうするんですか？」

ほとんど私のために山を下りたのだ。私は彼の手助けがなければ、あの城があるという皇都にも戻れないだろうし、ここで捨てていかれたらまず宿の払いが出来ないのだが。

あ、でもあのギルドで契約してるからどうにか証明して何とかならないだろうか。

そんなことをつらつらと考えていたら、俊藍はやっぱり私を見つめたままで何か考え込むように口を開いた。

「お前は、あの城に戻りたいか？」

あの城、とはやっぱり皇都のか。

「いいえ」

クリスさんぐらひは心配してくれているだろうが、社長の巻き添えをこれ以上食って死にたくはないので、正直言つて戻りたくない。

「ならば、俺と来い」

来いって、あなた。

「ちゃんと説明してください」

言葉が足りんのだよ。

俊藍の方も私が納得するとは思っていなかったらしく、頷いて続けた。

「ここからダホーの川を超えて死の山の向こうの端に、魔女が住んでいる。お前のことは彼女が面倒を見てくれると言っている」

遠方そんな地名がきましたね。しかも魔女？

「確か、あなたに呪いの解き方を教えたっていう？」

「そうだ」

そう何度も頼みごとしに行つていいものなのかな。でもまあ、その魔女さんなら私のことも多少は分かつてくれそうだ。

もしかしたら、元の世界に連絡つける手段も知っているかもしれない。

気難しい人だろうと齧りついてやろうではないか。

でもさ、

「いつの間に、私のことをその魔女さんに知らせたんですか？」

「チヨヌアで……と言ってもわからないか」

なんでも、魔術回路を利用した電話みたいなものらしい。魔術って便利なのねー。だったら、人を一瞬で運べるような魔術はないのかと訊ねたら、それは世界の大則というやつで禁止されているんだそう。禁止条項ってのがあって、それを監視している大則の番人が北の国に居るんだってさ。だったら戦争禁止すりゃいいのに。

そう言ったら俊藍は苦い苦い笑みを浮かべた。

「この大則は、戦争を公平に行うために北の大国が定めた法則だ。彼の国はどの国とも交流を持たない中立国だから」

領土はほとんどないが、魔術の技術が非常に優れていて、本気になれば大陸をすぐにでも掌握できるといわれている国らしい。じゃあ実質北の国が大陸の覇者なんじゃないかと言えはそうでもないらしい。北の国は大陸をどうしようって気がさらさら無いんだって。難しいな。

「魔術自体が、ほとんど秘術に近い。扱える者は特殊な訓練を受けた者のみだ」

だったら、

「どうして、私はこちらに飛ばされてきたんですか？」

人の移動を禁止した大則。

ほとんどの人が使えない魔術。

「大則で禁止されているのは、この世界でのことだ」

つまり、異世界間の移動は禁止されていない。

「しかし、人為的な異世界との移動には膨大な魔術の知識と術師が必要になる。――余程のことがない限り、行えるものではない」

その、余程のことがあって、社長は呼ばれたのだ。

まあ私には全然関係ないんだけど。

「そーいう難しいことに巻き込まれなければ、何とかやっていけそうですね私」

卵粥も食べ終わったし、難しい話も聞いたし、あとは悩んでも仕方ない。色々疑問はあるけどね。

俊藍は考えるように目を細めたけれど、そうだなと言って息をついた。

「俺が守ってやる」

俊藍のカッコイイ台詞に思わず目がジト目になってしまった。

「――なんだ、その目は」

「いえ。そういう男の言葉ってアテにならないなと思ひまして」

社長も悪いようにはしないって言いながら私のこと殺しかけましたからね。

信頼はしてるが信用はできないわー。
そうふてくされた顔しなさんなって。

「俊藍のことは信頼してますから」

これで美形のご尊顔がキラキラしく浮上してくれるんだから言葉
って安いもんだ。

おお、なんか悪女っぽいぞ自分。

「そーいや銭湯あるって言ってましたよね！」

そうなんだよ。宿にはついてないけど、街には何軒か銭湯あるん
だって！

この街についてから湯って文字見つけてたりしてて、行きたい行
きたい言ってたんだよねー。

わくわくしてたら、マントに私くるんでそのまま担いで行こうと
なさるから全力で抵抗した。

そうしたら、観念したように俊藍は見覚えのない服を一式取り出
してきた。

「あの若草のチャリムだと目立つだろう」

確かに。結構気に入ってたんだけど汚れたしね。布団の上に広げ
てみたら、黒襟の渋い紫の着物だった。幅の狭い帯も同じような渋
い青。それに同じような色のチャリムの上着と七分丈のズボン。き
つと、今俊藍が着ている深緑の服と似たような感じになるんだろう。
というか靴と、女物の下着まであるよ。

「―――これ、俊藍が買ってきたの？」

「そうだが？」

なんか、一切悪気も気遅れもない顔で言われるとこっちが怯む。

「……ありがとうございます」

お礼を言って、俊藍を部屋から追い出した。だってもう手伝ってもらわないしさ。今着てる着物は、確かに俊藍のもので、着替えさせてもらった記憶はあるんだけどね。さすがに下は病気で動けなくても無理だから。手をかけようとした俊藍の手を思い切りつけた記憶はおぼろげながらある。

二日も寝ていただけに動きのおかしい関節に悪戦苦闘しながら着替えて、部屋の外で待っていた俊藍を呼ぶと、彼はなぜか満足そうな顔をした。美形だけど何か気持ち悪いな。

「熱でも移りました？」

「あの若草色のチャリムは、お前によく似合っていたからな」

だから早く脱がせたかったのだ、と呟いたのは聞こえなかったことにしよう。

銭湯と電話

俊藍の手を借りながら宿の一階に降りると、カウンターに居た黄色のチャリムのおばちゃんが私をみて朗らかに笑った。

「元氣になったんだね！」

なんでも、このおばちゃんが女将さんで、ここ数日の病人食をわざわざ作ってくれていたらしい。

お礼を言ったら豪快に肩を叩かれてふらついた。

「いいんだよ！　ここの料理は全部私が作ってるしね。それよりあんまり旦那さんに心配かけるんじゃないよ！」

旦那さん？

思わず、私を支えてくれていた俊藍を見上げたが、本人は素知らぬ顔だ。

まあ、私一応、逃げてる身だし。ここは素性を偽っておくか。

あえて言及は避けて、女将さんが教えてくれた三軒隣の銭湯へ行くことに。

戸のない開けっ放しの宿から外へ出ると、日差しが眩しかった。

まあ二日ぶりだし。

そうしたら、後から出てきた俊藍に借りてきたのか網笠を被せられた。

なんか至れり尽くせりの人だわ。

宿の外の道は人通りの多い舗装のない道。この街では舗装のある

のは関所ぐらいなんだそうだ。

道行く人の格好は、城下で見た人たちより着物が多くて、布の看板より木の看板が多い。

銭湯はほとんど一日中やってるらしくて、お湯の張り替え時間以外はほぼ二十四時間営業。(時間の数え方は知らないんだけど)

男湯と女湯と分かれてるから入口で俊藍と別れると、俊藍に渡された銅貨三本を番台のお姉さんに渡す。すると手拭いと石鹸渡してくれた。おおすごいな。

脱衣所で荷物置いて(まあ貴重品なんか全然持ってないから)いざって入ったら懐かしさで泣きそうになった。

湯気の漂う木の浴槽は二つに分かれてて、体を洗う用の浴槽と体をつける浴槽と分かれてる。

それ以外は日本の古き良き温泉!

朝風呂の常連らしいおばちゃん達に、手拭い使ったの石鹸のうまい泡立て方教わったり、女の事情をそれとなく聞き出したり(女の子は色々あるんだよ)して、入ってきたお姉ちゃんたちに(美人なうえにナイスバディだったよ!)美顔方法教わったりして、のんびり湯船に浸かってたから、お風呂から出たらちよっとのぼせてた。

朝は風呂の水も浴槽も奇麗だから入るの気持ちいいんだってさー。

脱衣所から出て、入口近くの待合所では、もう俊藍がお茶飲んで待っててくれてたよ。ごめんね。

しかし、濡れた長い黒髪垂らした美形はまたさまになるからムカつくな。

それにしても、

「俊藍、髪濡れてる」

アンタまで風邪引くじゃないか！

適当に拭いてきたんだろう。肩にかけてた手拭い奪って、髪をわしゃわしゃやってやる。

始めはちよつと驚いたように頭が動いてたけど結局大人しくなった。よしよし。

「可愛い旦那さんじゃないか」

くすくすと可愛い声で一緒にお風呂に入ってたお姉さんたちに笑われたじゃないか！

ああ、濡れたブロンドが美しい！

「いい男だからウチのお店を紹介してあげようかと思ったんだけど、こんな可愛い奥さんいるんじゃないやねえ」

奥さん？

いやいやちよつと待ってくださいな！

呼びとめる間もなく艶やかなお姉さんたちはいつてしまった。なんて誤解を。心が痛いわ。

「ねえ、俊藍、今からでもあのお姉さんたちのお店聞いてこようか」

走れば間に合うはずだ。

そうしたら、どこから話を聞いていたのか、周りに居た人たち全員に止められた。

何故だ。

「——ねえ、俊藍さん。何か私に隠していることはありませんか？」

「さあ？」

銭湯を疑問抱えたまま出て、ついだから皇都へ連絡をつけようという道すがら、隣を歩く無駄美形を見上げても、帰ってくるのは昼行燈な答えだけ。

いっぺん締めてやろうか。

「どこに行くんですか？」

「ギルドだ」

なんでも、ギルドはチョヌアっていう通信機器を一手に扱っているんだって。

「じゃあ、ギルドって、北の国が作ったんですか？」

そう言ったら、ちょっと驚いた顔をされた。

普通に考えたら気付くだろう。

中立で、色んな技術持ってて、国と国に左右されないって。

「ギルドは、北の国に本部がある組織だ」

やっぱりな。

そう頷く私を、俊藍は少し見つめてから溜息をついた。

「お前は、頭が良すぎる」

そんなこと言われたことはありません。むしろ出来は悪い方です。否定した私に向かって俊藍は、分かってないと呟くだけでそのままそっぽを向いた。

分かってないのはどっちだ。

「この国では、お前のように学のあるものの方が珍しい」

学校はある。識字率も高い。でも、専門的な知識や物の考え方を出来るのは一部の者、それこそ特権階級に多いんだってさ。

だからって、私に学があるとは思えないけれどね。

でも、俊藍はそういうことが言いたいんじゃない。そういうこの国の状態が嫌なようだった。

やっぱり、この人、よくわからない。

銭湯から幾つかの角を曲って、大きな建物が見えてきたと思ったら、それがギルドだった。

見た感じじゃ三階建の潇洒な西洋風。他の建物がどっちかというのと木造の和風、中華風だから石造りの建物は結構威圧感がある。

俊藍に連れられてはめ込みガラスのドアを押して入ったら、（そいういやガラスって珍しいわ。街でほとんど見かけない）いつかクリスさんに連れられてきた時よりも少ないけどずらっと受付が並んで、そのお姉さんに何か言うのかなって思ったら、俊藍はお姉さんたちの奥に居た、ちよつと偉そうな服着た（なんか飾りがゴテゴテついてるチャリムなんだよ）中年のおじさんと呼んだ。

おじさん、俊藍に呼ばれて、一瞬しかめっ面したんだけど今度は

あつて声上げて、私たち二人を受付の奥の部屋へと手招きした。
何事。

奥の部屋は、支柱に天板乗ったみたいな机らしきものが一つあるだけの薄暗い部屋。

おじさんは深々とお辞儀して部屋出ていくし、俊藍はそれが当然みたいな顔するし。

私はおまけみたいにして付いていくしかないじゃない。

だってさー二人とも石罅と手拭い持ったお風呂帰りだよ？ 石造りの重厚な部屋の中でかなり間拔けた。

俊藍はほとんど迷いなく天板の上に手をかざすと、何もなかったはずの板からぼんやりと複雑な模様の光が浮かびあがってきた。

あの模様、見憶えある。

ギルドで私が契約した時の、あの石版に似てる。

そんなこと思ってたら、その複雑な模様の淡い光が四角い像を空中に結んだではないですか！

空中のスクリーンには私の読めない文字が浮かんでは消え、浮かんでは消えして、最後にどこかの部屋の映像が出たと思ったら、一人の、見憶えある女の子が出てきた。

「クリスマスさん！」

思わず声を上げたら、チャリム姿の栗毛の女の子は驚いた顔で俊藍の脇に出てきた私を見た。

おお、これテレビ電話なの？ 音も映像もすごい奇麗！

『ヨーコ！』

ああ、やっぱりカタカナ呼び。社長、私の名前知ってるはずだよ

ね？ 漢字教えといてよ。

『今、どこなの！？』

ああ、やっぱりこの子は心配してくれてたんだ。純粹に嬉しいわ。

「わかんない」

ごめんね。アホで。そういや聞いてなかったんだよー。

「ヘイアンの森の麓の、フリリングの街だ」

代わりに答えたのは俊藍。

偉そうに。

でも、クリスさんは弾かれたみたいに頭を下げた。おい可愛い顔が見えにくいじゃないか。でも何か強張ってる？

『――失礼いたしました。御無事のご帰還、超越至極にございます』

え？ なにそれ。

「よい。それより、彼を出してくれ」

『かしこまりました』

私を置き去りにして、クリスさんは画面から消えて、あんまり見たくない顔が出てきた。

俊藍と同じ黒髪でも私と同じ世界の黒髪。

『――初めまして』

最後に会った時よりも、どこか表情を固くした顔の北城社長だ。

「お初にお目にかかる。北城宰相閣下」

黒い詰襟の御仁はちよつと眉をしかめた。

でも、俊藍はあまり気にせず少し口の端を上げた。

「……なるほど、ひいおじい様によく似ておられる」

『――戻られたのですね』

「ああ」

訳が分からん。でも口を挟める雰囲気でもないから黙ってたらふいに社長がこつちを見た。うお、そーいやあっちからもこつち見えるんだ。

『どうして、そこにいるんだ？ 君は』

心配したとか社交辞令でも言えないのかこの人は。

「この人に助けてもらったんですよ。森までさらわれてたのを」

『なら、早く戻ってこい』

はあああああ！？ なに顔色一つ変えずに言ってくれてるんですか！ こちとら死にかけたんだよ！ 派遣社員だからって何でも言うこと聞くとするなよ！

「彼女は、魔女に預けに行く」

盛大に文句を言ってやろうとしたら俊藍にさえぎられた。くそ。邪魔すんな！

でも私が文句を言うよりも、堪えた顔してるな社長。なんか悔しい。

「葉子はそちらには戻りたくないそうだ。魔女は彼女を預かると申し出てくれている」

『葉子……？』

堂々としてる俊藍に何か負けた気がするからってこっちを見るなよ社長。

社長はじっと私を見たかと思うと（近頃よく見つめられる気がする）怪訝そうな私の視線をかわすように視線をそらせた。なんだよ。その珍獣とは目が合っちゃいけないみたいなの？ うっわ、相変わらず腹立つ社長だ。

俊藍と再び対峙すると、今度は俊藍に負けない気迫でこちらを睨んでる。怖いんだけど。

『お言葉ですが、彼女は私と同じ世界から飛ばされてきた者です。同じ世界に居た私が側にいた方が彼女は安心すると思うのですが』

言いたいことを言ってくれる。

「あの！」

我慢できずに横から俊藍の脇に立って社長を睨んでやった。この

野郎、怯みもしない。

「私、言いましたよね？ あなたの周りに居たんじゃ、命がいくつあっても足りないから側には居たくないって」

巻き込まれてこちらの世界に来てしまっただけでもう充分だ。

「私は死にかけるのも殺されるのもごめんです。他人を傷つけるのも大嫌いです」

平和、平凡、それで結構！

「あなたに関わって私の人生が左右され続けるのも、もうたくさん！」

運の悪い私は、傷つけられるのには慣れている。かなり不本意ながら。

だから、傷つけられたらどんなに痛いかわっている。

些細な言葉が、何気ない一言が、どんなに人を傷つけるのかも。

『――泣くな』

泣いてない！

あんたこそ泣きそうな顔するなよ！ この冷血社長！

どうして、こんな時に限って平気な顔をしてくれないんだ。

俺様男はもうたくさん。

『わかった』

「何が！」

『魔女のところへ行っても、元気で』

いつの間にかうつむいていた顔を上げると、社長がふっと笑った。

『君が、無事で本当に良かった』

だから、どうして、そんな甘い声で、甘やかすみたいに微笑むんだ。

俊藍といい、社長といい、こんな親父が二人も居たら、娘は絶対家出する。

髪紐と定食屋

辛くなったらいつでも帰ってこい。

そんな親馬鹿みたいなセリフを残して、社長は俊藍に一礼して通信を切った。

私は出来そこないの娘か。

心おきなく家出してやる。

城に置きっぱなしの私の荷物はちゃんと保管してくれるっていうし、気が向いたらいつか帰ってあげないこともない。

クリスマスさんによろしく言ってくれて頼んだら微妙な顔されたんだけど。つくづく心証悪い社長だ。

唇かんでたら、俊藍がやめろと言うように頭を撫でてきた。

そういやこっちにも親父が居たんだ。いっそパパって呼んでやろうかな。

ギルドから出たら買い物に行こうと俊藍が言いだした。

本当に娘の機嫌とるパパだな。

私がガキ臭いっていうのもあるんだろうけどさー。

「私、もらったお金がギルドに預けてあるんです」

どうにか出せるようにすれば、私の分は幾らかでも払えそうだな。

すると、俊藍が今度は受付のお姉さんに（このお姉さん、俊藍の美形顔見ても営業スマイルだったよ。プロだ）言って確認作業をしてくれた。石版に登録されてるから、木板失くしても私以外は使えないから大丈夫なんだってさ。すごいなー。

「生活が落ち着いて、お金が溜まったら北国ってところに一度行ってみたい」

だってさ、こんな技術があふれてるっていうんだよ？

異世界との交流手段ぐらいは調べられるかもしれない。

手続きを終えて、ギルドのガラス戸を開けてくれながら（変なところで紳士だ）俊藍は微妙な顔をした。

「お前、一人で？」

「そりゃあそうですよ」

他に誰と一緒に行ってくれると言うんだ。

そう言ったら、俊藍は少し目を細めて、私に網笠を被せた。

俊藍は、魔女のところへ連れて行ってくれると言ったが、そこから先の具体的なことは何も言わない。

まるで、その先の約束は出来ないというように。

きっと、彼は彼の事情があって、ちゃんと帰る場所があるのだ。

（羨ましいな）

今の私に、この世界で帰りたい場所なんてものはない。

社長の居るお城は人心荒廃、術中権謀渦巻く伏魔殿みたいなもの

で、必要なきや寄り付きたくない場所だ。いい思い出はクリスマスさんだけだしね。

私が今回さらわれたのだって、大方、社長の周りの陰謀のせいだ。絶対。だって、この世界に来て三日で私がどう他人の恨み買うんですか。

俊藍の事情がどういふものか正直興味はないけど、それが彼にとって辛いものだろうが、彼の人生に他ならない。

（貞操がどうのって言ってたけど、帰る場所があるなら、私のこともすぐ忘れるだろう）

俊藍が私を大事にしてくれるのは、拾った捨て猫に愛情が湧くのと一緒だ。

他の家に預けたら、それでおしまい。

時々、気にはなるだろうけど、何年か経てば「ああ、あんな猫いたな」ぐらいなもの。

拾われた猫の方も、拾ってくれたことに感謝すればいい。

私はギルドで少しだけ使えるようにお金を出してきた。小出しにしてれば旅ぐらい出来るだろう。何せ4人家族ひと月分だ。

自分で稼いだお金じゃないけど、せめてものお礼に俊藍に髪留めをかうことにした。

露店がずらっと並んだ通りに連れて行ってもらって、そこで見つけた飾り紐（ゴムみたいなものは無いらしい）をその場に俊藍を立てさせて色を合わせてみる。

お店のおじさんに笑われて居心地悪そうにしていたけど、俊藍は苦笑しながら付き合ってくれた。

見た目がいいから何でも似合うけど、やっぱり俊藍のイメージは

青だった。

海と空みたいな明るい色じゃなくて、森の奥にあるような深い湖のような冴えた蒼。

細かく編み込まれた紐は銀貨二つって言われたけど、これから何が入り用になるかわかんないから、銀貨一つにまけるよう交渉してやった。おじさん泣きそうだったな。

こちらの世界のお金は奇麗だ。麻雀の点数棒ぐらいで（麻雀やらないから正しい名前は知らない）細くて丸くて、お金同士を鳴らすと澄んだ音がする。大事なお金持ってる感じ。

銅貨で子供みたいなのをやっていたら、早く仕舞えと俊藍が私の頭をふわりと撫でた。子供みたいなのやってたから、甘んじておこう。

お金をしまつて、空を見上げたらもう太陽が高い。お昼ぐらいなのかな。

俊藍が屋台で食事って私を連れて、定食屋さんみたいなのところに入った。

まだ早いのか人がまばらだったから、乾かしっぱなしの俊藍の髪を買った飾り紐で結ってあげることにした。

まあ、結うって言うってもそんな複雑なことは出来ないからひつめるだけなんだけどね。

それが、まあ、俊藍の髪の無駄に奇麗なこと。

髪を結うのが私でもものすごく申し訳ないんだけど、頭の後ろで結ってあげたら俊藍は満足そうに笑った。

そんな嬉しそうにしないでよ。たかが髪紐だよ。

そうこうしてるうちに、がやがやと人が多くなってきたなって思

ったら、

「あ」

さりげなく視線をそらせた。
だってさ、だってさ、

「……奴等か」

低く俊藍が呟いて、横目を向けた先にはチャラチャラした着物着た強面のお兄ちゃん達。

私さだったチンピラ共がぞろぞろ入ってくるじゃない！

私って、どうしてこう運悪いの…。

買い物とヒゲ

幸いまだ注文してなかったから、二人で席を立て、なんでか俊藍が私の肩抱いて定食屋さんを出ただけど、

「——やばかったッ！」

定食屋さんからダッシュして路地裏の影に駆け込みましたよ。
何にも悪いことしてないのに！

「……やっぱり、この街に来てましたね」

建物の影から少し周囲をうかがっていた俊藍も肯く。

「山からここが一番近いからな」

どうしよう。

幾ら元気でも、二日寝込んでた私にすぐ長距離を歩ける体力は戻ってない。

俊藍に頼りっきりで悪いんだけど、私は殺されかけるのも売られるのもごめんだ。

「すぐに街を出る準備をするぞ」

「え」

それはそうなんだけど！

路地裏を進む俊藍の後を追うしかできない私に、拒否権はないんだね！

この調子だと私ってば足手まとい！

うう……ここは一つ頑張っついていくか！

私は早足の俊藍のあとを追いかけた。

俊藍は路地裏を出ると、露店じゃなくてちゃんとした建物の店ばかりが並んでる道へと出た。

そこで、色々な品物を買っていった。

毛織のマントに丈夫な皮靴、小さなナイフに、いくつか着替えの着物と包帯に消毒用の金属ビンに入ったお酒、胃薬とか傷薬の薬に、筒型の水筒に、金属製の一人用の鍋と小さなれんげ、それから何日か分の大量の乾燥された食糧。

ようやく買いそろえた頃には俊藍も私も両手いっぱい荷物になってましたよ。

それに私が半分出すって言っても俊藍は頑として私の財布を出させなかった。いいもん、あとでまとめて返してやる。

買い物通りをちょっと抜けて、一休みできるかなって思ったら、

俊藍は小屋の並んだお店に入ってしまった。

後を追いかけて入ったら、俊藍がひげ面の男に大笑いされていた。

「そうかー！　こんな面だったな！」

長身の俊藍に劣らない長身だけど、見た目はひょろっとして吹けば飛ぶみたいないな灰色のチャリムの人で、白い髪だから一見お爺さんみたいんだけど、豪快に笑う声は結構若い。

笑われて不機嫌そう（背中から何かオーラが出てる）な俊藍を尻目に重たい荷物を置いたら、いつの間にかひげ男の注意が私に向い

ていたらしい。

「この可愛らしいお嬢さんは？」

お嬢さんっていう年でもないんですが。愛想笑いでもしとこう。
俊藍の知り合いみたいだし。

「妻だ」

「「妻あ!？」」

さも当然みたいに言うなよ! ひげ男と声がハモったじゃないか!
咄嗟にそばにあった俊藍の胸倉つかんじゃったよ。

「……俊藍？」

「——妻になる予定の女性だ」

胸倉締めあげられてまだ言うか。
首を締めてやろうかこの外面だけ美形!

どんな文句をぶちかまそうか俊藍の襟をぎゅうぎゅう締めあげて
いたら、ひげ面男がまた爆笑しだした。このひと笑い上戸なのか?
昼間から酔ってる?

「仲がいいことはよく分かったよ。アザナ呼ぶぐらいだからな」

アザナ? 何それ?

きょんとんとしてたら、ひげ男は不思議そうに（ひげ面過ぎて表情
が分からない）続けた。

「愛称みたいなもんさ。親しい間柄、特に恋人同士や夫婦で呼び合う」

なんですか？

まだ締めあげてた胸倉に力を入れたが、俊藍にこたえた様子がない。ちきしょう。誰か私に馬鹿力を分けてくれ。

白髪のひげ男は面白そうに笑いながら説明を続けてくれる。

「僕は、ミリアント・アサムネ・ジンブリウムって名前だが、友達ならミリアント、僕の奥さんならアサムネって呼ぶ」

じゃあ、この監督不行き届きな黒髪美形はちゃんとした名前がまだあるってことじゃないか！

こっちが常識非常識に疎いからって！ この野郎！

銭湯で含み笑いされたのも、全部コイツのせいか！ ごめんなさいお姉さん！

腕が痺れてきたあ！ 体力不足だ。

暴れ足りないけど、もう体が限界。そういやお昼もまだだし。

息を切らせた私の手をそつと外すと、俊藍は私の両手首を持ったまま（また胸倉締めあげられると思ったんだな）ひげ男、ミリアントに向きなあった。

「キリユウが欲しい」

俊藍（不服ながら他の呼び方知らないから）に襟以外に乱れた様子はない。ああ、本当に忌々しい。

笑いっぱなしだったミリアントは笑い声を収めて、俊藍に視線を投げた。

そういえばこのお店、普通のお店って感じじゃない。何か品物売ってるわけじゃなくて、何かの受付みたいなカウンターがぽんとあるだけの狭い部屋だ。部屋が奥に続いている感じもないから、宿屋ってわけでもない。

「コウトに戻るのか？」

「いや。彼女を魔女のところへ連れて行く」

ふーんと言いながら、ミリアントはカウンターの内側に回りこむ。そうして奥の壁に何かかざしたかと思えば、壁がぽっかりと空いた。驚く私を尻目に、ミリアントは壁の中に広がっているらしい部屋に入ると、見憶えのある剣を取り出してきた。

柄に滑り止めの皮が巻かれた剣。

私が初めて俊藍に会った時、差し出された剣だ。

そういえば、俊藍、ここに来るまで剣なんか持ってなかったな。

ミリアントは剣をカウンターに置いて、のんびりとカウンターに頬杖をついた。

「これから忙しくなるねえ。結構、ここの生活、気に入ってたんだけど」

「カリアはどうした」

「今、買い物。うるさくならない内に行くといい」

俊藍のことはロクなことを知らないと思っていたけど、本当に名前すら知らないんだ。

二人で交わされる会話の端々から、やっぱり私は異物なんだと思った。

魔女さんの家にもいつそ一人で行こうかなあ。

どうやら俊藍はここで何か大きな買い物をするらしい。なんか種類とか金額言ってるし。

「お嬢さん」

ふいに水を向けられてびっくりしてしまった。

ミリアントはそんな私を笑ったようだった。

「コイツのことあんまり怒らないで、今まで通り、アザナで呼んであげておいてくれ」

つまり、ミリアントさんも俊藍の名前を覚えてくれないんだな。

釈然としない。

それが顔に出てたのか彼はちよつと苦笑する。

「コイツのことはコイツに聞いて。僕に聞かれてもちよつと答えられないからさ」

まあ、言われなくともそうさせてもらう。不本意だから。

「そうだ。お嬢さん、お名前は？」

そういえば、この人はもう名乗ってくれてたな。ひげだけと感じ

のいい人だ。

「君島葉子です」

「じゃあ、キミジマちゃん？」

「いえ、君島が姓で、葉子が名前です」

「そっか。ヨーコちゃんか。普通、名前が前に来るから。珍しいね」
珍しい？

俊藍は、私の名前を聞いたとき、そんなことは言わなかった。

この人、本当に何者なんだ。

ミリアントさんの店に荷物預けて、俊藍はまた買い物に行くというのでついに行ったら、嫌っていうほど女物の服買われた。

人の話を聞かないからパパって呼んでやったら、嫌な顔をされた。

パパは通じる言葉なんだということは分かった。

美人と料理

「お口にあうかどうか…」

はにかみながら超美人が手ずからよそってくれたスープに誰が文句をつけようか。

私はもちろん超笑顔で受け取りました。何か？

買い物から白ひげさんのお店に戻ったら、金髪長身の小麦色肌美人が出迎えてくださいました。

主に俊藍に向けて、ものすごい礼を払ってたけど、私にもちゃんと笑顔でごあいさつしてくれてさあ。どっかの社長も狼も見習ってほしいよね。

つついっいデレデレしてたら俊藍に睨まれた。理不尽だ！ 美人は一人占めしたらいけないと思うの！

それで私のお腹が鳴ったものだから、性格も超出来た超美人はよろしければ、と控え目かつにこやかに遅いお昼御飯を作ってくださいったわけですよ！ 素敵！

ミリアントさん達もお昼まだだっていうことで、お店の奥の部屋のダイニングで四人テーブルを囲んでいます。

根菜やお肉をぐつぐつ煮た具沢山スープにお米とか麦とかそういう雑穀混ぜたおかゆとサラダと鳥の香草焼き。香草焼きは残り物で申し訳ございませんと断りいれられたけど、とんでもございません！ タレの味が染みておいしいです。幸せだ…。

今更なんだけど、こちらの料理って西洋式のパン食なんだと思っていたんだけど、それってお貴族さま専用らしくて庶民はこういう

雑穀とか、ナンみたいなパンが一般的なんだって。一気にここで暮らしていける気になりました。日本人はご飯が一番だと思うの。

そのうち味噌とか納豆とかに出会えないかな。落ち着いたらまず食材探しだな。うん。

「気に入っていただけて光栄ですわ」

この金髪美人が作ったと思うだけで、庶民料理も高級フルコースになった気分です。

お名前をキャリア・ツァ・キョウニン・クワラントさんとおっしゃって、この世界でも長身の部類に入る私という勝負の長身なんですが出る場所は出てるナイスバディです。簡素なチャリム姿でも隠しきれませんよこの美貌。首の後ろにひつつめられてるけど腰ぐらいいりそうな金髪は日の光に当たると透けてキラキラするし、同じ金髪の長いまつげはガーネットみたいな瞳に美しい影を作るし、小麦色の肌はそりゃあもうどんなお手入れしてるんですかというほどお美しい限りです。

この方こそ、立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合のよう。
クリスさんといい、銭湯で会ったお姉さんといい、眼福眼福。

気安くキャリアとお呼びくださいと微笑まれた私は幸せ者だ。そこらへん歩いている人捕まえて自慢したい気分。

「ミリアントさんは幸せ者ですね。毎日このお料理を？」

香草焼きの残りを狙って箸（この国ではお箸が一般的なんだそうで）を構えながらのんびり食べてるように見える白ひげのミリアントさんを見遣った。このミリアントさん、箸の運びはのんびりなくせにえげつない早さで出された料理を平らげているのだ。スープもおかゆも既に三杯目。あの人ひよろひよろしてて威圧感ないけど長

身だから手も大きくて木のどんぶりが小さく見えるけど、私の持つてるどんぶりの1・5倍はあるよ。油断ならない。

「まあね。僕って幸せ者だよね」

悪びれないこの人結構好きかもしれない。でもミリアントさんの魔の手が伸びる前に香草焼きの残りはもらった！ 勝ち取った食べ物ってどうしてこんなに美味しいんだろう。

「これも食べるか？」

隣の俊藍が自分に取り分けられたはずの香草焼きを差し出してくる。肉食のくせに肉を食べないでどうするつもりだ。

「遠慮せず俊藍が食べてください。ぜひ」

「……どうして俺のは受け取らない」

あなたが肉食だからです。優しさだよん。

「あの……」

茶番の合間を狙ったようにキャリアツアさんは俊藍に呼びかけたみたいけど、どうにも呼びにそう。

まあ、今更秘密が増えたところで探ろうとも思いませんから。

「ヨーコさまのお体はまだ本調子ではないように思われます。本当に早日この街を発ってしまわれるのですか？」

俊藍に魔女のところへ行って欲しくないみたいですわねキャリアさん。

美人にダシに使われるなら本望です。

実際、私はあんまり調子は良くない。油断すると熱が出るかも。

「彼女を煩わせるわけにはいかないからな」

と、俊藍は私を見てくる。ええええ何その私のせいみたいな！

いや捕まってたけどね！ それは不可抗力だと思っただよ！

助けを求めるようにキャリアさんを見たら、彼女は困ったみたいに微笑んでくれた。

一気に厄介者だわ私。

「あの、私もあんまり調子良くないし、やっぱりこの街にしばらく居て、何なら私一人で魔女のところへ行きますから」

その間に仕事も探さないとなあ。歩く十八禁ことウィリアムさんにもらったお金じゃやっぱり足りなくなる。

放り出されたら、そりゃ困るんだけど…

「駄目だ」

有無を言わせない声で、俊藍は私を睨んだ。

思わず彼を見上げると、安心させるように俊藍は肯く。

「お前を一人で行かせたりしない。俺が無事に送り届けてやる」

見透かされた気分だ。

俊藍は、どうして私の甘えた心を見抜いてしまうんだろう。

食事が終わって、すぐにカリアさんが片づけを始めたので、私は手伝いを買って出た。

この東国の一般的な台所は、石を積んで作ってあるかまどだ。食器棚は備えてあるものの、洗い場は石造りだけど井戸から水を汲んでこなきゃならない。お湯なんか出ないし、井戸から汲んでこなきゃならない水は貴重だ。

覚えなないといけないことはまだ沢山ある。

私はカリアさんが洗った食器や鍋を拭きながら、あとで誰かに聞こうと使い方のわからない料理器具を見定めていた。

「――あなたがどういうおつもりかは存じ上げませんが」

優しい声で、でもカリアさんはこちらを向かない。

「あの方には、あなたの望みを叶えることは出来ません」

顔を上げて、カリアさんの美しい横顔を見つめた。けれど彼女はこちらを見ない。

「くれぐれも、あの方の優しさに付けこむような真似をなさいませんよう」

すぐに返せと叫ばない。

俊藍の望みを叶えようとして傷つくことも厭わない。

ああ。

なんて強くて素敵な人。

私にはマネなんか出来ない。

「すぐに」

私の声に、カリアさんは思わずと言ったようにこちらを向く。

「すぐに、返します。あなた方の元へ」

ご飯は美味しかった。彼女は美人だ。それでいい。

「でも、あと少しだけ」

帰る場所がある人を、いつまでも留められる訳じゃない。

不安で、不安で仕方ない。

竦む足を叱咤する。

鎮まれ、弱い、弱い私。

「俊藍は、恩人なんです」

彼に返せるのは感謝だけだから。

火打石とお手伝い

しゃなり、しゃなり。

鈴のような音が、オレンジ色の街灯の明かりの中を進む。

宵の口の街を行きかう人々は皆一様に道を開け、道中を見守る。

彼らの視線を集めているのは、荷物を背負った騎竜と黒髪の男、そして騎竜の背に乗った白いベールの女だ。

先ほどから鳴っている鈴のような音は女のベールについた銀飾りの音だろう。

騎竜を連れた男と女は宿に立ち寄ると、その主に声をかけ、二三断りを入れたかと思うとすぐにまた街路を練り歩いて明かりも届かない道へと消えていった。

「——つっつかれた……！」

街を出て、幾らか近くの森の中へと入ったところで、私は白いベールを頭から取り払った。

申し訳ない。妙齢の美女でなくて。

隠せてないけど、ワタクシです。平凡、地味が売りの君島葉子でございます。

ただいま、絶賛変装中です。

白基調の裾も袖も長いふんわりとしたチャリムドレスに、金銀宝石のついた腕輪にイヤリングにネックレス。あんまり長くない髪はお上品に毛先をカールさせて、顔は整形かっていうぐらいのお化粧しております。カリアさんに施されたこの素晴らしい変装（衣装と言うより変装だ）は、街の行き交う人々どころか宿屋のおばちゃん

と騙せるんだからビックリですよ。女サボっててごめんなさい。

「奇麗だぞ。葉子」

携帯用の行燈に火を入れながら昼でも夜でも変装しなくていい美形が微笑んだ。俊藍の買った衣装を着てるから機嫌が良いんだろうけど、美形に奇麗と言われてもぐっとこない。

「脱いでいい？」

「ここで俺が襲っていいのなら」

普通にまだ着てろって言ってくれ。

溜息をつきながら何の気なしに騎竜の頭を撫でてやると、長い喉が低く鳴った。気持ちいいのだ。

この、のっぺりとした顔の可愛いやつは、社長と会った時ブリキのおもちやが連れてた恐竜もどきだ。こちらの世界では馬と同様に家畜として買われているらしい。長い首に私の頭をぱっくり食べられそうな大きな口の爬虫類は、そのつるりとした肌に似合わずごわごわの毛を胴体を持っている。そのいい感じのクッションの上に鞍を乗せて乗るから、馬よりだいぶ振動がないという。（馬には乗ったことないんだけど）太い二本の後ろ脚は猛獣だって蹴散らすほど頑丈で、重たい荷物も楽々運ぶ。これで主食は干し草だということだから、不思議な生き物だ。

行燈を道標に俊藍は、騎竜の手綱を引いて少し森の奥へと進んでようやく私を鞍から降ろした。

この騎竜ってもふもふした胴体が私の背ぐらいある大きな生き物なんだよ。一人乗り降りはかなり怖い。

「ありがとう。ダイモン」

地味な緑色したこの騎竜の名前だ。種類の名前はヴェールといって、足腰が強くて大人しい種類らしい。実際、ほとんど初対面の私がかしがし鼻頭を撫でも猫目を細めるだけだしね。ミリアントさんのお店はこの騎竜を扱うお店らしくて、俊藍と専門用語で話していたのは、この騎竜の種類とか値段らしかった。

俊藍が薪拾いを始めたので、私もベールと装飾品を外して一緒に拾う。それぐらいはやるよ。

ここの生活環境で、私って本当に役立たずなんだよね。子供みたいなお手伝い程度にしか役に立たない。

常識はないし、格闘出来るわけでも、特殊な知識があるわけでもなく。

だから、俊藍が薪に屋台組んで火打ち石で火をつけようとしてたから頼みこんでやらせてもらう。自分でやれることは多いに越したことはない。

火打ちって石同士をカツカツやっているのかと思ってたけど、専用の金具に打ち付けて火花飛ばすんだってさ。

乾いた落ち葉に火花飛ばして煙出てきたところにそおっと息を吹きかけて、乾いた枝なんか火を移す。……だけの作業なんだけど、出来ない。無理だ！ 昔の人は偉大！

見かねた俊藍が火をつきやすくするために黒い粉を落ち葉にまいてくれた。キノコなんかの消し炭で、普通はそれに火花を飛ばすんだって。

なんだ、私いきなりハードル高いことやってたのか。

ダイモンが退屈して欠伸を連発しだした頃、私はようやく火を起すことが出来た。

せっかくの衣装が黒炭で汚れたけど達成感は今までで最高だ。

俊藍は特に文句も言わず、荷物から鍋やら取り出ししている。この人も忍耐力あるなあ。ここまで出来なきやイライラするでしょう普通。なのに、

「良かったな。火をおこせて」

ですよ！？　どこまで出来た人なんだよアンタは。

さすがにこのにこやかな美形に悪態つく気も失せてすみませんでしたと謝りました。いちいち神々しい人だ。

湯を沸かすというので、渡された鍋に竹筒から水を入れて俊藍が組んだ屋台にひっかける。俊藍が街で買ってきた乾物の塊を放り込むと、塊は水に溶けてみるうちに香ばしいスープの香りが漂ってくる。こんな自然食材レトルト出会えるとは思いませんでした。そこに粟みtainな雑穀を一つかみ入れてしばらく煮る。

時間があるから着替えていいと言われたので、早速白い衣装に手をかけた。

実は衣装の下には焦げ茶のチャリムが仕込んである。脱いだって別に恥ずかしいことはないんだけど、じっと見ないでくれませんかね俊藍さん。

巻き毛はどこかで川でも見つけて水をひっかぶるとして、化粧はそうはいかない。

荷物の箱からカリアさんにもらった化粧落としの油を布に染み込ませてじわーっと化粧を落としにかかる。いくら奇麗でもさすがにこのままってわけにはいきません。子供の手伝いしか出来なくても肌年齢が気になるお年頃なんですよ…。

あらかた落とし終えてふっと息をつく、鍋の様子を見ていたはずの俊藍はダイモンに餌をやっていた。干し草を両手いっぱいダイモンの一回分の食事だ。

ペット飼った経験もないから物珍しくて餌やりを眺めていたら、

ふいに俊藍がこちらにやってきて私が今まで顔をごしごしやってた布を取り上げた。

「まだついているぞ」

え！ 鏡なんか知らないからわかんないんだよ！

ひとの焦り顔が面白いのか、俊藍は楽しそうに私の顎に指をあててそっと拭う。頬の横から額に鼻、唇の端。うわぁそんなに残っていたのか！ 危険な！

思わず目を閉じていたから、鼻頭に息がかかるほど近づいていたなんて分らなかった。いや、この人気配ないのが悪い！

あっと思ったら、口を塞がれた。

「……っあ、ふ……っ」

角度を変えながら唇を割られて、びくりとした拍子に薄目を開けると苦しげに目尻から涙がこぼれた。実際、苦しい。

いつのまにか頭を大きな手でつかまれて腰だけしか引くことが出来ない。その腰にも手が当てられて、じわりと撫でられると背中から何かが這い上がる。

耐えられない声が漏れて、それが怖くてまた涙が頬を伝う。

どうしよう。

どうしたらいい。

分からなくて俊藍の袖を思いきり掴む。

すると、目の前の不届きな美形はいたずらに成功したかのように笑ってようやく唇を放した。

……当たり前みたいに私の唇を舐めて拭うのやめてくれないかな…

…。

くそ、こいつマジで卑猥だ！ 放送コードに引っかけたてしまえ！
なんだか悔しくて泣きそうになったら慰めるみたいに頬を撫でられた。

「ここで丸裸にされたくなければ泣くな」

慰めろよ。

こぼれそうになった涙を手でごしごしやって、鼻をすすった。あ、もうほんとに自分が年頃の娘なのか自分でも怪しくなってきた。元々、自信なんてないけど勘違いしてしまいそうだ。

「……どうしてこんなことするの」

「目を閉じるお前が悪い」

そうか私が悪いのか。落ち込んだ気分では反抗する気にもならない。

「どうした？」

手袋の大きな手で頬を持ち上げられると静かな蒼の瞳がこちらを覗きこんでいる。

それだけで、なんだか悲しくなってしまった。

もしかしたら、彼は私を幸せにしてくれるのかもしれない。

そう、勘違いしてしまいそうになるのだ。

この人が、何者なのか私は知らない。

けれど、多くの人に多かれ少なかれ求められている人なのは、カリアさん達の態度や社長の嫌がり方からも分かる。（社長はこの人と同種の人だから馬が合わないんだと思う）

一人占めには出来ない人だ。

この人は、求めれば私に沢山の物もそれ以上のことも与えてくれるだろう。それはこれまでの短い付き合いでも充分わかったつもりだ。

私の見返りなんか気にしないで、ずっと、ずっと私の望むものを与え続けてくれるだろうし、きっとそれは尽きないだろう。

だから、それが私は虚しくて仕方ない。

私は俊藍の助けがなければ、これから魔女のところまでちゃんと行きつけるかも分からないし、生きていられるのかさえ分からないけれど、俊藍に返せるものは実際何もないのだ。

それこそ、この身一つを差し出す以外。

でも、私の命と身を差し出すことをハカリにかけて、いったい俊藍の私の価値はどれほどのものだろうか。

疑心暗鬼になるのだ。あまりにも、自分の行く末が不安で。

なんて、なんて自分勝手な。

こうして覗きこまれるたびに、甘えた心の奥底の、歪んだ自分まで見透かされている気分になって、思わず謝り続けたくなくなってしまう。

「いつか婦女暴行で訴えてやる」

憎々しげに放つ私の言葉で楽しげに笑うこの人を、一人占めしておく術を私は知らない。

出来上がった野菜スープは美味しかった。

しばらくこのメニューの繰り返しだと言われたけれど、これなら苦にならない。

その夜は、火の番を半分俊藍に任せて、被せられた彼のマントにくるまってダイモンのごわごわした毛皮の横で丸まって寝た。

この旅の間に、私は俊藍をいい思い出にする方法を考えよう。

そうすることが、私にとっても彼にとっても一番良い方法だと思いながら、静かな夜の森で夢を見た。

誰かと私

ああ、時間がない。

もっと、もっと。

私はいつの間にか、今まで見たこともないような小難しい本を片手に猛勉強をしている。

それは、簿記から秘書検定、英語、フランス語から中国語、果ては料理の指南書まで。

ありとあらゆる勉強をしている。

昼間は秘書として働き、夜は遅くまでずっと勉強だ。

全てあの人のため。

（あの人？）

あの日、車に轢かれそうになった私は、あの人に腕を引かれて九死に一生を得た。

礼を言い募る私に、あの人は私を暖かく抱き締めてくれた。

それから、いつの間にか私のことを調べ上げたらしく、自分の秘書として働かないかと言ってくれた。

自分の可能性を試すチャンスだと思った。

だから、一も二もなくあの人の手を掴んだ。

勉強も、お洒落も、全部上手くやってみせる。

だって私は、選ばれたのだから。

あの人の目に留まるように。

おにぎりと夢

うわぁ。絶対馬合わない。

何とも言えない気分で起きた。あれ、ホント自分？

でも不思議と、あれは自分自身のような気もしている。別人だよあれ。

森は、まだ夜だ。

俊藍が焚き火に小枝をくべながら、静かにこちらに視線を投げてくる。

「寝ていていいぞ」

そうはいきませんよ。あなたが眠れないでしょうが。

私はもともと火の番が変わるためにわざわざ起きたんだから。

自分で決めた時間に起きられるのは私の数少ない特技だ。……無理矢理起こされたら寝起き悪いからあんまり役には立たないけどね！

「あとは私見てるから、寝てよ。俊藍」

そう言ってマントを差し出すと、俊藍は苦笑して寒いからと私に押し付ける。自分は近くの木の根元にもたれて、腰の剣を抱いて目を閉じてしまった。何かあればすぐに起きるんだと思う。

これが習慣になる生活って、どんな生活なんだ。

静かな蒼の瞳が私を視界に収めるように閉じると、俊藍はその神秘的な印象のまま、どこか遠い人に見えた。

きっと、彼の側に居るには、神様に愛されていないといけない。拾われた私にとってこうして面倒をみてもらっていることは幸運だけれど、それは俊藍にとっての幸運とは言い切れない。

狼になりかけていた彼にとっては私と出会ったことが幸運であつて、それから後は全くの彼の厚意に他ならない。

夢の中の私であれば、この俊藍を信じようとしただろうか。

彼の言葉を素直に受け入れて、従順に彼を愛して、彼のために生きようとしただろうか。

私には無理だ。

どうやっても自分の保身が第一だし、俊藍の言葉も社長の言葉も鵜呑みには出来ない。

だってさー、あの人たち物凄く自信たっぷり口開くんだけれど、いまいち説得力ないじゃない？

隠してること多すぎるし、信用しきれないっていうか。

愛とか希望でお腹は膨れないし、命も助からない。

こんなだから社長に見放されるのか。

納得できるような、出来ないような。でもあの城に戻ったら今度はどうなるか分かんないんだよねえ。

うまい立ち回りもお世辞もおべっかも使えない小娘に何ができるんだか。

あ、そういえば、私コンビニでおかかのおにぎりも買ってたよね？
ビールは飲んだ覚えあるけど、おかかのおにぎりってどうなったんだろう。

焚き火に小枝を放り込みながらとりとめのないことを考えていたはずなんだけど、いつのまにかダイモンの毛皮の暖かさに負けて寝ていたらしい。

翌朝、俊藍に頬を優しく撫でられて起きる羽目になった。

朝ごはんの用意をしていたら、ふいに俊藍が雑穀見ながら呟いた。

「お前の持っていた三角の包み、開いてみたら食べ物だったがあれはどういうものだったんだ？」

食べてみたら旨かったので、近くの村人たちにも分けてやったがあ三角の正体は分からずじまいだった、と。

……そうですか。あなたが食べてくれましたか。

あれはお米というやつで作った伝統食で、と詳しく説明しているうちに、興味津津に私の話を聞くこの人に、落ち着いて生活できるようにになったらおにぎりを作って食べさせてあげたい気分になった。

鰹節なんてなさそうだから、まずあのカツオに似た魚で鰹節作るところから始めるべきだろう。

何年先になるのかわかんない壮大な計画だわ。

そんなことを考えていたから、私は後々まで不可思議な夢のことなんかすっかりと忘れていた。

あの夢に、私の将来全部がかかっていたことなんて知る術もなくで。

干し草とお別れ

気になることは多々あれど、メモ帳もないから覚えてられることが少なくて、というか毎日がサバイバル過ぎてプチ混乱した状態で私の旅は始まった。なんだか最初から先行き悪い。

そんな旅の中で、今まで謎だった俊藍の胡散臭さが増してきた気がする。

渡された皮の靴は丈夫で少し重たい気もしたけど、山の中をダイモンに連れられて（ダイモンは時々気遣うみたいに立ち止まってくれるのだ）歩くとそうでもない。

俊藍は、ダイモンの背中に乗ってもいいと言ってくれたけど、ダイモンは私たちの荷物をすでに背負っている。これ以上負担をかけるわけにもいかない。

そういうわけで、私のペースに合わせて行程を進めることになった。

落葉樹の多い森に道らしい道はない。俊藍が時々見ている地図には、この地図を書いた人が作ったらしい休憩所みたいなのところが書いてあるだけだ。だから、俊藍は時折、太陽で方角を確かめながら歩いているようだった。なんてサバイバル。

歩いている間にも、痛み止めの薬草とか、薬の煎じ方とか教えてもらう。

そんな話をしながら、俊藍は私が歩きやすいように草を除けたり邪魔な小枝を鉋で切ったり、石を脇に退けたり。器用なことこの上ない。そんなことしながら、私を追いかけているであろうチンピラ達のことも考えているようだった。

分かってたけど、この人、頭がいい。それもとんでもなく。

幾つかの休憩所を通過して、ようやく次の町についたときにはすでに夕暮れが終わりかけだった。

前の町よりも少し小さな印象の町の宿屋は、一階が食堂で二階が宿屋の造りになっていてB&Amp;Bみたいだ。ダイモンを預かってくれるから、それなりに大きい。

夜の食堂は老若男女いたけど、子供は居なくてどっちかっていうと酒場の雰囲気。

大人の社交場よろしくお酒飲んでる人がほとんど。

私が物欲しそうな顔をしたら、俊藍は保護者らしく甘いジュースを頼んでくれた。ここでパパと呼ばれてヒンシユク買いたいのかこのエセ親父。病み上がりの身なので、大人しく彼の影で運ばれてきた豆のスープとナンとサラダを食べることにした。

なんで影なのかっていうと、俊藍が勝手に私を店の奥のテーブルに押しやったのだ。そんなに私と食べるの嫌なら私一人で部屋で食べてるから一人で食べろよ。でも俊藍と一緒に食べたがる理由がここにきてようやく分かった。

テーブルは五人掛けだから二人だと当然席は余ってる。そこにゆったりと腰かけてきたのは、大胆なスリット入ったチャリム姿の亜麻色の髪のお姉さん。技術の粋を集めたお化粧の顔で妖艶に微笑んで、

「今晩いかが？」

本当は俊藍に色々話しかけてたんだけど（どこからきたのとかアナタみたいな人珍しいとか）お姉さんの言葉は要はこういうことで。

う、おおおお！ 聞いたこっちが何故だか興奮してきた！ 行っ

ちやう？ 行っちゃうのか俊藍！ 男だろ！

「いや、妻がいる」

と、俊藍は澄ました顔で中学生よろしく興味津津だった私を指さした。

いや、あなた、ちょっと待てええええええ！ 違うだろ！ あんたホントに男！？

妖艶な美女の方も、

「それなら仕方ないわね」

て、あっさり私の方になっこり微笑んで他に行っちゃうし！
見送った俊藍を問い詰めることもできず、仕方なく部屋に戻ってから（節約のため同じ部屋）さりげなく問うてみた。

「大丈夫なんですか」

不肖ながら弟が居るワタクシ。あいつも何だか年頃の頃はそれなりにそれなりだった。（察していただきたい）さすがにお姉ちゃんをそういう目で見ることにはなかったが、カノジヨが出来た今では週一でそれなりらしい。万年独り身の私を散々バカにして色んな余計なことを教えてくれたものだ。ああ、アイツ、あの可愛いカノジヨ泣かせてないかな。

涼しい顔の俊藍は私をじっと見て、ふっと溜息をついた。わざとらしくてちょっと腹が立つんですけど？

「ここまで警戒されなければ、襲う気も失せるな」

ツインの部屋には籐みたいなツルで編んだベッドに布団をのつけた寝台が二つあって、他はチェストにランプが置いてあるだけだ。寝台の一つに俊藍は寝転がって大きく伸びをした。床にはふかふかの手縫いらしい絨毯が敷いてあってフローリングはギシギシいわないし暖かい。今晚は火の番をしなくていいから、彼もゆっくり眠れるだろう。じゃなくて。

「何言ってるんですか！ あんな美女に声をかけていただいておいて！」

男としてどうなのかと問うているんですよこちら！

いきり立つ私を涅槃のポーズで見上げた俊藍は、涼しい顔でこう告げた。

「繁殖期がまだ来ない」

俊藍いわく、狼になりかけていた影響で、あの動物特有の繁殖期というやつがあるそうで。

——体よくあしらわれたような気もする。

実際、俊藍はよくモテる。

街を歩けば、女の子に振り向かれるのは当たり前で、店に入れば女性店員が寄ってくるし、声をかけようものなら物凄い勢いでモーションかけられる。でもそこまでだ。この朴念仁はそんな秋波に見向きもしないで、まるで空気の如く受け流すのだから色男としては落第点だ。歩く十八禁のウィリアムさんを見習えとは言わないが（

あの人はきつと女性関係ただれてる）そこそのあしらいをしても良いのではないかと思う。が、俊藍の無視っぷりは、余計な期待や羨望を極力受けないようにする、美形なりの処世術のような氣もした。

だが、世の中無視されて引き下がる女性ばかりであろうはずもなく。

そこで私が登場するらしい。

繁殖期話が出て以来、二、三の街に泊まったが、必ず自信に充ち溢れた美女からお声がかかると決まって私を引きあいに出して「妻だ」と紹介してくださる。中には睨んでくる美女も居て、正直迷惑だ。美女には可愛がられたい。

しかし、のんびりとはいえ、決して楽ではない旅の途中で美女に癒してもらおうという気にはなれないのか。

たまに私以外と話している思えば、酒場の酔っ払い達と賭け札（花札みたいなものだ）に興じていたりする。

彼は、女だけではなく同性からも好かれた。老いも若きも、彼を嫌う人はあまり居ない。

長い黒髪に蒼い冴えた双眸は、俊藍を神秘的に見せはするが、彼が喋ると途端に魅力を発揮する。

それはオーラのようなものでもあったし、彼の生まれながらの性質に見えた。

人を寄せ、この人でなければと思わせる何か。

一種のカリスマのようなものだ。

この人は、多くの人を従わせる人だ。

その外見から、威圧的でさえある雰囲気から、そして人を信じさせる何かから。

いったい何者なのか。

その疑問をより一層深める事態に、私は巻き込まれてしまった。

小さな町の小さな宿屋を幾つか泊まって、広い街道に出た。

街道といっても人通りはなく、いつものようにダイモンに連れられてぼくぼくと歩いていた。

そんな街道の脇の林から、ざざっとマントに身を包んだ人たちが駆け出してきたかと思えば、あっという間に私たちを取り囲む。

出会った頃の俊藍みたいに、お代官様のように顔までマントで隠しているが、暗い色した衣装の下から鞆の先が覗いている。

立ち往生したダイモンと私を守るように、俊藍は自分の体を斜めに構えて前へ出た。

その様子には私はぎくりとする。

旅の中で、何も無かったわけじゃない。

酔っ払いにケンカを吹っ掛けられる時もあるれば、チンピラに肩がぶつかったとインネンつけられる時だってある。

そんなとき、いつだって俊藍が私の前に出たが、そんな時でさえ腰の剣の柄に手をかけることさえしなかったのだ。

幾ら相手がナイフを抜こうが、剣を抜こうが、いつも俊藍は素手で相手を地面に沈めた。そして沈めた後は、時と場合によっては苦笑しながら駄賃さえやるのだ。

そんな俊藍が、今は始めから腰の剣の、手入れのされた剣の柄に手をかけている。

彼が剣の手入れを欠かさないのは知っていた。

それは、火の番をしている時であったり、宿屋で眠る直前だったり。

あれが決して飾りではないことを知っていた。

けれど、私にとっては、あの剣は彼の心の象徴のような気もして、少なくとも私との旅の中で剣を抜くことはないと思っていた。

「――お探し申しあげておりました」

マントの一人が男の声で呟くように言った。

「ご無事のご帰還、祝着にございます」

俊藍は応えない。

代わりに、剣の柄をゆっくりと撫でる。

そういえば、彼がその黒い手袋を外した所を見たことがない。

「さぞお疲れでございましょう。ゆっくりと御休みくださいませ」

キン！

甲高い音が街道に響き渡る。

いつの間にか抜かれた俊藍の剣が鈍く銀色に光った。マントが抜いた剣を彼が弾いたのだ。

私はダイモンと一緒にになって竦み上がる体を寄せ合うことしか出来ない。

「乗れ！」

俊藍の今まで聞いたこともない透る声に沈みかけた意識を呼び起

こされて、私はダイモンにくくりつけてある荷物からよじ登って飛び乗った。ダイモンは嫌だったろうに、嫌な声一つ上げずに私を乗せるとすぐに走りだせるように足をかがめる。頭のいい子だ。

その間にも俊藍は斬りかかってくるマントを斬り払っては遠ざけ、

「行け！」

マントの一人を片手で掴み上げながら、ダイモンの背を叩いた。

咄嗟のことに私は手綱を握ることしか出来ず、走り出したダイモンの背にしがみ付きながら、マント達に斬りかかられている俊藍の姿を振り返る。何人いるんだかわかんないけど、寄ってたかって卑怯だぞ！

しかし、私の後をマントの二人組が追いかけてきた。

一人は剣を構えて、もう一人は、短い杖のようなものを持っているが様子がおかしい。

走りながら空中に人差し指で円を描いたかと思うと、杖で円の真ん中を突き刺す。

そうして現れたのは、光の球。球は空中に漂うのではなく、猛スピードでこちらに迫ってくる！

当たったら痛いじゃ済まない気がします。

ぎゃああああ！　これ、あれですか！　魔法ってやつ！？

ギューン！　とダイモンがナイスタイミングで避けると私の顔の横を目にもとまらぬ速さで通り過ぎていった。

駄目だ、当たると死ぬ！

ダイモンを上手く操ることなんか出来ない。だって俊藍から習っ

たのはダイモンの餌やりと乗ったらとりあえず手綱を放さないってことだけだ。

それでもダイモンは走る。

危機回避の本能が働いているからだだろうけど、それは私にもありがたい。がんばって！

騎竜の足に、普通の人間じゃ敵わない。後ろについてきている二人は普通じゃないんだだろうけど、スタミナが尽きかけることはわかってる。死ぬつもりは全然ないけど、俊藍からせめて二人だけでも引き離せるなら。

光の球の攻撃は続いていて、ダイモンが避けながら走っているからあとはダイモンの頑張りにかかっている。あとでたくさん餌あげるからね！

でも、この荷物は重いだろう。

外してやるべきかもしれない。

無謀だとは思ったけど、手綱を片手に私は荷物をくくりつけている紐に手をかけた。

いつも俊藍がくくりつけているから、結び目はしっかりしていて、しかも今は初心者マーク付きの車の助手席真っ青の爆走騎竜の鞍の上。

それでもなんとか外してあげたい。私っていう荷物をもう背中に乗っけてるんだしね。

けれど、予想以上に結び目は硬くて、

「イタッ！」

舌を噛みそうになりながら、思わず叫んでしまった。苦手な人は申し訳ないけど、うっかり生爪はがれそうになりました。現代人の手は弱い。

思わぬ痛みに油断して、私は手綱を放してしまったらしい。

あっと思った時には、私はダイモンの背から放り出されていた。

咄嗟に体を丸めたけれど、地面に落ちる瞬間は息が止まる。

背中も痛い。手も痛い。

でも、大分離れていたはずの追いかけてきた二人組の気配が迫っている。

涙が出そうになるのをこらえて、身を起こすとダイモンがこちらに戻ってきてしまっている。

やめて。

叫びたいのに、背中を打ったからか声が出なかった。

やめて、走って、逃げて！

枯れた声もどかしい。

ダイモンは小走りにこちらに戻ってくると、心配そうに私に長い首を降ろしかける。

なんて優しい子なの。

だから。

「逃げ…っ！」

やっと声がまともに出た。

けれど、

ジュ！

肉の焦げるような匂いが目の前を通り過ぎた。

光の軌跡は私の頬をかすめて、目の前のダイモンの足を貫いた。

ダイモンは声を上げなかった。

この子は滅多に声を上げない。

大人しくて、とても優しい。

頭を撫でると嬉しそうに喉を鳴らすだけで。

ダイモンの足から青い血が流れている。その飛び散った血を見ながら、私は何も出来ずにただ息を呑む。

何も考えられなくて、どおっと荷物と一緒に倒れたダイモンに走り寄る。

「ダイモン、ダイモン…っ！」

ごめんなさい。ごめんなさい！

私が、私のせいだ！

半分以上パニックを起こした私は、すぐ後ろで剣と杖を構えた二人のことなんて知らなかった。

だから、ダイモンが低く喉を鳴らしてくれなかったら、振り向くことさえ出来なかっただろう。

でも、すぐに振り向いたことを後悔した。

私に向かって剣と杖を振り上げていた二人は、何かに気がついたように、私を放って踵を返す。

けれど、剣を持っていた一人は、構えた剣ごと横薙ぎに斬られ、更には斬られた腹を蹴り飛ばされた。

咄嗟に杖を構えて、何やら呪文を唱え始めていた一人は、その返す剣で頭から斬られてその場で膝をつく。

凶刃を持ったその人は、ふっと息をついたが、後ろも振り返らずに小さく呟いた。

「燃えろ」

すると、その場で斬られた人も、蹴られた人も、そしてその人の後ろに居たであろう人からも火の気なんて何もないというのに火柱に包まれ、あっという間に燃え上がる。

その火柱も、私が呆然する間に消え失せ、あとには、彼らが身につけていたのだろう剣や装飾品だけが黒い灰の中に残った。

きつと一時間も経っていない。

そんな短い時間に、ここに居たはずの人の大半が灰になってしまった。

ダイモンの隣で座り込む私を、血濡れた顔でその人はいつものように口を開く。

「大丈夫か。葉子」

黒髪の、冴えた蒼い瞳が私を見下ろしている。その顔には見慣れない赤いものが飛び散って、それは服にも続いている。手に持った剣からは、それが未だに流れ落ちていた。それはきつと、彼のものではないのだろう。

感情の起伏が薄い顔で、彼は私を観察し、そしてダイモンに視線をやって、目を細めた。

「ダイモン、大丈夫だよね…？ 俊藍」

何も言わない俊藍に不安になって尋ねた。尋ねずにはいられなかった。

俊藍には珍しく一呼吸おいて、彼はまっすぐ私を見た。

「駄目だ。助からない」

私は、思わず立ちあがって俊藍の服を掴む。それでも俊藍はひどく硬い声で続ける。

「騎竜は歩けなくなったら上手く呼吸ができなくなる。———この怪我では、満足に歩くことすらできないだろう」

だくだくと流れる血を、私は駆け寄って手でふさぐ。止まらない。

どうやったら止まるんだろう。

どうして、どうして、私は、こんなに役立たずなの。

「クウ」

顔を上げたら、ダイモンが長い首をめぐらせて私を見ている。

「クウ」

ダイモンの鳴き声を聞いたのは、初めてだった。

こちらを眺める猫目の金色の瞳は、不思議そうでもあり、自分の行く末を知っているかのようでもあった。

たまらなくなつて長い首に抱きついたら、ダイモンは心配するよう
うに私の頬に頭を寄せる。

この、心配性。

「葉子」

俊藍が、私の隣で剣を握った。

ダイモンはきつと呼吸が苦しいはず。

ごめんね。

私はダイモンの頭を撫でながら、目を閉じた。

俊藍の剣が振り上げられるのを感じた。

それは、一瞬で、息を止めた。

すぐに、ぐったりとなった頭を撫でてやると、まだ喉を鳴らすの
ではないかと錯覚に襲われる。

でも、もう、ダイモンは動かない。

金色の目を閉じてやって、そっと地面に横たえる。

剣を払って鞘に収めた俊藍が、ダイモンから荷物を外した。

ああ、やっと軽くなったね。

離れていると言われて、荷物と一緒にダイモンから離れると俊藍は剣を抜き放って地面に突き立てる。

「この者の魂に安息あれ」

短い、だが朗々とした声。

俊藍が手をかざすと、ダイモンの体は炎に包まれた。

私は、他に方法が思いつかなくて、荷物の中からいつもダイモンにやっていた干し草を取り出した。

炎に駆け寄って、干し草を火の中に放り込む。

俊藍は不思議そうな顔をしていたけど、私は目を閉じて手を合わせた。

もしも天国があるのなら、どうか元気で。

五分も経たず灰になってしまったダイモンの体は、骨も残っていない。

灰を集めて、街道の脇の草地に埋めてやる。

「どうして、干し草を火の中に入れたんだ？」

私の様子を静かに見ていた俊藍が、振り返った私を見下ろしてきた。

「ダイヤモンドのお腹が空くといけないでしょ？」

故人の好きだったものを棺に入れる習慣はこちらには無いのだからか。

俊藍は、そうかと言ってひどく優しい瞳でダイヤモンドの小さなお墓を見た。

私が変わだというのなら、俊藍だって十分普通じゃない。

だってマント達にやったのと違って、ダイヤモンドの弔いは、すごく丁寧なものだった。

目には目を、敬意には敬意を。

俊藍は淡泊に見えて実はものすごくわかりやすい行動理念を持っている。

この人は、優しいけれど、誇り高くて、迷わない人だ。

いつの間にか顔中を流れていた涙を、私はごしごしと拭った。

早くしゃんとしないと、ダイヤモンドに心配されるからね。

抱擁と炎

街道を外れた森の中で、休憩所を見つけると、私たちは火をおこすことにした。

私だってもう慣れたものだ。薪を集めることから手伝おうとしたけど、俊藍に止められた。

あんまり見たくないけど私の手は血塗れ。今更ながら、鈍い痛みがじんじんとやってきていて確かに動かすのは億劫だ。

手際よく火をおこすと（今度は手放しじゃなくて火打ち石で）俊藍は私に手を出せと言ってきた。

私の手は、自分の血とダイヤモンドの青い血が混ざって青黒くなってしまうている。

俊藍は少し湿らせた手拭いで私の指先から丁寧な血を拭うと、貝の入れ物（本物の貝なんだよ）から赤い塗り薬を取り出して塗りつけていく。裂いた布を当てて余った手拭いで私の指を一つ一つ巻いていって、最終的に私の手はぐるぐる巻きにされてしまった。

これじゃスプーンぐらいしか掴めない。

不満顔で俊藍を見上げると、彼は苦笑して湿らせた手拭いで私の頬を拭った。

「もしかしたら、今晚、熱が出るかもしれない」

熱冷ましの薬草を探すついでに、自分は水浴びをしてくる言つて、俊藍は珍しく一人で森の奥へと入っていった。

こういう時、たいてい私を連れていくのに。

マントを残していったので、私は荷物の箱と一緒にくるまっていることにした。

俊藍は、きつと自分から漂う血の匂いを消しに行っただろう。

それをいっただら私も相当なものだと思うけど、俊藍は私の非じゃない。人間の血の匂いだ。

マントの数を数えてなんかいらなかったけれど、彼らが逃げる様子は全くなかった。

当然だ。多勢無勢で斬りかかっていたんだから、誰かが彼を殺せると思ったのだろう。

そう、俊藍は、明らかに命を狙われていた。

それも、何の関係もないようなダイモンにさえ容赦を与えないほど、執拗に。

そんなマント達を、俊藍は一人で。

いったい、何者なんだ。

心の中で繰り返す問いを、私は俊藍に尋ねることができなかった。人が殺されるなんて、私の暮らしていた日常ではありえなかったもののな。

こんな状況で、いとも簡単に人の命を奪ってきた俊藍を、私は怖いと思えない。

状況に私が慣れつつあるのか、いわゆるストックホルム症候群というやつなのか。

自分のことなので、判断がつかない。

分かるのは、俊藍が私を助けてくれて、ダイモンは私のせいで死んで、私は結局役立たずだっていうことだけ。

そういえば、俊藍、水浴びに行ったけど、手拭いとか着替えは持っていないでなかったはずだ。

私は気分を入れ替えるために、荷物の中を漁って彼の着替えと新

しい手拭いを探しだした。

ここで悩んでいても仕方ない。

ダイモンは戻ってこないし、私が急に才能を開花させるわけでもない。

まずは着替えを持っていこうか。

でも荷物をここに置いていくのは心もとない。

干し草がなくなった分、他の荷物は休みながらであれば私でも抱えられそう。

私は羽織っていたマントをばっと広げてくるめそうなものはマントに包んで泥棒の風呂敷みたいに背負った。

箱と言ってもツタで編んでる昔のこうりみたいなものだから荷物が入っていても軽くて、ぐるぐる巻きの手だって持てる。

私は火の始末をしてから、荷物を担いでえっちらおっちら俊藍が歩いていった方向に歩き出す。

森は、林といっても良いほどで、視界も道も良好だった。

明るい方向へ歩いていくと、ざあざあと水の流れる音が聞こえてきた。

音を目指して歩くと、滝に近い清流の岩場が見えてくる。

岸部に着く頃には息が切れていたけれど、俊藍の姿を見つけて思わず息を呑んだ。

深いところに静かに浸かっている体は、鋼のように鍛えられていることが遠目でも分かる。

腰まで水に浸しているので長い髪が水面に広がり、筋肉が無駄なくついたその背中には、大きな傷が斜めに走っていた。

古い傷だと分かったが、生々しい傷痕に私は目のやり場に困った。

「俊藍」

声をかけると、彼は驚いたようにこちらを振り返る。

頼むから水から上がるなよ。

近くの岩場に服が畳んで置かれている。

剣は、水の中でも携えていたようだ。一瞬、構えようとして、私と見とめて鞆をまた下げたから。

「着替え、持っていかなかったでしょ」

「……なぜ来た」

今日は珍しいことだらけだ。

俊藍が不機嫌に声を低くすることなんて、滅多にない。

私は答えることが出来なかった。

自分が淋しかったわけでも、ダイモンのことを悼む時間が苦しかったわけでもなかったのに。

どうして、俊藍の着替えなんてことが気になったんだろう。

改めて不思議に思ったけれど、私は俊藍の服の上に新しい着替えを置いた。

俊藍は私をじっと見ていたかと思うと、自分で手当てした私の手を掴んだ。

「痛い」

まだ治ったわけじゃないのに。私が顔を歪めても、俊藍は力を緩めようとはしなかった。

いつもと違う。

いつもは湖面のように揺らがない蒼の瞳が、今は嵐に煽られてい

るかのように波打っている。

治まらない痛みに誘われるように、私は俊藍の手に手袋がないことに気がついた。

大きな、骨ばった右手の甲に、描かれたのか、彫られているのか、不思議な文字が刻まれている。

私の視線を感じたのか、俊藍は目を細めた。

それが自嘲なのか、苦悶なのか、色々な感情を籠めたように唇の端を上げる。

「俺の、呪いだ」

えっと顔を見つめると、彼は歪んだ苦笑を強める。

俊藍の呪いは、もう解けたはずじゃなかったのか。

「この呪いは、俺が生来持っているもので、炎の呪いがかけられている」

その呪いの証が、この手の甲のしるし。

「目に映るもの、俺の本能に従って炎がおこる」

俊藍はもう片方の手を差し出して、左右揃えて見せてくれた。左手には複雑な模様が彫られている。

「こちらはこの呪いを制御するために俺が生まれてから彫られた魔術だ。これのお陰で、俺は自分の意思で火を操ることが出来る」

すでに肌に馴染んでいる様子の彫り物は、その歳月を思わせる。私はいつの間にかその差し出された両手を持って見つめていた。

「この国で、こう言った呪いを受けて生まれる子供は神の子と呼ばれるが、魔術とは違って本能と直結した力だから忌み嫌われることが多い」

私に魔術と、そういう超能力との違いは分からない。
分からないが、

「俺は、生まれてくるときに、この力で産みの母を殺した」

俊藍がこの力を厭んで、憎んで、それでも足りないことは感じた。

怖い人だ。

自分が憎いなんて。

いったい、誰が俊藍を赦すというのだろう。

悲しくなって、俊藍の手を握り締める。

「葉子」

顔を上げると、いつかのように唇を貪られた。

水の中に引き込まれそうになって、もつと悲しくなる。

俊藍は、こんなものが欲しいわけじゃないのに。

私は、無理矢理に唇をかわして、勢いよく俊藍の首に抱きついた。

水が跳ねる。

俊藍の素肌がびくりと怯んだ。

どくんどくと、鼓動が聞こえる。

しがみついていると、何かが川の底に沈んでいく。

俊藍の剣だ。

冷たい手が私の首を怯えるようになぞった。

そして、そっと、まるで問いかけるように私の背中に腕を回す。

じんわりと、彼の体が温まってくるのを感じた。

それは決して熱ではなく、まるで自分の体が帰ってきたような心地がした。

まるで違う世界から、全く違う環境で、性別も何もかも違うというのに、欠けていた心の一部がパズルの正解をはめ込んだように、ピースがぴったりと吸いついて、何もかもが満たされる。

ああ、これは、恋じゃない。

今まで感じたこともない充足感に、私は圧倒された。

欲しいでも、与えるでも、愛しいでもない。

私は、この異世界で、自分の片割れを見つけたのだ。

彼が居れば大丈夫。

私は彼を信じるだろう。

たとえ遠くに離れても。

しばらく水辺で抱き合ったままだった。けれど、さすがに離れるとお互いの顔を見合せて、笑ってしまった。

何せ、俊藍は裸のままだ。

「戦のあとに、どうして女が必要なのか知っているか」

生命の危機を本能で感じて、高まった性欲を処理するためだ。そういう時は、本当に誰でもいいらしい。

だから、俊藍はなぜ来たと顔をしかめた。

「森で抱かれるのは嫌だと、お前が言っただろう」

この人のセクハラ癖は、ちょっと死んで治した方がいいと思う。

私は俊藍の顔に思い切り水をかけてやった。

雨と味方

夕暮れの中を、葬列がゆつくりと流れていく。

辺りは夕煙が立ち上り、その中を托鉢の僧侶と葬列が交互に道を行く。

道の脇に揃った街の人々は、朝夕欠かさず僧侶たちに米や野菜を浄財として施すのだという。

東国の宗教は一貫して、日本の八百万の神様みたいなものらしいが、この寺院が立ち並ぶヘルプストの街では厳格な宗教が根付いている。

この街では、朝に出産祝いや結婚式を行い、夕方にお葬式が行われる。それは人の人生の時間をなぞっていて、川の向こうに沈む太陽と共に、死者は焼かれて土へと還っていく。

ヘルプストの街は大きな川の真ん中の中洲にある街だ。

この長大な川をダホーといい、この川を超えたら死の山がある。この物々しい名前の山の向こうに魔女が住んでいる。

托鉢の僧侶たちが持っているハンドベルみたいな振鈴の音を宿屋の窓辺で聞きながら、私は久しぶりのツタ製の寝台にだりともたれかかる。

川を渡るまで街道は通らず、ずっと野宿で来たのだ。屋根があることがこんなにも有難いとは思わなかった。

さすがに体力馬鹿の俊藍も堪えたようで（彼は荷物のほとんどを背負っていた）いつものように同じ部屋の寝台に腰かけて一息ついている。

「ダイモン、天国に行ったかなあ」

僧侶たちに次に葬列が窓の下を通っていった。

泣く人はほとんどない。

俊藍が言うには、こちらのお葬式は宴会になるんだそう。晴れやかに故人を神様の元へ送りだして生まれ変わることを祝して。悪いことをして地獄に落ちるっていう考えはない。代わりに来世でどんなものに生まれ変わるか決まるっていうことで。前世の行いが悪ければ、この世でろくでもないことに巻き込まれるとか。

……いやいや、いくら私が運悪いって言っても、私、小市民だから。せいぜい小さい時に弟泣かしたぐらいですからね。

いや、前世の行いが……？

いやいやいや！ どこまでいっても私だからね！ そんな、大それたこと出来るわけが、…ねえ？

「ダイモンは、賢い奴だったからな」

きっと良い生まれ変わり先になるだろう、って俊藍は笑った。
就職先みたいだな。

でも、

「そうだね。ダイモンの望むように、素敵な所に生まれるといいね」

そして素敵な人生を。

少なくとも、お腹なんて空かない所がいいよね。

「そうだな」

静かに俊藍の声が降ってきて、顎を手袋の指が持ちあげてくる。

そうして、ゆっくりと口づけられる。

時々、本当に時々、俊藍はこうして唇を求めてくる。

それは、私のことを知りたいというのではなく、まるで自分の存在を確認するように。

そして、キス以上のことは求めなかった。

俊藍の方も物足りないということは無いようで、唇を放すと満足そうに目を細める。

別れが近い。

その距離を埋めるかのように、唇を合わせている。

きつと、私たちはこれでいいのだ。

今日の宿には銭湯がついていて、夕食前にひとつ風呂浴びることができた。

本日の夕食は、豚足みたいな角煮をとろとろに煮た煮物とさっぱりした野菜のスープ。それから雑穀蒸したおにぎりみたいなお饅頭。それからそれから！ なんと！ 味噌があっただんですよこれが！

内容は知らないんだけど肉と合わせた肉味噌とおにぎりセットになっててお好みでつけて食べるんだそう。でも風味はちよつと魚臭い。そういやここは川なのに、魚は食べないのかな。お店のお姉さんに聞いたら、川の魚はみんな肉食で、臭みが強いからこうやって身を味噌に漬けて食べるしか出来ないんだそう。

異世界、奥が深い。

宗教色の強い街らしく、夜はお酒は出ないしお店も早く閉まってしまう。だから、俊藍と食事したら早々に部屋に戻った。

いつもの町じゃあ、酒場の時間にご飯食べてたりしたから結構遅くまでのんびりしてたから、今日はちよつと時間の感覚が抜けている感じがする。

というか、俊藍と二つの寝台で向かい合って座るっていうのが、何だか何とも言えない。お互いお風呂上がりだっていうのも何とも。

「今日はこちらで寝るか？」

腕を広げるなこのセクハラ親父。

見た目美形のくせしてどうして口を開くと残念なんだ！ バランス考えてよ！ バランスを！

睨む私を笑いながら、無駄な美形さまは乾いた髪を見憶えのある飾り紐でくくる。

「気に入ったの？ その紐」

「ああ」

俊藍は珍しく素直に嬉しそうな顔で笑った。いつもは人を小馬鹿にした笑いか、パパみたいな慈愛に充ちた微笑みだ。

あの飾り紐は安物ではないけれど、高いものでもない。

寄った町で少しづつギルドからお金を出して、街の物価を見てるから近頃そういう目もついてきた。

今日の宿は中の上ぐらい。結局、俊藍が払っちゃったけど。

前に、チンピラ達から逃げるのに使った衣装は次の次の町ぐらいで売っぱらってやったよ。高く売れました。お化粧品は仕方ないから私が持ってるんだけど、つける機会はこの上もなく無い。

ともあれ、自分の買った物が気に入ってもらえるのは素直に嬉しい。

「葉子は、俺の買ったかんざしを何時つけてくれるんだ？」

アンタは買い過ぎなんですよ。

立ち寄る街で、いつも高い着物やら腕輪やら買おうとするから止めるのに苦労する。妥協したのが、箱に入ってたままの繊細な装飾の

ついたかんざしだ。ちょうど、肩までぐらいしかない私の髪をまとめてアップにするのにちょうどいい大きさの。

幾らしたと思いますか。

金の棒二本ですよ！ 金二本！

旅に必要な食糧、一週間分が買えておつりがくる！

でも、いいお金になりそうだから大切にしてる。

いえいえ！ 人から貰った物をそんな……。…派手派手白チャリムドレスを売ったのは旅における効率化です。

俊藍とくだらない話をして久しぶりの布団で寝た。

目覚めたら、川を越えて死の山に入る。

死の山を越えたら、俊藍とはお別れになる。

翌朝はまだ日も昇らないうちに起きて、支度を済ませて宿を出た。船頭さんだってまだ寝ぼけているだろうと思っていたら、すでに市場が開かれていて、早朝に運ばれてきた品物が溢れている。

私たちはそこで持てるだけの食糧を買って川を渡る船を探した。

死の山に行くと言うと、中年の船頭さんは少し驚いたが、今は乾期だからまだマシだと言って快く渡してくれた。

死の山は、珍しい薬草の宝庫で、大陸の薬屋が貴重な薬草を求めて時折やってくるのだそうだ。

この、物々しい山の名前の由来は、私は身を持って知ることになった。

今までの森も道なんてなかったけど、ここは人を寄せ付けないという表現がぴったりくる。

大木と深い緑が生い茂り、出口どころか入口さえ何所か分からない未踏の地だ。

ここが、なぜ死の山なのかというと、ここには食糧となるものが水しか無いからだ。

青々と茂る草も木の実どころか木の皮でさえ、すべて有害な毒を含んでいて、食べられるものなど何もない。だから動物の姿はなく、川に魚の姿さえない。唯一、口に出来るものは地図に記された湧水だけで、川も湖も毒を含んでいて飲めるものではない。

そんな土地にどうして薬草があるのかというと、その毒草こそが薬となる貴重な薬草で、市場に流せばひと財産になるという。難しい調査をしてまで、この山の毒草を飲もうとした先人に献杯だ。

今は乾期だからマシだといった船頭さんによると、未開の地だから下手に水の多い雨期に山へ入ると毒水のとっぼう水や洪水に襲われることがあるからだそうだ。くわばらくわばら。

雨期ではないっていうけれど、わずかに人が通れる岩場の滑ることと滑ること。

ただでさえ歩きにくい岩の上に苔がむしむししてて、油断すると滑って転んでひどいことになる。

弱り目に祟り目とはこのことで、山の天候は変わりやすい。

案の定、晴れていたはずの空に雲が出てきたなーっと思ったら一気に雨粒が降ってきた。痛い痛い！

俊藍に助けってもらいながら、雨宿りできる場所を探してさまよって、ようやく岩のくぼみを見つけた頃には二人ともずぶ濡れだった。くぼみの近くのまだ湿り気がマシな薪や枯れ葉を拾って火をおこ

そうとするけど、無理。

でもこのままじゃ、風邪ひくどころか低体温症とかヤバイ状態になりそう。

すると、俊藍がふいに手を差し出して「燃えろ」と一言。

……そういや、この人、こういう特殊技あるんじゃない！

こういう時、問答無用の発火能力は便利だ。

濡れた服をお互い背を向けて脱いで、着替えたら人心地ついた。普通、ここで肌と肌で温めようとかそういう展開になりそうじゃない？ 俊藍はそれでもいいみたいだったけど、私は嫌だ。誰が自分のドッペルゲンガーのような男と一夜のアヤマチ犯したいものか。少なくとも私はナシ。

断ったら、顎を取られてしまった。

唇を開かされて、舌を絡めとられる。

「ふ…あ…っ」

まるで交換するような行為にまだ慣れない。それが面白いのか俊藍はゆっくりと口の中を這う。

焦らすような、誘うような動きに私の目尻から涙が落ちた。

さすがに、山道を歩いてきて雨に振られて疲れきっているのに、息がろくに続かない状態は正直きつい。

「んあ…あ…」

猫が喉を鳴らすような声が漏れるだけだったが、私は俊藍の服を掴んだ。するとゆっくりと唇が放れていく。助かった。

着替えたとはいえ、まだ冷えている私の体を温めるように俊藍は

そっと抱き締めてくる。

まあ、これならじきに二人の体温で暖かくなるだろう。
雨はまだ止む気配すらない。

俊藍の規則正しい鼓動が心地よかった。

異性で抱き合っているという感覚はない。

むしろこのままで居たいと思った。

だから、俊藍が私とは別の生き物だということに、悲しくなる。
幾ら同じでも、考え方が違えば別の生き物だ。

「——このまま、お前が俺の中に溶ければいいのに」

大きな手が私の背中をさまよって、離さないというように私を深く抱きこむ。

けれど、そうして私が彼の中に溶けるというわけじゃない。

たとえ体を繋げても、本当に一つになるわけじゃない。

たとえ、俊藍の炎の能力で私を溶かしてしまっても、私は灰になるだけだ。

それが、無性に悲しかった。

「本当に、俺と共にはいられないのか……？」

絞り出すように、俊藍の声が降ってくる。

本当は、俊藍が居なければ私は心細くて寄る辺のない子供みたいになってしまう。

でも、一緒に居ても、彼とは何も生まれない。

きっと、俊藍と居れば、私は幸せになれるだろう。

けれど、一緒に居るだけの幸せで、何かが生まれるだろうか。

俊藍は私の、私は俊藍の、欠けた心を戻しただけだ。

今までの、欠けたままでの歩みを、きつと止めてしまうだろう。

決して楽ではなかった。

俊藍だって同じだ。

彼は私以上の苦痛を味わってきただろう。

でも、それでも、何も無かったわけではないはずだ。

「私は、あなたを愛せるけれど、それは必要だから出来ることであって、私の望みじゃない」

愛しいことと、愛せることはたぶん違う。

俊藍も、同じだろう。

私が必要だから愛せるだけだ。

「でも、私は、あなたの一番の味方だと思う」

誰が俊藍を信じなくても、私は最後まで信じられる。

それは、何の確信もなかったけれど、自信があった。

たとえこの人に殺されたとしても、私は信じているだろうから。

俊藍が欲しいのは、私じゃない。

絶対の味方だ。

何があっても裏切らないで、時には自分を怒ってくれさえする心の味方。

俊藍は、私の首筋に頭を埋めた。

小さく震える広い肩になだめるように手をかけて、私も彼の首に額をつける。

雨だれの音に耳を傾けて、ただ静かに私は目を閉じた。

魔女と間抜け

雨が上がった頃には、すでに日が沈みかけていて、岩のくぼみで一晩明かすことになった。

少ない水で雑穀スープを食べるとようやく体が落ち着いたような気がした。

「ねえ、俊藍。朝よ」

同じマントにくるまっていたので私を抱きこんでいる俊藍の頬をぺちぺちと叩く。

服着てますからね。ええ。

何もございませんとも！

しかしここまで同禽やらやかして何もないと自分の女としての性に疑問を感じないこともないです。

まあいい。王子様は見つけるものだ。（あれ？ 何か違う夢になっ
てきてる？）

俊藍の方は何とも本日の青空のように晴れ晴れとしています。

何だか今まで危うかった何かが取れたような顔だ。

こっちまで嬉しくなるから照れくさい。なんだこの中学生日記みたいな状態。

朝食を手早くとって（いつかのナンとヨーグルト方式サンドイッチ）私たちはくぼみを後にして、山を進んだ。

太陽の方角見るのも地図見るのも俊藍なんだけど、私はひたすら

安全第一で歩くことに専念しております。

何せ、わたくし運が悪いことにかけてはピカイチです。

……と、調子乗ってたわけじゃないのに！

岩で足を滑らせました。ごめんなさい！

捻挫しました。

俊藍は私背負って荷物まで背負うはめに。

私の馬鹿！ 間抜け！

泣きたい気分だったのに、俊藍はなぜか軽々と山を進みます。心なしか、私と歩いていた時よりもペースが速いような気も。

「お前と一緒に歩いていたからな」

ということは、私のペースに合わせていたってことでしょうかね！それはお急ぎのところまことに申し訳ないッ！

怪我に対する私の罵倒がそのままそっくり自分に返ってきましたよ。

でも、時間は私と歩いていた時の半分で山を下ってしまいました。……ホントすんません…。

日差しが赤味を増してきた頃、私たちは針葉樹の森に入った。

とげとげした落ち葉が辺り一面を覆っていたけれど、奇麗に落ち葉の掃かれた道が一本続いている。

柔らかい木漏れ日の中を背負われたまま行くと、森に溶け込むように山小屋が建っていた。

山小屋の重そうなドアの前で俊藍の背中から降ろしてもらうと、彼はドアをノックした。

「はいはい」

くぐもった女の人の声と一緒に、ドアは開かれた。

「まあまあ。遠いところからよくいらしたわね」

現れたのは、にこにことした、ふくよかなおばちゃんだった。

白髪混じりの髪を奇麗に結いあげて、簡素なチャリムを着て上品に微笑んでいる。

髪の色は鮮やかなオレンジ色だった。その瞳は、明るい夕焼けのような金色。

「お久しぶりです」

俊藍は、いつもより硬い声で言って軽く会釈した。

おばちゃんはにっこり笑って、

「元に戻れたのね」

微笑んではいるものの、少し憐れみを滲ませた声で言った。

「お話にあったのは、そちらのお嬢さんね」

優しく微笑みかけられたものの、私は奇妙な違和感を感じて少し黙ってしまう。

なぜか、私が責められているような。

私が何も返さないことに目を細めて、おばちゃんはゆっくりと肯いた。

「ようこそ。異世界から」

おばちゃんは微笑みに何かを隠したまま続けた。

「私は、エバ。人からは、東の果ての魔女と呼ばれているわ」

一方的な自己紹介も、不自然な悪意も、この世界に来てからさらされっぱなしだけれど。

自分にいわれのない事で嫌われるのは、やっぱり慣れない。

さあどうぞと誘われるまま、俊藍と私は魔女の家へと招かれた。

通されたりリビングはさっぱりと片付いていて、棚にあるのは骸骨じゃなくて薬草や果物を漬けたものやジャムの瓶だ。

暖炉はあるけど火はついていない。でも部屋の中は眠たくなるほど暖かい。

足の手当てに湿布を貼られながら尋ねたら、この家には北国の技術が取り入れられていて、家の真ん中に魔力を込めた石を置き、それで家の中を暖かくしたり、部屋を明るくしたり、オーブンを使ったり、果ては水をくみ上げたりするのだという。

魔力って、電気みたいなものなんですか。

捻挫した足に薬を塗って包帯を巻いてくれたのは俊藍だ。

エバさんは台所でお茶を入れてくれているらしい。

……まあ、俊藍が居るから毒とかは入れられたりしないよねえ？

手当てが終わってから部屋の真ん中に置かれたテーブルに湯気が漂うお茶を置かれたので、思わずじっと見てしまう。

ほら見ろ。トラウマがついちゃったじゃないか。社長め。

お茶はミルクとお茶を似たようなもので、香ばしいお茶の匂いと一緒にスパイスの香りも混じっている。チャイみたいなものか。

俊藍が飲んだのを見てから、私も飲むことにした。

「まさか、異世界からお嬢さんが来てしまうなんてね」

お茶は美味しい。体の芯まで温まるようだ。

そんな私を眺めて、エバさんは溜息をついた。

「私は、あなたの呪いが解けないとは言っていないはずよ」

今度は俊藍の方を見て呆れたように言う。

「異世界の血を引く娘など、この世界でどう捜せと言う？」

俊藍はエバさんの視線を無視してじっと自分の手を見つめた。

「あなたは神の子なのよ？　神から愛されて生まれたの。何も疎む必要も怯える必要もないわ」

確かにそうだ。言葉だけなら俊藍を肯定しているけれど、エバさんの言葉はどこか俊藍の認識と違うようだった。

「北城という一族に、一人娘がいるはずよ。彼女は異世界の血を引いている」

北城。えっと、まさか社長の親戚？　社長って確か宰相に抜擢さ

れてたよね？　じゃあ良いとこのお嬢様じゃん！　いやお嬢様か。
俊藍が何者か知らないけど、そんな簡単にお姫様とお知り合いに
なれるはずが…

「血筋も、家柄も、あなたにこれほど釣り合う娘は居ないわ」

て、えええ？

思わず俊藍を見上げた。

すると、彼は私に向かって苦笑する。

「なのにあなたは、私の言葉を信じず、この子を見つけてしまった」

うわ。今度は私にお鉢が回ってきた。なんだなんだ、一発芸でも
しろって？

「この娘は、星の巡りの外からやってきた。本当ならあなたには出
会はずじゃなかった」

魔女は私を厭うように目を細める。

ちよっと待て。ここはいつから昼ドラ劇場？　なんだかこの泥棒

猫がっとか言われそうな勢いなんだけど。

アンタは俊藍のお母様？

やばいなあ。こんなことならウィリアムさんの愛人になって悠々
自適に暮らしておくんだった。あの人の所なら愛憎劇はあっても嫁
姑戦争はなさそうだ。やばくなったら逃げればいいし。

「だけど、あなたはこの娘と出会ってしまった。あなたと最も魂の
近いこの娘と」

魂の近い、相手。

俊藍は何か言いかけた口をそっと閉じた。

「あなたの運命に、本来ならこれほど近い人間は現れないはずだった。唯一、近しくなれるはずだったのが、北城の一人娘よ」

お姫様と張り合えと？ 無理です。この肉食系がそんなに良ければ差し上げます。

「あなたは、おかしいとは思わなかった？」

急に水を向けられて戸惑う私を無視して、エバさんは続ける。

「異世界のことを知っているのは、ほんの一握りの者だけよ。北の国で学んだ魔術行使者と、王族の関係者」

俊藍は、私のことを初めて見たときから異世界から来たと言った。名乗る時には名前が先に来るこの世界で、私の名前を正確に理解して、彼の右手には神の子のしるし。

そして、私は、俊藍の名前すら知らない。

「この国で、最も位の高い姓を知ってる？」

私の考えの先を読んだように、エバさんは薄く唇の端を上げた。ずっと目を細めて睨んだ俊藍を尻目に彼女はお喋りをやめない。

「ウォールエルズ。聞いたことはないかしら？」

俊藍を知る、誰もが彼に膝をつき、こうべを垂れる。絶対的な威圧感。

もしかしたら、という思いは無かったとは言わない。
でもあえて考えないようにしていた。

偉いはずの宰相である、あの社長ですら敬語を使うこの人のこと。

ドンドン！

私の思考をさえぎるようにドアがけたたましく鳴った。

家の中の返事を待たずに開かれたドアから、現れたのはいつか見たブリキの甲冑だった。以前見たものよりもいかつくて、みんな長いマントを身につけている。

彼らは簡素なイスに腰かけた、自分たちよりも簡素な格好の俊藍に向かって一斉に膝をついた。

「お迎えにあがりました。ハイキリング・俊藍・ウォールエルズ陛下」
下

——…えっと。陛下って言った？

王子様なら殿下だね。

だとしたら、

「王様……？」

私の呟きに、俊藍は何も応えないでただ微笑んだ。

マジか。

王様と右手

不敬罪という言葉は、私の住んでいた日常じゃ、あんまり使われない。

でもさすが異世界。

「無礼だぞ！ 膝をつかぬか小娘！」

リアルに無礼と言われました。

ブリキの仮面がち割るぞ。この野郎。

「よい。彼女は私が世話になった者だ」

俊藍はすっと私の頭を撫でた。

大きな手。

お世話になってたのは、こっちの方だ。

一言ぐらい言ってくれてもいいはずだ。

でも、私が俊藍の立場だったら、自分が王様だなんて言えただろうか。

だからって、奥さんに言わせるような名前言わなくてもいいと思うけど。

静かな湖面のような蒼い瞳。

狼の顔だった頃から変わらない理性と知性を備えている。

覗きこむとまるでビー玉のように、けれど反転しない私の顔が映っている。

「エバ」

いつの間にか膝について頭を下げている魔女に俊藍は硬い声で言った。

「東の果ての魔女として、この者を守り導け」

「はい」

エバさんも静かな声で応えて顔を上げない。

俊藍は少し彼女を見定めるように見ていたけど、やがて私に視線を移した。

「時間切れのようだ」

いつものように笑うから、私も少し笑ってしまった。

「ヘイキリング陛下？　だっけ？」

「……何も言わなかったことは、謝る」

だが、と俊藍は叱られた子供のような顔をする。

「俊藍と、呼んでくれ」

こういうとき、美形はずるい。

どんな顔でも奇麗に見えるから。

「わかった」

きっと、もう。

「また、会いに来る」

会えない。

俊藍は椅子から立ち上がる。

その姿は大きな彫像のようにも見えた。

この人、ほんとに王様だ。

俊藍は、ゆっくりと部屋の端に置きっぱなしだった荷物からあの、黒いマントを取り出した。

二人でくるまって寝たマント。

よく見ると、細かい刺繍が刺してある。一針ずつ丁寧に縫いこんであって、きっと俊藍に贈られたものだ。

それを差し出された。

受け取れない。でも、ほとんど無理矢理持たされた。

「陛下、その外套は先王陛下の：」

膝まづいていた甲冑の一人が言いかけたが、俊藍はそれを視線で制した。

「大事なものなら貰えない」

「大事だから、お前に持っていてほしい」

穏やかに、けれど頑として押し返されて私はマントを受け取った。

見上げた俊藍は、誰よりも孤独に見えた。

なのに、心の支えまで放り出してしまうつもりなのだろうか。

きっと、もう会えない私に。

俊藍の右腕を捕まえた。

彼は少し驚いたように身構えたけれど、そのまま両手で右手を握り締めてやる。

「ありがとう」

もしも願いが届くなら、自分を厭わないで。嫌わないで。
私はあなたの味方だ。

「ありがとう。俊藍」

うまく、笑えただろうか。

俊藍は困ったように微笑んだ。

それが、どこか泣いているようにも見えて。

「ありがとう。葉子」

右手がするりと抜けていく。

もうその後ろ姿に迷いはなかった。

堂々とした足取りで、こちらを振り向かない。

ありがとう。私はあなたに救われた。

だから、さよなら。

私の、誰よりも大切な人。

約束と鉄面皮

捻挫と言っても、歩けないわけではないわよね？

ええ、まあそうですね。

そういうやりとりが交わされた翌日から私は奮闘していた。

ええもうそりやもう！

薪割り水汲み、料理の下ごしらえ。屋根の修理はさすがに無理ねえと言われて免れましたが。

口調は優しいけれど、さすが魔女。容赦を知らない。

「塩が効きすぎているわねえ」

決して怒鳴りはしないんですよ。お上品ですからね。

でも食事をしながらねちねちねちと延々お説教だ。

最近、胃の調子が悪い。

薬草でも取ってくるか。俊藍に教えてもらった知恵がもう役に立つとは。一週間もサバイバルしてたから覚えの悪い私でもさすがに覚えましたよ色々。

「あなた、薬草分かるの？」

そんなこと言われたかと思ったら、次の日から薬の調合手伝えつて。

一度、胃の薬と胃潰瘍の薬と間違えそうになって、こんなことも知らないのかと言われました。いや、そこまで専門的なことをするつもりもありませんでしたので。何だか毒草との違いまでみっちり

教えられましたよ。そんな葉の形が違うからって分かんないですよ
フツ。

「ついでだから、キノコの種類も覚えなさい」

「……あの、ものすごく種類多いんですが」

「覚えなさい」

問答無用ですか。

ビシバシしごかれるついでにこの国の漢字以外の文字もだいたい覚え
えました。…覚えざるをえないというか。

魔女と二人暮らしは厳しいものです。

とはいえ、私一人が働いているわけではありません。

彼女も日がな一日、掃除に洗濯、葉の調合。そして時には山を下
りて村に葉を売りに行く。そのお金で砂糖や塩なんていう森じゃ手
に入らないものを買う。

川で洗濯やら熱い鍋やら毎日のように持って歩いていたら、私の
手はみるみるうちに日に焼けた皮の厚い手になりました。

今まで、どんな楽な仕事をしていたんだと、魔女さんに最初に言
われましたが確かにその通りですね。

魔女と暮らし始めて一週間ほど経った頃にはすっかり節くれだっ
た立派な手になりましたよ。

捻挫の足が治ると見るや、村までついてこいと言われました。
人使い荒いよ。

でも、まあ、嫌いで気に喰わない人間の面倒を、放り出さずに見

てくれているんだから彼女を恨む気にはなれなかった。

おかしいかな？ 私。

彼女の薬は結構評判みたいで、村にある、ちゃんとした店の薬屋さんが魔女の薬を結構な高値で買い取ってくれている。銅一つでパ
ン一個。それに対して魔女の薬は一つ銅十五。いい値段だ。

薬屋に売るものだけじゃなくて、個人的にも請け負ってるみたい
で、一軒一軒お得意様を回っていく。

そこで彼女は私を弟子だと紹介した。

え、いつの間に魔女の弟子？ 魔女っ子になれるの私？

魔女は帰り際の買い物中、立ち寄った露店で私に服を買えという。
あいにく私の手持ちから服を買う余裕はない。服も下着も手持ち
を着まわしている。

ただいま着ているのは深緑の着物に同色系のチャリムと帯とパン
ツを合わせたこれでもかっていうぐらい地味な格好。村でこんな格
好なのは、私よりもうちよい御年が上のお姉さんたちだ。（おばち
ゃんと言うと怒られるんだよ）同年代ぐらいの格好はふんわり裾の
広がるチャリムドレスが一般的。街でもよく見かけたよ。もっと大
きな街だと装飾品がすごいんだ。

お金なんて無いと言ったら、お金は出してくれるという。どうい
う風の吹きまわしだ。

「年頃の娘が着る服じゃないわよ？ きちんとなさい」

たくさんさんの衣装から選ばないでいると、魔女が選んだのはふんわ
りとした裾のこともあろうに白のチャリム。

売ったチャリムドレスの呪いじゃなかろうな。これ。

でも一緒に買われた（最後の方はすでに私は選んでない）深い蒼

のチャリムはまるであの湖面の瞳を思わせるみたいで気に入った。

思えば魔女エバはきちんとした人だ。

年のころは五十を数えようかというぐらいだけど、しゃきしゃき働かし穏やかな口調で文句も言う。

文句は言うけど、言葉も薬草も、常識も教えてくれて、チャリムまで買ってくれて。

ちよつと感動しそうになった。

でも、やっぱり世の中そんなに甘くない。

使い慣れない道具で夕食の準備をしていたら、山小屋の戸がドンドンと鳴った。

エバが出てくれないかなと思ったら、彼女は忙しらしく出てくる気配がない。

「ちよつと出てくれない？」

部屋の奥からそんな声が聞こえてきたので、私は急いでナイフで切った芋を鍋に放り込んだ。今日は村で譲ってもらった肉を煮込んだビーフシチューもどきだ。（肉が何のものか知らないんだよね）

この家は二階建てで、二階に私とエバの寝室が二部屋と薬草の調合室がある。

きっとその調合室に居るのだろう。

私は急いでドアに近寄った。

「どちら様でしょうか」

こういうところは都会っ子の癖が抜けない。知らない人にノコノコ戸を開いたりしない。

それがアダとなったらしい。

ガンっとドアが叩かれたかと思うと、奇妙な声が聞こえてきた。

咄嗟にドアから離れると、不思議な模様がドアに浮かんだ。

そして、ひとりでにドアの錠が外れる。

ひいっ！ ポルターガイスト！？

思わず腰が引けそうになったら、ドアが開いて夜の闇から白いマントがぼんやりと浮かんで現れた。

ん？

なんか、見覚えあるような？

白銀の長い髪、そして絶対零度の話しかけるなオーラ。

その顔は、華やかに美しく整っているのに灰色の詰襟姿の長身から見下ろしてくるのは華々しさなんかまるで無い冴え冴えとした碧眼。

おお、何か懐かしくさえあるな！ 白い鉄面皮！

社長にべったりだったあの鉄仮面だ。

驚く私を珍しく認識しているのか、不機嫌そうにその柳眉を跳ね上げる。女王様ですかあなた。

「ヨウコ・キミジマだな」

発音が惜しい。漢字で名札でも作ろうかしら。

「そうよ」

答えたのは私じゃありません。

私の後ろから現れた、ミス・エバ。

「ようこそ。ハイラント少尉」

ハイラントって名前なのか。そう思ったのもつかの間。エバは私に風呂敷包みを手渡ししてきた。外人顔に風呂敷包み渡されるってホントに違和感あるわ。

「せめてもの餞別に」

開いてみると、買ってもらったチャリムと私の着替え。それから、いつか俊藍に買ってもらったかんざしが入っていた。

えっと、何それ？

「約束は守っていただけるのでしょうか？」

エバは私を無視してハイラントに視線を向ける。

「すでに北国とは連絡をとってあります。おってあなたに通知が届くことでしょう」

ハイラントの言葉に魔女は珍しく頬を赤らめて「素晴らしいわ」と感極まった顔で笑んだ。

あれ。

これって。

ハイラントはそんな魔女には目もくれず、私に視線を落としてくる。この人も背が高いんだよ。くそつたれ。

「あなたには、私と共に来ていただきます」

やってきたのは、こいつ一人。
それは、

「……売りやがったな。クソ婆」

私の唸る声に魔女エバはにったりと唇の端を上げる。

「あなた、まさか自分が特別になったと思ったのかしら？」

特別？

「異世界に飛ばされて、陛下に愛されて、それだけで特別になったとでも？」

エバはまるで子供のように笑った。

「あなたは、北城宰相閣下のおまけで飛ばされてきた単なる不慮の事故の被害者。それ以外でもそれ以上でもないのよ」

そんなことは分かっている。

「陛下はそんなあなたを憐れまれただけ」

そんなことは、

「分かってる！ あんたに言われるまでもない！」

私はただ、願っただけだ。

俊藍の幸せを。

「あなたのような野蛮な娘、北城閣下がお気に召さなかったのもよく分かるわ」

魔女は鼻を鳴らして笑う。

ああ、この人、ほんとに魔女だったのね。

「社長に気に入られようが、俊藍に愛想尽かされようが、私には知ったこっちゃありませんよ」

あいつらは、人の気持ちなんて無視してなんぼだと思ってる朴念仁だ。いつか会ったら殴ってやる。

よし。記念だ。

このお婆ちゃん、一発殴るふりしておこう。

私はほとんど無造作に拳を振り上げた。女性に手を上げる趣味はないけど、このお婆ちゃんは脅しが必要だ。

不愉快過ぎる。

呆けた様子の彼女の鼻面をかする。
その寸前で止めてやろうとした。

でもそれと同時に私の首筋に冷たい指が当てられたかと思うと、意識が消えた。

ああ、ホントに胸クソ悪い。

東の果てに落ちた魔女

振り上げられた拳を、避けることなどしないつもりだった。

齒ぐらいはくれてやるつもりだった。

けれど、彼女は勢いを殺したと思ったと同時に力を失って足から崩れ落ちた。

「……何をするの。ハイラント少尉」

エバが睨んでも、この白い貴公子は素知らぬ顔で倒れた娘を抱え上げる。

「彼女は、あなたを殴るつもりなどありませんでしたよ」

まさか。

だがこの娘ならありうるような気もした。

この、あきれるほどお人好しな娘ならば。

長く政治を離れていたヘイキリング王に、今やほとんど力はない。

そして北城家に連なる血筋の召喚がなされ、更に力を落としたはずだった。

しかし、彼はここにきて城に帰還した。

このヨウコ・キミジマという娘によって呪いを解かれて。

彼女はたまたまこちらに落ちた完全な被害者だ。

だが、共に来た人が悪かった。

東国は今、二つの派閥間で揺れ動いている。

彼女の存在を目ざわりに思う者たちが命を狙うのは、彼女にとって不運以外の何物でもないだろう。

けれど、エバには彼女を助けてやる気など無かった。

彼女は自分が生まれ故郷である北国に帰るための道具にすぎない。故国を追われて二十年近く経つ。

もはや諦めかけていた帰国を、この冷たい貴公子は叶えてくれるという。

ハイラント・朝来・ジンブリウムと言えば、賢者バルガーにその才を認められ、北国の魔術師養成機関であるエスパシオ機関で博士号を修めた天才だ。北国でも元老院に覚えがいい。

彼が繋ぎをとってくれるのなら、エバの帰国もそう遠くない賭けだと思えたのだ。

年々年老いていくエバには時間がなかった。

なんと醜い。

醜い自分の姿に目を覆いたくなる。

これが、かつて知恵者と知られた東の魔女のなれの果てか。

だから、せめてもの罪滅ぼしにヨウコに沢山のことを教え込んだ。彼女は、自分に才能がないと思いきこんでいるが、一度聞いたことをほとんど忘れない。

恐ろしい速度で自分の知識を吸収していく彼女に、何かを教える喜びさえ思いだした。

きっと、こんな出会い方でなければ、本当に彼女を弟子にしていただろう。

年頃の娘だというのに一向に身だしなみを繕おうとしない彼女に

業を煮やし、ついチャリムまで買い与えた。

「彼女のマントを寄越してください」

白い仮面をつけたような無表情に何の事だと問うと、陛下が彼女に渡したマントを取ってこいと言う。

あのハイラントという若者は、得体が知れない。

いったい、どこまで彼の手のうちなのだろうか。

彼女が使っていた寢室の、ベッドの下に大切に置いてある箱がある。

その中からマントを取り出した。

エバはこんな事態を招いた加害者の一人だ。けれど、同情せずにはいられなかった。

何も知らずに異世界に放り込まれ、なんて酷い扱いだろう。

できることなら幸せになってほしい。しかし、それは叶わない。

近い将来、彼女は死ぬことになるのだから。

銀髪とナイスバディ

あんた、誰。

私はその疑問をついにはぶつけることが出来ずにいた。

「もうだいぶ具合が良いようですね」

気がついたら豪華ではないけど、暖かいベッドの上でした。

あの胸クソ悪い魔女と鉄仮面に騙されたところで私の記憶は途切れている。

途切れているのだが、

「でももう少し休んでください」

この目の前でにこにこしている銀髪野郎に繋がるところが一筋も見当たらない。

長い銀髪、澄んだ碧眼。灰色の詰襟まで最後の記憶と同じだ。でも、表情と雰囲気ymarで違う。

悪夢を見た後のように不愉快な汗で私は目が覚めた。

で、見憶えのないベッドに寝かされていることで、あの鉄仮面にこの部屋に放り込まれたのだらうということは分かった。

監禁か、軟禁か。

警戒しているところに、鉄仮面と思しき人物が部屋に入ってきたのだ。

思しき、というのは、あの表情なんか忘れまして言うような鉄面皮がにこやかに微笑んだから。

意味がわかんなくて鳥肌が立ったじゃないか。

なんにせよ。あの魔女の元から出てこられたことにはホッとした。また顔を合わせるようなことがあったら自分が何をするか分からない。あの魔女が言ったことはまさしくいつも自分が考えている正論だと思うけど、正論がいつも正しく美しいわけじゃない。凶星っていうのは不愉快に出来ている。

近寄るなど言わんばかりに睨んでやったが、銀髪野郎は薄く笑っただけだった。

記憶にある鉄仮面には違いない。不本意ながら、あの華々しい顔を一度見たら忘れられるものでもない。双子だっていうなら歩く有害だ。

「お腹が空いていませんか。食事は食べられそうですか？」

そういや部屋に入ってくるとき、お盆持ってたな。笑顔が不気味で視界の外に置いてたみたい。

ベッドの脇のチェストに置かれたお盆の上には、消化によさそうな豆のスープとお椀に入った雑穀。それから甘そうな果物が乗っている。猛烈に喉が渴いていて湯気の漂うカップに手をつけたかったけど、度重なる騙し討ちにすっかり疑心暗鬼だ。くそ。社長に会ったら絶対殴る。

そういや、私に毒を盛った一味の一人がこの鉄面皮だった。殴りたい。

が、彼は得体が知れない。

私が一向に警戒を解かないでいると、何を思ったのか銀髪野郎はお盆のカップを手にとって、口をつけてしまった。

一口飲んで、にっこり笑うと私に差し出してくる。

「毒なんて入っていませんよ」

アンタが特殊訓練受けてたら分かんないじゃないか。

それに人の口、しかも信用ならない相手が口をつけた物なんて手を出す気にはなれなかった。

けれど、

「それとも食べさせてあげましょうか？ 口移しで」

私の対人運は未だ地平線をさまよっているらしい。

しかも、男運に至ってはすでにグラフをマイナスに振りきっているのではあるまいか。

私が渋々受け取ろうとしたら、狭い部屋にドアの外から悲鳴が響き渡った。

「それならぜひ私が！」

どっとドアが開いて文字通りなだれ込んだのは、うら若き女の子三人だった。

色や形の違いはあれど、みなさん一様に可愛いチャリムドレス姿だ。年の頃は十六歳から上ぐらい。二十歳には届かないだろう。目を丸くした部屋の中の二人、主に銀髪と目が合って顔を赤くするなんて、なんて可愛い。

「さあ、どきな！ まだ縫物の途中だろう！」

ぽーっと銀髪に見惚れていた彼女たちに一喝が飛んでくる。

あたふた立ち上がって「失礼しました」と愛想笑いして出ていった女の子達の後ろから現れたのは、長身の美女だった。

燃えるような癖のある長い赤毛に泣きぼくろのある深い色の碧眼。一つ一つのパーツも大きいけど形が良くて、口紅ひかれた唇は官能的に笑みを作る。黄土色の地味なチャリムだけどナイスバディが惜しげもなく強調されている。大迫力美人だ。

「悪かったね。騒がしくして」

と、ハスキーな声の先は私にだろうか。彼女は見惚れる私に向かつて思わずといった風に微笑んだ。

「ハイラント様も大概にしておくれ。甘やかすとうっかり本気になっちゃう」

「すみません。あまりに可愛らしいもので」

艶然と、という言葉を形にしたみたいに銀髪は微笑む。どっかの額縁にでも入ってろ有害銀髪。

迫力美人は呆れたように肩を竦めると、手に持っていたお盆をこちらに差し出してきた。

「アンタ、丸一日寝てたんだよ。体の調子はどうだい」

あまりに気さくに話しかけられて、私はどういう顔をしたものか迷った。

人を信じたいのに、信じられない。

戸惑う私に、美人はそっとお盆をベッドで座ったままの私の膝上に乗せた。

「このチュクはね、サルをウユの乳でじっくり煮込んで隠し味にオ

ミテンを入れてある特別製だよ。そこにある豆のスープはウユ肉とピツカンテを加えて一日煮込んだのである。そのサルはここで育てたものだ。そのタルダは近くの山から採ってきたもんだよ」

それから、と美人は私が受け取ったカップを指さした。

「それはウユの乳。ポルクルを入れてあるから甘くて温まるよ」

優しい声に促されるように、私は暖かいミルクを見つめた。

優しい人はたくさん居た。

でも、それは無条件じゃなかった。

殺されかけたり、裏切られたり、同情されたり、罵られたり、別れたり。

何でもいいから、私は生きるつもりだった。

厚意だけを受け取って、あとは全部見ないふり。
悪気のない悪意に、心ない悪意に傷ついた自分の心もかえりみない。

わけも分らない内に、死ぬなんてまっぴらだ。

元の世界に帰れるかもしれないし、帰れないまでも家族に無事だと伝える方法があるのかもしれないのに。

帰りたい。

切実に思った。

運は悪いし、派遣社員的生活はろくでもなかったけれど、あのまま暮らしていてもきつとろくでもなかっただろうけれど、自分の生まれた世界に帰りたい。

異世界に来てから私の足元はふらふらと海藻みたいにおぼつかない。ひどい嵐に翻弄されて、海面をただ漂っているように。

俊藍に一度は引き上げられたけれど、彼は自分の帰るべき場所がある人だ。

私にいつまでも付き合っていていいはずがなかった。

俊藍は私の傷ついた心を理解してくれていたけれど、彼も私と同じように傷ついているからどちらも癒されることはない。

近しい魂というのはそういうことだ。

あまりに似すぎていて何も生まない。

彼は一番の味方で、私は彼の一番の味方だ。けれど、お互いの傷が見え過ぎて引きずられてしまう。

誰か、助けて。

ふいに、柔らかく頭を包まれた。

それが人の腕だということに気付く前に、私は柔らかな日差しに似た匂いに驚いた。

「辛いことがあったんだろ」

辛い。確かに辛かった。

無理矢理、この世界に落とされたことも。

唯一、心を許していた俊藍と、別れてしまったことも。

本当は、そばに居て欲しかった。

心細い場所に、一人置いていつて欲しくなかった。

「帰りたい場所があるのなら、ここでしばらくお休み。ここはそういう場所なんだよ」

静かな声は、辛いことも悲しいことも全部受け入れてくれるようにも聞こえた。

それは、きっと彼女がそうだからなのだろう。

「私はアンタを歓迎するよ」

そうして顔を起こされて、ふわりと微笑まれた。柔らかいはずだ。彼女の豊満な胸に顔をうずめさせてもらっていたらしい。女で良かった。危うく鼻血を吹くところだった。

「私はアンジェ。アンタは？」

「……葉子です」

呟くように言うと、迫力美人、アンジェさんは嬉しそうに微笑む。

「やっと口をきいてくれたね。可愛い声じゃないか。可愛い顔してるんだからもっと笑いな」

いえいえ。美人には敵いません。

強張った顔に笑顔を作ろうとしたが予想外に体力が落ちているらしく出来なかった。

社長の側近であるはずの銀髪鉄仮面がいる。
だから、彼女のことも本当には信用できない。

親切にしてくれる人のことを疑わなければならないなんて。

「暗い顔をするんじゃないよ」

哀しくなって少し俯いた私の肩をアンジェさんが優しく叩いた。

「子供が出来たからって男に捨てられたのかい？ それとも男が愛人作って逃げ出したのかい？ そんなこといっぱい転がってるよ。男なんて幾らでもいるんだからね。気にしてやる必要なんかないよ」

申し訳ない。そんなディープな理由じゃありません。

お屋敷と洗濯

「ねえねえ。ヨーコ。これもお願い」

柔らかな金髪の女の子に私はどっさりと洗濯物の入ったカゴを渡された。

「いいですよ」

愛想もなく受け取って、淡いピンクのチャリムをひるがえして、いそいそと屋敷の方へ帰っていく娘っ子の後ろ姿をぼんやりと眺めた。

平和だわ。

異世界に落とされてから二ヶ月ぐらいにはなると思うけど、ここ
の生活はかつてないほど平和だ。

殺されかけたり、襲われかけたりしない生活って素敵。

……ほんの二ヶ月前の私は、火打ち石で火をおこし、薪を割って風呂を沸かす生活なんて考えもつかなかっただろうけれど。

胡散臭さ爆発だったけど、エセ臭い笑顔の有害銀髪は私がアンジェさんの料理を食べて寝て起きたらいなくなっていた。良いことだ。何の思惑だか分からないけれど置いてかれた私はアンジェさんのお世話になることになった。

ここは、東の魔女の森よりも更に東、国境のすぐそばにある屋敷なんだそうだ。

周りは森に囲まれているけれど、少し歩けば川もあるし水車もあるし、もっと歩けば美しい花畑もある。屋敷はどっちかというところ

西洋風。だけど柱とか柵とかは中華風で和洋折衷の赴きのある造り。部屋はゆうに五十以上あって、そこに花も恥じらう乙女から美女、三十人ほどが一緒に暮らしている。

年齢もバラバラなので寄宿制の学校というわけでもなさそうだ。周囲の森は広大で、危険な獣は狼ぐらいらしいが人が行ける範囲には獣除けの魔術が施してあって危険な獣は寄ってこない。獣は居ないが普通の人の足では森を抜けることは到底叶わないだろう。

そんな広い敷地に集められた彼女たちが唯一課せられているのは、この屋敷から出ていけないこと。

炊事洗濯、家事のもろもろは当番制になっていて全て持ち回りだが、屋敷には庭師や騎竜の世話係の青年や男性が十人ほど住んでいる。彼らはいずれも顔がいい。五日に一度来るという行商のおっちゃん、腹の突き出た人のいい狸顔だから間違いない。ここに住むには美形基準があるらしい。

二十四年の経験上、女というやつは不思議なもので、男が群れの中に居ると大人しいけど、女同士になると途端に仲間意識が薄くなる生き物だ。女十人寄れば、暇さえあればイジメも娯楽にしちゃうのが一人や二人居るからそのバランス取るために顔のいい男がいるんだろう。その証拠に、身綺麗にするのに忙しくてイジメまで手を出すやつが少ない。裏ではあるのかもしれないけどその程度。きつとあの笑顔張り付けた紳士的な男たちに少しでも良く見られたい一心で、表面上でも皆にこやかに暮らしてる。

年頃の娘たちがワガママらしいワガママも言わず、きゃいきゃい過ごしてられるのはそういうことだ。

不自然だけれど、ここには穏やかな暮らしが流れてる。

異世界に来てからクリスさんやカリアさんに知り合ったけど、生

活の大半も美形だけどもさくさくしい男と一緒に過ごしていたので、女の子特有のいい香りがする環境にほっとする。

たとえば、毎日、洗濯やら薪割りやら押し付けられても全く気にならなかった。

ここでは、屋敷の敷地から出なければ何をしても自由なのだ。

日本に居た頃は仕事で疲れて過ぎていて家事が非常に苦だったが、幸か不幸かあの胸クソ悪い魔女にビシバシしごかれたお陰で川で洗濯も肉の解体も（鳥とかね、そのまんまで運ばれてくるんだ…）出来るようになりました。

感謝はしたくないけど、生活力はついたよ私。

「また押し付けられたのかい」

洗濯してから薪割りでもするかと腕まくりした私が振り返ると、赤気の美女が苦笑した。

「またハンナ達だね？　しょうのない子達だよ」

そういう美女も洗濯カゴを抱えている。

「今日はヨルダさんが来る日なんでしょう？　アンジェさんもお店見てくるといいですよ。やっておきますから」

アンジェさんが抱えてる洗濯カゴを指さして、私は屋敷の玄関先を見た。ヨルダさんは行商のおっちゃんのこと。ベッドから起きて一日目に会ったから、ここの生活も五日目になったことになるのか。屋敷の裏にある川からは玄関ポーチが見えるんだ。そこにはすでに二頭立ての騎竜がもそもそと下草を食べている。

行商のおっちゃんは生活に必要なものを運んでくる他に、チャリムやアクセサリーといった嗜好品も持ち込んでくる。それを月に一

度（ここではひと月は二十日なんだったさ）のお小遣いから買うのが、乙女たちのささやかな楽しみなのだ。

「今、欲しいものなんて無いからね。別にいいのさ。それより、ヨークは欲しいものなんかあるんじゃないのかい？」

幸い着替えはある。不本意だがあの魔女が持たせてくれた。衣食住以外に欲しいものなんか今のところ全く思いつかない。今日も美しく化粧をしているアンジェさん（薄化粧だけどね）を見てみると女失格なのかと思うけど。

「いいえ。ありませんよ」

お金もないしね。ここに来て五日の私にお小遣いとやらは持たされていない。いや、この年でお小遣いなんて渡されてもかなり困るんだけど。

アンジェさんは今年で二十五歳。私より一つ年上だ。彼女もお小遣いとやらをもらっているのだろうか。

尋ねたら、豪快に笑われた。この人、妖艶さのある美女なんだけど、態度も口調もさっぱりしている。ここで、誰がリーダーなんて誰も決めていないんだけど、アンジェさんが自然とまとめ役になっているのは分かる気もする。世話焼きだしね。

「アタシらみたいな大人がお小遣いって訳にもいかないだろう？だから糸を紡いだり、刺繍したり、何か細工物を作ったりしてそれを街で売ってきてもらっているのさ」

それが彼女たちの収入源になっているらしい。だったら、売ればあの小娘たちよりお金を持っているはずだ。ここを出て行きたくはならないのだろうか。

アンジェさんは少し笑って、洗濯をしながら話そうかと言って二人して洗濯を始めた。洗濯板なるものがあるのでそれで、川に人工的に作ってある洗い場でゴシゴシやる。

「ここに居る娘たちはね、ほとんどが食うにも事欠くような村や街でも学校にも通えない娘たちが集められているんだ。だから、ここでの生活は、あの子たちにとっちゃ夢のような生活なんだよ」

暖かい寝床に食事、それから綺麗な服まである。

「アンタみたいに二十歳過ぎた女もいるけど、悪い男に捨てられて身売りしていたとか酷い生活してたモンばかりだ」

想像は出来た。けれど、私には彼女たちの過去を実感することは出来なかった。

色々あったけれど私は、幸い異世界に来てから衣食住に困ったことはないし、身の危険はあったものの悪運が強くて無事だ。

だから、アンジェさんにかける言葉が出てこなかった。

「……アンタは、本当にいいところのお嬢さんだったんだね」

言われてアンジェさんの顔を見るけど、彼女に私を怒るとか蔑む様子はない。ただ、優しい憐れみだけで。

「どうして、アンタみたいなお嬢さんがここに連れて来られたんだろうね」

それを問いたいののは私の方だったので、結局は口をつぐんでしまった。

言葉を失くした私にアンジェさんは困ったように笑う。

「悩んでも仕方ないさ。学のあるアンタに分からないことが、学のないアタシに分かるわけがないからね。バーリムが誉めてたよ。薬草に関しちゃ、アンタ物凄く優秀なんだそうじゃないか」

アンジェはまるで我がことのように弾んだ笑顔だった。

誰よりもこの国について知っている俊藍について旅をしていたわけだけど、未だ私はこの世界の知識がまるでないのも同然だ。だから、定期的に行われている勉強会に参加している。

バーリムとはここで家庭教師みたいなことをしている三十二歳の眼鏡の男前だ。穏やかな微笑みがトレードマークみたいになってるけど、あれは相当のドエスと見た。宿題忘れた生徒に容赦ない質問を浴びせるんだよ。十六の小娘泣かして薄笑いできるなんてドエスカ鬼畜と決まってる。

そのちつとやそつとじゃ褒め言葉なんて出さないバーリム先生が誉めてたというだから、私の知識は結構いい線いってるらしい。素直に喜べないけど。

「そんな顔するんじゃないよ。あの、学者馬鹿が誉めてるんだ。自信持ちな」

バーリム先生の私室は結構広いはずの部屋が足の踏み場もないほど本に埋まっている。常に何かしらの知識を蓄えること、発見することに執念燃やしているらしくて、アンジェさんが学者馬鹿というのも肯ける。けど、あの堅物ドエスにアンジェさん、気安いな。もしかして？

「あのバーリムとは付き合いが長いだけさ。もうかれこれ五年になるかな」

私の勘繰りを先読みしたようにアンジェさんは笑う。ああ、これ、もしかしたらあのドエス学者の片思いっぽいな。アンジェさん美女だし。

「ここでは私が一番の古株だからね。他の連中ともこんなものなのさ」

五年が古株になるってことは、ここには卒業というシステムがあるのだろうか。

ますます不思議な場所だ。

学校でもない、孤児院ってわけでもない、年頃の女ばかりの園。

マナーの先生もいるから（これも男の先生と女の先生が居る）まさか淑女養成学校？ でもマナー教室に通っているのは入寮者の半分程度だ。

ここは、いったいどういう場所なんだ。

その疑問を遠慮なくぶつけることが出来たのは、アンジェさんと洗濯してから二日後のことだった。

掃除と変身

本日の仕事は騎竜の世話。グルーミングして餌やりして厩の掃除をする。これが一番乙女たちに嫌がられる仕事だ。

でもまあ、ここの騎竜は気位高そうだけど大人しいし、淡い水色の髪が印象的な馬丁の青年も気のいい好青年だ。今更だけどこの世界の髪や瞳の色はホント色とりどりだわ。

「ヨウコさん。あとは俺がやりますよ」

今年二十歳になるという青年はにっこりと笑って私の持っていた藁屑と糞の入ったチリトリを奪っていく。どうやら騎竜たちの運動を他の馬丁に任せてきたらしい。専門はこの好青年だけど、騎竜は全部で十頭もいるので、世話は庭師も教師も入り乱れて当番制でやっている。だいたい三人が世話の当番について、厩のそばにある演習場に騎竜たちを放して交代で運動させていく。

たいていの娘っ子達は彼らについて騎竜たちを撫でに行くのだが、バリエーションに満ちた美形たちにも、どこか人を見下した騎竜にも大した興味が無くて私は掃除の仕事に専念している。

「ありがとう。ウエンダ。でも、これ捨てれば終わりだから」

「そうですか？　じゃあ、そろそろ騎竜を連れてきますね」

笑顔だが、好青年、ウエンダはあっさりとチリトリを私に返して厩を出ていく。

近頃思うのだが、美形たちはどんなに娘に好意を寄せられても決してなびくことはない。やんわりと、それでいて厳格なまでにいわゆるお友達の態度は決して崩さない。だから、見た目に娘達は騒ぐ

けど、どの子も彼らと恋が実るなどとは思わないようだった。アイドル追いかけてるミーハーと一緒にだ。二十歳過ぎたお姉さんたちはもう一つ上手で、美形たちを誘惑するようなことを言うけれど、弄ぶだけでその実、関係があるわけではないようだった。

要は、彼らは観賞用なのだ。

まあ、一週間やそこらで内実がわかるわけじゃないんだけど、ここは外界とは違う絶対的なルールがあるらしかった。

敷地の外に出てはいけないことに加えて、男女の関係を持つてはいけないということ。

厩の片づけを終えると、タイミング良く騎竜が手綱を引かれて帰ってきた。

同じ厩掃除当番の娘はすでにウエンダに言われて仕事を終えたらしい。騎竜を引いてきたのは、三人の美形だった。

「やあ！　働き者の子ネズミちゃん！」

誰がネズミだ。この野郎。

華やかに言い放ったのは、ゆるやかなウェーブを描いた緑の髪が美しい派手な美形だ。普段着だという格好も派手で、本日のお召し物は品のいい飾りのついたエメラルドグリーンのチャリム。クジャクだなこの人。

「今日も地味だねえ。いけないッ！　駄目だよ！　若さの損失だよ！　若くて美しいんだからもっと着飾らなければッ！」

今日も滑らかなこの口達者はマナーの先生だ。まあ、地味な紫チャリムのおばちゃんスタイルの私だから地味と言われて反論はない。でもこの先生、口も動かすけど、騎竜を三頭も連れてそれをちゃんと厩に帰していくんだから侮れない。

「うるさいぞ、ヨアヒム。ヨーコが仕事を終えられないだろう」

マナーの先生、ヨアヒム先生の後ろからぬつと顔を出したのは強面の美形だ。庭師らしいけど、背の高い美形連中の中で一番デカくて、いつも渋い色のチャリムを着こんでいるしガタイもいいから、十代の娘っ子からは怖がられている。二十代のお姉さん達からは不機嫌な顔が色っぽいという評価だった。私には強面のおっさんにしか見えないから微妙だな。短く刈られた焦げ茶の髪が一房だけ長くてそれを三つ編みにして垂らしているから、この熊みたいな美形が毎日三つ編みしているのかと思うと、結構笑える。

思わず想像して笑いそうになった私を、強面は不思議そうな顔で見下ろしてくる。くそ。なんか腹立つ。

「ザイラス。あなたも同じことをしていますよ」

ザイラスさんの更に後ろから馬丁のウェンダと一緒に騎竜を連れてきたのは、眼鏡の良く似合う落ち着いた色のチャリムの美形だ。この国でレンズは珍しいんだけど、あるところにはあるらしい。鳶色の髪で一見さして目立たない感じなんだけど、顔の造作は誰より整っている。でもね、

「お疲れ様です。ヨーコ。昨日の書き取りの宿題はもう終わらせましたか？ 明日の勉強会ではあなたをあてますからね」

そう。この御方こそ何を隠そう、あのドエスのバーリム先生だ。明日の歴史の授業の宿題をまだ終わらせていないことを何故知っているんだ。勉強というものか遠ざかって早幾年。若い娘の脳細胞には追いつけないことが多々ある。それに苦手なんだよねえ。あのひ

たすら年号覚える作業って。

「バーリムさん、ヨーコをあまり脅さないでくださいよ。彼女はいつも薪割りなんかさせられているんですから」

知らないことを言うな、馬丁の青年よ。

ほら見ろ。案の定、この美形共に上から見下ろされる羽目になったじゃないか。ここに居る美形共は何を食べているんだか、女子の中で一番背の高いはずの私を見下ろす長身ばかりだ。

「道理で、よく外で見かけると思ったよ。子ネズミちゃん」

ヨアヒム先生が納得顔で長い指で自分の形のいい顎を撫でる。

そうなんだよ。やっと女の園に入ったと思ったたら、外の力仕事ばかりやってるせいかこんなむさくるしい男とばかり喋ってる気がする。ギブミー女の子の子。

「でも、安心して！ 今日はいっぱい着飾れるからねっ！」

晴れやかな笑みで言われて、ああ、と思い出した。

そういや今日は、私の歓迎会なるものをやるらしい。

らしいというのは、今朝の朝食でいつも私に仕事を回してくる女の子たちのグループが聞いてもないのに教えてくれたからだ。

隣で食べていたアンジェさんが仕方ないなあという顔をしていたから、どうも私には内緒だったらしい。

一緒に食べていた二十三歳のお姉さん（私より年下だけど明るい紫の髪の美女）も苦笑してたけど、当番の仕事が終わったら衣装部屋に来いと耳打ちしてきた。

私の歓迎会なのに、どうして私が着飾られなければならないんだ！
どうせやるなら着飾ったお姉さんたちに囲まれていたい。

女の子たちが言うには今日はこの美形も正装するし、なんとあの有害銀髪、ハイラント様もお見えになるという。来なくていいよ。うん。でもまあ、それに合わせて女の子はみんなお洒落するみたいだし、それを楽しみにしておこうではないか。

当番ばかりの私に同情したのか、早く行けと美形たちに促されて、衣裳部屋に涉々行くと、待ってましたと言わんばかりにお姉さん達に連れ込まれた。下着や寝巻き以外のみんなのチャリムとか装飾品は盗った盗らない問題が起きないように一塊に保管されてるんだってさ。だから着替えは前の晩にお風呂に行く前にみんな好きな服を取っていく。誰それが買ったチャリムドレスが可愛いならみんなそれを着まわしたりするから、自分のものって言うよりみんなものって意識が結構強いのもかもしれない。私は自分の地味なチャリム着てるけどね。誰も取らないし。

あつと言う間に衣裳部屋の奥にある鏡台の前に座らされたかと思ったら、三人の美女に囲まれて思わず委縮。だってさ、みんな種類違えどナイスバディのお姉さんだよ？

「やっぱりヨーコには淡いところけるようなピンクが良いと思うわ」

そう鏡の私を見比べながら言ったのは暗灰色の髪が腰まである切れ長瞳の美女、リアミスさん。眠たげなその悩ましい美貌と違い、口調も発言もはきはきしている、ちゃきちゃき美人だ。

十代の娘たちは二人で一つの相部屋だけど、二十歳過ぎたお姉さん達には個室が与えられていて、このキッパリ美人は私の隣室。気の強いところがあるけど、初めて会った時から何かと面倒を見てく

れるお姉さんだ。でも二十二歳。

「何を言っているの、リア。この美しい黒髪をご覧なさいな。燃えるような赤が良いに決まっているでしょう?」

鮮やかな紫の髪を耳の横でばっさりと切った丸い瞳の美女はゆったりと微笑んだ。このセレットさんは穏やかな性格でにっこりと笑うとバラが咲き誇るみたいで癒される。まだ二十歳でこの色香ってどういうことなんだろう。

「そうかねえ。アタシは薄水色がいいと思うけど」

この美女二人と問題なく並ぶのは、言わずもがなのアンジェさん。官能的なご容姿なのに、豪快なところもまた素敵だ。

彼女たち見てると、女って名乗るのやめようかと思えますよ、私。

「ねえ、ヨーコはどれがいい?」

ここにきて、ようやく私の着るチャリムドレスの色を相談していることに気が付きました。

「……いや、まあ何でもいいんですけど」

「またそんなこと! せっかく綺麗な白い肌しているんだから、ちゃんと綺麗にしなくちゃ!」

何故か憤慨したのはリアさん。

今まで騎竜の厩の掃除していた手は日に焼けて節くれだっている。顔だって相当焼けたはずだ。ろくに化粧もしてないし、日焼け止め

なんて塗ってない。日差し対策は編み笠だけ。幸いチャリムが長そでだから腕はそれほど焼けてないけど、やっぱり日本に居た時よりも焼けている。健康的って言えば健康的な顔だ。

「顔も小さいし、髪はちよつと短いけどセレットほどじゃないしね。奇麗に結ってあげるから、今日は黙ってお姫様になりなよ」

アンジェさんの言葉にセレットさんはちよつと笑って、

「そうよ。今日の主役はヨーコなんだから。お料理食べるだけじゃ物足りないでしょ？ 鬼教官たちやハイラント様の度肝を抜いてやりましょうよ」

セレットさんも私と同じように勉強会に参加しているお仲間だ。彼女は学校に行く機会がなかったというところで真面目に勉強しているのだが、優秀と見るや目の敵にするバールム先生や教室では厳しいヨアヒム先生にしごかれている。だから日頃、教師陣を影で鬼教官と言って憚らない。

というか、私が着飾って度肝を抜くのは、セレットさんの日頃の鬱憤を晴らす材料にされてないか？ まあ、美女にもてあそばれるなら本望というもの。

そうよ。これよ！ 私が求めていたのは、女の園でのレッツガールズトーク！

「いつも澄ました顔の男たちを誘惑するのも、女の特権というものでしょ？」

うふふと微笑むセレットさんは可愛らしいけど、私に同意を求めないでいただきたい。

申し訳ない。そんな高いスキルは持ち合わせがございません。

ガールズトークと言うには、熟練度の高い会話が交わされるので、私にはついていけない事が多々ございます。

他人のうにゃーんな事情とかさ……何も知らない男性が聞いたら気絶するんじゃないかな。この美女会話。

耳年増が更にグレードアップしたような気がします。遠くに来たもんだ、異世界とかね……。

それにしてもどうしても私はドレスを着なけりゃならないのですよ。ようか。

お姉さんたちは私を放ってあーでもないこーでもないと始めてしまった。これではあの白チャリムの二の舞だ。

私が持ってきた白チャリムやかんざしはこの衣裳部屋にある。白のチャリムドレスは人気があるらしく、二日に一度は誰かが着ているのを見かける。やっぱりさあ、あれは十代の女の子が着てこそ価値が出るんだよ。

そういえば、と私は色んな衣装を持ちだしてきたお姉さんを尻目に衣裳箱をこそごそやる。この衣裳部屋の箆笥は桐みたいないい香りがするんだ。虫は嫌いだから寄ってこないんだって。

確かこの三段目にあったはずだ。

私は丁寧に仕舞われていた一枚にチャリムを取り出してみた。

魔女に買われた蒼のチャリムだ。フリルも飾り紐もろくについてないけどそで口や裾に細かい刺繍がしてあって、趣味のいい一枚だ。悔しいが魔女の趣味はいい。

このチャリムはどうとう着る機会もなく、この女の園に来てしまった。

「あら、いいチャリムね」

目敏く衣装箆笥の前でチャリムを広げていたのを見つけたのは、セレットさん。

「ちょっと地味だけど、ヨーコに似合いそう。うん。髪を派手にすればいいのよ。あとお化粧もね」

彼女の一声で三人の美女の意見は決まったようだ。

美女達の視線を一身に浴びて、私はただ「はい…」と肯くしかできなかった。

いつもこの美女たちに馬鹿にされてるあの美形共を笑えない。

歓迎会と予感

夕暮れに近づいた頃、私はようやく化粧台の前から解放された。ええ、まあ私ほどになるとお化粧も特殊加工が必要なのです。

手拭いやら出てくるからお化粧も時代劇みたいなおしろいかと思うでしょう？　ところがそこは西洋文化満載で、面白いことにチークやマスカラもどきまであるんですよ。グロスが出てきた時には一瞬異世界だということを忘れそうになりました。

仕上げとばかりに繊細な長い飾りのついたイヤリングをつけられて、さあ出来上がり！　と美女が満面の笑顔で言ってくれました。

鏡の中には、いったいどなたですかと問いたくなる私の姿。

澄んだ蒼のチャリムにあえて飾りはつけず、足りない髪を奇麗に結いあげて華美じゃないけど複雑な編み込みとかんざしで飾り、特殊加工のお化粧で平凡な顔が恐ろしく魅惑的な顔になって、飾りと房のついたイヤリングがちりんと鳴る。厩掃除してた指は先まで磨かれてマニキュアが光り、紐を巻きつける形のピンヒール（そうなんだよ。ハイヒールがなんとあるんですよ）、チャリムの控え目なスリットから見えるのは今まで七分丈パンツに隠れてた私の大根足。……ドレスの時は紐パンでいけと命令されて……。どんなお色気抜群な仕打ちだよ！　そういうお姉さん達は力仕事をしない限りは惜しげもなくその魅力的なお御足を披露している。こちらは目の保養です。

アンクレットまでつけられて、さあ行けと言わんばかりに姿見の前に立たされると目を覆いたくなる。勘弁して。

私だとわからない、かつ、足を見なければ、姿見には清楚で年齢不詳の美女が立っていた。

「やっぱりねー。ヨーコ細いから白い足が眩しいわ！」

特殊加工のお化粧を施してくれたリアミスさんは満足そうにしきりに頷く。

うんうんと一緒に頷くのはアンジェさん。

わたくし肉が足りないんです。申し訳ない。こんな魅惑のビフォーアフタでも蠱惑的になれない貧相さで。

しかも最近、運動量がハンパないから筋張っている。

「そろそろみんな揃ったんじゃないかしら？　急ぎましょ」

と、セレットさんはチャリムを脱ぎ出した。

「そうね」と他の美女も着換え出す。

お風呂では遠慮してるのに、うっかりその豊満な肉体美を鑑賞してしまいました。すごい……これが紐下着の真骨頂。

思わずごちそうさまですと頭を下げそうになりました。

皆さんはそのままです十分お綺麗なのでお化粧も手早いです。彼女たちはそのナイスボディを惜しげもなく顕現させて、地味なチャリムから胸元に窓のついてるチャリムをお召しです。

いかん。鼻血が出る。

それは生物学上女という性をいただいているからして、色んなものを踏み外しそうなのでこらえました。

私は幸せいっぱい美女三人に連れられて、食堂へと招かれました。もうお腹いっぱいなんですけど。

「ようこそ！　ヨーコ！」

一発ギャグではありません。

この不思議な屋敷に住んでいるほぼ全員が集まって、私を迎えてくれていた。立食パーティなのかお酒や料理が所せましとテーブルに置かれ、食堂の真ん中に作られた広間にはここの入寮生たちと美形が思い思いの正装で、歓迎ムード一色。

ここまで歓迎されたことないから、一瞬引き返そうと腰が引けました。

でも美女三人に促されるまま色とりどりのお料理満載な上座に座らされて、見憶えのあるピンクのお酒を注がれましたよ。

おお、これはあの社長の苦手な美味しいお酒！

あれからこの方、俊藍に見張られてお酒とはとんと御無沙汰だったので、嬉しくて顔を綻ばせると、

「気に入っていたようですので」

聞き覚えのある声に顔を上げると、彼の正装なのだろうか。白い詰襟の有害銀髪が胡散臭く微笑んでいた。

テンション下がるわあ。

同じグラス手にしてるから、もしかしてさっきお酒持たせてくれたのはこの有害銀髪なのだろうか。うげえ。

とりあえず笑顔で「ありがとうございます」と言っておいた。空気を読むのは日本の社会人の必須技巧だ。

「じゃあ、乾杯しようか！ ヨーコ」

私の座らされた隣に立って、豊かな胸を張ったのはアンジェさん。艶のある黒チャリムがとても良くお似合いです。

でも、乾杯の挨拶なんてやったことないよ。

けれど、これは私の歓迎会なのだと聞かされている。

一応、音頭はとっておくべきだ。私はピンヒールでこけないように立ち上がる。

「えーと……七日前にここに越してきました。ヨーコと申します。不束者ですがよろしくお願いします。では、皆さんの幸福と私の前途を祈って！ 乾杯！」

大歓迎だよ、子ねずみちゃん！ とか笑いが起こったけど一斉にグラスが揚げられる。

挨拶が終わってガヤガヤと宴会が始まった。ほっとしたら、アンジェさんが微笑んでくれた。ああ、何とかうまく出来たのかな。

「ほんとにアンタは面白い子だよ。これから、改めてよろしくね。ヨーコ」

……まずいことは言っていないはずなんだけど。社会人として語彙が危ないのは自覚している。

でも、優しく笑ってくれたアンジェさんと、ここに居るみんなの気持ち心地いい。

「やあやあ！ 子ねずみちゃん。見違えたよ！」

華やかに上座の前にやってきたのは言わずもがなのヨアヒム先生だ。彼のお召し物は彼にしては地味な部類だった。有害銀髪と同じような深い青紫の詰襟だ。この詰襟、肩に房やら細かい装飾はついているけど、ヨアヒム先生が普段着ているものより静かめ。色は違

うけど、ここに居る美形たちはみんなこの詰襟のようだ。

「特殊加工のお陰です」

「素直にありがとうと言いなさい。奇麗だよ」

と、珍しくヨアヒム先生はテンションを下げたかと思えば（普段が高すぎる）私の手をとって、映画俳優のような美しい所作で恭しく掲げると、指先に触れるか触れないかというほど唇を近づける。

っぎゃあああああああ！

叫びは心の中で上げておく。

マナー教室で習ったんだけど、淑女にご挨拶するとき、紳士はホントに手に口づけたらダメなんだってさ。それは恋人にすることであって、マナーとしては違反らしい。

だから、ヨアヒム先生はまごうことなく紳士のご挨拶を体現してくれてるわけだけど……こ、これは心臓に悪い。小心者には耐えられません。

カチコチになった私にふっと笑うのやめてもらえませんかね。腹立つ。

ヨアヒム先生の場合、形はいいんだけど普段がうざいぐらいのハイテンションだから、急にこんなことされると動悸がする。くそ、美形なんか滅びろ。

「うわあ、ヨーコさん。ほんと、お綺麗ですよ」

にっこり覗いてきたのは、ウェンダ青年。彼も詰襟がよく似合う。この子は美形の中でもまだ可愛げがあるからマシだ。

と、思ってたのに、ヨアヒム先生にならって紳士のご挨拶。私の顔が目も当てられないほどひきつっていたのに……こいつ、意外と腹黒かもしれない。

「他の者たちは、主賓にご挨拶をするのが遅れそうですね」

その様子に呆れながら顔を出したのはバーリム先生。

この人は私に「奇麗になりましたね」と微笑んでくれたただけだった。ああ、意外と常識あるよ。このドエスは。

「なんだい。また娘たちが囲んでいるのかい？　しょうのない子たちだ」

アンジェさんは会場に出来ている幾つかの人の輪を呆れながら眺める。

精一杯着飾ったんだろう、乙女たちにきゃいきゃい囲まれているのは、頭一つも二つも出た詰襟の美形たちだ。宴会とは言っても裏方もいるから数は足りないが、遠目にもミーハーな彼女たちを騒がせるには充分の男前っぷりだ。

「いいんですよ。楽しければ。いい目の保養です」

美形に女の子に妖艶美女たち。これ以上ないぐらい煌びやかな宴会だ。

久しぶりに飲むピンクもお酒も相変わらず美味しい。

「アンタが楽しいならそれでいいさ」

アンジェさんが微笑んでくれるなら、私もそれでいい。

彼女が料理を取ってきてくれるというので場を離れると、やはりここに避難していたらしい美形三人は乙女たちに連行されていた。おーおー、あしらい切れないウエンダ青年はもみくちゃにされている。いい格好だ。

けれど、あれだけこの乙女から憧れられているにも関わらず、私の隣でぼけっと立っている有害美形を乙女は誰も連れて行こうとしない。というか、誘われてもこいつがやんわり、きっぱり断っていた。何故だ。なぜ、あんな可愛い顔で可愛い格好した女の子に誘われて断れるんだ！ やっぱり鬼畜かこいつ。

「ここの生活はいかがですか？」

私の周りに誰もいなくなったことを確認してから、有害銀髪はにつこり問いかけてきた。

でも、につこりしながら、目は笑っていない。

いつもの有害銀髪だ。

私はお酒を舐めながら、妙に冴えた気分です組んだ。

「快適ですよ。お酒は飲めるし、女の子いっぱいだし、食事に毒も入りませんしね」

「それは良かった」

くそ。嫌味もにつこりかわされた。やっぱり鉄仮面だわ。

「それで、ここはどういう場所なんですか？」

平和で、楽しくて、けれど、ここはどこかおかしい場所だ。

どれほど周囲の人が良い人ばかりでも、私の不信感はぬぐい切れない。

「……あなたは、頭の良い方だ」

いつか、俊藍にも言われた言葉だったので、思わず有害銀髪を見上げた。

彼は宴会会場を目を細めて見つめている。それは憐れみのような、侮蔑のような、そんな眼差しだった。

「頭が良過ぎる」

「……そんなことを言われるのは二回目です」

馬鹿にしてるのかと睨むと、銀髪は少し笑ってこちらを見下ろしてくる。

冷たい視線が少し柔らかくなって、痛みに耐えるような顔になってしまっている。

華やかな顔なのにもったいない。

「あなただから言いましょう。あなたは自分でここを出ることは出来ない」

胡散臭い笑みはない。だから、これは嘘ではないのだろう。

だが、出来ないと言われるとやってみたくなくなるのが人間だ。

「手段を考えつかないとしても？」

わざと挑発するように言ってみるが、銀髪は首を横に振っただけだった。

「あなたはここを自分で出することは出来ない。アンジェの言ったことはある意味正しい。ここは、行きたい場所に行くために、彼女たちが魂を安める場所です。あなたには、ここに居てもらいます」

魂を安める場所。

今まで苦しい人生を歩んできた彼女たち。そんな彼女たちを癒す場所。

いったい、何のために？

けれど、銀髪の顔を見ていてこの違和感がようやく分かった。彼女たちには、夢がない。

よく学生にあるような、あれがしたいこれがしたいというものがないのだ。ここでは外へ出る以外のことは何でも叶う。

勉強会、マナー教室、今日みたいな華やかな宴会。当番だって日々を飽きさせないためのイベントだと思えば、たとえサボったりしても厳しく叱ったりしないことにも肯ける。

足りないものがあるのなら、やりたいことがあるのなら、この銀髪に言えばたいいのことは何でも叶うようになっていく。

「どうしても出ていきたいとおっしゃるのなら」

有害銀髪は、それだけで有害になりそうな美しい碧眼で私を射抜くように見つめた。

「私の妻にでもなりなさい」

さざ波のような宴会の熱気も談笑も、すべて消えたような気がした。彼らは誰も私たちの会話を聞いていない。

「ただし、一生、私の屋敷から出られません。それでもよろしいのなら」

最後に有害銀髪は、ここでは定番になっている胡散臭い微笑みを張り付けた。

「大事にしてさしあげますよ？」

私は怒鳴ることを忘れて、もっと別のことに気が付いた。

あの、美形たちが着ているのは、いつか城で見た、護衛官の制服に良く似ていることに。

「——あんだ、何をしようとしているの」

碧眼が静かに私を制した。

これ以上喋るなというのだろうか。

ろくでもないことが起こる予感がする。

悲しいことに、私のこういう予感は外れたことがない。

本当に、悲しいことに。

畑とねずみ

あいにくと、ごちゃごちゃ考える頭を私は持っていない。

いくら不吉な予感がするからといって、身構えてばかりではお腹も膨れない。

というわけで今日の当番は、不人気ランキング第二位の畑作業です。

歓迎会の後から、なんだかお姉さん達に捕まっちゃあ、フリフリのチャリムに着替えさせられそうになるんで、勉強会とご飯食べる以外は衣裳部屋に近づかないようにしています。（勉強会前はセレットさんに捕まるんだよ）

美女は三日で飽きるってのは嘘だね！

もてあそばれるようになって三日目だけど美女にかまわれるのは嫌じゃない。

着せ替え人形は勘弁していただきたいのですが。

そんなわけで、私は今日も当番をあくせくこなしているわけです。格好はもちろんおばちゃんチャリム。

食糧なんかは大半買うんだけど、こうして作れるものは屋敷の裏にある畑で栽培してるんですよ。

今の時期はムシの叫びみたいな顔した果物になるらしくてゴロゴロしています。

このムシ、人の顔の形していてかなり気持ち悪いうえに割ると青いんですよ。どこぞの極彩色なケーキじゃないんだからさあ、食

欲落ちるよね。まだ警戒色の赤のいいです。さすがの地元民（異世界の人）も食欲がわかなかったらしくて、この実はサルっていう雑穀で作ったお酒に漬ける。漬けてみるとあーら不思議！これが私の大好きなピンクのお酒になる。どんな科学反応してるんだろ……。

しかもこのムンク、スイカみたいになるんです。スイカって芋づるみたいに大きくなって、茎の根元になるじゃない？それが今はムンクの叫びの顔が畑一面に転がっている。

夢に見そう……。

確かに嫌だ、この作業。ちょっとしたホラーだよ。

これなら畑耕して腰痛めた方が良かったかも。

この前トマトもどき（こちらは紫）の時期が終わったんで全部抜いたから、そのあと耕して休耕地にするんだけど、それはこの畑担当のお兄ちゃんがやっている。

ふとそっちを見たら、すでに作業は終わっていた。

お兄ちゃんはというと、クワを片手に畦でのんびり煙管吹かしている。

今日の当番は収穫だから、もう一つの畑にある小さな花びら形の果物（これみかんの味するんだよね）の収穫に他の当番は行っちゃってる。だから、このホラー畑には私一人。

ムンクの収穫も子供一人ぐらいは入れそうなカゴがいっぱいになれば終わりだから、今手に持っているムンクを放り込めば終わりだ。あー、この作業も腰にくる。

腰をとんとんやって、カゴを持とうとしたら肝心のカゴが無かった。

目で追ったら、私よりもひよろひよろした畑担当のお兄ちゃんが持っただけとしていたところだった。チャリムを腕まくりした腕

は色白で細い。うっかりしたら折れるんじゃないかってほど。でも意外と軽々とカゴの紐を肩にかけると畦まで持っていてしまう。

「ヴェイユさん！ 私が持ちますってば！」

あとを追いかけると、のんびりとクリーム色の頭がめぐって私を見下ろしてくる。ホントここに居る男は背が高いな。

「ここはもういいから、他の子たちにもう終わりって言ってきてくれる？」

このヴェイユという、のんびりと微笑んで眼鏡をかけている人からはまず畑仕事を連想できない。背は高いのかもしれないけれど、ひよろひよろとしているから威圧感がなくて年齢不詳、チャリムを腕まくりしたらそれはそれは白い腕。首の後ろで一つにしているクリーム色の髪も相まって、いつも陽だまりみたいに温和に笑ってるから、彼を見て力仕事を想像できる人は少ないだろう。でも畑仕事は好きらしくて、日がな一日、畑に入り浸っている変わり者だ。

「……わかりました」

ヴェイユさんはここに居る美形共とは少し違う美形だ。ヨアヒム先生みたいな華やかな美形と違って、中身がのんびりとしているから整った顔があんまり気にならない。だからか、何となく抵抗感が薄れるようだった。

歓迎会の日から、美形たちは何となく私を見張っているようだった。

私が何となく感じる程度の監視なんで、本当に見てるだけなんだ

ろう。きっと、あの有害銀髪が何か言ったに違いない。あのお綺麗な顔を一発殴っておけば良かった。

それに、あの有害銀髪、ハイラントの言った通り、ここから逃げきるのは無理だ。

私一人ならば、きっと逃げることは何とか出来るだろう。

けれど、あの有害銀髪が何か企んでこの屋敷を作ったと分かった以上、私一人で逃げるわけにもいかない。

でも、はたして彼女たちに、それを説得することが出来るだろうか。

アンジェさんは言った。

彼女たちは立場や生活が違えど、外界で傷を負ってここに来たと。そんな彼女たちに、今、再び外へ飛び出そうと言えるだろうか。最長でも五年ここに居れば、自然に出ていけるというのに、ここで一人解放運動をしたところで、とんだ茶番になってしまう。

見えてきた畑では、すでに収穫を終えたらしい二人の女の子が畦でおしゃべりに花を咲かせていた。

「ねえ。もう終わっていいって」

私が声をかけると、「ありがとう」と笑ってくれる。彼女たちはまだ素直な方だ。

再び、おしゃべりに戻ろうとするので、私は彼女たちの収穫カゴを引き受けることにした。

「……ミーメ達ってさ、ここ、好き？」

出ていこうと思った？ とは聞けなかった。
彼女たちは特に不審に思わず応えてくれた。

「うん、好き。こんなチャリムドレスが着られるんですもの」

鼻にそばかすの浮いた優しげな面差しのミーメは穏やかに言う。

「ここに来るまでは畑を耕すばかりで、お洒落に気を使ったこと無かったから」

彼女はまだ十六歳だ。お洒落をしたいお年頃。

「私も。ここは誰も意地悪言わないし」

先生たちも優しい、とはに cand で笑ったのはちよつとふくら丸い色白のテト。彼女も十六だという。

「そっか」

彼女たちは勉強やお洒落をするよりも働くことが優先の生活で、まるで早々と大人になってしまったかのようだ。あまりに短い少女時代。

楽しそうに笑うミーメやテトに、何があつてここに来たのか、私は聞くことはできなかった。

私は彼女たちのカゴを持って、畑の側の掘っ立て小屋に向かう。

ここの倉庫に収穫したものを積んでおくのだ。

こんなところにまで泥棒なんて来ないからカギはかけられてない。勝手に倉庫を開けて入ろうとすると、中からタイミングを計った

ように戸が開けられた。

「ご苦労さま」

本人は意識していないのか、微笑みながらヴェイユさんは自分の腕を差し出してくる。貸せということか。

断る理由もないから私は「ありがとうございます」と素直にカゴを渡す。ヴェイユさんはカゴの中身を確認しながら、

「働き者だねえ。子ねずみちゃん」

「……ヨアヒム先生のマネをしないでください」

美形からとはいえ、二十四にして不本意なあだ名をちょうだいしたものだ。誰かに謹んで進呈したい。

ごめんごめんと謝りながら、あんまり悪いと思っていない顔でヴェイユさんは苦笑する。美形嫌いになりそうだ。

「でも可愛いじゃない？ 子ねずみちゃん」

「私は嫌です」

派遣社員でやっていくためには嫌なことは嫌とはっきり言うことなんだ！

要領の悪い私でも、これぐらいの社会人らしさはあると思う。

「じゃあ、子猫ちゃんに訂正してもらう？」

常識ってなんだろう。

「嫌です。私は葉子っていう立派な名前があるので」

誰が子猫ちゃんだ。どこのホストのセールストークだよこれ。

「そんな顔しないで、小鹿ちゃん。拗ねても可愛いだけだよ」

ちよんと、鼻の頭をつつかれた。

ぐわあっ！

仰け反りそうになるのを堪えたら、ヴェイユさんは笑って、もう帰っていいよと言い残すと倉庫の中へと消えていった。

美形退散！

私は鳥肌の立った腕をさすりながら屋敷に戻る羽目になりました。
くそ。

風呂とピンク

食堂で熱いお茶でももらおう。昼酒もいいけど、趣味じゃない。

私は川で手を洗ってから、屋敷に戻って、廊下をぽてぽて歩きながら大きく伸びをした。腰がバキバキ悲鳴あげてる。断じて年のせいじゃないと思いたい。

屋敷の一階に私室はない。あるのは食堂と風呂と広いエントランスと客間だけ。もっとも、客なんて有害銀髪と行商のおっちゃんだけだ。だから、普段、使われているのは食堂と風呂だけ。

けど、広い屋敷だから廊下は無駄に長いんだ。

「ちょっと」

だから廊下で呼びとめられると、ちよっとうんざりする。食堂に辿りつかないじゃない。

廊下には私の他に誰もいない。甲高い声に渋々振り返ると、三人ほどの綺麗なチャリムドレスの女の子たちが一緒に私を睨んでいた。この子たちは初めて見る顔だ。同じところに住んでるけど、結構違う生活してるから意外と会わないもんだよね。

「アナタね。最近入った、ハイラント様に気に入られているっていう新入りは」

三人の真ん中に立つ、濃い水色の髪の子が気の強そうな目をさらに釣り上げていた。子猫っていうのはこういう子のことを言うんだよ。

「新入りですが、ハイラント様に気に入られているわけじゃありま

せん」

つか、どこの誰が気に入ってる相手に「逃がさないから嫁になれ」とか言うんだ。……あれ、セリフだけだと物凄い告白に聞こえるからすごく不愉快。

あんまり心外なので顔を思わず歪めたら、女の子達はそれが気に入らないのか余計に眉を跳ね上げる。

「だったらどうして、ヨアヒム様達に気に入られているのよ！ アナタみたいな背ばかり高くて平凡で可愛くない年増女なんて、目障りなだけなのよ！」

うんまあ、その通りだと思うよ。確かに彼女たちと視線の高さはいくぶん違うし。頭一つ分ぐらいは違うんじゃないかな。というか自分の信者ぐらい適当に管理しとけよな美形共め。

まあ、これぐらいの嫉妬、可愛いもんだ。

「うん、わかった。ヨアヒム様たちには、これから気をつけて近寄らないようにするね」

迷惑してるのはこっちだからな。あのクジャクは分かりやすいから避けやすい。

「馬鹿にしているの！」

珍しく素直な私の発言だったというのに、火に油だったらしい。女の子たちはとうとう顔を真っ赤にしている。可愛いわあ。

「どうしたの？」

なごんでいたのも束の間、三人の後ろからぬつと出てきた顔を見て私はうんざりした。

「こんなところで、麗しいレディ達が何の素敵な会議かな？ 良ければ僕も混ぜてくれないかな」

現れた男は煤汚れたチャリムであるにも関わらず、まるでお伽話の王子様のようにきらびやかに微笑んだ。

男には、決して使いたくないんだけど、この男には使わざるをえまい。

彼を一言で表現するのならば、妖艶。

長身は言わずもがな。肩までの滑らかな髪はなんと淡いピンク。瞳はプラチナのような灰色。女が嫉妬する白い肌は美しいが、整った顔の眉は案外きりりとしていて女には見えない。骨格はしつかりしていて男性的な美しさが醸し出されていて、薄い唇が微笑むと艶やかに人を魅了する。

案の定、彼の無駄な色気に当てられたのか、女の子たちの顔は失神しないか心配するほど真っ赤だ。

「愛らしいレディが声を荒げてどうしたの？ 僕でよければ君の繊細な心を痛めている棘を取り除いてあげるよ」

にっこり彼が微笑むと、女の子たちは悲鳴のように叫んだ。そうでもしなけりゃ、話せないからだろう。

「ふ、フリエル様のお手を煩わせるようなことではありませんわ！」

失礼いたします！ と走り去っていった彼女たちは賢明だ。

間抜けな私はついていくことも出来ず、この馬鹿みたいな美形の

前に取り残されてしまったのだから。

元凶の美形と言えば、のんびりと彼女たちを見送って、

「どうしたのかな。トイレかな？」

口を開くと残念なのは、どこの美形でも同じらしい。

そう、このフリエルも同じだ。

誰が美形の口からご不浄の名前が出てくると思うだろうか。アイドルはトイレ行かないんだぞ。

「じゃ、まあ失礼します」

三十六計逃げるにしかず。

しかし、私は戦略的撤退に失敗したらしい。

「待ってよ。麗しの乙女。見たところ、疲れているみたいだね。せっかくだから、お風呂にでも入っていないか？」

つつつと距離を詰められて、妖しく微笑むピンク頭。

「僕が心をこめて、ご奉仕してあげるよ？」

「せっかくですが、ご遠慮させていただきます」

何を隠そう、このフリエルの担当は風呂たき。

箸より重たいものを持ったこともなさそうな美形が風呂窯に薪をくべて「お湯加減いかがですか？」なんてやってるんだから笑える。笑えるのだが、彼はあんまり笑えない理由でこの風呂たきを担当している。

この残念美形、フリエルは、髪の色もピンクなら、頭の中身もピ

ンク色なのだ。

ゆえに、お姉さん達からは毛虫の如く嫌われていて、風呂の時間はバースリム先生かザイラスが彼をふんじばるのが日常の光景となっている。

「何を怯えているのかな。君の小鳥のような心臓を僕が癒してあげるよ。その美しい身も心も」

きっと、社長と俊藍が聞いたら爆笑するだろうな。このセリフ。特に社長は、私の心臓には毛が生えていると信じているだろうから。

それに私はこの残念美形を撃退する絶対の呪文を知っている。

「あ、アンジェさん」

「え？ あ、アンジェ！ これはその誤解だよ！ 彼女が疲れているみたいだから早めにお風呂に入るか尋ねていたところであって、断じてあわよくばアンアン言わせて、じゃなくて不純異性交遊をしようとしていたわけじゃなくて…」

憐れなほど青ざめたフリエルは私の方を向いたまま、私が指さした誰もいない廊下に向かって延々と弁解を始めた。

その昔、フリエルはアンジェさんに手酷くやられたらしい。何を何かは聞かなかったけれど。……たぶん、聞かなくて正解だったと思う。

私は不幸なフリエルを廊下に置いて、食堂へ足を向ける。

あの弁解は一度始めると一人で一時間はやっている。……ほんと、何があったんだ。

食堂と過去

食事の時間でもないから、食堂には誰もいないようだった。

ここの食堂は広い。せいぜい五十人ぐらいが食べられればいいのにゆうに百人ぐらいいは入れるほどある。ずらずらと並んでいる長い机も椅子も、一見質素に見えるけど、造りはしっかりしてるし肌ざわりもいい。旅をしてきた経験からすると結構良い値打ちのものだ。思えば、この屋敷の家具は全てにおいて安いものじゃない。

いったい、何をしようとしてるんだろ。まさかあの有害銀髪がこれだけ金かけて奉仕活動なんてやってるとは思えないし、あの冷血漢にハーレム作ろうなんて情熱があるとは思えない。

もやもやするわあ。脳ミソ無駄に使わせるなんて、とんだ有害！

「すみませーん。お茶もらえませんかー？」

食堂に入っすすぐの調理場に向かって声を上げると「はい」と声が返ってくる。

もちろん三度の飯の当番もあるけど、この当番は人気が高い。

何故なら、

「今からお湯を沸かしているから、ちょっと待っててくれる？」

ここにも美形が住んでいるから。

調理場の奥からカウンターに顔を出してにっこり微笑んだのは、宗教画にでも居そうな天使のような金髪美形。腰までありそうな金糸のような髪を緩く三つ編みにしている姿は、フリエルと互角の艶やかさを誇るけど、思わず懺悔したくなる清廉潔白そうな雰囲気がある。でもチャリムの上に身につけているのは、可愛いフリルのついた新妻エプロン。

似合う。ええ、似あう！

これで美味しいご飯を毎日作ってくれるんだから、女であれば嫁に欲しいと思うよ。……あれ、違う？

「今日は良い茶葉の封を切ったんだ。運がいいね」

ふんわり微笑む碧眼の美形さま。

料理が出来て、優しくて美形。完璧すぎて穿った見方しか出来ない私にはちよつと眩しい。

「はあ、ありがとうございます。スクリームさん」

……この天使美形が、なぜこの名前なのか。私も聞いた自分の耳を疑いました。ええ。まあ、別の悲鳴なら毎日上げさせていると思うけれど。

「今日の当番は終わったの？」

スクリームさんはカウンターからこちらを覗いて、のんびりと天板に腕を置いた。

「はい」

「ヨウコさんは頑張り屋さんだね」

「……いえ、そういうわけでもないんですが……」

恥ずかしながら、生まれてこのかた、私は趣味というものを持つたことがない。だから、自由に過ごしていいと言われると大変困る。暇してるとお姉さん達に取っ捕まって着せ替え人形だしね。

キラキラした笑顔が眩しいです。

それにしても、私がここの料理のお手伝いに入ったのは過去一度か二度だ。他は当番を代わってくれるというので（むしろ代われと言われる）スクリームさんと話す機会はほとんど無かったはずだ。

「すごいですね。スクリームさん、ちゃんと人の名前覚えられるなんて」

私なんてうつかりすると自分でつけた脳内あだ名（歩く十八禁と有害銀髪とか）が一人歩きして名前を忘れそうになる。元々、人の名前と顔を一致させるのは苦手だ。

「この前、歓迎会をやったばかりだよ？　ちゃんと覚えているよ」

美形に苦笑されるとドキドキするっていうのは本当だ。何か悪いことをしたのかと思ってしまう。

「でも勿体無いなあ。この間みたいに綺麗な格好すればいいのに」
いえいえ、あれには三時間以上を費やしているのでおいそれとは出来かねます。

「食事の時間ぐらいはお洒落してきてくれてもいいんだよ？」
にっこり笑ってスクリームさん。

「あの長くて白い足、チャリムの裾から覗くと綺麗だったから」
謹んで訂正しよう。
やっぱり、美形は黙っているのが一番だ。

スクリームさんの発言にげんなりきたところで、お湯がちょうど沸いた。何事もなかったかのように（スクリームさんにとってはななんてことないんだろう）エセ天使美形が持ってきてくれたお盆に乗っていたのは、急須と小振りの茶器が三つ。

「悪いんだけど、あそこの二人にもお茶あげてくれない？」

白魚のような指がさしたのは、食堂の一番奥。よく見ればちんまり二人が座っている。

私はお盆を受け取って近づいてみて、ちよっと目をむいた。

彼らの周りには、机に椅子に、足元に、お酒と思しき匂いを放つビン、ビン、ビン。

驚いたことにそのほとんどが既に空だ。

私に気付いたのは、赤い髪の男の方だった。彼もこの屋敷に居るから、当然のように美形だ。炎のように明るい赤毛は癖もなくすんなりとしていて、流れる髪を首の後ろでまとめられている。けれど、髪の色とは違って切れ長の瞳は静かな深い藍色。着ているチャリムも暗い灰色で、髪以外はまるで影のようにも見える。整った顔には感情があまり出ないうえ、彼の声は滅多に聞かない。だから、黙って座っていると人形のようにも見えた。

彼は私を見とめると、ふいと顎をしゃくって隣を指す。

「——— いったい、どうしたんですか。セレットさん」

肩でばつさりと切られた明るい紫の髪が、テーブルの上で突っ伏している。その白い指先にはお酒の入ったグラスが。

彼女は私の声に起きたのか、しどけなく体を起こすとチャリムの前があられもなく開いていて白い谷間が剥き出しになっている。う

おおお！ 見るな！ 赤毛！

うろたえる私に反して、赤毛の美形は特に気にした様子もない。

「やつほー、ヨーコちゃあん」

セレットさんもお機嫌で笑ってくれる。相当飲んでいるらしい。いつも余裕のある美女っぷりからは想像できない上気したお顔だ。

「ねえ、聞いてよ。この堅物保健医、もう飲むなって言うのよお。あ、ちよつと、クーリガン！」

堅物と評された赤毛の保健医は、セレットさんを見捨てて彼女の持っていたグラスを素早く奪ったのだ。

「ヨウコ、茶を入れてくれ」

喋ったよこの人。案外透るいい声してる。

このクーリガン先生は、白衣は着てないけどこの医者をしている。保健室から滅多に出てこないから、こういう組み合わせも珍しい。

素直に頷いて、セレットさん達と向かい合わせに座ってお茶を入れる。

湯気に乗って、花の甘い香りが漂ってきた。

お茶を出す頃には、セレットさんの文句も収まって私から大人しく湯呑を受け取る。

クーリガン先生にも差し出したら、無表情だけど「ありがとう」と返された。人嫌いつて聞いてたけど、案外常識はあるんだな。

自分の湯呑にもお茶を入れて、一口飲む。ああ、美味しい。ムカつくことも面倒臭いことも忘れそう。

「ヨウコが笑うと、なんだか嬉しいわ」

そう言って微笑むセレットさんの笑顔も穏やかだ。

顔は赤いままだから、まだ酔っているんだろう。まあ、これだけ飲んで酔わないっていうのも悲惨だ。

何か忘れたくても、酔った勢いで誤魔化せない。

「どうしたんですか？ 珍しい」

保健室以外に居るクーリガン先生も珍しいけど、こうやって泥酔しているセレットさんも珍しい。彼女は、大酒飲みというよりも、お酒を楽しく飲む方が好きな派だ。何でもいいから酒をかつくらう私とは違って、よくお酒の席でこれこれのお酒はね、と由来だって聞かせてくれる。

セレットさんは、飲み終えた湯呑の口を指先で辿って、頬杖をついた。

「今日はね、特別なの」

物憂げな視線は色っぽいんだけど、その瞳は空っぽだった。私はかける言葉がなくて、じっとセレットさんを見つめた、

「今日はね、私の子供が死んだ日なの」

形のいい唇は、何かを手繰り寄せるように続ける。

「流行り病だったわ。この世に生まれてたった一年。一年だけで来世に行っちゃった」

子供を持った経験はない。その上、人の死すら、私には遠かった。――この世界に来るまでは。

セレットさんは、まるで自嘲するような笑みを唇に乗せて、目を細める。

「元々、私とは縁が薄かったんでしょねえ。きっと、間違えて、私のところに産まれてきちゃったんだわ」

「そんな…っ！」

そんなことはない。そんなことを言うつもりか。私は息を詰まらせた。

「せっかく、頑張って生まれてきたのに、私のところに生まれたばかりに、たった一年しか生きられなかった」

きっと、誰が悪いわけじゃない。

けれど、自分を責めずにはられない。

その子の分まで生きて、と言えるだろうか。

無責任な言葉だ。自分が、子供の命を奪ったと責めているのに。二度と会えない場所に残されるというのは、身を引き裂かれるほどの痛みなのに。

「……辛かったですね」

思わず零した私の言葉で、セレットさんは思い出から立ち返るように、私を見た。

そして、私をじっと見つめたかと思うと、まなじりにいっぱい
の涙を浮かべた。

いくら大人びていても、彼女は、まだ二十歳なのだ。

子供のようにわんわんと泣き出した彼女の紫の髪を撫でながら、
私はアンジェさんの言葉とあの有害銀髪という言葉を思い出していた。

ここは、帰りたい場所に帰るための、行きたい場所へ行くための、
魂を安める場所。

この、悲鳴のように泣く彼女たちを、いったい何処へ導くという
のだろう。

化粧落としと慣習

思い切り泣いて、酔いも手伝ったのか、セレットさんは食堂のテーブルで寝てしまった。

不可抗力とは言え、美女を泣かせてしまったので心が痛む。ごめんなさい。

クーリガン先生が彼女を部屋まで運んでくれるというので、彼にセレットさんをお姫様抱っこしてもらった。

いくら無表情お人形先生でもあの豊満な胸を背中全面で感じるなんて許さん。

「晩御飯、とっておいてあげるから」

食堂を出ていきかけたら、スクリームさんがカウンターから顔を出して手を振った。

思っていたよりも時間が経っていたらしい。

食堂から出ると、廊下は夕焼けで染まっていた。

クーリガン先生は無言で歩きだすので、私もついて行く。

「――悪かったな」

一瞬、誰に話しかけられているのかわからなかった。
ほぼ一拍置いて、思い出す。

他に誰が居るんだよ！ クーリガン先生に決まってるし！
危うく貴重な体験スルーするところだった。

「どうしてですか？」

幸い、クーリガン先生は私の不自然な間を気にしないでくれたらしい。

無表情だからわかんないけど。

「……君なら、セレットの気持ちが幾らか分かるかと思って、付き合させた」

謝る理由が分からない。

不思議そうな私の顔色を読みとったのか、クーリガン先生は珍しく（それほど付き合いもないけれど）言葉を淀ませた。

「――セレットと同じ境遇の君ならば、彼女の心を理解できると思った」

男には分からないからな、と付け加えられて、私は思わず口をぽかんと開けた。

「……えっと……え？」

セレットさんと同じ境遇。……ええっ!?

「私、子供産んだ経験はありません!」

うつかり叫んでから慌てて口を塞いだ。危ない。セレットさん起こすところだった。

クーリガン先生はまたも珍しいことに、動かないはずの表情筋が驚きを表している。

「……そうなのか」

肯定されたら返す言葉が見つからないじゃないか。

「いや、慣習で、女性は喪に服するとき、髪を切るものだから……」

そういやここはイッツ異世界！

てか、喪に服してんのに旦那さん連れで旅してたら、お子さん亡くした可哀想な奥さんじゃないか！ だから旅してる時、やたら親切にされたのか私……。いたたまれない……。

私の髪はまだ肩を越したぐらいだけど、そういや大抵の人は男女問わず肩より長いわ。うわぁ、常識非常識！

「だが、セレットがここまで泣くのは初めてだ」

クーリガン先生の静かな声にセレットさんの寝顔を覗きこむと、彼女はどこかすっきりした顔で眠っている。

結構、長いこと泣いてたもんね。

「……私、何か酷いことを言ったんでしょうか……？」

子供を亡くしたことも、ましてや産んだこともない私だ。恋愛経験値さえ無い私が彼女の心を理解できたとは思えない。ただ、本当に漠然と、辛いだろうと思っただけだ。

淋しいや悲しいだけでは、語りつくせないほどの喪失感。

それは、どんな痛みよりも辛いと。

「いいや。君のお陰だ」

目の錯覚でしょうかね。クーリガン先生が淡く微笑んだ感じがします。

夕焼けのせいにしておこうかな。うん。

私たち、年長さんの個室は四階にある。

まあ、見晴らしはいいんだけど、階段がねえ。

三階、二階は乙女たちの部屋と勉強会の教室なんかがある。教師や庭師たちの部屋は二階から四階にまたがっている。ちなみに四階はフリエルとバース先生先生の私室がある。フリエルの真下の部屋にはザイラスさんの部屋。……配置についてはなんだか説得力があるよね。

そんな感じだから、そろそろ夕食にみんな降りてきたりするんで、私とクーリガン先生は一番北にある、食堂とは反対側のほとんど年長さんしか使わない階段をのぼってる。今更だけど、セレットさんのこんな稀有な姿、晒し者にするわけにもいかないし、クーリガン先生はあれで人気あるんだよねえ。寡黙だから奥手な乙女に結構マジで憧れられてる。

セレットさんを先生一人に任せておくのは忍びないんですが、いかんせん私は階段のぼるだけで精一杯です。でも、細身に似合わず、クーリガン先生はセレットさん一人抱えても足元が全然ふらつかな。い。そういや、どうもここの美形たちは見た目の儚さ（ドぎついのもいるけれど）に似合わず、みんな頑丈そうだ。

まるで、あの俊藍を思い出させるような。

「ヨウコさん」

もうそろそろ四階につくというところで、女性が四階からこちらを覗いていた。

「セルジュワ先生」

濃紺の地味なチャリムの女性が微笑んで四階に迎えてくれる。濃い灰色の髪を奇麗に結った姿は傍目にはオールドミスっぽいけど、そんなことでは隠しきれません。きめの細かい象牙色の肌、長いまつげに縁取られたオレンジの瞳。ふっくらした唇に少し口紅を乗せているけれど、必要がないほど艶めいている。華やかさではなく、淑やかな美女だ。

この物静かな美女が、ヨアヒム先生と一緒にマナー教室を担当している、セルジュワ先生。

「よく寝ているわね」

セルジュワ先生はそつとセレットさんの寝顔を覗く。

もしかして、セルジュワ先生も彼女の事情を知っているのだろうか。

視線を投げると、先生は応えるように微笑んだ。

「さあ、こちらへ」

セルジュワ先生に促されて、私たちはセレットさんの部屋へと向かう。

部屋の前には、アンジェさんが待ち構えていた。

クーリガン先生と私はアンジェさんとセルジュワ先生に導かれて、セレットさんの部屋へと入る。

そういえば、セレットさんの部屋に入るのは初めて。

造りは私の部屋と同じ。でもやっぱり生活している人が違うから部屋が違って見えた。

木目の優しい色合いの家具に、窓辺には葉草の鉢植え、それから

小さな本棚には本がぎっしり詰まっているけれど、勉強机にはノートとペンとインクが置かれているだけ。必要なものは全て片づけられているけれど、リネンの香りが爽やかで、セレットさんの人柄がうかがえる。お色気満点なセレットさんからはちょっと想像ができないほど、優しい部屋だ。

私が物珍しげに部屋を眺めている間に、クーリガン先生はセレットさんをベッドへ寝かせると、さっさと部屋を出ていく。なんか感動的に、この人は一番まともだ。残ったセルジュワ先生とアンジェさんがセレットさんを寝かしつけるために掛け布団をめぐったので、私もお手伝いに向かう。

「いい顔で寝てる」

そう笑ったのはアンジェさん。彼女が持ち出してきたのは化粧落としの油だ。美貌は損なわないけど、やっぱり落とさなきゃね。柔らかい布に油を染み込ませて、手早くセレットさんの化粧を落とす。すごいなあ、布一枚で終わったよ。

私はセレットさんの素敵な靴を脱がせて、魅力的な足を掛け布団の下へと。

セルジュワ先生は筆筒からセレットさんの寝巻きを出してきている。

「ありがとうね。ヨウコ」

化粧を落とし終わったアンジェさんが私ににっこりと微笑む。

「あんただから、セレットは思い切り泣けたんだと思うよ」

美女のお役に立てて光栄です。でもね。

私は美女二人に自分の髪について延々と弁解することになりました。

申し訳ない。私に色っぽい事情は一切ございません。

崖と薬草

やつほーつつつ！

思わずそう叫びそうになりました。

二十四歳にもなったんですが、この衝動はどうしようもない。つーか、久しぶりだよね！

こんにちは、トラブルさん！

ただいま、わたくし君島葉子がおりますのは、鬱蒼とした森の中。たった一人で、道はもちろんありません。

あっはっはっはっはー！

森の中なんて久しぶりだよ？ 懐かしいと思いますよ？ だっ

て二、三週間はこんな森の中で暮らしてたんだからなあ！

派遣社員のお仕事でひーひー言ってた自分が嘘のようです。

どうしてそんなことになってるのかと言うと、ことの始まりは私が朝から水汲み当番していた時に遡ります。

川もあるけど、食堂の裏手に井戸があってね。今日はその水汲み当番だったんだよ。水はもちろん台所の水ガメへ。あの天使美形のスクリームさんが御苦労さまと言ってくれるまで汲まなければな

らない。女の子相手でも、意外と容赦はない天使さんです。

「今日も精が出るなあ」

ようやくと釣瓶を引き上げたところで、黄緑頭の巨漢に声をかけられた。

目測だけどザイラスと良い勝負の背丈だろう。でも無視できない威圧感チャリムの上からでも分かるその隆々とした鎧みたいな筋肉のせいだ。印象は厳つい。でもただのマッチョじゃなくてしなやかな印象があるのは、精悍なくせに何だか気品のある顔立ちのお陰だろう。この巨漢も黄緑の髪を肩より長く伸ばして結っているから、短いのは男女問わず珍しいらしい。

「こんにちは、リカインド先生」

このマッチョ美形、明らかに力仕事の分類だと思うでしょ？ 違うんだな。このリカインド先生はバーリム先生と一緒に勉強会の先生です。得意教科は、私の感覚だと数学。なんかねー難しい名前ついてんですよ。えーと、魔術的観点における自然整理学、だっけ……？ 要は、私は苦手だということ。

「毎日、ヨウコぐらいだぞ？ 当番真面目にやってるのは。そういや、この前の宿題よく頑張ったな。基礎はちゃんと出来るんだから、今度は応用頑張ろうなあ」

豪快に笑うリカインド先生は生徒受けがいい。そりゃそうだ。こーやって出来の悪い生徒にも褒め言葉と一緒に次の課題を示してくれるんだから。滅多に生徒を褒めないバーリム先生はマニア受けだ。私は曖昧に笑いながら、釣瓶から桶に水に移す。桶を両手にすでに三往復。けっこう腕にくる。二の腕とか。そのうちたるんでた脂

肪が筋肉になるんじゃないか。

釣瓶をまた井戸に戻すとぎぶぎぶ音がする。ああ、もう一杯。引き上げようと縄を握ったら、横からごつごつした手がぬっと出てきた。

振り返ったら、リカインド先生がにと笑って、縄をがちり片手で握る。

「ちょっと手伝ってやろう」

そう言われたかと思ったら、ほとんど一息に釣瓶が手元に戻ってくるじゃありませんか！

おお！　すごいな！　さすが、その上腕二頭筋は伊達じゃない！　私が釣瓶を両手で引き上げるのに、リカインド先生は左手一本。ちよつとドキドキするわあ。マツチヨって素敵！

私は感動したまま釣瓶を受け取って、桶にざーっと水をあける。

「ありがとうございます…」

ちよつと恥じらった風にお礼を言ってしまったのは、乙女の必須技巧…ではなく、本気でドキドキしてしまったから。死んでたはずの乙女回路の生存確認できた気分だ。

リカインド先生はちよつと笑って、私の頭を大きな手でぐしゃぐしゃやりだした。

「あっはっはっは！　可愛いことも言えるじゃないか。セレットと一緒に居るからてつきり嫌われてるのかと思ってたぞ」

苦手なのは、リカインド先生担当の教科であって、先生自身じゃない。

というか、二十四の乙女の頭を掻きまわすな！　せっかくお隣の部屋のエレリアさんに梳かしてもらった髪が台無しだ。本当は結ってくれると言っていたけど、辞退していて良かったのか悪かったのか。

「セレットさんも私も、先生のこと嫌いなわけじゃないですよ」

大きな手から逃れて何とか髪を整える。

このあと、バーリム先生の勉強会だから、セレットさんにどやされるわ。

「セレットは、まあ頭がいいからな。俺たち教師もついつい熱が入るわけよ」

自分の教えたことを十二分に理解してくれたら、確かに面白いのかも。でもセレットさん、刺繍がものすごく上手いんだけど、その売上のほとんどを勉強のために使ってる。

「ほどほどにしてあげてください」

そう言うと、「そういえば、ヨウコは二十四だったな」と思いましたように言われました。ええ、ええ、すみませんね！　ガキ臭くて！

「まあまあ、怒るなよ。これ運んでやるから」

リカインド先生は慣れた様子で言うと、さっと水を移したばかりと桶を軽々と持ち上げる。

「ヨウコはノルテ語がちよっと苦手だな。頑張って単語覚えろよ」

今度試験するから、とりカインド先生。

語学もリカインド先生です。

そして、語学も私は苦手です。

リカインド先生に散々からかわれながら、食堂の台所に続く勝手口の戸を開けると、可愛いチャリムの女の子が待ち構えていた。この大胆な巻き毛、見覚えあるよ。おお！ あのお色気フリエルから逃げていった、あの少女たちの一人じゃない。

今日は食堂の当番らしい。

「……遅いわよ」

向こうもこっちを覚えていたらしくて（まあ当然か）不機嫌に台所の横の水ガメを指す。

でも手ぶらな私に気づいて眉をひそめた。

「悪い悪い」

私の横から顔を出して、リカインド先生は空気読まないで巻き毛少女に桶を渡した。思わず、と言った風に受け取った彼女は「なんて人なの！ 先生に手伝わせて！」的な顔で私を睨んでから、先生にはしおらしく「すみません」と上目づかい。素晴らしい。これが乙女の技よ。

そして私のことは無視ですよ。まあ、いいけど。可愛いなあ。

そんな様子を不思議そうにリカインド先生が見ている、

「仲悪いのか？」

と、聞いてくるから笑ってしまった。まーさかあ。

「いいえ」

嫌われるほど知り合いじゃないもんで。

さっき、巻き毛少女に渡した水で充分だったのか、コンロ（窯の上）に鍋を置けるようになって、コンロみたいになってるんだよ）の上で中華鍋（正式名称は知らない）を手際よく返しているスクリームさんに笑顔で「もういいよ」とお許しもらったので、私は晴れてお役御免となった。

リカインド先生は次の授業の準備をするからと言って、食堂から屋敷に帰っていった。

そういや、リカインド先生の私室はフリエルの斜め下。……あーまあ、うん。どうしようもないよね。

午前中の水汲みが終わったら、あとはバーリム先生の勉強会だけだ。いつもはその後にも当番押し付けられたり、アンジェさんから刺繍習ったりしてるんだけど、今日はアンジェさんも別の当番あつて、今日の私に予定はない。

授業終わったら刺繍の練習でもするか。……なんかね、壊滅的に美術的センスが無くて教えてもらってるだけじゃかなり申し訳ないですよ。家庭科のお裁縫は大抵、弟に押し付けておりまして。レース編みまで嗜む彼の家庭科のセンスはハンパない。きっと母のお腹の中にそういうセンスを私は置き忘れてきたんだと思います。

そんなことを徒然考えてたから、食堂から女の子達が睨んでたなんて気付くはずないですよ。殺気じゃあるまいし。

スクリームさん特製の昼食後、セレットさんに取っ捕まって、綺麗なチャリムドレスを着せられて（すでに恒例となっている感があります）のバーリム先生の勉強会は、

「今日は、薬草を実際に探してみようと思います」

参加した生徒を連れて、課外授業でした。

屋敷をぐるりと囲んでいる森の中で、バーリム先生はドエスの顔に笑顔を張り付けて本を片手にのたまります。

「皆さんはこれまで、薬草を本の中で学んできましたが、実際の薬草に触れ、扱ってみてこそその薬草学です。これまでの成果を試すつもりで、この森の中から薬草を探してきてください。二十種類ほど」

ちよつとまてええええい！！！！

そりや確かに五十や百ぐらいは覚えて（覚えさせられた）るかもしれないけど、あんた、いきなり素人に森の中で探してこいとか！ やっぱりドエスはドエスだ。

ザルと教科書代わりの薬草の初歩本を持たされて、生徒はみんな啞然としてるのに、この人めっちゃ笑顔だもの。鬼畜はお母さんのお腹の中に人の情を忘れてくるようです。

「本と授業で、薬草の特徴も生態も教えましたね？ さあ、暗くならないうちに行ってください。寅の刻になったら私が笛を吹きますから、ここへ戻ってきてくださいね」

森の中とはいえ、現在、森の出入り口付近だ。木の葉の向こうに屋敷が見える。

バーリム先生は自分の足元に置時計を置いた。ねじ巻き式の時計が刻んでいるのは昔懐かしい十二支だ。こちらでは十二支ではなくて、十二聖獣というらしい。十二支のおとぎ話で猫が仲間に入れなかった話が出てくるけど、こちらの世界で入れなかったのは人間だ。そこら辺はなんか複雑な愛憎劇が繰り広げられていて、ウエってなつたんだけど、時間の列に入れなかった人間は、巡る時間と輪廻に支配されているんだってさ。

でもまあ、普通に暮らしてる人たちは日が昇ったら起きて日が沈んだら寝るみたいな生活なんだけど。

まあ、不満タラタラでもやるしかないから、無慈悲に森の中へ放り込まれた乙女たちはみんなめいめいに探索を始めた。

「ヨウコと一緒に楽勝だわ。ねえ？」

セレットさんに腕を組まれて豊満な胸が腕に当たっていると鼻の下を伸ばした私をお許し下さい。

いや、でもねえ。俊藍と魔女に叩きこまれたとはいえ、特殊な環境だったし、この森の地域に見知った薬草が生えているかも分からない。そういうや、この森って東国の北になるのか南になるのかすら知らないわ。

「じゃあ、私たちも一緒に探していいい？」

近寄ってきた女の子たちは顔馴染みの少女たちだ。セレットさんは気前よく「いいわよ」と微笑む。お姉さんだわ。

少女たちに囲まれて、薬草探索。薬草摘みっていうのがあれだけど、女の子に囲まれてるなんて幸せ。

私は少女たちが見つけてきた薬草らしきものを判別する役目にな

りました。彼女たちが一生懸命に見つけてくる薬草や毒草（薬草とよく似てるからね）を一人一人に丁寧に教えてあげる。「わあ、すごーい」なんて歓声あげられると、魔女にちよつと感謝もしてみたくなる。ありがとう！ 私、今すごいモチてる気がする！

「ねえ、ヨウコさん。こっちにも薬草があるみたいなの。ちよつと一緒に探してくれない？」

と、女の子に言われたら、ほいほいついていっちゃうよね。幸せでほくほくしてたしね。

しばらく、その女の子と一緒に木根を探して歩いていた。その薬草ってのが、特定の木の根元にしか生えないやつで、彼女に連れられてきた場所にはその木が群生してて、目当ての薬草はすぐに見つかるかと思っただけど、

「…………あれ？」

気がつくのと、辺りには誰もいない。

「ポーラちゃん」

さっきまで一緒にいたはずの女の子の名前を呼んでみる。返事はない。

彼女と二人きりで連れてこられたから、セレットさんの姿もない。

嫌な予感がする。

うーん。

いや、しかし。

でもなあ…。

悩みながら歩いていたのがよろしくなかったらしい。

あっと思っただ次の瞬間には、足を滑らせていた。

ずささ！

滑ったけれど、もこもこした草に助けられて腰をやんわり打っただけに留まった。うんざりして見上げると、今までいたはずの森が一段高い崖の上にある。滑り込んだここは幸い平地になっているけど、この崖を登るのはちょっとしたロッククライミングになりそうだ。

考え込んでいた私の上から、女の子たちの笑い声が響いてきた。見上げる木々の影から出てきたのは、三、四人ほどの女の子たち。くすくす笑う彼女たちの中に、ポーラちゃんも居る。

あら。嫌な予感。

「よく分からないって顔ね」

女の子たちの中から出てきたのは、あの巻き毛の少女だった。つり上がった猫目を細めて、猫みたいに笑う。

「ここは、お屋敷の敷地の一番端よ。周りに獣除けの呪いがしてるけど、一步でも外を出たらここことはまるで違う森になっているんですって」

なるほどな。どうりで、この森には鳥以外いないと思った。獣を除けるのに、特別な呪いを使うらしいが、他にも方法はある。音を

鳴らすこと、それから火を絶やさないと。これは、俊藍との旅では日常茶飯事だったことだ。大抵の獣は火を怖がるという。てか、ほとんど俊藍任せだったから、どんな獣が居るかすら知らないよ。

顔をしかめた私の様子を、巻き毛の少女は楽しそうに見て笑い、他の女の子達もそれに倣った。

「怖い？　そうよね。あんたここへ来たばかりだものね」

怖いというより、不安だ。何せ今の私は水色のチャリムドレスに、薬草とザルと薬草学の本一冊を手を持っているだけ。ちゃらちゃらしたイヤリングと細いカンザシは役に立ちそうもない。

巻き毛少女は笑っていたかと思えば急に目を吊り上げて、口を曲げた。

「どうしてあんたみたいな女を先生たちやアンジェ達が構うのかわからない！　あんたなんて、ここに相応しくないんだから！」

そう言い捨てて、さっと彼女は身をひるがえす。

「せいぜい迷って泣くといいわ。あんたなんか、森で迷って居なくなっちゃえばいいのよ！」

巻き毛少女の捨て台詞を残して、女の子達は彼女に続いて去っていく。

崖下の私は当然、放置。

うん、ちょっと女を見誤ってた。ふた月も野郎に囲まれて過ごしていたから勘が鈍ったか。

この森から出たら、まずあの美形共に文句の一つも言ってやろうと、私は心に決めた。

———こんな感じで、私は森に放り込まれたわけです。

神様、仏さま、ちょっと対人運だけでも上がるようにしてもらえないだろうか。

ロッククライミングとお説教

白い雲が流れている。

今日は幸い晴天だ。でも西の雲が黒くて怪しい。夕方の前に雨が降るかもしれない。

私は、崖の下から覗く空を見上げて思った。

すっかりサバイバル慣れした私は天候を素人ながら読めるようになりました。

アウトドア好きのお父さんに話したらきつと喜んでキャンプに連れてってくれるだろう。以前の私はまったくのインドアだったので、小さい頃ならまだしも物心つく頃にはちよい悪親父の道楽と決めつけて父の誘いを断るようになっていた。

今思えば、俊藍とのサバイバル生活に物凄い抵抗が無かったのは父のお陰だろう。

いけない。ホームシックになっている場合ではない。

さすがにサバイバル慣れした私でも、夜の森を何の装備もなく歩き回るのは遠慮したい。というかあり得ないから。唯一の救いはチャリムの下は紐パン一丁じゃなくて七分丈パンツを履いていることだ。

目の前にそびえるのは三メートル弱ほどの崖。苔蒸してるわけでも蛇の巣がありそうな草地でもない、ベージュシックな岩の崖だからあとの頼りは己の力のみ！

よっしゃ登るぞッ！

「……何をしてるんだい？」

聞き覚えのある声に振りかえると、やや唾然とした五十絡みのおっちゃんが私を振り仰いでいた。

二十四歳のいい年した乙女があられない格好で岩にしがみついている。

そんな姿に、いつもはにこやかな行商のおっちゃんは騎竜の手綱を力なく落とした。

——助けが来るなら誰か教えてよ。ねえ！

私はおっちゃんの荷車で屋敷まで連れて帰ってもらえることになりました。

穴があつたら入りたい。

「……ありがとうございます。ヨルダさん」

きっと屋敷に届けるのだろう生活必需品と一緒にがたごと揺られながら、私は気まずい思いで頭を下げた。

ありがたいよ。とっても、ありがたい！

しかし、恥じらいの国から来た私はいたたまれない気分で感謝を捧げる。

だってね、なんか、こう弁解とかしようがないじゃないか……いい年した大人が森の道の横で必死に崖登ろうとしてたとか…。

「ヨウコはここへ来たばかりだからねえ。森の道を知らなくても当

然だよ。とても分かりにくいからね」

気のいいヨルダおじさんは慰めるように言ってくれるが、「はあ……」としか返せなかった。

「それにしてもどうしたんだい。普通はこんなところまで出てくることなんか無いだろうに」

他にうまい話題も思いつかないので、私は恥を忍んでおっちゃんに授業のかくかくしかじかを話した。もちろん、巻き毛少女たちについては伏せて。私は大人だし、幸い助かったから置いてかれたところで別にどうということはない。申し訳ないな。涙線が限りなく硬くて。

やっぱり頼るべきは美形じゃなくて太鼓腹のおじさんなんだわ。うん。

「そうだったのかい。バーリム先生にはもうちょっと気をつけてもらわなきゃなあ」

苦笑したこのヨルダさんは、五十絡みだけど毛はふさふさしている。血行いいんだろうなあ。着物の帯からはみ出たお腹とか。

バーリム先生は、あれはもう性格だから直せないと思う。

「屋敷の生活にはもう慣れたのかい？」

おっとりした拍子で尋ねられたので私は素直に肯き返す。この荷車、結構揺れるんだよ。

「はい。アンジェさん達によくしてもらっているの」

どっちかというと、おもちゃにされている節もある。教師陣除くとアンジェさん以外は全員年下なんだけどな！

それはよかった、とヨルダさんとのぼの世間話しているうちに、屋敷についてしまった。

今日は私、運いいじゃないか。崖下に落とされたのはノーカウントだ。

荷車から降りると、ヨルダさんは騎竜を玄関ポーチの脇に放して（おっちゃんの騎竜は飼い主に似てのんびりしてて頭がいいので逃げたりしない）雑穀やら調味料やらを降ろしだったので、私も手伝おうと進み出た。

「ヨウコ！」

「雑穀の袋を抱え上げたところで振り返るとセレットさんが慌てた様子で私の方へ走ってくる。ああ、際どいスリットから美しいカモシカのような御足が……。」

「どこに行っていたの！」

「ごめん。ちょっと遠くまで薬草刈りに行きすぎて、崖から落ちたところをヨルダさんに拾ってもらって」

「おっちゃんに話した通りに説明する。だって、イジメ公表とかめんどくさい。」

「それなら良かったわ……」

紫の髪の美女がホッとしたのも束の間、柳眉を困ったように歪め

てしまう。

「ヨウコが無事なのに、何所にいったのかしら、あの子。あなたと同じように、ハンナが薬草を取りに出かけたまま時間になっても帰ってこないの」

私は思い当たる節が満載にあるのでおずおずと尋ねてみる。

「ハンナって……まさかあの芸術的な巻き毛の？」

「えっと、カーリングのことを言ってるのなら、そう、その子だと思うわ。どこかで見かけたの？」

私が落とされた崖はバーリム先生の集会所からかなり離れていたらしい。崖をよじ登ろうとしていた時にも、ヨルダさんに連れられて帰ってくる時にも甲高いはずの笛の音は全く聞こえなかった。

彼女たちが自分で来た道に戻れなかったとしたら。

「今、探しているの？」

「ええ。バーリムとザイラスとウエンダが探しに出かけたわ」

暇だと思われるけれどフリエルは外されたんだな。うん。

「夕方になると、きっと雨になるから急いだ方がいいね。私も探しに行くよ」

心当たりならあるからね。

ヨルダさんに断って荷台に雑穀に戻すと、おっちゃんも心配そう

に、行っておあげと言ってくれた。

でもセレットさんはあまり良い顔をしない。私の善行はそんなに珍しいですか？

「……いいの？ ヨウコ。ハンナは、あなたに意地悪してたでしょ？」

さすがにお姉さんたちの目は節穴じゃないのね。

まあ、確かに崖の下に落っことして森に放り出すとか尋常じゃない。私じゃなければ、ハンナが言った通り、きつと泣いて森をさまよっていたことだろう。運が悪ければ死んでいた。

事の発端は、幼い嫉妬なんだろうけれど、事が大きくなってきた。それに、私はあまり良い大人ではない。

「セレットさん」

殺すつもりが無くても、害意があったのは確かだ。たとえハンナを縛る法はなくとも、報いは必ず彼女に向かう。

「恩というものはね、売れるときに売っておくものなんですよ」

どんな人にも恩を売っておく。感謝するしないは知ったこっちゃないけれど、忘れられるものじゃない。本人が忘れても周囲の人が覚えている。誰にも知られない恩はこっちも忘れてしまうに限る。

ハンナみたいな子供が一人でいつまでも上手く立ち回るのは、結局のところ無理があるのだ。

「一人だけではぐれたんですよね？ いつも友達と居たのに？ 友達に見放されてさぞ淋しい思いをしていると思いませんか？」

たった一人で取り残された所に差しのべられた手を振り払うことが出来るのは、どうしようもないドエムだけだ。

「……意外と、ヨウコってイイ性格してるわよね」

セレットさんが何とも言えない顔をしている。頭のいい美人は好きだ。

性格については、褒め言葉として受け取っておこう。

東国は、比較的日本と気候が似ているようだ。

四季は春と冬だけに大別されていて曖昧だけど、雨は多い。かといって、亜熱帯のような気候でもない。

峻険な山が多く、大木の深い緑が多く、そして水も多い。

雨が降るならとセレットさんに持たされたのは雨避けのコートだ。生地も表面に雨避けの呪いを編んでいて、水を弾いてくれるという。そういえば、俊藍のマントも雨に濡れた覚えがない。あれにも雨避けの呪いとやらが編み込んであったのだろう。とても丁寧に作られていたから。

こちらには雨合羽やゴム製品はないので、雨避けのコートや編み笠で人々は雨をしのいでいるという。編み笠があるからてつきり蓑が出てくるのかと思いましたよ。

私は雨避けのコートを羽織って森へと入った。

少し歩くと、木々の隙間にウエ ندا青年を見つけたので手を振る。

「見つけた？」

私に気がついた青年はこちらにやってきて首を横に振った。

「いいえ。でも、ヨウコさんはご無事で良かったです」

にこりと笑うけれど、言外にお前は屋敷に帰れオーラが漂っている。

「もうすぐ雨が降るよ。たぶん、本降りになったら風邪引いちゃう」

私の助言に少し目を丸くして、ウエンダ青年は、困ったなあと思える。

「ザイラスもそう言ってました。雨が降るなら暗くなるのも早いから、早く探さない」と

厄介なことになるね。

「私は彼女と授業受けてたわけだし、私も探すよ」

「でも…」

でももかしもあるか。美形はこれだからいけない。

「じゃあ、探してくるから」

「え！」

私は慌てたウエンダ青年を取り残して、先ほどポーラに連れられていかれた方へと向かった。

薬草を取った位置で何となく場所を覚えている。

しかし、会ったのがウエンダ青年で良かった。

ザイラスはえもいわれぬ頑固さでついてきそうだし、バーリム先生に至っては論外だ。議論するだけ私が不利。

採った薬草の位置を確認しながら進むと、あの、ポーラに置いていかれた林に抜けた。

さあ、ここからどうしようか、と思ったら、頭から被った雨避けコートにぽつりと水滴が落ちてくる。

やっぱり降り出したか。

雨は瞬く間に本降りになって、あつという間に辺りを霞ませる。暗くならないうちに早く探し出さなければ、ミイラ取りならぬハンナ取りがハンナになってしまう。

私は目測で、ハンナ達が帰ったであろう場所に見回した。

同じような木が並んでいるが、獣道を渡り歩いたサバイバル経験が直感めいた閃きをくれる。あの草は私の通ってきた道には無かった。あの木の洞は見たことがある。

自分がどんどん野生化しているような気がします。

もしも帰り道を間違えたのだとしたら、林の入口近くだろう。ここから先は同じような景色が続いているから。

私は帰り道の目印に近くにあった草を結ぶ。これは敵に印を悟られないための目印のつけ方らしいけど、俊藍は私にこんなこと教えて何がしたかったんだろう。敵って何。

私は違う方向に見当をつけて歩きだした。辺りを見回しながら、人影や気配が無いかも確認する。

まだ獣除けのある範囲らしく、何かがある気配はない。代わりに容赦ない雨がコートの上から体温を奪う。

これは寒いだろうな。

別に私はハンナを殺したいわけでも苛めたいわけでもない。誰かを虐めたい気分は正直よく分からないタチだ。

ケンカ売られたら容赦なんかしないけど、それでも殺したいわけじゃない。それは、命を奪わなければならぬ事態に陥ったことがないからだと思うし、それはきっと、幸福なことだ。

雨が降ると思い出す。

あの、震えている大きな肩にかかる、重い重い責任を。

孤独な背中を思い出して、目を伏せたけれど、視界の端に木陰で震えている人を見つけて思い出を追いだした。

こんなことは、暖かいスープでも飲みながら思い出せばいい。寒くなるだけだ。

「ハンナ」

木陰で震えていた彼女は、はっと顔を上げて泣きそうな顔で私を睨んでくる。

まあ当然か。

小綺麗なチャリムドレスは見る影もなく濡れて、自慢の巻き毛も隣れに乱れている。

「さあ、帰りましょ」

「―――どうして、あんたが来るのよ」

泣きたいのか、睨みたいのか、ともすれば途方暮れたような顔で

ハンナは私に向かって唸り声を上げた。けれど、齒の根が合わないほど寒いらしい。温暖な気候とは言え、森の夕暮れはただでさえ寒い。

「ちょうどヨルダさんに助けてもらってね。一足早く帰ってたの」

私の説明が気に喰わないらしい。ハンナは座り込んでいる木の根を思いきり殴りつける。

「どうして、あんたばかり！ あんたばかり、良い目をみて！
どうして、私がこんな目に遭わなくちゃならないのよ！」

ハンナは金切り声で叫ぶと、狂ったように地団駄を踏んだ。

「あんたみたいな女、居なければいいのに！ 真面目に働くことしか能がなくて、一人じゃ何にもできない馬鹿のくせして、どうしてあんたみたいな女が良い目ばかりみて、この私がこんな惨めな目に遭わなくちゃならないの！」

彼女は熱に浮かされたように私を睨む。

「何を言ったって偽善者ぶって何も言い返せないくせに！ あんたみたいなグズ死ねばいいのよ！ ここから居なくなっ！ 私の前から居なくなっ！」

誰もが思うことだ。

こいつのせいで、こいつのお陰で。

でも、

「どうして、あんたの言うことを私が聞かなくちゃならないの」

思ったよりも平板な声が出たらしい。

ハンナはうつむきかけていた顔を上げて、私を丸い目で見上げる。

ハンナの嫉妬は、ただのきっかけに過ぎないんだろう。

いつだったか、いつもだったか。いつだって、私は誰かに言われていた。

何もできないくせに、働くしか能がないのか。それは上司だけではなく、特に同僚から。

きつとそれに悪意なんてない。代わりに善意もない。

きつと誰もが自分のためにやってしまう。無意識だからタチの悪い、悪意のない、悪意。

今までだって、これからだって、誰でもどこでもそんな悪意にさらされる。

だからといって、何を言われても言い返すことの出来ない大人しい私にも、

「ねえ、答えて。ハンナさんには賢い頭があるんでしょう？ どうしてあんたの命令を私が聞かなきゃならないのか、私が納得いくように答えてみせてよ」

虫の居所が悪い時もある。

「今日、雨が降るって知ってたの？」

意識して柔らかな言葉を選んだはずなのに、ハンナが寒さ以外で怯えたように見えた。

「森でもしも置き去りにされたら、どうなるか考えた？ 運が悪け

れば、きつと死んでいたわねえ。そうになっていたら、ハンナは人殺し」

ねえ、と尋ねるとハンナはびっくりと体を震わせる。

「賢いハンナには、分かっていたわよねえ？ 自分の使った言葉がどんなに他人を傷つけて、怖がらせて、殺してしまうかもしれないって」

美人で、何でもできて、本当に他人を思いやれる人は、想像できないほどの酷い目に遭った人だけだ。

たいていの美しい人にはきつと、私のような運の悪い人間のことなんか眼中にも入らない。

それが罪だと言うつもりはないけれど、恨みを買うこともあるってことを覚えておけばいい。

「さあ、帰りましょう？」

子供にお説教はもう沢山だ。

あやすように優しく言って、手を差し出すとハンナは渋々手を取った。

私は雨避けコートを広げてハンナに半分貸してやることにした。置いていくのも見捨てていくのも簡単だけど、それじゃ私が加害者だ。こんな子供と同じことをやるなんてプライドが許さない。

ハンナは大人しくコートの半分に収まった。彼女は私よりも頭一つほど小さいので、私が頭から抱きかかえるような形になる。

考えないわけではないだろうか、私は先に言うておくことにした。

「このコートをあなた一人が掴んで逃げても迷子のあなたは帰れないわよ」

コートの端を掴んでいたハンナの指が震えた。考えてたのか。馬鹿だろ。

ハンナは深く溜息をついた。

その息は白い。

見た目よりもだいぶ参っているらしい。

早く帰った方が良く考えたんだろう。素直に彼女は私についてくる。

「――私は、復讐するまで死ねないの」

雨音に消えそうなほど小さく、けれど低くハンナは唸った。

青白い顔とは裏腹に、猫目だけがきらきらとしている。

「兄弟は多くて貧乏で、そんな家が嫌で家出してやったのに、あつという間に売春宿に捕まったわ。でも、あとで話を聞いて笑ったわ。親が実の子を売り飛ばしたっていうのよ」

ハンナは低く笑った。

それは地の底から這い上がるように低く。

「もう死んでやるしかないと思っていたら、この屋敷に連れてこられたの。チャンスだと思ったわ。私はここを出たら、あの家に復讐してやるの」

笑いながら話すハンナの瞳に正気の色はない。

ただ、ただ、深い自分を憐れむ心だけ。

「だから、いつも平和そうにとぼけた顔してるあんたが気に入らない」

一瞬で現実に戻ってきたハンナが私を見て睨んでくる。

おそらく、私が自分よりも世間知らずということだけで、気に入らないわけじゃないのだ。

きっと、彼女は理屈ではわかっているのだろう。

家族に復讐することも、両親を恨むことも、自分の悲しさが埋められないから口になっているだけで。

私のもっともらしい言葉が、彼女はこの上もなく嫌なのだ。凶星が気持ちのいいものじゃないことは、私も知っている。

「ハンナは」

来た道を辿りながら、私はハンナから視線を外した。

「頭もいいし、容量も良いし、可愛いからどこで働いてもどこに居ても、可愛がられたことしかないのね」

ちやほやされるだけで虚しいなんて、誰もが言えるセリフじゃない。何も持っていない人間からすれば、人を馬鹿にしてるのかと言いたくなるほどの暴言だ。というか問答無用で崖から突き落としたくなる。

「だから、悲観するほど悲しい目になんか、実際は遭ってないよ」

悲しいというのなら、復讐を口にする今のハンナが一番悲しいだろう。

何が悲しくて仇のことばっかり考えて暮らしてないといけないんだ。美味しいもの食べて忘れてしまえ。

ハンナは泣きそうに顔を歪めたけれど、

「馬鹿にしないで！」

真っ赤な顔で私から顔を背けただけだった。

もう少し可愛げがあれば、ツンデレで可愛いんだけどなあ。

私が馬鹿なことを考えている間に、見憶えのある場所までやってきた。バーリム先生が集合場所にしていた広場だ。

「ヨウコ！」

誰かと振り返ったら、ウエンダ青年が慌てた様子で駆けってくる。雨に濡れて好青年ぶりがあがったな。

振り返る拍子に隣のハンナを見せてやったら、ほっとしたように微笑んだ。

「良かった。心配したんだよ、ハンナ」

爽やかな笑顔に何と答えたものか困ったように、ハンナは顔を真っ赤にしたまま押し黙る。

すると、ウエンダはしょうがないなあというように苦笑した。

……こういうこと、女ってするよねえ。外面ってやつ。

「よく見つけたね、ヨウコ」

ウエンダ青年の探るような視線が私に刺さる。

そうなのよ、運が良かったわーと私も笑っておいた。ごまかすの

は得意な方だ。

「ウェンダ！ 見つけたのか？」

腹に響くような重低音が熊のように森から出てきた。ザイラスだ。誰もいない森で会ったらまず逃げるような顔でこちらを見下ろしてくる。怖いってば。

ハンナはお愛想を引っ込めて私の影に隠れるし。小さい子って羨ましい。

ザイラスは私とハンナを見とめると、はーっと息をつく。御苦労さまでした。

「見つかりましたか」

最後に出てきたのは、眼鏡を外したバーリム先生だった。うお、ドエスのくせに奇麗な顔が眩しい！ 雨に濡れて妙な色気まである。恐るべし。

「ヨウコが見つけてきてくれたんです」

どこまでも好青年なウェンダが矛をこちらに向けてくる。やめてよ。ドエスと折衝する気はないんだから！

私の思惑の外から、バーリム先生はひたところちに視線をやると、いつもエセ臭い笑顔ではなく、しかめっ面を向けてくる。

「あとであなた方には特別に課題を課します。いいですね？」

やっぱり鬼畜だ。交渉のこの字もない！

これ以上の妥協はないんだろうから、私は素直に「はい…」と言えなかった。

戦々恐々とする私をひと睨みして、バーリム先生も長い息をついた。

はーひとまずこれで帰って暖かいスープでも飲めると思ったら、

「ハンナ！」

乙女には限界だったのか、彼女は私の隣で足から崩れ落ちた。

思わず抱きとめてみると体が熱い。

首に触ると、かなり熱が高い。顔が赤かったのは熱のせいだったのか。

ハンナは自分のお望みどおり、美形たちに心配されながら屋敷に連れてかれました。

彼女はこのあと三日ほど寝込んで課題もまんまと免れましたよ。

私？

私はそりゃあ元気なものでした。薬草の調合を手伝わされたり、バーリム先生の部屋の片付けまでやらされました。

世の中って無情だ。

マナーと草むしり

森で迷子事件から、幾日経っても、私は何の変哲もない毎日を送っている。

変わったことと言えば、ハンナがたまに当番を手伝いにくるようになったこととか、セレットさんと前より仲良くなれた気がするとか。

「そうじゃない！　こう、羽根がふわりと落ちるように、花びらはらりと落ちるように！」

詩的な表現で誰もが分かると思うなよ。

今日は朝からヨアヒム先生のマナー講座だ。セレットさんについて入ってみたのはいいけれど、

「淑女は頭の前からつま先まで神経をとがらせるものですっ！　椅子に座れるようになるまで、はい！」

さっきから、慣れないドレススカートを着せられて椅子の立ち座りを繰り返し返している。スクワットだ。

もう一人のマナーの先生、セルジュワ先生は厳しいまなざしとは裏腹に一人ずつにアドバイスしているんだけど、私たちの目の前に立ってるヨアヒム先生は（本日はサファイアブルーのチャリム）自らもドレススカートに身を包み、淑女の手本みたいな立ち居振る舞いを披露してくれている。

彼が立ったり座ったりするだけで、緩やかなウェーブを描く髪がふんわりと揺れ、ついでにドレスもふんわりと揺れ、深窓のお嬢様もかくやという美しさだが、やってることは体育会系も真っ青なス

パルタだ。

すでに足もガクガクだ。勘弁してほしい。

「裾をちゃんと捌いてみなさい。うまくできるから」

諦めかけたそばでセルジュワ先生は柔らかく言ってくれる。これで続けられているようなものだ。

それでも授業の終わりにはぐったりとなってしまう。

「大丈夫？ ヨウコ」

同じスパルタ教育を受けているのにセレットさんは軽く疲れたほどの顔だ。

「このあと庭に草むしりの当番なんですよ？ 休む？」

ここまで当番は欠席なしだ。ここまで来れば、意地になっていた。

「行く」

私はセレットさんと、同じ当番に行くリアさんと一緒に昼御飯を食べて、屋敷の庭に出た。

あとは、物置から編み笠と軍手を出してきて、ひたすらぶちぶちやるだけだ。

屋敷の庭というのは、玄関ポーチに広がる広い庭のことだ。対象に置かれた木々が幾何学模様に広がっている。今の時期はちょうど草木が伸びる時期なので、この時期に雑草を抜いたり、枝を落とし

たりするんだってさ。

ちょうどリアさんと出たところで、枝切りばさみを持ったザイラスがぬつと庭に現われた。

「二人か」

「いや、あたしもだよ」

ザイラスの向こうからアンジェさんが笑って手を振る。

ザイラスはそちらに少し視線を向けてから、黙って庭の木へと行ってしまう。相変わらず無口な男だ。

「やっぱりいい男」

ふふつとリアさんは笑って、軍手をはめた。

「へえ……リアさんはああいうのが趣味なんだ」

うるさいのも苦手だけど、無愛想のも扱いづらいんじゃないか。

「ほら、背中みてるだけでいいじゃない」

リアさんは否定もしないで、ザイラスの背中に目をやるから、つられて私も彼の後ろ姿を見る。

暗い色のチャリムがのっそりとした動きに合わせて静かに揺らめいて、チャリム越しにも分かるしなやかな筋肉の動きが確かに奇麗なのかもしれない。

リアさんはザイラスの背中が見える場所へと草むしり場所を移し

ていくので、私は残ったアンジェさんと一緒にのんびりと雑草を抜くことにした。

「――この生活は、楽しいかい？」

いつかヨルダさんに同じようなことを聞かれたな。

「楽しいですよ」

宿にも困らないし、殺されかけたけど殺されないし、料理は美味しいし、女の子はいっぱいだし、美形は変な人多いけど面白いし。理由をあげたらキリがないほどには、楽しい。

「そうかい」

アンジェさんは目を細めて微笑んだ。

「あんたが楽しければ、いいんだ」

まるで、慈しむような笑顔で私を見るから、私は少し不安になった。

その笑顔があまりにも奇麗で、まるで消えてしまうようにも見えたから。

その日、私の日常は何の変哲もなかった。
草むしりを終えて、リアさんがザイラスをからかうのをほどほどに止めて、彼と一緒に屋敷に戻ってから風呂場の前でザイラスがフ

リエルをふんじばって、他の女の子たちとお風呂に入って、美味しい晩御飯を食べて。

それから、バリウム先生とリカインド先生の課題をしながら、アンジェさんとセレットさんとリアさんとで、夜遅くまでとりとめないことを話して。

私はそんなことが、いつまでも続くと思っていた。

私は、本当に、愚か者だ。

曇りと祈り

次の日は、どんよりとした雲が空を覆っていた。

朝に窓を眺めた私は、午後には雨が降り出すだろうと思った。身支度を整えたところで、ドアがノックされる。

応えようと、アンジェさんだった。

彼女は、いつもの質素なチャリム姿に珍しくマントを羽織っている。

この屋敷からは出てはいけないルールの中で、ここに住む女の子たちが遠出するような格好をすることはない。

「どうしたんですか？ その格好……」

言いかけて、思いだす。

そういえば、彼女はもうそろそろ卒業するのではないだろうか。五年以上ここに居る女の子はいない。

けれど、私の歓迎会ですらあれだけ盛大にやったというのに、卒業するときにはこんな、何も言わないで出ていくことになるなんてあるだろうか。

不思議そうな私の顔を見て、アンジェさんの美しい顔は一気に強張った。

「もしかして、あんた、何も知らないのかい……？」

知らない。

確かに、私は知らない。

ここがどういう場所なのか。どうして、彼女たちのような若い娘が集められているのかさえ。

「——おかしいとは思っていたんだ。ハイラント様が直々に娘を連れてくることなんか無かったからね」

アンジェさんは激痛をこらえるように顔をしかめて「なんてことを…」と唸った。

「アンジェさん、いったい何が…」

アンジェさんは素早く私の部屋のドアを固く閉めて、部屋の隅まで私を連れていく。そして痛いほどの力で私の肩を強くつかんだ。

「いいかい。よくお聞き」

声はほとんどなく、ほぼ口の動きだけでアンジェさんは話します。

「早くここを出る用意を。あんたは魔除けのマントを持っていただろう。他のものは持ってはいけないけれど、あれは持っているんだ」

「……私もここを出られるんですか？」

アンジェさんに倣って彼女を見返すと、アンジェさんは今にも泣きそうな顔になった。けれど、目を固く閉じて、再び私を見つめた。

「逃げるんじゃないよ。あいつらは優秀だからね。それに今はハイラント様もこの屋敷に来ている」

「あいつら？」

「バーリム達さ」

アンジェさんは少しためらうように言葉を切ったけれど、続ける。

「あいつらは選り抜かれてここに居る、東国でもエリート中のエリート
の騎士だ。どういう役割を持っているのかは知らないけど、あ
いつらの目を潜り抜けて逃げることはできない」

唐突に、私は思いだした。

普通の学校には不似合いな毛並みのいい騎竜たち。
あの十頭は、そのままあの教師たちの数になる。

「恨んじやいけないよ」

矛盾が向きそうになっていた私の心を先回りして、アンジェさん
が少しだけ苦笑した。

「あいつらは、国に忠誠を誓って騎士になっているんだ。命令があ
れば、どんな無慈悲なこともするけど、あいつらの私利私欲は一片
も入っていないからね。――ずるいことを言うようだけど、あ
いつらが、あたし達にかけてくれた情は嘘じゃないんだ」

同情も憐れみも、優しさも。

信じていいの？

問いかけるようにアンジェさんを見ると、彼女は今度こそ優しく
微笑んで肯くと、私を柔らかく抱き締めてくれた。

「大丈夫。あんたの事は、あたしが必ず助けてあげるから」

優しい腕は、まるで、泣いているようだった。

私はアンジェさんに促されるまま、俊藍のマントを身に付けると二人で部屋を出た。

いつもはそこかしこに人の気配がする屋敷の中が、今は廃墟のようになり静まり返っている。

連れられるままに屋敷を出ると、玄関ポーチに二台の馬車が止まっていた。

その馬車の荷台は鉄と鋳がびっしりと打ちつけられていて、まるで囚人を護送するかのように頑丈に出来ていて、その中へと女の子たちがいつもの笑い声もないまま、自ら乗り込んでいっている。

馬車の傍らに立つ美形たちは、いつか見たブリキのおもちゃのような白銀の甲冑を身につけて静かに佇んでいる。

アンジェさんと私に気がついたのは、セルジュワ先生だった。彼女も他の美形と同じような甲冑姿だ。

普段であれば微笑んでくれるが、今日の彼女は硬い顔を崩さない。

「――竜車へ」

言葉少なに示されて、アンジェさんは私を連れて頷いた。

馬車の周りにはウエンダやザイラス達がすでに騎竜に乗っていて、中にはヨルダさんの姿もあった。彼は見たこともない厳しい顔で曇天の空を睨んでいる。

私の視線に気づいたのか、ふと私の方へと振り返ったけれど、す

ぐに向きなおる。

表情は変わらなかったけれど、瞳の奥から向けられたのは憐れみだろうか。

私はアンジェさんと一緒に馬車へと乗り込んだ。

今まで誰もが人間らしい生活をしていたというのに、馬車に乗せられた彼女たちはまるで物みたいに肩を寄せ合って詰められていた。私とアンジェさんが一番端に乗りこむと、何の言葉もなく馬車の戸が閉じられた。

ほどなくがたりと揺れ出した馬車の中でセレットさんやリアさん、ハンナや他にも見知った顔を見つけたけれど、誰もが目深にマントを被って固く口を閉じてうつむいている。

「——ここはね」

アンジェさんは小声を私に向けた。馬車の騒音に負けるほどの声だったけれど、それは不思議と箱馬車の中に広がった。

「東国の一番西の端にある、戦場の近くにあるんだ」

思わず目を見開いた。

いつだったか、社長は言わなかっただろうか。この東国は、戦争をしない中立の国だと。

驚いた私の顔を見つめて、アンジェさんは目を細めた。

「東国は昔から西国と仲が悪い。それこそ戦争をするほどね。以前は小競り合い程度だったんだけど、今は王が長いこと政治から遠ざかっていたこともあって、だんだん酷くなってきてるんだ。元々、

「西国は領土を広げたいんだ。だから、戦争も長引きがちになってる」

俊藍は、言ってなかっただろうか。

世界の大則というやつは、円滑に戦争をするための約束事だと。

「今、この竜車はその戦場に向かってる」

何故。

どうして、武器も持たない彼女たちが、戦場なんかに行かなくちゃならないんだ。

アンジェさんを見つめると、彼女は静かに見返す。けれど、すぐに目を伏せて、今度は箱馬車の中の女の子たちに声をかけた。

「聞いてたとおり。ヨウコは何も知らない」

今までうつむいていた女の子たちは、一斉に顔を上げてアンジェさんと私に注目する。

「あたしたちの運命はもう決まっているけれど、あたしはこの子を助けたいと思う。協力してくれないかい」

箱馬車の中は静まり返った。息のつまるような沈黙の、馬車ががたりと揺れたあと、一人の女の子が顔を上げた。

「いいわ」

驚いたことに、ハンナだった。

「恩は返さないといけないもの」

それを皮切りに、女の子たちは口ぐちに肯いた。

けれど、待って。

助けを求めるように見まわすと、セレットさんとリアさんと目が合った。彼女たちは、ただ私に向かって安心させるように微笑んだ。

どうして、

「だったら皆で逃げたらいいじゃない！」

思わず声を上げた。

アンジェさんに口を塞がれたけれど、馬車の外に聞こえたかもしれない。でも、馬車の外からは何の応えもなかった。

「――それは、出来ないよ」

アンジェさんは静かに言って、チャリムの前をくつろげた。

その白い胸元には、赤い複雑な紋様が羽根を広げたように刻まれていた。

「これは精霊の紋様といって、この紋様を刻んだ人間を炎の精霊に変えるのさ」

呆前とする私にアンジェさんは少し笑った。

「あたし達はね、戦場じゃこう呼ばれてる。赤い戦乙女って」

似合わないだろ、と彼女は笑うけれど、私は笑えない。

「あたし達は何千という兵士を、このたった三十人ばかりで消し炭に出来るんだとさ」

いつの間にか震えていた私の手をアンジェさんが優しく包む。でも、何かに気付いたのか、はっとして私のチャリムの胸元に手をかける。

「ちょ…っ」

「ちよいとごめんね！」

鮮やかな手並みで開かれた貧相な私の胸元に、アンジェさんと同じ紋様はない。

アンジェさんは息を呑むように目を見開く。そして、

「無い……」

呟くように言って、顔をくしゃくしゃにした。

「——良かった」

彼女は、私の胸に額をつけて、泣いた。

幸せは知らないうちに逃げていく。

それは、楽しいものであればあるほど、するりと手の中から淡雪のように消えるのだ。

馬車が止まった頃には、私は訳が分からないまでもアンジェさんたちの思いを受け止めようと決めた。

——彼女たちが私に逃げろというのなら、私は必ずここから生き延びる。

がたりと馬車は止まったが、一向に馬車の戸は開かれない。でもそんな静寂も、女の子たちの悲鳴で？き消された。

「う、あああああああっ！」

胸をかきむしってもがき苦しんで、まるで何かを生むかのように、悲鳴が上がる。

私は顔を背けることもできなかった。

一人の少女がこれ以上ないほど悲鳴を上げて、背を逸らしたかと思えば、

ボツ！

彼女の指先が、火の気もないのに燃え上がっていく。

指から腕へ、それは全身を巡り、とうとう全身を眩しいまでの炎が包みこんでいく。

チャリムもマントも全て燃え尽き、残ったのは、少女の形をした炎の精霊だった。

おおおおおお！

言葉すらなく、彼女は凄まじいスピードで馬車の戸へ飛び上がり、轟音と共に外へと舞い上がっていつてしまう。

彼女に続くように他の娘たちも炎の精霊と成り替わり、馬車の外へと飛び出していった。

私はあまりのことに悲鳴も上げられず、彼女たちのように悲鳴を上げはしないが苦しそうなアンジェさんにしがみついた。

「ヨウコ！」

呼ばれて咄嗟に顔を上げると、ハンナが首まで焼かれながら、猫目を吊り上げて笑った。

「これが終わったら、私、家に帰るわ」

少女らしい笑みを残して、彼女は精霊になってしまった。

すでに半数以上が外へ飛び出してしまった箱馬車の中は熱風と残り火に焼かれ始めている。

聞き覚えのある声を聞きつけて、私は見慣れた紫の髪を見つけた。

「セレットさん！ リアさん！」

胸まで焼かれながら、彼女たちは微笑んだ。

「元気でね。ヨウコ」

私は答えることもできずに、ただ、彼女たちが精霊になっていつてしまうのを見つめているしか出来なかった、

まるで、拷問のようだ。

生きたまま、炎に焼かれてしまうなんて。

こんなことが、あつていいはずがない。

「――みんな、行きたい場所に帰るのさ」

苦しい息を吐きながら、アンジェさんが呟いた。

「あたしたちは、みんな、自分の人生に絶望した女ばかりだった。だから、こんな命でも何かのためになるのならって、志願したんだ。これに」

私しがみついているアンジェさんの体は、すでに人の体温を超えている。

「これで自由になれるんだと思っていたけど、違うんだねえ」

自嘲するように言って、アンジェさんは深く息を吐いた。

「そんなの、今からでも自由になれるじゃない！」

あっていいはずがないのだ。

こんな、自由になる方法なんて。

聞き分けのない子供のように叫ぶ私の頬を、アンジェさんは熱い指先でなぞった。

「離れておいで」

「いや！」

しがみつく私をアンジェさんは困ったように撫でる。

「大丈夫。あんたのことは、私が必ず守るから」

突き飛ばされた。

彼女の足先はすでに炎に包まれて、全身に回ろうとしている。

想像できない高熱に苛まれているだろうと思うのに、彼女は優しく微笑んだ。

「アンジェ！」

私は無我夢中に、手を伸ばす。

彼女が思わずといった風に差し出した指に触れると、ひどい痛み

が走った。

体中に炎をまとったまま、アンジェの口元がわずかに動いた。

——生きて、ヨウコ。

彼女は、美しい精霊となって、雨が降りそうな曇り空へと踊り出ていった。

火と赤

誰もいなくなった箱馬車は、焦げ目がついたものの焼けはしなかった。

きつと、そういう呪いでも施してあるのだろう。

私は火傷で痛む両手をそのままにして、馬車から這い出た。

もう一台の箱馬車も同じように空っぽだ。

けれど、私は目の前の光景に息を呑んだ。

辺り一面が真っ黒だった。

騎竜も、人もない。ただ、燃え残った鉄くずや、炭の山があるだけで、視界全てが静寂に埋め尽くされている。

これを、彼女たちがやったのだろうか。

馬車の向こうに人波が見える。

それは黒い甲冑に身を包んだ兵士たちだと分かるのにさほどかわらなかった。

騎竜の上から槍で狙うのは、炎の精霊たち。

しかし、それはことごとく炭に変わり、そっとその手で撫でられるだけで屈強な兵士たちが一瞬で燃え上がる。

精霊たちが遊ぶように炎の球を作れば、横一閃に盾の防御も燃え

尽きる。

精霊たちが誘惑するように兵士を招くその裾野が広がれば、強烈な火の粉を浴びて兵士たちはなすすべもなく炎の塊と化した。

まるで、天国にいるはずの天使自らが地獄を作りだしているかのような光景。

私には、何も出来なかった。

俊藍のマントをきつく握り締める。火の粉をたくさん浴びたはずのマントは焦げ目一つない。きっとそういうマントなのだろう。

偉そうなことを言っても、私に出来ることは何もない。

どうして、私は、生き残ったんだ。

真っ黒な屍を踏みしめて、私は奥歯を噛みしめた。

——アンジェさんが、生きろと言ったからだ。

逃げろと言った。

生きろ、と言った。

どうしようもない衝動を押さえつけるように、私はマントを被った。

今の私がすりつけるのは、彼女たちの願いだけだ。

彼女たちのために、私は死んではいけない。

戦場から逃げだそうと、踵を返そうとして私は空気が変わったことに気がついた。

雨が降る。

もう一度、戦場を振り返ったのは本当に偶然だった。未練だったのかもしれない。

けれど、振り返って私は悲鳴を上げた。

どういうことか、今まで我が物顔で戦場を牛耳っていた精霊たちが次々と消えていつている。

どうして！

私はこらえきれなくなって走り出す。

本当はこのまま逃げた方がいいはずだ。

けれど、体は彼女たちへと向かっていた。

近づくごとに目に入ってきたのは、たやすく斬られていく彼女たちの姿だった。

長い剣を握る先を探して、私は長い赤髪に辿りついた。

炎の精霊たちよりも赤い血のような赤髪で、黒い甲冑のくせに面あてはしていない男。

彼はどこかのおとぎ話のように騎竜にまたがって、迫りくる精霊たちを斬り殺していた。

「やめてえっ！」

悲鳴をあげると、男と目が合った。

黄金色にも見える黄土色の瞳が私を捉えると、彼は何を思ったのか目を見張ってこちらに騎竜の首をめぐらせる。

私は初めて目の当たりにする戦場の熱気と、悲鳴をあげることしか出来ない悲しみにすでに足が竦んで動けない。

まっすぐこちらに向かってくる甲冑を着た騎竜の鼻先を見つめることしかできなかった。

顔を歪めた瞬間。

私は明るい光に包まれた。

精霊だ。

彼女たちにはもう人だった時の顔はない。

けれど、揺れる長い髪に既視感を覚えて私は呼んでいた。

「アンジェさん……？」

優しく、微笑んでくれたような気がした。
彼女が両手で私の頬を包む。

そして、消えた。

うまく、目が動かなかった。

震える視界に入ってきたのは、剣の先。
ゆっくりと辿ると、赤い髪の子が彫像のようにこちらを見下ろしていた。

「大丈夫か」

透る声は、人に命令をし慣れた声だ。
けれど、誰に向けての言葉か分からなかった。

赤髪の子は嘆息するように騎竜を下りると、私の前に立ち塞がる。
あまりに男が大きく見えたので、始めて私は自分が足から崩れ落ちるように座り込んでいたことを知った。

見上げると、男はもう一度口を開いた。

「平気かと聞いている」

何が平気なのか。

私には分からなかった。

「——あなたが斬ったの？」

ただ、どうしようもない渦に頭の中身ごと放り込まれて、繰り返すことしかできなかった。

どうして、どうして、どうして！

「どうして斬ったの！」

今度は男の方が何を聞かれているか分からないというように答えた。

「あの女たちは、ああして死ななければ炎に焼かれ続けるんだぞ」

私はハンナのことを思い出した。

行きたい場所に行くこと。

帰りたい場所に帰ること。

誰が、そんなことだと思うんだ。

死んでから、帰るなんて。

「東国はとんでもないことを考えるものです」

男の横から、痩せた灰色の髪の方が現れた。彼は神経質そうな顔で私を見下ろしてくる。

「自国の民を、戦争の道具に使うなど惨いことを」

どうして。

「お前の問いには答えた。今度はこちらの質問に答えてもらうぞ」

赤い髪の男は私を見下ろしたまま、言い放った。

「その外套を、どこで手に入れた？」

私は男の指したマントを握った。

どうしてなの。

「それは東国の王が父王から授かった物だ。お前は、ハイキリング王とどんな関係がある？」

あなたも、炎の呪いに苦しんでいたんじゃないの。

「答えろ！」

俊藍。

母親になった女

本当はヨウコが、苦手だった。

どんなに働き者らしい硬い手をしていても、今までの人生まで変えられるわけではない。

だから、彼女が幸福そうに笑うたび、希望を信じる目でこちらを見るたび、自分の醜い嫉妬が顔を出す。

それが嫌だったのかもしれない。

アンジェという名前は、生まれてすぐにアンジェを捨てた母親がつけた名前だ。

名前をつけてすぐに、近くの孤児院へと子供を押し付けて、姿を消したという。

親の情を知らずに育ったアンジェは、蔑みの目に耐えながら学校へ通おうとしていたが、年の割には大人びていて他の娘よりも美しかったアンジェは、孤児院の院長に色街に売られた。

恨みはしなかった。

それから、酷い目に遭うたびに他人を呪うのではなく、自分を嫌悪するようになった。

孤児院で育ったこともあって、誰かの面倒を見るのは好きだったけれど、本当は一人になるのが怖かったただけなのかもしれない。

悪い男に捨てられて、とうとう宿無しになってしまい、首でも吊ろうかと思っていたところに、話を持ちかけられた。通りがかった男に、声をかけられたのだ。

捨てる命なら、預けてみないかと。

アンジェを拾ったその男が、バーリムだった。

彼は騎士団で特殊な任務についていて、その任務のために女を集めているという。

アンジェは、その誘いに乗ることにした。

暖かい寝床と食事があるに越したことはない。

そして、すでに自分の命には見切りをつけたところだ。

バーリムはアンジェを屋敷に紹介し、そしてハイラントに引き合わせた。

ちよつと政治を囁んだことのある者なら誰もでも知っている天才だ。

高名な魔術師であり、今は宰相の側近であるというハイラント。冷酷なイメージとは裏腹に、彼はアンジェに告げた。

炎の精霊になって、戦場へ出てもらうことになる。

今までの仕事の中で、西の端の戦場がきな臭いことになっているのは知っていた。

だが、こんな非人道的なやり方で戦争をしているとは知らなかった。

若い娘を集めて、違法まがいの魔術を施し、戦場へ送りだすなど。

アンジェ自身に、自分の未練はない。けれど、他の娘たちはどうだろうか。

他の娘たちもアンジェ同様にどうにもならない事情を抱えて拾われてきた者がほとんどだ。

残っていた偽善の心が疼いた。

アンジェはハイラントに掛け合った。

精霊の魔術は施してから、紋様が浮かぶようになるには、女自身の心が救い出されなければ炎の精霊にはなれない。

ハイラント達は衣食住に困らない生活とカウンセリングでどうにかなるだろうと考えていたようだが、傷ついた娘たちの心はそれでは癒されない。もっと生活環境を整えるように訴えた。

詭弁だ。

でも、せめて最期を迎えるその日まで、他の娘たちには普通の幸せを与えてやりたかった。

あれこれと娘たちの世話を焼くうちに、彼女たちはアンジェを置いて、戦場へと逝ってしまう。

一度、炎の精霊になれば、術式に組み込まれた敵を焼き尽くすまでその身は炎に苛まれる。そして、あとには塵も残らないのだ。

精霊の紋様を施す魔術にも、娘には負担がかかり、高熱を出して寝込む者や一週間は起き上がれない者も居る。

だから、ヨウコが施されてから一日で目覚めたことに、アンジェは驚いた。

普段はヨルダや他の騎士たちが連れてくる娘を、ヨウコだけはハイラント自身が連れてきた。そして他の娘には自分の意思を尋ねる

というのに、昏倒している彼女に有無を言わず、精霊の魔術を施したのだ。

起きた彼女は、そうは見えないが二十四歳だという年齢に見合った落着きがあるようだった。けれど、起きた始めは誰も信じられない子供のような眼をしていた。

まるで、昔の自分を見ているようだった。

それからは、気をつけてヨウコの様子を見るようにしていたが、アンジェは過去を振り返るようで好きにはなれなかった。

それが吹き飛んでしまったのは、やはりヨウコのお陰だった。

ある日、彼女はアンジェの前に来て座って、にっこりと笑った。

それが何の時間だったのか覚えていない。けれど、それは幸せそうに笑ったのだ。

あまりにもそれが可愛くて、アンジェも幸せになってしまった。

大人のように、子供のように、妹のように、姉のように。

家族のようで。

ヨウコの前に立ってようやく気付いたのだ。

アンジェが欲しかったのは、家族だ。

とうに自分自身を見限ってしまっていて叶うことはないけれど、出来ることなら子供が欲しいと思った。

ヨウコは、きつと怒るだろう。

まるで、アンジェが彼女のことを自分の子供のように思っていたことに。

もう、彼女を腕に抱くことはできないけれど。

そして、きっと最期に立ち会ってくれた彼女に、他のみんなが思っただろう。

可愛い私の娘。

どうか、生きて。

北の塔の魔術師

玉座から、自分を見下ろす王に、ハイラントは初めて畏敬した。

その冬の湖面に似た瞳が憎悪と怒りに燃えて、辺りを包みこむ威圧感、胃を圧迫するほどだ。

「――なぜ、このような真似をした」

低い声はハイラントを噛み砕くかのようだ。

ハイラントは彼の前で膝をついたまま深くこうべを垂れた。

「東国のためを思つてのことでございます」

社交辞令にも近い弁解を口にする、頭を蹴りつけるような殺気が降り注いでくる。

このような王だっただろうか。

以前のヘイキング王といえば、父王に似た容姿ではあったものの平凡な王だった。

父世代から引き継いだ宰相や臣下の意見をよく聞き、民の声をよく聞き、そしてそれを踏まえた上で政治を為す。

それだけの王だった。

彼は第一王妃から生まれた紛れもない王位継承者だったが、神の落とし子という稀な出自で、口さがのない者から母親殺しや化け物扱いをされて育った。

そんな彼がしごくまっとうに育ったのは、特別だとも言えるひとえに周囲の人間のお陰といえた。

しかし、ハイラントはそんなヘイキリング王の背景には全くと言っていいほど興味はなかった。

機能しているとはいえ、腐敗した政治中枢を担うには、ヘイキリング王の凡慮さでは足りない。

「お前は、見当違いをしているようだ」

怒鳴るわけでもないのに、王の言葉はハイラントの耳に突き刺さる。

これが、凡庸なヘイキリング王だろうか。

「国のために、民がいるわけではない。民のために国があるのだ」

もっともらしい答えだ。

民とは、国とは、という試験の問いに答えたならば、きっと満点をもらえることだろう。

けれど、ハイラントはその採点をするためにここに居るわけではない。

「民を犠牲にして、何を得るのだ」

応えよ、と言外に圧力をかけられ、ハイラントは望む答えを口にする。

「――娘たちの屋敷に、ヨウコ・キミジマをお連れいたしました」

「知っている」

王の低い声と同時に、衛兵が何かをハイラントの脇に放り投げた。視線だけを向けると、疲れきった様子の東の果ての魔女が座りこんでいた。

「この女が全て話した」

王に侮蔑の視線を向けられたのか、魔女は顔をしかめて黙り込んだ。

この魔女は、北国に帰りたいがためにハイラントの誘いに乗ったのだ。己の私利私欲に堕ちた魔女ほど醜いものはない。

「もう一度聞く。お前は、民を犠牲にして何を得るのだ」

何も得ない。

ハイラントに、得るものなど何もないのだ。

「失礼いたします！」

駆け込んできた声に空気が揺れた。

許しなく視線を上げると、兵装のクリスが王の脇で息を切らして膝をついていた。

王は少しだけこちらに視線をやったが、すぐにクリスに続きを促した。

「本日未明、赤い戦乙女、全滅を確認いたしました！」

ざわり、と衛兵と王と、ハイラントを含め十人もいない部屋がねじ曲がるような空気に包まれる。

「西の被害は甚大で、戦乙女たちの全滅を確認後撤退した模様！」

「―――生き残りは」

淀むことなどあっていいはずがない王の問いかけに、クリスは一瞬、息を詰まらせた。

「……ありません」

「衛兵！」

呆けていた兵を一喝し、すぐに王の指示に従った衛兵はハイラントの両脇を抱えて立たせた。

「北の塔へ入れておけ」

北の塔とは、貴族が捕えられる永久に出ることはできない牢のことだ。

王とはいえ、議会の承認もなしに貴族を処刑することはできない。そして、貴族の処刑自体が難しい。そのため、罪を犯した貴族のほとんどが北の塔へと投獄される。

実質の極刑だ。

ハイラントは逆らうことなく衛兵について牢へと入った。

窓は明かりとりだけで、ベッドもトイレもついているがそれだけだ。普通の牢にはベッドなどないから特別な仕様といってもいい。

ハイラントは魔術師だということもあり、ペンの類などは決して与えられず、かつ、自身を傷つける行為をすれば腕にはめられた腕輪が血を奪うという。そして牢の柵にも魔術封じが施されている特殊な牢屋に入れられた。

大人しく牢へと入ったことに安心したのか、衛兵たちは牢を去っていく。

ここにはハイラントの独房しかない。誰かに何かを頼むということすらできないのだ。

ハイラントはゆっくりとベッドに腰かけて、薄明かりの先を見上げた。

ハイラントには、この国に対する愛情は薄い。

生まれた時から年の離れた兄に比較されて育ち、逃げるように留学した北国でその才を認められた。だから、本当の母国は北国だと思っているし、東国に帰って補佐を務めるよう命令されたときにも、

どこか異国へと仕事へ赴くような心地だった。

それでも、この生まれた国で自分を認めてくれた人のために働こうと思った。

それだけだ。

凡庸なヘイキリング王にも、ハイラントも関わった魔術でこちらの世界に呼び出されてしまったセイジ宰相にも、本当のところ然程の興味はない。

全ては一人のためだけに、ハイラントは動いてきた。

そんなハイラントを真っ直ぐ見詰めて、胡散臭いと評したのは、彼女が初めてだった。

ヨウコ・キミジマ。

セイジ宰相と同じ世界から本当に巻きこまれただけでこちらに来てしまった不幸な女性。

美しくも賢くもない、背ばかり高いただの女性だ。

だから、王や宰相がやたらと気にかけることが不思議で仕方がなかった。

彼女が魔女に向かって拳を振り上げるまで。

醜い魔女の顔を殴りつける寸前、彼女はその力を緩めた。

だが、目測が甘いのかそのままでは魔女に彼女の拳がかすってしまふ。

だから、ハイラントはヨウコの意識を奪った。

その拳が醜い魔女で汚れないように。

不思議な感覚だった。

理性で抑えきれないものがこの世にあるということが、不思議でならない。

そして彼女に興味が沸いた。

彼女は、賢いわけでもない鋭いわけでもない世間知らずのくせに、人の心をよく盗み見る。

それは本人が隠しておきたいものであるにも関わらず、その黒い瞳で容赦なく暴き立てるのだ。

彼女が打算であれ、無意識であれ、頷いたなら、きっとハイラントは自領に彼女を連れ帰っていただろう。

妻でも、友人でも理由は何でもいい。話をしてみたかったのかもしれない。

——今となっては、悔恨にしかないだろうが。

薄明かりから視線を外して、ハイラントは牢屋から見える廊下の先を見つめた。

自分の出番はどうやらここまでらしい。

（結局最後まで、あの方の思惑には触れることさえ叶わなかった）

道化は退場し、ここからが本番になるのだ。

役を降ろされたハイラントに出来るのは、冷たい牢屋の中でその行く末を想像するだけ。

にわか生徒の一日目（前）

「目が覚めたかい？」

そう言っ、私の額に細い指先を当てたのは、私が眠るまで側に居てくれた赤髪の美女だった。

名前を、確かアンジェさんと言っただろうか。

彼女は私が自分のことを確認したことがわかん、ベッドの脇に持ってきていたお盆の上で、お茶を入れた。

「起き上がるかい？ こっちに顔を洗う水を張っているからね。顔を洗うといいよ。トイレに行きたいなら私が連れてっあげるから」

起きぬけに優しい言葉をかけられて、彼女を本当に信用してはいけないという昨日の決意が揺らぐ。だって美女の優しいお言葉っそれだけで価値があるじゃない。有害銀髪が今日はいないだけマシだ。

「……ありがとうございます」

お礼を言っ身支度を手伝っもらった。

何日寝ていたのかしらないけど、体の節々がぎしぎしする。

身支度を整えてから、またベッドに戻るよう促されると、ひざの上に朝食と思しき皿の並んだお盆を乗せられた。

「昨日と同じようなもの用意したよ。昨日もちゃんと食べてたけれど、急に普通の食事にするとお腹が驚くからね。ゆっくり食べな」

昨日用意してもらったのと同じお粥はやっぱり美味しかった。
温かくて、こごった心までほぐしてくれるようだ。

私の顔が緩んだのを見たのか、アンジェさんはベッドの脇に椅子
を持ってきて優しく微笑んだ。

「食べながら聞いとくれ。――昨日話したことは覚えてるかい？」

確か、私はここで暮らすことになったらしいのだ。この部屋がど
こでどんな場所なのかは知らないが。

私がうなずくと、アンジェさんは続けた。

「まず、私の自己紹介しておこうかね。昨日言ったかもしれないが、
私はアンジェ。年は二十五だ」

悩ましい泣きぼくろの美女が一つ違いなんですね。

恐ろしいぜ異世界。…いやこの場合は私がごめんなさいというべ
きか。

申し訳ない気分で私も自己紹介しておくことにした。

「葉子です。……年は二十四です」

ほら！ ほらあ！ やっぱりの美女も驚いた顔した！

美女は好きだが、嫌いだ異世界！

「てつきり十七、八かと思ってたよ。いや悪かったね」

アンジェさんは目を丸くしたまま意外そうに言う。

サバサバした口調で言われるとそれほど傷つかないけど…年相応
になりたい。

アンジェさんはこの場所、お屋敷について話してくれた。

ここは森の真ん中に建っていて、世話役と住人四十人ほどが暮らしているという。住人と世話役の違いはよくわからなかったけど、私はここで言う住人になるのだろう。何かしらの役割を持っている世話役と違って、住人に仕事はない。生活のための家事や雑事はそれぞれが当番制で、他に勉強会なんかもあるという。

なんだか寄宿制の学校みたいなおもむきだけど、アンジェさんの年で学校っていうのはこの世界ではあんまり想像できない。

たいていの少女少女たちはある一定の年齢を越えたら十代から働き始めるのが一般的だ。ハタチ越えたらその十代の子たちの面倒を見る側になっている。

けれど、ここでは二十歳を超えている住人も何人も居るらしい。

住人が守らなくてはならないのは、この屋敷から出ていけないこと。

朝食を食べ終わる頃には、私はここが常識から少し外れた奇妙な場所だということを理解した。

「動けるようなら、屋敷の中を案内するよ」

美女が快くそう言ってくれたので、私はお願いすることにした。

いつのまにか着せられていたすとしたワンピースの寝巻きから、渡された藍色のチャリムを着ると、アンジェさんはちよつと唸った。

「やっぱり丈が足りないね。ちゃんとした服は今夜にでも持ってきてあげるよ」

異世界でも背が高いって損だ。そのくせ出るところも出てないから

棒つきれみたいだ。チャリムにパンツ姿だからアンジェさんと並ぶと小間使いの少年に見える。

部屋を出ると、やっぱりどこかの寮にでも来たかのような印象だった。

廊下には見渡す限りに同じようなドアが並んでいるんだけど、宿屋みたいによそよそしい感じがしない。

「あら。見かけない子ね」

アンジェさんと私を見つけて、華やかに微笑んだのは紫の髪的美女だった。すらりとした体を包むチャリムは地味だけど、彼女専用仕立てたのかのように美しい。

「ちょうど良かった。セレット」

アンジェさんは私を美女の前に差し出して、

「この子はヨウコ。新しい住人だよ。ヨウコ、この子はセレット。私の隣の部屋なんだよ」

あとで私の部屋も教えるからね、とアンジェさんは言って、セレットさんを見やる。すると紫の美女は穏やかに微笑んで、その艶やかな唇の端を上げた。

「よろしくね。ヨウコ」

あとで知ったんだけど、このセレットさんも私より年下でした。ホントごめんなさい。

「セレット、これから勉強会に行くのかい？」

「ええ」

アンジェさんに応えながら、セレットさんは自分の手の教科書らしき本と和綴じのノートをちょっと掲げた。

「遅れるとバーリムがうるさいから、早めに行こうと思って」

「あいつはそういうことにうるさいからねえ」

そうアンジェさんは笑って、私に顔を向ける。

「バーリムというのはね、ここで教師みたいなやつてるやつのことだよ。案内がてら見に行ってみるかい？」

こんな美女が行く勉強会とやらがどんな勉強やってるのか見てみたい。

私は美女二人にくっついて勉強会が開かれるという、屋敷の二階まで降りた。

私が寝かされていた部屋は四階で、それが最上階なんだけど、このお屋敷の広いこと言ったら。四階、三階は似たようなドアがずらっと並んでいて居住区らしくて、二階には似たようなドアと観音開きのドアが幾つか並んでいる。ここが教室というわけなんだろう。

二人に連れられて、その一角に入るとすでに何人かの女の子が、黒板囲んで大学の大講義室みたいに半円に並べられた机に、思い思いに陣取っている。机の数はざっと三十ぐらい。

まだ早いぐらいの時間だったのか、セレットさんとアンジェさんに囲まれて窓際の後ろ側に三人で席についた。

「ヨウコは可愛いわね。いくつなの？」

初対面の人との話題なんて限られてる。

案の定、セレットさんにも驚かれました。もう女子高生って名乗ろうかな。

そんな雑談しているうちに生徒と思しき女の子がばらばらとやってくる。けれどみんな女の子ばかりだ。男子生徒は一人もない。そして、美女二人よりも年上（私を除く）の女の子もいなかった。

彼女たちの最後に教室に入ってきたのは、背の高い眼鏡の美形だった。

何冊かの本を小脇に抱えて、いかにも穏やかそうに微笑んで一見地味な良い教師風。けれど、遠目にも彼の目鼻立ちが整っているのはよく分かる。社長やら俊藍のおかげでいい加減美形に見慣れてきたけれど、彼の造形美は一、二を争う。

あー、だから女の子ばかりなのか。

挨拶もそこそこに教卓の前で授業を始めた美形教師は、当然なのか声も抜群にいい。低めの声が教室の端にまでよく透る。

「ではこのあいだの課題の答え合わせからやりましょう。ポーラ」
流れるように当てられた少女は、美形も目に入らないかのようにしゃちこばっておずおずと席を立つ。

「答えてみてください。一週間前に講義した二つの薬草の違いについて」

「……りません」

小さな声だったので、私の座っているところまで聞こえなかった。けれど、教卓には近いからあの美形教師が聞こえなかったはずはない。でも、

「今、何と？」

教師はにこにこ聞き返す。

ポーラと呼ばれた女の子は肩を震わせて、それでも答えた。

「……わかりません」

きっと課題とやらをちゃんとやらなかったんだろう。つか、単純な一問一答ならまだしも二つの薬草の違いを答えろとかかなり難しい課題を出してるもんだ。

女の子のか細い声は静まり返った教室に響いた。十五、六人は同じような女の子がいるけれど、彼女たちも一樣に口をつぐんでいる。

教師は教卓の上に広げた本を見、それから少女を見返す。

「では一緒に考えましょう。百三十二ページを開いて。前回のおさらいから——」

とうとうと課題の復習をやりはじめた教師は、まるで課題を忘れた彼女とマンツーマンで授業を進めるかのように彼女が分からないと言った薬草について違いを一つ一つ訊ねていく。立たせたままでも彼女がわからないと言えば、どうしてわからないのかを問う。

セレットさんに教科書を見せてもらいながら、うんざりした。

なんつードエス教師。

いまどきの教師も見習えばいいよ。でも普通の人にはできないな。だって、あの子もう泣いてるし。でも質問は止まらない。

穏やかに質問繰り返してただけなんだけど、泣いてる女の子にここに微笑みながら出来るやつは人として何か間違ってる。

あんなだから、あの女の子を助けようとしてもきつと今度は自分に水を向けられて二の舞だ。

教科書の葉草には見覚えがある。山で見かけたときに、俊藍や不本意だけどあの魔女に教えられたのだ。よく似た草なんだけど、葉の形が違って、生えてる場所も違う。一方は葉の形が丸いし、一方は三角。一方は日向に生えてるけど、もう一方はじめじめした日陰を好む。効能は同じだけど、日陰に生える方がちよつと強い効果が出る。葉の調合のときにはそのちよつと違いが命取りになるから、ちゃんと覚えろと言われた。……いや葉の調合なんかしないから。

めめめ泣いてるだけじゃ解決しないけど、度が過ぎたらただのイジメだ。

仕方ないので私は手を挙げた。

確か今は根っこについての質問だったな。

「それってー、胃腸に効くんですよね」

葉っぱと根っこで効能が違うのはよくあることだ。

尋ねられてもないが、講義を中断してやることには成功する。

そんな私をセレットさんとアンジェさんと、泣かされていた女の子ともども教室中がこちらに驚いた顔をしたけど、当のドエス教師

だけは穏やかにニコニコしたままだった。ちつ、鬼畜め。

「あなたは？」

「どうもー。昨日入ってきた新参者ですー」

語尾伸ばすだけで生意気に聞こえるもんだ。でもドエス教師は顔色一つ変えない。そして何事もなかったように泣かせていた少女を座らせて、ようやく平和な授業を始めた。

えげつない教師もいるもんだ。美形ってどいつもこんなもんなのか。

溜息をつきながら半眼になると、隣から肩をつつかれた。セレットさんだ。

彼女はそれはそれは綺麗な顔でニヤリと微笑んでくれた。

私のささやかな意地悪は成功したようだった。
けれど、

「新参者さん。あとで私の部屋へ来るように」

授業の終わりにあのドエスに呼び出しくらったから、試合に勝つて、勝負に負けた。

にわか生徒の一日目（後）

いつそのことこのまま雲隠れしてやろうかと思ったけれど、アンジェさんとセレットさんに連れられて、結局ドエス教師の部屋へと出向くことになった。彼女たちいわく、今逃げても、すぐにまた呼び出されるから早い方がいいと。おっしゃるとおりです。でも、逃げたくなるのは人のサガってやつだ。

ドエス教師の私室は教室と同じ二階の角部屋だった。自分の部屋が二階だったら嫌だな。

「何、また呼び出されたの？」

ノックする前に向かいの部屋から出てきてセレットさんに声をかけてきたのは、色彩豊かな美形だった。緩やかなウェーブの髪は黄緑で、着ているチャリムは紫色。何で補色なんか着てるんだよ。眩しい。でもけばけばしい印象が薄いのは、腐っても美形だからだ。まつげなんか私より断然長いんじゃないか。しかも私より背が高い。

「違うわ。呼びだされたのはこの子」

セレットさんは私に目を向けるので、美形もつられるように私を見てくる。

「誰だい、このネズミちゃん」

と、にっこり美形。

寒い。冬じゃないのに寒いよ！　ネズミちゃんってなんだネズミって！　そりゃ地味なんだけど、断じてチビじゃない。アンタと視線近いわこのやろう！

「新しく入ったヨウコよ。ヨウコ、この人はマナーの先生のヨアヒム先生」

マナーとな。紹介された派手美形、ヨアヒム先生はさっきのドエス教師とは比べものにならないほど友好的に微笑んで私に手を差し出してきた。

「よろしくね。ヨウコ。ボクの教室に興味があるなら歓迎するよ」

この人の外面の垢を煎じてドエス教師に吞ませたい。

握手に応じながら、私は日本人の得意技である曖昧な愛想笑いを返しておいた。

そんな寸劇の合間を縫うように、ノックをし損ねていたドアから逆ノックが響く。

「バーリムが呼んでるね。何をやったかは知らないけど、何も考えずに謝ることをおススメしておくよ」

派手美形は優雅に手の平を返し、去っていつてしまった。かよわい乙女を助けるよ。

私は渋々鬼畜教師のドアをノックした。「どうぞ」という声を待ってドアノブをひねる。

滑りの悪い蝶つがい音を聞きながら、部屋を眺めて絶句した。

その部屋は、巣だった。

目に入る限り、本と標本と使い方のわからない器具が所せましと詰め込まれている。洞窟のように刳り抜かれた奥に窓が見え、辛うじて人の入れる空間がある。

その僅かな空間に詰め込んだ書斎机と椅子に、部屋の主が待って

いた。

「いったい何処で寝てるんですか？　ごめんなさい」

思わず疑問を口にして、それから忠告を思い出したので付けたした。

私の奇妙な挨拶に、さしものドエス教師も片眉を上げたが特にとがめはしなかった。

「隣の部屋で寝ていますよ」

ですよね。この部屋で寝たら窒息は必至だ。

「研究中はここで寝泊まりすることもあります」

地震と火事と病気（アレルギーとかなりそう）　が恐ろしい部屋で一日の大半過ごすとは恐れ入る。

「相変わらずだねえ」

私と一緒に部屋へ入った美女二人も呆れ顔だ。

美形は奇麗で美しい部屋に住んでるという偏見は捨てることにします。

「また本を増やしたね？　スクリーンにどやされるよ。床が抜けるって」

確かに抜けそうだな。というかスクリーンって…。絶叫さん…？　アンジェさんの指摘にもドエス教師は肩をすくめてみせただけだった。このドエスが驚くこととかあるのか。

「それでも必要最低限のものを持ちこんでいるだけですよ」

この本でドミノ倒したらこの学校みたいに広い屋敷を二周ぐらいできるんじゃないかな。一度やってみたいものだ。

「ところで」

つらつらとくだらないことを考えていた私にドエスの目が向けられた。おっと。

「あなたは、薬草に詳しいようですね」

おいおい。私はどの誰とか興味ないのか。ないと言われればそれまでなんだけど。私も自己紹介なんかする気がなかったので不承不承応える。

「簡単に習ったことがありますて」

「それは面白い」

どこが。ドエス教師はそのあと私の名前なんか全然聞かずに、さっきの講義に出てきた薬草についてあーだこーだと議論に及んだ。確かにさー魔女に学説がどうのって聞かされてたけど、そんなもん知るか。調合するときにはちょっと強い効能の草使う方が量が少なくて済むから安くつくってぐらいだ。一概にはいえないけど薬の量が多くなれば副作用も増えるっていうんで、簡単な胃薬作るにはそちの薬草がいいとか。

挙句には標本まで取り出して、うんぬんまで発展した。このドエス、薬草オタクだったのか。けれど、そんな研究者にわか生徒の

私が敵うはずもなく、最後の方はオタクの講義を延々と聞かされた。アンジェさんとセレットさんは暇なので教師の部屋があんまりにも酷いんで片付けをやってくれました。ごめんなさい。というか一週間放置しただけでこのありさまって酷過ぎないか。どんだけ片付け下手なんだよ。

オタク談義が終わる頃には日もすっかり傾いていて、「もうこんな時間ですか」とドエスが止めてくれたんで私はぐったりと椅子でうなだれた。立ってられるか。こっちは病み上がりなんだぞ。変な知識植えこんでくれた俊藍と魔女を思わず恨んだ。

「すまないね。病み上がりなのに」

アンジェさんがオタクの代わりに謝るので、私は無理して苦笑した。アンジェさんが止めなかったということは、そんなに長い時間でもなかったのかな。……少なくとも二時間は経ってると思うけど。

「付き合ってもらってごめんなさい。まあ面白かったし」

「それは良かった」

あんたに言ってないよ。

ドエス教師は疲れの见えない顔でにっこり笑うと、分厚い本を私に押し付けてきた。

「……これは？」

「今度の講義は一週間後です」

来いと。あんたの勉強会に。

押しに弱い国から来た私は、押し付けられるまま、枕にしたらさぞ頭がよくなりそうな分厚い本を受け取った。

今日はよく眠れそうだ。

思わずこめかみを押さえると、セレットさんが心配そうに私をうかがってくれた。

「気分が悪いの？ そりゃそうよね、こんな部屋に居たんだもの」

「ひどい言い草ですね」

ひどいのはあんたの部屋だろう。

結局私は、美女となぜかドエス教師について一階にあるという保健室へと向かうことになった。保健室なんて、いよいよ学校だな。

そろそろ夕食の準備の時間なのか、一階に降りると人の通りが多い。

一階には大浴場も備えてあるということで、行き交う女の子たちはきやあきやあと開放感に包まれている。それにしても、ここには女の子しか住んでいないのだろうか。先生と言った役割で紹介されたのはいずれも男ばかりだ。

保健室の手前にあるという浴場の前で二人組の男が居ると思ったら、ドエス先生が片手を上げて挨拶した。大男と何故か縄ですまきにされているやたらと奇麗な顔の男だ。

すらりとした美形なんだけど、のっそりと熊みたいに鋭い視線を上げたのは焦げ茶の髪の大男だ。私より頭二つ分は大きいんじゃないかな。

「やあやあ、子猫ちゃん！ どこから迷い込んできたのかな！」

言ったのは熊美形じゃない。すまきにされてるピンク頭の美形だ。

妖艶な、と言い表せるような恵まれた顔形してるのに、口も頭も残念らしい。

そもそもどうして大浴場の前でこんな奇妙なことになっているんだ。

事情を知るはずの他の人々を見遣れば、みんな「またか」という憐れみとも呆れともつかない顔をしている。

そんな視線に気づいているのかいないのか。ピンク頭の美形はニコニコと続けた。口さえ開かなきゃどこかに飾っておきたい美形なのに。

「愛らしい君の声で、僕に君の名前を覚えておくれよ。僕はそれだけで千の剣も万の槍にも耐えられる」

そりゃすごい。

見当違いな感心をしたところで、私の隣からひんやりと声が割り込んだ。

「おや、フリエル」

その艶やかで氷のような声で、ピンク頭は羽根より軽い口を止めた。口元を引き攣らせて、そのまま私の隣を見上げて呻く。

「……あ、アンジェ…」

バラ色の顔色が、みるみるうちに石膏像もかくやという青白さに変わった。

「あんたのお軽い頭によく分かるように私は言っているはずだね？

何度こんなことを繰り返せばいいんだって」

私は賢明にも、アンジェさんの顔を見なかった。えらいぞ私。だって、目の前のピンク頭が凍死寸前の顔になってるし。とばかりはごめんだ。

「風呂を覗くほど女に興味があるのなら、もう一度教えてあげようじゃないか。みっちり」と

「ち、違うんだアンジェ！」

ピンク頭はそのお軽い頭を賢明に振りしぼって弁明を始めた。女の子に狼藉を働こうというわけじゃなくて、一日の疲れが自分の焚いた風呂で十分に癒されているのか確かめるためであって、決して邪な考えじゃない。

まあ、要は覗きたかったんだということだ。

放っておくと羽根のように軽い口が延々と回るので、彼の隣に居た熊美形がピンク頭に拳骨を落として終わりを見た。放置しておくと一時間はこのままなのだそうだ。……聞いちゃいけないだろうけど、あんたアンジェさんにいったい何された。

鬼畜教師があとは任せろというので、私は美女たちに引率されて無事に保健室までたどり着いた。あのドエスにかかって、あんまりあのピンク頭の運命が良くなるとは思えなかった。

「スーリガンいるー？」

セレットさんが呼びかけると、白いカーテンの奥から、伶俐な赤髪の美形だった。この屋敷は美形御殿なのか。細い印象だけど、彼も私より背が高い。

スーリガンと呼ばれた美形は何も言わないまま、目で「何か？」と問うている。喋れよ美形。

「あのね、この子気分が悪いらしいの」

セレットさんの説明もそこそこに、美形は私の前に来ると何も言わずに見た目よりも広い手を私の額に当てる。あ、冷たくて気持ちいい。

そう思ったのも束の間、赤毛の美形は葉棚へ向かって、小瓶を取り出してきた。そして私の前でインク瓶ぐらいの小さな瓶を少し開ける。

すると花の香りがふわりと立ち上る。

「いい匂い……」

緊張していたらしい頭の芯が少し和らぐ。
どこか嗅いだことのある花の香りだ。

「パランセクの香りだね」

アンジェさんが隣で微笑んだ。赤毛の美形は瓶の口を閉じると、そのまま私に手渡した。

「持っていけてさ」

笑ったアンジェさんとセレットさんを見て、赤毛の美形を見たら、彼も肯くので私は素直にお礼を言った。

すると、赤毛の美形は次に傍らのベッドを指さした。
何事だと思っていると、

「その香り嗅いで、ゆっくり寝ろって」

セレットさんが通訳してくれた。結局、保健室を出ていくまでの美形は一言も発しないままだった。

よほど嫌われたのかと思ったら、スーリガンという保健室の主は常から一言も話さないらしい。

誰かに相談なんかされたらどうするんだ、保健室の先生。

私は食堂へ行くというセレットさんと保健室前で別れて、アンジェさんに連れられて部屋へ帰ることになった。私の部屋は、今朝寝起きしていたあの部屋になっているらしい。

四階まで階段をゆっくりと登って、アンジェさんの部屋を教えてもらってから、私は部屋に帰るとアンジェさんにベッドに寝かされた。

ベッドの脇にパランセクという香りを小皿に数滴垂らすと、部屋にふんわりと花の香りが広がった。

「ゆっくりとおやすみ。また明日があるんだから」

ベッドに寝かされて、優しく頭を撫でられているとまるで小さな子供になったようだ。

これからここで暮らすことになるとはいえ、うまくやっていけるだろうか。

けれども、この優しい手があれば、運の悪い私でもうまくやれそうなのがしてくるから不思議だ。

私は久し振りに不安のない幸せな気持ちで目を閉じた。

夢と現実とわたし

小さな音がした。

それが、冷たい鎖の音だと気付くのに、さほど時間はかからなかった。

何しろ、それは私の腕を壁と繋いでいたのだから。

床は冷たかった。

当然だ。明かりとりの鉄格子からは容赦なく冷気が差し込んで、薄暗い部屋を支配しているのだから。

私は膝にかけられている布が、見憶えのあるマントだということに気がついた。まるで現実味のなかった光景が、マントのお陰で急に蘇ってきたようだ。

身震いをして、よくもこんな場所で生きていたものだ実感する。きつと、優しい夢を見られるおかげだったんだろう。

そう、ここは、冷たい冷たい牢屋なのだから。

鉄格子と外国語

幸い片腕だけが鎖に繋がれているので、マントを引き寄せることに不自由はなかった。

不自由といえば、この状態全部が不自由なんだけど。

やけに肌寒いと思ったら、私の格好は驚いたことに上等そうなドレスだ。肩ひものない真っ赤なドレス。着てるの私だけど誰が選んだんだこれ。装飾品どころか靴もない。でも、カンだけど、顔の妙なベタつきとかから、元は完璧な正装ってやつを施されていたんだと思う。カンですがね！

頭から水かぶりたい。

まあ、それはカビくさい牢屋に居るからなんだけど。

ああ、お風呂が恋しい。

不思議とお腹は減っていない。

それに、私は大して痩せたりもしていないようだった。むしろ健康そうだ。

私の記憶は、あの戦場からふつとりと途切れている。

意識のない人間に食べさせるなんて、点滴ぐらいしか思い浮かばない。

けれど、私にそんな針の跡なんかは全く見当たらなかった。

あの戦場。

あの匂い。

あの痛み。

私はふと気が付いて、自分の腕を見た。

火傷がない。

私はあの場ではほとんど痛みなんて感じなかったけれど、それはアドレナリンなんかのせいで、ひどい火傷をしていたはずだ。

それが、包帯どころか跡一つない、奇麗なものだ。

いったい、今はいつなんだ。

異世界に来てからの経験上、傷が一瞬で治るような術はない。しかも現代医学のような機器を使うわけでもない、薬草に頼る治療だ。いつか襲ってきたのみたいに魔法使いが居たのかもしれないけれど、それを私にかけてくれる知り合いなんか一人もいなかったはずだ。

そう、一人も。

私の、この世界に来て初めての家族は、みんな、妖精になって私を置いていってしまった。

あの、赤髪の騎士によって。

彼に言われるまでもなく、本当は、分かっていた。

炎で焼かれていく彼女たち。

私に、あのアザがないことで、泣きついた彼女。

妖精に変わった瞬間、彼女たちが、すでに彼女たちではなかったことを、私は分かっていた。

それでも。

それでも、目の前で剣をふるったあの男を、私は憎まずにはいられなかった。

それが、私の甘えと、誤魔化しと、恐怖からの当てつけだということも、知っている。

ああ、まずい。

心が折れる。

「ネロ！」

ひたすらマントを睨んでいた私の瞳がにじんできたところで、女性の声が牢屋に響いた。

甲高い足音と共に、鉄格子越しに現われたのは、黒髪の女性だった。

私は思わず息を呑んだ。

「ヴァベーネ!？」

大丈夫、と血相変えて問われたのだ。

驚いたのは、彼女の口から西国の母国語が飛び出してきたことじやなかった。

黒髪の彼女が、明らかに私の見慣れた顔つきだったからだ。

日本人。

アジア人は確かに似通ってるけど、彼女は、私にとってとても馴

染みのある顔つきだった。

けれど、私が問いかけるよりも彼女の方が早かった。

いつかクリスさんが着ていたような裾丈の長いお仕着せのメイド服を振り乱すように、彼女は鉄格子の前で膝まづく。

「ああ、ネロ、大丈夫？ 怪我はない？」

また不思議なことに、私は西国語を聞きとれる。

確かにあの騎士たちに習っていたけれど、私はいつも落第点すれすれだった。

なのに、今、彼女が話している西国語がまるで日本語みたいに理解できる。

「ごめんなさい」

うつむいている私の様子が泣いているとでも思ったのか、日本人顔の女性は自分の方が泣きそうな顔で呟いた。

「ごめんなさい。ネロ……こんなことになるなんて……私がついていながら……」

綺麗な人だ。同じ日本人とは思えないほどの、そのくせ細面の美人だ。そんな彼女がさめざめと泣くのだから、私は完全に泣く機会を失ってしまった。だって、こんな美人と誰が私と並んで泣いて欲しいもんか。

というわけで、私の涙は引っ込みました。ごめんね！ アンジェさん！ こんなところで泣いていいのは美人だけなんです。

「きっと、陛下が助けてくれるわ。陛下を信じて」

私の知ってる陛下は、一人しかない。けれど、西国と東国は仲が悪いはずだ。もしもここが西国なら、私を救ってくれる人などいない。

けれど、今のところ好意的な彼女に尋ねるのが一番だろう。

でもさー、異世界に来てこの間拔けな質問するの二回目だよ。

「あの一、ここってどこですか？」

どっかに幸運落ちてないかな。

名前と交渉

今度は彼女の方が驚いた顔で、私を見た。
そうなんでしょうね…。

どうやら、私はネロという人とよく似ているらしい。
でも自分と同じ顔がいるなんて。そんな厄介なものと同じ魂だけで
十分だ。

「あの、私ヨウコって言います。あなたは？」

できるだけにこやかに訴えてみた。鎖で繋がれてる状況なんて慣
れはしないが、笑顔は交渉の第一歩！
けれど、

「ヨウコ……」

日本人顔美人は眉根を寄せた。
あれ？ 交渉失敗？

「戻ったのね……記憶が…」

——ん？

記憶？

記憶ならばっちりと…あるとも言えないか。人間の脳みそなんて
豆腐みたいなもんだ。

不思議そうな私の顔を憐憫を込めて美人は見つめたかと思うと、
彼女は意を決したように口を開く。

「あなたの本当の名前は、ヨウコというのね…」

牢屋の暗がりだけど、彼女の黒い瞳はやっぱり私のそれと似ている。

そして、ヨウコと呟く発音がとても奇麗だった。

東国に居た時は漢字があったから、漢字はみんな理解してくれたけど発音が微妙なんだよね。ただ一人だけ、私と一番近いっていう男だけは妙に奇麗な発音だったんだけど。……完璧人間って自分が何もできない時に思いだすところなに腹立つものなんだ。

「私は、リーエ」

そう名乗ってから、黒髪の美女はためらうように言葉を切ったけれど、言い直すように続けた。

「……本当の名前は、尾田理恵。たぶん、あなたと同じ、日本人」

日本人。

そう言われて、彼女は社長よりも私に近い気がした。女性だからというわけではなく、きっと、彼女は私と近い。

「私は、あなたのお世話をしているメイドです」

けれど、見た目は私と同じ年ぐらいだというのに、彼女はずっと大人びた、もっと老成した目をしている。

「そして、あなたのお世話をお命じになったのは、西国王、アウトロッソ陛下です」

誰、それ。

私の疑問が顔に出ていたのだろう。リーエこと理恵さんは事情を察してくれたように頷いた。

「あなたをこの城へ連れ帰った方です。……覚えておられないでしょうか。赤い長い髪、黄土色の瞳の方です」

鮮烈に、私は思いだした。

赤い、紅い、血のような髪、狂暴で横暴な。

あいつが。

私は自分の目の前は真っ赤に染まるような心地がした。

右も左もわからないほど、血だけが沸騰する。

「勘違いはしないで」

私の様子がおかしいことに気がついたんだろう。けれど、彼女は見当違いのことを私に諭した。

「あの方は、あなたを始めからここに閉じ込めたりはなさらなかった。それどころか、あなたを客人として招いて、私にあなたを任せになったの」

……そういや、私ってば鎖に繋がれたまんまなんだった。すっかり忘れてた。私が健康ってことはやっぱり、ちゃんと管理してくれていたんだろう。

ここは人としてお礼を言っておこう。

「ありがとうございます。私、結構な日数、意識なかったんですよ？ お世話してくださって…」

「いえ。あなたは一か月前、この城へ来てすぐ元気になりました」
一か月。

「……あの、私、その間の記憶がまったく無いんですが…」

つか、さっきから気になる単語が出てくるな。城ってなんだ。
城って！ 城は鬼門なんだけど！

「はい……」

理恵さんは鎮痛な顔で目を少し伏せて、苦しげに顔を上げた。

「あなたは、ネロという女性になっていました」

はい？

空白と余白

戦場で意識を失った謎の黒髪の女。

その場に放っておくこともできずに、アウトロツソは彼女を城へと連れ帰った。

彼女の身元を明かすものは、たった一つの外套だけ。

それは東国の国王が身につけていたものだ。

彼女が何者か分からない以上、彼女にひどい扱いもできない。だから、彼女と同じ黒髪のメイドをつけて介抱させた。

しかし、彼女が次に目覚めたときには、己が何者かすら忘れていた。

医師の診断では強い精神的な衝撃を受けたことが原因で、いわば心を閉ざしてしまった状態になってしまっているという。

思い返せば、彼女はある火の海と化した戦場で、必死にあの死の女神共を庇っていた。きっと、彼女の顔見知りがある女神に墮とされたのだろう。

アウトロツソは黒髪の彼女をネロと名付けることにした。

彼女、ネロはアウトロツソによく懐いた。

始めは戸惑っていたアウトロツソだったが、次第にこまめに彼女の様子を伺いに行くようになった。

ネロは、言動は子供そのものだが、その天真爛漫なさまの中に一瞬だけ少女の機微が混じる。他人の心に敏感で、思いもよらない優しさを持つ。

王とは孤独だ。

そんな彼に何も言わずに寄り添ってくれる気まぐれなネロは、彼

の心を癒した。

しかし、彼女は彼だけの心を癒していたのではなかった。

ネロの教育係を買って出た弟のイーエロも、時がたつにつれ彼女に惹かれていった。

王族には珍しく仲の良かった兄弟だったが、二人が愛したのは同じ女。

兄と弟は、生まれて初めての憎しみと嫉妬を向け合うことになってしまった――…。

その愛憎渦巻く兄弟ゲンカの間に入ってしまった憐れな女が、わたくし、本名、君島葉子。

な。

なんて…っ！

なんてドラマチックで面白いことになってるんですか――…っ
っっっ！――…！！

私はぽかんと開いた自分の口からまずい言葉が出ないように慌てて手の平でフタをした。

いやだって。

とってお気毒な話なんだけど、次の瞬間、ベタ過ぎて爆笑しそうで。

それで、なんで愛され娘（私）がこんな牢屋に居るのかというと、
なんだか政変だか政敵？　だかに騙されて陛下を殺そうとしたとか
で？　陛下がいない間にここにぶち込まれたんだそうです。……ふ
っ……いや、ごめんなさい。お腹がよじれそう。

思わぬツボに入ってしまった小刻みに震える私を、鉄格子越しだ
し、ちよつと遠い理恵さんはまた良いように解釈してくれたらしい。

「ご安心ください。あなたの記憶が戻ったとしても、陛下はあなた
を愛しています」

いや、それはないな。

だって、ネロだっけ。その娘（もう娘と言わざるをえない）
だった時の記憶なんて一片もないし。

今、私の中にあるのは、あんまり良い感情じゃない。

いや、ちよつと待て。

私ってば、子供の頃からリアルに夢だったことに直面してないか？

白馬に乗った王子様がいつか迎えにきてくれるのー！

ていうのね！

いやいやいやいや！　待て！　じゃ、何ですか。私、記憶戻らき
ゃ、夢にまで見たドラマチック過ぎる結婚が叶ったかもしれない
ってこと！

ぎゃあああああ何てことだっっ！！　私の馬鹿ばかバカ！！
間抜け！

このまま記憶無くしてりゃあ、一生左ウチワで暮らしてたかもしれないのに！

まあ、こんな沸騰したみたいな恋、いつか醒めるし、旦那の愛も私の愛も一生続くはずもない。それに結婚してから、こんな風に記憶が戻ってみなさいな？ どう取り繕ったって、私にしてみたら、あの赤髪を愛せるはずもない。

間一髪セーフってところか。

甘い豪華生活は捨てがたいが、冷や汗ものだったな。

——うーん、やっぱり私ってば打算でしか結婚できないタチなのかな。結構、夢見てると思うんだけど。

自分の結婚観を疑い出したところで、また牢屋に足音が響いた。今度は重い靴音だ。

「——無事か」

おいおい。なんて顔してるの。

鉄格子の向こうで現れたのは、赤髪の長身だった。いつかの甲冑姿ではなく、シャツにズボンにベルトというラフな格好だ。けれど、このままマントでも羽織れば、いつでも玉座につけるような威風堂々とした姿だ。

けれど、以前見たような人を射抜くような金の瞳には、あってはならない愛情の光。

まるで、世界で一番愛おいしいものを見つけた時のような顔で私を見つめる。

カンベンしてください。

「あんた、誰？」

美形の顔がひきつつて固まる瞬間を初めて見ましたよ。
いや、いーもん見た。

城と執務室

「ここは、西国首都カピタ。王城アルジェントの地下牢だ」

かつんかつんと各々の靴音を響かせながら、私は石造りの壁や階段を眺め回した。

海外旅行にも行ったことないから、こんな石のお城って物珍しくてねえ。

そんな私の様子を若干気にしながら、お城の主自ら私を先導してくれている。豪華なんだかめんどくさいんだか。

記憶の戻った私をそのまま地下牢とやらの閉じ込めておくのかと思えば、王様はあっさりと私を出してくれた。

意識が戻ったばかりで混沌としてたけど、よく考えればこの人たちの言うネロっていう女のフリをしてれば、大歓迎で牢屋から出してもらえるのに！

てことを、絶句する赤髪の王様眺めながら考えてたんだけど（性格悪いとか言わない！）調子を取り戻した王様は何事もなかったかのように牢屋の鍵を開けて、鎖を外してくれた。

お礼も、にこりもしない私をちょっと見てたけど、何も言わないでこの地下牢を抜ける廊下を歩かされている。

歩かされてるっていうのは、前に王様、後ろに理恵さんがばっちりついて歩いてるから。

逃げないって。こんな場所で逃げだしたら、迷うし。

私は牢屋でもいつでも共にしているマントを羽織りなおした。ほんとに、このマントは私と運命共同体になってしまったな。いつそこいつと結婚するか。

そんな埒もあかないことを考えていたら、石畳の階段を抜けて、高い天井の廊下に出た。高くてひと抱えもありそうな柱が並んで、まるで巨人の国にでもやってきてしまったみたいだ。けれど理恵さんは私より背が低い。赤髪は頭一つ高いけどね。

「ネロ！」

またしても記憶喪失女の知り合いが現れたのか。

そう思って美声に振り返って顔が引きつるのを我慢した。

やや振り乱しがちだが、なびくのは美しい金髪、そしてきらめく黄金の瞳。整った顔立ちは女性的で滑らかだ。そんな美形が苦しい顔で近寄ってくるんだから、思わずごめんなさいと言いたいそうになる。そして、彼はきつと、

「兄上…、ネロは…？」

赤髪王の弟らしい。

さすが兄上は弟の美貌を見慣れているらしく、無感動に首を振る。

「部屋へ行くぞ」

ここで話すつもりはないということが伝わったらしく、美貌の弟は息を整えながら肯いた。

彼の格好は、いつか東国の城で見たような詰襟ではなく、なんとなくかフロックコートのようないでたちだ。長い上着にズボンにブーツ。加えて弟は肩より長いだろう髪をゆるく結わえて、耳にしゃんしゃんと鳴る飾りのついたピアスをつけている。シャツとズボン姿の兄と違って派手な格好だ。

「ネロ。平気かい？ 痛いところはない？」

兄の隣からずっと私の隣に並ぶと、小さい子供に尋ねるように、けれど決して子供には向けない甘いささやきで私を伺ってきた。うわ、目の毒だこいつ。

「ありません」

いつの間にか頭の中で組み立つ西国の言葉を小さく答えると、弟は少し怪訝そうな顔をした。

「ネロ……どうしたんだ？」

あーあーすみませんね。ネロっていう女の子がどういう態度だったんだか知りませんので同じようにはできません。でも、それを私は言わなかった。目の前を余人を拒否するように歩く王様が許可してない。

私の処分がどうあれ、ここは黙っておくべきだろう。

部屋とやらに着いてからが、私の正念場だ。

私がそれきり黙ると、弟も諦めたように口を閉じた。

でも、隣に立つ彼が、私を気付かっていることは分かったので、避けることはしなかった。

まったくの他人事なんだけど、彼らには、私の話はきっと酷な話なんだろうから。

王様が人払いをして四人で入ったのは、そこそこに広い部屋だった。

入った瞬間は応接間かと思ったんだけど、ソファセットの向こうに鎮座する執務机^{しやくぎ}ばいものを見て、もしかしたらここは王様の私室

なんじゃなかろうか。

王様は私たちに座れといい、理恵さんはドア前に立った。メイドだというから、そこが定位置だというのだろうか。

釈然としないまま、私は促されるままソファに腰かけた。ソファはそれぞれ一人掛けで、私は王様と弟、三竦みになるような格好で座ることとなってしまった。

……ああ、お腹空いたわあ。

「――先ほどのお前の問いに答えよう。俺は、アウトロツソ・レ・ゲイネスライン。西国の王だ」

あの時と同じだ。

赤髪は、次はお前だと視線を寄越してくる。

答えないわけにもいかないか。

「ヨウコ・キミジマです」

私が答えると、王様の隣が息を呑んだ。弟だ。

「兄上…これは…」

「――彼女の、記憶が戻ったようだ」

低く押し殺してはいるけど、悲痛な声だった。

ちよっと待ってよ。勝手にドラマにならないでよ。こっちは物凄い傍観者だよ。

茶々を入れたいのは山々だったけど、ドラマは続く。

「では、彼女はもうネロでは…」

「ああ」

兄の応えに、弟はいっそすみません間違いでしたと言いたくなるほど顔を歪めた。

泣きそうな顔すんな。泣きたいのはこっちだ馬鹿やろー。

「――失礼いたしました。ヨーコとお呼びしてよろしいでしょうか？」

お鉢をこちらに回してきたのは弟だ。お伺いを立てるような口調だけど、葛藤が見え隠れしている。外交官には向かないねあなた。私がうなずくと、彼は自分の気持ちを精一杯落ち着かせるようにひきつつた微笑みを浮かべる。

「私は、イーエロ・ジ・ゲイネスラインと申します。……兄、アウトロツソ王の弟にあたりますが、すでに継承権を放棄した身です」

美人が泣きそうだと物凄く憐れに見える。得だ。

「……ではヨーコ。お前はこの状況をどこまで分かっている？」

話を進めにかかったのは兄。

こいつ、油断ならない。

すでに私が、自分の言ってることを理解していることを見抜いている。

つか呼び捨てにすんな。

「……先ほど、理恵さんにあらかた聞きました」

「ならば話は早い。お前のことを話してもらおうぞ」

そう言われてはいはい話していたんじゃ、こっちの手持ちのカードが丸わかりだ。

私が口を噤むと、兄は畳みかけてくる。

「お前、迷い人だな？」

同情と憐憫

私は顔を上げなかった。けれど、ずばりとした声は確信めいている。

「お前の名前。それは、そのリーエと同じ響きだ。そして、リーエの名前を正しく発音できた」

兄の口調は迷いが無い。これが持てる者ってやつか。

「迷い人に関しては、王族と魔術師どちらも知らない事柄だ。俺に拾われたことを運良く思うのだな。——もつとも、俺より前の飼い主が居るようだが？」

私は野良犬か。視線だけ上げると、兄は王様の威厳で少し笑う。

「お前の出自などどうでもいい。俺が知りたいのは、そのマントのことだ。——お前は、そのマントを何処で手に入れた。言え」

いっそ、かっぱらったとでも言おうか。

素直に話して信じると思えない。けれど、何故か、この王様は私の話を信じるような気もした。

これが、ネロという女として生きた名残りなのか。

私は何を話していいのかわからなくなってしまった。

この男は私が戦場に無防備に居たことを知っている。それが不自然だということぐらい、私にも分かる。こうして、城に連れ帰って自ら監視しようとするほどには。

そして、この王様が、きっと誰も信じていないんだろうというこ

とも。

信じる部下が居るなら、私なんかを自分で引き取ったりしない。信じられる部下が居るのなら、私が政治的なことに巻き込まれたりなんかしない。

この人も、孤独だ。

どうして出会ったばかりの人にこんなことを思うのか分からない。私の中のネロが叫んでいるようだった。

この人を裏切らないで！

裏切るも何も、私はこの男を知らない。

「———本当のことを話せば、信じてくれるんですか？」

きっと、彼は信じるだろうと思った。

一か月もの間で、ネロという女を愛したのなら。

「話による」

「それは、あなたの正否にかかっているということですよ？　それは、信じないということもありうるということではないのですか？」

私の言い口が気に入らなかったんだろう。王様はかっ顔をしかめた。

「お前が大人しく全てを話せば、俺が大事に飼ってやる！」

飼うってなんだ。

不審な顔をしたんだろう。王様は鼻を鳴らして笑う。

「お前の前の飼い主はそんなことも教えなかったのか？」

嫌な予感がして、私は耳を塞ぎたくなった。けれど、王様の声の方が早い。

「異世界から落ちてきた迷い人はな、この世界では一切、年をとらなくなる。そのリーエは、すでに三十年、城に仕えている」

何。

思わず理恵さんを振り返ると、柳眉を少ししかめていた。

「不老だけであって不死ではない。単純に、落ちてきた年齢から年をとらなくなる。体は成長せず、ただ代謝だけを繰り返す」

代謝だけを繰り返す。

それを、確認した作業が、過去にあったのだ。

背筋に汗が伝う。

記憶よりも少しだけ伸びた自分の髪が、恐ろしく感じた。

「不老のものを市井に出せば、混乱を招くだけだからな。我が国ではこれらを奴隷として王城で仕えさせている」

聞きなれない単語に、私は再び赤髪の王に向き合う。

「お前たちの世界では奴隷はいないのか？」

いた。過去の負の遺産として扱われている。忌むべきことだ。

けれど、世の中全部がみな平等なんて高説垂れるつもりはない。いつだって世の中は不平等で、理不尽で不幸なんか満ち満ちてる。身分としての奴隷がなくなって、今度は誰もが奴隷になる瞬間を与えられたとも言える。

誰もが王様、女王様になれるわけじゃないんだから、誰かが仕えることにはなる。社長みたいに人に崇められて当然だとか思ってるやつもいる。

でも、

「普通、になりたい人はいません」

奴隷になるのが好きなのは、よっぽどのドエムだけだ。

私の顔をじっくりと眺めて、赤髪の王様は皮肉げに笑う。

「ならば、話さなくてもいい。お前は早刻、好事家の奴隷商人にでも売りつけてやる」

隣の弟が非難めいた視線を投げるけど、兄は涼しい顔だ。

本気だな。こいつ。

私が慎重に赤髪を睨むと、ふいに黄金色の目を逸らされた。

「――そのマントの持ち主はな、敵国の王だ」

先ほどの強い口調とはうって変わって、ぽつりと語り出したので私はそのまま黙りこむ。

この男、俊藍を知っているんだ。

「東国の王、ヘイキリング王が今は亡き父王から賜ったもので、奴は式典の時にはいつもそれを身につけていた」

大事な、本当に大事なものだっただ。

私は俊藍の心の支えまでもらってしまったのか。

「ところが、三年ほど前に突如として姿を消した。それからだ。西国との国境にあの呪われた女神共が現れるようになったのは」

美しい炎の妖精たち。

彼女たちに自我はない。

私は自分の考えに吐き気を覚えた。

だって、誰を憎んでいいのかわからない。

「自国の民を傷つけられて黙っているわけにはいかない。だから、戦が始まった。――犠牲も大きかったがな」

赤髪はゆっくりとその黄金の瞳に私を映す。

整った顔立ちは、弟と違って荒々しい。俊藍とはまた違う威圧感のある男だ。

「この世界には大則というものがある。それに従えば、諸国の王は五年に一度、北に集まり、そして国と国の境を犯してはならない。笑えるだろう？ 戦争をしてはならないという決まりはない。国と国の間にはある一定の領土があって、そこを争って外交戦から大戦まで多種多様な戦争が行われている」

それは、まるで永遠に戦争をさせるかのような。

顔を歪めた私を、西国の王は諭すように眺める。

「だから俺は北の番人どもが定めた大則とやらを破ることにした。先に破ったのは東国だがな。だが、あの国が北に齒向かう様子はない。それでは、俺の国はどうなる？」

だから、戦争をすると。

「——理解できないという顔だな」

話についていけないか、ということ問うているのではなさそう
だ。

けれど、私にはわからない。

「わかりません」

どうして戦争をしなくてはならないのか。

「どうして、国を傷つけるような真似をしたのか訊いたんですか？」

「解答はなかった。使者が殺されたからな」

わからない。私は俊藍がどうして王様業から逃げなくてはならなかったのかを知っている。あの呪いがあったからだ。そして、恐らくそれは俊藍の臣下の誰かがやったんだろうということも分かる。彼は命を狙われ続けている。そんな中で、社長が召喚された。関係のない私まで殺そうとするほどのことが、今、あの国で起きている。

でも、そんなことが今更わかったところで、この目の前の人に言うわけにはいかない。

何も知らない私が言えることなんて限られている。

「――私が知っているのは、あの戦場でたくさんの人が死んだってことだけです」

おかしい。

何かが狂ってる。

「私にはわかりません。異世界から来たってだけで奴隷扱いされることも、最初に傷つけられた人たちの何倍もの人を戦場に向かわせることも」

どうして、アンジェさん達が、あんな死に方をしなくてはならなかったのかも。

「お前に何がわかる！」

部屋中を揺らすような大声で、私を遮ったのは赤髪 of 王様だった。

「自国の民を殺されておめおめと引き下がれと？ 北の番人どもはこの不条理にすら揃って口を閉ざしたのだぞ！ 俺は……」

「そんなのアンタの自己満足でしかないでしょう？」

血を吐くように叫ぶ王様を私は睨んだ。

一瞬、怯んだ顔をしたけど、今度は本気で顔に血をのぼらせている。

なんで、私が起きぬけにこんな国家機密なんかを話されて王様と

討論会しなくちゃならないんだ！

私も頭に血がのぼっていた。

「自分の国の人が理不尽に殺されれば、そりゃ誰だって腹立つわよ！でもね、その倍の人数けしかけて戦争したいなんて思うのは、馬鹿か子供だけなのよ！」

「ば…っ お前、そんな言葉をどこで…！」

顔をしかめた王様がはっと眉を跳ね上げる。

「知ったこっちゃないわよ！ 私は一か月間の記憶がないんですからね！」

私にわかるのは、

「私は、この世界に来て初めて出来た家族をあんたに殺されて、わけも分からずアンタに奴隷商人とやらに売り払われようとしてるってことだけしか分からない！」

自分が馬鹿だということだけだ。

案の定、目の前の人は腰の剣に手をかけた。

どうして私のことが分からないと嘆くのか分からない。

私は、あなたに自分の言葉が通じないことに嘆いているのに。

胸の奥が痛い。

ああ、ネロは、この赤い髪の孤独な人が本当に、好きだったんだ。

とどめようとする人たちを薙ぎ払って、剣を抜いた人が泣いている。

私は、あの人の味方になろうと決めた。
決めたけれど、もう、誰を信じていいのか分からない。

剣先が私の喉元を貫く――…

「――おや、お取り込み中でしたか」

場違いな声が部屋にすりと舞い込んだ。

乱入と鎮火

その場に居た全員に水を浴びせるほど落ち着いた声で、私は湯だっていた頭がちゃんと働きました。

目の前の剣先を見て、溜息をつく。

あつぶねえ。ドラマの主人公になるところだった。

頭がちよっと冷えたのは目の前の赤髪も一緒なようで、我に返ったように剣を引いた。

ここで切り殺されるのは免れたようだ。死ぬならご飯食べてからのがいい。西国のご飯って食べたことないし。

我ながら現金だ。

「何の用だ。コロラル將軍」

威嚇するように赤髪が見つめているのは観音開きの縦に長いドア。この城どういう造りしてるんだか、ものすごく縦に長い。日本の平屋に慣れてるせいかな。

そのドアを平然とした顔で開けて突っ立っているのは、これまた非常識な男だった。

王様弟と似たようなフロックコート姿なんだけど、奇麗に撫でつけられている髪は鮮やかな緑、明るい緑の目には片眼鏡。そして、鷲鼻の無表情に精悍な顔には、縦に入れ墨が施されていた。

不良なんだか、紳士なんだか分からない人だ。

不良紳士は少し小首を傾げて、何事もなかったかのように杖を伴って部屋へ入るとドアを閉める。

それだけで、彼の所作は非常に優雅で洗練されていることが分か

った。

皮手袋の手で少しだけ持っている杖の柄を撫でると、優雅に一礼した。

「アウトロツソ陛下におかれましては、ご機嫌麗しく」

「……麗しいように見えるか」

誰の目から見ても不機嫌にもっともなことを言ったのは王様だ。ツツコミの才能あるなキミ。

「見えませんな」

しれっと言うな。不良紳士は自分一人で納得するように頷く。

「はて」

小さく呟いたかと思うと、紳士はふっと私に目を向けて、再び王様と向き合った。

おっちゃんと言っているのか知らないけど、アンタなんか知らないよ

「この御方がいらしてから、陛下のご機嫌はウナギ登りだと聞き及びましたので、わざわざカピタくんだりまで参上した次第なのですが……すでに袂を別たれた後でしたか」

田舎へ届く情報など不明確なものでしてね、と無表情な紳士。…あの、王様の青筋が見えないなら眼科行くことおススメするよ。

「残念でしたな。あわよくばと思っていたのですが」

最後の「が」は私に向けられたらしい。役立たずと言いたいのか。会って間もない人に役立たずと見抜かれたのか私は！ めっちゃ腹立つ…。

けれど、王様の着眼点は違ったらしい。

「あわよくば…？」

王様の的確な食いつきがお気に召したらしく、紳士は少しだけ表情筋を緩めたようだ。もしかしてそれで笑ったとか言わないよね？ 紳士は出来のいい子を褒めるような口調で王様に続けた。

「あわよくば、この馬鹿げた戦争をおやめ下さいとお諫めするつもりでした」

あーああ。王様が髪を逆立てんばかりに不機嫌になっていくよ。けれども、突然現れて場をすっかり支配してしまった紳士は全く気にしてないようだ。

「すでに民へとかけられた税率は破綻ぎりぎり。たとえ気前のいい商人であろうと貴族であろうと、これ以上の出兵費の捻出は不可能です。国庫にあっても、あまり良くない状況なのでは？」

向けられたのは金髪の弟だ。彼は優美な眉を歪めている。

代わりに隣の王様が紳士に向かって吠える。

「金の話ではない」

「しかし、何かを成すには先立つものがが必要です。今のあなたには見えておられない」

私に話して聞かせたご高説を一瞬で遮られて、王様の機嫌はすでにマイナスを振りきる勢いだろう。

「いったい幾ら奴隷を兵士として投入したのです？ 彼らの人権を保障するとおっしゃったのはあなたご自身でしょうか？ 目に見えぬ権利を盾に厄介者として彼らを戦争へ駆り出し続けていれば、いずれあなたの首が飛ぶのでしょうね」

辛辣。

その一言に尽きる。

紳士の話の内容が本当であれば、東国と大差ない驚くべき犯罪だが、紳士の言葉は凶星過ぎて反論できなくて痛い。

「――俺の召喚命令を散々、蹴っていたのはそのためか」

王様のその言葉で、紳士は初めて表情らしい表情を浮かべる。それはそれは、上品な微笑み。

「我がメフィステニス家は代々この役割を申しつけられておりましてね」

片眼鏡の先についている飾りがさらりと揺れる。

王様は苦々しく紳士を睨みつける。

「王を諫める行為は、いつの世であっても命がけであるからな」

「然様でございますね」

さも当然のようにうなずいた紳士から視線を外して、当の王様は

大きく息をついた。

「……俺は、我を失っていたのか」

「恐らく」

紳士は一度頷いて私を見る。なんだよ。もうお鉢回すなよ！

「私は遠くの地で暮らしている身ですから、あなたのお心は分かりかねますが、聞き及ぶことはございましたよ」

淡い緑の瞳を細めてから、紳士は私から視線を外すと金髪の弟へと目を遣る。それから、王様へと向きなおると深々と頭を下げた。

「あとで色々と問題も起きましようが、不肖、このわたくしが尽力してあなた様のお力となりましよう」

王様は少し驚いたような顔をしたけど、常のしかめ面に戻っていた。

すごい。

あの修羅場が一瞬で終わった。

私は半ば茫然と紳士を眺めていたら、目があった。え。何？

「ところで、このお嬢さんは？」

誰だと聞いているようではないようだった。

どう処分するのかと訊いているんだ。

顔を引き締めると、薄緑の瞳が笑ったような気がした。

王様も、弟も答えない。

当然だ。彼らが欲しいのは、すでに無いネロという女なんだから。

「では、わたくしが連れ帰っても問題はありませんね」

え、何それ。

紳士は優雅な足取りで、椅子に座り込んだままの私に手を差し出した。

彼の手にぴったりと馴染んだ手袋は手触りは良さそうだが、この手を取っていいものかどうか迷って、私は俊藍のマントを掴んだ。

すると、紳士はその私の手を問答無用で掴み取る。

「お初にお目にかかります。私は、コロラル・ド・メフィステニス。しがな田舎の伯爵領主です」

「……え、あのさつき將軍って」

私が喋ったことに気をよくしたのか、コロラル伯は優雅に微笑む。けれど、聞こえるか聞こえないかの声で付け加えられた言葉で私の運命は転がった。

「ここにいれば、あなたは死にますよ」

物騒な口説き文句に釣られて、私はこの紳士についていくことを決めました。

人生って、怒濤に出来てるんだな……。

塔と自由

「待て」

伯爵閣下に着いていくことを決めた私の背中に声を投げたのは驚いたことに、

「なぜ、あなたが彼女を自由にできる権利があるというのですか？」

置いてきぼりにされていた兄弟だった。

けれど、冷静に彼らを観察してみると、二人には決定的な違いがあった。

兄は不安なのか何なのか、自分でもよく分からないだろうことに黄金色の瞳が感情に揺れている。でも、金髪の美しい弟は、その瞳に不安はない。

彼は考えている。何が良くて、何が悪いのか。

奇麗なものだ。

だから、私は笑ってやることにした。

お腹は空いてるし、色んなことが重なってへとへとだけれど、無理矢理唇を引き上げる。

「アンタに私を自由にする権利はありませんよ」

兄は傷ついた顔をしたけど、今度は弟が鼻白む。

コイツ、社長と同じ人種だ。

従順な人間だけが好きなやつ。

「では、あなたの意見を伺いましょう」

伯爵は面白がるように私の隣で見下ろしてくる。

「あなたに着いていきます」

まるで貞淑な奥さまみたいな答えだな…。

伯爵は「よろしい」というように私の手をとって、まるで淑女を扱うように手を引く。

「あ、このドレス」

そういや私、借り物ドレスを着たままだ。真っ赤なドレスなんて売っぱらうぐらいしか思いつかない。

「脱いでいきましょうか？」

マントもあることだし。

チャックは後ろか。

「着て行け！」

背中に手を伸ばそうとした私に向かって、偉そうに言ったのは赤髪の王様。

きっと。

きっと、彼に拾われたならネロは幸せだっただろう。

「ありがとうございます」

今度はちゃんとお礼を言って、私は伯爵の後について部屋を出た。これで一か月分のことやチャラになるとは思わないけれど、今の私にできることはこれぐらいしかない。

先の見えない廊下を歩きながら羽織ったままのマントの端を掴んだら、伯爵が見下ろしてくるのが分かった。

泣かないですよ。

そんなに感傷的な性分じゃない。

記憶の外の人たちを、私は振り返らなかった。

でも、たった数時間の付き合いでこれだけ淋しいと思うのだから、ネロの気持ちの欠片が私の中に残っているのは確かだった。

幸いにも、伯爵はそんな私に何も尋ねて来なかった。

ただ、ひたすら長い廊下を私を黙ってエスコートして、行きついたのは城の端にある塔だった。

何の変哲もない、けれど広くも狭くもない塔の中。

その部屋の真ん中に立って伯爵は私と共に立つと、杖でトンと床を突く。

杖の反響が塔の上まで登り上がって――…何も起きない。

伯爵はちょっと黙ってから、私を見遣った。

「―――本当に、私に着いて行きますか？」

静かな声だった。

だから、それが単純に自分に着いて行くか行かないかを尋ねているようにも思えなかった。

それは、生きるのか死ぬのかを問われているような。

この世界に来てから、命の選択ばかりだ。

私は当然のように答えた。

「いきます」

コロラル伯爵は私の目を見て、少しだけ、ほんの少しだけ笑った。

だから、私の答えが合格だったのか、不正解だったのかはわからなかった。

「では、お手を」

上等そうなフロックコートの腕を差し出されたので、私は怖々と指をかける。

やめてよねー。そういや私、地下牢から出されてから手、洗っていないんだから。

私の指の感触を確かめたのか、入れ墨の伯爵はさっきと同じように杖で床を突いた。

すると、さっきとは違って床に電気が走ったみたいな紋様が一瞬のうちに浮かび上がる。

そして、そのまま私の目の前が真っ白になって、塔の景色は消えた。

「――目を開けてください」

いつの間にかコートを握りこんでいた手をゆっくりと外されて、私はおずおずと目を開けると、

「――ここ、何処ですか？」

一面、お花畑でした。

温かい日差し、淡い緑の木々、手入れの行き届いた花壇には色とりどりの花々。

小鳥がさえずり、庭木のアーチの向こうには、青い屋根のこぢんまりとしたお屋敷が。

私が立っているのは、ストーンサークルもどきの一枚石の上だ。さわさわと風に雑木林が鳴って、昼寝だつてしたくなる。

伯爵はさあと言うように私を丁寧にエスコートしてくれる。

「ようこそ。我が屋敷へ」

無表情な伯爵の腹は読めないけれど、さっきまでのやりとり見る限りでも分かるほどきつと腹黒なんだろうけど、少なくとも今すぐ私をどうにかしてやろうなんて意思は見えない。

――もらわれるなら、最初からこんなところが良かったです。

私は心の中でひっそりと涙した。

庭とミルク

屋敷の主であろう、伯爵直々に案内されたお屋敷は見た目よりも大きかった。

私の基準が日本のウサギ小屋と評される一軒家だから、この世界のお屋敷は全部広く感じるのは当たり前なんだろうけど。

掃除好きの母がこんなお屋敷に連れて来られたらさぞ嘆くだろう。一人で掃除するには広すぎる。

けれど、伯爵に招き入れられた屋敷には誰もいなかった。

私と伯爵以外の足音以外、こつりとも音もしないし気配もない。あいにくと靈感はないのでそのあたりはスルー。

そのくせ正面玄関から階段の手すりに至るまでピカピカだ。

まさか伯爵一人で掃除しているのか。

半ば青い顔で尋ねたら、伯爵は涼しい顔して応えてくれた。

「今日は使用人がみんな出払っているのね。申し訳ないが私が君のエスコートをさせていただくよ」

滅相もない。どこをどうして申し訳ないんだか。こっちの方が遠慮してしまう。

お城ほどじゃないけど、長い廊下を案内しながら、伯爵はのんびりと話してくれた。

この人、私が本調子でないことも分かってて歩調も合わせてくれている。かえすがえす、こんな人のところにもらわれたかった。

「私の自己紹介をちゃんとしていなかったね」

そう言うと、伯爵は腰の後ろに腕をやって組む。ますます紳士だ。

「私は、コロラル・ド・メフィステニス。メフィステニス伯爵領の当主を務めている。ここがどういう所領で、どういう経緯で賜ったのかは省くことにするよ。面倒かつ複雑だからね。すでに私でこれこれ三十八代目ということは教えておこう。ちなみに私も三十八になった。奇遇だね」

初めて顔見た時から分かったことだけど、この人、かなりの変人だ。

私は賢明にも彼に口を挟まず、黙って話の続きを待った。

「以上だよ」

待った私が馬鹿みたいじゃないか。

「——えっと、さっき、王様が將軍と呼んでいましたが……」

話が途切れるのもあれだったので、質問を投げてみると伯爵は「ああ」と事も無げに頷いた。

「そうだよ。私は第七十七師団を預かる將軍職もあずかっている」

まるで他人事のように言って、伯爵は肩を竦めた。

「明日か明後日には皆が揃うはずだから紹介するよ。我が家の使用人たちだからね」

——訂正しよう。私は、かなり特殊な場所に連れてこられたようです。

將軍とか、師団とか、単語の意味はよく知らないけど、この変人伯爵は曲りなりにも軍人さまらしい。

確かに背は高いし、すらっとしてるし、きつとちゃんと筋肉ついた人なんだろうけれど、顔の横を縦に走る入れ墨を払拭するほど、彼は紳士で弁が立つ。王様の言葉が無かったら、私はずっと、この人を政治家か何かだと思っていただろう。――一か月前に別れた騎士たちのような、どこか清廉な感じもしないのだ。

騎士たちは上司の命令はどんな命令でもきく。たとえそれが人道に反することでも、自分の感情とは別に行動している。

けれど、先ほどのやりとりの限りじゃ、この伯爵は王様に再三呼ばれていたらしいのに、それをずっと無視していたというのだ。

この伯爵には意志がある。

当の伯爵さまは、甲斐甲斐しく私に客間を案内してくれ、バスタブ付きのシャワーからお湯が出ることも、タオルの位置まで教えてくれた。ちよつと待ちなさいと部屋を出ていったかと思うと、誰かのお古らしいチャリムと、いつのまに入れてきたのか温かいミルクまで用意してくれた。

どうして私がチャリムの方が着方を知っているのかを分かったのかは知らないけれど、古着の七分丈パンツ付きのおばちゃんチャリムはありがたい。下着は西国のものだと言われて、当然のように渡されたので、恥ずかしいなんて欠片も思わなかったよ。こっちはキャミソールみたいな上と見たことあるようなパンツなんだね。紐パンが日常になりつつあったから、おお、なんかこのフィット感のありそうな布地が懐かしい。

「夕食までゆっくりなさい」

温かいミルクに保温用のカバーをかけて、伯爵は充分過ぎるほど

の丁寧な心配りの効かせて部屋を去っていった。

感動で泣きそう。

高級ホテルに泊まったら、こんな感じなんだろう。何だか自分がお姫様にでもなった気分なのに、なりきれない感じがくすぐったくて不思議と嬉しいという。

今までの経験から、こんな生活が続くとは思えないけど（だいたいすぐに追い出されるから）こんなに待遇良いのは久しぶり。まあ、記憶無い時も待遇は良かったんだろうけど、覚えてないから。

温かい部屋に居ると、思いだす。

私を心配してくれた人のこと。守ってくれた人のこと。

クリスさんは元気かな。

歩く十八禁さんはどうしてるかな。

社長は今もふてぶてしいかな。

不本意だけど、あの東のクソババアは今も世にはばかってるのかな。

有害銀髪は消えてしまえ。

あの騎士たちは、また女の子たちを集めているんだろうか。

ハンナは家族のところへ帰れたのかな。

セレットさんはお子さんに会えたかな。

——アンジェさん、私、生きるからね。

あなたが守ってくれたから、私はこうして生きている。

それから、私は東国に戻らなくちゃならない。

歪んだ呪いの結末を、私は見届けなくちゃいけない。

それは、何の役割も持たず、この世界に迷い込んだだけの私だけが出来ることだと思うから。

生きるよ。

生きて、俊藍に会う。

私は、マントの端をきつく握って、少しでも泣いた。

ハーブと商売

こんにちは。君島葉子です。

この右も左もわからない異世界に不可抗力で飛ばされてきた二十四歳。独身。

色々あった…えーと、あれ半年ぐらい経ったかな。

ただいま、幸せを噛みしめておりますっっ！！

「お上手ですわ。ヨウコさま」

私の隣で優しく微笑むメイドさんは、伯爵の部下というガリアさん。

緩く巻いた金髪を美しく結いあげている美人です。

白いエプロン、ロングな紺ドレス、ヘッドドレスはふんわりレース。

理想のメイドさんです。

そんなメイドさんにただいま不肖わたくしはお勉強を教えてもらっております。

なぜか、商売を。

ミクロとかマクロとかややこしいことはともかく、どうすれば物が売れるのか、顧客とは、そもそも物とは。そういうことを手っ取り早く学ぶということで、私は実際に伯爵の統治下にある街に出かけ、聞きこみをし、それから需要を考えるとという授業を受けている。ぶっちゃけ、経済学というより商売だ。

そこで私は、今まで習った知識をどうにか生かそうと、薬草を重

点に置いて考えることにした。薬草と人は切っても切れない関係だ。だから、そのあたりをどうにかできないかと思ったのだ。

資本金は伯爵からわずかながらに出してもらって（借金だ）街でのマーケティングを行い、明らかに東国とは違う需要を目の当たりにした。

東国では薬草は薬の役割しかなかったが、西国では薬でもあり、娯楽でもあるようだった。

日本でも近頃流行りのハーブというやつだ。

東国と西国と自生している薬草は異なる。

薬草をお菓子とかお茶とかにして楽しむ流行がきているらしい、と見た。

これは！ と伯爵とガリアさんに相談した結果、お許しが出たのでその商品開発を手伝っていただいて、それが結構な売れ行きになりました！ お花入れたりするのはいい意味で盲点だったらしい。近々伯爵に借金を返せる予定です。

今はガリアさんにその試作品を飲んでもらっている真っ最中。

お上手ですとようやく褒め言葉をいただいたところだ。彼女の舌は非常にまじめで厳しい。

「ヨウコさま。そろそろお茶にいたしましょうか」

気がつけば、日の傾き具合からして午後のお茶の時間になっていたらしい。野生化してないか私。

ガリアさんの提案に笑顔で肯いて、私は今までぶちぶち千切っていた乾燥した花を置いた。

手から花の香がする。すごいな……泥の匂いがしないよ、炭の匂いもない。

ガリアさんはさっと立ちあがって、部屋からそっと出ていった。最初の三日は、私付きだという彼女と「いえいえお構いなく」「いえ、これが私の仕事でございます」の押し問答したのが懐かしい。

ただいま滞在一週間目です。

私に与えられた部屋は広い。

入った時には、お風呂しか見てなかったけどクリーム色にまとめられた調度品の数々は装飾はあるけど、気取った感じのない手彫りの家具だ。温かな若草色の布張りの椅子、落ち着いた木組みのテーブル、柔らかい白木のタンス、絨毯は柔らかいクリーム色、ベッドは女性が一人で寝るにはちょうどいいぐらいの大きさだ。私に与えられた服もチャリムが中心で、ガリアさんが着ているようなドレスではない。

やんわりとガリアさんに勧められて着てみたらやっぱり似合わなかったけど、街に行く時にはチャリムだと目立つのでドレス借りてます。身長が合わないかと思ったら、ガリアさんのメイド仲間さんからお古をもらいました。ぜひお礼が言いたいと思ってたんだけど、彼女は屋敷に帰ってからすぐに別の任務で旅立ってしまった。ありがたい：ほんとにふりふりドレスじゃなくて。どっちかというとスーツみたいなドレスなんで私にも合うんだ！ 帰ってきたらぜひ会いたい。

基本的に西国は洋風だ。東国では食べられていた味噌やら発酵食品はチーズぐらいしかない。（東国にはチーズもヨーグルトもある）焼いた肉！ 煮込んだ肉！ 燻した肉！ 肉肉肉！

おいしいんだけど、パンより米が食べたくなるのはやっぱり日本人だと思いました。

こんな感じで伯爵のお家でご厄介になってます。

……幸せ。来て良かった。

私は暖かい幸せを噛みしめた。
けれど、お茶のポットが乗ったワゴンを引いたガリアさんと共に

わざわざやってきた、今日も完璧なフロックコートの装いの伯爵が、
思いもかけない知らせを持ってきた。

長話と昼ドラ

ガリアさんにお茶の用意をしていただいたテーブルにつくと、伯爵は鷹揚に頷いた。

この伯爵の良いところは見た目の入れ墨通り偉そうだけど高圧的でないところだ。必要のない限り、人を呼びつけるなんてことはあんまりない。私は伯爵に面倒見てもらってる身だから本当言うと使用人と同じなはずなんだけど、伯爵は私のことを客人として扱うし、あまり執務室なんかには呼ばれたことはない。

「今日のお茶は、シーサイド地方で採れた二番茶を煎じたものだよ。素晴らしい。まるで、自分の帰りを待つ愛妻がいると知りながら浮気相手にうつつを抜かす背徳感のような甘さがあるね」

伯爵は優雅な所作で繊細な磁器の白カップに口をつけてのたまった。

そんな昼ドラな感想はいりませんよ伯爵。

良い人なんだけど、やっぱり変人だ。

客人として君を迎えると言いながら、まるで面倒見のいいあしながおじさんのように私に商売をさせてみたり。

「今日、私の部下がシーサイドから戻ったのだよ」

カップをソーサーに戻すと、改めて伯爵は明るい緑の視線を上げる。

この屋敷に来てその翌日、伯爵は私を使用人だという人たちに引き合わせた。

メイドは二十人、執事が二人、従者が二十二二人、フットマンが十

一人、コックが十七人、庭師が三人、御者が五人。総勢七十七人。この数が少ないのか多いのかはわからなかったけれど、大広間に全員が集まるとちょっとした集会だ。

これからここに暮らすと伯爵が私を紹介すると、暖かい拍手が起った。

彼らは皆、伯爵の使用人で、部下で、家族だという。

だから、伯爵の客人は自分たちの客人だ。

そう言ってくれたのは、私の面倒を見てくれることになったガリアさんだった。

「ヨウコ、君の面倒を見ていたリーエという女性をここへ呼ぶことになった」

伯爵の話はこうだ。

伯爵は戦争で疲弊した西国の立て直しにかかることになるので、屋敷を離れがちになる。人手が足りないのでガリアさんにも仕事をしてもらわなくてはならない。だから、私の記憶がない時に私の面倒を見てくれていた彼女を呼ぶことにしたのだという。

「――それは、奴隷としてですか？」

異世界の人間は奴隷だと言った王様の言葉が本当ならば、私はこの屋敷に飼われているということになるのだろうか。

実のところ、この一週間考えていたことだった。

伯爵はじっと私を見、それから深い溜息をついて「長い話になると前置きした。」

「君はね、実に運が良かったのだよ」

説明と解答

異世界に来て、予想外なことばかりだ。

私は思わず息を止めた。

運がいい。

言われたことがない言葉ダントツ一位だ。

伯爵は私の様子を少しだけ見守って、話を続ける。

「基本的に、迷い人を虐げなくてはならない法はどこにもない。北国の定めた大則にもそんな条項はないしね。けれど、歴史的に排他的な文化を持つ西国では迷い人は長年奴隷として扱われてきた。それは、他の国々よりも環境の厳しい土地が多いことにも起因するだろうが、そんな歴史家の詭弁は君たちには関係のないことだね」

伯爵の君たち、とは迷い人のことだろう。

「東国では迷い人が宰相になるほどだからね。あの国では珍しいとは思われるだろうけれど、奴隷とまで虐げられるようなことはない。だから、君が東国に落ちたのは運が良かった」

話の腰を折るようだけれど、気になったので口にしてしまった。

「……私、東国に落ちたって言いましたか？」

すると、伯爵はうんと頷いて、

「いや。言っていないよ」

さも当然のように言ってひげ一つない顎をさする。

「どこから話そうか」

「始めからお願ひします。どうして、私のことを知っていたのか」

「そうだね」

私が真正面から伯爵を見返すと、当の本人はほとんど変わらない表情で淡々と報告してくれた。

「陛下が戦乙女たちを殲滅した戦場で、一人の女性を拾ったということ部下からの報告で知った。その女性は東国の出で立ちだったけれど、何故かヘイキリング王の外套を羽織っている。けれど、気を失った彼女がやっと目覚めたと思ったら今度は記憶がない。西国の言葉は話せず、東国の言葉を話す。それに、奴隷の女中と時折、意思疎通ができる」

それは、城で聞いた話のままだ。それにリーエという名の迷い人と話が出来ていたという事実。

私の聞かされた情報よりも一步詳しいようだ。

「私の部下を、陛下の軍に貸していたからね。その部下の報告だよ。だから、私は陛下に進言に行った」

だから、あるとき私に視線を寄越してきたのか。
どうしてこんなことになっているのかと。

「先代の王は、迷い人を奴隷とする問題にようやく着手し始めた賢

君だった。だから、息子である陛下もようやくその引き継いだ問題を考え始めたと思った。けれど、実際は違った」

伯爵は片眼鏡の奥の目を細める。

「一度、奴隷とされるとその子も孫も奴隷だ。この国ではこちらの人間と結婚してひ孫の世代にならないと奴隷から国民と認識されないし、国民として戸籍が持てたとしても差別は変わらない。だから一族は一族で村を作ってそこに住んでいる場合が多いが、外界と接せずに暮らすことはできない」

その弱味を、あの王様は使ったのだ。兵士として志願すれば、人権を与えると。

「ヨウコが記憶を取り戻すまで、陛下は君が迷い人とは気付いておられなかった。けれど、私は進言に行って良かったと思っている。陛下の価値観が変わるかもしれないからね」

伯爵はテーブルに手袋の指をこつと置いた。

「ヨウコ、今、世界の歪みが絶頂にきている。奴隷、東国の王の失踪、今回の戦争。……西国の歴史を紐解いていけば、奴隷の歴史などたかだか百年余りのことに過ぎないのだよ。二百年前には、迷い人も戦争に参加して血みどろの戦が続いていたのだからね。誰も彼らを差別する者などいなかったよ。だが平和になって、ふと気付いたんだろう。彼らが皆、まったく年を取らないということにね。誰が、というわけではない。恐らくそこから始まったのだと思う」

思いにふける伯爵の静かな声を聞きながら、私はあることに気がついた。

「……そういえば、伯爵の街で、奴隷らしい人なんて見かけませんでした」

マーケティングに私は伯爵のお膝元の街を本当に隅々まで歩いたので、ちょっと柄の悪い道だってガリアさんと歩いた。けれど、道端で転がっている人はおろか、誰かに虐げられているような人も見ることは無かった。奴隷と呼ばれる人たちが、兵士に投入されるほど居るというのに。

意識を歴史から今へと取り戻した伯爵は「ああ」と何とも気のない返事をした。

「私の領地は元々とんでもない荒地でね。今は牧畜と交易で潤っているが、初代が王から賜った時分にはどこから手をつけていいのかわからないほどだったらしい。当時は荒地でも農地に開墾することが普通だったから、岩と枯れ木だらけの荒地を古い木の根を掘り起こしたり石を掘り出したりするだけで一苦労だ。そんな初代領主に迷い人の部下の一人が牧畜を提案したのだ。それなら種を蒔いて草を増やして、家畜を何とか育てるだけでいいからね。それに家畜は土も肥やすのにいい。どのみち他に行くところなんかないから、当時は相当ひもじい思いもしたようだけれど、今度はこの土地の位置にその部下が気がついた。ここは西国から北国、南国へと向かう旅人の通り道になっていてね、交易をしたらどうかと。そんな具合でみるみるうちに明日のパンにも困る領地が嗜好品の茶まで庶民が楽しめるほどになったというわけだ」

というわけだと言われても。

説明にはなっているけれど、答えにはなっていない。

私が更に促すと、伯爵はやれやれと言うように肩を竦める。

「百年ほど前かな。迷い人と知れば、領地をあげて歓迎して手厚い保護をしていた我が領地に王のお達しが届いた。以降、迷い人を奴隷とするとね。けれど、私のひいおじい様はそれに激怒した。ひいじい様は戦争世代だったからね。戦友である人たちを迷い人だからといって差別するなんて思いもよらなかったことだった。当時はじい様に家督を譲っていたのだが、じい様に王へ讒言しに行けと烈火の如く命令してね。でも、もう国中が迷い人を奴隷としていたから、ここで王に何か言っても無駄だとじい様は考えた。だから、伯爵領内だけではあるけれど、じい様は迷い人の市民権を以前のままに保障することにした。そして私の父は秘密裏に各地に散らばる迷い人の村人を領地に招いていた。それを知った先代の王が我が領地を悪しき慣習から脱却する手本として目をつけたというわけだよ」

やっぱり説明にはなっているけれど答えになってない。

私は質問を変えることにした。

「じゃあ、伯爵は何をしていたんですか？」

「別に何も？ 私は父が死んだあと、先代の王から迷い人の市民権を保障するように言われていたし、父の遺言でもあったからそれを受け継いだだけだ。そのガリアのおばあ様も迷い人だったらしいよ」

西の王様は父親の意思は継がなかった。親子であってもコロザシなんてものをそのまま受け継いでくれるなんてことはない。何かしら変わってしまうものだと思うのに。

伯爵は祖先から受け継いだ気骨をそのままに、守ってきたのだ。ガリアさんは目が合った私にっこりと微笑んだ。

ねえ？ 照れ屋で素晴らしい方でしょう？

そんな声が聞こえてきそうだ。

自分のことをおざなりにしてしまう伯爵がおかしくて、私は思わず笑ってしまった。

なんて人だ。

こんなに尊敬できる人、見たことない。

「そういう土地柄だからね。もしかしたら、君を元の世界へ返せるかもしれない」

伯爵は笑う私に明日の天気でも占うように爆弾を落とした。

———なんですと！

偽りと可能性

「世界の大則には異世界に関する条項はない。これだけ、少ないとはいえ迷い人の存在が無視できない数に達しているというのにね。だから、私の父は、もしかしたら北国には迷い人が多く住んでいるのではないかと考えた。北国は他国との交流をほとんど持たないが、一切ないというわけではない。ギルドや他の魔法器具は彼らがもたらしたものだ。それに君は、彼らの道具を見て元の世界を思い起こされるようなことは無かったかね？」

そう伯爵に問われて私は自分の記憶を掘り起こした。

銀行みたいなギルド、お金の入る木札のおさいふケータイ、リアルタイムに会話のできるテレビ電話、魔力を電気みたいに使う魔女の家。

あれがもし、元の世界の技術と発想なら。

「我々の世界は戦争の歴史だ。文明が育つほど長い歴史を持たない。今は四つの国に別たれているが、以前は百を超える国が乱立して戦争を繰り返していたという。それを大則が四つに切り離し、今の国の形となった。だから、世界の法則を変えるかもしれない迷い人の存在を北国が知らないはずはないし、条項に無いのはおかしい。だから、父は自分の仮説を証明するために試しに何人か有志を募って人を送り出してみた。そうしたら、そのうちの五人が元の世界に帰るという手紙を寄越したきり、伯爵領に帰ってこなかった。残りは帰ってきたがね」

淡々と続ける伯爵を私はじっと見つめた。

伯爵はあまり私に嘘をつかない。伯爵が私に話していないことは

たくさんあると思うけど、それは聞かれてないから答えてないだけだ。

伯爵のお父さんが、というのはかなり信憑性のある話だ。だって、伯爵自身もそれを目の当たりにしているはずだからだ。

質問をしない私を横目に、伯爵は「けれどね」と続けた。

「帰ってきた人々の証言を元に、父は北国へ正式に書簡を出した。迷い人達を帰すことができるのなら、その詳細を知りたい。そしてそれが可能なら、希望者を無事に送り届けたい。その話し合いを持ちたいとね。だが、北国の返答は、否だった」

伯爵はすでに中身のないカップを眺めた。すかさずガリアさんがお茶を注ごうとしたけれど、それを断ってカップのふちをびったりとした白の手袋の指でなぞる。

「父はその回答に再度、書簡を出したが答えは同じ。――それが二十年ほど前の話だ」

「理由は」

私は思わず口に出た言葉が続けられなかった。けれど、伯爵はそれを拾いあげて、

「理由についての返答は無かった。北国へ行った者の話では、北国の関所で迷い人か否かを問われ、そのまま役所に連れていかれたらしい。そして、生活を保障するから元の世界に帰るか、この世界に残るか選べと一週間ほど面倒をみてくれたそうだ。ただし、このことを国外へ洩らすことはしてはならないと念書を書かされたらしい」

それだけのことをしておきながら、否と言った理由は分からない。

伯爵のお父さんもきつとそう思っただろう。念書にしたって、どこで噂が広がるのか分かったものじゃないはずだ。

けれど、現に社長はもう帰れないと断言した。

社長が嘘を言った可能性も否定はできないけれど、社長が私にそんな嘘をつく理由がない。だって、社長は私を嫌っていたし、帰せるものならとっとと帰していただろうからね。気に喰わない相手を氣遣う余裕は社長にはないよ。

「二十年も前のことだ。けれど、元の世界に帰れる可能性はある」

伯爵はカップから視線を上げて静かに私を見た。

「私は君に選択を委ねるよ」

不思議と、突き放されたようにも思えなかった。

伯爵の淡い緑の眼は凜いでいて動かない。けれど、この人に頼ってもいいんだと思わせる強い安心感があった。

君の味方だ。

力強く伯爵の眼が私に語りかけてくる。

騙されているのかもしれない。

偽りなのかもしれない。

でも、私は伯爵のことを断片的ながらに知っている。

この人は厳しくて優しい人だ。

私を蔑すまず、血の通った人として見てくれる。

ガリアさんを見た。

一番お世話になっているから思わず甘えてしまう癖がある。

彼女はいつものように私に微笑みかけて、いつのまにか冷めてい

たお茶を取り換えてくれた。

ガリアさんは伯爵が許さない限り、私に話しかけない。けれど、彼女も伯爵と同じ眼をしていた。

やばい。

泣きそう。

私は思わず下を向いて、唇を噛んだ。

この世界に来てから、こんなに私を信じてくれた人たちが居ただろうか。

俊藍でさえ、私を自分の片割れとしか見ていなくて、本当のところ私を人として見ていたか怪しい。彼にとって私は自分の味方で、女で、誰よりも魂が近いというだけだ。それは私の本質ではあるけれど、私ではない。私は、外面も内面も、体も心もひっくるめて私なのだから。

それが、会って間もない人たちが、私を信じてくれている。

嘘でもいい。騙すつもりでもいい。

私はこの事実がどうしようもなく嬉しかった。

辛うじて涙をこらえているのに、それが分かっているのか分かっていないのか、伯爵の声は変わらない。

「別に君を追い出そうというわけじゃないよ。個人的にはここに住んでいてもらっていいと思っている」

えっと顔を上げて、騙されたと思った。

伯爵が面白がるように笑っている。

「あいにくと私には子供がいなくてね。君を養子に迎えたい」

伯爵はゆったりと椅子に座り直すと、少しだけ目を伏せた。

「私の妻は病弱でね。十年ほど前に私を置いて逝ってしまった。彼女が私に領地以外何も残してくれなくてね。領内から孤児を召し上げて養子にでもしようかと思っていたんだが、そんなところに君が来た」

私はといえば、王様と弟たちに捨てられそうになっている。

純粹に助けてくれるつもりじゃなかったとはいえ、私は寝耳に水だ。

伯爵が、パパ……？

私は伯爵の入れ墨の顔を見つめた。

鷲鼻のもののすごい精悍で超素敵な紳士パパだ。

きつと私、すごい自慢するよ。こんなパパ。

「部下たちにも相談してみたが、皆、君を気に入っていてね。反対は無かったよ。年の近い親子になるが、私には君のような娘がいいと思ってね。ゆくゆくは伯爵の位を譲るからそれなりの教育をしていくつもりだったが……」

珍しく伯爵が言葉を切った。

伯爵はどこまでも賢明だ。

だって、私は嗚咽が酷くて話を聞ける状態じゃなかったから。

教育と家族

街へ出て、商売をさせるのは伯爵教育の最初の一步だという。

自分が将来治めることになる領地をくまなく見つめて、どんな領主になるのか考えさせる練習なんだそうだ。

知らないこととはいえ、私は女伯爵への第一歩を踏み出していたらしい。

——知らないって怖い。

ようやく泣きやんだときには、伯爵はすでに私の部屋を去っていた。何かあればいつでも執務室に來なさいと言いつ残して。

伯爵がパパなら私、家出なんかしない自信があるよ！

鼻水をハンカチで拭う私に、ガリアさんが温かいお茶を出してくれた。

ミルクをたっぷり入れたミルクティーは優しい香りがする。

そうして、彼女が私の向いに座ってもいいかと問うので、当然頷いた。私、そんなに偉い人じゃないよ！　というか美人のお願いを断るのは悪だ。

ガリアさんは私とは比べものにならないほど優雅に腰掛けると、私にふんわりと微笑みかけてくれた。

幸せ。もうこの子になろうかな。ごめんね、お父さんお母さん！

「ヨウコさま」

改めてガリアさんを見つめると、彼女は真摯な瞳で私を映した。

「私の祖母は、異世界の人でした。ですから、八十を過ぎても今の私と変わらない姿だったのです」

知識として与えられていたけれど、実際に話を聞くと結構な衝撃だ。

迷い人は年を取らない。

確かに、それが畏怖の対象になるのは肯けるところもある。

「祖母は八十六歳で老衰で亡くなりました。異世界の人はいくら年を取らないとはいえ、大けがや病気で亡くなることもあります。それに、体の代謝機能が年齢と共に衰えていきます。だから、外見が変わらないということ以外、この世界の人間と変わらないのです」

私は、少し前に恐ろしく感じた自分の髪をつまんでみた。

髪は伸びている。

「……どうして、迷い人は外見の年齢が変わらないんでしょうか」

最大の疑問だ。

ガリアさんは上品に首を横に振った。

「分かりません。北国へ行くことができれば、恐らく」

また北国。

いつぞやは観光がてらに行ってみたいと思ったけれど、これは必要に駆られる事態になってきた。

うなる私を見ながら、ガリアさんは少しだけ笑った。

「ヨウコさまらしいですわ」

彼女の祖母は、疑問に思わなかったのだろうか。

年を取るはずなのに、若いままの自分を恐ろしく思わなかったのだろうか。

「――その、ガリアさんのおばあさまは、どんな方でしたか？」

ガリアさんは優しい瞳のまま、笑った。

「迷人としてきつと悩むことも嫌なことも多かったと思いますわ。でも優しい祖母でした。祖母は最期まで幸せそうでしたわ」

きつと、いい家族に恵まれたんだ。

ガリアさんを見ていれば、その光景が見えるようだった。

「ヨウコさま」

問いかけられるように呼ばれ、ガリアさんを見つめる。

嫌なこと。

それは彼女にも多かったのではないだろうか。

多種多様な色彩を持つこの世界でも、彼女のような瞳は見たことがない。

彼女に瞳は、黄金を溶かしこんだような美しい金色の瞳だ。

「わたくしは、ヨウコさまにお会いできて、そしてお仕えすることができて本当に幸せです。ヨウコさまのお陰で、わたくしは本当の意味で祖母のことを想えるようになったような気がするのです」

ありがとうございます、と彼女は微笑んだ。

「もちろん、このままヨウコさまと過ごすことができれば、至上の喜びですわ」

深い金色の瞳に私が映りこんだ。

「ですが、ヨウコさまの選ばれたことに、わたくしは賛成いたしません。ヨウコさまの幸せが、わたくしの一番の幸せなのですよ」

彼女の瞳の私が、幸せそうに微笑んだ。

幸せというのなら、きっと私は今このときが幸せだ。

私を信じてくれる人が、今この時に微笑んでくれているのだ。

どんなことをしても、生きて欲しかった。

初めて私を家族と認めてくれた人たちに。

炎に任せて私を置いていって欲しくなかった。

そばに居てと言えなかった。

生きると誓いはしたけれど、私は迷い人として孤独だと思っていたから。

「ありがとう。ガリアさん」

私を認めてくれてありがとう。

私を家族と認めてくれてありがとう。

——私は、この世界に来て初めて、幸せで泣いた。

野原と青空

思う存分泣いてから、私は伯爵の執務室まで話をうかがいに行つた。

伯爵は決済を処理しながら、実に簡潔に言つた。

リーエさんが伯爵領に来るまであと三日ある。

それまでに、この先の身の振り方を決めるといい。

ということだった。

なお、この期間を過ぎても、私の選択は自由だと言われた。

伯爵って神様じゃなからうな。変人だけど。

私は伯爵の執務室から出た足で、街へ行くことにした。

一応、西国のスタンダードスタイルであるスーツドレスに着替えていく。（屋敷の中じゃおばちゃんチャリムなんだよ）グレーのスーツと合わせた帽子を被れば、ただの背の高い迷い人になる。

ガリアさんがいつもならお伴についてきてくれるけど、今日は内緒で裏口から出ようとした。

今日だけは、ちょっと一人になりたいんだよ。

「あれ、お嬢さんお出かけですか？」

脱出、失敗。

心地よい庭を通りぬけて裏門から出ていこうとしたんだけど、庭に居座つてた働き者がいたらしい。

半ば諦めながら振り返ると、背の高い赤紫頭が出てきた。伯爵の使用人だからか仕立てのいいシャツにベストとズボン姿なんだけど、麦わら帽子だから笑える。彼は私の前に来ると帽子を脱いで、担い

でいた剪定用のはさみとはしごを降ろした。

「ガリアさんはどうしたんですか？　いくら伯爵の領地だからといっておひとりじゃ危ないですよ」

目の前に立っても圧迫感のない長身の彼は、年齢不詳の笑顔を浮かべる。

「……今日は一人で行きたいんですよ。ダンザイトさん……」

髪と同じ赤紫の目で私を見下ろして、

「そんなつれないことをおっしゃっては、あなたに恋する者たちが泣きますよ」

どこの国にもこういうのはいるもんだ。ぱっと見は精悍で爽やかな美形なんだけどなあ。

彼も伯爵の部下で、庭師の一人だ。

屋敷に帰ろうとはしない私を見て、ダンザイトさんは肩を竦めた。

「仕方がありませんね」

彼は少しだけ息を吐いてから、爽やかな笑顔を浮かべる。

「愛らしいあなたの願いを叶えるのは、男の本望というものですからね」

よく回る口ってどうやって黙らせればいいんでしょうね。こっぴどかしいよ。

とりあえず今日の私にはダンザイトさんが着いてくることになりました。

なんだって、こう誰も彼も大事にしてくれるんだろ。今までが今までなだけに、この先が怖い。

ダンザイトさんが上着を取ってきてから、屋敷を出た。

西国には四季はない。

明確にあるのは夏と冬だけだ。なんでかっていうと、春と秋にあたる期間が東国と比べて非常に短いせいだ。だから、春に当たる期間は夏の初め、秋に当たる期間は冬の初めになる。

今は夏の初めから、本格的な夏に移るちょうど境目。

伯爵の屋敷は森を挟んだ（敷地なんだよ、森が）街の外れにある。この屋敷に來た翌日に、ガリアさんから屋敷から見える野っぱらが領地の境界線だと教えてもらったから、伯爵の屋敷はまるで街を守るように建っている。

普通、伯爵のお屋敷とかって山の上とかに建ってるもんじゃないの？

質問したら、山はないと言われました。なるほど。

屋敷の周りの森は庭みたいで明るい森じゃないけれど、大自然をトレッキングしてきた私からするとちょうどいい散歩道にしか見えない。売り物にしている葉草は、この森から調達しています。

木漏れ日の小道を十分ほど歩いていけば、レンガ色の建物が見えてくる。街だ。

街のあちこちにある花壇では東国では見られない明るい色の花々が盛りだ。

レンガ色の建物は五階建てまである石の建築がほとんどで、まるでおとぎの国にでも來たみたいだ。……まあ、異世界なんだけど。

私はいつものようにマーケティングをするでもなく、洒落た雑貨屋や商店街の大盛りにされた野菜を冷やかして、オープンカフェで屋台売りされてたソフトクリームに感動して（クリームを入れた缶を丸ごと氷で冷やしてるんだよ）街を通り抜けた。

街を抜けると、そこは端の見えないほど広大な牧草地になる。

草っぱらは丘になっていて、羊とヤギを掛け合わせたみたいな家畜がのんびりと飽きることなく草を食んでいる。

私は草の匂いを思いっきり嗅いで、大きく伸びをした。
一人ならきつと叫んでたな。

「ああ、寝転がりたい」

ガリアさんと一緒に来たことあるけど、彼女と一緒に寝転ぶわけにもいかないからね。……はっ！ 今気付いたけど、お姉さんの膝枕とかアリじゃないかな。今度お願いしてみよう。断られても本望だ。

「あの木の根元でしたら良いですよ」

あっさり許可を出したのは、本日のお供のダンザイト氏。

この二時間ばかり散々連れまわされたというのに、不満一つ外に出さないとは。

「喉も乾いておられるでしょうから」

差し出されたのは、ビン入りのレモンジュース。（私が勝手にそう呼んでるだけで正式にはジャッロ。でもレモンと似た味がするのです）大人も子供も好きなこのジュースを紙袋からさっと取り出してくれる。

しかし君、ほんと幾つなんだ。私が二十四歳だと自己紹介してから、一度も年齢を教えてくれたことがないダンザイトさん。これは彼の氣遣いなのか、それとも自己保身なのか。

疑惑と期待の入り混じったまま、私はダンザイトさんに誘われるまま草原に点々と立ってる大きな木の根元で座り込んだ。そこでダンザイトさんがそつのなさを發揮して自分の上着を敷物にしようとするから私は謹んで自分の持ってた大きめのハンカチを進呈した。ふはは。二枚もあるんだぞ！

ありがたく苦笑を頂戴しました。だって、草のシミなんか上着についたら弁償できないよ。ハンカチは自分で買ったやつだからいいんだよ。

大きな木の下はやっぱり涼しい。初夏とはいえ何の邪魔もない日差しを受けると少し暑い。あのアイスクリームは今度ガリアさんと挑戦しよう。ダンザイトさんは甘いものの好きじゃないしね。飴をあげたらニコニコと「お嬢さんの可愛らしい唇に食べられてこそ真価を發揮する食べ物ですよ」とか何とか恥ずかしいことを言われて突っ返されたことがある。甘いもの嫌いなら普通に言ってくれ。誰も怒らないから。

さわさわと通り抜けていく風が気持ち良くて帽子を脱ぐと、汗ばんでいた頬が冷たくなった。

久しぶりに流した自分の涙は熱かった。

ぶっちゃけ、私はこのまま過ごしている方が断然幸せだ。

何も無理してまで北国の謎と迷い人の疑問を解消しに行く必要があるかな。

でも、と理性とは反対の方から声がする。

このまま伯爵の跡取り娘として、私は漫然と暮らしていけるだろ

うか。

今までの生活がアクティブ過ぎたきらいもあるから、今の暮らしが平和すぎるということもあるんだろう。いや、いつからそんなトラブル大歓迎になったんだよ。トラブルじゃない！ 向こうからやってくるしね。

正直なところ、まだ心の中の整理なんかついてないんだろう。

この世界に来てから、こんな草原をぼんやり眺めていられたことなんかない。

まあ、元の世界でもあくせく働いてばかりだったから、子供時代に父に山登りに連れていかれた時以来だ。

あの時は、完全なインドア派の私が父のありがたみを理解するべくもなく、いやいや連れていかれた登山がどうしようもなく嫌だった。でも、頂上にたどり着いた瞬間はそんなことを忘れてしまったのを覚えている。

体が休憩したがっていたこともあるんだろうけど、見渡す限りの空と山の風景を、私は今でも思い出す。

お父さん、お母さん。

私が居なくなっって、心配してるかな。

それとも、もう死んだと思っているのかな。

別に、両親が特別優しかったわけでもない。むしろ私より要領のいい弟を可愛がっていたようにも思う。いらぬ子なんて言われたことはない。それなりに可愛がられていたと思う。

親になったことはないから、私には両親の気持ちは分からないんだけど。

草原の向こうの雲を眺めて、溜息をついた。

叶うなら、無事だと伝えたい。
そして、もしも、帰れるとしたら。

けれど、伯爵達を放り出して行ってしまうてもいいのだろうか。
俊藍のこともある。

ふと、タンザイトさんをじっと見つめてみる。

彼は私の視線にすぐに気がついて、やんわりと微笑んだ。

「タンザイトさん」

「なんででしょう。お嬢さん」

二十四歳だと名乗りをあげたのに、彼はお嬢さん扱いをやめない。
むしろ熱が入っているようにも思うのだが。もしやお嬢さん萌か？

「もしも私が、今ここから私を連れて逃げてって言ったら、逃げて
くれますか？」

お嬢様と使用人が手に手を取って逃避行。どこかの三文ラブロマ
ンスみたいだ。

しかし、この赤カブ色頭の庭師はにっこりと笑った。

「どこへ逃げましょうか？ お嬢さん」

ホストだってここまで気の利いたこと、きっと言わないよ！

たっぷりと甘やかしてくれるお兄さんと、私は青空に響き渡るほ
ど大声で笑った。

香草と明かり

草をつけて帰った私と赤カブ庭師にガリアさんは容赦なく雷を落としました。

大の大人二人が美人に叱られて項垂れてる姿は、失笑ものだった。

そして次の日はというと、

「お似合いですわ。ヨウコさま」

「——もう勘弁してください。ごめんなさい」

眼福なメイドさんたちに囲まれて、着せ替え人形になっています。あの国民的なお人形ってこんなに大変業務を日々こなしていたのか。供養してて良かった。

ただいま私は、自分では絶対に選ばないフリルが大胆に縦に走る真っ白なドレス姿です。なんというか、マーメイドドレスというやつだ。なんだか昔の女優さんのような。

やっぱり白いドレスに呪われているようです。売っぱらった先でいい人にもらわれなかったのか？ 謝るからもう許してほしい。

「こちらのドレスもお似合いなのでは？」

タンポポ色のドレスを出してきたのは、オレンジ色のストレートの美女メイドさん。

「ええ、ええ。こちらもきつとこちらもお似合いですわ」

スマイレ色のドレスを持ってきたのは上等なワインのごとき深い真

っ赤な髪の美人メイドさん。

「どちらもよくお似合いだと思いますわ。さあ、まずはどちらになさいます?」

にっこり微笑むガリアさんに戦慄する日が来るとは思いませんでした!

もう勘弁! ご勘弁を!

朝っぱらからずっと立ったり座ったりして着せ替え人形させられて、この上もなく反省した私は、タンポポドレスとスミレドレスを着たあと半泣きで謝り倒して着せ替えごっこを終了してもらった。

鼻をすすっている私を涼しい窓際に座らせて、ガリアさんは優しくお茶を入れて下さいました。すみません。ほんとすみません。怒らせてすみません。

いつものおばちゃんチャリムに着替えさせてもらって、私は泣きべそかきながらお茶を飲んだ。

「もったいないですわ。ヨウコさまに似合う衣装はたくさんございますのに」

と、ワインヘアーのウェルテアさん。左目下の泣きぼくろが非常に色っぽい。

「そうですわ。もっと着飾ってさしあげたいわ」

のんびり微笑んだのはオレンジ美女のベスさん。

美女メイド三人に囲まれて非常に嬉しいけど、着せ替え人形は楽しくない。私が。

私に着せるくらいならば、そのままでも十分美しいけど彼女たちが美しく着飾っていただきたい。

しかし今、下手なことを言おうものなら私の言葉尻を待ち構えている美女たちに再び着せ替え人形にされかねなかったので、私は無理矢理用事をでっちあげることにした。

「今日はこれから菓草の調査をしたいので……」

菓草の調査なんぞいつ終わるかもしれないし、今日しなくてもいい用事だ。伯爵には、約束の期日までは仕事も休むように言われている。

だが、美人で優秀な彼女たちにはっこり微笑んで了承してくれた。またの機会に、と私に約束させて。彼女たちは優秀だ。

美女たちのお茶会のあと、私は自分の言葉を実行するべく調査室へと向かうことにした。また捕まったら今日の私は使い物にならなくなる。

その道すがら、渡り廊下で見知った顔に（この屋敷では伯爵と部下の人たちとしか顔を合わせるなどないが）出くわしたので足を止めた。

「こんにちは。ガルーダさん」

私に道を譲ってくれていたのは、お仕着せを窮屈そうに着こなしたスキンヘッドの大男だ。岩のくぼみをそのまま顔にしたような顔面から頭にかけて、銃創みたいな傷が穿たれていて、子供がみたら間違いなく泣く。しかし、彼はその野性味溢れる外見とは異なり、この屋敷の執事を任されている。正直、あの白手袋に包まれた果物程度なら軽く潰せそうないかつい手で今まで飲んだこともないほど美味しい紅茶を出されたときには感動したものだ。

彼は私に深くお辞儀をしたあと、ほとんどそのままの姿勢で私と目線を合わせた。彼もガリアさん達と同じでこちらから声をかけない限りは話しかけてはこない。けれどそれが嫌味にも冷たい感じに

もならないから不思議なものだ。

「今日のおやつ、美味しかったです。あのタルトの上に乗った砂糖漬けが特に」

「ありがとうございます」

専門職がいるが、私のおやつのほとんどはこのおよそお菓子とは結びつかないスキンヘッドが作ってくれている。本職を凌ぐほど研究熱心で、気にしないようで微妙に味にうるさい伯爵もお茶とお菓子は彼に任せている。

「明日はどんなお菓子なんですか？」

「暑くなつてまいりましたので、冷たいものをと考えております」

低い重低音が丁寧に答えてくれる。明日も楽しみだ。

「差し出がましいようですが、どちらへ？」

珍しくガルーダさんが質問してくるので、私は調合室へ行くと素直に答えた。別に餌付けされたわけじゃないよ。

優しい（強面なのは遺伝子的なものなので）顔でガルーダさんは肯くと、再び丁寧にお辞儀をして道を譲ってくれた。

それにお礼を言ってから、私は屋敷の端っこに作ってもらった調合室へと向かった。調合室と言っても毒薬を作ったりするわけじゃないから、機密性とかそういうものを考えてない。ただの薬草保管室だ。薬草というやつは湿度に弱いので、比較的風通りが良くて涼しい部屋を用意してくれたのだ。始めは自分の部屋に思いつき薬草をぶら下げていたのだが、さすがにそれはやめてくれと言われて

しまったためでもある。私の部屋も風通りの良い部屋だったので。

この人たちは良い人たちばかりだ。

それは私が、伯爵が直々に招いた客人だということもあるし、伯爵が私を後継者にと考えていたことにも理由はあるだろうが、この御屋敷に招かれてかというものの、私は嫌な思いなんかした覚えがない。

だって、いくら客人だからって結局は人と人のお付き合いで、「馬が合わないな」とか「何だよこいつ」とか感想なんか人それぞれだ。私も一応はいっぱしの社会人だったわけで（今もそのつもりだが）自分に何が出来て何が出来ないかはよく分かっているつもりだ。だから、至らないはずの私の色んなものをひっくるめて良くしてくれるここの御屋敷の人たちに伯爵を含めて好感を持つのは大して時間もかからなかった。

ここに居たい。

居てもいい、むしろ居てくれた方が良いとまで言ってくれている。私としても、もっとここの人たちを理解したいし、私のことを分かっただけでいいと思う。

家族になりたい。

立場をわきまえていても、ここの使用人と伯爵達はまるで家族のように仲がいい。その輪の中に、入れてもらえれば、私はきっと幸せだろう。

そんなことを考えながら乾かしておいた葉草をぎりりと乳鉢でぎりりとやっていたら、気がついたら窓の外が赤くなっていた。

ほうり出していた道具を片付けて部屋を出ると、優しい青年が長い柄のついたランプで廊下に備えてある照明に明かりを灯している。

「こちらにいらしたんですか。ヨウコさま」

にこりと爽やかに笑ったのは薄紫髪のサルミナ青年だ。彼は使用人の中でも赤カブ頭の庭師に次いで私に気安い。彼は伯爵の従僕なので、本来ならこんな明かり入れの仕事は管轄外のはずだが。

「ちょうど私の手が空いていたので引き受けたのですよ」

尋ねてみたらまたも爽やかな返答が返ってきた。そういえば、私も今の時間は夕食の準備でみんな慌ただしいことを思い出した。一度手伝いを申し出たもののやんわりと断られてしまったので、家事の感覚が鈍っている。

「サルミナ！」

夜を誘う廊下の薄明かりの中を駆けてきたのは陽気を形にしたような青年だった。彼は駆けて来るなり、

「悪かったなあ、手伝ってもらって。ここはもういいから。旦那様がお呼びだぞ」

早口で言って、長い柄のランプをサルミナ青年から受け取る。そうしたところで私に気付いて「あっ」と苦笑した。

「失礼いたしました。ヨウコさま」

破顔する、という表現が恐ろしく似合うこの青年はホイエンといって、何代か前に迷い人のご先祖がいるとかで、黒髪に碧眼だ。顔立ちもこちらの人よりどこことなく馴染み深い。

「ヨウコさま、御迎えにあがりました」

もう一人に呼ばれて振り返ると、メイド服に収まった小柄な少女がこちらにやってきていた。短い栗色の髪がふわふわと揺れたかと思うと、私の周りに居る青年たちをてきぱきと叱りつけた。

「何をしているのよ。サルミナは旦那様がお呼びよ。ホイエンは早く明かりを入れて」

「お前こそヨウコさまをお待たせしていいのか？ タルキア」

ホイエンに言われて、少女、タルキアは私に改めて向きなおった。

「申し訳ございません。お夕食の準備が整いましたので、お迎えにあがりました」

年端もいかないのにしっかりとプロの彼女が申し訳なさそうにいうので、私は少し笑って頷いた。

まだ若いからか、彼ら三人は私の前でもたまたまに無駄口を叩いてくれるので楽しいのだ。

「今日の晩御飯は何か知ってる？」

「はい。本日は良い鶏肉を仕入れたとかで、香草を使ったメインだと聞いております」

「ああ、昼間仕留めてきたって料理長が言ってたな」

タルキアの返答にホイエンが答えたので、彼は少女に睨まれた。

「そういえば料理長が、ヨウコさまがくださる香草はとても良いと言っておりましたよ」

如才なく会話を続けるのはサルミナ青年。

いつの間にか三人に囲まれて話していると、退屈せずにダイニングについた。

ありがとうと笑っていうと、それぞれ私に挨拶して自分の仕事へと戻っていく。

きっと、一人の私を放っておけなかったのだろう。

ダイニングの前で控えて待っていてくれたガルーダが扉を開けてくれながら、

「本日は旦那さまもご一緒なさいます」

それに礼を言いながらダイニングに誘われると、すでに伯爵が食前酒をたしなんでいた。

本当ならこうして食べる前に服装を整えなくてはならないらしいが、伯爵はそのままでもいいと言ってくれている。マナーはちゃんと覚えておいて損はないと、この屋敷へ来た頃にガリアさんから叩きこまれたが、この屋敷の中でなら好きに過ごしていいと私に任せてくれていた。伯爵も仕事着のままやってくるので、私も気兼ねしなくていいこともある。

長いテーブルの奥に座っている伯爵から、角をまたいだ右隣が私の定位置だ。ガルーダさんに椅子を引いてもらって席につくと、伯爵がグラスをこちらに向けた。

「君も飲むかね？」

伯爵がグラスを傾けているのは、淡い黄緑の、白ワインにも似たお酒だ。

テーブルの隣に据えられたボールの水で手を洗いながら、もちろん欲しいと答えると、さっとガリアさんがグラスを添えてくれてほ

どなく私に伯爵と同じお酒が注がれる。

ふわりと果物の蜜のような香りが広がるが、口をつけてみると爽やかで甘味は少ない。酸味や渋味とまではいかないが、大人の味だ。これはこれで美味しい。

「君は何でもおいしそうに飲むね」

伯爵は目を細めて言うが、伯爵の選ぶ酒はどれもおいしいのだから仕方ない。古今東西に及ぶ色々なお酒を味わわせてくれる。

やがて料理が前菜から順に運ばれてくると、話も弾んだ。

伯爵は食事中の会話を咎めたりしないので、忙しい伯爵とたまにとる夕食は楽しい。

今日は何をしていたのか。

隣の領地のお菓子の話。

街で流行っている奇抜な靴の話。

最後のデザートまで運ばれてくると、料理長がダイニングまでやってきた。

「今日もありがとう。ご馳走さま」

伯爵は毎度のようにこうして言う。

料理長は頭の上できっちりまとめた茶色の頭を軽く下げて、今日のメインの鶏はどうだったかと尋ねたりする。

「ヨウコさま。そろそろ肉料理に使う香草が少なくなってきましたので、追加をいただけませんか」

「はい。後で持って行きますね。マッジョリさん」

私の答えにニヤリと笑ったのが料理長のマッジョリさんだ。明る

い茶髪の、一昔前のヤンキーみたいな姐御だが、相当な美人さんだ。

「そうそう」

マッジョリさんとの会話の終わりを見るや、伯爵がダイニングを去り際珍しく声をかけてきた。いつもならここでお休みなさいの挨拶で終わる。

「明日は私と出かけるから、そのつもりでいなさい」

すでに決定事項らしい。

特に拒否する理由もないので頷く私を見てから、いつものようにおやすみと言い置いて伯爵はダイニングを後にした。

それから、調査室に戻って幾つかの香草をマッジョリさんに届けると、見計らったように厨房の前にガリアさんが待っていた。

「明日は少し遠出をすると仰せでしたよ」

「そうなんですか？」

私の部屋へ帰る道すがら、ガリアさんの報告に私は少し心が躍った。

伯爵と遠出は初めてだ。というか、城からこのお屋敷へ（首都の城からどれほど離れているか知らないが）来た以外にない。

「ええ。馬を連れていくということでしたから、久しぶりに遠駆けをなさるおつもりかもしれません」

馬とな。確かにお屋敷には厩舎があるので馬が居るんだろうが、元の世界でもメジャーだったはずの馬を目の当たりにするのは初め

てだ。こちらへ来て初めての乗り物は騎竜だったからね。こちらの馬も同じような姿形らしい。

ガリアさんによると、近頃、書類仕事ばかりで体がなまったりと仰せだったとか。私としては、あの伯爵が体を精力的に動かしているのを見たことがないからちよつと意外だった。

ガリアさんに見送られて部屋に入ると、すでに明かりが入れてあった。

着替えなんかは自分でするから、ガリアさんとは部屋の前でお別れする。今日のお着替えは本当にたまにだよ。ええ。

こうやって過ごすことが、当たり前になりつつあった。

こちらの世界へ来る前は、夜にテレビ見ながら晩酌して寝るのが普通だった。

こちらに来てからは気絶したり逃げ回ったり野宿したりするのが普通だった。

裏切られて、置いていかれて、優しくされて。

寝巻きに着替えようとして、ばさりと床に何かが落ちた。

黒マント。

拾いあげてぱっぱと払う。

結構扱いはひどいはずなのに、細やかな刺繍のほつれも裾の破れも見当たらない。大事にしているはずの私のチャリムの方がどこことなく草臥れてきたからこのマントは相当、頑丈にできているらしい。なんだかんだとこのマントが一番長い付き合いになった。

私は今まで、他人事に巻き込まれてばかりで流されて伯爵に拾われた。

伯爵は私を人として扱ってくれ、私はこちらの世界で初めてひとりの人になった気がする。

地に足をつけた、血の通った人間に。

これからどうするのか。

私は本当の意味で、考えなくちゃならない。

馬と草原

翌朝、いつもより少し早い時間にガリアさんが部屋へとやってきた。

今日はこちらを、と差し出されたのはつばの広い帽子とシャツに上着の動きやすそうなパンツスタイルだった。いかにも丈夫そうなブーツも一緒だったから、昨日ガリアさんが言ったとおり初の乗馬になるのだろう。

フレッシュジュースとパンとスクランブルエッグの並んだボリュームのある朝食には伯爵も一緒だった。それからのんびりと出かけることになった。

御者台にはガリアさんと赤カブ頭のタンザイトさんが座って、反動の少ない箱馬車の中では伯爵と二人きりだった。四頭立てなので馬車の速度は思ったよりも早い。屋敷の前の森をあっという間に抜けると街を軽快に駆け抜けていく。

ちょうど車に乗った気分を外を眺めていると、伯爵が「そういえば」と声を掛けてきた。伯爵は私と同じような乗馬スタイルにフックコートを羽織っている。傍らの杖の頭をしわ一つない、今日は皮の手袋で撫でた。

「今日の行き先は言っていたかな」

「いいえ」

私が答えると、伯爵は頷くように片眼鏡の顔を私に向けた。

「今日は久し振りに馬を走らせたくてね。領地の端にあたる草原まで行こうと思う」

ほとんど一日がかりだね、と付け加えて昼食は料理長の特製だから期待していいとも伯爵は付け足した。

「馬に乗ったことは？」

「ありません」

「なら、今日が初体験だね」

無表情なはずの伯爵が少し嬉しそうなので、私も少しだけ笑った。動物をそれほど怖がるタチではないけど、馬って思った以上に大きくて驚いた。

正直あれに一人で乗れる気はしない。

そんな会話を皮切りにして、伯爵と他愛もない話していたら、私の派遣社員としての悲惨な日常を話していたところで目的地についたのか馬車が止まって、ガリアさんがドアを開いてくれた。

すでに用意してくれていた足場を降りて、目の前の光景に叫びたくなった。

草原だ。

障害物は低い木ぐらいで、あとは果てしなく草原が続いている。

あとはどこまでも続くような青空。

ここで叫ぶなら何だろう。

やっほー？　　たりほー？　　たまや？

どれも違うようなあっているような気がしたが、結局私は気の利いた叫び声も出せず、ただ目の前のパノラマを見つめた。

今まで大自然で暮らすことが多かったが、ここまで開けた場所へ出るのは初めてだ。

山も川もない、ただ草原が広がる大地。

「気に入ったかね」

いつのまにか馬を引いてやってきた伯爵が馬の首を撫でながら言
った。

「ここは我が祖先が初めてやってきた土地でね。そのころには草の
一つもなかったそうだよ」

ここが。

伯爵の祖先が、迷い人の仲間の提案で草の種をまいた土地。
伯爵家の、最初の土地だ。

「私は幼い頃からここが好きでね。父にせがんでよく連れてきても
らった」

この無表情な紳士にも子供の頃があったのかと思うとおかしくな
って、思わず笑ってしまった。だがそれも、

「馬で駆けるととても気持ちがいいよ」

ぽいっと馬の手綱を渡されるまでだった。

恐る恐る馬の首に触らせてもらい、ぎゃーぎゃー叫びながらやっ
と馬の背に一人で乗れるようになった頃には、すでにお腹がぐーぐ
ーと鳴りだしていた。

幸い、周りには良い教師ばかりだったので落馬することはなかつ
たが、慣れないことに足腰がすでに悲鳴を上げている。

馬車を使ってパラソルを立てて、その日陰にみんなで座るように
なってから、私は崩れおちるように倒れた。

「大丈夫ですか？」

同じように馬に乗っていたはずのガリアさんは乗馬スタイルでそのプロポーションを晒しながら、私と違って涼しい美しい顔だ。

私はガリアさんに差し込まれたレモン水ジャッロを受け取って一息に飲んだ。

「……才能ないので大丈夫じゃないです」

私にあてがわれたのは大人しい馬なのか、私の叫び声にも迷惑そうにだが付き合ってくれる馬さまなので暴れはしないが、ろくに背にも乗れないやつが相手ではせつかくの良馬も宝の持ち腐れだ。

「おひとりで乗れるようになったじゃありませんか。午後からは軽く走らせてみるとよろしいですよ」

軽く言ってくれるが、まず馬の背の高さに怯えるんじゃない話にならないと思うんです。ガリアさん。

「まあ、私がついているから大丈夫だよ」

そう他人事のように言った伯爵は料理長特製のサンドイッチを頬張っていた。がぶりとかぶっているのに上品に見えるってどんな紳士特典なんだ。私がかぶるとリスが必死に餌を頬張っているようにしか見えない。料理長のサンドイッチは、手の平大の大きさのパンに肉や野菜をふんだんに挟んでいるものの、一口で食べられる高さに作ってあって食べやすいし美味しかった。

「私が支えていますから、安心して乗って下さい」

昼食のあとはガリアさんの宣言通り、恐怖の乗馬でした。私に拒否権はない。

タンザイトさんが手綱持ってくれるからって、かなり怖い。

うわわ、あわわと言いながら乗ると、視界は空に近づいて一段と広い。

「そのまま馬の足並みに合わせて乗って」

無理言うな。

「私が後ろに乗ってあなたの腰を支えてお教えしましょうか？」

いらないよ。口ばっか軽い赤カブお兄さんめ。

ホストの接待乗馬に耐えつつ、しばらくしたら私は一人で馬をゆつくりとだが歩かせることが出来るようになっていた。

それを見ていた伯爵が、ちょっと走ろうと提案してきたので渋々頷いた。怖いんだよまだ。伯爵と私は、少し離れたところを行くタンザイトさんとガリアさんの馬を背にかばかぼと草原を歩きだすことにした。走れないんです。

しばらくすると、馬ののんびりとした蹄の音を聞きながら、草原を見つめる余裕も出てきたので、私はぼんやりと草の海原を見つめた。

広い。

改めて、世界の広さを実感したような心地だった。

「知っているかね」

私の気持ちを覗いたように、伯爵は口火を切った。

「この草原はどこまでも続いているように見えるが、あと十里ほど行くと砂漠になるのだよ」

砂漠、と聞いて私はすぐその光景を思い浮かべることが出来なかった。

瑞々しい草地の中にいるから、それは余計に。

「いつか話したかね。西国という国は他のどの国よりも厳しい土地柄なのだよ」

伯爵はその目線の先に西国の大地すべてを見るような遠い目で私と同じように草原を見渡した。

「私の領地よりさらに西には広大な砂漠があり、逆に東の果てには雪も降らない極寒の荒地だ。作物の育つ土地がもとと少ないから、今でこそ王に従っているが領地の一つ一つが以前は国で、戦の絶えない土地だった」

その戦の中で、伯爵のご先祖さまは今の王様の一族に従った。

そしてこの土地を治めることになった。

いつか聞いた、この土地の歴史を思い出して、私は余計に草原が広く見えた。

「君がもし、北国へ行くというのなら、この先の砂漠を越えなければならぬ」

そう言われて私は伯爵を振り返る。

伯爵はいつもと変わらない無表情だったけれど、いつもより優しいような気がした。

「怖いかね」

尋ねるとも、確認ともとれない伯爵の言葉に私は思わず馬を止めた。

同じように伯爵は私の隣で馬を止めた。

怖い、のだろうか。

今度の旅は無理矢理じゃない。

必要に迫られてもいない。

ただ、私の目的のための旅だ。

私は、このままここに居れば幸せになれると思う。

今だって、幸せだ。

この温かい場所を手放すことなどないと思う。

私が怖いのは、怪我をすることよりも行き倒れることよりも、嘘をつかれることだ。

それは何度経験しても、心が血を流す。

伯爵は私を裏切らない。

それは、分かっているつもりだ。

怖いのは、私が伯爵を裏切ることだ。

自分がもしも嘘をつけば、きっと伯爵が嘘をつかれた私と同じように傷つく。たとえば、無表情で何考えているか分からない変人であっても、伯爵は温かい心の持ち主だから。

ふと、馬がうずうずと走りたそうにしていることに気がついた。

馬は走る生き物だ。

立ち止まっていることは苦手なのかもしれない。

私は歩くように手綱を緩めて、馬を歩かせた。

いつだったか。

今と同じようなことを考えたことがある。

俊藍と別れたときだ。

彼は私の半身で、きつと私を幸せにしてくれると思った。

私が望んだら、私を連れて帰ってくれたのかもしれない。

けれど、私は望まなかった。

彼には彼の人生があつて、私はそれに必要ないと思った。

けれど、置いていかれたと思った。裏切られたとも思った。

私は、一人ではいたくなかった。誰より近いと思ったからなおさら、彼にはそばに居て欲しかったし、私を大切にしてほしいかった。

それでも、私は半分の私を捨てられなかった。

全部、無駄になってしまうような気がしたのだ。

今までの、半分の私の人生が。

あの人と出会うために生きてきたのだと言えば、聞こえは良いかもしれないが、私にはそれが身投げに見えた。俊藍に、自分の全部を放り込んでしまうような。

私は今までの人生が無駄だと思っていない。

そりゃ、良いことなんかほとんど無かった。

こちらの世界に落ちたのだって偶然で、不慮の事故だ。

こちらの世界に落ちてからも散々だった。

同じ世界から落ちてきたはずの人には裏切られるし、攫われるし、追いかけまわされるし、死にそうになるし、殺されそうになるし。

良い人にも悪いやつにも出会った。

良いことだつてあつたし、悪いことも山ほどあつた。

全部私のものだ。

私の体験であつて、私の傷であつて、私の思い出だ。

俊藍のものじゃない。

彼は私の全部を包むように守ってくれるけれど、彼は私のものじゃないし、私も彼のものじゃない。

そう考えると、魂の半身なんてものは物凄く面倒臭いものに思えてきた。

だって、自分と同じくらい大事でお互い必要不可欠なんて錯覚起こす生き物が自分以外にもう一人いるのだ。自分のことで手一杯なのに、そこまで面倒見切れない。

俊藍には一宿一飯ならぬ何食か分の恩義ある。それだけだ。そう考えると、ひどく肩の力が抜けた。

私の力が抜けたことを悟ったのか、突然今までゆらゆらと歩いていた馬が駆け出した。

「うわ！」

ぐんっと体を置いていかれるような反動がして、手綱にしがみつく。

後ろで誰かが叫んでいるような気もしたが、もう自分のことではないだ。

落ちないように、手綱とたてがみを握り締めて、馬の背にしがみついた。

思いがけないスピードに、私は舌をかまないように前を向いた。

速い。

風いだ海面のような草原を斬り裂くように走っている。

風のこうごうという音と一緒に、私は世界を瞬く音を聞いた気がした。

今、この瞬間。

確実に波打つ私と、この世界の。

ほとんど放心しかけた私の手綱を誰かがぐっと握ったかと思うと、馬にどんと私の他の誰かが体重をかけた。

わななきと一緒に、馬が竿立ちになる。

落ちる！

そう思ったが、私の背中に誰かが居た。

馬をなだめる皮手袋に見覚えがある。

慌てて振り返ると、

「大丈夫かね」

息一つ乱していない伯爵が居た。

舌を噛むかと思った。

それを辛うじてこらえて、辺りを見回すと、伯爵の馬が所在なさに辺りをうろうろとしていて、その後ろから荒々しい馬蹄の音が近付いてくる。

「はああああああ助かったあああああ」

「溜息をつきたいのはこちらの方だよ」

思わずもたれかかった伯爵の胸が、見た目よりも早く鼓動しているのに気がついた。

無表情だが、心配させたらしい。

私の頭の斜め上にある伯爵の顔を見上げたら、あるはずの片眼鏡がない。

入れ墨がこめかみから縦に入った顔は紳士というよりインテリなやぐざに見える。

何となくバツの悪い気がして、もたれかかるのをやめた。

というのも、我に返ってみると、私の後ろに伯爵が乗り、私の手綱を握っているので私はすっかり伯爵に囲い込まれているように見

える。というか言葉通りだ。
わたわたと視線をさまよわせる私を見下ろして、伯爵は静かに言った。

「――決めたのかね」

何を、と訊かなかった。だから、

「はい」

はつきりと応えた。

「北国へ行きます」

何も知らないままではいられない。

きっと、それが私なのだろう。

我ながら馬鹿だ。

けれど、目の前の人が誉めるようにうつすらと微笑んでくれるから、私はきつとそのままだ。

「未来の父としては、大事な娘を北国なんぞにやりたくはないがね」

伯爵は少しだけおどけるように言って、

「メフィステニス領領主としては、ぜひ行ってほしい。きっと君ならば、より良い答えを見つけられるだろう」

領主としての重い言葉を乗せられた。

これが、領主と貴族としての責任というやつなのだろうか。

「ヨウコ」

誰に呼ばれたのかわからなくなった。
けれど、目の前には伯爵だけ。

は、初めて名前呼ばれた。

訳も分からず顔が熱くなる。どっかに穴があったら入りたいというか、誰か殴りたいというか、ちよつと叫びたい。

伯爵の方は私の動揺を知ってか知らずか、面白がるように口の端を上げた。

「行っておいで。君の家はここだからね」

いつでも帰ってくるといい。

目の端がとても熱くてたまらない。
だから、思い切り抱きついてやった。
未来のお父様に。

家族と私

次の日、私はとても清々しい思いで目覚めた。

とても晴れていて、いつものように伯爵家の庭は美しい。

朝日を受けて新緑がきらきらと輝いている。

約束の日だ。

翌日の朝食のあと、伯爵の執務室へ呼ばれた。

入って思わずドアの前で立ち止まる。

勢揃いだ。

ガリアさんを始め、赤カブ頭のタンザイトさん、ウェルテアさん、マッジョリさん、タルキア、サルミナ、ホイエン、他に厨房、メイド、庭師の皆さんが伯爵を囲んで待ち構えていた。

「皆、どうしても君に一言挨拶をと聞かなくてね」

伯爵の宣言に、ドアを開けてくれたガルーダさんを見上げると、
頷いて中へ入るように私を促した。

いや、ちょっと待って。

淋しいとか、お元気でとか。

そんなこと誰も言わないのに。

「わたくし共一同、あなたさまのご意志と、御心のまま、あなたさまのお幸せを切に願っております」

いってらっしゃい。

あなたは、いつでもここに帰ってきて良い。
あなたの家はここだ。

うん。

私は肯いて、涙は出さなかった。
ひとりひとり顔を見る。

甘やかしてくれた。
可愛がってくれた。

私がここへ来たのは、ほんの二週間ほどのことだったのに。
この世界へ来て、半年。
色々なことがあったけれど、私は幸せなときを過ごさせてもらっ
た。

この思い出があれば、私はきっとこの先どんなに苦しいことがあ
っても耐えられる。

ここへ、帰ってこようと思う。

私は私のために、この素晴らしい家族のためにも生きよう。

私はたくさんの人に生かされた。
だから、これから生きる。

全部抱えて、生きる。

伯爵と目が合った。

「困ったことがあったら、何でも一つだけ叶えよう」
一つだけ。

そんな厳しいところも尊敬している。

それに、この一つのお願いを、きっと伯爵は何だって叶えてくれるだろう。

この人が微笑んでくれるから、私も泣かずに笑顔でいられた。

「行ってきます」

ここから、私の旅が始まる。

土壁と万年筆

照り返す太陽の光を避けて、私たちはさっそく日除けの下へと逃げた。

伯爵に教えてもらったとおり、伯爵の領地から草原を抜けると、そこはまさに別世界だった。陽光が容赦なく大地を焦がして、人と土壁の建物をじりじりと焼く。この街を抜けると、そこは砂漠だというのも頷ける。

露店に並ぶ食べ物の中では今まで普通に食べていたはずの果物が倍の値段で売られていて、水売りが炎天下の中、飲み水売り歩いている。

私はガリアさんに用意してもらった旅装の襟を少し緩めた。

彼女が用意してくれたのは、長袖だが木綿の涼しい服で、太陽を直接浴びない服装だ。スカートでなく頑丈なズボンとブーツだという 것도 いい。幾らかのお金と薬草と、着替えだけが入った荷物は肩かけカバンに詰め込んで、すでに私の相棒となったマントをひっかけている。さすがに羽織ると暑い。

旅装の上着には、手帳が入っている。この世界では珍しい、万年筆と手帳のセットだ。何か書くものが欲しいと言ったら、伯爵が自分のコレクションから譲ってくれた。私の世界と似通ったそれは、やはり元の世界との繋がりを感じずにはいられない。

「今日はこの宿場で一泊して、明日から砂漠へ入りましょう」

そう案内してくれたのは、伯爵がつけてくれたガイドのアイスレアさんだ。淡いピンクの巻き毛の女の子で、年は私とそう変わらないように見えるが、彼女は北国に行くための通訳も兼ねている。西国の言葉は困らないが、北国ではそうはいかない。私よりも半袖短パンといういでたちの軽装だが彼女は暑さに堪えた様子ではなかった。

それよりも、

「大丈夫ですか？ 理恵さん」

私と同じような旅装だが、明らかに女らしい彼女は日除けの下、このカフェでぐったりと座りこんでいる。

尋ねた私に、理恵さんは儂げに微笑んだ。

比較的温暖な西国の首都に比べてここの気候はだいぶ違うから堪えるのだろう。

彼女は、迷い人を奴隷にするという理不尽な法律のために、三十年ものあいだ王城で仕えていた。しかし、彼女は私と同じく伯爵のお屋敷にある転送装置（魔法のテレポーションみたいなものらしい）でここまでやってきた。

名目上は私に仕えるためだが、彼女と一緒に帰る手段を見つけれればいいと思っている。

「ありがとうございます。ヨウコさまは、大丈夫なのですか？」

理恵さんは、西国に私が居た頃に大分お世話になっていたらしいらしい、というのは、その記憶が未だ私にないからだが。

私の西国の首都での記憶は、あの殺されかけた記憶とアンジェさんが殺された記憶だけだから、理恵さんにそのころのことを聞く気にはなれなかった。

「私は大丈夫です。早く宿へ行きましょう」

この辺りでは、人々が本格的に活動をし始めるのは夕方からだそうで、太陽が燦々と元気なうちに出歩いているのは、忙しい商人か旅人ぐらいだそうだ。

私たちは理恵さんを気遣いながら宿へと入り、夕方を待った。

この街まで来るのに、伯爵が馬車を出してくれたので、ほとんど一息にこの街まで辿り着いたけれど、ここから先は馬では行けない。砂漠にはベイーコロという乗り物（馬みたいな生き物）で行くらしい。そいつの調達もしなくてはならない。伯爵は充分な路銀を持たせてくれたから、宿に困るようなことにはならないだろうが、砂漠を横断するには地図でオアシスを辿って野宿するのが基本だ。

どこかの隊商にでも混じれば良いのですが、というのはアイスレアさんの言。

早い夕食をとると、理恵さんは宿へ残るというので、私はアイスレアさんと一緒にこの砂漠に近い街を散策することになった。

ベイーコロの調達と共に同じ方向へ向かう隊商の情報も得るためだ。なんだか、本気で旅らしくなってきた。

夕方になると往来は昼間とは比べものにならないほどの人出でにぎわっていた。

露店も昼間には出していなかったお酒もふるまって、まるでお祭りのような騒ぎだ。露店を冷やかしながら、アイスレアさんとまっすぐ向かったのは、ギルドだ。

こんな異国情緒溢れる街に西洋式の壮麗な建物はそこだけ切り抜いたみたいにひっそりと建っていた。中もいつか見た銀行方式で、相変わらず愛想のいいお姉さんたちが西国の言葉で出迎えてくれる。アイスレアさんはお姉さんに北国の方へ向かう隊商はないかと訊ねたけれど、返答はかんばしくなかった。というのも、今はちょうど乾期で、オアシスの水も減っているので大きな隊商はこの時期を避けるのだそうだ。もう少ししたら雨期だというが、この暑さでは理恵さんの体調の方が心配だ。

そこで、アイスレアさんと相談して、ベイーコロで最短距離で砂漠を抜けようということになった。このルートは、砂漠は最短距離で抜けられても後には険しい山道が控えている。だが、暑さが堪え

る理恵さんには少しでも涼しい場所に行く方が賢明だと思われた。それから私たちは手分けして旅の準備を始めた。

ベーカーコロの良し悪しは分からないのでアイスレアさんに任せて、私は日焼け止めや水袋の調達などをして、宿へ帰りつくころには月が中天に昇る頃だった。

まだ街は活気を保ったままだったが、部屋へ帰ると理恵さんは静かに待っていてくれていた。

「寝てて良かったんですよ」

私の言葉に彼女は首を振る。アイスレアさんは別室で、私と彼女が相部屋だ。

理恵さんは荷物を片付ける私をじっと見、そして少し息を吐いた。夜になって多少なりとも涼しくなったからか、昼間より顔色は良いようだ。

「―――本当に、もうネロではないのですね」

ぽつりと理恵さんが呟くので、私は彼女の向いにあるベッドに腰掛ける。この部屋にはベッドが二つとチェストしかないが、清潔でよく眠れそうだ。

「まだ、自己紹介してませんでしたね」

私はそう言って不安そうな理恵さんを見つめた。

「私は、君島葉子といいます。向こうでは、派遣社員でした」

「……派遣社員？」

理恵さんが向こうに居た時代には、まだ派遣という言葉は無かったらしい。会社員のアルバイトみたいなものだと言うと、彼女は少しだけ納得した顔をした。

彼女は、二十四歳の時にこちらへ落されたという。

理由は定かじゃない。気がついたらどこかの広い庭に居て、そこがたまたま王城だったという。そこで彼女は保護されたが、奴隷として三十年という長い間仕えることとなった。

自分はまだ運が良かったのだと、理恵さんはやっぱり夢く目を細めた。

他の奴隷として扱われた人たちは皆、兵士として前線や送られるか、家畜のような扱いを受けていたという。今はまだマシになった方だとも。

三十年前というと、つたない記憶を辿れば、高度成長期時代といったところだろうか。日本はバブルの真っ最中。私が居た時代より、みんなが上を向いていた時代だという印象がある。だから、目の前の理恵さんのショックは私とは比べものにならないほどだろうと思った。

私は、不幸自慢するわけじゃないけど、派遣社員として結構苦しく生きていた。正直、自分の未来が明るいなんて思えたことはない。だから、理恵さんは奴隷なんてことに耐えられなかったようにも思えたのだ。すでに一日歩きまわって真っ黒になりかけの私と違って、彼女は奇麗に髪を整え、化粧をし、自分が美しくあることにこだわっている。

それが、羨ましく思えた。

私は理恵さんと日本のことをお互いに情報交換するように話して、夜更けに眠った。

砂と海

翌日、朝日と共に起きて準備を済まして、私たちは砂漠へと向かうことになった。

ベーカーコロという生き物はこぶのないラクダのような生き物で、荷持を積ませて丸い背に人が乗っても幾日を歩ける強い足腰を持っている。

乗ってみると馬より座高は高かったが、要領は馬と似ていた。手綱を握って鐙にしっかりと足をかけていればいい。

「砂漠で、方向を見失うことは水を無くすことと同じく命取りです」

砂除けのマントを半袖に羽織ったアイスレアさんが今日も元気に説明してくれる。

「普通は、方位磁石と地図でオアシスを確認しながら行程を組み立てますが、何より大事なのは水の確保です。水の減りで立ち寄るオアシスの数を増減していくんですよ」

彼女は、ガイドというにはものすごく物知りで、サボテンによく似た砂漠の植物の幹には水が蓄えてあることや、太陽や星で方向を見る方法も教えてくれた。

砂漠を歩いて渡ることとはできない。

容赦なく熱せられた熱砂の海を歩けば、丈夫な靴といえど熱せられればまず中の足が耐えられない。皮膚が焼けて歩けなくなる。だから、ベーカーコロや幌馬車を使って正午の暑い時間をオアシスで休憩しながら進むのだという。

地図で砂漠の真ん中に突如として現れるオアシスはちよつと感動

ものだ。

この公大な砂漠の中にはオアシスを拠点とした領地もあるそうで、私は陽炎の浮かぶ砂の海を見渡して溜息をつく。

広い。

草原にも思ったが、この世界は広い。

私の想像なんて、本当に軽く超えるのだ。

幾つかのオアシスを中継して、夕方に少し小規模なオアシスに泊まることになった。これから数日はこういう野宿だ。テントがあるだけマシだろう。夜の砂漠は昼間と違って非常に冷えるので、火の番は交代することになった。

夕食は、干し肉を火であぶって日持ちするチーズを焼いたパンに挟んで食べた。アイスレアさんに食事時に、と差し出されたのは乳酒という甘いお酒だった。一口飲んで喉がかーとなったから相当きついお酒だが、いい具合に酔えていい。夕食が終わるころにはマントが必要なほど冷えてきていたので、このお酒があれば火の番も出来そうだ。

決まった時間に起きられる私の火の番は後攻に決まったので、私は二人より先にテントで眠ることになった。

テントの寝袋に入ったら、自分で思っていたよりも疲れていたよううで、目を閉じたらすぐに意識は夢の中へ飛んでいった。

ついでに、私の幸せな時間も羽根が生えて夜空に飛んでいってしまっただけ。

「……………あれ」

私が再び起きた時には、テントもベーカーコロも、旅の連れも、あ

とかたもなく消えていたから。

星空と水袋

星が見える。

確かにあったはずの温かなテントはすでになく、私はマントを掻き合わせた。

そして、自分の荷物を確認している。

——なんだか前にもこんなことあったような。持っているのは頼りないものだ。

着替えに葉草に日焼け止めに水袋が一つ。食糧はない。ベーカーもない。

幸いなことに手帳と万年筆は無事だ。ここは一つ日記でもつけよう。

旅の二日目、荷物もベーカーも取られて砂漠に取り残される。

……あ、なんか、ものすごい実感キタ。

まじか。この状況。

ありえない。ありえないよ！ 冷や汗すらもったいないが、勝手に出てくるものは仕方ない。できれば集めて体に戻したいぐらいだが。

オアシスで水汲んでみるものの、水袋一つじゃ、次のオアシスまで持つかわからない。

皮の袋の中は見た目よりもしっかりしてて密封されるから蒸発はしないけど、開けた瞬間にじゅわっといくんだよこれ！

お金は、少しだが持っている。この状況で役に立つとは到底思えないが、こちらへ来て初めて作ったギルド印のおさいふ木札は身につけていたのでさすがに取り上げられなかったようだ。歩く十八禁ことウイリアムさんにもらったお金の残りと、伯爵の元で私がこつ

こつ溜めていたお金が残っている。……ウィリアムさん、元気に十八禁してるかな…。

思えば遠くに来たもんだ。

あの時は森に転がされて、今度は砂漠か。

私の人生、未来はどっちだ。

と、星を確認する。

とりあえず、足りない頭を必死に使ってアイスレアさんが教えてくれた通りに星を見ることにしたのだ。今が夜でまだ良かった。昼だと野垂れて絶望してたかもしれない。

彼女が私に嘘を教えてないのなら、一番高い星を中心に、明るい星を三角に結んだ先が北になる。伯爵の領地からこの砂漠は北東になるから、思いだせる限りの地図によると、砂漠を抜けるには更に東を目指さなくてはならない。そして、打ちあわせした行程では、ここから北北東に向かってオアシスを抜けて、山麓に入る予定だった。

けれど、それはベイーコロがあった場合の話だ。今の私の足じゃ無理。

ここから北に向かってオアシスが点々と散らばっている場所があって、砂漠を行く道が多くなるけど、大きな街、砂漠のオアシスを領地に持つ城塞都市があったはずだ。歴史あるその土地なら、ギルドもあるだろうし（ギルドはどんなに小さな街にもあるのだが）これからのことも考えられるかもしれない。

とにかく、だ。

私はオアシスの湖の水を水袋にたっぷりと汲んだ。

そして、自分の頭を思いきり浸ける。

ばしゃ！

という音と一緒に自分の空気が抜けていく音がした。
濃厚な水の匂いと感触を味わって、水面から勢いよく顔を上げると、満天の星空があった。

さっきまで星を読むことに必死で、星空なんか目に入っていなかったのだ。

冷えた空気が私の頬を撫でていく。

オアシスの湖に、星空が映りこんでいて、私は宇宙の真ん中に放り込まれたような気分になった。

たったひとり。

理恵さんも、私と同じだったはずだ。

家族とも友達とも引き離されて、たったひとりで。

けれど、理恵さんにも、アイスレアさんにも事情があったのだろう。

……なあって思うか！

ええ、ええ。まあちょっと分かってたよ！

アイスレアさんは初めから理恵さんの言いなりだった。

彼女が疲れたといえれば行程が半分も進んでなくても休憩をとり、足が痛いといえれば足をもむ。ガイドというより彼女専属の侍女だった。理恵さんの方も、なんつーか大事にされて当たり前？　かしずいてくれて当たり前？　な感じで私に対しては言葉も丁寧だったけど、どこか見下したような感じだった。

だから、砂漠に入ってもほとんど二人と話さなかったし、話題もなかったんで必要なことだけ聞いてたんだよね。あれ、会話がなかったって？　オカシイネエ。あはは。

旅始めてから、紀行文的なロマニー気分味わってたからほとんど淋しくもなかったからねえ。まあ、アイスレアさんも、理恵さんも、

悪い人じゃないんだよ。馬が合わないだけで。特に理恵さんとは。

彼女とは、たぶんこういう別れになると予感があったのかもしれない。

まさか砂漠のど真ん中で放り出されるとは思ってなかったけどね！
人としてありえないよお姉さん。

まあとにかく、彼女とは、初めて話した最初から理解し合える相手とは思っていなかったのだ。

彼女は、どうにも悲壮感が漂い過ぎていた。

彼女がネロという娘にどれだけ救いを求めていたか。

何となく、昨夜話していてわかったような気がした。

理恵さんは、とにかく自分の不幸を共有できる相手が欲しかったようだ。

それに私は当てはまらなかった。

それだけの話だ。

人間、それだけのことで、他人をどうにかできてしまう。

「……悲しいなあ」

嘘をつかれるのは嫌いだ。

嘘を吐かれると、自分にも嘘をつきたくなってしまうから。

私が吐いた溜息は、白っぽく空にのぼって消えた。

朝日が昇る前に、私はオアシスを後にすることにした。

次のオアシスまで出来るだけ距離を稼がなくてはならない。

本日も晴天なり。

まあどのみち砂漠のど真ん中で雨が降ったらしのぐ軒先もない。

次第に高くなっていく太陽を背に、私はひたすら歩くことにした。
何しろ食糧はない。

絶望的とか希望的観測とか、そういう言葉が頭の中をぐるぐる回
ったけれど、ただひたすらに私は太陽で方向を確かめながら歩いた。

生きると決めた。

誰にどうされようと、生きると。

――今度会ったら覚えてろよ！

不幸な女

初めて出会ったところから、彼女と自分は同じだと思っていた。

戦場に一人きりで放り出され、王に保護されて連れ帰られた娘は、言葉はおろか自分の記憶さえ失くしていた。

憐れだった。

城へ迎えられたときには酷い火傷まで負っていて、言葉は少なく、感情すらも忘れたようにただ茫然と治療を受けていた。

王に信頼されている理恵が彼女の世話をすることになったとき、彼女が迷い人だとすぐに分かった。

理恵がこちらへ落されたのは、今から三十年も前のことだ。

男女同権が叫ばれて久しい中、総合職の女性の第一期生として会社へ勤め始めて三年目。風当たりは強かったが、お茶汲みしかできない同僚たちを横目に理恵は営業として確実に業績を伸ばしつつあった。実際、成績は男性社員よりも上だった。

男になんか負けない。

どんなセクハラにも負けない。

恋人は理恵と同じ会社の役付きで、この時代には珍しく理恵の仕事のことを理解してくれていた。

悩みの種といえば、時折母親が持ってくるお見合い話。

結婚はまだ考えていない。けれど、今の恋人との結婚は魅力的だった。

プロポーズは秒読みだと思った。

異世界に落されてからの生活を思えば、あまりにも順風満帆で平和な日々。

その日も忙しい仕事からの帰り道、ヒールの高いパンプスを響かせながら一人帰路についていた。そんなとき、足元が突然、景色が溶けだしたのだ。悲鳴を上げる暇もない。

あつという間に理恵も飲みこまれ、気がつけば、長閑な庭園の真ん中に座り込んでいた。

夢ではないと頬をつねってみたのも束の間、この庭園の主らしい男に拾われることとなった。

美しい男だった。

燃えるような赤い髪はライオンのようにうねり、深い知性を湛えた碧眼は澄んだ輝きで人々を睥睨する。

彼は、この国の王だった。

そして、彼から思いもよらないことを告げられた。

この国では、理恵のような突然異世界からやってきてしまった者を、迷い人といい、そして迷い人の身分は、奴隷なのだという。

ただ巻き込まれただけだというのに、奴隷など、納得できる話ではなかった。

ショックを受ける理恵を慰めてくれたのは、残酷な事実を理恵を教えた当の王だった。

日本では珍しくもない黒髪を優しい夜のようにだと褒めてくれ、その瞳は星のように神秘的で美しいと。毎日のようにそうして慰められ、理恵はやがて王に恋した。

彼には、すでに二人の妃が居た。そして、二十八という年齢にも関わらず、すでに子供も二人居るという。

それでも、理恵は王を愛し、王も理恵を愛した。

二人の妃は当然、理恵を疎ましく扱い、後宮へ入れることさえ拒んだが、理恵は構わなかった。

理恵は迷い人の特性上、肉体的な年齢を経ない。

それはいつまでも若いままの肉体を保てるということで、年齢を

重ねて老いていく彼女たちを横目に理恵への王の寵愛は続いた。

後宮に入れないということで、理恵には女官長という役割が与えられた。

そこで、迷い人とその子孫たちが理由もなく奴隷として、家畜同然に扱われている事実を知る。

理恵は、王に訴えた。

こんな法はおかしい。迷い人は年をとったようには見えないだけで、不死ではない。

最初は反発した王も、理恵の情熱に次第に理解を示してくれた。そしてそんな理恵に、王は理恵への愛を深めていく。

二人の子供たちにも理恵を紹介し、その二人も父と同様に理恵を慕ってくれた。それというのも彼らの母親たちは王の寵愛にばかり興味を傾けていて息子たちのことを見向きもしなかったのだ。

幸せだった。

すでに元の世界へ帰ることはできないと知っていた。

王は理恵を存分に愛してくれたが、なぜか理恵には子供ができなかった。

それでも、幸せだった。

その幸せが綻び始めたのは、愛した王の死からだった。

まだ若い死だった。彼と出会ってから、すでに二十年以上経っていたが理恵は若いまままで彼だけが老いていく。

彼は変わらず愛してくれていたが、病魔は容赦なく彼の命を奪ってしまった。

けれど、すでに成人した息子たちがいる。

彼らは、父の美しさも高潔さも受け継いで、たくましく育った。病床でも落ち着いた声で、理恵と息子たちにあとは頼むと言い残して、逝った。

「あなたを愛している」

愛した王の死を受け入れたもののその淋しさに気を落としていた理恵に、そんなことを言ったのは、幼い時から育ててきたはずの息子だった。

男性的でたくましいイメージの父親や兄と違い、女性的な雰囲気もまとったこの弟は、理恵にすがりつくように言った。

「出会った時から、あなたを母だと思ったことはない。あなたは私の、ただひとりの女性だ。まだ父を愛しているのだとしても、私はあなたを――」

美しく成長した彼は情熱的だった。穏やかだった日々が、燃えるように燦るのを感じた。

この世界に来て、すでに三十年。けれど、理恵はまだ若いままだ。理恵は、彼の情熱をそのまま受け入れた。

王との日々とは違い、若い彼との日々は刺激的で、まるで火の中で踊るようだった。

そんなときだった。

ネロがやってきたのは。

彼女を戦場から連れ帰った若い王は、彼女を妃の部屋に置くことにした。この部屋が一番警護がしやすいという理屈だったが、彼の母親が権力闘争に敗れて失意のなか病死したこの部屋に、今まで誰も近づけさせなかったというのに。

先代と違い、未だ妃も側女も居ない彼が、女を後宮に連れこんだ事実が、瞬く間に先代の死から落ちつきを取り戻したはずの城を揺るがせた。

理恵も、思わぬデジャヴに動揺した。

これではまるで、こちらへやってきた理恵と同じシチュエーション

ンだ。

理恵の動揺の通り、彼女は若い王に愛された。

若い王は傷ついた彼女に言葉やこの国のことを根気よく教え、癒し、そして、彼女が言葉を覚え、会話が成り立つようになってくると、彼女に愛を囁いた。

それが、王だけのことならば、理恵の幸せな日々は波立たなかった。

その彼女に、理恵を愛していたはずの弟までが、目を奪われさえしなければ。

彼は、理恵を愛していると言ったその口で、今度はネロと名付けられた無垢な彼女に愛をさえずり出したのだ。

ネロは、愛らしかった。

理恵よりも背は幾分高いが、大人とは思えない、素直な言動がどこか憎めない。平均よりも整った理恵よりも平凡な顔付きだが、笑うと花が開いたようになる。

そして、時折理恵が日本語で話しかけると、安心したように日本語で応えてくれる。

すでに元の世界へと帰ることを諦めた理恵にとって、彼女は癒しであり、そして憎悪の対象となっていた。

だから、王とは対立しがちな大臣から、ネロを排除する計画を持ちだされたときには、迷わず協力することにした。

これが、今まで育ててきたはずの息子たちへの裏切りと分かっているにもかかわらず、感情に引きずられるまま、彼女を飾り立ててパーティーへ連れて行くと、無理やりナイフを持たせて王が懇意にしている貴族へと押し出した。彼は、ネロを人一倍孫のように可愛がっていた。

きっと、そのことが引き金になってしまったのだろう。

ネロが、元の人格を取り戻していた。

あのときの、ネロの悲痛な顔が臉に焼きついて離れない。

後から押し寄せてきた後悔で、牢屋へ彼女の様子を身に行くと、

ネロは別の女になっていた。

どうやらネロとしての記憶はなくしているらしい。

彼女は、何も知らない。

理恵の嫉妬も、理恵の罪も。

何も知らない彼女が、何も知らないまま死ぬ。

理恵は、若い王が恋に裏切られた盲目の怒りで剣を抜いたことに細く笑んだ。

可哀想な女だ。

そして理恵も憐れな女。

同情や愛情を受ける女は二人もいない。

愛される迷い人は、理恵一人でいい。

しかし、何の星の巡りか、彼女は五体満足なまま、伯爵に連れて行かれることになった。

「あなたに、機会を差し上げよう」

その伯爵が理恵の元へとやってきたのは、理恵が政敵と繋がりを持ったことが息子たちに暴かれて、牢に入ったところだった。

こんな汚い場所に居るのは嫌だ。

伯爵の提案に私はすぐに頷いた。

彼の提案はこうだ。

自分の娘が北国へ行く。だからそれに供として従えという。

従うことには慣れている。尽くして優しくしてやれば、すぐに理恵の言いなりになるだろう。あの馬鹿なネロと同じように。

理恵は早く身を奇麗にして、美しい自分に戻りたかった。

しかし、その娘という女に会って、理恵が愕然とした。

ネロだった。

死んだはずの彼女は、いつの間にか伯爵の娘になっていて、今度は元の世界へと帰るために北国へ行くという。

「よろしくお願いします。一緒にがんばりましょう」

日本語でこう言った彼女の手を、理恵は振り払いたくて仕方なかった。

テキパキとガイドの女と話す女は、すでにあの頼りなく、無垢なネロではない。ふてぶてしい理屈を操れる一人の小賢しい女だ。

仕事が出来て、誰からも愛されて、誰からも頼りにされるのは理恵の役目だ。

理恵は、こんな風に誰かに守られる女ではない。

ヨウコと名乗ったあの女は元の世界に帰りたいというが、理恵が居た時代はすでに三十年前だ。今更戻ったところで、理恵がどうなるかわからない。

それに理恵は、本当ならばすでに五十四を過ぎている。もしも元の世界に戻って、この体が老いるようなことになれば、これからどうやって生きていけばいい。

嫌だった。

そしてそれを率先して進めるあの女が、憎かった。

アイスレアというガイドの女を手懐けるのは容易かった。実家があり裕福ではないらしく、苦学の末にガイドとなったらしい。そこまで苦勞してガイドという埃臭い仕事にしかつけないなど憐れだ。理恵に尽くしてくれたなら、城で仕事をやろうと金も渡したら、すぐに理恵の側についた。

そして、砂漠についた翌日に、あの女を置き去りにして去った。

暑いばかりの砂漠からベーカーコロを使って三日かかったが、一人

減った分、水も食糧も充分に旅することが出来た。

砂漠から山の麓にある街に入ってベーカーコロを売り、それで少しばかり上等な宿をとった。砂漠の街に並んでいた土壁の建物でなく、すっかり見慣れた西国式の洋館だ。三十年もこちらで暮らしていたので、すでに日本の建物も習慣もほとんど思い出せない。それに、本来なら理恵は野宿が出来るような体力はないし、そんな身分でもない。

城へはすでに戻れない。だから、伯爵の力を使って北国に行くのもいいかもしれない。

旅の埃をすっかり洗い流して、一息ついたところで、下着姿で体に香油を塗りながら理恵は考えていた。

そういえば、あのヨウコという女は薬草にやたら詳しく、理恵にいい香りのこの香油をその場で作ってくれた。なんでも北国の魔女に習ったという。詳しくは興味もなかったので聞かなかったが、どうやら彼女は各地を転々として暮らしているようだった。

理恵のように美しくない女の人生など、そんなものだ。

もう、あの砂漠で人知れず干上がっているだろうが。

しかし、あの薬草の腕を買って、使用人にしてやるのも一興だったと思う。

理恵がそう思わず笑ったところで、ドアがノックされた。

返事をする、冷たい飲み物を取りに行ったアイスレアが現れた。

「いいところで来たわ。あと二日はここに滞在するから手続きしてちょうだい。それから、服も調達してきて。そうね……あまり首の詰まらないものがないわ。窮屈な格好は嫌いなもの」

ネロの前では女官長の服を着ていたが、本来なら理恵は自分の胸元が美しく見える大きく前の開いた服が好きだ。首まで隠す服は持て余す胸が締まる気がするし、誰かの視線を釘づけにできるという快感が、自分をまた美しく彩っている気がするからだ。

今も、自分の体に香油を磨りこむことが重要で、アイスレアの顔など見てはいなかった。

だから、

「いいよ」

今までできたこともないそんな口調が返ってきて、思わず理恵は顔を上げた。

その瞬間、息が詰まる。

自分の白い喉に、鋭い短剣が突きつけられていた。

顔面蒼白にした理恵に、アイスレアはその愛らしいとも言える唇を不作法に舌舐めずりする。

「やっと、アンタを処分できる日が来たんだからね」

処分。

どうして、そんなことをされなくてはならない。

「どうしてかって？ そんなの決まってるじゃないか」

決まっている。

迷い人だからか。

それなら、あのヨウコという女も同じだ。

そして彼女は、すでに処分された。

「……今度は、私ってわけね」

皮肉なことに理恵が笑うと、アイスレアは輪をかけるように大声で笑った。

「あっはっはっはっは！ あの方がアンタなんかと同じはずがないだろう！」

「……あの方？」

「ヨウコさまだよ」

理恵は目の前の女の瞳を見てぞっとした。

笑っているというのに、瞳の奥は凍てつく冬空のように冷たい。こんな瞳で睨みつけられたことなどない。

こんな、蔑むような。

「私の自己紹介がまだだったね。私はアイスレア。メフィステニス伯爵が使用人。そして、第七十七師団が中佐だ」

凍りついた理恵に、目の前の化け物はにっこりと笑った。

国王軍は、各地の貴族たちからの派遣で編成された師団がある。

それは西国に仕える領地の数と同じく、七十六ある。

本来ならば、七十七は存在しない。

あまりにも有名な、そう、言うなれば怪談の類だった。

名前だけならば、庶民も奴隷も知っている。

なぜなら、彼らは国王直轄の殲滅部隊だからだ。

彼らが派遣された先では、村はおろか街さえもやすやすと消えるという。

戦争に十人駆り出されれば、その戦は五日と持たずに終わるとい

う。

そんな伝説とも怪談ともつかない、正体不明の軍隊。

それが、第七十七師団。

「ほ、本当に……？」

「アンタ、王様にご寵愛されてた割には何にも知らないんだなあ」

アイスレアは今度こそ小馬鹿にするように笑って、皮肉げに口の端を上げる。

「メフィステニスって家柄は王に第一に仕えた賢臣さ。それがどうして伯爵なんて位を授かって、辺境治めてると思う？」

ちよつと高位の大臣なら誰でも知ってるのさ、とアイスレアは笑う。

「メフィステニスが唯一、王に進言する力があるからさ。公爵だって王弟だって誰にもできない王の決定を唯一覆すことができる権限と力がある。王は完璧じゃないからねえ」

彼女は理恵の首筋に短剣の刃をあてて、すうと撫でる。

「国内外にそんなこと宣伝するわけにもいかないからねえ。だから辺境領主の伯爵で治まってる。王様ってやつは、たまにアンタみたいな女狐を抱えこんじまうこともあるからさ」

理恵は短剣の刃で首の動脈を探り当てられ、何も言えないまま唇を噛んだ。

どうして、私がこんな目に。

「どうしてこんな目に私が遭わなくちゃならないって顔だな女狐さん」

今まで笑っていたはずのアイスレアから、瞳だけでなく表情から

笑みが消えた。

「アンタだろ。まだ若い王様そのかして、迷い人を兵隊に仕立てあげたのは」

「……違う。私じゃない」

王にそんな提案をしたのは、王の弟だ。

国庫と貴族の献金があれば、あとは人を調達すればいいと。

そして、その人を、迷い人で補えばいいと。

彼らはすでに戸籍上でも無視できない数になっている。いずれは国を脅かす。

だから、奴隷として扱いたいなら、今のこのときに乗じてと。

あの、閨での戯言を、あの弟が王の耳元で囁いただけだ。理恵と同じように、さも真実めかして。

「違うかどうかは、調べれば分かるさ。現に」

短剣の冷たい刃が理恵の首を再び撫でる。

「アンタはヨウコさまを見殺しにしてしまったしね」

笑いを含んで言われ、理恵はかっと頭に血が上る。

「それは、アンタも同じことでしょう！」

理恵は自慢の首が切れることも厭わず、思わずアイスレアを振り払う。しかし、彼女は少し驚いて身を引いただけだった。

「伯爵のご命令だからさ。この国を立て直すのに必要だからね。三十年も長いこと、あの城にはびこっていた女狐を追いつきないと、ヨウコさまに爵位を渡してもやれないってね」

「私は、女狐なんかじゃない！」

理恵は憐れな女だ。

美しくて、儂くて、誰よりも愛されなくてはならない。

理恵はただ、自分が幸せに暮らしたいだけだ。

誰にも邪魔などさせない。

「憐れな女だね」

アイスレアの冷たい瞳にふと同情が浮かんだが、次の瞬間には消え失せた。

「ヨウコさまは死なないよ。私たちが認めた次期伯爵だからね。アンタは、もう自分の命が助かることだけ考えてな。他のことまで考えてる暇なんか、これからあるとは思わないことだね」

理恵は不幸だった。

こんな何も知らない異世界に落とされて、奴隷なんて。幸せになりたいだけだ。

「アンタには、聞きたいことがたっぷりある。今まで楽しんだツケを払わないと。楽しんで死ねると思うなよ」

理恵が最後に聞いたのは、アイスレアの冷たい侮蔑の言葉だった。

どうして。

どうして、あんな何もない女ばかりが愛される。

ネロ、どうしてあなただったの。

あなたは私よりも憐れで、かわいそうだった。

だから、私はあなたに嫉妬した。

もう死んでしまったかしら。

だとしたら、この言葉も届かない。

私は、あなたに勝った。

これからあなたがどんなに幸せになっても、私は、あなたに負けない。

オアシスとシェスタ

ちくしょう。あの女。

今度会ったら、十八禁な言葉で容赦なく罵ってやる。

ケンカは大嫌いだが、あの女のケンカは高額で買い取りだ！
大人をなめんなよ！

私は色んなものを棚に上げて、砂の海の真ん中で口汚く世の中を罵っていた。

それというのも、さっきのオアシスでのことだ。

私は太陽の方向を見定めながら、ふらふらと何とか幾つかのオアシスに辿りつきながら、歩みを進めていた。人間ね、水と根性さえあれば何とか生きられるんだよ。ふふふふ。

太陽が天高く昇る時間はオアシスで休み、どうにか食べられそうな果物なんかを探して（蛇とか蛙とか居たけど、火が無くて諦めた）歩いていった。こういう時、毒のある果物やら動物を見分けることが出来たから、あの東の果てのクソババアも役に立ったというものだ。あとあのドエス先生もね。感謝するには、まだ私の徳が足りないよ。うなので無理だけど。

とにかくそういう風に、這いずるようにはあるがどうにか進んでいた。

そんなこんなで三日は経っただろうか。

これなら、どうにか城塞都市まで行けるのではないか。そんなことも考えていた。

それが甘かった。

今日も今日とて炎天下のお天道様の元を栄養の足りてない体を引きずって、蜃気楼ではないオアシスを見つけた。

今日はそこでシェスタだ、と辿りついて、まず水を汲んだ。もう

習慣になっている。それを汲み上げて腰にしっかりとくくりつけたところで、妙な気配を感じた。

ひとつ。

いや二つ？

いやいや、まさか、それ以上。

振り返りたくはなかったが、確かめなくてはならない。

ゆっくりと、冷や汗がもったいないとか思いながら振り返ると、草むらで何かが動いている。

鬼か蛇か。

はたして、私は息を飲んだ。

犬だ。

しかも何だか、とっても私と同じような顔だ。

つまり、とってもお腹を空かせているような。

腰を浮かせて辺りを探る。

何だか同じような気配がぐるりと私の周りを囲んでいるじゃありませんか。

ない。ないよこれ！

砂漠に水だけで放り出されてようやく歩いてきた所がこれか！

今回ばかりは神様恨む！ いやいつも恨んでるから天罰ってか！

そりゃないよ！ 尊敬されたいなら、私の対人運を少し上げてからほざけ！

絶望してる間にも、はらぺこ犬たちの包囲網は狭まっていつている。

どうやらこのオアシスは彼らの縄張りで、私みたいな間抜けな旅人や動物を餌にしているらしい。勘弁してくれ。

考えろ。

考えろ。

ひとしきり唸って、私はふと自分の鞆にかかっているマントが目

に付いた。

これで何とかあのワンコたちを払えないか。

一度喰いつかれたら終わりだ。

手には火もない。

一か八か。

そう思ったら早かった。

私は一番体の大きい犬を探した。

こういう群れの場合はリーダーが必ずいるし、そいつがリーダーだと思ったからだ。

そいつがたたらを踏めば、群れもこけるに違いない。年功序列に縦社会の弊害ってやつだ。一番危険な賭けだったけど、負けたら死ぬのはどのみち同じだし。

どうせ賭けるなら、ハイリスクハイリターン！ 女は度胸だ！

「どうりゃああああああああっ！！！！」

間拔けな雄叫びを上げて、私は一気呵成に大きいワンコに向かって走りこむ。

唸る犬は怖いがあっちも必死で私も必死だ。

予想通り周りの犬共は予想外のことで咄嗟に動けないようだ。

だが、リーダーは私に向かって大きく飛びかかってきた。

牙の並んだ紅い口が私に向かって食いついてくる。

二十四の独身女をなめんな！

私は渾身の力でマントを振り上げた。

どう！

生々しい感触が手を滑っていった。

振り返ることはしない。

あとは、必死で走った。

そうして、私はオアシスで優雅なシエスタも出来ないまま、温存していた体力も削られて熱砂の上を這いずっている。

それもこれもみんなあの女のせいだ。

というのも、不思議とアイスレアさんを恨む気にはなれなかったからだ。

彼女の教えてくれた雑学は、これほどないまでに役に立っている。サボテンの幹に水があることも、オアシスでの過ごし方も（まず水を汲むこととか）太陽と星での方角を確認する方法も、みんな彼女が教えてくれた。

だから、どうにか私はここまで歩いていけている。

野宿の仕方は、俊藍に教えてもらった。

薬草の知識は、不本意ながら東の果ての魔女に教え込まれた。

アンジェさんには、生きる勇気をもらった。

伯爵には、生きるための理由と誇りをもらった。

誰かに支えられて、私は生きていると思う。

この暑い、どうしようもない砂漠の上でも、私は立って歩こうと思う。

走ったお陰で湿っていた汗はすでに乾いて、体が水を求めて悲鳴をあげている。

それでも歩く。

私は欲張りだから、あるかもしれない私の前世での悪行も、神様に見放されてる運命も、全部抱えて。

何も捨てない。

それでも、どうしようもないことって、やっぱりたくさんある。

いつの間にか、膝から力が抜けていた。

気がつくとも鉄板の上みたいな砂の上で腹這いに倒れている。

顔が熱い。

ここまでなのか。

結局、私の矜持はちっぽけで、誰にも認められずに死んでいくのか。

思い出と記憶

べろん。

私は、生臭い何かに舐められて、気がついた。

べろん。

前にもこんなことあったような。

べろん。

分かった！

起きるから！

私はまどろみを無理矢理押し切って、目を開けた。
すると、

べろん。

また舐められた。

顔が酷いことになっているのは分かっていたが、今は一滴でも水が惜しい。

私は仕方なく生臭い何かを腕で拭った。

そして自分の目尻と鼻がやけにかびかびすることに気がついた。

全部まとめて拭ってから、ああ、とやけに落ち着いた気分で納得する。

泣いていたのか。

長い、夢を見ていた気がする。

項垂れた私は自分の不運さを改め嘆きながら、ぼんやりと夢とも記憶ともつかない思い出を反芻して、容赦なくお尻を焦がす砂の存在を確かめた。炎天下もお変わりなく！。

けれど、自分にあるはずのない妙な影があることに今更気がついて見上げると、

「ダイモン……？」

いつか、旅の途中で別れてしまった、優しい騎竜。
緑色ののっぺりとしたトカゲ顔で、私を心配そうに見ている大きな目も。ふかふかしてそうだけど硬い剛毛の背中も。

「ダイモン」

鼻の頭を撫でようとして、少し逃げられてしまった。

ダイモンなら逃げない。

そこで、私はこの子が少しだけ記憶よりも小さいことに気がついた。

緑色だが、顔形も、違う。ような気もする。

こんな暑い中に居るからか、少しだけ弱っているようにも見えた。
私は騎竜のことはあまり知らない。

東国ではそれを持ち物として調教していたが、西国でのメジャーな乗り物は馬だ。そして、辺境で暮らしていた私は見かけなかったが、魔力を動力とした車のようなものも乗り物としてあるらしい。
けれど、騎竜はどうやら東国だけで使われているようだ。

それに、この子はまだ子供のようにだ。

不安そうに、けれど警戒して私を見つめている。

「ねえ、喉、乾いてない？」

革袋を開くと、水の匂いがしたらしい。小さなダイモンは鼻を近づけてきた。

「大人しくしてて。飲ませてあげるから」

私が一口革袋を飲んでみせると、安心したらしく、大人しく口を開けてくれた。

大きな口に水を流し込んでやる。

すると、やはり喉が渴いていたようで、あっという間に飲み干した。

「ねえ、お父さんやお母さんはどうしたの？　はぐれたの？」

水をあげたことで気を許してくれたらしい。私に首を撫でさせてくれた。

懐かしい。

ダイモンも、首を撫でられるのが好きだった。

辺りに、他に騎影はない。

はぐれたのだとしたら一匹にはしておけない。

そう思ったのは、私の方だったのかもしれないが。

一人は淋しい。

「一緒に探してあげる。だから、その間、私と居てくれないかな」

小さなダイモンは、少しだけ目を細めて、「クウ」と鳴いた。

ああ。

きつと、ダイモンだ。

私は勝手に感謝した。

あの優しいダイモンだから、私を心配してまたこんな貧乏くじを引いて生まれ変わってきてくれたのだ。

でも大丈夫。今度は死なせない。

ありがとう。

小さなこの子の背に乗ることは出来なかったので、私は一人と一匹で砂漠を歩いた。

私が太陽の位置を確認してオアシスを見つけ、ダイモンは私に背中と影を貸してくれた。

一緒に水を飲んで、どうにか果物を見つけたが、それはほとんどダイモンに食べさせた。どう考えても私よりも大きなダイモンの方が体力も食べ物もたくさん要ると思ったからだ。

そうして、ダイモンと出会ってから、さらに三日が経った。

今日も炎天下の中を歩く。

水は、すでに尽きていた。

頭の中の地図でも、オアシスは、城塞都市までない。

それでも歩いていられるのは、ダイモンがそばで離れずに歩いてくれているからだ。

だが、私の方はすでに限界だった。

暑さのせいで朦朧とする頭の中で、足の痛みと体のあちこちに出来た小さな火傷が痛い痛い和大合唱している。砂を照り返す太陽の光も痛いような気がした。

とす、とす、とす、と私たちの足音が砂漠の海を渡り、それでも目的地は見えない。

これまでなのかもしれない。
私は歩みを止めた。

「ダイモン」

私のこの呼びかけに、小さなこの子は応えて足を止めてくれた。
私はまだ柔らかい背を撫でながら、無理矢理笑った。

「ここからは、私一人で行く。だから、あなたはその自慢の鼻でオアシスを見つけて、お父さん、お母さんを探して」

騎竜の鼻はいい。だから、水の匂いも嗅ぎ分けられるかもしれない。

「ここまで付きあってくれてありがとう」

ダイモンは、首をめぐらせて私をじっと見つめた。
意識はすでに一本の細い糸でしか繋がっていないかった。

ダイモンの大きな瞳に魅入られるように、私は自分の体がゆらゆらと揺れるのを感じて、抗いがたい眠気に誘われるように、切れていく意識を見つめていた。

熱射の降り注ぐなかで、私はまるで自分が蜃気楼になっていくかのような気分だった。

だめだ。

ちゃんと、この子をせめて見送ってから。

だが、うまくいかないのはどれも同じなのか、私は混沌の坩堝に呑みこまれた。

色々なことを思い出していた。

辛いことが多かったようにも思う。

手だって泥だらけで血まみれで、いつだって薄汚れていた。心も体も存分に傷ついた。

それでも、とわがままな私は言う。

死ぬのは、嫌だ。

まだ何もしていない。

嫌だ。

嫌だ嫌だと子供のように駄々をこね続けていると、ふっと目の前が暗くなった。

そして、自分ではない誰かが囁く。

ごめんなさい。

なぜ、謝らなくちゃならない。

私が問うが、それでも囁く声はごめんなさいと繰り返した。

ごめんなさい。

どうして、そんな風に謝るの。

そんな、身を裂くような、悲しい声で。

思い出のない女

私が気がついた時には、もうあの人たちは居て、優しい彼女も居て、私は私だった。

「どうだ。起きられるか？」

今ならそう問われたのだと分かるけれど、その頃はそんな簡単な問いかけも理解できなかったから、見知らぬ男が自分の手を差し出したので、思わず手を引いた。

そうして、自分の腕に鈍い痛みが走ったことに気付いて、自分の腕に包帯が巻かれていることを知った。

どうやら、怪我をしているらしい。

それを知ったと知ると、目の前の知らない男の方が痛そうに眉をひそめた。

それがあまりにも可哀想になったので、私は彼の頬を思わず撫でた。

突飛な私の行動に、彼は少し驚きはしたものの、私に苦笑してそのままにさせてくれた。

彼が、この国の国王だと知ったのは、それからだいぶ後になってからだった。

アウトロッソ・レ・ゲイネスラインという難しい名前の彼は、少し無愛想な、けれど優しい人だ。外見は、燃えるような赤い髪に鋭い黄土色の瞳で、いつも怒っているような整った顔は人を寄せ付けない。

でも、忙しい仕事の合間に、私に一生懸命、言葉を教えてくれる心の温かい人だ。

彼は私に色々なことを教えてくれた。

言葉や文字に加えて、この国が、西国ということ。行儀作法に生活に必要な程度の地理や歴史。そして、私が東国との戦場でたった一人取り残されたということも。

今、この国は東国との戦争をしているという。

東国は自国の兵士の代わりに平民である女性たちを使って、呪いの戦女神を作りだして、すでに何万人という西国の人たちを殺しているという。

ひどいことだ。

「どうして、戦争をするの？」

「東国が、我が国の民を殺したからだ」

言葉をたどたどしくだが解せるようになって、私が疑問を口にする、アウトロッソは王様の顔になって顔をしかめた。

「でも、その何倍もの人たちが死んじやっているんでしょう？」

私がそういうと、アウトロッソは初めて知ったというような顔で私を見つめてきた。

「東国の人も、西国の人も死ぬのは嫌だよ。どうして戦争をするの？」

「―――そうだな。……そうだった」

そう言って、アウトロッソは私の頭を撫でてくれた。

子供扱いは嫌いだったけれど、この大きな手は好きだ。

「ネロ、お前の言う通りだ」

私をネロという、その声も。

私は、自分が何者であるのか知らない。今まで何をしてきたのか、どうして戦場なんか居たのかも知らない。

そんな私に、ネロと名前をつけてくれたのはアウトロッソだ。そして、この城の人たちも、優しい人たちばかりだ。

「ネロさま。今日の夜会に間に合いませんわよ」

用意のために部屋に戻ったアウトロッソと別れて、私もリーエに手伝ってもらってドレスを着ている。

私の怪我が治ってから、アウトロッソとリーエは私に夜会へと出したがる。

最初のうちは、怪我と言葉が分からないことを理由に逃げ回っていたのに、言葉も分かるようになってきたこの頃では逃げることは出来なくなっていた。

黒髪の綺麗な女官長のリーエは、アウトロッソの乳母で、年齢不詳の美人だ。彼女は私が怪我で熱を出したときから優しく看病してくれていて、今も私の面倒を見てくれている。

だから、お母さんみたいでなかなか逆らえない。

「大丈夫。あなたは綺麗よ。だから今夜も行っちゃい」

そう囁く言葉は、西国の言葉じゃなくて彼女の故郷の言葉だ。

どうやら私はリーエと同じ故郷らしい。西国の言葉が話せない時も、彼女の言葉は分かったから。

リーエに美しく貴婦人に仕立て上げられたところで、ドアがノッ

クされた。リーエが応対するのを横目に、いつものように鏡とにらめっこしていると、

「やあ、今日も夜の妖精に会えて嬉しいよ」

気障なセリフが後ろから聞こえてきて振り返る。

私と目が合うと、金髪の奇麗な男がこちらを見て微笑んだ。

上品なフロックコートの彼はイーエロ・ジ・ゲイネスライン。アウトロッソの腹違いの弟で、今は国庫を管理する財務を統括している文官のホープだ。

武で有名な兄と政治に長けた弟。この二つの両輪があるから、この西国は安泰だといわれている。

「今日も美しいね。ネロ。夜の帳も落ちない今から、攫っていきたくなるよ」

彼は、口下手な兄と違って冗談が上手い。

だから私も笑って答える。

「まだ夕方だよ。それに攫うなら妖精の方が人を攫うんだよ」

私の軽口に、イーエロは満足したようだ。

にっこりと笑って冗談をいう。

「なら、私を攫っていくかい？」

「やだよ。お城の貴族のお嬢様に怒られちゃう」

二人で笑い合ったところで、リーエが再び客を招いた。

彼は、淡い色合いの弟と違い、まるでこちらの方が夜のような深

い色合いのフロックコートをまとっていた。

「アウトロッソ」

「よく似合っている」

無愛想な顔が私を見て少しだけ綻ぶ。それが嬉しかった。

私は差しだされたアウトロッソの腕に手を置いて、彼と夜会へと向かう。

だから、私は知らなかった。

その後ろ姿を、イーエロが焼けつくような、焦がれるような顔で見ていることにも、そのイーエロをリーエが嫉妬と悲しみで満ちた顔で見つめていたことにも。

何も知らない私は、ただ、彩られた自分の世界が珍しく、楽しかった。

「ああ、これは、今日も一段と美しい」

夜会へついて、アウトロッソが夜会の始まりを宣言してから、私は彼に連れられて白髪混じりの口鬚のおじさまへと会いにいった。

「ごきげんよう。おじさま。今日は足の具合はいいの？」

「ええ、ご心配してくださりありがとうございます。今日はあなたの晴れ姿を見るために老体を引きずってきた甲斐がありましたよ」

この口鬚のおじさまは、アウトロッソの伯父様で、私を孫のように可愛がってくれている。私が城に慣れない頃には、お菓子を持っ

てよく遊びにきてくれていた。けれど、今は少し足を悪くされていて、馬車に乗るのも、最新型の車に乗るのも辛いようだ。アウトロツソが淋しそうに言っていた。

アウトロツソとおじさまが、ちょっと難しい話をしている間、私は隣でジュースを飲んでいるのが常で、一段落つくと、

「すまなかったね。さあ、ネロ。アウトロツソはお返ししますよ」

そんな冗談に手を取られて、私はアウトロツソと夜会のメインであるダンスを踊る。

ダンスもアウトロツソに習った。

くるくると踊るダンスが、私は好きだ。

そして、そんな私を優しく受け止めてくれる彼も。

キラキラしたシャンデリアの下で、まるでお姫様のように踊ることも楽しかったけれど、何よりも、アウトロツソが優しく微笑んでくれる。

私は、そのことが何より嬉しかった。

私はアウトロツソが幸せであれば、何だって良かったし、まさか、彼が私を妻にしようとしていることなど、思いもよらなかった。

ただ、そばに居てくれるだけで、良かったから。

けれど、しばらくして、アウトロツソは忙しくなった。

東国との戦況が芳しくないという。

そう教えてくれたイーエロも、少し疲れて見えた。

夜会の数も減った。戦争中だから当然だろうけれど、たまに見るアウトロツソの笑顔が少なくなってしまったことに、私も少し疲れていた。

だから、久しぶりの夜会だったけれど、アウトロツソは出席でき

ないことにも、リーエが珍しくついてくることにも気にはならなかった。いや、リーエが夜会に出ないことを不思議に思っていたぐらいだったから、彼女が次の夜会に参加すると言ったときには喜びこそすれ、疑いなどしなかった。

私は、何も知らなかった。

夜会に私のお伴としてついてきたリーエは奇麗だった。

きっと誰よりも奇麗だった。

そんな彼女が、会場の隅で私に小さなナイフを持たせたことで、今まであった違和感の答えが一息に分かったときには、すでに何もかもが遅かった。

彼女は私の背中にナイフを突き付けながら、私にもナイフを無理矢理持たせて、足の悪い伯父さまの前まで連れてくると、ナイフを伯父さまに向けて私を突き飛ばした。

倒れる伯父さまに、私は叫ぶしかなかった。

「逃げて！」

床に倒れた伯父さまに怪我は無かった。けれど、次の瞬間、リーエが叫んだ。

「誰か！ この女を捕まえて！ この女が、公爵さまを……！」

その場に居た誰もが、私を疑心の目で注目した。当然だった。

リーエは信頼されている女官長で、私は身分も持たない記憶喪失の女。

助けて、という言葉はその場で飲みこんだ。

誰も、助けてくれないことが分かったからだ。

遠くに居たイーエロと目が合ったけれど、彼は私から目を逸らせた。

まるで、見たくないものを見るように。

警邏中の騎士が床に座り込んだままの私を囲もうとする前に、リ
ーエが私の傍らで少し立ち止まった。

「あなたなんか、誰も好きじゃなかったのよ」

皆が優しいと、思っていた。

けれど、それは隣にアウトロッソが居たからだ。

そのアウトロッソが居ない今、私は何も持たないただの女だった。

茫然とする私に騎士が縄をかけてそのまま牢へと連れ立って行く。

その間も私は、ただ願っていた。

アウトロッソ。

このまま私が死ぬことになる前に、あなたに会いたい。

あなただけだった。

私を、ただ見つめてくれていたのは。

だから、私もあなたを、いつのまにか好きになっていた。

どうか、お願い。

神様、お願い。

たった一目でいいの。

彼に会わせて。

そして、お別れを。

ごめんなさい。

あなたは、あの城で生きるには優しすぎる。

そして、私は誰より孤独なあなたをまた一人にする。
ごめんなさい。

私はもうそばにはいられない。

ごめんなさい。

砂漠とミトン

そう、あれがネロだ。

私がひと月、あの城でネロとして過ごした、その記憶か。

ごめんなさい。

叫ぶでも、恨むでもなく、ただひたすらに彼のことを案じていた一途で素直で、馬鹿な娘。騙されても、ただ、あの赤い髪の男のことを愛していた。

幸せに、過ごさせてもらっていたらしい。

あの男のお陰で、余計なことにも巻き込まれて散々な目覚めになったが、それでも、彼が確かな愛情を持って、ネロを大切にしてくれたから、今の私があるらしい。あの火傷で戦場に放っておかれたら、きっと私は死んでいたし、助けられたとしても奴隷として売られていたら、私は伯爵と出会う機会もなかっただろう。

その点においては、あの赤髪に感謝しなくもない。他のことはまったく許していないので、今でもその額に肉とか落書きしたいぐらいなんだが。いつか必ず書いてやるよ。

というか、黒幕はあの女だったのか。すごいもん飼ってんなーあの城。以降、化け物城と呼んでやろう。伯爵についてきて正解だったんだわ。確かにあのまま残っていたら、確実に殺されていただろう。

……てか伯爵、あの危険な女と一緒に旅に出すって、何考えてるんだ。何か、分かって出された気がしなくもない。これ、伯爵修行の一環ですか。もしかなくてもこの危機的状况を見事打開してみせよとかいう、獅子千尋の谷に子を蹴り落とす的なあれですか。

普通死ぬ。

というかもう死にかけですお父様。

どうしろっていうんですか。この今まさに這いずってる状況！

あの人私の運レベルの低さ（対人運に関して言えばマイナス）を鑑みてないと御見受けする！

あれだよ。ネロの記憶が蘇ってきたのって、死ぬ前に見るって
いう記憶の一部が思い出されたって感じだよ？

どうすんだよ私！ やばくない？ 今すっげやばくない！？

自分の体がゆらゆらと揺れているのは感じていた。

手も足も、感覚はまるで無かったが、それでも手足のある感触は
あった。

生きているのか。それとも死んでいるのか。

しかし、容赦のない熱が自分の身を焼いているのは分かったから、
何となく生きているような気はした。

その、こんな時なのに眠くなるような心地は、長くは続かなかった。

「いだっ！」

地面に放り出された。

砂はさらさらしているけど、ふかふかしているものではないので落
ちるとそこそこに痛い。

そして目や鼻に砂が入る。

ぺっぺっと砂を吐き出したら、私の隣から聞きたくもない轟音が
響いた。

ダン！

耳をつんざく音を咄嗟に追いかけてみると、革の鎧を着た女の子が銃のようなものを構えている。

その先には、

「ダイモン！」

轟音の先で、怖がりながらもこちらへ近づこうとするダイモンが居た。

私は、思わず女の子の銃にしがみついた。

「うあ！」

じゅっという音と共に、何かが焼ける嫌な匂いがする。それが自分の手からだとなると痛みを通りこして思い切り叫びたい気分になった。

「何をしている！」

女の子が血相を変えて私に叫ぶが、

「何してる、はこっちのセリフ！ どうして撃つの！」

私がまくしたてると、戸惑うように目を白黒させた。

「どうして、ってあなたがあの竜に襲われていると……」

「襲ってるのはどうみてもアンタよ！」

私が叫ぶと、女の子は今度こそ押し黙った。
私は、

「撃たないでよ！ 襲わないから！」

忠告して戸惑って怯えているダイモンに駆け寄った。

「大丈夫よ。ダイモン」

両腕を広げてみせる。

ダイモンは首をかしげて怯えていたが、やがて私の方へと近寄ってきた。

くんと私の匂いを嗅いで、やがて手の火傷に気付いたようだった。べろん、と初めて会った時のように、手を舐められた。

「……大丈夫。大丈夫だから」

舐められて、蘇ってきた痛覚が手の火傷の酷さを訴え始めたが、私は構わずダイモンに話しかけた。

「ねえ、ダイモン。もう大丈夫よ。ありがとう」

ダイモンは少し首をかしげて舐めるのをやめた。
首を撫でてやると、落ち着いたようだ。

「ねえ！」

振り返ると、銃を構えた女の子は不思議なものを見るように私を見ていた。

声をかけると驚いたように目を瞬かせる。

「この辺りにオアシスってある？　この子みたいな動物が居るような」

私の質問に、少し戸惑っていたようだが、女の子は少し考えて、

「ここから西に、大きなオアシスがある。そこに、竜たちも居たはずだ」

嘘をつくような女の子には見えなかった。

水を持っているかと聞くと、渡してくれた。

それをダイモンに飲ませて、私は言い聞かせるようにダイモンに言った。

「いい？　ここから先にお父さんやお母さんがいるオアシスがあるかもしれないんだって。大丈夫。あなたにはこの鼻があるんだもん。私より上手に見つけられるわ」

そう言うと、ダイモンがこちらを見つめてくるので、私は苦笑した。

「私は行けない。ダイモンだけで行って。その方が早いしね」

喉はからからで、足もがくがくだった。

それでも、涙は出るのだと知った。

ダイモンの首に抱きついて、私は嗚咽をごまかした。

「ありがとう。さあ、行って」

ダイモンから離れると、少しだけ怯えるように、心配するように

私を眺めていたけれど、やがて、ダイヤモンドは私が教えた通りに、砂漠を歩いて去っていった。

本当は、姿が見えなくなるまで見送りたかったが、置いてきぼりにしている女の子を何とかしないとならない。

「ねえ」

私が近付くと、彼女はわずかに後ずさった。なんだ、そんなにすごい格好になっているのか。

「見ての通り、遭難しかけなんだけど、助けてもらえない？」

辛うじて動く顔で口の端を上げると、彼女はほっとしたような顔で笑った。日に焼けていて、男のように鎧をまとい頭からマントを被っていたが、輝くような砂漠色の長い髪を細い三つ編みに編んだ姿は可憐で、奇麗な笑顔だった。

「もちろん」

ミトンのような分厚い手袋をこちらに差し出して、彼女は堂々とな乗った。

「私は、カルチェ・デ・ラーゴスタだ」

「ヨウコよ」

きっと、ダイヤモンドが彼女と巡り合わせてくれたのだろう。

ビークルという砂漠専用の車に乗せられて、ようやく一息ついた私はうたた寝しながら思った。

これで少しはマシな旅になる。

そう思ったのが早計だと知ったのは、このすぐ後のことだった。
神様、居るなら殴らせてくれ。今ならタコ殴りで勘弁してやる。

子供と城壁

その街は巨大で、武骨だった。

古びてはいるが分厚い一枚岩のような壁が何枚も城壁に並び、その先では、土壁ではなく、鉄で作られている幾つかの尖塔が砂漠の空を突きている。

まるで巨大な戦車のような街。

それが、ラーゴスタ領、ラーゴスタ城塞都市だった。

「……あれ、ラーゴスタ？」

聞いた覚えがあるような。

「申し遅れたな。私はこのラーゴスタ領城主だ」

隣でビークルのハンドルを握っていた女の子が、苦笑するように言った。

ええええええええ？

この子が？

私が口をぱくぱくさせるのが面白いのか、今度こそカルチェは笑った。

「じゃ、カルチェさま？」

「やめてくれ」

カルチェでいいと笑った女の子は、少しだけ大人びて見えた。けれど、その朗らかな会話も街に入るまでだった。

決して小さくはないビークルも余裕で走れるほど道路の整備された街は裕福に見えた。けれど、石造りの壁は薄汚れ、ガラスが打ち破られるなどした荒れた店や建物に人の気配はなく、かつてあっただろう活気を、やってきたばかりの私が見出すことはできなかった。私が半ば茫然を街の様子を見ると、隣でカルチェが重い溜息をついた。

普通の十代の女の子がつくような、溜息じゃない。

「――すまないな。たぶん、あなたに分けてあげられるのは、水と寝床ぐらいだ」

カルチェは本当に申し訳なさそうに、私に向かって無理矢理笑みを作った。

荒れたひと気のない街に若い女の子の城主、そして彼女の痛々しい笑顔。

助かったと思ったら、自分でトラブルの渦中に飛び込んだじゃないましかね私。

神様とあの女への罵倒を捧げているうちにカルチェがビークルで入っていったのは、街の奥にある、一際頑丈そうな城だった。

「おかえりなさい！」

ビークルのエンジンを切ったカルチェを出迎えたのは、小さな子供たちだった。

元氣そうにはしているが、どこか汚れて豊かだったはずの街の子供には見えない。そのくせ皆同じような首飾りをしているように見える。

「この人だあれ？」

「砂漠で困っていたんだ」

子供たちにまわりつかれたカルチェはそう説明すると、私に歩いてくるよう促した。

彼女についていく私を子供たちは不思議そうに見送ったが、ビークルを片付けるのは彼らの仕事なのか、小さな子供たちは車体の掃除を始めていた。

城は薄暗い。外は焼けるほどの陽光で溢れているが、城はその光を拒むような造りなので、カルチェと私が昇り進む螺旋階段にはランプがぼつぼつとあるだけで足元もよく見えなかった。時折すれ違う人たちも、みな一様に薄汚れてどこか疲れた顔をしている。

非常にまずいところに拾われたらしい。

私に出来ることはないだろうし、水だけもらって早々に立ち去ろう。

そうずるい打算を立てていた私を、カルチェは一室に招いてくれた。

今までの回廊と違って太陽の光が取り入れられたこの部屋は、少しだけ明るく見えた。

勉強机みたいな机の前に大きな応接セットがあって、どうやら執務室らしい。今も、決して狭くはないテーブルには書類が山積みになっていて、それを男が二人して囲んでいた。

木綿のシャツと頑丈そうなズボンとブーツを身に付けた中年の男と、まだ年若く見える青年だ。どちらもよく日に焼けた顔付きでよく似ている。親子なのかもしれない。彼らも、子供たちと同じような首飾りをしていた。

「……カルチェさま。そちらは？」

私を見とめてまず訝しげに口を開いたのは青年の方。深い緑の髪を肩より長めに伸ばしたなかなかの美青年だ。

「客人だ。砂漠の真ん中で遭難したらしい」

カルチェがこともなげに言うので、青年はますます眉をひそめた。ですよねー。怪しいですよねー。というか、こんな旅人風情が怪しく見える状況ってホントにまずくないか。

「こっちがアグリで、あっちがヴェルデという。私の補佐をしてくれている」

青年の方がアグリで、中年の方がヴェルデ。紹介されたからには自己紹介するべきか。

「ヨウコです。砂漠で行き倒れそうになったところを、彼女に拾われました」

私がそう言うと、彼らは少し意外そうな顔で私を見て、カルチェを見遣った。

「カルチェさま」

「ああ」

アグリの質問ともつかない呼びかけに肯いて、カルチェは私に向きなおった。

「あなたは、迷い人だな」

断言されて、言い逃れる必要もないので私が素直に頷くと、彼女は少し困ったような顔をした。

「正直、驚いているんだ。あなたのような迷い人は初めてだから」

「初めて？」

今度は私が不思議そうな顔をしたので、カルチェのあとをアグリ青年が引き継いだ。

「この国に落とされた迷い人は、あなたのように流暢な西国語をまづ話せない者がほとんどです。それに、あなたはどうかやら奴隷ではないようですし」

アグリ青年によると、すべての奴隷には首に首輪のような焼き印を入れられるらしい。言われてみれば、青年にも中年にも、そしてあの子供たちにさえ、そんな紋様があったかもしれない。首飾りに見えていたものがそれらしい。言われてみれば、というほどの細いものなので、分かる者にしか分からないものなのかもしれない。

例外はありますが、とアグリ青年がつけ足したので、ああ、と暗黙のうちにスルーすればいいのに疲れているせいかわず口が滑った。

「性奴隷とか」

「せ…っ！」

私より、隣のカルチェの方が真っ赤になってしまったではないですか！　しくじった。分かったから、睨むなよアグリ青年。

こう見えて二十四歳の耳年増なので。

二十四だと言うと、三人はあんぐりと口を開けて驚いてくれた。

この世界は私に失礼だ。

カルチェはまだ十八だという。若い領主だ。この世界ではよくあることなのだろうか。

優しい中年のヴェルデは意外と若造りな五十才。そして、

「私は、こう見えて八十三です」

アグリが少し自嘲気味に笑った。

どう見ても二十代前半の彼は、迷い人だという。

カルチェの隣に並ぶとお似合いなほどだというのに。

ここに落されたときの記憶があまりなく、はっきりとは分からないが何となくラテン系言語の癖がある西国の言葉を覚えるのにあまり困らなかったというから、ヨーロッパ系のご出身のようだ。

アグリ青年、じゃないアグリさんの顔がこの人たちよりも彫りが深いように見えるのは気のせいじゃないらしい。

どうして髪が緑なのかというと、以前のご主人さまに染められて元に戻らないらしい。元々は私と同じ黒だったとか。

ヴェルデさんは父が迷い人で、年の取り方がゆっくりなのだという。その父というのが、アグリさん。まじか。見た目自分より若いおじいちゃんってどんなだよ。

そういえば、

「ここの城には、迷い人が多いんですね」

そうだ。首の焼き印が迷い人の目印だというのなら、私がここで目にした人のほとんどが迷い人の関係者だ。それも、奴隷として扱われていない。

カルチェは私の言葉に少し口ごもった。
言っちゃまずいことだったのか。

「立ち入ったこと聞いたみたいだね。ごめんね」

「……いや、いいんだ」

カルチェは少しだけ笑って、私に応接セットのソファを勧めてくれた。

アグリとヴェルデが場所を開けてくれてカルチェと向かい座ると、彼女の隣のアグリの方が、心配するようにカルチェに視線を送っている。

「ラーゴスタ領というのは」

アグリの視線を振りきるように、カルチェは私に語り始めた。

もしかしたら、誰か部外者に話を聞いて欲しかったのかもしれない。そういう、静かに堰を切ったような、遠い目をしていた。

ラーゴスタという領地は砂漠の大きなオアシスを拠点に発展した領地だ。領地と言っても耕せるような土地はなく、人が住む土地はオアシスの上にある街の中。ちょうど北と西を繋ぐ中継点の土地柄にあって、この土地の人は貿易に力を入れた。商人たちを安い店賃で誘い、関税を無くすなどしたお陰でこの街は、それこそ世界中か

らの品々が交換される一大貿易拠点となった。どうやら、ここは伯爵領とも縁があるらしく、代々の領主たちがたびたび訪れていたようだ。このラーゴスタと西国の中央を結ぶ拠点が伯爵領だから、この絆は強いはずだ。

けれど、今はゴーストタウンさながらの荒れ模様。

私とも関係のない話ではなくなってきたので、背筋を正してカルチェの話を促すが、彼女は今までの淡々とした話しぶりを崩して悔しげに俯いてしまった。

話を引き継いだのは、アグリだった。

今から百年ほど前に、西国全土で迷い人を奴隷とする因習が広まった。それは一時迫害にまで悪化して、数えきれない迷い人とその子孫たちが殺された。

今、八十三という年齢が本当なら、アグリはその暗黒時代の生き証人ということになる。

だが、彼は表情の読めない静かな顔で私に話して聞かせてくれた。その迷い人の迫害に、真っ先に激怒したのはメフィステニス領領主だった。王に讒言すると息巻いていたが、時すでに遅く、苦肉の策として自領で迷い人をかくまうことにした。そして、同じく迷い人と共存していたはずのこのラーゴスタにも同じような政策をとるよう依頼してきた。だが、当時のラーゴスタ領主はそれを断った。すでに彼は領主として西国に迷い人政策への参加を承認して、それをすでに実行していた。

「愚かなことだ」

カルチェが呻くように言った。

それから、ラーゴスタと伯爵領は疎遠になったらしい。ほとんどメフィステニスの方から絶縁したような状況だったようだ。

伯爵領との付き合いはなくとも、他の領地との兼ね合いは良く、ラーゴスタは変わらず平和な日々を送っていたが、三年前、それが

一変する。

「隣領の領主が、私には正当な継承権がないと言いだしたんだ」

アグリから再び引き継いで、カルチェは震えるような声で言った。

「私の祖母は、迷い人だ。――祖父は好色な人で、奴隷女中として働いていた祖母に目をつけ生まれ、子供だけを取り上げた。それが私の父。他に男子が無かった祖父は父を跡取りとして育てて、そして生まれたのが私だ」

カルチェは自分の膝にわだかまるマントをぎゅっと握って顔をしかめる。

「父の子供は私たった一人だ。母は生まれてすぐ死に、父が病死した三年前に私は願い出て領主となった」

そして、中央へ願い出てすぐに、隣の領主が継承権を主張しだした。

「隣領の、バクスランドは父の腹違いの姉が嫁いでいる。だからその息子である現領主にも継承権があると、言いだした」

普通、直系の子孫が領主を受け継ぐこととなる。だが、

「バクスランドは、私に迷い人の血が混じっていることを理由に、領地の権利を渡せと。領主でありたいなら、税収の半分を寄越せと言ってきた」

突然横面を殴るような暴拳に出たバクスランドだったが、ラーゴ

スタが中央に訴えても、何故か中央政府はまったく動かない。むしろバクスランドの横暴を見て見ぬふりをしているようだった。その理由を探してみると、東国との戦争にバクスランドが莫大な献金と奴隷の派遣を行っており、その見返りとしてラーゴスタを手中におさめることを黙認させていた。

中央政府から見放されたラーゴスタは抗戦を決めたが、バクスランドは同じ砂漠の領地ながら、高い税収で軍備を整えていて、そのボロボロになった自領を補うべくかなり前からラーゴスタの豊かな資源と物量を狙っていたらしい。

数百年以上、戦らしい戦も経験していないラーゴスタが、中央政府の目が届かないことをいいことに、迷い人の村や街での略奪戦争を繰り返していたバクスランドに勝つことはできない。

ラーゴスタの人々は次第に逃げだすようになり、残った者はどこへも行くあてのない迷い人の奴隷たちだけだった。

「今、この街に残っているのは私たちのような奴隷が百二十人程度と先代から仕えていた数十人の古参の兵士だけです」

アグリの静かな応えが胸を抉る。

ほんとにまっずい所に来ちゃったらしい。

しかも何？ この状況？

口にすれば人間性疑われるんでしょうけど、あえて言おう。

すげーめんどくさいところに来ちゃった！

早口と部外者

「――疲れただろう、ヨウコ。手の傷もちゃんと手当した方がいいから、今葉を持ってくる。それに、今日ぐらいはここでゆつくり休んでいってくれ」

カルチェは静まり返った部屋に居られないとでもいうように早口で言うと、執務室を後にしていった。

残していくなよ！ めっちゃ部外者の私を！

まあ、まだ若いし仕方ないんだろうけどさー。

私は心持ちぐったりとなってソファにもたれかかった。

「……どうなさったんですか。その怪我は」

どう見てもおじいちゃんに見えないアグリが目敏く私の手の怪我を見つけたらしい。

今は、カルチェが綺麗な布をくれたので、残っていた葉草と一緒に巻いている。まだマシだ。けれど、怪我の理由を言って良いものか。お宅のお姫様が問答無用で銃ぶっぱなすもんでそれ押しとどめてやったとか。

「――この辺りでは、騎竜は珍しい生き物なんですか？」

私の問いに少し意外そうな顔をしたけれど、応えてくれたのはヴェルデさんだった。……どうも見た目若造のアグリにさん付け出来ないな。

「竜のことでしたら、珍しくはないですよ。オアシスに住む動物で、時折この城塞の周りにも出るのです。たまたに銃で追い払います」

なんでも、こちらでも騎竜のことをあまり知らないらしい。大きな動物だし、口も大きいから肉食だと思われるようだが。

「竜は、草食ですよ」

「え！」

驚かれた。西国で騎竜が生息しているのはこの砂漠のオアシスぐらいらしく、たくさん住んでる東国とは国交も今は無いから、ほとんど未知の生物だったらしい。

「あの大きな口見たら肉食っぽいですけどね。東国じゃ飼葉あげてます」

「……もしかして、ヨウコさんは東国へ行ったことが？」

そこの王様や宰相さんに色々お世話になってました、とも言えず、そうですとだけ応えておいた。嘘じゃない。

「東国に居たんですけど、西国との戦争に巻き込まれてしまって。親切な人に助けてもらったんですけど、事情があって旅をしているんです」

固有名詞や今までの良くはない思い出を抜けば結構普通な話に仕上がった。

自分でも満点に近い話を、アグリもヴェルデさんも興味深そうに聞いてくれた。良かった。ヴェルデさんは気の毒そうに頷いた。

「でしたら、この国に来て驚いたでしょう」

「……そうですね。東国では、迷い人が少なくとも奴隷ではありませんでしたから」

珍しい人種ではあるようだが、それだけだ。社長の私への扱いは、奴隷のそれとはまた違う。全然許してないけどね。

「——このラーゴスタ領でも、本当は奴隷ではなかったのですよ」

アグリがぼつりと呟くように言った。

「当時は、本当に迷い人というだけで殺されることがありました」

迷い人は年をとらない。だが、それだけのことだ。密告などなければわからなかっただろう。

「私は、当時のラーゴスタ侯爵に保護され、教育を受けたのですよ」

ヴェルデさんも初めて聞く話だったらしい。私と二人して口を閉じた。

その様子を見て、少しだけ笑ってから、アグリは秘密を打ち明けるように呟きを続けた。

「私と同じように保護された迷い人は多い。ですから、今、この城に残っている者の大半が侯爵に命を救われた者たちです」

思い出すようにアグリは瞳を伏せる。

「好色と呼ばれようと、侯爵は献心的に奴隷とされた人々を集めた。メフィステニス伯爵にも言わないまま。本当なら、協力することが望ましい形だったのでしょうが、その協力関係が中央に知れれば、間違いなく私たちは殺されていたでしょう」

もう当時を知る者は少ない。

アグリと同じ年代の迷い人達は大半がすでに亡くなったという。当然だ。迷い人は、年を取らないだけで不死ではないのだから。

「——どうして、その話を今、私に？」

「どうしてでしょうね」

アグリは真意の见えない顔で私に謎かけのように笑った。

「あなたは不思議な人です。こんな時にこんな場所にふらりと現れて。——でも、ありがとうございます」

カルチェが笑った顔を久しぶりに見た、とアグリは優しく微笑んだ。

そして、その顔が悲しげに変わった。

「明日にはここを発ってください。あなただけなら逃がすことができます」

今日、バクスランドの最後通牒が送られてきた。

三日後には、最後の攻撃が始まるらしい。

「——どうして、皆で逃げようと思わないんですか？」

きっと、私はこの上もなく不愉快な顔だったと思う。
けれど、アグリは落ち着いた顔で笑みさえ浮かべて応えた。

「ラーゴスタがなければ、ラーゴスタではない。カルチェさまのご
決断です」

私たちはそれに従うだけです。

そう言った瞳が緩やかに絶望していて、私は見たくなくて目を閉じた。

味噌と塩

まあ、正直言って、私に何が出来るとも思えない。
だからってね。

こんなひもじい思いをするのはゴメンなんですよ。

少ないけれど、と手当てをしてくれたカルチェが出してくれたご飯は、本当に少なかった。

豆を小麦にして作ったパンに、豆のスープが少量。味だって薄い塩味で、正直食べられたものじゃない。空腹が最高のスパイスとか嘘だ。これならオアシスで見つけた渋い果物の方がマシだ。

兵隊さんが食べる食事はこういう不味い料理だと聞いたことがあるけど、私は兵士じゃない。

こんなもの食えるかああああ！！！！

と、思いながら全部平らげて、カルチェにこの城の食糧貯蔵庫を見せてもらうことにした。

だってさー、どうにか出来るかもしれないじゃない！ 飯が不味けりゃ頭の回転も悪くなるって！

「ひどいぞ？」

カルチェに忠告されて覗いた地下の貯蔵庫は、広がった。
そこにびっしりと並んだ麻袋。

「なんだ、まだたくさんあるじゃない」

「この半分がすでに食べられない」

なんですと。

何でも、塩漬けにして置いておいたら腐って妙なものに変わってしまったとかで、食べられないからそのままなのだという。

でもさあ、と思いながら麻袋の豆を見て、ちよつと目が点になった。

これって、大豆じゃないか。

ちよつと失礼してかじってみると、何だか食べたことある豆の感触。

「もしかして……!」

地下の貯蔵庫はいい感じに涼しくて、砂漠だからか湿度もあまり高くない。じめじめしていないけどお肌には良いぐらいのいい感じだ。

私は慌てて腐っているという麻袋に飛びつく。

「これ…っ!」

この芳しい香り。忘れていた郷愁が鼻について涙が出てきた。

「味噌だ!」

そう。大豆に塩に適度のカビか何かを発酵させて作る、日本のソウルフード!

震える指ですくって、一口食べてみる。

やっぱり豆の種類が違うのか、味が違う気はするが、この何だか

物足りないんだか物足りるんだか、満ち足りる味は、まさしく味噌！
こんなところでお会いできるとは！

「これ食べられるよ！ カルチェ！」

私の鬼気迫る様子にちよつと引いていたカルチェだったけれど、
私の言葉に今度は驚いた。

「これが？ 本当に？」

「本当！」

味噌が食べられるなら、他にもここには食材が眠っているのかもしれない。

それから私は残っているという備蓄を片っ端から調べることにした。

ずかずか備蓄を覗きまわる私に次第に人がまとわりつき始めて、

「これはー？」

小さな子供たちも参加しての大食材搜索になっていた。

「おおこれは！」

塩や豆など色々なものが厨房に集められる中で、ひととき小さな男の子が持ってきた壺の中身に私が仰天した。

だって、探しても見つからないと思ってた。

鰹節！

何でも、魚は貴重な交易品で、こうして燻製にしておくらしいん

だけど、固くなり過ぎて食べられないと倉庫の隅に放っておかれていたらしい。

これ削ってダシがとれる。

続いて驚いたのは、

「どうしてこれ食べないの！」

「……これは、糊だぞ」

ちよっと細長いけれどどうみたってお米が糊としてだけで使われていたことだ。

なんて贅沢な！

それから、味噌の袋の下に黒い液体がたまっていて、舐めてみると醤油だった。

なんてことだ。ここは日本か。

私はありったけのその食材たち（中には文具扱いのものもあったが）を集めて試食会をすることにした。

決して料理上手ではないし、かまどなんか扱ったこともなかったが、カルチェと他の女の子たち（普段は彼女たちがご飯の用意をしていたらしい）と一緒ににおにぎりと味噌汁というメニューを作り上げた。

さあ、召し上がれ異世界の人たち！　これがジャパニーズソウルフードだ！

しかし、最初に涙したのは私だった。味噌汁は具が豆のパンだけだったし、おにぎりは何となくベタベタしていたけど、これはい

つか私が食べ損ねたおにぎりの味！
ああ、本気で生きてて良かった！

「……旨い」

カルチェが私の隣でぽつりと言った。

それを皮切りに、さざ波のように周りで食べていた人たちが歓声を上げた。

「旨い！　こんな味初めてだ！」

「お前天才だな！」

天才なのは我が祖先さまたちです。ありがとうございます。あなたが。あなたたちが居てくれたから、今こうして私はごちそうにありつけている！

幸いなことに誰もお腹を壊すことなく一杯にして、私が考案した豆茶でみんなひと心地ついた。

味噌汁は幸せの味だ。

確かにこれを作ってくれるお嫁さんが欲しくなるのが分かる。
私もこれ作れるお嫁さんが欲しい。

……おかしいな。私、お嫁さん志望だったはずなんだけど。

「ありがとう。ヨウコ」

お腹いっぱい食べたのは、久しぶりだったんだろう。

血色だけではなく顔を嬉しそうに赤くしたカルチェが笑った。
可愛い笑顔だ。

女の子はこうでなくては。

細かい味噌なんかの作り方を教えてほしいと女の子と、むさい兵士たち（彼らは食事が唯一の楽しみなんだそう）にせがまれたので、私は豆茶を片手に自分が覚えている限りのことを教えた。そして、さらに豆を使った豆腐のことや、外人さんには不得手かもしれないが納豆のことも。ここはオアシスのド真ん中で水だけは新鮮に使えるから、もしかしたら出来るかもしれないと思ったのだ。

みんな楽しそうに聞いてくれて、話は夜まで続いた。

食べ物偉大だ。

良い子と魔法使い

夜になると、やがて子供たちは寢床に引き上げていき、あとには私を含む大人と兵士たちだけになった。

兵士たちは交代で見張りに行くというので詰所に戻り、ヴェルデとアグリは（いつの間にか呼び捨てになってしまった）子供たちの様子を見てから仕事に戻るといった。彼らは今、この領地の後始末をどうつけるかを書面で確認しているという。

そうしてあとには、カルチェと私だけが残された。

今までぎゅうぎゅうに人が立ち代わり入れ替わりしていた部屋が急に広くなって、ランプが私と彼女の影を長く伸ばす。

砂漠の夜は冷えるので、珍しいガラス戸から見えるのは澄んだ星空だった。

「―――ありがとう、ヨウコ」

温かい豆茶の入った湯呑を手でくるんでいた私に、カルチェが優しく笑って言った。

私は、その消え入りそうな顔が気に入らなくて、視線をそらせた。そんな私の様子に気付いていないカルチェは、私に静かに語りかけてくる。

「ヨウコのお陰だ。この城がこんなにも明るくなったのは。もしかして、魔法使いなのか？」

「……良い子の願いを一つだけ叶えに来たって言ったら、信じる？」

カルチェは、きっと冗談で言った。

でも、私の予想外に真剣な声に、彼女は驚いたようだった。

私はカルチェを見つめた。

彼女の髪と同じ砂漠色の目がゆらゆらと揺れた。

「――本当に？」

すぎるような声が聞こえた。

「私なんかどうなってもいい。子供たちの願いを叶えてくれるか」

カルチェは、良い子だ。

明らかに怪しい私に手当てをしてくれて、このラーゴスタに連れてきてくれた。

けれど、

「――こうなったのは、自分のせいだと思っているのね」

カルチェは自分を責めている。

私の言葉に、今まで戸惑っていた彼女の顔が歪んだ。

「だって」

カルチェは涙を呑みこむように、きつく目を閉じてから、吐きだす。

「私のせいだろう」

「カルチェのおばあちゃんが、迷い人だったから？」

それは、

「私たち、迷い人を侮蔑してるの？」

はっとカルチェが顔を上げた。

きつと、彼女は恨んだに違いない。

迷い人さえ居なければ、年頃の彼女がこんな目に遭う必要もなかったのだから。

だが、彼女はそれが罪悪だと思っている。

「迷い人が居なくなればいいと思いつながら、ここの人たちを巻き添えにしようとしているの？」

カルチェはとても良い子だ。

「……違う！」

「どう違うの。迷い人を殺すのは、迷い人を虐殺しているバクスランドと同じでしょ？」

だから、私のささいな言葉にも傷つく。

それじゃあ、駄目だ。

「違う、違う！ 私は、みんなを……！」

カルチェは泣いている。

でも、彼女はそれが恥だと思っているように、目をきつく閉じていた。

それでも駄目だ。

「カルチェの心が傷ついたからって、他の人を巻きこんで死ぬのは、どう考えても迷惑なだけでしょ」

「違う！」

一際大きく叫んだカルチェは、私を睨みつけた。

「どう違うの？」

「私は……」

彼女をじっと見た。

答えを彼女は持っている。
躊躇うな。

「私は、みんなとずっと一緒に生きたい」

わっと、子供のような泣き声が部屋に響いた。

わんわんと泣くカルチェの腕をとって抱きしめてやると、見た目よりも華奢で小さいことが分かった。

いくら城主だとしても、まだ十八歳の女の子だ。

きっと、誰でもいいから聞いて欲しかったのだ。

ずっと、ずっと誰かに言いたかったのだろう。

たまたまそばに居たのが、部外者の私だったただけだ。

けれど、彼女は運がいい。

話を聞いたのがお人好しの私だったのだから。

策略だったら大したものだが、素直で私以上にお人好しのこのお姫様にそんな女狐みたいな芸当ができると思えない。

カルチェは思い切り泣いて疲れたあと、私の膝で安心したように眠ってしまった。

妹が居ればこんな感じなのかな。

可愛くない弟が居たから、この子みたいな妹が居れば楽しかっただろうな。

「――ヨウコさま」

呼びかけに顔を上げると、アグリが口元で指を立てて静かにと苦笑した。

「……眠ってしまったわなんですネ」

そういつてカルチェを見下ろすアグリ of 微笑みは甘い。

孫を見るといふよりも、もっと大事なものを見つめるような。

「それより、どうして私が様付け？」

「カルチェさまの大事なおお客様ですから」

アグリは私の質問をかわして、私の膝からカルチェの体を軽々と抱きあげる。

八十三歳とはいえ、体は若いままだから姫抱っこなんてできるのだろうが、

「――アグリってさ、本当に八十三？」

「本当ですよ」

訝る私に向かってアグリは少し笑って、溜息をついた。

「……でも、年齢の実感が湧かないということは、ありますよ」

年を取らないまま老いていく。それがどういことなのか、今の私には分からない。

「若いまま、時代を横滑りしちゃった感じ？」

「そうですね……。時代はちゃんと渡っているのに、年相応にならないというのか。いつまでも、若かった頃の感覚が抜けないのですよ」

カルチェがアグリの腕の中で身じろぎしたので、一度会話をやめた。

それをアグリがまた優しく見守っているので、おじいちゃんと孫というよりも、恋人に甘えられて鼻の下伸ばしている彼氏の図だ。馬に蹴られたくないから言わないけど。

「ねえ、アグリ」

私の問いかけに顔を上げた彼に、私はニヤリと笑ってやった。

「もしも、まだ長生きできるようなことになったら、若い頃に戻ってもいいんじゃないかな」

アグリは少しだけ驚いたように目を見開いたが、探るような眼で私を見下ろしてきた。

「――何か、あるのですか」

死ぬのは嫌だ。

誰であっても、この絶望した人たちであっても。

「カルチェは皆で生きたいって言った。だから、私はそれを叶えてあげようと思う」

それが自己満足であっても、私は嫌だ。

「ちょっと伝手があるから。どこかに電話ない？」

良い子には、魔法使いが一つだけ願いを叶えてくれるのだから。

微笑みと悪寒

翌日、皆で再びおにぎりと味噌汁を頬張ったあと、電話というものは無いが、と紹介されたのは、

「……本当に、何処にでもあるんだなー……」

ギルドでした。

他の建物を見る影もないというのに、小まめに修繕しているのかこの西洋式の建物だけは豊かだった時代に取り残されたように建っていた。

奇麗に窓拭きされたガラス戸を押し開けて入ると、やっぱり銀行式の窓口がずらっと並んでいる。さすがに受付嬢の人数は少なかったが、それでも明るい挨拶が私を出迎えた。

教育って、すごいんだな。

妙に感心しながら受付のお姉さんに用件を告げると「少々お待ち下さい」と言われて、受付のソファを勧められた。

このソファも年代物だが奇麗なものだ。

この状況だから客も来ないだろうに。

滑らかな革張りのソファを何の気なしに撫でていた私の前で、カツと小さく靴音が止まった。

見上げると、ひよろ長いフロックコート姿の男が営業スマイルでお辞儀した。透けるほど淡い金色の髪をオールバックにした小奇麗な男だ。年はよく分からない。若くも見えるし、私よりもだいぶ上にも見えた。

「おまたせいたしました。お客様。わたくしはこのラーゴスタ領ギルド支部所長のミカエリ・ジョーンズと申します。本日は、オレキオをお使いになりたいのですが」

「はい。私はヨウコと言います。メフィステニス領に連絡したいんです」

そう言うと、彼は少し驚いた顔をした。

「失礼ですが、昨日この領にいらっしゃったカルチェ様のお客様ですか？」

「ええ、まあ……」

ぶしつけな質問をされて渋々頷いた私に、ミカエリさんは「なるほど、なるほど」と呟きながら自分の顎をさすり、「失礼いたしました」と慇懃無礼に言った。

何だろう。この人。物凄く胡散臭い。

私の胡乱な視線を感じているだろうが、そこはプロ。ミカエリ・ジョーンズは丁寧な私を促した。

「すぐにメフィステニス領にお繋ぎしましょう。こちらへ」

彼が私を通したのは、ギルドの奥にある一室で、いつか、俊藍が王城に連絡つけてくれた時と同じ暗室みたいな部屋で、真ん中に車両止めみたいな石柱が一本立っている。

その石柱の頭をミカエリ・ジョーンズが撫でると、ブツブツというチャンネルを合わせるような音が鳴って、やがて甲高い音と共に一人の女性が、スクリーンもないのに暗室の中に映し出された。

「こちらは、メフィステニス領支部ギルドです。どのようなご用件でしょうか」

向こうのギルドの受付嬢らしい。髪を奇麗に結いあげた美人は判を押したような営業スマイルで応対してくれた。

「どなたへ連絡いたしましょうか？」

このオレキオという機械のコントロールを担うミカエリ・ジョー
ンズも伺ってくれるので私は迷うことなく応えた。

「メフィステニス領領主、コロラル・ド・メフィステニス伯爵に
繋いでください。ヨウコと言えば分かります」

すると、今まで滑らかに応対していたはずの向こうの受付嬢がに
わかに動作を止めてしまった。駄目だったのだろうか。しかし、や
がて彼女は「失礼いたしました。少々お待ち下さい」と何かを操作
して、「すぐにお繋ぎいたします」と丁寧に言って、画面を変える
操作をしたらしい。

次に映し出されたのは、

「ガリアさん！」

輝かんばかりに美しい、女神のごとき金髪のメイドさんだった。

「ヨウコさま。御無事で何よりですわ」

にっこり。

美人の微笑みは万金に値するが、今日ばかりは私は顔を凍らせた。

「……やっぱり、私、わざと砂漠に置いてかれたんですか」

あの女が囁んでいるとも思えなかったが、やはりこの私の惨事は

意図的らしい。ガリアさんのにっこり顔でよく分かった。

「ヨウコさまのお元氣そうな顔を拝見できて嬉しゅうございます」

美人の笑顔に戦慄覚えたのはあとにも先にもガリアさんだけです。

「それより！ 伯爵は今居ますか！」

「はい」

私のちょっと切羽詰った様子を見てとったのか、ガリアさんは短く返事をして画面の枠から消えた。そうしてすぐに、今や懐かしくも憎らしい、伯爵の顔が現れた。

「やあ、無事だったようだね」

「お陰さまで死にかけました」

私の嫌味に入れ墨の紳士は珍しく小首を傾げた。

「その程度で死ぬはずがないだろう。君は私の娘だよ」

「の予定です。それより伯爵、お願いがあります」

口早な私の言葉に、伯爵は少し口を閉じて、

「それは、君の一つのお願いとして、かな？」

「はい」

迷わず頷いた。

伯爵は少しだけ片眼鏡の奥で目を細めたが「よし」と肯いた。

「聞こう。話してみなさい」

「今、私はラーゴスタに居ます。ここが危ないことは御存知ですよ
ね？」

疑問の形をとったが、確信があった。

伯爵は私が知らないことも確実に知っている。

そしてその予想通り、伯爵は事もなげに言った。

「バクスランドに攻め込まれてすでに風前のともしびの街だね。そこに辿りついていたのか」

「はい。ですから、この街を助けて下さい」

今まで淡々としていたはずの伯爵は、私の言葉に少しだけ目を丸くした。

「そんなことのために、君の願いを使ってしまうのかね」

そんなこと。

伯爵にとってはそんなことでしかないのかもしれない。

けれど、私にとっては大きなことだ。

「私はもうこの人たちの顔を知っています。同じご飯を食べて、同じように笑っている人たちを見捨てることなんて出来ません」

「そんな甘い考えでは、伯爵には到底なれないよ」

一刀両断。自分の甘い考えをばっさり切り捨てられて、私は逆に清々しい思いがした。

「構いません」

甘くても、私にはこの伯爵の願いという手段があつて、もしかしたら叶えてくれるかもしれないという希望がある。それを今使わなければ、私は後悔するだろう。きっと、使ったことにも後悔するだろうが、使わないよりマシだ。

その時、嘆くのは私一人だから。

「君が東国との戦場で拾われたとき、私の部隊もそこに居たと話したことがあつたね」

何の話をするのだろう。

伯爵は画面越しに私を見つめて、いつものように淡々と言った。

「東国での君の家族を殺したのは、私の部隊だ。これを知っても、君は私にラーゴスタを救ってくれと言えるかね」

伯爵の言葉は、いつだって明確で、正確で、分かりやすい。

そのことが、これほど憎いと思つたとは。

なぜ、今、その話をするのか。

確かに聞いていたはずだ。

伯爵の部隊を、あの戦場に貸し出していたと。

忘れたわけじゃなかったのに。

あまりにも幸せをもらって、霞んでいたのだろうか。

泣きたいのか。

怒りたいのか。

それすら分からなくて、私は唇を噛んだ。

アンジェさんは、私を生かしてくれた。

伯爵は、私に意味をくれた。

時間はない。

今この時も、バクスランドはこのラーゴスタを囲んでいるかもしれない。

約束をきちんと守る相手とも思えない。

私の感情なんて捨ててしまいたかった。

でも、私をいつも突き動かしているのは、感情だ。

きっと、アンジェさんも他の皆も、あのとき、もう助からなかった。

だから、彼女は私の胸にあの刻印がないことを泣くほど喜んだ。

あなただけ生きられる。

そう、背中を押された。

でもそれは、ただの理屈だ。

アンジェさん達はあの戦場で殺された。

私は顔を上げた。

「———お願いします。ラーゴスタを、カルチェ達を助けてください」

誰かを見殺しにするのは、もうたくさんだ。

伯爵を見つめると、入れ墨の顔が少しだけ満足そうに微笑んだ。

「バクスランドを追い払ってもらえばいいです。それから、カルチェが中央政府に訴えるのを手伝ってください」

王様に顔が利く伯爵なら、どうにかしてくれるだろう。

「私は」

俯かないようにこらえて、伯爵の無表情な顔を睨むだけで精一杯だ。

「私は、伯爵のことも、ガリアさんのことも、嫌いになんてなれません」

この世界で、初めて私を認めてくれた人たちだ。

「恨みます。憎むと思います。でも、嫌いにはなれない」

私の家族を取り上げた人達だとしても、もう、知らないふりはできない。

伯爵は私を静かに見つめていた。

でも、伯爵の方から珍しく視線をそらせて「そうか」とだけ言った。

「――私は伯爵にもガリアさんにも死んでほしくありません」

伯爵が、バクスランドと戦うことになるかもしれない。そんな危険なことを頼んでいるのに、どうしてこの人はこんなに平然としているんだろう。

私は、そのことにも泣きそうになっているのに。

けれど、伯爵は今度は呆れたように息を吐く。

「何を言っているんだね」

笑っているというのに片眼鏡の奥が、いつもとは違う色に見えた。

「荒事は、我々の一番得意とするところだよ」

何となく、悪寒が背中を伝った。

私は、頼む相手を間違えたのかもしれない。

借金とナンパ

これからは、必要な時にはメフィステニスの名前を名乗りなさい。

もう伯爵の中では、私は娘らしいです。

いやまあ、自慢するけどね。

名前使った方が手続きとか早いからって、どれだけ私を甘やかす気だあの人は。

伯爵との通信が終わると、私は何だか力が抜けて、長い溜息をついた。

「お疲れ様でした」

そういやこの人居たんだっけ。

うつすら照明がついただけの暗室の薄闇には慣れたけど、ミカエリ・ジョーンズの胡散臭さには慣れない。

「伯爵のご令嬢であらせられたとは、数々のご無礼お許し下さい」

「はあ……」

慇懃無礼に謝られても、何考えてるんだかわからない人の言葉を鵜呑みにはできない。

「ところで、明日にはバクスランドが攻めてくるというのは本当ですか？」

「あ、はい」

そういやこのギルドの人たちってどうして逃げてないのだろうか。
尋ねてみると、

「規則なので。いかなる場合もその支部の土地が減びるまでギルドとして営業するというのがありましてね」

そのいかなる場合も、には紛争や災害も含まれるという。案外ドギつい職場らしい。

幸いにして、と引き気味の私に、ミカエリ・ジョーンズは胡散臭さが倍增する説明を付け加えた。

「どの団体様にも、我がギルドをご利用していただいておりますので、たとえ紛争になったとしても、我々には不可侵というお約束をしていただいております」

つまり、色々なところの資金源を握っているこのギルドには、たとえテロのボスでも、もしかしたら王様でも文句も手出しもできないということだ。

お金の力って怖い。

「そうそう」

若干青ざめた私にミカエリ・ジョーンズはフロックコートの懐から何やら書きつけを取り出して、この世界では珍しいはずの万年筆でさらさらと書いた。

「今回のオレキオの使用料の件なのですが」

渡された請求書を見て私の顔から血の気が引いた。

すでに戻ってきたネロの知識と伯爵領で学んだ知識に照らし合わせると、そこに書かれていた額は、

「……ツケといってもらえませんか」

真面目な役人が一週間真面目に働いてもらえる給料ほど、といつてわかっていただけるだろうか。美味しいパンが一年分は買えるよ。伯爵に預けられていたはずの旅費の半分を支払えば払えただろうが、今の私のポケットマネーではその半分にも至らない。

私は必死こいてミカエリ・ジョーンズに譲歩をもぎ取り、一年という期限付きで借金することになった。

「この人たちは逃げないんですか？」

借金の約束を取り付けて、気分的にげっそりとなった私の質問に、ミカエリ・ジョーンズはさも意外なことを聞いたような顔をした。

「メフィステニス伯爵さまが動いてくださるのでしょう？　でしたら大丈夫ですよ」

ずいぶんとこの守銭奴に評価されているものだ。

私の方が眉をしかめると、ミカエリ・ジョーンズは悪戯を思いついた子供のような顔で言った。

「あなたのお父上を信じなさい。それに、あなたには借金をちゃんと支払っていただかなくてはいけませんから」

きっと、私からビタ一円たりとも逃さず借金を完済させなければ、この胡散臭い所長はここを動かない気がした。

お茶でもいかがですか、とお粗末なナンパ師みたいなセリフで胡散臭い所長が誘ってくれたが、これ以上知らないところで借金を増やされても面白くないので私は早々にギルドを後にした。

当の所長は「そんなことしませんよ」とやっぱり胡散臭い笑顔で私を見送った。

伯爵は、私のお願いを聞き届けてくれるはずだ。

ひと気のない路地を歩きながら、城へと向かう道を見回した。きつと、この街は活気があって綺麗な街だったんだろう。

私が出るのは、きつかけを作るだけだ。

あとは、カルチェ達が頑張ってくれなければならない。

「ヨウコ！」

私の方へと駆けてきた砂漠のお姫様なら、きつと。

「どうしたの。カルチェ」

「ヨウコを迎えにきたんだ」

この優しい少女なら、きつと。

けれど、神様はどうやら私が嫌いらしい。

その夜、約束の期日を待たずに城に轟音が響き渡った。

心臓と閃光

ゴォン！

子供たちの泣き声さえもかき消されるような轟音が真夜中に響いた。

与えられた寝室で毛布を蹴落として飛び起きた私は、上着に伯爵からもらった手帳と万年筆だけ入れて駆け出した。

この石造りの城は頑丈だが音がよく響くので、先ほどからひっきりなしに響く轟音が反響して耳がおかしくなりそうだ。

そんな轟音の中で、兵士のおじさんたちと、彼らと同じように革の鎧に身を包んだ一回り小さい少女が子供たちを抱いて地下へと続く階段を何とか逃げていた。

「カルチェ！」

轟音に負けないように叫ぶと、運よくカルチェが気づいてくれたらしい。

「早くこちらへ！」

どうやら地下に防空壕でもあるらしい。

私は子供たちが大人に連れられて地下へ逃げていくのを確認してから、彼らとは反対に石の階段を駆け上がった。

執務室からなら、よく外が見えるかもしれない。

私は初日に案内された道順を思い出しながら走った。

頭の中は、ほとんど真っ白だったが、ただ確認したくて走った。辿りついた執務室で、決して自然ではない閃光がこの城に向かって瞬くのを見た。

それはいとも簡単にラーゴスタの城壁を打ち崩し、この鉄の城にまで迫ろうとしていた。現に、幾つもの閃光がすでに城のあちこちを打ち壊して、月のない夜空にもうもうと煙が上がっている。

約束を守るとも思えなかったが、こんな攻撃をしかけてきていたとは。

荒れた街の様子を思い出す。

瓦礫になる一歩手前の建物に、こんな砲撃の類が撃ち込まれ続けたら、住人は逃げだすに決まっている。人が居なくなつては、領地も国も成り立たない。

「ヨウコ！」

甲高い悲鳴にも似た呼びかけに、私ははっとなった。閃光が、すぐ間近に迫っていた。

私に向かってくるカルチェが見えた。

駄目だ。

来るな！

声を上げるのもどこかしく、私はカルチェに飛びかかる。

私よりも少し背の低い彼女の頭を抱えて、そのまま壁へと激突した。

その次の瞬間。

ドン！

心臓をもぎ取られるような振動が骨から私を揺らして、次に大量の粉塵が混じった暴風が吹き荒れた。

ぎゅっと、砂漠色の頭を守るように抱えた。

この子が死んでは駄目だ。

城主だからじゃない。この城の、誰もが彼女を慕っている。

彼女は、ラーゴスタの心臓なのだから。

耳の鼓膜がおかしくなるような轟音が背後で幾つか響いた。

死ぬのは嫌だ。

でも、目の前で人が死ぬのは、もっと嫌だ。

やがて、静かになった。

目を焼く閃光はすでに遠く、私は胸に抱いていた少女を放した。息をしている。

彼女は無事らしい。

「……ヨウコ」

ぱらぱらと、瓦礫の破片が落ちてくる。

それを払ってやりながら、私は自分もまだ生きていることを実感した。

「カルチェ、大丈夫？」

自分の声が震えている。

私も、怖かったんだ。

それが分かると、何だか笑えてきたが、目の前のカルチェは泣きそうに顔を歪めた。

「ヨウコ、ヨウコ……」

子供のように彼女が手を伸ばしたのは、私の額だった。

触れた彼女の指先が真っ赤になる。

私は額を切っているようだ。

「――遅れて申し訳ございません」

夜の暗闇からそう言われて初めて、私とカルチェは自分たち以外に、人が居ることを知った。

真っ暗な部屋でその人影がふわりと片手も振ったかと思うと、ぼんやりとした白い光が浮かび上がる。

そうして、こちらへやってきたのは、夕焼けのように赤い髪的女孩だった。女、のはずだ。

コートの上からでも分かる豊満な体にまとっているのは軍人が着るような膝より長い暗い色のオーバーコートで、長い三つ編みの髪は優美でさえある。しかし、彼女の体は戦士のそれで、座り込んでいる私たちを見下ろす背は女性としてはだいぶ高い。そして何より、その手に握る鎌のような刃のついた武器が幼稚園児ほどもあるというのに、軽々と片手に持って平然としている。

アマゾネス、という言葉がしっくり来る大迫力の女だ。

そんな彼女が、野趣溢れる姿と裏腹に優雅に私の目の前でひざまずく。

「お初に御目にかかります。ヨウコさま」

騎士が主人を敬うように、こうべを垂れて彼女は静かに宣言した。

「わたくしは、メフィステニス伯爵が部下にして副メイド長、そして、第七十七師団が中佐、セイラと申します。以後、お見知りおき下さいませ」

セイラと名乗ったアマゾネスは、ほとんど茫然と聞いていた私を少しだけ笑った。

「今は席を外しておりますが、わたくし以下五名が遅ればせながら馳せ参じましてございます」

伯爵が、お願いを聞いてくれたらしい。

私はアマゾネスの黒々とした瞳を見つめて、泣きそうになった。でも、

「五人？」

いくら人数割けないとはいえ、いくら何でもその人数じゃ危なくないのか。

「はい。私以外はすでに敵の殲滅に向かっております」

「えと、あと四人で？」

「はい」

アマゾネスは安心させるように私に肯いてくれるが、それってあ

りなのか。

しかし、彼女は私の驚きに頓着せず、

「ここは危のうございます。早くこちらの御方と一緒に地下へ」

落ち着き払って言いかけたところで、空気を切るような音と共に閃光が瞬いた。

また、こちらにあの閃光がやってきたのだ。

しかし、アマゾネスは武器を握り直して、無造作に振りかえる。

「あっ——っ」

危ないと言おうとした。

けれど、その言葉は続かなかった。

ザン！

セイラさんが武器を一振りする。

それで、人大の大きさだったらしい閃光が一瞬で消えた。

その一振りのあとで、遅れて風が巻き起こる。

ばさばさと風に煽られる髪やコートの音だけがあたりに響いて、誰も怪我ひとつしなかった。

もちろん、セイラさんも。

彼女はざんっと武器で空気を打ち払うように斬り裂くと、ふわりと私たちに向かって微笑んだ。そして、

「馬鹿者！ 何をしている！」

耳につけていたピアスの先に向かって怒鳴りつけた。
アマゾネスの恫喝に応えたのは、ピアスからの間拔けな若い男の
声だった。

『すんませーん。弾いたらーそっちにいったみたいでしてー』

男の声の合間にも砲撃と思しき音が鳴り響いているが、当の男の
方はそれをほとんど気にしていない。時々「うるさいなー。ちよつ
と静かにしてくださいよー」と轟音が響く。……それだけなんだ
ろうか。音の向こうを想像できない。

「これ以上の失態を犯してみろ。私がお前を八つ裂きにしてやる」

『えええー。カンベンしてくださいよー』

この会話の間にも轟音が響き、アマゾネスは通信を切った。
彼女は改めて私に振りかえると、ひざまずいて私の額の傷に触れ
た。

触れられるとさすがに痛さがやってくる。

顔をしかめると、また「申し訳ございません」とアマゾネスに謝
られてしまった。

「私の到着が遅れてしまい……」

「――いえ、約束破ったのは、バクスランドですから」

布を当てられて、再びセイラさんに触れられると、額の痛みが少
し和らいだ。

「少しだけ、早く治るように魔術をかけました」

血を止めるほどのものらしいので、人体に影響は少ないと説明して、セイラさんは私とカルチェに立てますか、と尋ねた。

二人して頷くしかできなかったが、私は、未だかつてない安堵感に包まれた。俊藍と一緒に居てもこんなこと無かったんじゃないのか。

彼女に連れられてすでにボロボロになってしまった執務室を三人で後にする。でも隣でやけにカルチェが大人しいことに気がついた。

「……どうしたの？ カルチェ」

問いかける私に、カルチェは先に行くセイラさんを見つめて呟いた。

「ヨウコ、お前、何者なんだ」

「え？」

とても緊張した声で、カルチェは私を見た。

「第七十七師団だと……伝説の化け物集団じゃないか」

化け物？

こちらの声が聞こえたらしいセイラさんが先に階段を降りていた足を止めてこちらを振り返る。微笑んではいたが、どこか淋しそうに。

「幾つもの街や村をほんの数人で消滅させる、化け物集団だぞ」

呻くカルチュに言われて改めて、私はセイラさんを見た。

でも、

「危ない！」

鋭くセイラさんが叫んで、私たちの前に立った。そのまま武器を構えて、その次瞬に階段の隣の硬いはずの壁がウエハースみたいドパツと崩れる。

その破片をどういうわけか、セイラさんが防いでくれた。

彼女は私たちの無事を確認すると、またもピアスに向かって叫んだ。

「バイゼ！」

『すみません！ 何か砲術兵器に特殊な改造加えてるみたいでーそれ止めるのに手こずってるんスよー』

「貴様、五体満足で帰還できると思うなよ」

『えええ？ オレすっげ働いてますって！ そこにヨウコさまいらっしやるんですよね？ 弁解してもらえませんかー。もうすぐ部隊壊滅するんでっ…！』

弁解は途中でぶち切られた。

セイラさんは私にまた「申し訳ございません」と頭を下げてしまった。

そんなに謝らなくても。

いいえと首を振ると、セイラさんが少しかだけ笑ってくれた。彼女も迫力はあるが美人だ。ふと、彼女と私の背丈が同じほどだということに気がついた。

「もしかして、私に服を譲ってくださいった方ですか？」

そう言うのと、セイラさんは少し目を丸くして、それから苦笑した。

「あのような衣装を着ることはないと何度説明しても、ガリアには分かってもらえなくてね。けれど、あなたのお役に立てたのなら、良かった」

こんな時ではないと思うが、私はほっとしてしまった。

「ありがとうございました。あのスーツとても素敵で、私にはもったいないぐらいで」

セイラさんが、優秀な兵士だということは今この場でよく分かった。

カルチェが言う通り、伯爵の部下が恐ろしい集団なのかもしれない。

でも、私はこの人が味方だと知っている。

セイラさんは少しだけ、何をいうべきか悩むように口を閉じた。そして、何だか泣きそうな顔だったのに無理矢理、口の端を上げて、

「――ヨウコさま。あなたにお会いできて光栄です」

美しいアマゾネスは奇麗に微笑んでくれた。

「ここ、ラーゴスタへの攻撃はほんの挨拶代わりだったのでしょ。部隊の数はそれほど多くはありませんので、すぐに砲撃は止みます。バクスランドの本隊へは、旦那さまが説得に向かいました」

じきに片が付く、と言ったセイラさんの言葉がさも当然のように言うので、私も肯く。隣で何故か目を白黒させているカルチェにも頷いた。

「大丈夫。伯爵が何とかしてくれるから」

ほとんど呆前として、カルチェは同じように繰り返した。

「……ヨウコ、お前は、いったい何者なんだ？」

ただの元派遣社員で、ただの迷い人ですが。

恵まれた青年領主

ヴィオレット・デ・バクスランドは、苛々と次々上がってくる悲鳴を一喝した。

「ふざけるな！」

ヴィオレット自身も初めて見る、腹臣たちの戸惑いの表情にますます苛立って、目の前の執務机を叩き割らんばかりに殴りつけた。

これは何かの悪夢だ。

そうとしか思えなかった。

周到に罠を張り、もう一息でその獲物の首を食い破れるというところまできたというのに。

まさか、見知らぬ軍にすでに西国最強とまで謳われるようにまでなった自軍が、たった一夜でここまで追いこまれるとは。

認めたくなかった。

認められるはずもなかった。

ヴィオレットは元々、バクスランドを継ぐ役目にはなかった。

妾腹の第三子として生まれ、二人の腹違いの兄たちと違って、到底跡目争いなどに加われるような順番でも身分でもなく、ヴィオレット自身も好きな剣の道さえ極められれば、兄たちやこちらに見向きもしない父など、どうなろうと知ったことではなかった。

その単純な平穏が崩れ去ったのは、父の早逝だ。正妃の他に他領から招いた妾を十人も持ち、あれだけ頑丈だったはずの父が病に倒れてすぐに死んだ。あとには、元々仲の悪かった兄二人の争いが始

まっってしまった。

バクスランドの領地は荒れに荒れた。畦には誰ともつかない死体が転がり、あれだけ巢食っていたはずの佞臣共は、いち早く領地から出ていった。

あとに残ったのは、形ばかり強力な兄と弟に別れた軍隊と、荒れ果てた領地。そして飢えた領民たち。

我慢ならなかった。

生来、短気な性質だったヴィオレットは一年の我慢の末に、自分を慕ってついてきてくれていた兵士や臣下を集めて、兄たちを討った。

それが三年前のこと。

ボロボロになった領地を立て直すために、やれることは何でもやった。

中央政府に助力してもらうために、王が迷い人を兵隊にして東国と戦争をすると聞いて、迷い人狩りをやった。彼らの財産を全て没収し、それを国の高官共にはらまいてやった。

凶行を繰り返すヴィオレットは、いつしか西国最強の悪魔領主として恐れられるようになっていた。

ある日、ヴィオレットの周囲に付きまとうようになった一人の高官が醜い笑いを交えながら教えてくれた。

ヴィオレットと同じくして、隣領のラーゴスタも代替わりしたと。そしてその領主はまだ十六の姫だという。

ラーゴスタといえば、隣領のよしみとしてバクスランドにも常々援助をしてきている豊かな領地だ。少ない耕地を耕すバクスランドと違って、砂漠の真ん中で一大貿易拠点として発展し、近隣領地の一番の出世頭だ。

これを、我がものにしてはどうかと。

その高官は、ヴィオレットに囁いた。

奪うことにはすでに慣れていた。

すぐに、ラーゴスタへ宣戦布告した。

かの領地から嫁いだのが、ヴィオレットの母だ。関係から言えばラーゴスタの姫とは従妹にあたるが、そんなことは領民を守るためならどうでもいいことだ。

ラーゴスタは不当な要求を当然拒否し、戦争になった。

しかし、百戦錬磨のバクスランドをして、戦争経験のほとんどないラーゴスタなど赤子の手をひねるようなものだった。

度重なる威嚇射撃にラーゴスタの領民は次々に領地を脱し、三年経った今ではすでに城主とその部下たちだけになっていた。

そのはずだった。

最後通牒をして三日。

何もしくとも獲物が手に入ると思われた二日目になって、一通の書簡が届いた。

それは、砂漠をまたいだ辺境の伯爵からだった。

丁寧で簡潔な書簡によれば、その伯爵領とラーゴスタは古くから付き合いがあり、このたびバクスランドとの仲介を頼まれた。今なら中央政府に伯爵から何か言い訳をつけるので、即刻ラーゴスタへの侵攻をやめろ、というものだった。

中央政府の高官は、ほとんどがすでにバクスランドの凶行に目を背けている。

それはラーゴスタにも知れていて、今更腐敗しきった政府の名前など出されたところでヴィオレットの歩みを止めるものではない。

書簡を無視したあと、一日も経たないうちに書簡が届いた。一通目とはほぼ同じ内容だったが、最後の一文だけが書き加えられていた。

「この書簡を無視した場合は、五時間以内に貴領の砦が一つ落ちる」

冗談だと思った。

これを読み上げた、普段は冷徹な仮面の腹臣でさえ思わず嘲笑った。

だが、その書簡が届いた五時間後、凶報がヴィオレットの元に飛び込んだ。

「西の砦が何者かの手によって、壊滅！」

辛うじて逃げ出してきた兵士によってもたらされたのは、信じられない報告だった。

ラーゴスタか。

ここに来て、伯爵の手を借りて逆にバクスランド領へと攻め入ってきたのか。

「すぐにラーゴスタ付近に駐屯している兵に告げろ！ ラーゴスタへの砲撃を開始せよ！」

魔術兵団を要した遠距離攻撃に長けた部隊を、深夜のラーゴスタへと向かわせた。

もう約束など守らない。

顔も知らぬ女狐姫め。

その死体の顔を朝日と共に拝んでやる。

昏い支配欲で皮肉に笑い、部隊を展開させた。

全部隊に出陣準備を整えさせたところで、ヴィオレットは場違いな面会届けを受け取った。

依頼主は、コロラル・ド・メフィステニス伯爵。

今回の騒動の主、身の程知らずの伯爵だ。

伯爵ごときが格上の侯爵相手に意見すればどうなるか。

思い知らせてやらなくてはならない。

だが、メフィステニス、伯爵でありながらその名を知られた存在だ。

存在しないはずの第七十七師団を擁し、諸侯の中でも唯一、王に進言する権限を持っている。だが、歴史が古いばかりの伝説の軍隊など、バクスランドの敵ではない。

しかも、今回は話し合いという馬鹿げた提案のために、將軍である伯爵自ら部下を数人連れていただけだという。

「全軍。伯爵殿を丁重に出迎えてやれ」

ヴィオレットの命令に、誰もが戸惑った。

それは当然だ。砦とラーゴスタと各砦に分散しているとはいえ、本領に残る兵は一万を超える。

報告では、伯爵はたった一両の馬車で城を訪れている。

まったくの丸腰だ。

しかし、ヴィオレットの命令は変わらなかった。

この、頭に血が上ったヴィオレットの判断はある意味正しかった。

それが、ほんの二時間ほど前の話だ。

「ヴィオレット！」

いつも飄々としているはずの乳兄弟が執務室のドアを渾身の力で抑えて叫んだ。

嘘だ。

こんなことが。

生まれてこのかた恐怖など、感じたこともなかった。
必死だった。

誰に馬鹿にされようと、誰にも負けはしなかった。

自分は、この領地を守らなくてはならない。

ただ、それだけで。

「逃げろ！」

とうとうドアが破られた。

爆音と共に乳兄弟が吹き飛び、壁に叩きつけられた。

冷徹な腹臣が冷や汗で額を濡らしながら、剣を抜いた。

ヴィオレットも鞘から剣を引き抜く。

しかし、粉塵の向こうから現れたのは、およそこの場にはそぐわない男だった。

たった一人のメイドを連れただけの、フロックコートに片眼鏡の、杖をついた男。ただ人の興味を惹くといえば、その鷲鼻の顔を縦に走る、こめかみから頬にかけての入れ墨だろう。

男は、腹臣の後ろのヴィオレットを見つけて無表情に告げてきた。

「お初にお目にかかる。私は、コロラル・ド・メフィステニス伯爵と申します。再三の警告も無視されてしまったので、こうして話し合いに来た次第です」

いかなかな。

囁くように尋ねられても、ヴィオレットは口を動かすことが出来

なかった。

これは、何者だ。

悪魔というものが、本当にこの世にいるのなら。
きっと、この男のことに違いない。

師団長の長い三日間（上）

珍しく、愛用の椅子に深くもたれかかって溜息をついた主に、ガリアは静かに紅茶を差し出した。

ガリアの主であるコロール・ド・メフィステニスはまだも珍しいことに紅茶は受け取らず、すでに通信の途絶えたオレキオをじっと見つめた。

執務室に備え付けられているオレキオを、これほど穴があくほど見つめている主など、ついぞ見たことがない。

ガリアは呆れた心持ちで苦笑した。

「そのように落ち込まれるのでしたら、言わなければよろしかったでしょうに」

たった今、通信を終えた相手がまだすぐそばに居るような視線でいた無愛想な主は、再び大きく溜息をつく。

「いずれ分かることだ」

そうガリアに迷いなく言いながら、視線をオレキオから外そうとはしない。目の前では、到底言えなかったのだろう。オレキオを使つての間接的な手段を用いても、この落ち込みようだ。

あの黒い瞳に情けない顔をした自分を映しながら告白など、目も当てられない。

ガリアですらそうなのだから、誇りと矜持を食べて生きているこのメフィステニス伯爵が出来るはずもなかったのだ。

それでも、今、言わずとも良かったのではないかと思う。

メフィステニスの養子として認めた、あの迷い人の娘に真実を。

ヨウコ・キミジマという風変わりな彼女は、その性質も生い立ちも風変わりだ。洒落っ気もない少し高めの身長、平凡な顔つきの娘だ。華奢な体は二十四には到底見えない。彼女は元々東国に落とされた迷い人だが、複雑な旅路を経てこの西国の王に拾われ、伯爵の屋敷に至った。迷い人としてたった一人、いつ死んでもおかしくない状況を潜り抜けてこの国に来たというのに、不思議と暗い影を持っていない。明るい彼女は、歴戦の兵士でもある伯爵の部下たちに気に入られた。

彼女は怖いもの知らずだ。だから我が物顔で屋敷を歩きまわって、強面の部下たちとどういわけか仲良くなった。世間知らずで物を知らない彼女は、危なっかしくて見てられないというのも要因の一つだし、伯爵が直々に連れてきた客人でもあり、養子候補の一人でもあったからでもあった。理由はたくさんあげられたが、そのどれもが何故か彼女を嫌う要素には一つもなりえなかったのだ。

ガリアは、彼女の笑った顔が好きだった。

特別整っているわけでもない顔が嬉しそうに綻ぶと、ガリアは幸せになる。

長い間、血に塗れた生活をしてきたガリアの心にも、光のような勇氣になった。

この方を守るのなら、きっと自分は命をかけられる。

そんな、直感にも似た確信だった。

だが、一つだけ、彼女には言えないことがあった。

彼女が暮らした東国との戦場で、彼女の家族だった戦女神たちをガリア達が葬ったことだ。

炎の女神に堕ちた女は、転化した時にはすでに死んでいる。生きたままその身を焼かれて、炎の化身へと無理矢理、転化させられる邪術だ。

大則ではこの邪術を禁止する項目はないが、この術は準備と扱いが難しいことから嫌厭されてほとんど忘れ去られたはずだったが、一人の天才がこの術を古い書物から復活させた。

しかし、理由はどうあれ、彼女が家族と慕った女たちを殺したことは変わりない。

憎まれるだろうか。恨まれるだろうか。

そのどれもにガリアは慣れ親しんでいたが、あの笑顔が曇ることだけが恐ろしい。

「ガリア」

ようやくオレキオから目を放した主は、ガリアを眺めて淡々と告げた。

「バクスランドへ書簡を送れ。話し合いをしようとな」

「消せとはおっしゃらないのですね」

無遠慮なガリアの言葉に、主は咎めるように目を細めた。

「我が可愛い娘が言っただろう。話し合いをしろと」

先ほどオレキオで彼女と話した通り、あくまで話し合いをするつもりのような。だが、

「話し合いに応じない場合は」

「応じさせるまでだ」

そう断じて、主はもたれていた椅子から体を起こした。

「アイスレアにはそのまま中央へ向かえと連絡しろ。タンザイトとマッジョリはバクスランドの西と東の砦をそれぞれ抑えさせろ。ラーゴスタには、セイラを向かわせろ」

「かしこまりました」

「ガリアとサルミナは私とバクスランドへ向かえ」

そう命じられ、ガリアは思わず意外な思いで主を見た。

「……あくまで話し合いをするおつもりなのですか？」

「そうだと言ったはずだ」

だとしたら、それはとんでもない脅迫だとガリアは内心呆れた。

「バクスランドには悪いが、先々代から途絶えていたラーゴスタとの交流を取り戻す良い機会だ。——私の娘は本当によく出来た娘だね」

まだ正式な養子ではないというのに、まるで我が子を自慢するように主は笑った。

主ではないが、ガリアもそう思う。ヨウコは意図せずだが行動を起こす時期がとても良い。彼女自身は散々な目に遭っているようだが、それでも五体満足に生きていることには彼女の星の巡りの良さを目の当たりにする。

彼女に、このメフィステニス家を任せる、ひいてはこの第七十七師団を任せるという選択は、我が主ながら慧眼だ。

この二つを受け継ぐということは、星の巡りさえ味方につける者でなくてはならないからだ。

メフィステニスという家は、伯爵という位でありながらその歴史は古く、西国建国以前にまで遡る。かつては西国王家とも領土を巡って争ったというから、数百もあった国の中でも強国として知られていたようだ。だから、王家が建国の際に、一番最後に膝を折ったのが辺境領主としての始まりだ。かつての自領を離れ、砂漠に近い岩ばかりの領地にあっても、メフィステニスは王家の脅威となり続け、やがてはただ一つの権力を手に入れた。王に進言するという力だ。王が迷盲し、国を傾けた時に、遠方からただ一人で王を諫めることのできる者。故にメフィステニスは過剰に命を狙われ続け、その結果、七十七師団という本来ならば存在しない軍を持つこととなった。

そんな家柄ゆえに、伯爵家の当主となる教育は想像を絶する厳しさだ。

今回の、ヨウコが砂漠に一人残されたことも、伯爵が用意した教育の一環だ。

たった一人で味方もいない土地で生き残ることができなければ、強大な力を持つ王を留めることなどできない。

「私の時には、東の果ての寒冷地に、父に放り出されたのだったね」
バクスランドへ向かう道すがら、ガリアと向かいに二頭立ての馬車の座席に腰かけた主はふっと思いだしたように言った。

「ナイフ一本で極寒の地から自領に戻るなど、今から思えば無茶苦

茶なことをされたものだね」

だが、目の前の主はそれを為し得たから、ここに居る。

全ての手筈を一日も待たずに整えて、サルミナに馬車を操らせて領地を出たところだ。

バクスランドは砂漠を東にそれた山麓の、砂漠ほどではないが厳しい土地だ。

ほとんど耕地もない貧しい土地だというのに、兄弟で継承権争いをして更に荒れ果てたところを三男坊が領主に治まった。彼はその好戦的な性格を活かして、中央の高官を黙らせ、領地を立て直し始めたところだったはずだ。

ラーゴスタとの確執はすでに耳に入っていた。

だが、中央の膿を追い出す作業に追われて、各地を飛び回っていたガリア達の手が及ばなかったのだ。これには多少の後ろめたさもある。

だからこそ、主はこれほど早く手を打ったのだろう。

「あなたのお父様は、航海中に海に落とされたのですよ」

「我が家の教育は少しばかりおかしいのだよ」

ガリアが微笑みながら言うと、主は呆れたように返す。

「そういえばガリア。君はヨウコにまだ教えていないようだね」

主に指摘されて、ガリアは曖昧に笑った。

「君、私と父の二代に渡って仕えていると教えてやったのかい」

そう。ガリアは祖母の血を色濃く受け継いだ亜種だ。

だから、今年で五十になるというのに未だ姿は若いまま。

ガリアはこの主が赤ん坊の頃から知っている。

「いずれ。ですが、女の年は、そう軽々しく口にして良いものではありませんよ」

「なに、泣く子も黙る、七十七師団の長の泣き所にそんな告げ口はしないよ」

ふてぶてしく育ってしまったものだ。

だが、こうでなくては伯爵は務まらない。

だから、彼の亡くなった奥方には正直なところガリアは困った。

主は妻を十年前に亡くしている。病死だったが、原因は心労だ。

彼女は同じ伯爵家のご令嬢で、社交界での駆け引きには慣れていたが、ガリア達のような者ばかりが揃う政治や戦の世界の駆け引きには不慣れだった。メフィステニスに嫁いだ者は、すべからく夫と同じような才覚を求められる。それは、もしも夫の命運が尽きた時に女主人として采配をふるわなければならぬからだ。妻となったその時から姑による教育が施される。

家同士の契約のような婚姻だったが、主は三才年下の妻を大事にした。しかし、結婚して二年で彼女は病死した。

何も知らせずに嫁いできた彼女は、嘆くだけ嘆いて、師団を預かるガリアを罵るだけ罵った。彼女には耐えられなかったのだ。伯爵家の厳しい掟も、教育も、命令一つで命を奪う未来にも。彼女も夫である主を愛しはしたが、病床から離れられなくなってからは夫にも恨み事を繰り返した。最期には、ただ謝罪を繰り返して。

ごめんなさい、とか細くガリアに言った声が今も記憶に新しい。

師団長の長い三日間（下）

幾つかの転移魔術の中継地を経て、馬車がバクスランドに到着したのはすでに真夜中のことだった。

書簡の返事は全て否。

面会の申し出を、ガリアを胡散臭そうに見る門番に告げたところで、西の砦へ向かったタンザイトから連絡が入った。馬車の脇に立って腕につけた魔術通信具に顔を寄せる。

『子猫ちゃんを黙らせたよ』

西の砦を早くも落としたらしい。

ふざけた男だが、七十七師団の中でも数人しかいない神の落とし子と呼ばれる、本能で魔法という独自の形態と法則を持つ術を操れる異能だ。彼の手にかかれば、水気のない場所で砦を水没させることもできる。

「こちらもバクスランドに到着したわ」

『我らがお姫様のご機嫌は？』

「ヨウコさまの元へはセイラが向かいました」

『セイラが？ それはバクスランド御自慢の魔術師団もお気の毒に』

おどけたタンザイトの言葉はまんざら嘘でも誇張でもない。ガリア直属の部下である彼女が向かえば、師団などすぐに片付くだろう。魔術戦闘における専門家でもあるセイラと鉢合わせするとは、自慢の師団も運がない。

タンザイトにそのまま待機するよう告げると、続けて東の砦を落として向かったマッジョリから連絡が入った。

『こっちも片付いたよ。それで、ヨウコさまは無事かい？』

タンザイトと同じことを尋ねられて、ガリアは思わず苦笑する。
マッジョリは戦術のプロだ。普段なら作戦に関係のないことをガリアに尋ねはしないのだが。

「ええ。ヨウコさまはご無事よ。こちらはバクスランドに到着したわ。あなたはそのまま砦で待機して」

『了解。しかし、バクスランドは運が悪かったね』

同情するよ、とマッジョリは通信を切った。
確かに同情に値する。

彼らは、伯爵領と関わったばかりに、何年もかけて築いてきたものを全て失うこととなる。

「ガリア師団長」

サルミナが御者台から呼びかけてきた。
どうやら面会のお許しが出たらしい。
ガリアは車台に座している主に呼びかけながら、馬車に乗り込んだ。

「バクスランド侯爵、ヴィオレット様へのお目通りが叶うそうです」

「真夜中の訪問にも関わらず、心の広い御方のようだね」

バクスランドの領主からすれば冗談ではないと怒るだろうことを主は淡々と言った。

動き出した馬車が街に入ると、辺りは静まり返っていた。歓楽街などないのか、家にも明かりは無く、人のいる気配はするものの息を潜めてひっそりしている。

何の案内も妨害もなく領主の城の門前に辿りついて、ガリアは主より先に馬車を降りて、門兵が居るはずの詰所へ向かった。しかし、そこには、

「あら」

呟いたときには、ガリアの目の前で閃光が炸裂する。

ドン！

というその爆発音を合図に城門は開かれた。

「撃てえっ！」

轟音に負けじと張り上げられた号令と共に、一斉に中から放たれたのは魔術式の砲弾だ。動力を魔術の術式で作っており、弾丸さえあればいくらでも撃てる。

通常の軍に配備される殲滅銃の装填可能な弾丸は三十、しかし戦でならして悪魔領主などという厳ついあだ名までついたバクスランドは更に性能の良い銃が配備されているらしい。

銃撃と砲撃はしばらく続いた。

やがて、弾丸がひとしきり尽きたのか、「打ち方やめ！」という号令にもうもうと立ち上る硝煙だけが残された。

「――なるほど」

場違いなほど落ち着いた声が響いた。

「バクスランド侯爵は、なかなか見識のある御方のようだ。お会いできるのが楽しみだよ」

「そのようですね」

硝煙の向こうでそんなやりとりをしていたのは、バクスランド兵にしてみればおおよそ立って話しているはずのない二人だった。

「サルミナ。少々騒がしいようだから静かにさせてくれ。これでは侯爵とゆっくり話ができない」

「かしこまりました」

今まで馬車が穴だらけになるほどの銃撃が注がれたことを、そよ風が吹いたほども気にした様子もない主に、乗馬服のサルミナは従僕の礼を取って主の前に立った。

「撃て！ 殺せ！」

戦慄したのか、すでに正気を無くしたのか。将兵の号令が伝染したように砲撃が再び注がれる。

しかし、サルミナと主の前に薄い透けるような壁が一瞬で展開されて、砲撃をことごとく跳ね返した。

サルミナが腕を軽く振り上げる。

すると、彼の周りに数えきれない砲弾が現れた。
銃口は全ての城門の銃砲に注がれて、

「しばらくお静かに願います」

目映い閃光と共に全ての火器は焼きつくされた。

「サルミナ、あとは任せる」

悲鳴を上げる兵士たちを尻目に、主はサルミナに告げて散歩でもするように歩き出す。

「ああ、そうだ。兵士は全て投降させなさい。あとの処遇はヨウコに任せるから」

そう言った主に少し意外そうな顔を珍しく浮かべたが、サルミナはいつものように「かしこまりました」と言って主を見送った。

「ガリア。君は私についてこい」

「はい」

ガリアが主の後ろの控えて歩きだすと、城の中の兵士たちは混乱を極めていた。

「そういえば、どちらに侯爵がいらっしゃるのか聞くのを忘れていたな」

「あとでわたくしが伺ってまいりましょう」

平然と重兵器の間を歩く二人を遠巻きに見ていた兵士たちだったが、

「何をしている！ かかれ！」

正気を取り戻したらしい将兵の号令で、ぼんやりしていた兵士たちが一斉に剣や槍を構えた。

「では、伺ってまいります」

ガリアは一礼して主の前に立った。

そうして、腕を振る。

その一瞬で、兵士たちは動きを止めた。

「馬鹿な……っ！」

たった一人だけ残された将官と思しき男は、果敢にも剣を構えて近づいたガリアに唸った。

「こんな、馬鹿な魔術があるか！」

彼の周りには少なくとも数百人の兵士たちが居たが、彼らはすでに一人も残さず拘束されている。

ガリアの魔術によって作り出された数千の光る腕によって。

ガリア自身も数えたことはないが、体全てを作りだすのではないので幾らでも作れる。数が多いだけの簡単な魔術だ。

将官はガリアが魔術師だと思ったのか、奇声を上げて剣を振り上

げる。太刀筋はなかなか良いが、ガリアの相手では少々分が悪かった。剣を持つ手を取られて、剣を逆にもぎ取られると、首に剣先を突き付けられて顔を歪めることになった。

「ご無礼いたします。侯爵さまの在所をお教えくださいませ」

抵抗する間幾度か続けて、彼がようやく諦めたところで、侯爵が自分の執務室に居ることが分かった。

「ありがとうございます」

「……貴様は、何者なんだ」

すでに化け物と対峙しているような眼付きで、力尽きた将官は先を行くガリアに尋ねてきた。

「申し遅れました。わたくし、メフィステニス伯爵が部下にして、メイド長。そして第七十七師団の長を務めております」

「第七十七師団とは……どれほどの軍なのだ！ たった二人でこの一万の軍を抑える気か！」

そんなことを教える長など居はしない。

「先を急いでおりますので失礼いたします」

主に待たせたことを詫び、教えられた執務室へと足を向けると、後ろから将官の叫び声が追いかけてきた。

「化け物め！」

よく言われることだ。

普通、一師団は七千から九千人規模の軍隊のことを指す。だが、第七十七師団に所属しているのは、七十七人。その力量によって士官、下士官の位階が決められ、ガリアは三十年前に先代からこの師団長の座を譲られた。

そして、主の右腕として歩んできた。

「しかし、何だね。こうして君と歩くのは久し振りのような気がするね」

次々と兵士が襲いかかってくる戦場を散歩するように、主は回廊をのんびりと歩いている。

「そうでございますね。近頃はヨウコさまと過ごすことが多ございましたから」

主に従うガリアもメイド服の裾を一つも翻さず、後を追う。

「ヨウコはどうだね。君から見て。伯爵を継げそうか？」

珍しく意見を求められ、ガリアはふいにこちらを狙ってきた銃撃を魔術で作りだした盾で防ぎながら、主の質問を考えた。

すでにガリア達はヨウコを認めている。

だが、彼女はガリア達を認められるだろうか。

「――わたくしには、分かりかねます」

ガリア達の今の姿を見て、恐れはしないだろうか。

優しい娘だ。

自分が傷ついているというのに、他人が傷つくことを何よりも嫌う。

回答に詰まったガリアを、主は少しだけ振り返ったが何も言わなかった。

「私はヨウコを信じているよ。彼女なら、私の見えない答えを見つけてくれるような気がするからね」

先に行く主の背中をガリアは思わず見つめた。

主の言う通りなのかもしれない。

ガリア達では到底見つけられない答えを、きっと彼女は示してくれる。

そんな期待を、そんな未来を、ガリア達は彼女に見ている。

やがて、一際兵士たちが群がって部屋に辿りついた。

恐らく精鋭たちなのだろう。

子供だましの腕や盾では、払いのけることは出来ないかもしれない。

何より彼らに失礼にあたる。

ガリアは伯爵よりも前へ出て、十数人の精鋭たちと向き合った。

いずれも落ち着いた顔でガリアを見ているが、やはり得体のしれない者が恐ろしいらしい。ガリアは魔術の腕の一つから、剣の一つを掴んだ。

ひと振りの片刃の剣だ。

今日はこれで良いだろう。

「では、参ります」

ガリアの初速についてこれたものは、たった一人。
良い剣士が居たものだ。

唐竹に一合、袈裟切りに一合、手合わせして一度離れた。
そこで、大勢いたはずの精鋭たちは地面に崩れ落ちる。

「――何とも、恐ろしいメイドが居たものだ」

たった一人残った剣士は、ガリアに向かって苦々しく笑った。

「道を開けてくださいませ。わたくし共は侯爵さまとお話合いに来ただけですわ」

「ぬかせ！」

剣士の一撃は確かに鋭く、普通ならば相手が死んだと思わせない
まま殺せていただろう。

だが、ガリアが相手では、兎戯に等しい。

倒れ伏した剣士の横を通り過ぎ、ドアをノックした。

「失礼いたします。当家の主人が侯爵さまへの面会を望んでおられます。どうぞお聞き届けくださいませ」

何度呼びかけても返事はない。人の居る気配はするが、ドアが開く気配はないのだ。

「いかがいたしましたしょう」

対応を伺いに主を振り返る。

「応じていただきなさい」

「かしこまりました」

ガリアが一礼すると同時に、千の腕がドアを押し開けた。

誰かがドアを抑えていたらしく、余力で飛ばされた男が壁にぶつかって倒れてしまった。腕に確認させれば、息はしていたので大丈夫だろう。

嵐が通ったあとのように荒れた執務室は、すでにあちこちで書類が散乱し、ドアも壁もひしゃげていたが、残った二人の男は無事だ。

酷薄そうな顔をした男が背中にかばうのは、まだ若い、だが好戦的な顔をした青年だった。

「お初にお目にかかる。私は、コロラル・ド・メフィステニス伯爵と申します。再三の警告も無視されてしまったので、こうして話し合いに來た次第です」

前へ進み出た主がそう挨拶したが、二人の男は啞然としたように何の答えも返さない。

「いかがかな？」

そう訊ねた主に、奥に居た青年が獣のような叫び声を上げた。

「この……っ！」

憎々しげに青年の前に居た男もガリアに向かって剣を振り上げる。悪くない。

きつと、ガリアでなければ彼が囚になって、青年が逃げおおせたかもしれない。

だが、男はガリアの腕によって捕らえられて、床に頭を据えられた。

青年の剣は、主が杖で弾いたところだった。

「思ったよりも若いな」

剣を弾かれ、諸手を上げたような格好になったところを杖の先で肩を突かれて床に叩きつけられる。

肺にあったはずの空気が漏れて、青年はうめき声を上げた。

「――第七十七師団の將軍など、あってないようなものでは無かったのか！」

肩を突かれて動けないからか、唾を飛ばす勢いで青年領主は吠えた。

「噂好きの中央の高官にでも聞いたのかね？」

主は生徒の間違いを正す教師のようにのんびりと応えた。

「我が伯爵家でお飾りの將軍など一人も居ないよ」

お飾りの將軍に、ガリア達が従うはずもない。

「こんな、侵略行為をして、ただで済むと思うなよ！」

「侵略？」

予想外な言葉を聞くものだ。

主も不思議そうな顔で、杖の先で抑えつけている青年に尋ねた。

「我々のどこが侵略行為なのだね。我々は、私を含め三人で君と話に來ただけだよ」

門番にでも尋ねてみるといい、と付け加えると、ガリアの腕に抑えつけられている男が悲鳴のように口走る。

「三人……！ 三人でここまでやってきたというのか！」

「はい」

ガリアが答えると、みるみるうちに男の顔が歪む。

「そう悲観することもない」

主は青年たちに向かって淡々と言った。

「君たちはとても優秀だよ。世が世なら、一国を築くことだって出來ただろう」

だが、

「今回は相手が悪かったと思いたくない。どのみち、おいたのツケは払わなければならないからね」

彼らが運が悪かったただけだ。

相手が七十七師団でなければ。

伯爵の書簡を無視しなければ。

ヨウコがラーゴスタに関わらなければ。

幾つものもしもを掴み損ねただけなのだ。

翌日、ラーゴスタにオレキオで連絡すると、あちらの攻撃もすぐに収まったようだ。

主の隣でそれを聞いていた青年領主は眩暈を起こさんばかりになっていたが、ヨウコの決定と、初めて目にしたラーゴスタの領主を見て口を噤んだ。

それから、バクスランド領主とラーゴスタ領主は伯爵の保護という名の指揮下に置かれることとなり、バクスランドにはタンザイトが、ラーゴスタにはセイラがそのまま伯爵の名代として置かれることになった。

三日間の騒動から屋敷に帰った主は、ガルーダに甘いお菓子をねだったり、ホイエンに執務を押し付けたりとわがままを言ったが、それに飽きるといつものように無愛想な主に戻った。

それでも、遠い空の下にいるヨウコのこと気になるらしく、タンザイトやセイラに一日一度は様子を訊ねては、困らせている。

今日もセイラにヨウコの様子を訊ねて、通信を終えたところだ。

いつものように紅茶を差し出すと、安心したように主は口をつけた。

「旦那さま」

普段ならば絶対にしないが、ガリアは機嫌の良い主に問いかけた。平素でも、見た目よりも大雑把な主は咎めたりしないのだが。

「何だね」

「旦那さまが、ヨウコさまをお連れになったとき、わたくしはほっといたしました」

何を言いだすんだと主は顔を上げたが、ガリアはいつものように微笑んだ。

本当に、ガリアは安堵すると同時に嬉しくなったのだ。

「ようやく、新しい奥様をお連れになられたのだと思ひまして」

「ぶっ…！」

主は紅茶を喉に詰まらせたようにむせた。

普段ならば絶対にしないことだ。

げほげほと肩で息をする主も珍しいことだ。

「……どうしてそんなことを思っただね」

「あら。とてもお似合いですのよ。お二人が揃うと」

不遜な部下に、主は胡乱な目を向けた。

「私は彼女を娘以外として見たことがない」

「二回りほど違う年齢を気になさっているのですしたら、愛に年の差なんて関係ありませんのよ」

陳腐な励ましを聞いて、主は呆れた様子で紅茶を飲んだ。

「ヨウコが嘆くから、彼女の前でそんな話をするんじゃないぞ」

無愛想な主の顔が不機嫌に変わったのを見て、ガリアは笑った。

本当に、そう思ったのだから仕方ない。

もしも彼女が、この孤独な伯爵の傍らに居てくれたなら。

ガリアは、この上なく嬉しく思うのだ。

もちろん、彼女が伯爵の娘として迎えられるのは大歓迎だ。

いつだって、ヨウコが微笑んでいられる時間が続けばいいと思う。
そのためならば、ガリアは化け物とそしられようが、幾らでも汚名をかぶろう。

きっと、その分だけヨウコがガリアのために、怒鳴り散らしてくれるのだから。

だから、ガリアが願うのは一つだけだ。

ヨウコがどうか幸せであるように。

朝日と後悔

砲撃の一夜を地下で過ごしたあと、みんなで朝日を見た。

生きてる。

なんか知らんが生きてる。

生き残ったよ！

夜は暗いからほとんどわからなかったけど、城の大穴見てほんとよく生きてたと思ったよ！

あれだけ威力のあるものが降ってきたのに、砲弾らしきものは見当たらなかった。セイラさんによれば、何でも魔術で撃ってきていたそう。そうか、魔術って武器にも転用されてるんだな。家電動かすだけじゃなかったのか。

変な知識を仕入れたところで、女の子たちが残っていた米と味噌（地下にあったからね）でおにぎりを作ってくれてきたんで、生き残った人たちと頬ばった。私を含めて怪我した人はいっぱい居たけど、奇跡的に全員無事だった。

また皆でおにぎり食べられるなんて！

昨日はマジで死ぬかと思ったから。……この砂漠に来てからこんなおにぎりのような気もするけれど。

でも生きてるのが奇跡！ と思ったのは私だけではないようで、昨日の夜、セイラさんに連れられてカルチュを地下に連れていったら、真っ先に飛び出してきたのは、アグリだった。

彼女を現実に取り戻すように抱き締めて、彼女の耳元で延々とお

説教を繰り返していた。

もうくつつけよ。

傍目からはバカップルがいちゃいちゃしてるようにしか見えないから！

脇でそれを生暖かく見ていたのは私だけではなかった。ヴェルデに尋ねてみたら、アグリは先代から頼まれてずっとカルチェの世話をしてきたらしい。影になり盾になり大事に育ててきたお姫様。でも、成長して大人になって年々奇麗になってくカルチェにどうしたらいいのか迷っているという。

見た目青年の男だろ。ガツといけ！ ガツと！

今日も甲斐甲斐しくカルチェに豆茶を手渡すアグリとそれを嬉しそうに受け取るカルチェを、生暖かく眺めながら瓦礫の横でまったりしていたら、やけに身奇麗なフロックコートの男が城の瓦礫の山を避けてやってきた。

「バクスランドから通信が入っております」

まるで砲撃なんか無かったかのような透ける金髪の男、ミカエリ・ジョーンズが胡散臭い笑顔で言った。

私はカルチェとアグリとセイラさんと連れ立って、ギルドに向かうことになった。

何でも、通信主は伯爵らしい。

砲撃が止んだことといい、セイラさんが来てくれたことといい、伯爵は首尾よくバクスランドを止めてくれたようだ。さすが未来の自慢のパパ。

ミカエリ・ジョーンズに促されて、再び暗室に五人で入ると、ちよつと狭かった。だが、空中映像の向こうに、伯爵と見知らぬ青年の姿が現れて、あまり気にならなくなった。

向こうも私の顔を見つけたのか、伯爵が少しだけ笑った。

「久し振りだね。ヨウコ」

昨日も話しましたが。確かに久しぶりな気はするけどね。

「ありがとうございます、伯爵。昨日、いきなり砲撃があつて驚いたんですけど、セイラさんが来てくれたお陰で助かりました」

私の言葉に反応したのは、伯爵ではなく隣の青年の方だった。

かなり疲れた顔をしているが、青空みたいな髪色の精悍な顔つきの青年だ。彼は何か言おうとしたらしいが、結局何も言わずに押し黙ってしまった。

「今日連絡したのはね、君の意見を聞こうと思ったからだよ」

伯爵は目は開いているもののどこか茫然としている隣の青年を促して、画面の前に押し出した。

「彼は、ヴィオレット・デ・バクスランド侯爵。彼と話し合った結果、この略奪戦争を止めてくれることになった」

伯爵に紹介されて、青年は顔をしかめた。

彼が、バクスランドの。

思っていたよりも若い。

「ヨウコ、君は私にラーゴスタを助けてくれと言ったね。だから、

あとは君の判断に任せるよ」

え。

何それ。

「私の未来の娘だ。良い判断を下してくれ」

丸投げしたのに、返された――！！

固まった私を見る伯爵は、さながら出来の悪い生徒に難題出して悦に入ってる数学教師！（偏見）

どうしてくれるんだ。おろおろする私を見てカルチェまでおろしてきちゃったじゃないか！ 落ち着け！

どうしよう。

どうすればいい。

無い頭をフル回転させた。さっきおにぎり食べてて良かった！
糖分万歳！

「――殺せ」

低い呻き声に回転が止まった。

画面の向こうで青年が忌々しいものを見るような眼付きでこちらを睨みつけている。

「下賤とはいえ、この俺に勝ったんだ。俺を殺せ。それでいいだろう」

はて。

不思議なこと聞いちゃったな。

「アンタに私に命令する権利なんかないよ」

「何！」

怒鳴る青年を前にして、考えるの面倒臭い。帰せ私の糖分。

「この状況分かってんのかなあ。お坊ちゃん。アンタの生殺与奪を握ってるのはもうアンタじゃなくて、私なんだけど」

「それがどうした！」

「死んで楽になれると思うなよ。クソガキ」

思わず本音が出ちゃった。

ああ、カルチェ、引かないでよ。アグリも不信な顔しないで。

でもお陰で良いこと思いついた。

「君、カルチェの部下になることに決定しました」

逃げ腰のカルチェを画面の真ん中に立たせて、青年と対面させた。
訝る青年に紹介してやる。

「この子が、あなたが滅ぼそうとしてたラーゴスタ領主、カルチェ・デ・ラーゴスタちゃん十八歳です」

カルチェは画面越しに青年を睨んでいた。

それに怯んだとも思えないが、青年は口を噤んだ。
二人の様子を横目で見ながら、私は陽気に続けた。

「君は今からバクスランドの領主でありながらカルチェちゃんの部下になりまーす。逆らったら、君だけでなく君の目が届く範囲の人たちがどうなるかわかりませーん」

「なっ…」

驚いた青年の様子で何となくわかった。彼には彼で、大事な人たちが居る。

脅す材料が多くていい。……あら私、いま悪役？

「君たちはまだ若いし誘惑も多いでしょうから、バクスランドとラーゴスタの後見人をメフィステニス伯爵に務めてもらいまーす。伯爵に逆らってもどうなるかわかりませーん」

伯爵を引きあいに出すと、その場の空気が何故か凍った。

あれ。何か間違えたかな。

でも伯爵とセイラさんだけはうっすらと笑って、私に応えたのは伯爵だった。

「よろしい。引き受けよう。私自身が領地に留まるわけにもいかないから、ラーゴスタにはセイラを、こちらのバクスランドにはタンザイトを置くことにする」

「え、タンザイトさんを？」

あの軽いホスト兄ちゃんで大丈夫なんだろうか。
自分の部下のことだからか、伯爵は平気な顔だ。

「彼らを私の名代とする。何かあったら彼らを頼りなさい」

まあ、と伯爵は軽い調子で口の端を上げる。

「君たちのことはいつでも把握するから、何か私を頼らなければならぬ時は遠慮なく言うといい」

伯爵の言葉に、私がセイラを見ると、彼女は少し笑って頷いた。

「お任せ下さい」

セイラさんは安心できるんだけどな。

「――あの」

今まで一言も発していなかったカルチェが画面越しの伯爵に控え目に声をかけた。

「どうして、ここまでしてくださるんですか？」

「知っての通り、我がメフィステニスは疎遠にはなっていたがラーゴスタとの縁は深くてね。少しでも助けになればと思ったただけ。それに私の娘の願いでもあるからね」

「娘？」

「なんだ。まだ言っていなかったのか」

うお。回したはずのお鉢が回ってきた。

カルチェと伯爵の両方に見据えられて私は観念した。

「……一応、養子になる予定の者です」

「メフィステニスの娘!？」

カルチェと青年、アグリが打ち合わせしたように叫んだ。

カルチェと青年に至っては、まるで珍獣を見るような眼だ。

伯爵、あなたホント何したの。

今後のことはまた三者交えて会談することになったので、この場は解散となったけど、伯爵が私と話をしたいと言ったので、私は暗室に一人取り残された。

「それで、君はこれからどうするのかね？」

伯爵の屋敷を飛び出してきたものの、二週間もたたないうちにこの有り様だ。

伯爵の都合に物凄い踊らされた気もしなくはないけど。

「……北国って、ここから遠いんですか？」

「乗り物さえあれば、二週間の距離だろうがね。歩くとなると倍はかかる」

乗り物操る技術はないから、約一か月の旅ですか。しかも一人で。無謀なんだろうか。

「帰ってくるかね？」

いつものように、伯爵が無愛想に甘い言葉をくれる。

私なんか北国へ行ったところで、どうにかなるものなのだろうか。

門前払いくらって、泣き寝入りするのがオチじゃないのか。

でも、私は自分が思っている以上に馬鹿だ。

「北国に行ってきます」

決めたことだ。

私は、知りたいことが山ほどある。

北国に、私の知りたいことが待っているなら、行こう。

伯爵は「そうか」と笑って、頷いてくれた。

「私の知人が北国に居るから、連絡を入れておこう。変人だが不親切な男ではないから、君の話は聞いてくれるよ」

私の目から見て変人の伯爵に、変人と言われる人ってどんな人なんだろう。

私は伯爵に教えてもらった、バルガー・エヴァンスなる人のことを顔も見ないうちから、話が半分しか通じない異星人のカテゴリーに分類した。

ボディランゲージでどうにかなるだろう。

「他に助けは必要かね？」

充分甘やかしてもらってます。

私は伯爵と、その後ろで控えていたガリアさんに挨拶して通信を

切った。

そして、伯爵のせつかくのお申し出を断ったことを、私はすぐに後悔した。

言葉と夕焼け

いや、忘れてたわけじゃない。わけじゃない、ただけど。

「あなたの借金の返済期日は一年後ですから。ああ、返済はこのギルドでも大丈夫ですよ。ご心配なく」

暗室から出てきた私に、ミカエリ・ジョーンズが世間話のように言った。

「北国に行くなら、あなたが借金したほどの資金が必要ですが。失礼ですが、お手持ちは？」

ホントにアンタは失礼で胡散臭い男だな！

ミカエリ・ジョーンズの奇麗に撫でつけた髪をくしゃくしゃにしたくて、私は彼の頭頂部を睨みつけた。

そうだった。

あの女にお金のお半取られたんだ。

しかも今の私は借金持ち。

今回は伯爵からの通信だったからこれ以上の加算金はなかったんですがね。

私はカルチェ達の待つ城に帰って、何も考えたくなくてすぐに寝た。

今日ぐらい不貞寝しても誰にも文句言われなと思う。

そうして目が覚めたら、もう次の日の夕方でした。

うおっ 一日無駄にした！

誰か起こしてよー。

八つ当たりにならうと私の寢床の部屋を通りがかったカルチェに絡んだ。

「気持ち良さそうに眠っていたからな。セイラ中佐も寝かせておいてほしいと言っていたので」

あああ、今日も味噌汁飲もうと思ってたのに。

食い意地の張った私の恨み事に、カルチェは笑う。

「でも、ここ数日でやっとゆっくり眠れたんじゃないのか？」

確かにそうだ。この砂漠に来てからこんなゆっくり寝たのは久しぶりだ。

本当に散々だったからね。お陰さまで額の傷も手の火傷もだいぶ良くなったようだ。

納得しかけた私に、カルチェは何か思いついたように、私の手を取った。

「目が覚めたなら、ちょっと付き合ってくれないか」

カルチェが楽しそうに言うので、私は彼女についていくことにし

た。

まだ穴だらけの回廊と階段を上ったり下りたりしながら、カルチエの後を追って迷路（一度で覚えられない）を抜けると、視界が開けた。

たぶんお城の一番頂上のあたりだ。突きだしたバルコニーからは、荒れた街と砂漠が見える。

そして、砂漠の地平線に、今まさに太陽が沈もうとしている。

私とカルチエは言葉もなく、薄汚れたバルコニーに座り込んだ。

ああ、ここがラーゴスタなのか。

何だか今更な実感が沸いた。

整備された街並みは今や見る影もないが、きっと美しい街並みだったんだろう。建物の間を広い道が碁盤の目みたいに走っている。

この、夕焼けと街を一人占めするような高台から、領主は砂漠と人々を見守っていたんだ。

私は夕焼けを浴びながら、上着から手帳を取り出した。

今のうちに日記をつけておこうと思ったのだ。ランプも油代がかかるしね。

明るいうちに書いておけばいい。

とりあえず、砂漠についてからのことは地味につけてるから、時間がある時に今までのビックリなことや悲しいことも楽しいことを書いておこう。

そういや、私の私物は社長に取られたまんまだ。

もう随分前のことに思える。

みんな、元気だろうか。

恨んでいる人も嫌いな人も、面倒な人も、みんな元気だろうか。私とずっと共にある思い出は、あのマントだけだ。

「何を書いているんだ？」

隣で静かに、私と同じように景色を眺めていたカルチェが手帳を覗き込んできた。

「東国の言葉？」

「似てるけど、私の国の言葉」

いつか伯爵が言ったとおり、私が東国に落ちたのは運が良かったのかもしれない。

ネロが学んだ西国の文字は英語のアルファベットののような記号なので、それに慣れてしまったら、漢字なんて忘れていただろう。あーあの漢字なんだっけ。携帯で打ちたい。っていうときもあるけどね。

「日記つけておこうと思って」

「そうか。ヨウコは色々な場所を旅しているんだったな」

カルチェは感心するように言って、

「私はラーゴスタからほとんど出たことがないから、ヨウコの旅の話を知りたいな」

なんでも、彼女が遠出したのはお父さんと一緒に行った砂漠の滝

（砂漠の砂が溪谷に流れ込んでる場所があるんだってさ！）に連れていってもらったきりなんだそうさ。あとはそのお父さんも病気になるってしまったので、カルチェが領地から出るすべはなくて。

「大抵の人間は、旅なんてほとんどしない。商人や修行に出かける魔術師ぐらいだ。あとは傭兵だろうな。彼らは帰る家が無いからだが」

貴族でも滅多に旅なんかしないらしい。

そう言われたら、東国からやってきた迷い人なんて珍しい以外の何者でもないだろう。

私は攫われたり置いていかれたりしたことを省きながら、カルチェに今までの旅のことを面白おかしく話した。

チャリムのこと。

騎竜のこと。

お風呂のこと。（砂漠の真ん中じゃバケツ一杯の水で体から頭まで全部洗うから驚かれた）

カルチェにはこの国のことを教えてもらった。

水も出てくるサボテンを焼いて食べること。（肉厚で美味しいんだってさ）

ビークルは南国で開発されていて、西国では作られていないこと。

「普通、この国の女性はこんな服装じゃないんだ」

奇麗な布を使ったもつと涼しい服なんだそうさ。

「そういう服着ないの？」

「あまり好きじゃない」

似合わないしな、とカルチェは言うが、彼女は充分可愛いし美少女の類だ。

別に女の子を捨てたわけじゃないのなら、

「着ればいいのに。着て見せてよ」

「さあ。衣装は瓦礫の下かもしれないから」

はぐらかされた。

そんなくだらない話を日が暮れるまでカルチェと話した。

遅れて夕飯を食べに行ったら、アグリに叱られた。

それでも、カルチェと夜が更けるまで色々な話をした。

話し足りなくて枕を並べて一緒に部屋で寝ることになったので、女子高生に戻った気分でカルチェにニヤリと笑ってやった。

「ね、カルチェはアグリのことどう思ってるの？」

女子高生の修学旅行で恋バナはかかせない。

他人事なら尚更だ。

私は普段と同じ木綿のシャツとズボンだが、カルチェはいつものシャツとズボン姿から寝巻き用だというワンピースに着替えて、毛布の上に寝転がる。砂漠色の長い髪がばさりと枕に広がって奇麗だった。

「――私を育ててくれたのは、アグリなんだ」

物心ついたときから、迷い人ながらもお父さんがアグリをカルチエのお守兼教育係としてつけていたらしい。アグリはあの優男っぷりからは想像できないが、意外と武闘派で、護衛としてもカルチエを見守ってくれてきた。

でも、その優しく厳しいお兄さんはカルチエが成長しても全く変わらないうまま。

アグリは若い頃、現地の人と一度結婚して家族を作ったけれど、奥さんはカルチエが生まれる前に亡くなっていて、それ以来、新しい奥さんもらわないまままで過ごしている。

息子のヴェルデが再三勧めていたらしいけれど、ずっと頑なに断り続けているという。

まあ、予想通りというか何というか。なんてテンプレな若造り爺なんだろう。

「アグリは、奥さんをととても大事にしてるんだ」

彼がいつも持っているロケットには奥さんと息子二人（ヴェルデさんの弟が居るらしい）と撮った写真が入っているんだってさ。

家族想いの男はポイント高いけど、それにしたって大事なお姫様が何だか淋しそうにしてるのはいただけないだろ。

アグリはカルチエを目に入れたって痛くないほど溺愛して育ててきた。だから、カルチエの幸せを誰より願っているのは彼だろう。

けれど、カルチエだって、アグリの幸せを願っている。

お互い見つめあっているのに、何だかみ合わないっていうこともあるんだな。

見てるこっちはイライラするけど、こればかりは何かきっかけという面白いことでもない限りは他人が動くのもなあ。年の功かヴェルデはそういうのも見越して今はお見合いの話も持っていてないようだし。

「アグリと私の時間は進み方が違うから、私じゃたぶん、アグリのことをちゃんと分かってあげられていないんだ」

カルチェが諦めるような顔で砂漠色の目を細めた。

その目尻から何かがこぼれるような気がして、私は枕に視線を落とした。

迷い人とは幸せになれないのだろうか。

年を取らないだけで、迷い人だって共に時間は過ぎている。でもそれは人の目には見えない。

人は霞だけ食べて生きることができないから、目に見えないものだけでは生きられないのか。

私だって、目に見えない信頼や上っ面な言葉よりも、今この瞬間に差し出してくれる手を取るだろうから。

カルチェが静かな寝息を立て始めたので、私も毛布を被って目を閉じた。

少なくとも、アグリは差別せずに慕ってくれたカルチェに救われたはずだ。

それを、カルチェが分かっているなくても、そのことはとても大きな救いだから。

酔っ払いとにがり

翌日はカルチュエに起こされて、朝食を食べたあと兵士さんたちに捕まった。

どうやら酒のあてに良いと言った豆腐を作りたいらしい。

セイラさん達が祝杯に酒を持ち込んでくれたらしく、あの名前と違って喉が焼ける乳酒が樽に三つほどある。

そして、せがまれるまま私は必死に豆腐の作り方を思い出すはめになった。

えっと、豆を蒸して、潰して、豆乳作って、それをにがりで固めるんだっけ？

にがりって何で出来てるんだったかな…。

何か固めるようなものはないかと聞いたたら、寒天もどきやらが出てきたけれど、にがりとは固形じゃなかったような。

そしたら、海水でそういうものを作ると聞いたことがあると兵士のおっちゃんの一人が言った。

それかもしれない。

海水なんか砂漠の真ん中で手に入れられるはずもないが、海水から作った塩があるらしい。それで何とかならないか。

朝も早くから、ひげ面のおじさんたちに囲まれて（この成人男子はほとんど髭面らしくて、剃ってるアグリやヴェルデは珍しいんだってさ）豆腐作りを始めた。

煮たり潰したりこしたりを、何度も繰り返して、夕方になる頃。

「できた！」

ザルに固まった塊を掲げて、いい大人たちが狂喜乱舞した。

もうほんとボロボロだったけど、この貴重な塊をみんなで大事に分けて、味噌樽（味噌を酒樽に移した）の下で溜まった醤油を垂らして、削り節もどきをふって食べた。

私は再び郷愁に駆られてまっさきに泣いた。
うまい。

故郷の日本でもこんな旨い豆腐食べたこと無い。

だって特売の百円豆腐だからね。

それに朝からの苦労が旨味を三割増しにしているはず。

この豆腐を肴にして、試食会だったはずだが、夜も更けてくるとセイラさんも誘って大人ばかりの酒盛りになった。

カルチェも十八なので成人はしているらしいが（十六が成人なんだってさー）酒は苦手とかで早々に引き揚げてしまった。

当然、私は残ってる。

久しぶりのお酒なもの！

ただ乳酒はドぎついのでちびちびとやっていたが、セイラさんなんかは見た目通り豪快に湯吞でガブ飲みだ。さすが姐さん。

昨今の日本では飲み会は若者に敬遠されがちらしいけど、大人はやっぱり酒の席でうちとけるものがあるらしく、セイラさんとその部下さんたちはすっかりラーゴスタの人たちと意気投合している。

試作の豆腐はもう無いから、私の方は少し宴会から外れて豆腐造りプロジェクトチームの主犯格グループと、参加はしていなかったが興味はあるらしいアグリとで今後の改良点なんかを話し合っていた。

「やはりニガリの量を一目盛り減らしても良かったんじゃないか」

そう真面目くさって言ったのは、兵士たちの中でもリーダー格の

スミトラだ。どうみたって熊みたいな顔だが、これでも三十路を少し超えたほどらしい。

「そうか？　あまり減らすと固まらなかったじゃないか」

スミトラに応えたのは、まだ若いくせにひげ面のポポ。十七歳らしい。むさい若者だ。

「豆とニガリの量を変えて記録していく必要がありますね」

と、参加していなかったはずのアグリがやたら分析した意見を出す。

あーだこーだと大の大人が豆腐議論に花を咲かせている。くだらない。

でもこのくだらなさが心地よくて、私は書記役に徹して皆の意見をアグリが提供してくれた何かの書類の裏に書きだしていた。

めくってみただけ、何やらよく分からない測量記録が書いてあった。

……あれ、これ表題に何かラーゴスタ計測記録とか書いてあるけど。いいのか。

アグリが意外と酔っていることはよく分かった。

話し合いが雑談に変わる頃、アグリが私の隣にやってきたので、紙の裏のことについて尋ねたが、

「測量はまたやればいいんですよ」

酔っ払いな返答が返ってきた。顔はほとんど普段と変わらないくせに、相当酔ってるな。

だったら、この混沌状態で聞いてやろうか。

「アグリは、若いころに戻る決心ついたの？」

ほとんど酩酊状態のアグリはぼんやりと私の質問を口の中で転がして、酔っ払った口調のまま、静かに口を開いた。

「私はね、カルチェさまに普通の姫として過ごしてほしいだけなんですよ」

領主の娘ということで多少の不便はあるだろうが、普通の娘と同じように。

「綺麗な服を着て、着飾って、政治のことなど忘れて、好きか嫌いかだけを考えて、花を愛でて」

普段は男のように振る舞っているが、ああ見えて甘い物が大好きなのだとアグリは笑った。

「誰かに甘えて、恋をして」

幸せになってほしい。

溜息のように呟いてから、アグリは乳酒をあおった。きっと、無理して飲んでいるのだ。

「迷い人が、不死ではないと知っていますか？」

アグリが静かな声音で言って、また酒を杯に注ぐ。

「どうせなら、不死であつたらと思いませんか」

アグリには、元の世界での記憶がない。彼はすでにこの地が故郷で、居場所なのだ。

「どれほど見た目が若かろうが、私の寿命はもう長くはない」

自分の死がカルチェの悲しみになっても、妨げになることはあつてはならない。

飲み過ぎで、アグリはとうとうその場に倒れこんで寝てしまった。私は彼を眺めながら、残った乳酒を飲んだ。

「ねえ、アグリ」

こんな安っぽい言葉なんか聞きたくないだろうけれど、私はどうせ声なんか届かないアグリに呟いた。

「カルチェもきつと同じだよ」

うまくいかないものなのだ。

もどかしくても、切なくとも、日々は誰にも平等に注がれる。

私は、北国に発つことを決めた。

本と馬車馬

「というわけで、お金貸してください」

もう頼れるのはあなたしかいないんです！

すがりつかんばかりの私に、ミカエリ・ジョーンズは今日も一人涼しげな顔で応対してくれた。

「融資のご案内でしたら、喜んでさせていただきますが」

朝っぱらから開店と同時に駆け込んできた厄介な客を、ミカエリ・ジョーンズは奥の応接間に通して、そうにこやかに切り出した。

「どのような担保をお支払いになりますか？」

「出世払いで！」

「出世する予定があたりで？」

「ございません。」

うおおおここにきて元派遣社員の弊害が！ だってさだってさ！

私持ってるのパソコン検定ぐらいだよ！ 英検なんか四級さ！

秘書検定ぐらいもつとけば良かったああああ！

そしたら、あれだよ。何か秘書的な仕事がびしっとこなせてたかもしれないし！

頭を抱えた。

北国に発つと決めたはいいものの、先立つものが何もない。だからといって、これから何かと物入りなカルチェに借りるわけにもいかない。

それで、藁にもすがる思いでギルドに駆け込んだわけだ。

何とかして下さい。

私の様子にさしものミカエリ・ジョーンズも少し溜息をついた。

「ギルドは、その支部に生活基盤を置く方に融資する前提でご提案をさせていただいております。固定の生活基盤をお持ちでない方は、皆さまお仕事をお持ちの方ばかりですので、そのお仕事に関することで担保をいただいております」

つまり、現在、無職根無し草の私には何も担保にする物がない。旅をするための資金など、確かに例がないのかもしれない。

考えろ。

うう。でも昨日の乳酒が。

朝まで飲んでいたせいかな私は未だに酒臭い。そもそも酒臭い女に融資をしてやろうという気にはなれないだろう。

ミカエリ・ジョーンズはしばらく私を観察するように見てから、思案をまとめるように口を開いた。

「あなたにしか出来ないことを考えてみてください」

私にしか出来ない？

そんなことあるのか？

「あなたにあって、他の人にはない。そういうことが一つぐらいはあるでしょう」

ない、と思う。

背が特別高いわけでも美人なわけでもナイスバディーなわけでも賢いわけでもない。

人より優れて、というか悪いと思うのは口ぐらいだろう。

私にあって、他の人にはない。

伯爵とか社長とか何でも持つてる人と比べるのは、対象が悪過ぎる。ガリアさん達みたいな美人も何でも持つてる。美人は正義だからね。

俊藍は論外だ。あれは出来過ぎ君だから。

カルチェは、ラーゴスタから出たことがない。

バクスランドの馬鹿領主は、世間知らず。

アグリは、元の世界の記憶がない。

「――私、日記付け始めたんです」

何だか思いついたことをぽつんと言ったら、目の前の胡散臭い所長が顔を上げた。

「ほう。いつからですか？」

なぜか所長が促すから、私は誘われるまま答えた。

「いや、この砂漠に入ってからなんですけど、今までのことも手帳に書いておこうと思ってて」

「今までとは？」

「私、今まで東国も旅してたんで、そのことも書いておこうと」

「ほうほう。珍しいですね。いまどきただ旅をする人なんて貴族でもなかなか居ませんからね」

そうか。

私、珍しいんだ。

確か、カルチェがそんなことを言っていた。

私の旅の話を聞きたいって。

「あの！」

思わず身を乗り出した。

「私の日記、本にしませんか！」

突拍子もない話だ。

平気な顔して紛争地域で店を開けているミカエリ・ジョーンズが目丸くしている。

「本、ですか？」

「はい！ あ、この世界って出版とかまだないんですか？」

「いいえ。この西国の識字はあまり高くありませんが、商人たちの行き来はありますから、本は国境を越えて出回りますよ。あなたが旅した東国や、北国は国民のほとんどが本を嗜みますし、西国は貴族がよく蒐集しています」

何だか目の前が拓けていくような気分だった。

「旅をする人は珍しいんですね？ だったら他の地域の話なんか、すごく面白いんじゃないですか？」

「確かに……昔は吟遊詩人や商隊についてきていた楽団が話してきかせていたそうですが、今はそういう者たちもあまり旅をしませんし、同じ地域を回るようになっていきますからね」

「じゃ、私の日記を旅行記風の小説か手記みたいにして、本にしたら売れると思うんですよ！」

「リョコウキ？」

旅行記という言葉は無いらしく、日本語になっていたようだ。

「旅行の記録を小説みたいにした読み物です。どこそこの食べ物がおいしいとか、名所がどうか。そういう旅行の記録を読むんです」

いつもなら返答に滞らないミカエリ・ジョーンズが珍しく黙り込んでしまった。

「これ、担保になりませんか？」

旅行をするための資金だ。

この旅行自体が担保にならないだろうか。

想像じゃなくて、実際に人が歩いて食べて、感じたそのままを書くのだ。私は迷い人なだけ、偏見もない。

しばらく顎に指をあてて考えていた辺境ギルド所長は、おもむろに頷いた。

「一つの街につき、原稿十枚」

「はい？」

顎にあてていたはずの人差し指を向けられる。

「ギルドはあなたが辿りつく街や村の全てにあるでしょうから、一つの街に辿りつくたびに原稿用紙十枚をギルドに提出してください。それと引き換えに、あなたの旅行資金を融資しましょう」

「それじゃ…！」

ほとんど応接セットのテーブルに足を乗り上げていた私を、ミカエリ・ジョーンズはいつもの胡散臭い顔で笑った。

「他人の旅行の記録なんてものを、誰が喜んで読むのかはわかりませんが」

憎まれ口を付けたして、

「あなたの案は面白い」

いつもとは違う、とても人の悪い笑みをミカエリ・ジョーンズは浮かべた。

準備資金として幾らかを融資してもらって、私がラーゴスタを発売つときに所定の原稿用紙を渡されることになった。

喜ばしい。

喜ばしいことだが、これで馬車馬のように働く理由が出来て何だか先行き不安だ。背に腹は代えられないといえども、これから先、ミカエリ・ジョーンズに頭が上がらないことにも不満は残った。

でも、これでカルチュエに話ができるだろう。

城に帰って早速伝えようと思ったが、何故かアグリに捕まった。日が中天に昇ってから彼が起きだすなど前代未聞だが、昨日の酒がよっぽど効いたようだ。

「今までどちらへ？」

詰問するように言われたから、素直にギルドに行っていたことを教えてやると、

「――ここを出ていくつもりですね？」

伊達に八十三ではないらしい。

悪戯した子供をしかるように、私の腕をやんわり掴むとアグリは城の瓦礫の裏にまで私を連れていった。

皆、昼間は瓦礫の掃除で忙しいのだ。昨日は特別だ。

「ラーゴスタに残るつもりはないのですか」

私の腕を握っていた手に力がこもった。

「カルチェさまには、これから辛いことが続くでしょう」

たぶん、これから先に必ず悲しい別れもある。

「カルチェさまには、心を許せる人間がそばに必要です」

「アグリじゃ駄目なの？」

腕が痛くなるほど掴まれた。

「――私では、駄目です」

そういつて、アグリは項垂れてしまった。

「私では、カルチェさまを支えられない」

ざっ。

小さな音が聞こえた。

アグリと振り返ると、

「カルチェさま…！」

顔面蒼白にしたカルチェが居た。

「――わ、悪かった」

そう悲しげにバツが悪そうにカルチェがつぶやいた。

アグリが私を放り出して追いかけようとするけど、カルチェの方が早い。

砂漠色の長い三つ編みを翻して、あっという間に行ってしまった。

「……アグリ」

追いかけられずに固まってしまったアグリの脛を、私は蹴った。

「つた！」

「カルチェ、泣いたかもね」

私の低い声にアグリは「うつ」と唸る。

「こんな物影に連れ込んで何してるんだって、怪しむのは当たり前だよ」

「それは…」

「私は迷い人だし？ アグリのことを理解してあげられるかもしれないし？ お似合いかもね？ 私たち？」

「何を言っているんですか！」

「私だってアンタみたいな他の女好きな男はいりません。あーもう」

どうしてくれるの！　せっかくカルチェに笑顔で話して丸めこもうと思ったのに、アンタが余計なことするからややこしい三角関係みたいなことになったじゃないの！」

こんな少女漫画みたいな展開、冗談じゃない。

「さっさとカルチェ探しに行きなさいよ！　そしてすっぱり誤解を解いてきてくださいクソジジイ！　そして私のことを納得させて！」

「――意外と、口が悪いんですね。ヨウコさま」

「うるさい！」

胡乱な顔のアグリを叱りとばしてやる。そして本音の半分も口にはしてないつもりだ失礼な。

「理屈うだうだ言ってるうちに、可愛いお姫様を何処の馬の骨ともしれない輩にとられるんだからね！」

大体、この男がうだうだとしているからややこしいことになるんだ。ああいう若い娘は押しと引きに弱いんだから、とっとと落としてやればいい。

「――わかりました。カルチェさまの誤解を解きます」

頷いて私を宥めたアグリは、腹が決まった顔をしていた。

「私、明日には発つから」

私の言葉にアグリは少しだけ淋しそうに笑った。

「わかりました」

私は一人その場に残って、アグリを見送った。

長引けば、別れが辛くなるだけだ。

私は旅人らしく、去ればいい。

その男、迷惑につき

「さて」

西国でもそうは見られない上等なスーツの男は、嵐が過ぎ去ったあとのように、珍しく人前でタイを直した。

年齢のよく分からない上等そうな男は、およそ辺境のギルドには似合わない男だ。

ミカエリ・ジョーンズ、という名のこの男のことを、ギルドの関係者で知らない者はいない。

しかし、一般の、ギルドに属さない者は彼の顔すらも知らないの
で、彼のこと公になることは少なかった。

「マチス君。早急に原稿用紙と予備の万年筆と、旅に必要なものをリストアップしてくれ」

直属の上司である彼に言われ、ブエナは顔色を変えずに頷いた。

「はい。わかりました」

「窓口は他の人たちに任せていいから。今日はその仕事をしてくれ。ああ、それと、他のギルドにこの連絡を回しておいて」

渡された紙には、先程まで所長が自ら応対していた女性のことが書かれていた。

旅行の記録を出版物に？
なるほど、面白い担保だ。

だが、そんなことをしなくても、彼女に融資するには十分な条件があったはずだ。

それを目の前の上司が知らないはずも、気付かないはずもなかった。

「あの、所長」

ブエナは思わずさっさと窓口から去っていかうとする上司に声をかけてしまった。

「この、ヨウコ・キミジマ様は、メフィステニス伯爵のご令嬢ということでしたから、身元がはっきりしていますし、担保が無くても貸出が出来たんじゃ……」

言いかけて、上司ではあるがにっこりと笑った胡散臭い顔に口を閉じる。

「彼女は面白い知識があるようだよ。すでにラーゴスタの書記官から彼女の発案名で打診が来ている」

ブエナは、昨日訪れていたラーゴスタの深緑の髪の迷い人書記官を思い出していた。確か、そんな申請をこの胡散臭い上司にしていたようだ。

だが、そんなことは一言も彼女に教えていないらしい。

もしも、昨日の書記官が申請した食べ物が研究審査を通れば、発案者の彼女には研究費の名目で、今回申請した融資よりも多いぐらの額が一度に支給されるだろう。

ブエナはにんまりする上司を見ながら、さっきの黒髪の女性を思い出していた。

背が少し高いほどの女性だ。ろくな着替えもないからか、身奇麗にはしているがマントを抱えた姿はまるで少年だった。

だが、面白いことを思いつく女性のようなのだ。

ギルドの所員は就職したら直ちに各地に飛ばされるので、本拠の北国で勤められる者は少ない。各地を転々と派遣されるので、色々な他国の風土に触れて過ごす。そのため、他の地域の者より他国の風習などに興味がある。しかし、派遣されるものの、ギルドと寮との往復で、データ以上の詳しい土地のことなど知らないまま他に飛ばされることがままある。それに、観光に行くにも自分一人では限度があったりするが、ガイドをつけるほどのことではないので、結局、それきりになってしまうこともある。

とにかく、その土地の情報が欲しいのだ。

しかし、今までそういう情報を集めようとした酔狂な者はなくて、本もまた然りだ。

彼女の日記がもしも本になるのなら、ブエナは個人的にも楽しみだった。

しかし、だ。

「私もそろそろ北の本国に戻ろうかなあ」

目の前でぶらぶらしながら呟く上司は非情だが、ギルドの誰も彼には逆らえない。

「他のマイスターの連中がうるさくなってきたからね。うん。あの子も北に来るみたいだし、一度戻るよ」

このミカエリ・ジョーンズという男は、ラーゴスタの辺境支部長などという肩書の他に、きちんとした肩書を持っている。

ギルドマイスター。

ギルドの最高責任者だ。

「というわけだから、ブエナ・マチス君。君も本国へ帰ろう」

ブエナは心の中で盛大に溜息をついた。

この上司は、視察と称して災害や紛争が起こりそうな辺境にわざわざ赴任するのが趣味の迷惑な上司だ。

お陰で秘書兼部下であるブエナは、結婚適齢期を過ぎても未だ落ち着いた住処を持つことができないでいる。

ご愁傷様。

ブエナはひっそりと、ヨウコ・キミジマの行く末を案じた。

このハタ迷惑な上司に目をつけられたことは、彼女にとって幸か不幸か。

それはブエナにも、わかるはずもないことなのだが。

餞別と原稿用紙

渡された包みには、奇麗な三角形のおにぎりと焼いた味噌が添えてあった。

「あ、ありがとう！」

すっかり仲良くなった女の子たちに泣きそうになりながら言った。

「お元気で」

「水は大丈夫？」

お母さんみたいに訊ねられるまま、確認して笑った。

「餞別に」

ひげ面の兵士のおっちゃんたちに渡されたのは、ざる豆腐。日に当たてたら高野豆腐にならないだろうか。

「ありがとうございました」

一番常識的な挨拶をしてくれたのは、ヴェルデだった。

でも、

「——カルチェは」

ヴェルデの傍らに立ったアグリに尋ねたら、意味深に笑われた。

「ま、まさか、もう手籠めに…っ！」

なんて手癖の悪い若造りだ！

「違います」

あ、こめかみに青筋浮かんだ。いやだ。冗談ですよ。

「……でも、カルチェ怒ってるんでしょ」

結局、夕飯でも会えなかったのだ。どこに行ったか尋ねようと思ったアグリも居なかった。

私はビークルで砂漠を抜けるまで送ってくれるというセイラさんを見上げた。

ここは城の目の前の出入り口だが、あんまり長く居過ぎると周りの子供たちが何だか泣きそうだし、涙線弱いおっさんたちもうるうるしてそうだ。子供とおっさんの泣き声合唱なんて聞きたくない。

もう行こうか。

すでにギルドから原稿用紙もお金も受け取った。旅に必要なリストも用意してくれたから、次の街で買い揃えることもできる。あの胡散臭い所長は、面白いことにはとことんまで手をかけるタチのようだ。

ヨウコ！

声がしたような気がした。

「ヨウコ！」

城の中が足音で反響して向かってきたかと思うと、美しい少女が現れた。

ゆったりとしたズボンに飾りのついた靴、キャミソールみたいな繊細な上衣はいやらしさは無くても涼しげだ。腕に巻いた薄布が彼女に合わせて羽根みたいに跳ねる。

砂漠色の髪を優雅になびかせた姿は、出会った時の勇ましい格好からは想像もできない砂漠の国のお姫様だった。

「カルチェ」

息せき切って駆け寄ってきたお姫様に笑みがこぼれた。

「行くんだな」

「うん。ありがとう」

いつか見せてと言った約束を守ってくれたのか。

「これが、我が国の衣装だ」

瓦礫の下から見つけてきた、と笑ったお姫様の顔は誇らしげだった。

「昨日はアグリと探して、衣装を直していたから話す時間もなくてすまなかった」

「アグリと仲直りしたんだ」

そう言って笑うと、カルチェは憮然とした顔になった。

「……何だか、変わったんだ。あいつ。何か、私が奇麗だとか、恥ずかしいこと言うし」

顔赤らめたあなたの話を聞いてる方が恥ずかしいです。

アグリめ。お兄ちゃん対応から、セクハラに切り替えたな。

「これからは、アグリに気をつけてね。気を許しちゃだめだよ」

カルチェの耳にそう囁いておいた。

訳も分かっていないらしい、彼女は頷く。

「わ、わかった」

アグリが暴走しないように、伯爵とセイラさんにも手綱握ってもらおう。私が煽ったせいで、カルチェの貞操の危機とか笑えない。

「じゃ、お世話になりました」

できるだけ、簡潔にお礼を言おうと頭を下げると、カルチェが笑う。

「世話になったのは、私の方だ」

ほら、あれだよ。成り行きとかそういうの。

「一宿一飯の恩義は忘れません」

私が真面目くさって言うとかルチェは声を上げて太陽みたいに笑う。

「宿を貸したぐらいで、こんなに大きな恩を返されたのは初めてだ」
あんまり奇麗に笑うから、私はいつも彼女が少しだけ妬ましくなる。

「また来てくれ。必ず」

「来ない」

私がそう断言すると、カルチェは少し目を細めた。

「どうして？」

「カルチェとはたぶん友達にはなれないから」

カルチェはとても良い子だ。

幸せで、見守られて、きつと不幸なんか訪れない。

そういう子には、きつと私のことなんか分らない。

どうせ産まれてくるときから決まっいて、彼女の人生に不幸を運ぶ私は要らない。

それに、皆が大好きな彼女のことは可愛いと思っても、私は好きにはなれない。

「私、カルチェのこと大嫌い」

周りの人間が目を見開いて、啞然とした。
でも、

「それでも私は、ヨウコが大好きだ」

当のカルチェはそう言って、泣きそうな顔をした。

セイラさんがハンドルを握るビークルに乗って、手を振って、カルチェたちの姿が見えなくなってから、私はようやく車が走る方向へ向き直った。

「――大丈夫。もう聞こえませんかよ」

セイラさんがそんなことを言うから私は遠慮なく甘えて、砂漠の真ん中で大声を上げた。

嫌いだ。

人が死ぬのも、別れるのも、誰かが不幸になるのも。全部嫌いだ。

「カルチェ！ みんな！ ありがとう！ アグリ！ カルチェ泣かせたら許さないからねえ！」

優しいあの子も楽しかった思い出も。

全部名残惜しくて、私はしばらく子供みたいに泣いた。

遠く離れた娘を思う父

その日は、砂漠に近い土地には珍しく朝から雨だった。

西国の気候を雨期と乾期に分けるなら、今は乾期に当たるため、一日続く雨など非常に珍しい。

コロラル・ド・メフィステニスは自分の執務室から、書類を繰る手を止めて窓の外の雨を眺めていた。

報告によれば、娘がラーゴスタを発った頃だろうか。

砂漠に雨が降りはないだろうが、娘が滂沱の涙を流しているのは想像に難くない。

そういう娘だ。

ヨウコ・キミジマという迷い人を自領に連れ帰ったのは、気まぐれもなければ同情でもなかった。

すでに彼女のことを知っていたからだ。

その当時は、彼女が東国の王と何かしら関係があったという報告だけだったが、コロラル自らが保護する理由には充分だった。

機は熟していた。

だが、きっかけがなかなか巡って来ず、若い王の召喚命令を無視し続けた。

それが、あの娘が関わった事件で絶好の機会がコロラルに巡ってくる。

お陰で若い王の横面を叩くことは出来たし、長い間巢食っていた西国の病魔の原因も突き止めることが出来た。

だから、あの場で彼女がどう返事をしようと自領に連れ帰るつもりでいた。

彼女は扉を開ける鍵だ。

だが、娘に迎えようと思ったのは、まったくの思いつきだった。
普段ならば絶対に信じない、直感の類だ。
理由はあまりない。

思ったよりも彼女が賢いことや、コロラルの部下が思いのほか
気に入って彼女を可愛がったことや、いくつかが上げられるが、や
はり理由はないに等しい。

伯爵としての、將軍としての責任上、もっとも忌避すべき直感と
いう以外の理由を上げられない。

それでも、養子に迎えるといったコロラルの前で、泣きだした
彼女を自分の娘にすることに迷いはなかった。

次第に明らかになっていった彼女の足跡は、あまり良いものでは
なかった。

彼女は、東国に新しく就任した宰相と異世界から落とされた迷い
人だ。

彼女は城に保護されていたが、連れ去られた。その先で、三年前
姿を消したはずの東国王に拾われ、王は王都へ帰還した。

そして彼女は戦場に送られ、西国へ来た。

普通の人間ならば殺されているか死んでいるような足跡だが、そ
れでも強運なのか悪運なのか、五体満足でコロラルの前に現われ
たことは奇跡に近い。

星の巡りもあるだろうが、彼女自身の力によるところが大きい。

彼女は自分で思っているより賢い娘だ。

そして、いつも誰かをその賢さで救っている。

だから、いつも誰かが彼女を助けるのだ。

コロラルは、恐らく彼女を助けるために選ばれたのだろう。

星の巡りも運命も特別に興味はないが、彼女と会わせてくれたの
だから感謝するべきか。

しかし、伯爵の席を彼女が本当に継げるかといえば、それはまた別の話だ。

彼女にいくら強運の女神がついていようと、コロラルの居る世界はいくらでも背中から襲われる世界だ。

いつか部下のガリアにした問いかけを自分に返せば、否と答える。彼女はきつと自分が奪った命の重みを受け止めるだろうが、血塗れの道は似合わない。

今はただ、養子となる彼女を心配できればそれでいい。

ガリアの余計なひと言が時折邪魔をするのだが。

二回以上違う娘をどうして妻になどと考えるのが分からない。ただそれは、妻としてそばに置くか養子としてそばに置くかの違いだけの様な気もしてくる。だがやはり、女としては考えられず、コロラルは一端の父親になったような心持ちで彼女の報告を聞いている。

彼女が無事に北国へ着ければ、どんな報告が聞けるのか今から楽しみだ。

そのために、今は西国の正常化を進めなければならなかった。

ラーゴスタとバクスランドの問題はその一環に過ぎない。

むしろ娘のお陰で早々に片付いた。

「動いたか」

珍しい雨を眺めながら、先ほど送られてきた書面を繰る。

この報告で、全ての糸が繋がった。

たった一人の男に。

世界は歪んで、軋んで、悲鳴を上げている。

その悲鳴の先に、一人の男が居る。

未来の娘はやがてこの男と出会うだろう。

彼女が居たから、あの男の存在を掴むことができたのだ。

そして、セイラの報告で今まで胸に留めていた疑問が証明された。

今は遠く、北国へ向かった娘。

その行く先には、必ずあの男が居る。

「――ヨウコ。君ならどういう答えを出す」

その答えをぜひ、聞かせてほしい。

出来れば誰より先に。

誰も答えない問いを口にして、コロラルは雨音を聞きながら静かに目を閉じた。

弟と襟足

砂漠を抜けると、いつかアイスレアさんと話し合ったような旅程の山はなく、岩と枯れ木ばかりの荒野が広がっていた。

この何もなさそうな土地にもちゃんと街はあって、猫の額みtainな土地を牧草地にして馬を育てたり、交易商人相手の宿を経営したりして、人々は暮らしていた。

この荒地の先に、かの北国はあるそうだ。

セイラさんが連れてきてくれた街もそういう街で、荒地の真ん中のわりに人も物も豊かに揃っていた。

バラックのような屋台がずらりと立ち並んで商品が山積みになっている。その間を商品を買いつけに來た商人や明らかに堅気じゃない人たちも、肌も髪も色んな色のありとあらゆる人々が縫うように溢れている。

私は目移りしながら辺りをきよきよと見回していて、セイラさんが少し笑った。

「まずは服を整えましょう」

私が着回していたシャツのズボンは薄汚れていて、セイラさん曰くあまり汚れた服装だと宿に泊めてもらえないこともあるらしい。

ちゃんとした宿に泊まれる資金はギルドから用立ててもらっているの、宿に泊まれるようにしておくのは必要だ。

それに旅をする女は稀に傭兵が居るぐらいで、ほとんど居ないの、私は男と偽れる服装を用意することになった。

まあ、このヨーロッパ風味な西国にあっても私は女性の平均身長から頭半分高いから、服とマントさえあればいくらでも嘘をつけるだろう。

現にセイラさんと店に入るとセイラさんの弟扱いされた。

——幸先良いと思っておく。

セイラさんに入った古着屋は、古今東西の衣装が積まれていて、驚いたことに東国のチャリムまであった。ゆったりとしたチャリムなら私の薄い胸を隠すのにも都合がいいので、セイラさんと相談して、地味なチャリムをいくつか買った。チャリムは、男と女で違いもないし、性別をあやふやにするにもいい。

チャリムを買ってから生活用品を買いそろえて、薬草をいくつかと乳鉢なんかを荷持に加えたら、スツケース一つ分にもなった。このスツケースは子供が一人入れそうな中古品だが、滑車がついてて私でも楽に運べる。革のベルトのついたそれは頑丈そうで、今までこういった旅行鞆なんか買ったことのない私は嬉しくて子供みたいにはしゃいだ。

もう、味噌もおにぎりも豆腐もとつの昔に食べてしまった。

残ったのはこれから私の仕事道具になる原稿用紙と万年筆と、思いつく限りは出。

カルチュエならきつと大丈夫だ。

この街に着くまでに立ち寄ったオアシスで、セイラさんとおしゃべりしながら私は手帳に今までの出来事を書き起こしていった。

オレキオは高額なサービスだけど、ギルドが伝言を届けてくれる手紙みたいなサービスは子供の駄賃でもできる額だ。

その伝言板サービスでセイラさんが時々ラーゴスタの様子を知らせてくれると約束してくれた。

私はギルドに原稿を預けに行くたびに、様子が聞ける。

買い物を通り済ませてから、宿に戻って私は髪を切ることにした。西国の男は東国と違って短いことが多いのだ。襟足だけが長い

髪型は、なんだかビジュアル系のバンドマンみたいに見えたけど、一見しただけじゃ女には見えない。

「……何も、髪まで男のようにする必要はなかったのでは？」

手伝ってくれたセイラさんがちよつとだけ怒った顔で切った髪の毛を片付けた。

「用心しておいて、無駄ってことはないですよ」

頭にも腕っ節にも覚えのない私だ。髪を切るぐらいでトラブルが極力避けられるのなら、得はあっても損はない。

髪を切ってから、久しぶりに風呂に入ることができた。

こんな荒野の街で、浴槽付きの風呂なんか珍しい。源泉が近いらしくて、温泉で有名ならしい。ちよつといい部屋をとったので部屋に風呂が完備されていて、セイラさんと交代で入った。

独特な香辛料の利いた夕食を食べると、私は眠気で大欠伸。

我ながらガキだなあ。

でも、

「いかがですか？」

セイラさんが買ってきた地酒で目が覚めた。

醸造されているのか透通ったお酒は、果物みたいな爽やかな味とする。うまい。これは大人の特権だよな！

遠慮していたセイラさんだったけど私が杯を勧めて、一緒に飲むことになった。砂漠でも乳酒で酒盛りやってたから今更だ。

「ヨウコさま」

晩酌を楽しんでいた私に苦笑しながら、セイラさんがふいに目を細めた。

「――本当に北国へ、お一人で向かわれるのですか？」

「うん」

静かに彼女を見返すと、セイラさんの方は失敗したような笑みを浮かべた。

「どうしても？」

「借金返すまではギルドが何とかしてくれるよ。全額返すまでは、お墓の下まで取り立てにきそうだし」

あの胡散臭い所長の顔を思い出して、私は乾いたように「ははは」と笑う。金の切れ目が縁の切れ目というが、あの男と縁を切るにはお金が必要だ。

「そのようなものは、我々でご用立てできます」

そうだろう。腐ったって伯爵だ。
でも、

「これは私の借金だから、自分で払います。それに、私に手助けしなかったら、伯爵教育が無駄になるんじゃないのかな」

そう言って、私はガラスの杯に残っていたお酒を飲み干した。
切り子みみたいな奇麗なグラスだ。これはここから北へ向かう途中

の街の名産らしい。

「私は欲張りなんですよ。セイラさん」

あれもこれも、少なくとも自分に関わることは全部で自分関わって、全部知っておきたいと思う。

元の世界に居たときはワンルームのアパートが自分の世界の全部だった。仕事に行って帰って寝る。それだけの世界。でも今は違う。

「この世界に来て、色んな人に会って、知ったんですよ」

世界って、広い。

自分の目に映る世界なんて、世界のほんの一部分だけで、全体なんて神様にも見えはしないだろう。

それぐらい広い世界に、私は今まで目を向けて来なかった。飽きることもなんか無い。

今まで流されてばかりだったけれど、今度は波に乗ってやる。

「面白いお土産話いっぱい持って帰りますから」

笑った私に、セイラさんは優しく微笑んだ。

果実酒を二人でひと瓶開けて、私はセイラさんと長い時間話した。セイラさんはラーゴスタでの任務が終われば、伯爵の居るメフィステニスに帰るといふ。お屋敷では副メイド長だというから、今度帰った時にはセイラさんのメイド姿を見られるかもしれない。

いつの間にか、伯爵の家が第二の実家みたいな感覚になっている。

翌朝、ビークルでラーゴスタに帰るセイラさんを見送った。

「良い旅を。ヨウコさま」

カッコいいお姉さまは最後まで私を甘やかして、
颯爽と砂漠へ帰って行った。

お土産と盾

私は、それから幾つかの街を通って、幸いにして順調に旅程を消化していった。

酒場でおじさんたちと飲んだくれて二日酔いになったり、有名だという虫料理に気を失いそうになったり、商隊に潜り込ませてもらって給仕のアルバイトしてお駄賃もらったりして、原稿の締め切りに迫られた。

その間、誰にも私が女だとはバレなかった。
なぜだ。

原稿用紙は何処の世界も一緒なのか、四百字詰め of 正方形が並んだやつで、万年筆で書くもんだから文字を間違えると間抜けな原稿になる。それに西国の分からない単語とかあって、私は学者まがいの商人に頼み込んで、西国の辞書を手に入れた。

西国語を東国語に訳す珍しい辞書なので、日本人の私としては漢字混じりの訳が非常にありがたい。

時々用法の違う言葉（手招きが追い払う仕草とか）があったりするから、それは別の手帳に書き留める。

あと、街の観光もしないといけない。

酒場で飲んだくれるのは遊びじゃないんだよ！

四百字の紙が十枚って、結構な量なんだよ。最初の頃はホントに埋まらなくて、ほとんど徹夜で書いてギルドの受付に持っていった。

受付の愛想のいいお姉さんは原稿と引き換えに旅の資金を渡してくれるだけだけど、その原稿どうするのか聞いてみたら、北国の本部に送って推敲してるんだそうで。

……それって、苦労して書いた原稿がほとんど採用されないことも

あるってことだよね？

それでも十枚きっかり埋めないといけないから、私は街で宿をとったらすぐに観光に行くことにしている。

近頃では、手帳の数が増えてしまったので分厚い手帳に変えたら重くて仕方ない。

その手帳も、すでに半分以上が埋まった。

街の名所や有名な食べ物と同じ西国の荒野だというのに色々だ。

それは廃墟のお化け屋敷だったり、変わった形の実がなる珍しい木だったり、どうみたって青汁にしか見えないコーヒー味の飲み物だったり。

酒場で情報を聞きまわっていたら、たまにその場で飲み友達になったおじさんやおばさんが教えてくれることもある。

その一つに、迷い人の村の話が出てきた。

「前は、珍しい織物を作ってた村だったんだが、ほら、この前の戦争で皆駆り出されちゃってな。今じゃ誰も住んでないらしい」

酔っ払いのおじさんから、迷い人を差別するような言葉は出て来なかった。

「俺たち商人は、迷い人だろうが誰だろうがお客さん相手に商売するもんだ。良い品物作ってくれるのも、それを買ってくれるのも、お前さんみたいなお坊ちゃんだろうが、迷い人だろうが関係ないんだよ」

最後まで私を坊ちゃんと陽気と呼んだおじさんは発泡酒片手に豪快に笑う。

私の黒髪が珍しいことに気がついた商人たちも、私が本を書くために旅をしていると言うと、そちらの方を珍しがって、本が出たら

卸してやると酒を飲みながら言ってくれた。

「その村、ここから遠いんですか？」

私は、その迷い人の村に行ってみることにした。

岩と枯れ木ばかりの荒野は、意外と埃臭いだけで砂漠ほど熱くない。代わりに大トカゲや狼も住んでるから、商人のおじさんたちは砂漠よりも荒野が危ないと口を酸っぱくした。たまに傭兵崩れの夜盗も出るから、商隊は護衛雇って荒野を行き来する。

私は途中まで商隊に混ぜてもらって、村の近くで別れると、地図にあるけれど今は無い村を目指すことにした。

この村は北国へ向かう途中にある。

でもそちらへ向けて行く商隊は一つもなかった。

これだけ交易の盛んな土地柄だというのに北国へ行ったことのある人はまばらだ。しかも、西国の新しいお触れで北国の国交を完全に断ったらしく、自由な商人も役人の目を盗んでいこうという人は少ないらしい。

私は地図を見ながら、首から下げた笛を吹いた。すると、ドツツという重い足音が近づいてくる。

「おかえり。サリー」

茶褐色の騎竜がやってきて、私に鼻の頭をこすりつけてきた。

西国では珍しい騎竜を扱う商人が居て、北国への足にと買ったのだ。

ゲルプという種類で、気性は荒いが馴れると従順で長い旅に重宝する、らしい。

初めは乗せてくれなくて隣を歩くだけだったが、近頃は私を主人

と認識してくれたらしく、旅の初めより重くなったスーツケースと一緒に私を乗せてくれる。

商隊に混じる時には、騎竜は珍しいので、離れたところからついてきてもらう。

ひとしきり私に鼻面をこすりつけたあと、まるで早く乗れと言わんばかりに剛毛の背中を見せるので、主人というよりも彼女（メスなので）にしてみれば、容量の悪い人間の面倒をみている感覚なのかもしれない。

私はサリーの背中にスーツケースを積みこんで、自分も鎧に足をかけた。

スーツケースには、最初の頃は着替えと薬草と原稿用紙ぐらいしか無かったけど、今では色んなものが入っている。それは気に行ったお土産のグラスだったり、伯爵にあげようと思った奇麗なモザイク造りの万年筆だったり、ガリアさんに飲んでほしいなと思ったお茶の葉だったり、カルチェに似合うなと思ったイヤリングだったり。何だかあれもこれもお土産をかううちに増えてしまったのだ。それにサリーの水と好物の干し草もサリーの脇に積んでいる。

サリーと地図を確認しながら村に辿りついたときには、すでに夕暮れが迫っている頃だった。

夕暮れに照らされたかつての村は、静かだった。

慎ましやかな生活をしていたのだろう。

土を固めてつくったレンガの家の間には、辛うじて耕していたらしい畑があった。

家の中を覗くと、埃をかぶった織機があって、周りに糸巻きが散乱している。

人のいた気配は確かにするものの、サリーと幾ら村の中を歩いて

も、何も見つけることは出来なかった。

そうこうしているうちに日が落ちてしまったので、私はまだ形を保っている家を借りることにして、寝室だったらいい部屋を簡単に掃除してから残されていたランプに明かりを灯した。ベッドはもう使い物にならないが、その脇でならサリーと眠れる。家の間取りが広くて良かった。

油を足せば使えたランプが、ここにやはり人のいたことを教えてくれるけれど、すでに人の空気は見いだせない。

サリーに干し草をあげてから、保存食の固い干し肉をランプの火であぶって、柔らかいパンに酢漬けの野菜を挟んで食べた。

今夜は酒は控えよう。

スーツケースの中の酒瓶を無視して、私は荷物を片付けた。

油も無尽蔵にあるわけじゃない。魔術の施された燃料石なら半永久で燃えるらしいが、旅の資金とお土産買うぐらいで精一杯の私じや到底買えないほど高い。

あの燃料石がお屋敷全部にあったんだから、今更ながら伯爵の財力を実感した。

庶民の虚しさを頭の隅に追いやって、ランプを消そうとしたら、

コトン。

物音が響いた。

サリーが眠りかけてた首を上げて、家の中を見回す。

どうやら外じゃなくて、家の中の音らしい。

ネズミかな。

この世界の動物は、騎竜みたいな見たことのないのも居るけど、元の世界とよく似てる。

ネズミならサリーが居れば近寄ってこないけど、狼ならとつとと逃げなくちゃならない。

狼にとってサリ―は怖い動物だけど、人の私はそうじゃないからね。

コトン。

野良犬は怖いけど、野良猫なら問題ない。

私はランプを手にとった。

確かめないことには眠れない。

何かあったときにはランプを投げつけてやる。

唯一の光源のランプを盾みたいに掲げて、私は音の方へと向かった。

ガタン！

私の居る寝室から、居間に向かう廊下で大きな音が鳴った。

家の中に、居るのか。

幽霊、は何だか妙な気がする。だって村人はみんな連れていかれたって聞いたし。

いやホラーは駄目だ。

ああ、変なこと考えるから手から汗が出てきた。

私は震える足を引きずって、居間に向かってランプを掲げた。

すると、

ブン！

後ろから何かを振り上げるみたいな音がして、とっさに身を捻る。

悲鳴をこらえて、ランプで照らす。

何者だ！

「……人間？」

向こうもこちらに驚いたらしく、棒を振り上げたまま固まっている。

お互いランプを挟んで目を白黒させていた。

そこに居たのは、赤毛の少年だった。

お土産と盾（後書き）

誤字修正しました。ご指摘ありがとうございます。

囲炉裏と英語

少年は私をざっと見てから、おもむろに振り上げていた腕を降ろしてくれた。

だから、私もランプを盾にするのをやめた。

「――君、この人？」

私の声を聞いて、少しだけ驚いた顔をした少年は「ああ」とやけに大人びた返事をした。

それから、寝室から移動してくるように私に言って、台所の隣のダイニングらしい部屋へと案内してくれた。

人が住めるほどには掃除されたそこには、なんと囲炉裏が切っただけである。

「ここなら夜盗も狼も気付かない」

少年はここで生活をしているらしい。

手際よく囲炉裏に火を入れて、サリーを不思議そうに見たあと、少年は口を開いた。

「ここには一人で来たのか？」

「商隊に近くまで送ってきてもらったの」

そう答えると、少年はやはり大人のような顔で目を細めた。細い体には薄汚れたシャツとズボンで、短い赤毛は汚れて乱れているが、

少し釣り目の碧眼は理知的な光を湛えている。

「こんな村に、何をしにきた」

「迷い人の村だって聞いたから。私も迷い人だし」

不機嫌そうだった少年の顔が驚きに変わる。

「——まさか、japaneseなのか」

西国の間から出てきたのは、やけにネイティブな英語だ。

「……君は、英語圏の人？」

「エイゴ？」

「えと、アースピーク、イングリッシュ？」

少年は私の片言英語に首をひねった。

英検四級じゃ会話にならないことがよく分かった。
でも、言いたいことは分かってくれたらしい。

「Yes. I come from United Kingdom」

ユナイテッドキングダム？

国の名前のはずだけど、何処のことだっけ。

「……そうか。japaneseだったな」

何だか馬鹿にされた気もする。でも子供相手にふてくされるわけにもいかず、私は頷いた。

「そう。日本人だよ。えっと、じゃあ君は家族で迷い人になったんだ？」

「いや」

同じ迷い人同士なのに西国語の方がスムーズに話せるって妙な気分だ。

「ええ？ 一人でここに？ 誰か保護者は居たの？」

「――君は、いつこちらへ落されたんだ？」

「半年ぐらい前」

「俺は、十五年前にこちらに落とされた」

え。

だって、少年、あなた、十歳ぐらいにしか見えませんよ。

「俺は今年で二十五だ」

迷い人ってホント見た目で分かんない。
しかも年上って。

「君は十三歳ぐらいか？」

お前もか。少年。

二十四だと自己紹介したらやっぱり目を丸くされた。アンタの方が若造りだって気付いてる？

ひとしきり文句を言ってから、改めて質問した。

「他の迷い人は、どうしたの？」

「捕まったさ。全員な」

見た目少年の彼は、薪を囲炉裏に放り込んだ。

「俺は見た目がこんなだから、殺されるかもしれないからと他の住民に匿われて、一人残された。——君こそ、迷い人のくせにどうして一人でフラフラしてるんだ？」

東国から旅をしてきたと話すと、彼は妙な顔で眉をしかめた。

「東国は西国より迷い人への差別は少ないと聞いたぞ。どうして、こんな国に来たんだ」

「……迷い人が、差別されてるなんて知らなかったんだよ」

まさか奴隷にされているなど、誰が考えるものか。

呟いた私に、彼は大きく溜息をついた。

彼には、ラーゴスタでアグリたちがされていたような首の焼き印はなかった。

尋ねたら、村で奴隷を見分ける必要がないから、だそうだ。街に買われた奴隷や街で暮らす奴隷だけが焼き印を入れられるらしい。

「迷い人はな、珍しいんだ」

囲炉裏の静かな炎を見ながら、彼は大人の口調で語り出した。

迷い人というのは、国の中で一年に十人程度が発見されるという。七十六ある領地の中から十人だから、多いのか少ないのか微妙だけど、それでも珍しいことには変わりない。

それが、どうして兵隊に駆り出されるほどになるかというと、

「この国では、迷い人の子孫もその身分とされる。だから、その血が途切れない限り、親戚中がその扱いだ。それに、迷い人は一つの村や街に隔離されるのが普通だ。人が何人も集まって、子孫が増えないわけもないからな。それがここ百年の間に繰り返されて、今回のような戦争に駆り出されるようなことになった」

純粹な迷い人に出会うというのは、この世界の中では砂漠で砂金を探しだすようなもので、滅多にないことらしい。

迷い人は年を取らないが不死ではないので、子孫が残されていて本人は居ない場合がほとんどだ。

ということは、アグリとこの少年に会ったのはホントに異常な偶然だ。

事実、この二十五歳の若造り少年は、十五年間で私が初めてらしい。

「この迷い人の村でも、迷い人は俺一人だったからな」

先祖がえりで時折、迷い人と同じくあまり見た目が年を取らない人間も居るので、彼はさして気味悪がられることなく村に受け入れられたらしい。そもそも子供なので保護者も必要だった。

だが、十五年育ててくれた養父母は、

「連れていかれたよ。今更、迷い人の人権を返すなんて話、子供だって信じなかったがな」

そりゃそうだ。

徴兵される側が強制する奴の言うことを信じるなんて、潜脳でもしないかぎり無い。

彼はまた溜息をついて、囲炉裏に小枝を放り込む。

「東国との戦争は終わったのか？」

「――さあ」

終わっていてほしいが、私なんかの願いが届くのだろうか。きっと私よりも切実に願った彼の願いは届かなかったのに。

私はマントの端を握った。

きっと、俊藍が何とかしているはずだ。西国だって、今は伯爵がいる。

「終わっていればいいのにな」

少年は、ただそれだけをぽつりと言った。

子供特有の、淋しいだの、悲しいだのという感情がまるで見えな顔で、彼は囲炉裏の火を見つめている。

村の人が早く帰ってくればいいのと思う。

早くかつての村にあったらう、平穏な暮らしになればいい。

けれど、当の住民であるはずの少年は、私よりも静かに黙ってい

る。

たとえば村の人たちが戻ってきたとしてももう、以前のような村には戻れないことを知っているのだ。

「――ねえ、私と一緒にいけない？」

口をついて出た提案が、何だかとても良く見えて、私は続けた。

「私と一緒に北国に行こうよ」

「……もしかして、東国から、北国に向かっていたのか」

彼は囲炉裏の炎から視線を上げて、呆れたように私を見た。

「そう。行ってみようと思って。私がお世話になった人が、北国なら元の世界に戻る方法があるかもしれないっていうから」

「何？」

今度こそ、少年は目を見開いた。

「元の世界に帰れる？」

頷いた私を信じられない様な目で見ている。

「私、今はこのサリーと旅してるんだけど、一緒に来てくれるなら心強いから」

きっと、彼がたった一人でこの村に居ても、誰も帰ってこない気がした。

この誰も居ない村で、帰らない人を待つ。

それが彼のよすがだとしても、一人で待つことは無理だと思う。

ただでさえ、迷い人はたった一人で、この世界に居るといふのに。

少年は、迷うように、でも縋るように私を見た。

「私は、ヨウコ。あなたは？」

戸惑うような目が私を捉えて、揺れた。

「――ステファン」

翌日、私はステファンとサリーと一緒に、村を旅立った。

木と小姑

幾つかの街に立ち寄って幾日か経つと、最初のうちこそ遠慮がちだった見た目は子供で中身は大人を地で行くステファンは、すっかり口うるさい小姑になってしまった。

宿を取るにもあれはだめここがいいとか、お酒を飲み過ぎるなどか、ふらふらと街へ出かけるなどか、無駄なお土産を買うなどか。

でも、生来面倒見のいい性格らしく、徹夜で原稿をしていたらお茶を入れてくれるし、酒場では無防備に男と飲むなど口酸っぱく忠告してくれる。

どうやら、旅の資金のほとんどを私に頼っているのを気にしているようだった。

「またこんなに酒を買いこんで」

ステファンはそう小言を付けくわえてから地酒が三本ほど入った袋をサリーの鞆にくくりつけてくれた。

「いーじゃない。ステファンも飲めば」

「俺は酒を旨いと思えない」

つまらない二十五歳だ。

「お前のご主人さまはどうしてこんなに酒好きなんだろうな」

そう言ってステファンがサリーの首を撫でると、彼女は同意するように「クゥ」と鳴く。近頃じゃ、ステファンの方がサリーと仲が良いぐらいだ。サリーの裏切り者。やっぱり女は男が出来ると友情

より恋なのか。

今日も朝日が昇ったばかりで街を発つことにしている。
乾いた気候だったはずが、近頃では濃い朝靄で前が見えないことが多い。

荒野にも枯れ木や岩よりも草地が多くなってきていて、砂漠も伯爵の住む荒地もすでに遠い。

ステファンと旅をするようになってからは彼が荷持と一緒にサリ―に乗り、私はほとんど徒歩だ。お陰で街に着くとよく眠れる。

「じゃあ、気をつけてね。兄弟げんかしないようにね」

そう笑ったのは宿屋の女将さんだ。

私とステファンは年が近くとも見た目が大人と子供だ。だから、説明も面倒なので兄弟として通している。

宿から発つ私たちを、気のいい宿屋の女将さんが見送ってくれることもあって、今日の女将さんは昼ご飯にとサンドイッチも作って持たせてくれた。

女将さんも旅人を送ることに慣れていて、私たちは軽く手を振っただけで別れた。

この街では朝早くから市が立つので、往来はすでに賑やかだ。

西国の辺境だったはずの荒野では、迷い人狩りや戦争の話題を囲んだ人々がどこか息を潜めて生活していたので、更に辺境のこの地域の人々は自分たちの生活だけに生きていてどこか伸びやかで平和だ。

そういう地域になってくるとステファンも私も、あまり迷い人だとかそういうことを気にしないでいられた。

旅の最中、ステファンとは色々な話をした。

彼は自分が消えた十五年間の元の世界のことを知りたがったけれど、私は彼が住んでいたイギリス（ユナイテッドキングダムって英国のことだったとあとで思いだした）のことをよく知っているわけじゃないから、記憶にある大きな事件を話してきかせた。

ステファンの方もまだ十歳だったこともあって、それほどちゃんとした元の世界の記憶があるわけじゃなくて、私のテロがどうか世界的不況がどうかという話にはいまちピンとこない様子だった。彼が話すのはほとんどが西国に来てからの話だ。

ステファンは、迷い人の村に近い荒野に落ちた。だから、迷い人の村の人に拾われて、幸いにもイギリス人の血が混じった迷い人の子孫の夫婦に預けられることになった。最初は言葉も何もかもが違う生活に戸惑って、養父母に元の世界へと返してくれとなじったりもしたそうだ。だが、彼らは根気よくステファンの不安を宥めて、彼に言葉から一つ一つ教えた。子供のいない夫婦だったので、ステファンは可愛がられたそうだ。

「そもそも村には、子供はほとんど居なかった」

草地の目立ってきた荒野を二人でぼくぼく歩きながら、ステファンは日除けのマントから地平線を見つめていた。

「迷い人と、この世界の人間とではうまく子が出来ないようなんだ」

研究者みたいにそう言ったくせに、ステファンは気まずそうに私と視線を合わせない。

「だから村じゃ、近親相姦が繰り返されていて、そのせいでまた子供ができなくなっていた」

だからステファンは歓迎されはしたものの、ステファン自身の体

は大人になるわけじゃない。いつまでも落ちた時のままだ。

「迷い人がどうして年をとらないのかは、子孫たちもよく知らない。俺は、やっぱり別の世界の人間だから、この世界には馴染めないんだと思っていたが」

それは私の疑問の一つでもある。

「北国についたら、ヨウコはどうするつもりなんだ？」

とりあえずは自分の疑問を解消する。

「それで？」

それで？

もしも、北国で言われたらどうしよう。

元の世界へ帰れるって。

「——わかんない」

ぽつんと言った私を、ステファンは出来の悪い妹を見るみたいに
して苦笑した。

地図を見ながら休憩して、すっかり手に馴染んだ方位磁石で方向
を確認しながら辿りついた街は、今までの岩ばかりの街とはまた一
風変わった街だった。

森みたいの木々に囲まれていて、街の周りはほとんど草地だ。

ツリーを飾るみたいに木々に吊るされたランプの明かりが灯され
る頃に着いたから、ぼんやり浮かぶ木の家々はまるでおとぎ話の世

界だった。

道はならされた土の道で、久しぶりの感触に固い岩の道に慣れた私はふわふわとスポンジの上を歩くような感覚になった。

「可愛い弟さんですね」

まず立ち寄ったギルドで、愛想がいい受付のお姉さんがにっこり笑って言った。

村に居た頃は着のみ着のままだったので、新しく服を買って身綺麗にしてあげると、予想外に上品な赤気のお坊ちゃんが出てきたのだ。私の背の半分しかない華奢な色白だし、切りそろえた赤毛はふんわりとして撫でると気持ちいいぐらいだし（ものすごく嫌がられるからあんまり撫でられないけど）、新緑を思わせる緑の吊り目は賢そうだし、実際、その可愛らしい口から出てくるのは大人の皮肉だ。私は無然とするステファンをひとしきりお姉さんに自慢して原稿を渡してお金をもらう手続きをするのが、ここ最近の日課になっている。

「にやにやするな。だらしない」

決まって不機嫌になるステファンに「まあまあ」と言って、宿を探す。

こうしていると、本当に弟が出来たみたいだ。

見つけた宿屋の主人は騎竜を珍しがったけど、快く厩を貸してくれたので、サリーに干し草をあげてから彼女を休ませて街に出かけることにした。

ついでに夕食も食べるから、ステファンも一緒だ。

森に囲まれた、というよりも森の中の街は歩く人もなんだかおとぎ話の中の人みたいで、自分まで妖精の国だか何だかに迷い込んだ

ようだ。

でも、道すがら買ったホットワインみたいな地酒はお腹にしつかりとアルコールを満たしてくれた。

「飲み過ぎるなよ」

今ではすっかり私の懐を管理しているステファンは、横目で私をぎろりと睨んでくる。

「はいはい。ステファンは欲しいものないの？」

おとぎ話の商店街みたいな店が立ち並ぶ街路には色々な店がある。小窓のついた店には木で作ったらしいおもちゃが見えたし、大きな間取りの本屋には、びっしりと小難しいハードカバーの本が並んでいたし、上品なツタ模様をかたどった入口のアクセサリーのお店にはアンティークみたいな宝石が並んでいる。

ぼんやりとランプに照らされた店は旅人や商人相手でもあるらしくて、この夕食の時間でも人通りは多かった。

「――元の世界で、住んでた街みたいだ」

ステファンがどこか遠い目をしてぼつりと言った。

「よく父さんに連れてきてもらったんだ。dinnerを外でとる時には、遅くまで開いてる店の通りを通って行って」

おもちゃをねだってそれをいつも買ってもらえなかった。でも、

「必ずChristmasにはそのおもちゃをくれた」

「そっか」

お父さんとの晩御飯の記憶も、クリスマスの楽しい思い出も、きつと何度か自分の中で繰り返したんだろう。

ステファンの目には、もう懐かしむような色はなかった。

「それを養父母に話したら、それを真似て、俺が家に来た日に毎年ご馳走を食べるようになったんだ」

そう話すステファンは、今度は暖かく笑った。

「あ、あれ買おう」

私の目についたのは、金属で作られたストラップみたいな飾りだ。店のおじさんによると、年に一度のお祭り用の飾りで、祭りの日に一斉に木に飾るんだそうだ。

馬や家、人や動物が薄い金属で影絵みたいに切り取られていて、何かに触れるとリーンと澄んだ音がする。

「これにしよう。ステファン」

「どうして俺に聞くんだ」

私の隣で退屈そうにしていたステファンは呆れて溜息をつく。

「ステファンも買うからだよ」

「俺はいらない」

「どれにしようかなー」

ステファンの不満を聞き流して、私はずらりとツリーの飾りみに吊るされた飾りを物色した。

あ、ハート型がある。どこの世界も何だか似てるもんだな。

「ステファンはこれにする？」

「いない」

ハート型はお気に召さないらしい。

ふと目についたのは、わっかが幾つも重なったみたいに動く丸い飾りだった。ゆらゆら輪が動いて面白い。

「これにしよう。おじさんこれ二つ」

「はいよ」

「おい！」

ステファンの有無を無視して支払いを済ませたら、やっぱりステファンは不機嫌だった。

「はいこれ」

私は飾りを一つ、ステファンに差し出した。

「……何で、俺に」

「いいじゃない。お揃いで」

その様子を店先で見ていたおじさんは笑った。

「仲がいいねえ。ここらじゃ、普通そういうのは恋人同士でやるんだよ」

ステファンが何故か真っ赤になった。

そのおじさんに教えてもらって美味しいシチューの夕食にありついても、ステファンは何だかふてくされたままだった。
何よーもう。

宿に帰って一緒に部屋で眠る前、ステファンが自分の手を出してきた。

「ん」

「――なんですか、その手」

街の様子をランプの明かりで書きとめていた私は思わず顔をしかめた。何を出せていうの。今まで不機嫌だったくせに。

「さっきの」

「さっきの?」

オウム返しの私に、とうとうステファンは白い顔を真っ赤にした。

「さっきの飾りをくれ!」

ああ。そーいやまだ私が持ったまんまだった。

ベッドの脇にある今ではすっかり愛用になった肩かけ鞆のポケットから飾りをひっぱり出すと、鞆にかけていたマントがぼさりと落ちてしまった。

私の無精に、ステファンは思わずといった風に溜息をつく。

「はい」

呆れ顔の彼に飾りを渡して、私はマントを拾いあげた。
しかしこのマントは丈夫だな。まだ草臥れもしてないよ。

「そのマント、大事なもののなか？」

私の様子を見ていたらしいステファンがやたら静かな声で訊くので、私も何だか丁寧にマントを畳んだ。

「うん。大事な人からもらった大事なマント」

孤独で残酷で、面倒臭い私の魂の片割れ。
元気にしているだろうか。

「……おやすみ」

ひとに尋ねたくせに、ステファンはさっと顔をそむけて向かいのベッドに入ってしまった。難しい年頃なんだろうか。年上だけど。

「おやすみ、ステファン」

私もマントを脇に置いて、手帳や万年筆を片付けてからランプの明かりを落とした。

「――なあ」

ベッドに潜りこんだら、寝たと思ったステファンの声がした。

「なあに？」

「ヨウコは、この世界で特別大事な人がいるのか？」

ステファンと川の字で寝るようになってから、初めて訊かれた。ステファンには、今までの私のことはほとんど話していない。

大事な人は、いるんだろうか。

大事にしたい人たちは居る。

でも、今まで生きること必死で、助けられることに感謝していたから、誰が特別かなんて考えたこともない。

「――わからない」

素直に応えたというのに、ステファンは何だか布団の中で笑ったみたいだった。

「ヨウコらしいな」

私らしい？

なんだそれは。

そんなことを考えるうちに、私の方がうつらうつらとしてきて、夢の中に吸い込まれていった。

――それから、数日後、私たちは北国の城門に辿り着いた。

木と小姑（後書き）

誤字修正しました。ご指摘ありがとうございます。

絶叫系とテノール

草と荒地に囲まれた石の門は大きかった。

そこがただの関所だと知ったのは、暇そうに詰所に居た群青色の制服のおじさんが教えてくれたからだ。

「アンタたち、迷い人かい」

端っことはいえ北国なのに、おじさんは西国の言葉で話してくれた。

西国の人なのかと問うと、

「通じる言葉で話した方がいいだろう」

そう言っておじさんは黒電話みたいな受話器を取り出して、どこかに電話をかけた。

電話、だよな？ どうみたって一昔前の電話。

ステファンと私はあまりにも見憶えのあるその様子を見ながら、おじさんが電話を終えるのを待った。

「アンタたち、名前は？」

おじさんは電話の途中で話し口を軽く抑えて訊ねてくるので、名前を答えると、

「日本人とBritishか。珍しい組み合わせだな」

驚いたことに、流暢な日本語と英語交じりに西国を操った。

どうやら北では組み合わせは珍しくとも、私たちは珍しいわけではないらしい。

電話を終えたおじさんは、

「中に入ったら案内人が居るから、そいつに従うといい」

ゴゴ、と見上げても端のなかなか見えない関所の扉が、人の通れるほど開いてその暗い内をのぞかせる。

「幸運を」

おじさんの声を最後に、ステファンとサリーと私は北国へ辿りついた。

「ようこそ、いらっしやいました。ヨウコさま。ステファンさま」

中で待っていたのは、ミニスカのお姉さんでした。

会社の受付嬢よろしく、暗闇の中にぼんやり浮かんだ光の中で、私たちを西国語でにっこり迎えてくれ、

「わたくしが北国へご案内させていただきます。モニカと申します」

営業スマイルのまま、モニカお姉さんは私とステファンを光の中、よく見たら複雑な紋様が描かれているへと招いてまたにっこり。

「手続きなどのお話はまた後日に伺いますので、本日はこちらで用意した宿屋でお休みください」

彼女が丁寧の説明をし終えてから、紋様が一際輝く。

「――消えた？」

光は何も起こさずに立ち消えた。ついでに広いのか狭いのかわからない部屋は暗闇に包まれる。隣のサリーがいささか緊張した様子で震えたけれど、

「少々お待ち下さい」

お姉さんの声と一緒に、再び床がぼんやりと光に浮かんた。

彼女は細い指をひと振りしてふんわりと光の球を作ったかと思ったら、それをどこかに飛ばす。そして、すぐに帰ってきた球を掌で受け取ってから、私たちに向きなおった。

「――ステファンさま。わたくしと共にいらっしゃってくださいませ」

自分だけモニカさんに呼ばれ、ステファンは困惑を隠せないで私を見上げた。

私に訊かれてもわかんないよ。

さっきは一緒に連れていこうとしてたしね。

「ヨウコさまは、しばらくこちらでお待ち下さいませ。案内の者が参ります」

モニカさんは丁寧だけど、ゆっくりと有無を言わせない口調で言っ
って、ステファンを自分の元へと招いた。

「ヨウコ」

「大丈夫。——モニカさん」

私は、不安そうなステファンをモニカさんの前へ押し出しながら、彼女を見つめた。

「あとで、ステファンに会えますか？」

「はい。必ず」

モニカさんも私をまっすぐ見つめて言った。そこに営業スマイルはない。

うん。大丈夫だ。

「じゃあ、ステファン。あとでね」

私はサリーの手綱もステファンに預けた。

「必ず、会おう」

モニカさんに言われて、私が床の光る紋様から足を退けると、彼らは魔法のように——たぶん魔術とかいうやつ——消えた。

私はすっかり暗闇に残されて、時間の感覚もないからぼんやりと待っていると、薄闇の奥からぼんやりとした光が現れた。

それはランプの明かりらしく、暗闇の中にぼうと浮かびあがって、やがて私の目の前までやってきた。

「——ヨウコさまですね」

やってきたのは、背の丸まったおじさんだった。執事のお仕着せ

みたいなスーツを着ているけれど、禿げた頭に丸く潰れた顔、まゆげもないのでちょっとしたホラー映画の世界の住人だ。

「御迎えに上がりました。お疲れでしょうが、我が主に会っていただきます」

おじさんはぼそぼそと低い声で彼もまた西国語で言い、ランプを掲げて踵を返す。

ついてこい、ということらしい。

どのみちこんな暗い部屋に取り残されるわけにもいかないのです、私はおじさんについていくことにした。

ランプとおじさんを追いかけると、この部屋がとんでもなく広いことがわかった。

回廊みたいに幾つも柱が立ち並んでいて、おじさんと私の足音がどこまでも響く。

「あの」

普段のように声を出したら、私の声は反響してぶわんと辺りに広がった。

「何でしょう」

おじさんは振り向きも、迷惑そうな顔もしないで先を進む。

私は自分の声がうるさくて耳を塞いでしまうのに。

「私は、どこへ連れていかれるんですか？」

いくらホラーなおじさんだからといって、これからホラー展開は

御免こうむりたい。

こんなおじさんについていくしかない私の展開がサスペンスだとしてもだ。

「我が主の元へお連れいたします」

「えっと、主さんって…?」

「お連れするようにとだけ聞いておりますので」

それきり会話の糸口をぶったぎられてしまったので、私は黙っておじさんについていくことになった。

しばらくついていくと、何やら非常階段みたいなランプが灯った、

「エレベーター?」

外国にあるような、格子扉の箱はエレベーターだった。

おじさんは私には答えず、上と矢印のついたボタンを押す。

そうして甲高い音と機械音と共にやってきた箱におじさんと乗り込んだ。

操作板の前にはおじさんが立って、私は箱の奥へと押しやられて、エレベーターは動きだす。

いったいどんな作りになっているのか。

エレベーターはまず上に向かったと思えば、今度は左に、そして次には斜めに動いた。

移動は滑らかでよいスピードだが、そのたびに私は「うわ」とか「おお」とか女らしくない声を上げるはめになった。

そんなびっくり箱エレベーターから降りた時には、私はぐったりとしていた。

絶叫系の乗り物は大嫌いなんです。

「――着きましたよ」

さすがにやや心配そうなおじさんが無表情に言うので、私は何とか歩き出す。

降りた先も、薄暗かった。

荷持のほとんどはサリーに預けていたので、私は相棒のマントと伯爵の万年筆と手帳がチャリムの上着に入っているだけだ。

なんとかふらつかずにおじさんに着いていくと、青白い光の漏れる部屋へと通された。

部屋は、細長かった。

青白い光が無数に飛び、光の先の天井は見えない。まるで筒のような部屋の壁はまっすぐ上に伸びて、どこに繋がっているのかわからないパイプや棚のような形をした四角の箱がバラバラと張り付いている。樹など一つもないのに、何故か森の中に居るような静かな気分になった。

「お連れしました」

ぼんやり部屋を見回す私を放って、おじさんは部屋の真ん中の革張りの椅子に丁寧な頭を下げた。

おじさんに答えるように、椅子がぐるりと回って現れたのは、

「いらっしやあい」

真っ白な髪を奇麗にカールして、真っ白なフリルがふんだんにつ

いたワンピースを着た、

「待っていたわ。ヨウコ」

テノールの声のお兄さんでした。

青白い光の舞う幻想的な部屋の中、フリルの翻るワンピース姿の、ぱっちりとした目元が印象的な愛らしい人形のようなゴスロリがふんわりと椅子に腰かけている。

「どうしたの？ 疲れた？」

白ゴスロリから出てくるのは間違いようもなく男の声ですが。

ハスキーボイスというわけでもなく、目を閉じて聞けば色気も漂うまごうことなきテノールのいい声です。

彼は白レースの手袋に包まれたほっそりとした手で、ここまで私を連れてきたお兄さんに椅子を出すよう指図した。

「さあ、どうぞ」

背の丸いおじさんが何所からか持ち出してきた椅子をごとごとと彼の正面に置いたので、にっこりとゴスロリお兄さんは私に勧めた。椅子はロココ調というのか、ごてごてしい飾りがついていたいかなもな椅子だ。私は何となく動けずお兄さんと椅子を見比べてしまった。その様子が笑いを誘ったのか、ゴスロリお兄さんは細くて長い指を口元に上品にあてた。

「この椅子は嫌い？ だったら私の膝の上でも良いのよ？」

そのままイタズラしちゃうかしら。

ピンクローズの唇がゴスロリにあるまじきいかがわしい空気を吐きだした。

変態が居る。

ヘンタイが居ます。

おまわりさん！

仕草は上品でも言ってることがあれですお兄さん！

私は何だかどっと疲れて、最初に勧められた椅子に浅く座った。

「あら、残念」とか冗談にも聞こえない声が聞こえたけど無視だ無視。

「さて、自己紹介がまだだったわね」

ふんわりワンピースのお兄さんを目の前にしても、一見しただけじゃお兄さんには見えない。むしろ私の方が男に見えるぐらいだろう。

「アルティフィシアル・サングレ。一応、魔術師やってるのよ」

「――ヨウコ・キミジマです。一応、ライターやってます」

ギルドに原稿送ってるだけだけど、一応そういう職業だと言っておこう。

それぐらいの軽い気持ちだったけれど、舌かみそうな名前のお兄さんは目をちよっと丸くした。

「珍しいのね。今時、西国からやってきて仕事持ってるなんて」

そういえばそうなのかもしれない。

私はいつまんでギルドと旅の資金の話をした。

「なるほどねえ。だからアイツは急に帰ってきたのか」

ゴスロリお兄さんはそう呟いて、一人納得すると、

「確か、ラーゴスタとバクスランドの騒動がメフィステニス伯爵によって鎮圧されたわね。旅の日程から考えるとヨウコちゃんはその騒動が終わったあたりにこっちに出てきたの？」

やけに突っ込んだ質問をされたので、私はちょっと黙ってしまった。

どこまで話せばいいのだろうか。

それに、このゴスロリお兄さんが何者なのか、いまいち分からない。

だから、私は「そうです」とだけ頷いておいた。

その様子をお兄さんは観察するみたいに見ていたけど、何も言わなかった。

このお兄さん、見た目によらず油断ならない。

「旅は順調だったみたいね。追いはぎなんかには遭わなかった？」

「はい。行程の半分は騎竜できたので」

「そう。一緒に来たっていう男の子は最初から一緒だったの？」

「いえ。途中で一緒に行くことになって」

何だか質問攻めだ。

私がちよっと戸惑うと、お兄さんは「ごめんなさいね」とにっこり笑う。

「あなた、ちよっと面白い体質のようだから一人だけこっちに来てもらったの」

体質？

疑問符が浮かんだと同時に、目の前によく分からない紋様が光の軌跡となって描かれていた。ぼうと浮かんだその先に、お兄さんが椅子に腰かけたまま笑っている。

「そのままじっとしていてね」

その途端、カッと目の前がひどく眩しくなって、私は思わず腕で顔をかばって目を閉じた。

その耳を通り過ぎるのは、

ドドドドドド！

爆音だ。

それなのに、私は腕にも熱さを感じない。

やがて爆音が消えたので、顔を上げて啞然とする。

不思議な森のようだった部屋が丸焦げになっていた。

ロココ調の椅子も炭になってもう座れない。

私を連れてきたおじさんも遠くの壁の脇に逃げて、なんだかシエルターみたいなものを被っていた。

私の後ろは、穴は開いていないもののまるで防火タイルを高温で焼いたみたいになっている。

それなのに、私は髪どころかマントの先すらも焦げていない。

恐らく、さっきの爆音は目の前の椅子のお兄さんが作りだしたはずなのに、人が焦げてなくなるような凶行のあとに微笑み一つ浮かべただけだった。

「これではっきりしたわね。あなた、魔術が効かないのよ」

はい？

「……どういことですか。アルティフィシ：えーと」

「アルティでいいわ。敬称はつけないでちょうだい」

いまいち事態を呑みこめない私に、お兄さんは子供に教えるような口調で笑う。

「言葉通りよ。あなたには魔術が効かない。今まで魔術に触れる機会があまり無かったようだから、知られなかったのね」

つまりね、と彼は前置きして続けた。

「本来なら誰でも持っているはずの魔力がなくて、ついでに魔術という人工的な現象の方程式を無かったことにしてしまうようね」

意味がわかりません先生。

首を傾げた私に、アルティ先生はもっと分かりやすく説明を加えてくれた。

「つまり、この、魔術大国である北国で一般的に使われている転送

魔術から転移魔術、その他諸々のありとあらゆる魔術があなたには効かないし、使えないってこと」

「……魔術の才能が根本的なところから抜け落ちているということでしょうか」

良いのか悪いのかわからない。

そんな私に、アルティ先生は朗らかに微笑んだ。

「不思議よねえ。迷い人っていうのは、他の世界のことわりを持ちこむからこの世界ではありえないぐらいの魔力を持っているか、そうでなくても魔術が使えない人間なんかないのよねえ」

ありえない人間という評価は生まれて初めてだ。喜ぶべきなんだろうか。

「どうして私に魔術が効かないって分かったんですか？」

唐突で非常に危険極まりないが、さっきのはアルティ先生の実験だ。

先生は「ああ」と頷く。

「あなた、関所で魔法陣に乗せられなかった？ あれはお客様を北国の中の宿泊施設に連れてく転送魔術なんだけど、それがまったく機能しなくなったから」

なるほど。あのモニカお姉さんがこの危ない先生にお知らせしたのか。心臓に悪いことを。

「……それじゃあ、私、北国で暮らせないってことですか？」

魔術が一般的な北国では、私に長期滞在は無理だ。

「さっきエレベーターに乗ったでしょう？ あれ、動力源は魔術の術式なのよ。どうやら、物に作用している魔術まで消してしまうという効果はないようね。普通に泊まるぐらいなら問題ないんじゃないかしら？」

ギルドの手続きは出来ていたんでしよう、と尋ねられたので頷く。

「あれも魔術の応用だから、あれが問題なく動いたのなら、しばらく泊まるぐらいは問題ないわ。宿へはティエンポスに案内させるから。今日のところはゆっくりしなさいな」

始終笑顔で、アルティ先生は私を部屋から追い出した。確かにこれ以上講義を受けたところで、私の頭がついていけると思えない。

私はここへ連れてきてくれたおじさんと一緒に暗い廊下に追い出されたので、隣でランプに火をつけているおじさんに質問した。

「ティエンポス、さん？」

「シィ」

ティエンポスおじさんは西国語で「はい」と応えてくれた。

それで、私は今までのアルティ先生が、いつの間にか日本語で話していたことに気がついた。

「……アルティさんって、何者なんですか？」

私の前に立って歩き出したおじさんは、ちらりと私を振り返って
ぼそぼそと応える。

「ご本人におたずねください」

私はまた、妙な人たちに出会ってしまったようだ。

ホテルと印税

「無事だったか」

そう言つて、ステファンはホテルのエントランスであからさまにホッとした顔で出迎えてくれた。

私って、そんなに幸薄そうですか。いや自分でも常々思っておりましたが。いや口にしたら負けだからね！　こういうことは！

私はティエンポスおじさんに連れられて、ホテルに放り込まれて自分でフロントに手続きをしたところでステファンに見つけられました。

ステファンはモニカさんが手続きやら書類やら全部揃えてくれたらしい。――私は無しですか。まあ、言葉は忘れかけの日本語で書かれた書面だったんで理解できましたがね。

「ステファンはよくしてもらったみたいだね」

どこか古いイギリスのホテルみたいな内装の宿屋で、なんとフロントやホテルマンまで揃ってる。制服着た人たちににこやかに案内されるとか初体験でした。

迷い人専用だという宿には、同じような人たちが集まっているように、会話も人種も多国籍だ。

ステファンは、どうやら自分の英語が通じる人たちを見つけたように、彼らと話してきたと普段の彼からは想像できないほど熱っぽく話してくれた。

「ヨウコも同じ国の人を探すといい」

「うん。そうだね」

興奮気味のステファンに、私は曖昧に答えた。

この世界で会ったあちらの世界の同じ国の人にあまりいい思い出がなくて、正直言おうと探すのは気が進まない。偏見だろうけど。

身形もすっかり元の世界にあるようなTシャツとジーンズに着替えたステファンは、どう見てもあちらの世界の住人だった。

未だチャリムを着ている私は、すっかり取り残されていた。

「ヨウコ。この北国から、元の世界に帰れるぞ」

人通りの多いエントランスから少し離れたカフェに入ると、ステファンはそう切り出した。

ステファンを連れていったモニカさんの話によると、このホテルは他の国からやってきた迷い人たちの滞在用のホテルで、北国が運営しているらしい。そして、迷い人はここで選択を迫られる。

「この世界に残るか、元の世界に帰るか」

いつか、伯爵に聞いた話の通りだ。

「案内人が話してくれなかったのか？」

ティエンポスおじさんは訊けばだいたいのは教えてくれるけど、そういう親切な解説はなかったです。

それに魔術の効かない私では、どうも事情が異なるらしいし。

このホテルに留まる期間は決められておらず、そのままここで仕事を探して北国に暮らす迷い人もいるらしい。

「俺は、しばらくここに滞在するつもりだ」

ステファンはもう今後のおおよその事を決めているようで、北国を観光でもしながら、帰るかどうかを決めるという話になった。

そうして話しながら、夕食のバイキングに二人で行って、懐かしい食材のパンやスープや、料理を食べていると（ポタージュとかカレーとかあったよ！）まるであちらの世界に帰ったようだった。

「私も、西国から逃げてきたんですよ」

向こうの世界なら話なんかできなさそうな黒人のお兄さんが、たまたま隣になった夕食の席で西国語で話しかけてきた。

「奴隷として働かされて、戦争に駆り出されて、家族も友人も皆失いました」

ステファンと同じような人たちは他にもたくさん居た。

全部の人と話すことはできなかったけれど、広いレストランを埋める人たちが、全部同じ世界の人だと思うと、少し圧倒された。

ステファンは彼らと熱心に話していたけれど、私は何だかカヤの外だ。

彼らがこちらの世界にやってきた理由はほとんどない。ほとんどが、突然にこの世界に落とされたらしい。

私は、完全に巻き込まれた形でこの世界にやってきた。

でも、彼らは何の理由もなく神隠しみたいにこちらにやってきたのだ。

じつと自分のすっかり硬い手を見ると、今までの思い出ともつかない出来事が思い出されたけれど、それがどれほどの人たちに助けられて、どれほどの幸運だったのか、何だか実感してしまった。

急に目標を見失ったような気がしたまま、私はステファンと別れ

て与えられた部屋に戻った。

「あ」

ひと気のない廊下に、さっき別れたばかりの丸まった背を見つけて思わず立ち止まる。

「ティエンポスさん」

おじさんは無表情に頭を下げると、懷から封筒を取り出して私に押し付けた。

「明日もまた、我が主があなたにお会いになります。明日の午後にまたお迎えに上がります」

「え。明日はちょっとステファンと街を見て回る約束で」

「お迎えに上がります」

私に拒否権はないらしい。

丁寧にお辞儀をして慇懃無礼に立ち去って行くおじさんの後ろ姿を見て、私は溜息をついた。

翌朝、レストランで待ち合わせたステファンに、街には行けないことを告げた。

ステファンは不機嫌そうな顔のまま、私を見上げてくる。睨まないでよー。

「午前中はどこへ行くんだ？」

「ギルド」

最後の原稿を届けられないといけない。

昨夜、荷物は自分の部屋に運び込まれていたもので、辿りつくまでのことを原稿にしていたのだ。これを渡せば、最後になる。

ステファンは口を尖らせて小言を言ったけど、滞在して長い人たちに街を案内してもらおう約束をとりつけていたようで、そちらに向かった。私は、フロントでギルドの場所を聞いて、出かけることにした。

ホテルに連れてこられた時は、ほとんどトンネルを通っていたから全くわからなかったけど、日に照らされた街は壮大だった。

鉄と石造りのビルが立ち並び、電線や路面電車まで走っている。灰色の街を歩く人たちはどこかで見たことがあるようなスーツやドレスがほとんどで、髪の色もこちらの世界によくあるような色とりどりのものではなくて、やっぱりどこか元の世界に似通っている。

車も走っていたけど、排気ガスなんかは出なくて、道路の真ん中にはちゃんと信号機もついていた。商店は小奇麗な外国風で、ガラス張りの店がほとんどだ。

フロントで教えてもらったとおりに幾つかの通りを抜けて信号を渡ると、東国でもラーゴスタでも違和感のあったギルドの建物がここではそこにあって当然のように鎮座していた。このギルドは他の国の支部より大きくて、この建物そっくりに他の国にも建てていることは分かった。ここが、ギルドの本部だという。

ギルドに入るといつものように窓口のお姉さんが挨拶してくれるので、私は原稿を差し出した。が、お姉さんは受け取ってくれなかった。

「こちらへおいでください」

なぜかお姉さんに連れられていつもよりも広いギルドの奥の、エレベーターに乗せられた。案内してくれるお姉さんは私に答えるつもりがまったくなく、操作板に向いたままさっさと私に背を向ける。

大人しくエレベーターの向かう先を見ていたら、

「――最上階？」

ちん、と甲高い音とジャっという格子戸の開く音と共に連れ出されたのは、ふかふかのカーペットの廊下。他の階や一階はタイルだ。嫌な予感がひしひししつつ、一際大きな観音開きのドア前に立たされた時には帰りたくなった。

それでもお姉さんは上品にノックしてからドアを開けてしまう。その奥から響いてきたのは、

「いらっしやい」

聞き覚えある声のような。

何だかやる気とかそういうものを削がれた気分、私はお姉さんに導かれるまま部屋に入った。

部屋は広かった。

何枚あるんだか分からない窓の並ぶ明るい部屋の真ん中にぽつんと机がある。

やっぱり広いその机についていたその人はゆっくりと席を立て、私を出迎えた。

「お久しぶりですね。ヨウコさん」

上等そうなフロックコートに透けるほど淡い金髪の男が西国語で胡散臭く笑う。

「……ミカエリ・ジョーンズさん」

胡散臭い男はますます何を考えているのか分からない微笑みを深めた。

「まずは、ここ北国へようこそ。無事に辿りつかれたようで、おめでとうございます」

「どうも」

どうして北国に居るとか、なんでアンタがギルドの本部の最上階にとか、色々訊ねたいとは思ったけれど、どれもミカエリ・ジョーンズがちゃんと答える可能性が限りなくゼロなので、私は手に持たされたままだった原稿を彼に差し出した。

「これが最後の原稿です」

渡された原稿を、ミカエリ・ジョーンズは不思議そうな顔で受け取って、

「では、元の世界に帰るおつもりなのですか？」

「——私が北国についたら、もう仕事は終わりなんじゃないですか？」

もともと、私が資金を欲しかったのは北国に辿り着くためだ。

「ツケになった借金はどうなさるおつもりで？」

そういえば、一年契約で待ってもらってるんだった。

とはいえ、私はまだ何も決めていない。

押し黙った私に、ミカエリ・ジョーンズは自分が今まで座っていた机に目を向ける。

「原稿は全て読ませていただきましたよ」

広いはずの机の半分を埋める原稿用紙を指されて、私は思わず目を丸くした。

私、あんなに書いたのか。すごいな。

「大変興味深い内容でした。よく立ち寄った街のことを調べて書かれましたね」

「じゃあ……」

「ええ。ギルドで本にさせていただきますよ。本が売れたら印税でこれまでの資金を回収させていただきます」

自分の書いたものが本になるのか。

何だか妙な興奮で、お腹の中がぞわぞわする。

「それで、元の世界に戻ることをお決めになったんですか？」

私の妙な興奮を無視して、ミカエリ・ジョーンズはまた話を戻してしまった。

答えるまで同じ問いかけをされそうだ。

「昨日着いたばかりなので決めていません。私が戻ると不都合でもあるんですか？」

「そうですか」と胡散臭い男は頷いて、

「本の印税が多く入れば、あなたの借金も同じく回収させていただきますが、せめて本が出来上がるまで居てはどうですか？」

確かに。

それに本が売れるかどうかも分からないわけだしね。

自分の本がどういうものか、見てからでも良いだろう。

選択の材料に加えておこう。

これからお茶でも、とミカエリ・ジョーンズがまた下手なナンパみたいなことを言うので、私は断った。

「午後から約束があるので」

そういうと、いつも胡散臭いはずのミカエリ・ジョーンズが笑みを無くして見つめてくる。

「気をつけてくださいね。誰もがあなたの味方ではありませんから」
当たり前じゃないか。

「味方かどうかは私が決めます」

呆れ顔の私に、ミカエリ・ジョーンズはいつもとは違う、どこか

嬉しそうな顔で笑った。
相変わらずよく分からない男だ。

ランチと結婚

ギルドを出るまで連れてきてくれたお姉さんと一緒に胡散臭い男に見送られて、建物を出たところで私はぼそぼそとした声に呼びとめられた。

「参りましょう」

晴れた空が恐ろしく似合わないティエンポスおじさんが、ギルドの建物の影から私を手招きしている。

ここに来ることは言っていなかったはずなんだけど。

「昼ご飯がまだなんですけど」

「主がランチをご一緒したいと仰せでした」

勘弁してよ。

どこの世界に初対面から実験とはいえ、魔術で焼き殺してくれようとした人間とご飯食べたい人がいる。

私はあーだこーだと理屈をつけて、ティエンポスおじさんを丸めこみ、近くで見つけたファーストフードみたいな屋台でハンバーガーに良く似た軽食を手早く食べた。オープンカフェみたいに椅子が並べてあって、私と同じように食べる人は結構いた。

おじさんは無表情に不満そうだったけど、この軽食は美味しかったよ。でも今まで西国語で話しかけられてたから、店のおばさんに「ブエノスディアス」って声を掛けられて初めてここが北国だってことを実感しました。

ティエンポスおじさんに注文してもらって、なんとか「グラシアス（ありがとう）」だけ話した。どうして挨拶だけ出来るかってい

うと、あの御屋敷で騎士たちに習ったお勉強の名残だ。耳を澄ましてしていると、周りの人も北国の言葉ばかりで、あのホテルがやっぱり特殊なんだってことが分かった。

お腹を適当に満たしたところで、私はおじさんに連れていかれることになった。

大通りをそれて小道に入ってくねくねと行くと、いつのまにか小さなトンネルの入口で、おじさんは昨日のようにどこから取り出したのかわからないランプに明かりを入れて、私を暗闇に誘った。

そうして辿りついたのは、昨日とは違う部屋だった。

広い部屋に広いテーブルがドンと置かれて、どういうわけか窓の外から光が入ってきている明るいダイニングだ。でもその窓の外に風景があるわけじゃなくて、ただ人工的な光が部屋に差し込んでいるだけのようだった。

「ええ〜？ もうお昼ご飯食べちゃったのお？」

広いテーブルの窓際に腰かけていた妖艶なお兄さんはそう声を上げた。

本日は昨日の白いゴスロリとはうって変わって、明るい紫のドレスだ。装飾は少ないものの首元を白いレースの襟で彩った形で、ご自慢の白い髪はどこぞの家庭教師よろしく奇麗に結いあげられている。

「せっかく一緒に食べようと思ったのに」

並べられていた料理はパスタとサラダとパンのランチセットだった。上品に皿の上で巻かれたパスタがお兄さんの頭にちよっと似て

いて綺麗だ。緑の豆をあしらわれたパスタはさぞ美味しいだろうが食べる気がなくて、私はお兄さんから離れた料理の並べられていない席についた。

私の様子を見ながら、パンをつまんでいたお兄さんは苦笑したようだった。

「またいきなり魔術なんか仕掛けないわよ」

そうにこやかに言うので信用はならない。あの時だって始終笑顔だったのだ。

「ミカエリに会ったんでしょう？」

目を瞬かせた私が面白いのか、くすくすとアルティお兄さんは笑う。

「ラーゴスタからいきなり帰ってくるんだもの。おかしいと思ったのよ」

「……ミカエリ・ジョーンズさんとお知り合いなんですか？」

訝る私に「ええ」とこともなげに肯いて、お兄さんはパスタをフォークに巻きつける。

「古い知り合いよ。誰の言うことも全然聞かないから、面倒な男だわ」

アルティお兄さんはそう言ってパスタを頬張ると、不作法に赤い舌で唇を舐めた。

「あの男が何者か、あなたは知ってるの？」

ミカエリ・ジョーンズについて私が知っていることと言えば、やたら胡散臭いことと、

「ラーゴスタの支部長さんですね」

「そうね。でもそれが全部じゃないわ。あの男の本当の肩書はね、ギルドマイスターといって、ギルドの最高責任者よ」

あれが、最高責任者？

確かに抜け目のない男だとは思うけど、胡散臭い。

そう思ったのが顔に出ていたらしい。お兄さんは笑った。

「この北国に王はいないわ。十二人のマイスターという代表者を中心に、円卓という議会で政治も経済も動かしているのよ」

東とも西とも違う政治形態を持っているのか。

その中の一人があんな胡散臭い男だなんて。大丈夫かこの国。でも、確か、

「北国って、他の国とほとんど交流がないんですよね」

「そうね。でも、この北国という国の性質上、仕方がないことなの」

フオークでサラダの野菜を突いて、アルティお兄さんは男らしい大きな口で葉っぱを口に入れた。

「この北国はね、迷い人が作った国だから」

もぐもぐと口にサラダを含みながら言われ、私は不思議と納得した。

迷い人、と呼ばれる私と同じ世界出身の人たちが作ったのなら、色々なことに説明がつくからだ。

銀行みたいなギルドも、おさいふ木札も。

「――どうして西国の人たちを助けてくれなかったんですか？」

助けられたはずだ。

ギルドに匿うとか、西国に警告するとか。

少なくとも百年前は、そうしても良かったはずだ。

「西国ていうのは、世界的に見ても迷い人がよく落ちる場所だね。

四国の中で一番多いの。この北国でも一年に一人か二人、南国でも三年に一人、東国に至っては百年に一人落ちてくるぐらいだっていうのに、西国では一年に十人から落ちてくる。だから迷い人に対する意識もだいぶ違うわ。あの国は厳しい土地柄だから、迷い人まで面倒見るっていうのは難しいわね」

アルティお兄さんは一息に喋ってから、傍らの水の入ったグラスをあおって目を細める。

「迷い人が、どうしてこの世界に来るか考えたことある？」

私は質問の意図が分からず口を閉じた。

お兄さんはそんな私に話を続ける。

「この世界は向こうの世界と一緒に世界なの。どういうことかっていうと、あちらの世界とこちらの世界、双子みたいに隣合わせで並んでるって言えば分かるかしら？」

並行する世界、ということだろうか。

「二つの世界は普段交流なんか無いわ。当然よね。次元が異なるんですもの。でも、何かのきっかけで人や物が落ちてくることがある」

お兄さんは皿に残ったパスタをひと掬いで食べ上げて、フォークをくるりと回す。

「原因は雷なり次元の穴なり人為的な魔術であって、落ちてくるものは何でも。人だろうが飛行機だろうが、爆弾だろうがね」

顔が強張った。

そうだ、人が落ちるなら他の物もしかりだ。

「どうも砂時計みたいに、こちらからこちらに物が落ちることはなくて、あちらからこちらに落ちることがほとんどみたいね。勝手に戻る方法はないけど、落ちる方法は色々あるわ。事故に遭うとか、自殺とか、妙な場所を踏んでしまふとか」

だからね、とお兄さんはフォークを置いた。

「北国にこちらの世界に來た迷い人を保護する義務はあっても、この世界の人間とどういう関係になるかまでは面倒見切れないのよ」

それって、

「こちらに落ちた人間のことは、基本的にどうでもいいってことですか？」

「そうは言わないわ。でも迷い人の第二世代、第三世代、それ以降になってくるともうこちらの世界の人間と区別なんかつかないから、法律でも作らない限り、北国が他国の法律にまで口出しすることはできないわ」

「でも、世界の大則っていうものを作ったのは、北国なんですよね？」

いつか誰かが言ったように、まるで、永遠に戦争をさせるような歪んだ世界の法律だ。

「そうね」

私の顔が歪んでいることに気付いていないのか、彼は微笑みをたたえたままだった。

「あれは、この世界の人口をうまくコントロールするために作ったゲームのルールだから」

ゲーム。なんだそれは。

意味がわからない。

ドレスを着たわけのわからない男はくすくすと笑った。

「人がどうして生まれてくるんだと思う？ 人の身でそれが分かるとも思えないけれど、世界にとってかけがえないものには違いないわ。増えすぎてもいけない。減りすぎてもいけない。そういうバランスをとる生き物なのよ」

だから、増えすぎてはいけない。
何を言っているのかわからない。

でも、私の目の前に座っている男が、唐突に自分とは違う生き物に見えた。

話をしているというのに、言葉が通じないというのか。

「人間が魔術を手に入れてから、ありとあらゆるものが変わったわ。生活しかり、戦争しかり。でも人の本質は変わらない。それを制限する法律が必要だった。それが大則。これがなければ、この世界はとっくの昔に滅んでいたでしょうね」

何が面白いのか、ゆったりとテーブルに肘をついて男は笑う。

「西国から来たのなら、あそこの砂漠を見たかしら？ あれは大昔に人が作った慣れ果てよ」

あの広大な砂漠が。

人の作ったもの？

馬鹿な。

でも、目の前の男の言葉が嘘か本当か分からない。

「迷い人が年をとらないことは知ってる？ 要はこちらの世界の住人じゃないからんだけど、迷い人はこの世界に在るだけで法則を歪めていくものだから、本当は世界にはいらぬものなのよ。それでも迷い人はこちらにやってくる」

私はそれが知りたいだけなのよ。

眩きと共に目が合って、初めてこの男の目が紅いことに気がついた。

血のように赤い瞳が私を呑みこむように見つめている。

「――あなたは」

自分の口から出ている言葉は、日本語なのか西国語なのか区別がつかなかった。

それでも、自分の声がひどく枯れていることは分かった。

「世界の歪みを正したいんですか？ それとも」

さらに歪めたいのか。

世界の歪みとやらが何なのかは分からない。

でも、これだけは分かった。

「今日は付き合ってくれてありがとう。また会いましょ」

目の前で微笑む女装男が、とんでもなく得体のしれないということだ。

それからどうやってホテルまで帰ったのかは覚えていない。

ただ、エントランスで長い時間待っていたらしいステファンに思い切り怒られたから、思っていたよりも遅くなったらしい。

バイキングの時間もう終わっていた。

「どこに行っていたんだ」

ステファンが不機嫌に言うので、私は街を一人で回っていたと嘘をついた。

女装男と会っていたと教えるのは何となくためらわれたからだ。
ステファンは長く溜息をついたあと、しょうがないなあというように笑う。

「晩御飯はどうするんだ？」

「外に食べに行つて来るよ」

「酒を飲むんじゃないだろうな？」

鋭い。

一緒に行くというステファンを適当にごまかして、私はホテルを出た。良い子は早く寝てねって言ったら本気で怒鳴られたけど。でもステファンには悪いけど、今日はちょっと飲みたい気分だ。

私は明かりの灯る街へと繰り出した。

街灯の中に浮かび上がる石造りの街は何処か懐かしいもののやっぱり外国で、木造の建物が多かった東国が無性に懐かしくなった。まだ木の建物の方が愛着があるようだ。

私は小道の奥にあった静かなパールみたいな酒場に入つて注文をしようとしたけど、

「ケ ペディール？」

カウンターでグラス磨いてた店員のお兄さんにそう訊ねられてあつと思つた。

そういや、北国の言葉喋れないんだつた。
どうしようか。

冷や汗をかきながらメニューを探すけどメニューないし！
周りはみんな外国人だ。いつそ西国語で話してみるか。

「なんだ、坊主。酒が飲みたいのか？」

日本語！

咄嗟に振り返ると、丈夫そうな上着とズボンに頑丈そうなブーツの、マント羽織ったひげ面のむさいおじさんが私を見下ろしていた。背が高く筋肉質で浅黒くていかにもなおじさんだけど、黒髪に焦げ茶色の目。顔形はこちらの世界に居る彫りの深い顔立ちだが、この世界ではあまり見ない色だ。

「坊主が来るような時間じゃねえぞ」

驚いている私を不思議そうに見て、

「俺の言葉通じてるか？」

「つ、通じてます！」

思わず日本語で応えたら、おじさんは「あれ」と言って私を覗き込む。

「坊主じゃなくてお嬢ちゃんか」

「……お嬢さんっていう年でもないです」

よく考えてみたらこの世界に来て半年以上経つんだからもうそろそろ二十五歳だ。

むさいおじさんは「そうかそうか」と軽く笑って私の頭を大きな

手でがしがしと撫でた。

「え、ちょ！」

「東国の言葉は懐かしいから付き合え」

豪快に私の頭を撫でながら、おじさんは店員さんに酒を注文してくれた。

そういえばそうか。東国の言葉も日本語と同じだったっけ。もうだいたい前の話みたいだ。

大きなジョッキに注がれた酒を渡してくれて、おじさんは「遠慮すんな」と勧めた。

「お前さん、東国から来たんだろ。珍しいな」

「――どうしてそう思ったんですか？」

「そのマント」

カウンターの椅子に腰掛けながら、おじさんはすっかり私の相棒となったマントの端を指した。

「その刺繍は東国のものだ。魔除けや雨避けの呪いになってる」

「へえ」

おじさんにつられて私もマントの端を見る。複雑な紋様はほつれることもなく今も奇麗に縁を飾っている。

「知らなかったのか？」

「知り合いにもらったので……」

「良い物もらったな。そりゃあ職人が作った最高級のものだ」

まあ、王様が持ってたものだしなあ。

おじさんは私の物珍しげな様子を見ながら酒を飲んで「ははは」と笑う。

「どこの誰にもらったか知らないが、お前さん、相当なお嬢様なんだな」

「いえ。私を拾ってくれた人がくれたものなので」

「そうか」

軽く頷くだけで深くは問わず、おじさんはまた酒を飲んだ。もうジョッキの半分はない。ピッチ早いな！。

「東国から来たんなら、今はいい時期だったろう」

今更、西国の辺境から来ましたとも言えず、おじさんを見返すと、おじさんは勝手に話してくれた。

「東国と西国が停戦協定結んで、東国の帰還した王が結婚したって、ちょっとした祭りみたいになってるって聞いたぞ」

そうか、あっちはお祭りなのか。

ん？

「おじさん、今なんて…」

「東国は今、国中で祭りみたいだに」

「その前」

「東国の王が結婚したって話か？」

結婚した。

俊藍が。

「長いこと政治から離れてたから、一時はどうなるかと思ってたけどな。やっと落ち着いてきたんでいいとこの嫁さんもらって、身を固めたってさ」

そうか。

やっぱりな。

何だか妙に納得して、私は色んなものがストンと落ちたような気分になった。

俊藍の幸せを一番に願ったのは、誰が何と言おうと私だ。

あの淋しがり屋の王様がお嫁さんもらったなんて。

恋じゃないと思った。

それが今、実感できる。

「どうした。嬉しそうな顔で」

おじさんが不思議そうな顔で次の酒を注文していた。

「お祝いしましょう！」

私はおじさんにせがんで二杯目の酒を注文してもらって、高らかにジョッキを掲げた。

「東国の前途と未来を祝して！」

「同じ意味だぞ、それ」

はははと笑うおじさんは何も聞かずに私に付き合ってくれた。私も大いに笑って、酒を飲んだ。

おめでとう。

きっと幸せになるよ。

俊藍なら、頑張った分だけ幸せになる。

よし。

会いに行こう。

私を拾ってくれた、あの最初の国の人たちに。

プロポーズと手紙

ステファンに起こされたのは、翌日の昼過ぎだった。

深夜にへべれけになってホテルに帰ってそのまま寝てしまったらしい。

ちよつといいかと部屋に入ってきたステファンはむせかえる酒の匂いに顔を思いきりしかめた。

「また、飲んだのか」

「……すみません」

あのあと、おじさんが「今日は奢ってやる」と豪快な宣言をしてくれたので、二人で店閉まいまで飲んでいた。ふらふらになって帰るなんて何年ぶりか。

今日は案の定、二日酔いです。

「で、どうしたの」

ベッドの脇のテーブルに二人してついて、ステファンが持ってきてくれた水を私は飲む。

「うん……」

そう頷いて、ステファンは自分用に持ってきたらしいコーヒーを飲んだ。

その香りってやっぱりコーヒーだよねって聞いたら、ステファンはおびなりに頷いた。

この北国は向こうの世界に合わせて作られているんだな。

でも、この国を作った人たちって、どうしてこの国を作ろうって思っただろう。

元の世界に帰れるみたいなのに。

「あいな」

ステファンが意を決したみたいに顔を上げたので、私もぐだぐだとした思考を止めて、彼に視線をとどめた。

「俺は、元の世界に帰ろうと思う」

「……そっか」

何となく、そんな気もしていた。

ステファンが向こうの世界を懐かしく思っていたのはわかったから。

「一緒に帰らないか。ヨウコ」

一瞬、何を言われたのか分からなくて、私はステファンをまじまじと見てしまった。

それが居心地悪いのか、ステファンは困ったように身動きして、

「――俺と一緒に帰るのは、嫌か？」

恥じらう少年とか必死な顔って可愛いな、とかそういうお馬鹿なことじゃなくて、なんだなんだ、この、こっちまでこっぴどくかしくなるような、

「ぶ、プロポーズ？」

口が滑って言ってしまおうと、ステファンの真剣な目とかち合った。

「そうとってもらってもいい」

え。ちょっと、少年。見た目の年の差とか、あれとかそれとか。

「元の世界に帰るときには、こちらの世界に落ちた時間に戻されるんだそうだ」

だから、とステファンは大人びた顔で少しだけ笑う。

「今度会うときは、俺は二十五歳だ」

な、

「なんで……」

うまく言葉がまとまらない私に、ステファンは落ち着いた声で続ける。

「村には手紙を置いてきた。西国と東国との停戦協定が成立した今なら、きっと誰かが読んでくれると思う」

「……知ってたんだ。停戦協定の話」

「昨日聞いた」

ステファンは、大きな溜息をついた。

「これから、迷い人の環境も良くなると思う。でも、俺の体はこのままだし、誰かに守ってもらうまま年を取っていくことには、もうそろそろ我慢できない」

「ステファン……」

ステファンは、私と違って子供のままだ。その成長できない苦しさは、私では想像もできないだろう。

「お前のお陰だ。ヨウコ」

まっすぐな瞳が私を映した。

「お前が俺を連れだしてくれなかったら、きっとあのままだっただろう」

彼は少しだけ俯いて、苦い笑みを浮かべる。

「十五年もの間、面倒を見てくれたあの人たちに何の恩返しも出来なかったけれど、俺はやっぱり元の世界に帰りたい」

「うん。よく分かるよ」

私たちみたいな迷い人は、やっぱりこの世界では異質だ。

それに、常に思うのだ。

帰りたい。

どれだけ良いことが無くても、悪いことばかりが待っているとしても、やっぱり元の世界が自分の住む世界だと思う。

「あのね」

だから、私はステファンに自分に魔術が効かないことを話した。魔術によって、元の世界に帰るとしたら、私は、

「そんな……」

「大丈夫だって。きっと方法は見つかるから」

「じゃあ、元の世界に帰るのか？」

「いつかね。帰れると思う」

ステファンは困惑していた顔を少しだけ緩めた。

「正式に結婚を申込みに行ってやる」

十五年なんて時間、あつという間だけど意外と長いんだよ。坊ちゃん。

不敵にステファンが笑うものだから、私は何も言わずに笑ってやった。

「また会おう。ステファン」

次の日、ステファンは元の世界に帰ることになった。

私が側にいたら魔法陣がうまく動かないかもしれないから、お見送りはできなかったけれど、ホテルの一角に作られたその部屋に入ったステファンが、いつまで経っても出てこない。だから、きっと無事に帰ったんだと思う。

ステファンには、手紙を預かってもらった。

私の家族に宛てた手紙だ。十五年後、もしもステファンが覚えていたら、きっと私の家族に届けられるだろう。

これで、私の無事は伝えられると思う。

ホテルの迷い人も顔見知りがどんどん減ってきていて、滞在期間
は決められていないものの、だいたいが三日か四日で今後のことを
決めてしまうようだ。

私はステファンに嘘をついた。

私が無事に元の世界に戻っても、彼にはきくと会えない。

紋章と火花

元の世界に帰ったら、落ちた時間に戻される。

だったら、私がこの世界に落ちたのは、車に轢かれそうになっていた時だ。

最後の記憶は車のヘッドライトだから、たとえ社長を巻きこんで戻ったとしても、車が急に曲がってくれるとも思えない。

きつと、帰った瞬間にあの世界には居ない。

自分のことなのに実感ないなあ。まだ生きてるからか、それとも私に危機感がないのか。

あ、そういえば社長。

今どうしてるのかな。

戻れないとか言ってたけど、結構あっさり戻してくれそうだからそういうこと諸々話に行ってやろうかな。

私ってば優しいわあ。

社長の思い切り顔をしかめる嫌そうな顔が目に見えよ。

そうと決まったら、伯爵に報告しよう。

遅れたけど、無事に着きましたって。

ギルドマイスターだっていうあのミカエリ・ジョーンズを上手いこと丸めこんでオレキオ使えないかな。

そんなずるいことを考えながら、フロントにサリーのことを尋ねたら、ちゃんと預かってくれていたようだった。教えられた厩舎の様子を見に行ったら、ステファンが面倒を見ていてくれたようだよ。機嫌も良いようだ。

サリーにステファンが元の世界に帰ったことを話すと、何となく通じたのか、私に鼻の頭をこすりつけた。
淋しいのはお互い様だ。

今度は東国まで女二人旅しよう。

サリーの様子を見に行ってから、私はその足でギルドに行った。
東国に行く資金の諸々とか、オレキオのことも相談したいと思ったからだ。

でも、

「こんなところに居た！」

相談したいと思っていたフロツコートの金髪男が西国語で叫んで窓口を突っ切ってやってきた。

そうして私の腕をがっちり掴むと、そのままギルドの奥へと引っ張っていく。

「ど、どうしたんですか？ ミカエリ・ジョーンズさん」

「まったくあなたという人は、どういう星の巡りをしているんですか。厄介な人ばかりと知り合って！」

いくら変人でもこの胡散臭い男が怒鳴るところなんて初めて見た。
意味も分からず腕を引っ張られていると、彼は廊下の一番奥にあるエレベーターの下ボタンを押す。

「いったい何なんですか？」

「聞きたいのはこちらの方です」

これまた珍しいことにいつも胡散臭く笑っているミカエリ・ジョーズに睨まれた。

ただ事ではないことが起こったらしい。が、

「私に関係あることなんでしょうか？」

この少なくともはない権力を持っているらしい男が慌てるようなことに私が関わっているとも思えない。

「あります。ヨウコさん、あなたはすぐにこの国を出なさい」

エスカレーターが迎えにやってきたので、それに押し込まれるとミカエリ・ジョーズはしかめっ面のまま私を見下ろしてくる。

「……それって、ギルドマイスターとしての決定とかなんですか？」

訳が分からないなりに先制して言うと、胡散臭い男は珍しく目を丸くした。

「どこでそれを聞いたのです？」

「——ちょっと教えてもらって……」

「私がマイスターであることなど、一部の者しか知らないことですよ」

「え？」

でも、あの得体の知れない男はさも当然のように教えてくれた。

「これも一部の者しか知らないことですが」と前置きしてミカエリ・

ジョーンズは目を細めた。

「この北国に來た迷い人は必ず監視されています。北国に帰順すればそれは外されますし、元の世界へ帰った時点でも同じくです。でもあなただけはその監視がなされていない」

監視というよりも保護觀察という意味合いが強い、とミカエリ・ジョーンズは補足したけれど、監視というならその通りなのだろうが、彼にしては損な言い回しをするものだ。

「あなたへの監視自体はそれほど重要視はされていませんでしたよ。何しろ、あなたの身元はメフィステニス伯爵が保証したうえ、ラーゴスタ侯爵もあなたの証明に協力するでしょうからね。それに、そのマントのこともある」

じっと、いつも肩にかけているマントを見つめられて、思わず端を握った。

「そのマントには本来ならあってはならない紋様が刻まれているのですよ」

そう言つて、ミカエリ・ジョーンズは丁寧な、けれど有無を言わせないまま私のマントの端をつまんで裏返した。

そこには、花のつぼみが綻ぶさまを二本の剣が守るような紋様が刺繍されていた。

そんな紋様、今まで気がつかなかったんだけど。

「これは、東国の王家の紋章です。これがあなたの何よりの身元の証明になった」

大事なものだ。

ただ、俊藍の大事なものを預かったような気持ちだったのに。
泣きそうになってマントを握り締めた。

「あなたはまったく妙な人です。私とこうして出会うことでさえも
珍しいことだというのに、よりもよってあの人に目をつけられて
しまうなんて」

「あの人？」

ミカエリ・ジョーンズの溜息と一緒にエレベーターは目的地につ
いたようで、甲高い音が鳴る。

私の質問に答えないままの彼に連れられて降りると、四方を石壁
に阻まれた小さな部屋だった。

薄ぼんやりとした光の灯った場所にもう一人男が居た。

「あ」

「あ！」

古ぼけたマント姿のむさいおじさんだ。

酒場で気前よくお酒をおごってくれた、あの。

「なんだ、お前さんだったのか。ヨウコ・キミジマって」

「お知り合いだったのですか？」

訝るミカエリ・ジョーンズに私は手早く酒を奢ってもらったこと
を話すと、彼は呆れたように溜息をついた。

「彼はバルガーといいます。彼にあなたを東国まで飛ばしてもらいます」

「え、でも！ 私、魔術が効かない…」

だから、私は東国に地道に行こうと思っていたのに。

「知っています。メフィステニス伯爵に伺いましたからね」

「伯爵が……？」

ミカエリ・ジョーンズは私の混乱を放り投げて、バルガーというむさいおじさんに向きなおる。あれ、バルガーってどこかで聞いたような名前だ。

「座標は王都の近くが良いでしょう。いいですか？」

「それはかまわんが、お嬢ちゃんは事情を分かってるのか？」

バルガーおじさんがこっちに水を向けてくれたので、ようやくミカエリ・ジョーンズは私に説明する気になったらしい。
珍しく笑みの一つも浮かべないまま私を見下ろした。

「ヨウコさん。あなた、アルティフィシアルという人に会いましたね？」

「え、はい」

あの変態魔術師のことなら。

私が頷くと、おじさん二人は「はぁぁぁ」と長い溜息をついた。

「あの人に何を聞いたんですか？」

「え、そんな大したことは…」

あんまりミカエリ・ジョーンズが苦々しく聞いてくるので、私はあの女装男に聞いたことをかいつまんで話した。

私に魔術の才能がないってこと。

この世界と迷い人のこと。

「あなたの聞いたことは、他国の王も知らないことです」

え、何それ。

「それに、魔力のない人間など珍しい以外の何物でもありません。血が生き物の体を流れるように魔力というものは多かれ少なかれ何にでもあるものですからね。魔術を無効化するなど、今まで事例がありません」

ですから、とミカエリ・ジョーンズは一度言葉を切って、

「あなた、実験動物にされますよ」

もう手遅れかもしれません。

出会い頭に魔術で焼き殺されそうになったし。

「……えと、あの人、何者なんですか？」

ミカエリ・ジョーンズは非常に珍しいことに思い切り眉根を寄せて顔をしかめた。

「マイスターが十二人いることは聞きましたね？」

「え、はい」

「あの人はその頂点に立つ十三人目にして一人目の魔術師です。世界で初めに魔術を作った人ですよ」

なんか、とんでもない人だったようです。

ミカエリ・ジョーンズは今日は大安売りの溜息をついて、しかめっ面を少し和やかにした。

「まあ、あなたにしてみれば、私たちもあの人のことは言えないほどの化け物ではありますけれどね」

「化け物？」

胡散臭いとは思っけれど。

でもそれには答えたくないようで、ミカエリ・ジョーンズは綺麗に私を無視した。

「バルガー、彼女を送ってください」

「あ、ちょっと待った」

バルガーさんはミカエリ・ジョーンズを避けて、私を覗き込んできくる。

「お前さんだったんだな。コロラルの言ってた娘って」

「ええ、まあ…未定ですが」

そう曖昧に応えて思い出した。そうだ。この人だ。バルガーって、伯爵が北国の知人に連絡するって言ってた人。

「聞いているかもしれないが、俺はバルガー。魔術師やってるもんだ」

「……見えないですね」

このむさい、肉弾戦が得意そうなおっさんが魔術師とか。魔術師ってなんだ。

でも悪い人には見えない。

バルガーおじさんは酒場でよく笑ったように豪快に笑う。

「よく言われる。頼まれたのにあんまり面倒みてやれなくてすまなかったな」

「お酒おごってもらいましたから」

結局、あの酒場での支払いはこのおじさんが全部もってくれたのだ。

おじさんは癖なのか私の頭をがしと撫でる。

「心配するな。お前さんが元の世界に戻る方法はちゃんと探してやる」

そう微笑まれると安心はするが、

「でも、私に魔術は効かないんですよね？ どうやって魔術をかけるんですか？」

そもそも、こうまで急いで出ていけとか。
幾らなんでも強引だ。

私の戸惑いをわかってくれたのか、バルガーさんは太い眉をしかめた。

「急なことですまないとは思いますが、アルティが動きだした今、お前さんはいつだって殺される可能性がある。目的のためなら手段を選ばない、を息するように実行する奴だからな」

それは分かる気はする。

「そのマントを持ってるってことは、お前さんは王族に保護してもらえる可能性もあるってことだ。さすがにアルティも北国を離れた相手をどうこうする力はないからな」

「――私、本当に殺されるんですか？」

いくら珍しいからって、そう簡単に殺されるなんてにわかには信じられないものだ。

「少なくとも、最終的にホルマリン漬けは覚悟してください」

ミカエリ・ジョーンズの無情なひと言が部屋に響いた。

この世界に来てから、どうしてこうも命が危険なんだろうか。

私、アンタに何かしたのか。神様。

「俺は कोरोラルにお前さんをよろしくと頼まれてる。アイツを怒らせたら俺は命はないから、お前さんをホルマリン漬けになんかはさせないさ」

爽やかに言ってくれるが、バルガーおじさん。あなたの口から出てきた単語の何一つ穏やかじゃないよ。

とりあえずとっとと北国とはおさらばするに限るらしい。

「あの、サリーはどうなりますか？」

彼女と一緒に東国に戻るつもりだったのだ。あの騎竜の多い国ならサリーのお婿さんとか見つけてあげられるかもしれないし。ミカエリ・ジョーンズはちょっと意外そうな顔で私を見て、

「でしたら、別の場所から同じ座標に送ってさしあげます」

「ありがとうございます」

「竜のことより、自分の心配しろよ」

バルガーおじさんが苦笑しながら、狭い部屋の床に向かって手を翳した。

すると、いつか見たような、複雑な紋様の方陣が瞬く間に描かれる。

「それで、実際にはどうやって私に魔術をかけるんですか？」

「魔術の効かない人間などいませんでしたからね。でも、あなたは他の物に作用している魔術まで効かないわけではないようなので、この魔法陣ではあなたの着ている衣服に転送魔術をかけることにしました」

服にかけるとな。

でも嫌な予感がするので、淡々と説明してくれるミカエリ・ジョーズに訊いてみる。

「……失敗したら？」

「あなたの着ている服だけが座標に転送されますね」

男二人が居る狭い部屋に、取り残される真っ裸な私。
嫌だ。

ものすごく嫌な構図だ。

「失敗しても死にはしませんよ」

私の尊厳はどうなる！

人として！

私がいったい何をした神様！
謝るから教えてほしい。

「いけるぞ」

バルガーおじさんの準備が終わったらしく、ぼんやり輝く魔法陣の中に私は立たされた。

お、この前みたいに消えない。

私は上着に入っている伯爵の万年筆と手帳、それから相棒のマントを撫でた。

上着のポケットの中に何か入っていると思ったら、ステファンとお揃いを買ったツリー飾りだ。触れるとりーんと澄んだ音が鳴る。ステファンは、きっと無事に帰れただろう。

「伯爵に、私は無事だって伝えてください」

あえて失敗することには目をつぶって、バルガーおじさんに言ったら、「わかった」と二つ返事で頷いてくれる。それから「俺も頼みたいことがある」と切り出した。

「東国に行ったら、会って欲しい奴がいる」

魔法陣を維持するためか魔法陣に手を翳したままのバルガーおじさんが、まじめな顔で私を見た。

「東国に居る俺の弟子でな。今、厄介なことに首突っ込んでるみたいなんだ」

え、この肉体派を師匠にするってどんな肉弾戦な弟子なんだろう。

「天才だが、どうも思いつめるタイプでな。宰相補佐に帰ったはいが、うまくやっているか心配だったんだ」

宰相補佐？

「会えるかどうかかわからんが、俺の名前を出せば会ってくれるはずだ。銀髪で目立つ奴だから、名前を出せば誰かがすぐ分かる」

えっと、まさかね？

「ハイラント・アセク・ジンブリウムという」

あの、有害銀髪か！！！！

そういえば、アイツ魔術師だったな！

まだ生きてるのかアイツ！

「ん？ 知ってるのか？」

頭抱えた私に、バルガーおじさんの不思議そうな声がかかるので、

「知りません」

思わず他人のふりしました。実際他人だしな！

何にも知りませんよええ！

あなたの弟子がどんなやんちゃやってるかなんて全然ね！

しかし世間は狭い。

北国で、有害銀髪の師匠に会うとは。

そして師匠がこんな良い人なのに、弟子があんなだとは仏様でも分かるまい。

今度は私が苦虫を潰したところで、バルガーさんが操ってた魔法陣から青白い火花が散った。

「これは…っ」

ミカエリ・ジョーンズの切迫した声と一緒に、火花はどんどん増えて、あっという間に私を囲んでしまう。

「ヨウコ！」

最後に誰かが私を呼んだ。

でも、私はそれが誰かも確かめることが出来ずに、真っ白い世界に引っ張り込まれた。

歴史と明かり

ふわり、と何かが私の頬を撫でる。

産毛を撫でるような柔らかな刺激に、私はぼんやりと目を開けた。

「やあ」

私は椅子に座らされているようだった。そんな私を覗き込んでいるのは、真っ白い髪の方だった。

容姿はひどく整っていて痩身の彼は、まだ青年と言ってもいいような体格で、シャツにズボンというラフな格好で私を見下ろしている。

「気分はどう？ ヨウコ」

聞き覚えのある声だった。

テノール、の。

「うわ！」

一気に目が覚めて、私は椅子から飛び上がろうとしたけれど、あっさり男に手を肩に置かれて椅子に引き戻される。

「大人しくしてなよ。無理矢理ここに飛ばしてきたんだ。まだふらふらするだろう？」

「……アルティ……」

私が呻くと、男はその白い顔ににんまりと笑みを浮かべる。

「悪いおじさんたちに騙されて、どこへ行くつもりだったの？ ヨ
ウコ」

女装をしてない女装男は、体が重くてあまり動けない私の頬を細
い指で撫でた。

「……アンタ何者なの」

指は冷たくて、ひんやりと私の頬を冷やす。

「あのおじさん達に聞いたんじゃないの？ バルガーとミカエリに」

「アンタが、十三人目のマイスターだってことと魔術を作ったって
ことは、聞いた」

「そう」と呟いて、アルティは私の頬から指を放した。

「魔術が出来たのはいつだと思う？」

知るはずもない。答えずじっとアルティを見上げると、彼は面白
がるように目を細めた。

「九百六十二年前だよ」

でも、魔術を作ったのは、

「僕は今年で九百七十五歳になるかな」

事もなげに言って、アルティは言葉を次げない私を見下ろして笑

う。

「バルガーとミカエリも、マイスターの古参だから僕と百年ほど違うだけだよ」

化け物、という言葉をも自分で使ったミカエリ・ジョーンズの顔が浮かんだ。

「僕らは、みんな元は迷い人なんだよ」

アルティはゆっくりと私から離れて、部屋を歩きだす。そうして、ここがいつかアルティが居た筒の部屋だと分かった。ぼんやりと浮かぶ青白い光が無数に飛び交って、天井へと昇っている。

「迷い人は、色んな時代からやってくるけど未来から来たって人はいない。だから、僕はあちらの世界とこちらの世界は常に並行して存在しているんじゃないかと考えた」

アルティの声は聞こえていたけど、彼は私と一番遠いところをのんびりと歩いている。

その周りをふわふわと青白い光がまわりついて、彼のあとを追いかけている。

「人が生まれてから、あちらもこちらも独自の進化と歴史を遂げてきた。でもこちらには迷い人がやってくる。住む人が同じになるなら、文化が似てくるのは流れだろう。でもやっぱりこちらの世界はあちらとは違う」

歩きながら、アルティは手の平にふわりと明かりを生み出した。

「こちらには力があつた。だから百年ぐらいかかって魔術を作りあげて、元の世界へ帰るための技術を作った。あとは時差と座標さえ揃えば、元の世界と行き来が出来るんじゃないかとね」

でも、と呟いたアルティの手から光は消える。

「行き来は出来なかった。落ちる時も、帰る時も、向こうに居場所がある者だけ。人間、百年も故郷を離れたら、友人知人はおろか家族だって居ないからね」

帰れなかったのか。

私は青白い光に囲まれている青年をぼんやりと見つめた。

彼は帰る手段を作ったけれど、自分は帰れなかった。

「色々なことを試したよ」

笑っているのに置いて行かれた子供のような顔で、アルティは私のところへ足を向ける。

「いっそ世界が変わればいいのかと思って、大則を作ったり、戦争をさせたり」

紅い瞳が私を見下ろして、ふんわりと笑った。

「奴隷を作らせたり」

私の顔が歪んだのが面白いのか、アルティはけたけたと笑った。私は吐きたくなって、ますます口を歪めた。

「――人間殺して、面白い？」

「別に。僕は殺人狂じゃないからね」

吐きたい私の頬を、また冷たい指がなぞった。

「でも、君は面白いな。こんな話をしたら、だいたいが大声を上げるか叫ぶか、僕をなじるよ」

私だってそうしたい。でも、

「ホルマリン漬けは嫌だから」

「ホルマリン漬け？ 君を？」

アルティは今度こそお腹を抱えて笑い出す。

「誰が言ったのそれ！ あははははは！」

こっちにしてみたら冗談じゃない。

私の慄然とした顔を見て、アルティは目尻に溜まった涙を拭う。

「そんな面白いことしないよ。まあ、確かに君は面白いからね。もしも死んだらそうしてもいいけど」

「やめてください」

全力で拒否だ。

何が何でも自分の死体がこの男に見つからない方法を考える。

「面白そうだけど」と呟く目の前の男は、やっぱり宇宙人だ。伯爵、

バルガーさんというよりこの男が宇宙人でしたよ！

「ここで君が死んだら、すぐにでも漬けてあげるけど」

するり、と首が撫でられた。

思いがけなく広い手が、私の首をゆっくりと伝う。

「そんなことしないよ」

ごめんね、と手は離されたけど、首にはじんわりとした冷気が残ってる。

鳥肌立ったまんまだ。

「ちょっとね。僕に黙ってどこかに行こうとするから、腹が立っただけ。驚かせてごめんね」

ごめんねと言われても、この人がどうやって私をこの部屋に連れてきたのかが見当もつかない。まあ、とりあえず服は着ているみたいだから、真っ裸で放り出される事態にはならなかったようだけど。

「どこに行きたい？ 連れてってあげるよ」

にっこりとアルティは笑う。

魔術師の実質的な頂点に立つらしいこの男に言えば、まあ、どこへでも行けるだろうが。

言いたくない。

言いたくないが、言わないとここを出られそうもない。

私は渋々告げた。

「東国に」

「うーん。今、そこは駄目だな」

にこにことあっさり却下してくれたよこの人！

「どこでもって言ったんじゃないか！」

「うん。他にないなら僕が決めてあげよう」

それじゃ、私に決定権なんかないじゃないか！
そう思ったら、体がふんわりと宙に浮いていた。

「ぎゃあ！」

「大人しくしてね。座標間違えたら、海の上に落ちるよ」

にっこりと嫌なこと言った！

うわぁドエス！

アルティが指ですいっと空に円を描いたら、私の周りを複雑な紋様の魔法陣が包みこむ。

ぼんやり明るい法陣に囲まれて、じたばたするも足の先から順に
どういうわけだか吸い込まれていく！　ぎゃあぁ！

「鬼！　悪魔！　女装変態！」

「女装に対する偏見だよそれは」

もっともらしく説教する白髪頭が憎い。

「あんたなんか大嫌いだ！」

私の子供みたいな罵声が部屋に響いた。
にっこりとアルティが微笑む。

それが、私の見た最後の北国の風景だった。

嫌いだって言われて、嬉しそうに笑ったよ。
変態だ。あいつ。

賢者は北にまどろむ

「僕は君が好きだよ」

魔術の光に呑みこまれ、叫び声を残して消えた先にアルティファイシアルは呟いた。

今はもう何も居ない虚空を見つめて微笑む。

面白い娘だった。

「お前……っ！」

野太い声が入り込んだのは部屋の入り込んで、次の瞬間、閃光がアルティファイシアルの周りを無数に焼いた。

爆音と爆風が天井に向かって立ち上り、辺り一面を白く包んだが、

「……なんだよ。バルガー」

静かな声と共に、青白い光が爆風も塵も全て吸いこんで、やがて部屋は元の静けさを取り戻す。

「……彼女をどこへ飛ばしたんですか」

珍しい組み合わせだ。

がっしりとした精悍なバルガーの隣から、背の高い上品な男が顔を出した。

「お前まで来るなんてね。ミカエリ。北国は鬱陶しくて嫌いなんじ

「やなかったのか？」

アルティフィシアルがそう言うのと、ミカエリは不機嫌そうに眉根を寄せた。

「あなた、この後に及んで何を企んでいるんです」

神経質な双眸で睨まれて、アルティフィシアルは苦笑を返した。それが気に入らないらしいミカエリは、溜息交じりに続ける。

「東国の王の呪いに、西国の戦争。ここ最近の動きの裏には、必ずあなたが居る」

並べながら苛々とした顔になっていくミカエリに、アルティフィシアルは口笛を吹いた。

「よく調べたね」

「ふざけないでください。我々の掟を忘れたのですか？」

「世界への不可侵？」

世界の大則に綴られる最後の項目だ。

「北国のマイスターは世界の情勢には決して触れてはならない」

条項のままを述べたミカエリは、アルティフィシアルを睨みつけてくるが、当の本人は肩を竦めたただけだった。

「その大則、誰が作ったと思ってるの？」

バルガーとミカエリは押し黙る。
そうだ。この大則は、

「僕が作ったんだよ。これ。それに僕は今、マイスターでもない」

アルティフィシアルは部屋で遊ばせている魔力の塊の明かりをふわりと飛ばして、天井へと誘った。対流に乗るように青白い明かりは他の明かりも巻き込んで天井へと舞い上がる。

「隠居した僕がどんなことをしようと勝手にしょ？」

「アルティ…」

バルガーが苦々しく呻く。

「やめなよ。バルガー。僕と戦ったところで、北国が半分無くなるだけだよ」

その言葉が揶揄ではないことは、この場に居る三人全員が分かっている。

マイスターとは、そういう生き物だ。

バルガーはアルティフィシアルを鋭く睨んだまま、低く舌打ちした。

「――俺の術式に無理矢理介入して、あの娘を何処へやった」

「彼女が身につけているものに術をかけようっていう発想は良かったよ。僕もそうしてみたら、無事に送れたみたいだし」

「殺してはいないんだな」

「殺してないよ」

バルガーとミカエリはアルティフィシアルをしばらく睨んでいたが、それ以上は何も聞き出せないと悟ったのか、部屋を去っていった。

二人の後ろ姿を見ながら、アルティフィシアルは薄く笑った。

「――ずいぶん、好かれているなあ。お姫様」

大きく伸びをして、アルティフィシアルは指を鳴らす。
すると、床から忽然と椅子が現れ、彼はそれに腰かけた。

「楽しみだな」

ミカエリとバルガーは、十二人居るマイスターの中でも特に勘のいい二人だ。

恐らく、彼らは今、あの娘が重要な鍵になっていることに気がついたのだろう。

彼らは、この世界を特に愛している。
だから、今起こっている世界の歪みを見ていられないのだ。

マイスターとは、迷い人のなれの果てだ、とアルティフィシアルは思っている。

魔術によって寿命さえも操作し、果てのない異世界の研究に膨大な時間を費やす研究者だ。その至高とも地獄ともいえる術を弟子であつた十二人が手に入れた時、アルティフィシアルはその術を封じることにして、自分は国の表舞台から消えた。

弟子に自分の技を教授することに情熱を傾け過ぎていて、その後

の長い時間の重みをまったく分かってはいなかったのだ。

アルティフィシアルは自分への罰として自ら死ぬことを断ち、そして、弟子たちもそれに倣った。

そんなアルティフィシアルの元に、一人の男がやってきた。

男は言った。

長い時をかけて歪んだ世界を正そうと思う、と。

アルティフィシアルは嗤った。

そんなことは、すでにマイスター達とアルティフィシアルが何度も挑んで敗れた今最大の課題だ。

お前一人に何が出来る、と嗤ったアルティフィシアルに、男は出来ると言った。

言い切った男が面白く、アルティフィシアルは男にほんの少し手を貸すことにした。

ちょうど、世界を掻き回すことにも飽きてきたところだった。

男がやってくる少し前、西国に一人の迷い人の女を王の側に送ったことがあった。

迷い人の奴隷問題を改善するために行ったことだ。

西国は、大昔に魔術大国であった名残りとして転送魔術の跡が数多く残されている。今も使用されている方陣も多いが、発掘もされずに放置してあるものが多い。そのためか、迷い人が落ちる時に座標を示されやすい西国に、多くの迷い人が落ちるのだ。他の国では無理矢理こちらへ落とすための召喚でもない限り、あれほど多くの迷い人が落ちたりはしない。

この増えすぎた迷い人の問題を解決するために西国に改善を求めたところ、どういうわけか奴隷とする法律を作ってしまったのだ。魔術大国であった頃、北国にも戦争を仕掛けてきていた西国が、北国の干渉をよく思わないことが起因だったようだが、奴隷の問題が他国にまで及ぶと、北国のあちらとこちらとの緩衝材としての役割

の意味がなくなる。

大則の手前、表立って干渉はできないので、王の側に迷い人を置くことになったのだ。

人選が確実に行われず、その過程はおもわしくないものだったが、結果としては西国は望む形となった。

北国の干渉を嫌う西国と、北国を受け入れる体裁の東国。

普段であれば、決して関わろうともしない両国の衝突は願ってもない結果だ。

この衝突が、あの男によって引き起こされたと知った時、アルティフィシアルは確信した。

西国の獅子王。

辺境の怪物伯爵。

南国の女帝。

不世出の智将。

東国の英雄王。

そして、東国のもう一人の宰相である、あの男。

駒が揃った。

すべての駒が揃った今ならば、男の言う幻想にも近い理想が完遂されるのではないかと。

実際、男の描いた精緻な計画は、一分の隙もなかった。

彼が居れば、アルティフィシアル達が願った結末が見られるのではないかと思った。

そんな夢物語の中に現われたのが、あの娘だった。

ヨウコ・キミジマ。

彼の計画にとって、まったくの予想外な闖入者。

本当ならば、この北国の、アルティフィシアルの元に来た時点で元の世界へと送り返すか、殺してしまうつもりだった。

彼女に魔術が効かないという特異体質だと知った後は、すぐにも殺すつもりだった。

だが、己が死んだとも気付かないまま死ぬはずの毒の入った昼食を彼女は一切手をつけなかった。

彼女は、計画には要らない。

むしろ彼女のお陰でミカエリもバルガーもアルティフィシアルの不審な動きに気がついたのだ。

他にもきつと気付いた者が居るだろう。

彼自身が動かなくてはならない場面は多々あった。

そのたびにあの娘は殺されかけているにも関わらず、どういう悪運の強さかとうとうアルティフィシアルの前にまでやってきたのだ。奇妙で、面白い娘だ。

人の死を、当たり前のように悼むごく普通の。

「僕は抜けさせてもらおうよ」

アルティフィシアルはもう救われた。

あの、何も知らない娘の、平凡な言葉に。

「大嫌いなんで初めて言われた」

面と向かってアルティフィシアルに暴言を吐く者など久し振りだ。

口の悪い弟子たちと、魔術の研究にばかり没頭していたあの頃のように、自分の予想もつかないことが起こるなんて。これほどまでに楽しいことだったのか。

アルティフィシアルはくすくすと笑って、椅子の上から天井に浮かべた自分の魔力の塊である青白い鬼火を一つ、送り出す。

「彼女の様子を見ておいで」

あの娘が送られた先でどうするのか見てみたい。

今はまだ、東国ではないから殺されることはないだろうが、もしも彼女が東国へ行ったなら、今度は確実に殺されるだろう。でもそれでは、アルティフィシアルが面白くない。

「さて？」

平凡で、何も知らない迷い人の女に、あの無駄なところなど何もない計画が乱されているのだ。

これが面白くないはずがない。

あの娘を無事にあの男の元へと送り届けてやろう。

全ての元凶のあの男、東国のもう一人の宰相の元へ。

「君は彼女をどうするんだろうね。——ラウヘル・小雪・トーレアリング」

ある弟の懺悔（前）

生まれた時からそこは誰かに見比べられる世界だった。

イーエロが生まれた世界は、それが全てで、それが絶対の掟だ。西国の王族として生まれたその瞬間から、イーエロは王族であり、弟であり、そして二歳年上の兄と常に比べられることが運命となった。

「イーエロさまだわ」

ひそひそという女たちの声が行く道で囁かれる。

さざ波のようなそれは、イーエロの常だった。

母譲りのきらめく金髪、父譲りの黄土色の瞳。いずれも彼の美貌を引き立たせ、その政治手腕を買われて過去にはイーエロを王太子にという声さえ上がった。

継承権を放棄した今でも、まことしやかにそのさえずりは消えない。

明るい日の光が差し込む回廊を歩けば、そこはイーエロの道となつて前に立つ者は誰もいない。

ただ一人を除いて。

「兄上」

振り返る長身が、イーエロを同じ色の瞳で射抜く。

がっしりとした体に暗い色をした詰襟の礼服をまとい、父王と同じ燃えるような赤毛をゆったりと垂らした姿はさながら獅子を思わせた。

誰が名付けたのか、いつからかこの兄王は獅子王と呼ばれている。

「準備が整いました」

「そうか」

兄の頷きで、二人は再び回廊を歩き出す。

今日、西国の边境に築かれたこの城で行われるのは、一つの歴史だ。

衝突を繰り返していた東国と西国との停戦協定。

その調印式が執り行われる。

式の差配を任されたイーエロは、すべての手筈を整えて兄である西国王、アウトロッソを出迎えに回廊まで足を運んだのだ。彼が常に単独行動をするためだ。

戦においての武勲を語られるアウトロッソは自身も卓越した剣の使い手であるからか、周りに護衛を置くことをあまりよしとせず、今も彼についている騎士は若い男たった一人だ。王都から先ほどついたばかりだが、アウトロッソは疲れた様子も見せず、イーエロに目を向けてきた。

「今回は御苦労だったな。お前の尽力があってここまで漕ぎつけることができた」

「とんでもありません。ようやく、落ち着くことができますね」

イーエロはアウトロッソの視線を受けながら、怒濤のひと月余りのことを思っ目細める。

本当に、このひと月で西国は変わった。

——否。変わらざるをえなかった。

全ての始まりは、兄が一人の女を戦場で拾ってきたことだろう。

兄は記憶もない傷だらけの女を介抱し、言葉を教えた。

東国との三年にも及ぶ国境沿いの戦は、まさに泥沼だった。東国の投入した戦女神という呪われた女たちはたった数十人で西国の奴隷兵士たちを焼き尽くし、何度滅してもその非道な邪法を東国は止めようとはしなかった。

大則の番人である北国は、東国のこの暴挙を無視し、西国は何一つ先手を打てない状況にあった。

そんな最中に拾われた女は、東国の王が身につけていたはずの外套を持っていた。

彼女がどういう経緯でそれを手に入れたのか。結局は分からずじまいだったが、彼女は戦で鬱々とした城内に安らぎの風を吹き込んだ。

何も知らない彼女が城内を駆けまわる姿は切迫していく国庫に頭を悩ませていたイーエロの心も和ませた。

ネロと名付けた彼女に一番心を癒されていたのは、アウトロツソだった。

日々抜き差しならない戦の悪化に心根の優しい兄が一人悩む姿は誰もが知るところであったので、ネロと接している時に見せる彼の柔らかな表情に安堵したものだ。

そして、その安らぎの風にイーエロも癒された。

ネロは、愛らしい女だった。

造作が特別整っているわけでもない彼女だったが、貴族の娘と違って感情を隠そうともせずころころと変わる表情が楽しく、微笑みは名も知らぬ野の花が綻んだようだった。

イーエロの言葉を理解するようになると、彼女はその小鳥のような声で彼との会話を楽しんでくれ、男女の機微に疎い初心な仕草がまだ青い果実を思わせてイーエロの心を甘くくすぐった。

イーエロには、もう一人愛した女が居た。

先代の王から城で女官長を務めるリーエという女だ。

彼女は先王からの寵愛を得て、城に住まうことを許された美女だった。

優しく慈愛に満ちた彼女は、父の子であるイーエロ達兄弟も優しく見守ってくれた才女でもある。イーエロ達の母である側室や正妃は子供には無関心で、寵愛を受けるリーエを疎んだが、彼女は王への愛を貫いた。

イーエロは、母代わりとして親った彼女を、いつしか女として愛した。

彼女は美しかった。

夜の帳のような長い黒髪に星空のように煌く黒い瞳、少女のように滑らかで小造りな容姿でもあるのに、豊かに熟れた体。

性への目覚めも手伝って、イーエロは夢で何度も彼女を犯した。

先王が若くして亡くなったあとと打ちひしがれる彼女に、イーエロはどうとうその汚れた情欲をぶつけた。

リーエは迷い人だ。そのため三十年近く前にやってきた若いままの肉体で、先王に愛されていて、今ではイーエロと同じ年となっていた。

彼女はイーエロを受け入れた。

夢にまで見た体は素晴らしく、イーエロはただ我武者羅にその肢体を貪り、舐めるように求めた。その激しいイーエロの求めに彼女も応じ、二人は父王の愛人と息子という背徳的な関係すらも楽しんで、熱く危険な日々を謳歌していた。

そんな毎日の中だった。

ネロがやってきたのは。

イーエロは、刺激に慣れていた。リーエとの日々は刺激的でイーエロを十分に満たしていたが、イーエロは彼女を知ってしまったことによって、更なる刺激を求めた。

兄の愛した女の、その愛らしい仮面の下にあるであろう愛欲を夢

想したのだ。

熟れた果実のようなリーエと、まだ見ぬ甘い雫を隠すネロ。体はリーエに溺れていた。だが、庇護欲と期待をくすぐるネロに、イーエロは自分でも知らぬうちに惹かれた。

しかし、イーエロがネロを手に入れる前に、その振り子のような毎日は唐突に終わりを告げる。

ネロが記憶を取り戻したのだ。

彼女は迷い人で、ヨウコと名乗った。

姿形はネロと同じだというのに、そこにはすでにあの純粹で愛らしい少女はなく、ふてぶてしい女が居座っていた。

激昂した兄が、剣を抜くことを本気でとどめたりはしなかった。

ネロはもう居ない。

しかし、あの女は死なず、あろうことかあの、怪物と称される伯爵の元で生かされることとなった。

調印式が行われる大広間に着くと、騎士がイーエロとアウトロツソを見とめて扉を開く。

そうして、

「――これはどういうことだ？」

広間では剣を構えた騎士たちが、一斉にアウトロツソを見据えていた。

「申し訳ありません。兄上」

イーエロはわざと靴音が響くようにして兄の隣を離れた。

そして、剣を構える騎士たちの輪の中に入る。

「調印式は行われません」

「何？」

訝る兄に、イーエロはにこりと微笑んだ。

自分の微笑みが他人にどう映るのかよく知っている。きらめく金髪に映える淡い色合いのフロックコートも切れ長の黄土色の瞳も、どれだけ神々しく見えるか。

「兄上は、ここで死んでいただきます。フィオレの倒れたこの地でね」

フィオレ、という名前にアウトロツソの堅い表情がわずかに動く。イーエロはその押し殺した顔に満足して目を細めた。

フィオレというのは、アウトロツソの元婚約者の名だ。

公爵家の娘である彼女は、イーエロとアウトロツソの幼馴染で、年を経て兄の婚約者となった。

勝気で聡明な娘だったが、三年前に殺された。

「――あいつを殺したのは、やはりお前か。イーエロ」

無数の剣に睨まれながら、アウトロツソは底冷えのするような瞳でイーエロを睨みつけた。

そう。

この辺境で彼女は死んだ。

「やはり、フィオレを愛しておられたのですね」

彼女は聡明だった。特別美しくもない娘だったが、彼女の微笑みに誰もが癒された。リーエはイーエロたちを叱りつけることなど一度もなかったが、彼女は違う。イーエロが悪戯をすれば容赦なく叱

りつけ、アウトロッソがひねくれた顔で不機嫌になれば、その笑顔で彼を笑わせる。

そういう娘だった。

アウトロッソは執務が忙しいことを理由に彼女を城へ招こうとはしなかったし、再三にわたる大臣たちの勧めにも肯かずに婚約期間を何年も伸ばしていた。

だから、ネロを正妃の間に置いたことを誰もが驚いたが、咎めはしなかった。

ようやく、妻を迎える気になったのだと。

だが、

「ネロに正妃の間をお与えになったのは、罪滅ぼしのつもりでしたか？ それまでの仕打ちに何一つ報えないまま、死んでいったフィオレへの」

イーエロはここで剣の柄に手をかけないことがおかしいほど、殺気に充ちたアウトロッソを見て確信した。

兄はフィオレを誰よりも愛していた。

そして、フィオレも。

「彼女は、最後にあなたを裏切りましたよ。私の誘いに安易に乗って、この辺境まで着いてきた。——私が危険だと知りながらね」

聡明だが、馬鹿な女だった。

死の間際までアウトロッソの心配をして、イーエロを諭した。

「お前には、真実など何一つ見えはしない」

兄の低い声にはっと顔を上げた。

同時に、イーエロの目に戦慄が駆け抜ける。

アウトロツソを取り囲んでいたはずの十数人の騎士が消えた。
血痕一つ床にもなく、ただ忽然と消えたのだ。

イーエロの目が瞬く間に。

視界を何度さまよわせても、アウトロツソを囲んでいた騎士の姿はない。

それはイーエロの周りに居る騎士たちも同じようで、困惑に剣先を迷わせている。

そんな中、平然としているアウトロツソの隣に、彼に一人だけついてきていた若い騎士がアウトロツソの後ろに控えた。あの男も騎士たちが取り囲んでいたはずだが、扉の脇をいくら眺めてもその姿はない。

混乱を極めるイーエロに、アウトロツソが静かに告げる。

「リーエ一人を獄中送りにして安心したか」

アウトロツソは無表情に言い、イーエロを見つめる。

「お前が、常々、俺を疎ましく思っていることは知っていた」

イーエロは耳を塞ぎたい衝動に顔を歪める。

だが、目の前の王はそれを許さず続けた。

「だが、お前は俺の大事な弟だ。それを忘れるな」

何かがこぼれおちるような気がした。

しかし、もうイーエロには拾いあげるすべはない。

歪んだ言葉をあらん限りに張り上げるしか。

「――あなたはいつもそうだ！」

悔しかった。

「あなたは、私よりも劣るくせに、いつも私の上をいく！ 私の欲しいものを、すべて持って！」

イーエロは常に兄と比べられた。

比べられ、常に彼より勝っていた。

容姿だろうが、学問だろうが、女だろうが。

だが、兄はいつも評価の上をいく。

「いつだって、王であるあなたが憎い！」

兄はいつも誰よりも王だった。

弟である以前に、イーエロは常にアウトロッソに敗北していた。

それでも、イーエロは彼より勝っていたはずだった。

「王であるべきなのは、私だったはずだ！」

大臣の誰もがイーエロを王にと推した。先王の愛人であったリ―エも閨で囁いた。アウトロッソ自身でさえ、弟を王位にと議会で進言した。

しかし、それをたった一人が覆した。

「……父上は、きっとこうなることを分かっておられたのだろう」

アウトロッソは弟の激情に静かに耳を傾けて、息を吐いた。

「今際の際に俺は耳打ちされていた。迷い人と北国に気をつけよと。」

俺はそれがお前が進言したように、増え続ける迷い人の奴隷問題のことだと勘違いしていたが、父上が言いたかったのは、あのリーエの内にある狂気だったのだろう」

イーエロは静かな告白に息を詰める。

父は気付いていたというのか。

あのリーエの、狂暴なまでの潔癖な狂気に。

イーエロは、あの女の体の中に流れているものが何のか知っていた。

自己愛と顕示欲。それがイーエロにも通じるものがあつたから、愛せたのだ。

だから、イーエロは兄を排除しようと考えたときに、リーエの暴走に任せた。

「考えてみれば憐れな女だ。何も知らない世界に落とされ、奴隷とされ、生きるすべは父上しかいなかった。父上はそれを分かつたうえで、あの女を愛したんだ」

すべて。

全て知つたうえで、あの女を愛したのか。

イーエロは笑いだしたい気分になった。

偉大な父だった。聡明で、今でも名君として慕う者は多い。

その父に似た兄。

これでは、

「私は、とんだ道化だったというわけですね」

とうとうイーエロは声を張り上げて笑った。
もう全てが終わりだ。

「――大人しく裁きを受けろ。死なせはしない」

アウトロッソの顔が歪む。

その瞳に憐憫の光を見つけて、イーエロは叫んだ。

「殺せ！ 生きて帰すな！」

困惑していた騎士たちに命令を与えると、彼らは人形のようにアウトロッソへと剣を向けた。今、この辺境の城にアウトロッソの味方はあの傍らの騎士だけだ。隠蔽工作として連れてきた女官は今も一人もおらず、居るのはイーエロの息のかかった騎士たちのみだ。いくら剣の達人とはいえ、たった二人で逃げおおせるはずもない。だが、アウトロッソは剣の柄にさえ、手をかけようとはしなかった。

その代りに、彼の隣に進み出て腕を軽く振ったのは、今まで黙って控えていた若い騎士だった。

屈強な戦士にも見えない瘦身の男の腕が、立ち向かう騎士たちを払う。

そう見えた瞬間、彼らは消えた。

何の冗談か。

忽然と消えたのだ。

何者だ。

イーエロの困惑を見てとったのか、若い男はにやりと笑う。平凡な男だ。少しはねた黒髪の痩身で、騎士の格好をしているが、腰に下げた剣さえ抜こうとしない様は軽薄に見える。

「無駄だ。イーエロ。彼には勝てない」

王であり、剣士であるアウトロッソがまるで敬意を払うような言い草だ。

だが、勝てないというよりも、まるで悪夢じみた手品を見ているようだ。

イーエロはこんなものを飼っている人物を今になって思い至った。

「――貴様、伯爵の手の者か！」

イーエロの計画をたった数手で破ったあの怪物の。

兄の召喚にずっと応じなかったというのに、あの、ネロが殺されかけた時に、奇跡のような間合いで姿を見せ、それから瞬く間に混乱を極めていた内政を掌握して、アウトロツソの信を得た。

その場所は、イーエロの物であったはずなのに。

気付いた時には全てが遅過ぎる。

イーエロはすでに逃げ腰の騎士たちを放って、窓へと駆けだした。

あまり使うことのない腰の剣を抜き、勢いのまま窓を斬り破る。

けたたましい音と共に、大広間から外へと飛び出した。

誰かが追ってくる気配はあったが、イーエロは構わず城の周りにある森へと駆けた。

もしものための逃走用にと、森を抜けた先に馬が用意してある。

窓ガラスで切った傷を無視して走る中で、イーエロは三年前のことを思い出していた。

あの時も、森の中だった。

ある弟の懺悔（後）

鬱蒼とした森の中、兄の代わりに視察に行つて欲しいとフィオレを誘いだした。

そして、辺境の村へと連れ出して、東国の放ったあの炎の呪われた女神たちに襲われた。フィオレとイーエロは辛うじて彼女たちの手を逃れ、二人で近くの森に逃げ込んだのだ。

怪我はない？

フィオレは煤で汚れた顔で、イーエロの顔をハンカチで拭つてくれた。

彼女は分かっていたはずだった。もしかしたら、兄よりも先に、イーエロとリーエのことを知っていたはずだ。それでも彼女はイーエロに伴った。

大丈夫だとイーエロが微笑むと、フィオレもつられたように微笑んだ。

イーエロは、彼女の微笑みが好きだった。

そこに男女の情愛はなく、ただ、純粹に彼女が好きだった。

彼女が兄と婚約した時、誰より喜んだのはイーエロだ。

そんなフィオレが大した逢瀬も与えられず、アウトロツソにないがしろにされていることに、イーエロは憤っていたが、彼女はいつも笑っていた。

仕方のない人だから。

そう言われて、イーエロは黙るしかない。そして、何故か取り残されたような心地になった。

だから、フィオレの前で剣を抜いたときにも、さほど抵抗はなかった。

フィオレは兄を愛している。いつもそばに居るイーエロではなく。

そして兄も。

そんなイーエロに、フィオレは静かな声で言った。

「イーエロ。私はあなたが誰より賢いことを知っているわ。だから見失わないで。何が大切なのか。大切なものはいつだって見えないのよ」

これ以上、声を聞きたくなくて、イーエロは彼女の柔らかな体に剣を突き立てた。

それでも彼女は言葉を紡ぐ。

「――アウトロッソを守ってあげて。あの人は見た目よりも優しいから」

それから、とごぼりと吐いた血がイーエロの上着を濡らす。

「愛しているわ。イーエロ。私の大事な弟」

彼女が死んだ後、アウトロッソは東国との開戦を決めた。

すでに森の中にイーエロを追う気配はなかった。

それでも息を切らして森を抜け、そこで林の木に繋いである馬を見つける。

すでに事は成った。

だが、イーエロはまだ兄に殺されるわけにはいかない。

他の誰でもない兄に殺されなければならないが、まだその時ではない。

イーエロには、この手でどうしても葬らなければならない男が居る。

馬に乗ろうと鐙に足をかけたところで、背後の森から靴音が現れた。

「――お疲れ様でした。イーエロ殿下」

酷薄そうな唇に笑みを湛えている男だ。背は高くもないが低くもない。森に溶け込むような暗い色のフロックコート姿だが、およそ森を散歩するような格好ではない。男も女も髪を伸ばす東国の習慣にのっとって、赤銅色の襟足だけが長く三つ編みに編まれている。東国では珍しい眼鏡をかけた姿は穏やかな紳士に見えるが、その奥の禍々しいまでの赤を閉じ込めた緋色の双眸は、色に反して冴え冴えとどこまでも冷たい光を宿している。

「……あなたも、あの城に居たはずでは？」

イーエロは注意深く馬を背に男と向かい合う。

確かにこの男もあの辺境の城に居たはずだ。

ほんの数刻前に、彼と話をした。

兄を葬るための。

皮肉なことだ。

イーエロは心の中で嘲笑った。

「吸っても？」

いつのまにか取り出した細いパイプを片手に男は訊ねてきた。イーエロがうなずくと、懷から刻み煙草の箱を取り出し、パイプの先に詰めると、共に取り出したマッチで火をつける。この場にそぐわないいゆったりとした紫煙をくゆらせて、男は再び口を開いた。

「イーエロ殿下のお味方の騎士はたくさん居たのですがね。どうもあの城はよくない気がして先にこちらに来たのですよ」

のんびりと話す男に、イーエロは内心舌打ちする。

うまくいけば、あの伯爵の手の者がこの男を始末してくれるかもしれないと思ったのだ。伯爵にしても、この男は、喉から手が出るほど欲しい首級のはずだった。

全ての元凶である、この男。

「ところで、殿下はどうしてここへ？」

逃走用の馬にすがっているところを見て、分からないはずもない。だが、この男はあえて口になっている。

「――貴様、初めから分かっていたな？」

イーエロは自分で口にして、苦々しい味が喉元に広がっていくのを感じた。

知っていたのだ。

この男は初めから。

「お前は、私は王にふさわしいと言ったな」

イーエロの低い問いかけに、男はのんびりと煙を吐き出す。

「ええ」

「兄は王にふさわしくないとも」

「言いましたね」

「あれは嘘か」

「いいえ？」

再び煙を吐きだして、男はゆったりと笑う。

この男は巧みだった。

先王が死に、イーエロがリーエを手に入れた矢先のこと。イーエロが最も盲目だったときだ。何かの席で共にしたこの東国の男がイーエロに話しかけてきたのだ。

西国で国交の少ない東国の者を見かけることは少ない。その珍しさも手伝って、イーエロはこの男の話に付き合った。

初めは男の東国の情勢の話だった。若くして王位についた王はまだ政治に疎く、迷い人によって中枢が歪んだ内政を建て直すには力不足。それに対して、西国は武の王に文の王弟が両輪として確固たるわだちを刻むだろうと。

そうして話しているうちに、イーエロは男に兄のことなどを話した。リーエのこと、フィオレのこと、そして自分がひた隠しにしている兄への劣等感。

時を忘れて話したあと、男は最後にイーエロに告げた。
あなたが望むなら、力を貸そうと。

今と同じように、細く笑むような酷薄な笑みを浮かべて。

「どれも嘘ではありませんよ。あなたは王にふさわしい」

ただ、とパイプをくわえて吸うと、煙と共に笑う。

「あなたは王にはなれないだけで」

イーエロは、自分が手にしている細身の剣を手の中で意識した。
この男は、実際イーエロへの助力を惜しなかった。

イーエロに私兵ともいえる騎士たちをあらゆる手段で手懐けさせ、
フィオレを誘いだす算段もこの男がつけた。

男の正体を知ったのは、東国と西国が開戦したあとだ。

「――ラウヘル・ショウセツ・トーレアリング」

低く名を呼ぶと、男、ラウヘルはパイプから口を放した。

「ご存知でしたか」

「お前が東国の宰相であることを知らなければ、こうも簡単に誘いに乗ることもなかっただろう」

開戦した後、東国の諜報員からイーエロはこの男が東国の二人居る宰相のうちの、片割れだということを知った。

知ったところで後の祭りだ。

計画はすでに動き出していた。

そして、イーエロの心も。

ネロがやってきた時は絶好の契機だったのだ。

兄は油断し、大臣たちやリーエへの監視の目は緩められていた。

ラウヘルは喉の奥を鳴らすように笑った。

「私の誘いが無くとも、あなたはいずれ兄上殿を手にかけてようとしていたでしょう。私はそれを少しお手伝いしただけです」

自分の矮小な心を抉られイーエロが呻いても、目の前の男はただ笑うだけだ。

「……東国の宰相でありながら西国を煽って戦争を起こし、今度は大臣たちを使ってリーエを巻きこんで、寝ていたはずの怪物を起こしたな？」

伯爵の登場によって、三年に及んだ戦争が終わろうとしている。リーエに協力した大臣たちの背後関係がわずかに納得いかず、調べているうちにまたもこの男が浮上したのだ。

どこからがこの男の手の内なのか。
知った時には背筋が凍った。

ラウヘルは肩を竦めて天気の話をもするように和やかに答えた。

「伯爵には正直、手を焼いていますよ。もう少し穏便に出てきていただくはずが、少し計画が狂いましてね」

「…………お前はいったい何をしたいんだ」

一人の人間が引き起こすには、あまりに大きな計画だ。

イーエロの問いに、ラウヘルは口元に笑みを湛えたままパイプをくわえる。

「私は私の欲しいもののために。あなただって同じでしょう」

イーエロの欲しかったもの。

それはもう失われてしまったものだ。

それがもう何なのか、イーエロ自身にさえ分からない。

イーエロにも分からない答えを、全くの他人であるはずの男が呆れたように口にした。

「あなたはおっしゃっていたじゃないですか。フィオレさんも大事、兄上殿も大事。だから私は教えてあげたでしょう。あなたは」

フィオレと兄と、三人で過ごす時間が欲しい。

何よりも大切だった。

あの他愛もない話をして笑い合う。
たった、それだけが。

手にした剣の鐔がかちかちと鳴った。

それを押さえこむように、イーエロは柄を握り締める。

失った。

否。

手にしていたのに手放したのはイーエロだ。

取り零したものは、元には戻らない。

掴んだ柄を、ゆっくりと引き抜く。

それでも目の前の悪魔のような男は面白がるように笑ったままだった。

「私はね。本当にあなたが王になってもいいと思っていたのですよ。どちらにしても、西国の勢いを殺せますからね。暴走しかねない両輪は必要ありませんから」

何にとって必要ないのか。

今のイーエロにとっては預かり知らないことだ。

「――ならば、お前の望みどおりになったというわけだな」

抜き放った刃は陽光をゆっくりと照り返す。

「事はすでに成った。お前も私も終わりだ」

逃げだしたイーエロを追って、城から追手がかかっているだろう。イーエロの行先は残された騎士たちから聞きだせばいい。

あの伯爵の部下ならば、悪夢のような手早さでここを突きとめる。

なるほど、とラウヘルは煙を吐きだし、懷から灰皿を取り出してパイプの中で焼き切れた灰を落とした。

「ここでの長話は時間稼ぎというわけですか」

こんこんとパイプの先からマッチの箱によく似た灰皿に灰を収めると、ラウヘルは灰皿をしまいこんでパイプを指で撫でる。

「でも残念でしたね。伯爵の部下はここへは来ません」

そう言って薄く笑い、瞠目するイーエロを見遣る。

「今頃、彼らは北国へ向かっていますよ。本当の調印式のためにね。あなたの処遇は、すべて私に任せていただいています。――あなたの兄上殿に」

「兄上に何をした…っ！」

「何も。ただ、あなたのここでの計画を少しだけお教えしただけです」

イーエロは齒を鳴らす。この男は、イーエロと計画を相談したその足で、アウトロッソに告げ口しに行ったのだ。
ならば、

「――兄は、すべて知ったうえでここに来たのか……」

イーエロの裏切りにも背信も知ったうえで。

「お優しい兄上殿ですね」

イーエロは今度こそ殺意を刃に乗せて切っ先をラウヘルに向けた。
ブン！

王族であるイーエロもアウトロッソほどではないが、武芸の心得はある。

だが、ラウヘルはイーエロの一閃を事もなげに避ける。

この男を、生かしておくわけにはいかない。

イーエロは剣をほとんどやみくもに振り回す。

罪滅ぼしになどなろうはずもなかったが、この男が生きている限り、イーエロは死ねない。

「うっ！」

一方的に斬りかかっていたイーエロは、腹に鋭い痛みを感じてよ

ろめいた。

わずかに目を向けると、焼け焦げたような小さな穴から血が噴き出しかけている。

思わず手を当てるが、足から力は抜けて気付いた時には土の上に転がっていた。

それでも見憶えのある足元を見つけて、渾身の力で握りこんでいた剣を振るうが、無慈悲に剣先は靴底で踏み押さえられた。

辛うじて目線だけで主を辿ると、冷たい笑みを湛えたままのラウヘルが小さな筒をイーエロに向けていた。

掌に収まる程度のそれは、魔術を扱わない南国で作られている拳銃だ。

しかし、南国と交流のある西国のイーエロでさえ珍しいそれを、ほとんど国交のない東国の、それも宰相が持っているのは奇妙な組み合わせだ。

いったい、何をこの男は手の内に隠しているのか。

「――あなたの役はここまでですよ。なに、殺しはしません。少しの間、退場していただくだけですから」

笑いもしない歪んだ声を聞きながら、イーエロは痛みに顔をしかめて願った。

この男は危険だ。

誰でもいいから気付け。

イーエロ、と柔らかな声がする。

振り返れば、きつと彼女が呆れたように笑うのだろう。

その後ろにはきつと兄が、待ちくたびれたように見守っている。

ネロは、そんな幻想を思い出させてくれたのかもしれない。
あの、暖かな時間を。

もう、何も元には戻らないけれど。

助けてくれ。誰でもいいから。
フィオレ、助けてくれ。

どうか、兄上を守ってくれ。

ある兄の決断（上）

誓約を共に交換し、サインと王しか持つことが許されない魔術で作られた印を捺して、調印式は終わった。

文書での停戦協定から約二週間後、東国と西国との間に国交を結ぶこととなり、中立の北国で両国の王が直に対面することとなった。アウトロッソは、正面に座る五年ぶりに見る東の王を見つめた。静謐な湖のような雰囲気がい以前にも増してその威厳を増し、今はまるで海の底のような空気を纏っている。

「長きに渡る争いの軋轢を、すぐに無くすことはできないだろうが、共にこれから話し合おう」

互いの重臣を交えての調印式のあと、晩餐会までの休憩時間に共に詰襟の礼装のまま、東国王はそう西国の言葉で話しかけてきた。その口元に湛えた笑みは本当の意味で西国とのより良い関係を望んでいる誠意が感じられ、アウトロッソは東国の言葉を口にした。

「争いの過根は完全に消えることはないだろうが、貴国の対応に我が国も実意をもって応じよう」

東国との軋轢を解消するには、長い時間と途方もない忍耐が必要になる。

だが、この隣に座る王が、今のままである限り、それは実現できるような気がした。

ここへ至るまで、この東国も西国も多大な犠牲を払ったのだ。戦争の終わりと平和の成就是、全ての人の悲願だ。

アウトロツソ自身も、大きな犠牲を強いられた。

腹違いの弟と、彼が手にかけてアウトロツソの婚約者。

戦争の発端となった彼らの犠牲の上に、この調印は成り立ったのだ。

アウトロツソは、昔から優秀で容姿も優れた弟にいつも勝てたことなどなかった。

姿だけならば、アウトロツソは父王の生き写しと言われたが、それ以外は何一つ似ていなかった。政治に優れた父王は、何代にもわたり滞りがちだった所領の整備を進め、なし崩しに出来た迷い人の奴隷問題にも着手した名君だ。だが、アウトロツソは帝王学は苦手で、いつもやんちゃ仲間とつるんで剣を振りまわすことばかりに熱中していたので、周囲からは野蛮とそしられた。正妃である母からは、このような野蛮な猿は自分の子ではないといわしめたほどだ。

だから、二歳年下の弟は側妃の息子であったが優秀で、その側妃にしてもアウトロツソの母と身分もそれほど大差ない大貴族の家の出だったこともあり、弟を王位にと誰もが望んだ。さすがに正妃である母は反対したが、本気ではなかったように思う。そしてアウトロツソ自身も、弟の立太子を望んだ。幼いころから、長男であるがゆえに王となることを言い含められてきたが、知れば知るほど窮屈な王位は、まだ国のために剣を振りまわす騎士たちの方が自由に見えるほどで、政治に携われるようになってからは、常々弟を王に思うようになっていた。

弟、イーエロは優秀だった。物心つく頃から神童と謳われ、優秀であるはずの家庭教師たちも舌を巻くほどだった。国政に関わるようになって、駆け引きの上手さとその頭の回転の早さですぐに頭角を現した。兄であるアウトロツソが目新しい国政の事務作業に追われている最中に、イーエロはすでに内政の大臣たちに意見を提出するようになっていた。

だから、政治手腕の優れたイーエロであるなら、この西国を立て直せるように思ったのだ。

すでに、西国の根幹は腐り落ちていた。長年仕えた重臣たちは長い平和で迷盲し、彼らを非難するべき国民でさえもその知識すら乏しく、西国は少しずつではあるが荒れていた。

アウトロッソでさえ気付くその綻びを弟が見逃すはずはないと思っていたし、父王もそれを是正することのできる者を王に選ぶと思われた。

だが、病に倒れた父が王に指名したのは、アウトロッソだった。

ちょうどその頃だった。

幼馴染でもあったフィオレがアウトロッソの婚約者となったのは。

亜麻色の髪が印象的な、アウトロッソと同じ年の娘だった。

幼い頃から王家に出入りし、アウトロッソたちの姉のような存在で、口達者なイーエロも粗野なアウトロッソも彼女にだけは頭が上がらなかった。

物心ついた頃から、父王の愛人である迷い人のリーエが兄弟の面倒を見ていたが、彼女がアウトロッソ達を叱るようなことはなかったので、甘えたい放題だった兄弟を本当の意味でしつけたのは、弱冠六歳の少女だったのだ。

年を経てもフィオレの怒鳴り声を聞けば、剣を振りまわしていたアウトロッソさえも背筋が伸びた。

そんな彼女が領地に帰って久しい中、ほとんど一方的に父から婚約を告げられたのだ。

アウトロッソも戸惑ったが、王都から遠く離れた領地から呼び出されたフィオレは本当に困った顔で苦笑したものだ。

年頃になった彼女は、昔の少女の面影を残しながら、女になっていた。

かすかに香る程度の柔らかな花になった彼女は、始めは反発して

いたものの徐々にアウトロッソを愛した。

アウトロッソも、柔らかな風のように安らぐ彼女の隣を愛した。

だが、そんなゆっくりとした二人を時は待たなかった。

父王の死と共にアウトロッソは王となり、イーエロはリーエとの危険な恋に興じ、西国はますます荒れた。

何もかもが狂い始めていた。

周囲はアウトロッソの結婚を急かしたが、暴れ狂うような政治の真っただ中にフィオレを巻きこむことはできない。

誰もが、イーエロでさえもアウトロッソを非難したが、ただ一人、当のフィオレだけがアウトロッソを理解してくれていた。

時折やりとりしていた手紙には、イーエロと、アウトロッソを氣遣う言葉ばかりがつづられていて、それだけがアウトロッソの心を痛めた。

早く報いてやりたかった。

フィオレが己を押し殺して手紙をつづっていることは、アウトロッソが一番よく分かっていた。

それも、彼女の死ですべてが終わった。

東国との開戦を機に、元々軋轢の絶えなかった北国との国交を完全に断った。

イーエロとリーエの暴走を知りながら、とどめることもできず、アウトロッソは孤独を深め、気がつけば戦の先陣を切るようになっていた。

誰も咎めはしなかった。

アウトロッソは王だ。

ただただ孤独の。

「王よ。もうおやめなさい」

父王の兄でアウトロッソの伯父である公爵が何度も彼を諫めた。公爵はアウトロッソをただ一人で見守ってくれていた唯一残った賢臣だ。

「あなたの悲しみを、すべての国民に押し付けるおつもりですか」

「―――奴隷は国民ではない」

イーエロが繰り返した言葉をアウトロッソは繰り返す。

正論には耳を貸さなかった。

耳をつんざくような言葉はもう何もいらなかった。

そんな最中、アウトロッソは戦場で女を拾った。

東国王がまどっていたはずの外套を持った女で、必死になって憎い戦女神たちを庇ったかと思えば、次に目を覚ましたときには自分が何者であるかすら忘れていた。

アウトロッソは、彼女が羨ましかった。

気を失いそうなほどの辛い出来事を、すべて忘れて生きていられるのだ。

記憶というものは辛いことほどよく思い出されるものだ。

アウトロッソは彼女の傷を癒し、言葉を教えた。

根気よく教えたせいか彼女はアウトロッソにまるでヒナの刷り込みのように懐き、よく笑うようになった。その屈託ない笑顔は、いつかのフィオレを思わせた。

ネロと名付けたその少女に、アウトロッソは徐々に心を傾けた。フィオレにしてやれなかったことを、この娘にすべて注いでやるような。

彼女が隣に居れば、まるでフィオレが戻ってきたようだった。ずっと、この時間が続けばいいと。

そして、彼女は政変に巻き込まれた。

アウトロッソが愛情を向ければ、そこに争いが必ず起こることは分かっていたはずだったのに、それを防げなかった。

未だ世間知らずなネロを一人置いて、視察に向かった己を責めたアウトロッソを待っていたのは、記憶を取り戻した知らない女だった。

思えば、あの女から始まった。

腐り落ちながらも平和だったアウトロッソの周辺を、知らないうちに嵐に放り込んだのだ。イーエロは狂い、リーエは嫉妬に暴走し、西国の、最後の楔が姿を現した。

そうして三年にも及んだ先の見えない戦いは瞬く間に終わりを告げる。

残ったのは、大切なものをすべて失ったアウトロッソと、あの女だけ。

アウトロッソが愛したネロはもういない。

あとは、この歪んだ戦争の元凶を捕えるだけだ。

アウトロッソは隣の一人掛け用のソファで寛いでいるように見える東国の王を見遣った。

彼も湖面のような眼でこちらを見ていた。
終わりだ。

「ラウヘル」

東国の王、ヘイキングが低い声が広くはない休憩室に響く。

ある兄の決断（上）（後書き）

文法の誤りをご指摘いただきましたので修正いたしました。
ありがとうございます。

ある兄の決断（下）

古い調度品の間からその呼びかけに応えたのは、赤銅色の髪の男だった。

中肉中背の袷の上着に詰襟の服を合わせた東国の伝統的な格好の礼装で、襟足だけを三つ編みにした姿はいかにも平凡に見えた。珍しいことと言えば、東国ではあまり見かけないはずの眼鏡をかけていることと、その奥にある夕日を閉じ込めたような緋色の双眸だ。年格好はアウトロツソやヘイキリングよりも幾らか上ほどで、思っていたよりも年若い。

ただ、その口元の笑みは上品だったが、酷薄だった。

「お前は、トーレアリングの当主としてよく東国に仕えてくれた。今回の停戦もお前の尽力あってこそだ。よくやってくれた」

王の突然の呼び出しと、讃辞にも、ほとんど動揺など見せず、ラウヘルという男は深くこうべを垂れた。

「もったいなきお言葉でございます。このたびの停戦と国交は、陛下と西国王陛下によるご英断なくしてなしえなかったものと存じます」

流暢な西国語だった。西国語と東国語はその成り立ちからして異なるため、幼いころから留学を繰り返していたヘイキリングであるから会話に不便のないほど話せるものだが、ラウヘルはそれとはまた異なる。外交によく慣れた者の話し方だ。

「――ならば、何も言うまい」

ヘイキリングの声がいつそう冷たく冴えた。

「お前を今回の戦争の特級戦犯として捕える」

ゆっくりと、赤銅色の頭を持ち上げる。

それとほとんど同時に、部屋に風が巻き起こった。

瞬きの間に現われたのは五人の男女だ。

揃いのコートに身を包み、手にした剣を各々取り囲んだ男に突き付けている。

異常なこの光景に慣れたはずのアウトロツソでさえ息を呑んだというのに、剣先に囲まれた当の男はのんびりと自分の周囲を見回しただけだった。

そうして、誰も口を開けない中で、ただ一人、面白がるように笑った。

「――第七十七師団の方々ですね？ お初にお目にかかります」

暗い色のコートを着た男女はいずれも応えなかった。

剣先を下げようとしてもしない彼らは、一人で千人の働きをすると言われる幻の化け物集団だ。男一人を拘束するために、五人も現れただけでも驚嘆に値するというのに、ラウヘルは珍しいものを発見したように眺めただけだった。

「閃撃の貴公子に、氷血の悪魔、鮮血の踊り子、魔神の影法師、そして、師団の長である黄金の魔女」

ラウヘルは自分に剣を向ける一人一人の顔を眺めながら、その異名を楽しむように並べて目を細める。

「光栄ですよ。七十七師団の仕官クラスの方々など、生きているうちに会えるものではありませんからね」

「我が軍を気に入っていただけてこちらこそ光栄だ。トーレアリング宰相」

決して和やかではない部屋に現われたのは、フロックコートに身を包んだ入れ墨の顔の男だ。

その男を見とめて、ラウヘルは初めて少しだけ顔色を変えた。

「――メフィステニス伯爵」

そして、次に現われた男を皮肉げに笑う。

「裏切ったな。白い悪魔め」

メフィステニスの後ろから現れたのは、まだ青年にも見える白髪の男だ。男もラウヘルを見つけて、楽しげに笑った。

「君に言われたくないよ。ラウヘル」

悪魔と呼ばれた男はラウヘルに笑いかけて、次にアウトロッソとヘイキリングを見遣る。

「さて、どうする？ 僕もこの男に付き合って今回の戦争に関わったけど。僕も戦犯として捕えるかい？」

「アルティフィシアル・サングレ卿。北国最初の魔術師にして長たるあなたの罪はいずれ問う。だが、今はこの者の捕縛に助力いただ

いたことを感謝する」

アウトロツソがそう静かに言うど、アルティフィシアルはただ笑つて肩を竦めた。

この男の言がなければにわかには信じられなかつただろう。今回の東国と西国の戦争が、たった一人の男によつて引き起こされたことなど。

實際、アルティフィシアルの関わつたことなど、ほんの一部に過ぎない。

「——だつてさ。潮時じゃない？ ラウヘル」

メフィステニスの隣で軽口を叩くアルティフィシアルを眺め、ラウヘルはふつと笑い、

「一服吸つても？」

いつの間にか懷から取り出したパイプと刻み煙草の箱を持ちあげた。

「——なぜ、とは問うまい。お前の成した結果はすでに純然な答えとなつて出ているからな」

刻み煙草をパイプの先に詰めて静かにマッチで火をつけたラウヘルを眺めながら、ヘイキリングは独り言のように呟いた。

「国交の全くなかつた東国と西国の接点を作りたかつたのだろう？ それも強固な。そして北国、南国とそれぞれに交流のある両国を使つて、四国をまとめようとした」

東国の王の言葉に愕然となったのはアウトロッソの方だった。
ヘイキリング王の言葉が本当であれば、とんでもない荒療治だ。
いったい何人がその犠牲になったのか。

思わず齒の奥を噛みしめる。

だが、アウトロッソを横目に、ラウヘルはゆったりと紫煙をくゆ
らせただけだった。

「五年前に、そのサングレ卿に私に呪いをかけさせたのは、私が
居ては計画に支障が出るからか」

「――御見事です。陛下」

顔をしかめたヘイキリングに、ラウヘルは出来のいい生徒を褒め
るような口調で笑う。

「ですが、私を捕えることはできませんよ。誰にも」

パイプから漂う煙を己の首に狙いを定める剣に向かって吐くと、
ラウヘルはヘイキリングとアウトロッソを眺めた。

「私が戦犯となる証拠はどこにもない。戦犯ならもう捕らえたはず
でしょう。ハイラント中尉以下十一名を」

その言葉にヘイキリングの泰然と凜いだ表情が一息に歪む。

「西国にしても、すでに関わった数十名の大臣と迷い人の女官長、
そして主謀である殿下を捕えたはずですよ」

何を言われているのかわからず、アウトロッソは一瞬言葉の意味

をもう一度噛み砕いた。

主謀である、殿下。

「貴様！ イーエロをどうした！」

イーエロは、弟は、

「生きていらっしやいますよ」

辺境で、目の前で煙草をくゆらせるこの男に殺されたはずだった。

西国の辺境での調印式が、罨であることを告げてきたこの男がやってきたときには、すでに彼の正体をヘイキング王から聞いていた。

だから、すべてが罨であることを知りながら、そしてこちらが逆にこの罨を利用する形で偽の調印式に出向くことを決めたのだ。

イーエロの罪は許されない。

王族として、人として、穏やかな最期など望めない。

だがせめて、弟と話をしたくて辺境に赴いた。

イーエロの罪は重いが、フィエロが没した地でなら、あのお節介な彼女がイーエロの魂を救ってくれるような気がした。彼女ならば、きつとイーエロを恨みはしなかっただろうから。

ラウヘルがイーエロと共にあの城へ向かったことは伯爵の手の者から知っていた。

だから、伯爵の部下を一人借りて、弟と最後の会話をかわしたのだ。

戦の終わった今、イーエロはあの男にとっては必要のない駒だ。

いずれ殺されることは分かっていた。

だが、

「生きているだと……?」

低く呻いたアウトロッソに向かって、ラウヘルは不遜に笑った。

「ひどい兄上殿ですね。弟君は常にあなたのことを案じておられたというのに」

「貴様…!」

アウトロッソは自分の視界が赤く彩られるのを見た。

今はない剣の存在を思い出して空を掴み、おもむろに腰をあげたところで、

「お待ちなさい、伯爵」

ラウヘルが突きつけられた一人の女の剣先にパイプの灰を落としました。

コンという甲高い音に、他の者の剣が彼を貫こうとしたが、伯爵が目を細めて制止をかける。

「私を殺せば、旅に出たあなたの大事な娘が一生戻らないことになりますよ」

ラウヘルの言葉に、真っ先に反応したのは伯爵ではなく彼に剣を突き付けていた黄金の魔女だった。

瞬きの間にラウヘルの目の上に剣先を突き付ける。

「――貴様、ヨウコさまに何をした」

ヨウコ。

聞き覚えのあるはずだ。彼女は、ひと月もの間共に過ごした。アウトロッソは目を見開いたが、隣で響いた音に驚いた。

「葉子だと…?」

思わず、といった風に立ち上がったヘイキリングが半ば茫然と呟いたかと思えば、わななく唇で叫ぶ。

「それは、葉子・君島のことか!」

今や彼は王ではなかった。

ただ、一人の男として叫んでいた。

まるで、探していた恋人の名を聞いたような。

「生きて…っ」

感情の昂ぶりに掠れた声は続かない。

そんな彼に、ラウヘルは横目を向けて笑う。

「ええ。生きていらっしやいますよ。ヨウコ・キミジマ様は」

自分の目を貫こうとしている剣先さえ興味を惹かないものなのか、ラウヘルはすいと視線をそらせると、子供に宝物の場所を示すような口調でパイプに再び刻み煙草を詰める。

「あの戦場で、アウトロッソ陛下に助けられ、そのメフィステニス伯爵の養子になったのですよ。——ああ、まだ予定でしたか」

言葉を向けられ、無表情だった伯爵の眉がわずかに歪んだ。

「そしてラーゴスタを経て、北国までいらっしゃっていたのですよ」

「——もうここにはいないけどね」

そう続けたのはアルティフィシアルだ。

「ラウヘルが来る前にとまって、安全な場所に飛ばしちゃった」

うっすら笑うアルティフィシアルに、ラウヘルはパイプに火を入れてのんびりと煙を吐く。

「ええ。知っていますよ」

そう言ってまたパイプをくわえたラウヘルを、今度はアルティフィシアルが睨んだ。

「せっかく東国に帰ってくる気になっていた彼女を、南国に飛ばしましたね？ あなた」

「——なぜ」

「バルガー殿の術式をいたずらに邪魔したりするからですよ。せっかく着地座標で待っていたのに、あなたが無理矢理介入したりするから。おかげで逆算してあなたが彼女を飛ばした場所を割り出せましたけどね」

何の気なく答えたラウヘルをアルティフィシアルは呆れた顔で見た。

「……まったく君はやることが無茶苦茶なんだよ。僕とバルガーの術式を逆算するなんて、ちょっとした魔術師にしかできないことだよ」

バルガーは十二人の元老に名を連ねるマイスターの一人だ。エスパシオ機関という魔術師の専門機関において最高責任者でもある。さらにアルティフィシアルはバルガーの師である。彼らの術式をすすめるように転移魔術とはいえ術式を読みとるなど、ちょっとした、では済まない技術が必要だ。

アウトロツソは、ますます目の前のラウヘルという男が得体知れなく見えた。

「でもありがたいですよ。アルティ。あなたが、彼女に監視用の鬼火をつけてくださったので、私も彼女の居場所を逐一知ることが出来る」

ふわりと紫煙が舞う。

それに誰も言葉を続けることができなかった。

「魔術というものは便利ですね。少し術式に手を加えるだけで簡単に守ることも攻撃することもできる」

声高でもない、静かな声だというのに悪魔の声はよく誰の耳にも届いた。

この男は悪魔だ。

そうでなければ、闇の中から生まれ出た人の形をした何か。

穏やかな言葉の中の何一つ脅迫めいた言葉はないというのに、真

綿で首を絞めるようにラウヘルという言葉は聞く者の不安を煽る。

こんな男が東国に居たとは。

この男の最大の武器は、人心の掌握でも天才的な魔術でもない。この甘言ともいえる毒のような言葉だ。

言葉一つで国や人を動かしてしまうこの男は、神にもなれば悪魔にもなる。

「――何が、望みだ」

重い、鉛よりも重い沈黙の後、辛うじて口を開いたのは、ヘイキリングだった。

腕が震えている。

礼装のそで口から見える握り締めたこぶしから、赤いものが滴り落ちている。

彼の声が身を裂くような葛藤の末に絞り出したのだと知れた。

それを見てとったのか、ラウヘルはようやくパイプを口から放した。

そして次にこの悪魔が言った言葉にこの場に居た誰もが啞然とした。

「彼女を、ヨウコ・キミジマを私の妻にいただきたい」

アウトロツソでさえ、二の句が継げず、口を呆けた顔で開けた。今まで散々殺そうとした相手を、今度は妻に。

「―――いったい、何を考えている」

そうラウヘルを初めて表情らしい表情を浮かべて睨んだのはメフ
イステニスだ。

そんな彼にラウヘルは目を細めただけだった。

「そういえば、この世界ではあなたが親代わりでしたね」

「……ここから生きて出られると思うな」

地を這うような低い声でメフイステニスは呻いたが、ラウヘルは
片眉を上げただけだ。

「悪い条件ではないはずですよ。あなた方がただ頷いてくださった
ら、彼女の身の安全は私が保証しましょう」

そう宣言して、次にアウトロッソと緋色の目が合った。

「イーエロ殿下もあなたの元へお返ししますよ」

思わず眉根を寄せたアウトロッソを笑い、今度は啞然とするヘイ
キリング王に視線を合わせた。

「あなたの大事な方の無事も安全も、すべて私が保証します」

大事な方。

その言葉に、ヘイキリングの体がわずかに震える。

「彼女を何物からも守り、大切にすると誓いましょう」

禁断の契約を持ちかける悪魔の言葉に、ヘイキリングは齒をぎりと鳴らした。

「私の条件を飲んで下されば、私は今まで以上にあなたの元で働きましょう。――ヘイキリング陛下」

陛下と呼ばれ、ヘイキリングの瞳に抗いがたい威圧が立ち戻る。そう。

このラウヘルという男を簡単に殺すわけにはいかない。

彼は、表向きにはこの戦の停戦を成した功労者の一人だ。

無為に汚名を着せて殺せば、内外の臣下に不信感を抱かせるだけで混乱は増すばかりだ。

だから、この関係者以外には知らせずにラウヘルを大病と偽って幽閉する計画だった。

この場で、誰ひとりとしてラウヘルに否と言えるものはいない。

ヘイキリングは応えの代わりに低く呻いた。

「――そこまで譲歩して、手に入れたと思ったのは何故だ」

ラウヘルはヨウコを知らない。

まだ見ぬ女に対して、ラウヘルが支払ったのは彼にしては非常に分かり易く破格の譲歩だ。

「それは、彼女に最初に教えてさしあげますよ」

まるでそれがマナーだと言わんばかりに、悪魔は笑ってパイプを吸う。

「お会いできるのが楽しみです」

ヘイキリングが放っている、それだけで相手の命を奪うような殺気を酒の肴にするような気安さで、東国の悪魔はゆったりと紫煙をくゆらせた。

アウトロツソが愛したネロはもういない。

居るのは同じ顔をした、不幸な女だ。

それでも、アウトロツソは遠い地でこの喜劇のような出来事を知らない彼女を思っ、同情した。

いったいあの女は神にどんな恨みを買ったのだろうか。

パラソルとプライベートビーチ

みなさまいかがお過ごしでしょうか。

わたくし、君島葉子は、ただいまバカンス中です。

真っ黄色の花がさしてある南国風味な真っ赤なジュースをストロ―でずず―とすすって、私は目の前のパラソルから広がる大パノラマな砂浜を眺めていた。

海は青いなあ。異世界だからって黄色とか緑だったらそりやもう驚いたさ。

青い方がいいようん。普通がいい。

「ヨウコさま、お暑くないですか？」

芭蕉のはっぱみたいな団扇で着物と巻頭衣合わせたみたいな服きたお姉さん達にあおがれてる状況は普通じゃないと思いますがね。

私もお姉さんたちの服に良く似た着物きせられてるんだけど、さらに巻きスカートみたいな装いです。足首まである服だけど不思議と暑くない。まあ、直射日光の方が暑いっていうのは砂漠で嫌っていうほど学びました。

この浜辺は砂漠のからつとした暑さというより、日本の蒸し暑さに似てるんで、少し伸びた髪を無理矢理まとめてかんざし差されます。頭皮は痛いが首元は涼しい。

お姉さんに大丈夫ですと答えながら、私はぼんやりとジュースをすすった。

私がこの、南国についたのも、ちょうどこんな風なビーチだった。

あの変態女装魔術師に滅茶苦茶な論法で魔法陣に放り込まれて、声の限り叫んだなと思ったら、どっさりとビーチに落されていた。

一瞬、砂漠にまた逆戻りかと絶望しかけたけど、砂漠では絶対に聞こえない波音を聞いて啞然とした。それから数分も経たないうちに私の荷物とサリーがやっぱり落されてきて、変態魔術師にも一分の良心があったと何だか感心してしまった。

私同様、突然連れてこられたサリーも相当興奮してたけど、どうどうと首を撫でているうちに気分が収まったのか「くえええ！」とひと鳴きして苛立ちを解消してくれた。ありがとう。私も海に向かって無節操に今まで出会った人たちの悪口をぶちまけたい気分だった。

そんな私に、一人の青年が声をかけてきた。

着流しみたいな着物姿の何だか上品な顔立ちで、褐色の肌にプラチナブロンドが印象的だ。「もし」なんて時代劇みたいに柔らかく声をかけられたから、思わず「はい」と振り返ってしまった。

「あなたはもしか、女神さまですか？」

違います。

どこをどう見たらそんな風に見えるんだ。

見えないのかこのきつたないチャリムと汚れたカバン！ それからこんなチャーミングな騎竜馴らしてる女神さまってどんな女神だよ！

そうひとしきり心の中で（あくまでも独り言です）唸って、気付いた。

このお坊ちゃん、なんか日本語らしい言葉喋ったよね。

「あの、ここは東国ですか？」

なんだーあの変態魔術師、なんだかんだ言いながら連れてきてくれたのか。そう思ったら、

「いいえ。ここは南国ですが」

やっぱりあいつは変態だ。

北から南、正反対に連れてきやがった！

思わずうなだれてぐちぐちと言っていたのが口から漏れ出たらしく、青年は口元を引き攣らせた。あら、ごめんあそばせ。でもすぐ心配そうな顔で尋ねてきた。

「東国に、行くはずだったのですか？」

「……ええ、まあ」

あの変態魔術師が邪魔しなけりやな！

あーあ、どうやって行こうかなあ。

「よろしければ、私の家にいらっしゃいませんか？ 見たところ、この国に慣れていないご様子ですし」

確かに。

青年は蒸し暑さに対応したような着流しだけど、私は砂漠と荒野を歩いてきたフル装備だ。マントは暑いし、湿度のあんまりない荒野から来たサリーは毛皮が暑そうだ。

でも、今までの経験上、いくら人のいいこと言われてものこのこついていく気にはならない。

「ま、ギルド探して連絡つけます」

最悪、あの無理矢理追い出そうとしていたミカエリ・ジョーンズに幾らか出資してもらう。そんな算段を立てていた私に、青年は申し訳なさそうに眉をハの字にした。

「ギルドはこの国にはありませんよ」

え。

どこにでもあるんじゃないのか。

「この南国は、独立した政治形態を持っているので、北国の介入するギルドを招いていないのです」

ええええええええ！

頼みの綱が！

私のわずかな貯えが！

愕然とした私に、青年は諭すような口調で言った。

「実は、私はこの浜辺で今は使われていない魔法陣の反応を見つけて見に来たのです」

そしたら私が居たと。

「魔法は、この国では珍しいもので、魔法陣自体も少ないうえに起動することも少ないのですが」

どういう仕組みだから知らないが、この青年は親切だか視察だか、この起動しないはずの魔法陣を見に来た。そしたら騎竜連れた女が「あっつー」なんて言ってるんだから、まあ驚くわ。お手数おかけしました。

お陰さまで途方にくれました。
どうするんだよ。まじで。

魔術は使えないどころか普通の方法じゃ効かないわ、ギルドもないからお金もないわ。南国の物価がどんなものか知らないが、手持ちはせいぜい一宿一飯できるかどうかぐらいだ。

まじでどうしようか。

私はほんとに混乱していたらしく、その場でお気に入り旅行鞆を開いていた。

中に入っているのは他愛もないものだ。
着替えに手帳にわずかな薬草。それと、

「あ、割れてなかった」

服の中に入っていたからか、お土産のグラスや万年筆は割れたり、ひしゃげたりしていない。あー、これからホントどうしよう。こんな御土産持ってたらかれも何だか売っ払いそうな感じだ。

私はじっとそれらの品物を見つめてしばらく考えて、

「あの」

まだ私の様子を見ていた青年に呼びかけた。

東国の言葉を解する南国の人は貴重だと思ったので、この際道徳は無視する。

「他の国に、荷物送り届けるってできますか？」

青年は柔らかに微笑んで頷いた。

「はい。輸出網が整備されていますから、他国へ荷物を届けることはできますよ」

「じゃあ、その方法教えてください！」

その青年のぽかんとした顔は、近年まれに見る間抜けな顔だった。美形はどんな顔しても面白いもんだ。

それから青年はクルピエと名乗った。

騎竜は珍しいらしいので、砂浜の木陰でサリーにはバカンスしてもらったことにした。

私は残った手持ちの金とお土産だけ持ってクルピエ青年に街に案内されて、驚いた。

おいおい。どこのスペースファンタジーですか。

道行く車の形は昔の牛車みたいな風体なんだけど、道路走る姿はまるで元の世界の形と同じで、中には車輪のないやつもいる。しかもそいつは高層ビルの間をすると抜けて、飛び回っている。あ、ビルにも信号機とか標識ついてるし。あれはデジタルだ。そんな街を歩いているのは、どっかの襷絵から抜け出たみたいな和装に近い着物姿の人々。中には私みたいな西洋風のもいるけど稀だ。

クルピエに連れてこられた建物も、真っ赤な門が印象的な和風とも中華ともつかない様式だったが、ガラス戸は自動ドア！ 何か近寄って来たと思ったら受付してくれるロボット！ 人型も前は作ってたらしいけど、あんまり精巧に造り過ぎちゃて人道的なんたらで作るのやめちゃったんだって。小難しいことはよくわからないけど、順番になったらちゃんと呼びに来てくれたいかにもな箱によく似たロボット君は大変に優秀だった。

受付は人間のお姉さんで、なんか今にも「ナンクルナイサー」って言うってくれそうな美人でした。そうか、ここ沖縄風なんだわ。

「どちらまでお届けですか？」

すみません。住所とか全然わかんないんですけど。とアホな子丸出しで言ったのに、お姉さんはニコニコと応対してくれて、どこそこの某さんて名前さえ分かればお届けできますよって言うてくれた。ありがたい。

それで、万年筆とお茶とグラスは西国のメフィステニス伯爵家に、イヤリングはラーゴスタのカルチェに、って頼んだところで、東国に居るはずのクリスさんに手紙出すことを思いついた。行く予定も手段も出来てないけど宣言しとけばいつか行ってくて分かるでしょ。

普通南国ではメールみたいな伝達で済むらしいけど、東国にはギルドぐらいしかそういうの扱ってませんからって、紙とペンまで貸してくれた。至れり尽くせりだ。

品物はなんだか丸いカプセルにどぼんとつけて、そのまま耐衝撃防塵浸水なしの絶対防御で運んでくださるそう。目の前でベルトコンベアに球体に漬けるところを見せてもらった。取り出すときはボタン一つで中の液体は無くなってカプセルも消えてお届けしましたってお知らせだけ行っていくんだからエコだ。

全部頼んで支払ったら（北国のお金だったけどレート換算で計算してくれた）やっぱりお金はご飯なしの安い宿に泊まれるかどうかというところになった。

あーあ。どうするかなあ。

再び途方にくれて、郵便局（名前知らないから）を出たところで、今まで付き合ってくれたクルピエ青年が何だか笑いをこらえていた。馬鹿っていいいたのかこの野郎。仕方ないでしょうが。思いついちやっただから。私に声かけたアンタが悪いよ青年。

「あのー、ここまでしてもらってあれなんですけど、もう一ついいですか？」

「何でしょう？」

「東国までの地図ください」

青年はとうとうお腹を抱えて笑い出してしまった。

そんなに面白いこと言った覚えはない。

お腹抱えてひーひー言う青年の背中を旅行に適した頑丈なブーツで蹴りたくなったが、ぐっところえて、「じゃ、もういいです。ありがとうございますー」って元来た道に戻ろうとしたら、

「待って下さい」

予想外に大きな手で掴まれてしまった。

マントが。

放せよ坊ちゃん。いくら頑丈なマントでも伸びるでしょうが。

「……放してください。叫びますよ」

冷ややかに言うと、クルピエ青年は笑い堪えるように口元を和ませる。

「どんな風に？」

「きゃああああ痴漢！ 痴漢変態！ 助けてええええ！」

お望みどおり叫んでやったら、なんだ、どうしたっていう風に予想以上に人が集まった。西国でやってもこうはいかないよ。あそこ
の国は基本自分で何とかしろだから。南国の人は親切だなあ。

そんな親切な国の親切な青年を痴漢呼ばわりしている私はまあ悪党です。

周りに集まってきた人の早口な言葉はほとんど聞きとれず、私は自分のマントにかかっていた青年の手を指さしてマントを引っ張るジェスチャーをした。すると見ていたおじさんがわかってくれたらしくて青年に猛然と早口言葉を並べてくれる。ボディランゲージすげえ。

でも数分もしないうちに青年は私には分からない南国の言葉でおじさんと回りに集まった人たちをなだめすかしてしまい、最後には何だか万民に囃したてられるような歓声をあげられた。どうした。何が。

わけもわからず逃げればいいのにぼんやりしていた私の手をクルピエはとり、そして、

「う、わああああああ！」

私の中指に口づけた。

思わず叫んで青年のお綺麗な顔をぴしゃりとやったのに、彼はなぜか嬉しそうだ。

ドエムか。最近流行りなのかドエムは！

結局、私を混乱の坩堝においてけぼりにして、おじさんと南国のみなさんは温かい拍手と視線を送って、にこやかに去って行ってしまった。

「……あの、青年」

「はい」

にこにここと人の良さそうな顔でクルピエ青年。

その顔を張り倒したくなったのは、私悪くない。

「何が、どうなったんですか？」

そう訊ねた私の両手をおもむろに握り、クルピエ青年は往來のど真ん中でとんでもないことを宣言した。

「あなたは私の運命の人です」

「はい？」

「ひと目見たそのときからあなたは私の心を虜にしました」

「あの」

虜にされたら口なんか引き攣らないだろう。

「あなた以外に考えられません。運命の美しい人、私の可愛いソレイ。どうか私の生涯の妻となってください」

出会ったその日に妻とか。

この世界の人はやはりどこかおかしいらしい。
周りをよく見たまえ。可愛い女の子はごまんというじゃないか。
君たちの審美眼は私にはわからない。

そんなこんなで、異常に言葉巧みなクルピエ青年により、私はサリ―共々彼のおうちにしばらくご厄介になる羽目になりました。
いやあ、騙された。

家とかいうから、どこかのボンボンかと思うじゃない。

「ヨウコさま」

東国の出来る綺麗なお姉さんたちに囲まれて、プライベートビーチだとかいう砂浜でジュースも飲み終わったなーと思ってたら、こちらに何だかきらきらしいのがやってきていた。

「ヨウコさん」

褐色の肌によく映えるプラチナブロンドを綺麗に撫でつけて木を組んだような涼やかな冠をかぶった青年だ。その衣装は着流しに見えるけど、着物を重ねたお高い物。

私はぼんやりとその青年がパラソルの下にやってくるのを見て、さっと身を引いた。

「ひどいな。僕はこんなにあなたを愛したいのに」

あんたの前でぼんやりしてたらボディタッチやひどいときにはキスが何度も降ってくる。つましやかな沖縄美人の格好のくせにどうして文化は西洋なんだよ！

苦笑したのはクルピエ青年だ。出会ったときはこのきらきらを数十分の一に抑えていたんだということがよくわかるきらきらっぷり。

「公務、もう終わったの」

「はい。第二とはいえ、公子に執務はつきものですけれど、ヨウコさんとしてお話しする時間が減るのは考えものですね」

このクルピエ青年、南国の王子様だそうです。

そんでもって連れていかれたのは、王様が住むっていう竜宮城かっというぐらいだっ広いお屋敷というかお城でした。

サリーの隣でお城の門見上げた私はとんでもなく間抜けだったに

違いない。

人生ってよくわからない。

アンテナとシート

自分が不運体質だってことは自覚してたつもりだ。身を持って。でも、こんなに流されやすい性格だったわけ。

「緊張しないでいいですよ。個人的な謁見ですから」

謁見は一般庶民の個人的じゃねえよお坊ちゃん。

隣でのたまう南の国の王子様。彼はただいま礼装で、普段の裕よりもっと上等な裾の長い着物を重ねて腰の下で帯を結んだ伝統衣装だ。長い垂れのついた冠でまとめたプラチナブロンドと、若々しい褐色の肌がよりよく映えるように計算されてるとしか考えられない暗めの色のそれは、彼のきらきらを三割増にしていた。

その眩しいきらきらの隣に居る私もなぜか飾りつけられている。白と淡い水色の袴と腰巻着物を着せられて、短い髪はどういう技術か小さなおだんごにしたてあげられて清楚で可憐なかんざしをつけられた。腕にはふんわりしたひれをひきずって、私はどこぞのお姫様かという扱いだ。……やっぱり白い何かに崇られているらしい。どこでご供養すればよろしいでしょうか。

そんな私たちの前にあるのはこれまた非常識なほどでかい門のような扉で、目の覚めるような朱色だ。鉈が打ちこんである扉の前に、私はなぜか立たされている。

そして、

「第二王子、クルピエ・マティン・グレイブルニス様！」

扉の脇に居た冠かぶったごつい兄ちゃん達が、クルピエの名前を宣言すると、ごごと低い音を立てて扉が開いた。両脇を見回した

ら兄ちゃんたちはぴくりとも動いていない。自動らしい。

でも感心してる間もなく、クルピエに手を取られて赤絨毯ひかれた石畳の巨大な部屋に放り込まれる羽目となった。

「よく来たな」

戸惑う私を無視して高らかに宣言したのは、二段ぐらいは高い場所にある玉座に腰かけた、迫力美人でした。重そうな冠をつけているものの艶やかな黒髪をまっすぐに垂らし、私と似ているけれど肩とボリユームのある胸を惜しげもなくさらした姿はまさに女王さまだ。垂れているけれど切れ長の瞳の脇には泣きぼくろ。妖艶の一言に尽きる。

そんな大美女に向かって、クルピエは挨拶もそこそこに呆れた顔をする。

「母上」

は、ははうえ！

思わずクルピエと二段上に居る美女を不躰に身比べた。……ああ、うん。なんか似てるわ。でもこんな大きなお子さんいるようには見えないです。

そんな私を横目で見ながら、クルピエは続ける。

「私はすでに王家の人間ではありません。いつまでグレイプルニス姓を呼ばせるおつもりですか」

いつもニコニコしているクルピエ青年とは思えないちよつとふてくされた顔だ。珍しい。

でも、美女は少し肩を竦めただけだった。

「どのような身分に落ちようと、お前はわらわの息子で南国の王子じゃ」

気にするでない、と威厳たっぷりに言い放って、今度はその魅惑の視線が私に向けられる。こ、こころの準備が。

「そちの話には聞いておる。わらわは、南国王、サンフルール・マティン・グレイプルニスじゃ」

暗に自己紹介を求められているようなので、私も日本式ではあるが一礼して返すことにした。

「ヨウコ・キミジマです。迷い人です」

私の迷い人というくだりに、なんだかサンフルール女王様が少しだけ片眉を上げた気がした。

「北国から落とされてきたそうだな。難儀したのう」

「えっと……まあ……」

会社の面接ならまっさきに落とされそうな答えで私は目を逸らしてしまふ。言っているのか。なんか北国で一番偉そうな変態ドエスに魔術で転送されましたとか。

「我が南国では、迷い人は珍しいゆえ誰でも歓迎しておってな。他の国では知らぬが我が国では国賓じゃ。そなたもゆるりとするがよい」

大輪の薔薇みたいな笑顔で言われた。顔紅いよね。私、今ぜった

い顔紅いよ！

「何か足りぬことがあればその愚息に何でも申しつけるがよい。こと、もう一人の我が子もそなたに会いたがっておてな。あとで会うてやってくれ」

そんな感じで女王さまに、お城の滞在をあっさりと許されてしまいました。

それからというもの、

「ヨウコお姉さま。異界の話をお聞かせ下さいな」

母親譲りの妖艶さを兼ね備えたクルピエの妹だというポリテイクがお茶の時間に私に与えられた部屋にやってくるようになった。

南国の民族衣装の着物に身を包み、長い黒髪を上品に結いあげた姿は可憐の一言に尽きる。十六歳だというには少し幼い仕草も彼女がどこことなく醸し出す艶にしどけなく見える。そーいやクルピエ青年、君は幾つだ。

ポリテイク嬢のお話によると、ここ南国では迷い人は異界から来た客人という慣習があつて、元々西国と違って落ちてくる人数も少ないからか、迷い人を国賓待遇で歓待するのだという。異世界の知識を運んでくる人材は老いも若きも貴重だという認識らしい。だから、南国の人々はほとんどの人が何か国か語を話せるようになるのが普通で、このポリテイク嬢にしても、覚えたばかりだといふけど流暢な西国語で私と会話を楽しんでいる。

あれだ。鎖国してるけど国全体が出島みたいな日本というか。

どれにせよ、彼らの知識欲はかなり高く、私の派遣社員生活の一端を洗いざらい話してしまった。俊藍にも話したことないのに。

「そのように過酷な環境に耐えてこられたからこそ、このようにヨウコお姉さまは人格者であられるのですね」

いえ。ただ、その就職活動という戦に負けた敗残兵が最後の生き残りを賭けていたというか。まあ、話せば話すほどぎりぎりの生活だったんだと実感して落ち込んだ。

けっして美しい王女さまに感心されるような生活じゃないです。うん。

あの頃は、こんな奇麗な着物きて、王子様に拾ってもらって、女王様と酒盛りして（女王様は大変な酒豪だった）王女さまと午後のお茶してるなんて想像もつかなかった。

つい何日前、変態魔術師と対面してたことも想像なんかつきませんでした。

だから、大変親切な人が多い南国王のただっ広い城内で、まことしやかに噂が流れてるなんて思いもしませんよ。

この世界は驚きの連続だ。

「――あの、なんか、私と君が結婚するとかいう噂になってるみたいなんです」

仕事が忙しいとかで一緒にお城に来たはずのクルピエ青年と謁見からようやく会えたのは、何だかよくわからない噂が充満してアンテナの低い私にまで届くようになってからだった。私のお世話をしてくれてる侍女さんから聞いたのだ。ご婚約はいつでしょうね、と。

こんな夜中に自分の部屋に尋ねてきた非常識な女にも、クルピエ青年はにこやかに執務机の側にある応接セットの席を勧めてくれた。

机の上の束は冗談でなく山と積まれていて、今の今まで仕事でだつたらしい。すんません。

「いいえ。ちょうど休憩しようと思っていたところですから」

そう言ってお茶まで入れてくれようとする。さすがにそれはやると押しのけて、私が茶器を並べると、向いに座ったクルピエ青年は穏やかに微笑んで受け取ってくれた。

「……クルピエって幾つだっけ？」

正真正銘の王子様にこの口のきき方ってアウトだと思うけど、もう直せないからそのままだ。当の青年も気にした様子はない。

「十八です」

「若っ！」

てつきり二十歳は超えてると思ってたよ。この落ち着きっぷり。驚く私に苦笑して、クルピエ青年はお茶に口をつける。

「ヨウコさんに本当の年より上だと思われていたなら、嬉しいですよ」

「どうして？」

尋ねる私に青年は意味心微笑む。

「あなたと釣り合うことができる」

け、

「――アンタがそういう態度だから、みんな誤解するのよ。こんなおばさん嫁にしようなんて」

警察に捕まる。私が！

私は思わず脱力して項垂れる。

「誤解？」

思っていたよりも、声が近い。

ふと熱を感じて顔を上げたのが良くなかった。

クルピエの褐色の顔がすぐ目の前だ。

彼は驚いた私にゆっくりと微笑むと、まるで舐めるような仕草で私の頬を撫でる。

「ヨウコさんも、誤解してくれたんですか？」

私の心を探るように、指が頬を彷徨う。

「……六歳も年上のおばさんをからかうんじゃない」

「ヨウコさんが二十四歳だなんて、誰も一目じゃわかりませんよ」

この世界の人間、全員整形してやりたい。

手初めは、目の前の何だか不埒な視線のクルピエだ。

何だか、手が、

「――手、やめて」

見た目よりも長い指が、私の着物の襟のふちをなぞっている。
その仕草が不愉快で、私はクルピエを睨む。
すると、彼の方は嬉しそうに笑った。

「上目づかいに言われても、もっとって言われているようにしか見え
ないんですよ」

悲鳴を上げる暇もなかった。

あっという間に襟を割られて、谷間もない胸元が露わになる。

「意外と白いなあ。ヨウコさん」

鎖骨から胸の間の骨を数えるように撫でられ、下着の上を指が這
う。

ぞわりと鳥肌がたつ。

叫べ。私。

そう思うのに、声が出ない。

にこやかだったはずの青年が、あっけなく私の境界線を破ってき
た。

その瞳が面白がるように細められて、私の喉は竦んでいる。

遊んでいるのだ。

そのことがどうしようもなく怖くなった。

「真っ赤になって、可愛い」

耳元でささやかれたかと思うと、私の体は人形みたいに動かなく
て、見た目よりも力の強い腕に抱きあげられる。

嫌だ。

暴れたくとも暴れられない。

それがとてつもなく嫌だった。

軽くはない私の体が抱えられて向かったのは、執務室の隣の薄暗い部屋だった。

今日は満月なのか、青白く広いベッドを照らしている。

そろりと冷たいシーツの上に降ろされて、私は初めて声を上げた。

「嫌だ！ 放して！」

そんな私の腕を狂暴な手が掴んだかと思うと、片手で頭の上に簡単に拘束してしまう。それで、私よりも大きな体にのしかかられていることに気がついた。

「――ヨウコさん、私と結婚してください」

プラチナブロンドの髪が冠からゆるりと落ちて、私の顔に降りてくる。

「いや」

「どうしてですか？」

唇をかすめるように近付けられて、まるで火のように熱い吐息がかかった。

どうして？ それは私の方が訊きたいことだ。

私みたいな、魅力のない女。どうして放っておいてくれないんだろう。

「私はあなたが好きですよ」

「嘘だ」

嘘だ。私はうまく働かない頭で繰り返す。
嘘だ。

「アンタは、私が好きなんかじゃない」

その瞳は、ほら。
泣きそうな私を面白がっている。

「こんなことするアンタなんか、私は大嫌い」

今度こそ、目の前の褐色の美しい顔が微笑む。
面白がるように。

「――あなたは、本当に守られてここまで来てしまったんですね」

「……なに、を」

守るっていうんだ。

「男からあなたを。男の欲望っていうものから、とてもよく守られてきたんですね」

考えはしなかったんですか、と薄い唇が溜息のように言う。

「本当によくここまで五体満足で、体をなぶられもせずに来れたものだと言っているんですよ。その可能性を一つも考えなかったんですか？」

女一人で異世界に放り出されるってことは、そういう危険も過分にあったということだ。今まさに、この状態でも、

「――ガリガリで面白くもない女、誰が面白いと思うのよ!」

男だと思われていたし、そのようにも扱われていた。実際には人間扱いだったかさえ怪しいのに。

「それは」

私の声を抑えつけるように、長い指がゆっくりと喉から鎖骨を伝う。

「あなたのこの体を知らないからでしょう」

低く笑った声と一緒に、襟が広く開かれる。

声にならなかった。

悲鳴にもならない。

キャミソールのような下着の肩ひもに指をひっかけられ、弄ぶようになぞられた。

本当に、私は何も知らなかったのかもしれない。

私が貞操を無為に奪われもしなかった幸運を。

掴まれている腕が痛い。

心臓が震えている。

今まで理不尽なことなんてたくさんあった。

人並み以上に経験してきたと思っていたけれど、それ以上の理不尽があるなんて。

この理不尽は、きっと男には分からない。

「ああああああっ！」

動かない体も、恐れる心も。全部いらない。

怒りとも悲しみともつかない心に支配される。

裏切りも、甘い言葉も。

嫌いだ。

全部嫌い。

いつだって、私を見捨てていくのだから。

傍観の青年

怒りとも、悲鳴ともつかない叫び声が上がったと思えば、彼女の体にぼんやりと青い明かりが吸い込まれた。

すると、今まで荒々しいまでに怒り狂っていた彼女の細い体がベツドの上に落ちた。そして呼吸が整ってきたかと思うと、安らかな寢息を立て始める。

拘束していた手を放すと、くつきりとした跡がついていた。

長い旅をしてきたというのに思いのほか白い腕に赤く残ったそれは映えて、痛々しい姿だというのに美しくも見えた。

白いシャツに散らばった黒髪は月明かりの影に落ち、反対に着物の広く開いた襟から覗く白い乳白色の肌は月に溶けるようだ。

泣いていたことにも気付かないほど、彼女は激昂していた。その涙の軌跡さえ、きっと舌で辿れば甘いだろう。

クルピエの喉が思わず生唾を音を立てて吞む。

初めて出会ったところから、年上の女性とは思えない容姿だった。まるで少年のような格好の彼女は普段であれば、ほとんど女性にも見えない。

だが、隣に立つと分かる細い肩、女性としては低い方だろうが柔らかな声。クルピエの手の平にすっぽりと納まる小さな手。物怖じしない物言いが理屈っぽいというのに、どこか抜けていてそれが愛らしい。

そんな女性が、クルピエの真下で女の体を晒して月明かりに浮かんでいる。

それだけで、男の好奇心と支配欲を我慢ならないほどくすぐる。彼女は分かっているのだろうか。

自分が、どれだけ男たちの心を掻き乱しているのか。

「わかっていないのでしょうね：」

無理矢理、快楽を引きずり出して分からせてやりたくなる。

そんな男の体の下の彼女は起きる気配もなく、まるで子供のような顔で寝入っている。

その清らかな寝顔を汚すことが出来るなら。

「ヨウコさん」

再びクルピエはまろみを帯びた頬に手を伸ばした。

だが、

「くっ！」

バチ！

手はあっさりと弾かれて、ついだというようにクルピエは体ごとベッドから吹き飛ばされる。破裂音と一緒に、クルピエはベッドとは反対側の壁にあるチェストまで飛ばされて、息を詰めた。

背中の骨を折るようなことにはならなかったものの、しばらく咳こんでようやく顔を上げると、ヨウコの傍らにぼんやりとした青い光が浮いている。

「——やはり、あなたでしたか」

クルピエはどうか膝立ちで床から体を持ち上げ、青く浮かぶ光に笑いかけながら目を細めた。すると、ぼんやりとただ浮いているだけだった光が炎のようにさざめいて、

『ボンソワ―。クルピエ殿下』

炎の中から南国語の声が室内に響いた。落ち着いた男の声だ。

『お怪我はありませんか？』

「……弾き飛ばしておいて、それを聞くのですか？」

苦笑するクルピエに、炎はゆっくりと回る。

『あなたがまさかこの娘に手を出そうとするとは思わなかったのですね』

「――いけませんか」

『ええ。いけません。約束を違えてほしくありません』

挑発するようなクルピエの言葉にも、炎はさほど気にした様子もなく続けた。

『あなたにお願いしたのは彼女の保護だけですよ。何もそちらで永久に預かっていただかなくていいのですから』

永久に。

そう言われて、クルピエは自分の心を見透かされたような心地がして、繕っていた微笑みを消した。

「――では、そろそろ？」

『はい。彼女を東国へ返して下さい』

淡々と告げるその声が、これほど憎く聞こえたことはない。

「……どうしても、ですか？」

『そういうお約束です』

返せと脅されているようにも、クルピエの胸三寸ですべてが決まるようにも聞こえる答えだ。

「——あなたと話していると、自分がとんでもなく馬鹿になったような気がします」

『御謙遜を。不世出の智将と呼ばれるあなたの知性に勝てる者がこの世界に居るとでも？』

少なくとも、口先だけで炎の向こうにいる男を丸めこむことはできないだろう。

クルピエは大きく息を吐いて、改めて炎を見つめる。

「近いうちに、あなたの元へと向かわせます。——嫌われたことでしょうしね」

『しばらくしてから手紙でも寄越すと良いですよ』

そう言う炎はふわりとベッドの上の女の脇に侍ったかと思うと、

『彼女はとてもお人好しですから、時間さえ経てば許してくれるでしょう』

まるで流れた涙の跡を拭うように頬に近寄って消えた。

炎の消えた後を眺めて、クルピエは再び長い溜息を吐いて、床に座り込んだ。

結局、クルピエはあの涙の跡を拭ってやることすらできなかった。数日ではあったが、ヨウコとの日々は楽しいものだった。

クルピエは、南国王の第二子として生まれたが、王となることに興味を持たず、成人した十六の年に二歳年下の妹に継承権を譲ってしまった。

王とは、国という檻の中で生きているようなものだ。母を見ていればそれがよく分かっていたので、元々政治に興味を持っていた妹に王位を継がせようと思ったのだ。

もちろん生まれ育った南国のことは愛しているが、クルピエにとって国とは手段であって、守るべき対象ではない。

たまたま幾つかの戦場で幾つかの指揮をとったら、それがたまたま天才的なすべだったようで、クルピエは瞬く間に最年少の軍師として知られる存在となってしまった。

それがまた嫌で、公的にも私的にも、王の子ではなく身分の高い子供として公子と名乗っているのだが、女王である母も継承が決まった妹もそれを見とめてはくれない。

そんな平和な中で、世界は大きく動いた。

一人の男が動き出したのだ。

彼の、いくつあるのかわからない手段の一つとして、クルピエは彼に協力を頼まれ、引き受けた。

どのみち、こんなクルピエを彼女は許しはしないだろう。

あの男の元へ送りだそうとしているならなおさら。

翌日、やはりヨウコは出ていくと宣言した。

とどめる権利もないので、クルピエはいくらかの旅の用意をして渡そうとしたが、彼女は結局受け取らなかった。

それでも、彼女はきつと東国へと向かうだろうから、クルピエの役目はこれで終わりだ。

「どうして引きとめてくださらなかったのですか！」

熱心にヨウコを引きとめていたポリテイクがクルピエにつかみかからんばかりに睨みつけてくる。謁見の間にそれぞれ呼ばれて、久々に母子が揃ったというのに、ポリテイクは兄の襟元をつかまえてゆさぶってくる。

「彼女の意味だよ」

「おなごの心をそなたがわかろうはずもあるまい」

玉座で目を細めて笑った母を睨んで、クルピエは溜息をつく。

「どのみち彼女を引き渡さないことには、我が国まであの出来レースに参加させられるところだったのですよ」

「東と西の若造のことか。もしも戦になろうとも、我が国が勝てぬ相手ではないが」

女王は笑みを消した紅唇で、不作法に舌打ちする。

「東にはあやつがおったな。ヨウコが我が娘になるのであれば、あの男と一戦交えるのもやぶさかではないがな。どうじゃ？ クルピエ」

暗に戦の指揮をとれと言われ、クルピエは首を振った。

「ご冗談を。私は必要以上に彼と関わりたくありません。今の友好関係が続くのであれば、それに越したことはない」

「忌々しいがわらわもそなたと同じ意見じゃ。あやつ計画に口を挟めば、この大国たる南も無事では済まないからの」

名実ともに女王であるサンフルールに躊躇を口にさせる男だ。まだ年若いクルピエが太刀打ちできる相手ではない。

「ヨウコには悪いが、娘一人を安全に送り出してやるだけであやつが黙るというなら安いものじゃ」

安い高いの問題ではなかったが、ヨウコという女性にはそれだけの価値があるということだ。クルピエは政治のための手札となるならば、何でもためらいなく使う。

「兄上の意気地無し」

そうなじったポリテイクも分かってはいるのだろう。

東国と西国をたったひとりで掻き回したあの男と事を構える危険さが。

「――ラウヘル・小雪・トーレアリング卿とはこれからお友達でいたいからね」

それでも、悔しいと思うのは。

きつと、海で遊ぶ風のような彼女が好きだったからだ。

ジュースとトラック

あつぶねえ。

もうちよつとで淫行で捕まるところだった。

当事者同士はどうあれ世間様は許しちゃくれない。

どういう理由があろうと未成年はだめだぜったい！

嵐の夜の記憶が途切れた私が目覚めたのは、朝日の射しこむ時間だった。

恐る恐る体を起こしてみると、胸元がはだけていただけで他はまったく昨夜のままだった。妙な違和感もない。

けしからん行動に出たクルピエ青年は、どういうわけだかベッドとは反対側のチェストの前の床で座り込んで眠り込んでいた。

起こしてやる気にもならなかったので、ぼんやりと性根も行動もまだ若い男を見ながら、私はこの南国を出ることを決めた。

何のためだか知らないが、何日もこの国にとどめられていたのだ。意図的に。

ああもあからさまに歓迎されたりすれば私だって気付く。

というか、安穩を甘受するには私はこの世界に長く居過ぎた。

ああ、ほんとに私の人生どこに向かうんだろ。

仕方がないので部屋に転がっているクルピエを叩き起こして、私は今日ここを出ると宣言してやった。

「それほど、私の花嫁は嫌ですか」

胸倉つかんでゆさぶってやったのに、微笑みを絶やさないと大物になるよキミ。

それから、荷物をもらもろ返してもらった。

この王城に来るまではクルピエのお城に二日三日滞在してたんだけど、荷物らしい荷物はほとんどものの三十分で届けられた。

何でも、転送装置なるものがあるらしいのだが、今や懐かしいチャリムを渡されながら、私は詳しく理解はできなかった。まあ、便利なものって認識があればいいや。

サリーも無事に返してくれた。

ここの人たちは車で移動するから動物の乗り物が珍しかったらしく、どこでもサリーは大変に可愛がられたようだった。

背中の剛毛も今やなんだかふさふさになるほどに毛づやが良くなっている。美人になったんじゃないか。東国行ったらモテるぞサリー。

「――行ってしまうのですか」

朝ご飯もそこそこに準備を整えた私は、私が東国へ旅立つと聞いて慌ててやってきたポリテイクに付きまとわれていた。

今は一緒に御昼ご飯。お惣菜中心の食卓で、小皿に盛りつけられたおかずの脇にいるご飯の位置にはなんと麺がいる。南国の主食はこの麺なんだそうで、いろんな味と色があって面白い。

私は醤油にゴマ混ぜてかけるのがマイブーム。冷やし中華思い出すなあ。

「ごめんね。あんまりゆっくりもしてられなくて」

正直言つて、ここにあんまり長居すると、クルピエ青年の冗談が本当になりそうだからだ。嘘から出たまことって笑えない。

「私、もともと北国から旅してて、その途中でクルピエに助けても

らっただけだから」

衣食住を惜しげもなく提供してくれたのだ。その部分は充分に感謝している。

ポリテイク嬢はまだ不満そうに、冷たいジュースの入ったグラスを指で撫でていた。

「東国についたら手紙書くね」

あ、この国って手紙届くのかな。

そう聞いたら、今日初めてポリテイクは笑ってくれた。

「楽しみにしています」

美少女と文通が出来るなんて。東国に行く楽しみが出来た。

お昼ご飯のあとに謁見した女王さまに辞去の挨拶をしたら、華やかに笑ってくれて承諾してくれた。

「またいつでも来るがよい。酒の相手をしておくれ」

喜んで！

王都の関所まではクルピエがついてきた。いいって言うのに半ば強引にサリーと一緒にバスみたいな車に乗せてくれて、歩いたら半日はかかる道のりがものの二時間で着いてしまった。関所への手続きもしてくれて、何だかキャッシュカードみたいなものを渡された。

「何これ？」

「ヨウコさんの口座を作っておいたので、これで銀行でお金を引き出せます」

「いない」

手渡してきた手にそのままカードを乗せてやる。

「でも」

「クルピエ」

名前を口にしたら、なぜか青年は押し黙ってしまった。

「――昨日のことを悪いと思っているなら、ぜんぜん私は許していないから」

微笑みもない褐色の綺麗な顔は真摯な視線を私に落としてくる。

「アンタにはとお世話になったけど、もうこれ以上は何ももらわないし、お世話になった恩も返す気はないよ。悔やむならせいぜい悔やんで悩んで」

私は真摯な目を見返す。

じっくり見て気付いたけど、クルピエも黒い瞳だった。

黒真珠みたいな目には、汚れた格好の女しか映っていない。

それに何だか安心した。

やっぱり私には綺麗な格好は似合わない。

「……本当にお人好しですね。ヨウコさんは」

そう笑って、クルピエは今度は小さな腕輪を取り出した。

「これは受け取ってください。あなたの身分証明になるものです」

「身分？」

「はい。南国では迷い人にはこの証明書が発行されて、仕事の斡旋や一定の給付金も出るようになっていいます。——嫌でしょうが、手続きはこちらでさせてもらいました」

半透明な丸い腕輪には時々電気みたいなものが通っていて、クルピエの手に乗ったまま指でつついてみたけど、熱くはなかった。時々きらっと光る火花がちょっと奇麗だ。

「ありがとう」

受け取って腕にはめると、クルピエが少し目を丸くしていた。
なんだよ。素直にお礼言っちゃダメなのか。

私だって、恩知らずな自分勝手だってことは分かってるんだよ。
でも、一度出来た大きなわだかまりってなかなか取り除けるものじゃない。

「元気でね。クルピエ」

手を振った私の手をクルピエはまた掴んだ。

昨日の今日だから、びくりと震えるのは条件反射というやつだ。
思わず顔をしかめた私をすまなそうに見てから、クルピエは口を開いた。

「くれぐれも気をつけて。ヨウコさん。あなたは、あなたが思っている以上に、大変なことに巻き込まれているんですよ」

何それ。

言い返そうとしたけれど、クルピエの目があまりにも真剣だったから、黙って頷いた。

大変なこと。

それは、いったいどんなことなんだろう。

それって、異世界にいきなり落とされて殺されかけたり死にかけたり魔術がきかなくてすんなり元の世界に帰れない私が置かれたこの状況よりも大変なことなんでしょうか。

とっても心配そうなクルピエに見送られて、半信半疑のまま見えない不安を抱えて私はサリーとぼくぼくと次の街を目指した。

この南国ってところの人たちは魔術を使わない代わりにみんな車で移動だ。車といっても空飛ぶ車だから、街と街の合間にある整備された街道には人も車も少ない。

そんな人たちの物珍しげな視線を集めて次の街に辿りつき、銀行が分からなくて困っていたら、私は一人のおじさんに拾われることになった。

「ヨウコ！　それが終わったらお前も飯を食え！」

筋骨隆々、豪放磊落なんていう四文字熟語がよく似合う無精ひげのおじさんが、酒がなみなみと注がれた大きな杯を片手に笑う。

原色の派手な着物の片袖を脱いで惜しげもなく丸太みたいな腕を

晒した褐色肌のこのおじさんは、ヴィアンドといって、街で色々な人に声をかけられて困っていた私を連れ出してくれた人だ。

この南国の人たちは大変に世話好きらしく、私が銀行らしいもの（リシュと呼ばれている金融機関）を口ぐちに教えてくれたものの、結局土地勘のない私には難しい道筋で、サリーを連れて大注目を浴びながら困っていたら、ヴィアンドおじさんがのっそりと現れて連れて行ってくれたのだ。銀行のお姉さんに身分証の使い方を見せてもらえとアドバイスまでくれ（専用の機械に腕輪をかざすだけで色んな手続きができるすぐれものだった）、お礼を言って別れようと思ったら「どこへ行くんだ」と尋ねられた。

それで東国まで行くと素直に言っていると、おじさんは隊商組んで他の街を観光しながら東国まで行くから一緒に連れて行ってやると半ば強引に隊商に加えられることとなった。

そうして今は、

「こっちにも酒くれヨウコ！」

「こっちもだ！ 駄賃弾むぞ」

「はいはい」

おじさんと同じような筋骨隆々なおっさん達に囲まれて、貸し切った宿屋で給仕をしている。南国の着物は、東国のチャリムとよく似たもので、私はそんなに目立たないけど、普段は男に見える私もいかにも男臭い人たちと並べば、華奢な女の子に見えてしまうらしく、なにくれと家事などと任されることになってしまったのだ。なんとと言っても男ばかりの大所帯。宿に泊まっても宿屋の人たちはてんでこ舞いだ。あれこれお願いするだけでも大変なのだ。

「おおい、ヨウコ！」

すでに出来上がっている酔っ払いに呼ばれたかと思うと、カルチエなんか聞いたら赤面しそうなセクハラまがいの言葉や下ネタを言われるのは日常茶飯事。

おじさん達は頑丈そうなので、遠慮なく金属のお盆ではたかせてもらっている。それでも可愛がってくれているのだから、この隊商の人たちは大らかな人たちだ。

「ヨウコ。もう適当にして飯食っていいぞ」

にかっとなめて声をかけてきたいかにも陽気な青年は、アルブルといってヴィアンドの息子だ。よく似ている。着物の袖をめくりあげてさらした腕には硬い筋肉がついていて、子供ぐらいなら楽にぶら下られそうだ。

「うん。奥で食べてくる」

「ここで食べないのか!？」

「ここだと絡まれるから」

そう言うと、アルブルは困ったように笑う。犬だ。ここにワンコがいる。

ヴィアンドの隊商は、この空飛ぶ車時代に珍しく、車輪のついた大型トラックで移動している。十台ものトラックを率いて南国の街道を渡って各地の品物を仕入れながら東国へ向かうという。東国ではトラックは逆に珍しいので、今度は騎竜に乗り換えて国境を渡るらしい。だから、サリーの飼いの葉もすぐに用意してくれて、私はトラックに乗ってのんびりと旅をすることになった。

サリーは定期的に走らなければならないので、休憩時間にただ広い場所を見つけては自由に走らせている。

おじさん達はトラックの点検や次の目的地の検討なんかを話し合っているの（酒盛りで下ネタ吐くおじさんが真面目に仕事している姿は感動もの）基本的には私は暇だ。

時々、暇になったおじさんやアルブルがサリーを見事に操って見せてくれるけれど、私はほとんど野っぱらに寝転がってサリーがちようちよを追いかけているのを眺めている。

南国の風土は豊かだ。

ほとんどが森と畑に囲まれていて、海も近いから時折海も見える。山から落ちてくる水も豊富で、森といえば全部が原生林みたいだった東国とも明るくて迷路みたいな森が多い西国とも違う。杉みたいな背の高い木は少なくて、ほとんどが落葉樹だ。だから、どこへ行っても、どこか日本の田舎みたいな風景が広がっている。

そんな中を牛車によく似た空飛ぶ車が飛んでいくのだから、面白いもんだ。農作業はほとんどロボット。隣に人が居るけど作業らしい作業は機械任せだ。

立ち並んでる家も古民家みたいなものが多いけど、ふとその脇にあるのがどうやって使うんだか一目じゃわからないスペースファンタジーじみた機械なんだからうらしま太郎なんだか不思議の国のアリスなんだかに迷い込んだみたいな心地になる。

「どうだ。面白いか？」

ぬっと私のそばに陰が出来たかと思ったら、珍しくヴィアンドが私のそばに遊びに来ていた。どうしたんだろうと見上げたら、巨体はそのまま私の隣にどすんと腰かける。

「——この辺りは一見奇麗に見えるが、もともとエトロワに荒れ果てた土地でな。人の手で数百年かかって今のようになり上げたん

だ」

ヴィアンドおじさんの言葉に、私は寝転がっていた体を起こしてサリーが走りまわっている野原を見渡した。何の変哲もない野原だ。小川が流れて遠くには畑が見える。

「空は赤く染まり、大地は腐り、水は淀んだ臭気を放って、人の住む地ではないと言われた。それを我々の祖先がラルジュ・ラバジュした。その時に、我が国は魔術をすべて放棄した」

時々南国語が加わる東国語は少しわかりづらかったが、おじさんの説明は充分だった。

「ヨウコ、南国は美しいか？」

空は青く、大地には緑が待り、水は甘くておいしい。過酷だった環境を再び取り戻した人たちだから、こんなにも優しいのだろうか。

「綺麗ですね。とても」

ヴィアンドおじさんはとても満足そうに笑ってくれた。

おじさんは豪快な見た目に関わらず、とても知識が広くて、時々こういう話してくれる。

こんなおじさんに出会えるなら、私の運勢も捨てたもんじゃないって思えるよ。

南国の幾つかの街を経て、王城を出てわずか五日。国境の街に辿りつくと、そこでおじさん達と別れることにした。

南の国の家族たち

ヴィアンドは、小さくなっていく騎影を眺めながら小さく息をついた。

「父上」

同じように隣で見送っていた息子が珍しく心配げに眉をひそめているので、苦笑する。自分の息子ながら、常に天真爛漫さを失わない太陽のような性格だというのに、今回ばかりは翳りが気になるようだった。

「大丈夫だ。ヨウコなら」

そう言ってやるものの、息子アルブルの顔は晴れない。

仕方のないことだ。ヴィアンド自身でさえ、不安をぬぐい去ることが出来ないのだ。

「やはり、東国に行かせるべきではないのでは」

ヨウコには人一倍ちよっかいをかけていた副官が彼女が見れば驚くほど真面目くさった顔でヴィアンドに問うてくる。他の部下たちも見遣れば、彼と同じような顔でヴィアンドを見ていた。

歴戦の猛者であるヴィアンドの部下たちでさえも顔を歪める娘の行き先を思い、ヴィアンドは再びすでに国境高原に消えた騎影を探す。

良い心根の娘だった。

むさくるしい男所帯に放り込まれたというのに、ほとんど文句ら

しい文句も言わず、それどころか反撃すらして走り回っていた姿は、部下だけでなくヴィアンドも微笑ましい気分になったものだ。

気丈にも騎士でも手こずるような気難しい童を手懐けて連れているのだから、相当に胆力も備わっているのだろう。

だから、そんな娘が混沌の渦中へ赴くことを留めることができないことに、齒痒さを覚える。

「――いくら、クルピエの頼みとはいえ、やはり行かせるべきではなかったのではありませんか。父上」

普段の澆刺とした雰囲気はなりを潜め、アルブルは真剣な顔つきでヴィアンドを無言で非難する。

その視線に目を細め、ヴィアンドは息子を見下ろした。

「自分の弟の頼みも聞けぬというのか？」

そして、クルピエの決定は南国の決定でもあるのだ。クルピエの決定は、すなわちヴィアンドの妻である女王が頷いたということでもある。

「南国師軍である我らが口を挟めることでもないのだ」

ヴィアンドは師軍の長であるとともに、妻である南国女王フルー、そして子であるアルブル、クルピエ、ポリテイクを守る家長でもある。

家族を守るためには、時に非情な決断も迫られるときもある。

だが、迎え入れた者は旅人であろうと家族とみなす南国では、今回のクルピエの判断はあまりにもそれに反したものだった。

「――許せよ。ヨウコ」

ヴィアンドは溜息のように低く、青々とした高原に呟いた。

かくれんぼとストーカー

東国へと続くという国境の高原は、なだらかな丘の頂にあって一本の道が通るだけの草原だ。その青々とした草原の背は高く、長いはずのサリーの足までほとんど覆うほど。だから、私が歩くと胸もほとんど隠れてしまう。かくれんぼには持ってこいの場所だろう。

風が吹くと時折ざわざわと風の通り道が出来るこの広い高原は、各国の間にある戦場でもある。それぞれの国が物理的な戦争を行うときには、ここに一斉に布陣するのだという。ここが戦場と決められているから職業軍人の騎士や傭兵が居るわけで、西国の村が襲撃を受けるということは、大則を破る本当に予想外な事態だったらしい。

今は南国と東国はそれほど交流もないけど仲が悪いわけでもないらしく、この高原はただただ広く、空には時々、輸送用らしい飛行機が飛ぶぐらいで、私以外に草を刈り取っただけの道を歩く人も車もない。

ぼくぼくと歩くサリーの背に揺られながら、私はのんびりと今にもしゅわしゅわと鳴りそうなソーダ色の青空を見上げた。ハワイアンブルーというやつだ。あ、それはかき氷か。

南国の気候は始終亜熱帯で蒸し暑いのが売りだったけど、この高原はもうそれほど気温も高くない。チャリム一枚だった私も、国境の関所からはマントを軽く肩にかけている。

あつという間だったけれど、長い旅だった。

どういうわけだか四か国まわる羽目になったけどあとになって思い出せば、良い旅だったと思えるだろう。まあ、ほんとにいろいろあったけど。

初めは東国に行つて、俊藍に会つてやろうと思つていた。

訊きたいことはたくさんある。

どうして東果てのクソババアは俊藍を裏切つたのか。

どうして、アンジェさん達は死ななければならなかったのか。

私は何も知らないままあの奇麗な王様と別れてしまったので、その理由でさえ検討もつかない。

炎の呪いに苦しんでいたのに、どうして戦場に炎で苦しめる女神を送り込む必要があつたのか。

今となつては、東国と西国の戦争の理由さえどうということだか疑問が残る。

どうして、東国は西国に戦争を仕掛けなければならなかったのか。そもそもあの変態魔術師は、どうして私を東国へ向かわせなかったのか。

あの魔術師は意味のないことをたくさんするし、変態ではあるけれど、自分の興味が及ばないことに指一本を動かすとは思えない。とにかく私に嫌がらせしたかつたっていうのは納得できる理由はあるけれど。

訊きたいことはたくさんある。でも今となつては俊藍に聞かなくてはならないことでもないような気もしている。

彼が全部知つていとも思えないし、私の関心事はどちらかというと別のことだ。

私が常に頭に残しているのは、色々な人との思い出と、少しの恨み事と、元の世界に帰るということ。

何といつても、俊藍はもう結婚してる。

あのバルガーのおじさんが嘘言うとも思えないから本当だろう。あの変態魔術師にしろギルドの胡散臭いマイスターにしろ、北国は他の国が思っている以上に他国の情報を集めているようでもあったから。

とにかく新婚さんのところにそんな生臭い話を持って、魂の片割れとか名乗る女なんか割り込んで欲しくないはずだ。

ぶっちゃけ、幸せそうな顔を見ると殴りたくなるだろうから私の拳と俊藍のあのお綺麗な顔のために会わない方がいいだろう。本当に面倒な男だ。

とりあえずこれ以上の面倒事はごめんだ。

クリスさんに手紙は届いただろうし、パパッと社長と面会させてもらって、不本意だけどバルガーおじさんにはお世話になったから弟子の有害銀髪に文句言って、俊藍には手紙でも書いて、それから西国の伯爵に連絡入れよう。郵便局のお姉さんの話だと、そろそろお土産も届く頃だろうし、万年筆の感想でも聞いてみよう。向こうからしたら私は旅の空だから一方的に連絡待ちだろうしね。

そんなことをつらつらと考えていた私をよそに、サリーが突然足を止めた。

不機嫌にごろごろと喉まで鳴らす。

「……どうしたの？　サリー」

高原は砂漠ほど広くない。

半日もぼくぼくやってれば東国の国境に着くとヴィアンドおじさんは言っていた。

昼食も近い穏やかな日中の高原だというのに、サリーの様子はまるで野生動物満載の危険な森にでも入ってしまったような様子だ。

怯えとも苛立ちともとれるサリーの様子に、私もざっと辺りを見回した。

静かだ。

でも風もない草群が異様だということにようやく気がついた。

誰もいない静けさというよりも、何かが息を潜めているような不自然な静寂。

私は手綱をしっかりと握って、鎧がブーツにかかっているか確かめた。

荷持は仕方ない。トランクはお気に入りだったけれど、伯爵にもらった万年筆も愛用の手帳もチャリムの腰紐にくくりつけてある。咄嗟に取り出せるようにしていたのが、功を奏したらしい。お金も腕輪もお財布木札も身につけてある。お土産送って良かった。

私はすっかり扱いになれたサリーの荷物紐を解いて、トランクをどさりと地面に落とす。

「サリー！」

私の声に反応して、彼女は「くええええ！」とひと鳴きすると、高原の道を脱兎の如く駆けだした。

速い速い速い！

まるで競輪選手になったみたい、私はサリーの首に抱きつかんばかりに手綱と一緒にしがみつく。

でも、私の耳にどどっという別の騎竜の音が聞こえてきた。

草を切るようなスピードの中、私が何とか首をひねると、少なくとも五騎の騎竜がこちらに凄まじい速度で肉薄している。

乗り手はいつか見たような、黒装束だ。

嫌な記憶が蘇る。

サリーは大事な相棒だ。

死なせたくない。

私には魔法は効かないらしいから、もしも何かを撃ってきて私には当たらないかもしれない。でもサリーは違う。

サリーを宥めて逃がそうか。

私はサリーの首を撫でようとした。
その時。

ひゅん！

私の顔の横を何かが通り過ぎた。
ますます嫌な予感がしてもう一度後ろを振り返る。
すると、

「うわぁ！」

わっと黒装束達がざわめいたかと思うと、速度を落とした騎竜から一人、また一人と地面に叩きつけられている。

その黒装束と暴れる騎竜の間を縫うように瞬いたのは、青白い光の球だった。

それはふわりとパニック寸前の中を動き回り、あっという間に五騎いた騎竜をすぐには動けないほど驚かせると、すいと私の方にやってくる。

まだ走っているサリーと並んで、飛んできたかと思うと、そのまま先へ進めというようにサリーの前にふわふわと、実際には猛スピードのまま先導するように進み出た。

しばらく走ってサリーが疲れたので道の真ん中で立ち止まると、すでに何かが追ってくる気配もない。

青い光はふいに私の顔を確認するようにやってくるので、改めて私もそれを見て思い出した。

あれだ。変態魔術師が飼ってた青い光の球だ。

こいつ、ストーカーでもやってたのか。

私の疑惑を横目に、その球は私の顔をまじまじ確認しているようだったので、私は胡乱な顔になってしまったが、助かったには違いない。

たぶん、こいつを操っている変態魔術師がこちらの様子を見ているのだろう。

「――ありがとうございました」

これで貸し借り無しだ。というより私はアイツを殴りたいのだが、礼は言っておくに限る。すると、青白い光はなぜか満足したのか青空にすうと飛んで消えた。

ストーカーは止めたのか。

止めてくれたなら結構なことだ。

私はサリーから降りて、あとの行程を進むことにした。

鞍にはサリーの餌と水だけはあったので、彼女を休ませながら高原を抜けて、私たちは石造りの塀と独特の屋根を備えた関所に辿りついた。

東国だ。

串焼きとトンネル

関所を抜けて無事にたどり着いた私は、懐かしい木造家屋に目もくれず、真っ先にギルドに駆け込んだ。

だって、ほとんどの持ち物捨ててきちゃったんですもの！ 木札は持つてるけど南国の迷い人証明書では南国での保障であって、東国には通じない。それでも関所では私の身分を証明してくれるんだから、クルピエには感謝する。

窓口のお姉さんに確認してもらったら、私の持ち金はどう見たって安宿に泊まれるほど。それに南国でヴィアンドおじさんの所で働いたってことでもらったお金を足しても二日三日過ごせる程度だった。

だからお姉さんに相談したら、日雇いの仕事をいくつか紹介してくれたんで（西国にはなかったよ！）サリ―を預かってもらってウエイトレスやら店番やらの仕事をいくつかこなして、旅費にすることにした。

今更だけど、生活力ついたな私。

南国との国境の辺境から、東国の王都がある街までは騎竜で街道を進んで最低でも一週間はかかるという。まあマシだよ。

でも、私はなるべく昼間は日雇いの仕事をして夜は早めに宿に帰って床につくことにした。街道は人の多い通りを尋ね歩いて、選んで歩いた。

あの黒装束は、いつだったか俊藍を襲ってきた奴らと一緒にだ。どうして私を狙ってきたのかは知らないけど、東国の出身であることには間違いない。

私は野宿を避けて行程を進め、関所から七日目。

「あー着いた」

異世界から落とされて一日目、訳も分らず連れてこられた王城の前に立っていた。

幸い、再びあの黒装束に狙われることもなかったから、意外とすんなりやってきた。

クリスさんに遊びに連れてこられた下町を歩いてサリーと一緒に屋台を冷やかして、念願の串焼きをようやく口にした時には、思わず唸ったよ。色とりどりのお酒も美味しかったこと！ 港町でもあるためか、見た目深海魚な魚の丸焼きとかもあったから、今度試してみよう。ここ最近の習慣としては、街に着いたらすぐにギルドへ直行なんだけど、宰相さまの社長に会えるか分からないから先に王城に来たという次第です。屋台への寄り道は正当な欲求です。

馬車の中からはちらっと見える程度だった要塞の門は大きかった。サリーと一緒に「うわー」と見上げて、このまま「たのもー」って門叩いても良かったんだけど、さすがに不審顔の門番の詰所で草色頭で甲冑着たお兄さんを捕まえる。

「あのー。私、ヨウコ・キミジマっていうんですけど。クリスさんか、北城しゃ…宰相閣下にご会えませんか？」

ついでに迷い人の証明書を見せると、お兄さんはますます不審な顔になってしまう。

でも、お兄さんの隣から顔を出した気の良さそうな白髪混じりのおじさんが、

「クリス？　もしかしてクリス上等兵のことか？」

じょうとうへい？　なんだそれは。メイドさんだよあの子。
でもクリスという名前の人はその人しかないらしくて、今度は
こっちが不信顔で肯いた。

「クリス上等兵にヨウコという迷い人が来たら連絡しろと言われて
いるんだ」

「はあ」

生返事の私を尻目に、おじさんは電話によく似た受話器を取り出
すと、電話帳みたいな本を取り出した。そして、ぺらぺらと何かを
探して、探し当てた一文を指でなぞる。すると、

ぼうっと文字が光ったと思ったら、おじさんは受話器に向かって話
しだす。

ぽつぽつと私のことを伝えてくれたかと思ったら、このままここ
で待つように言われた。

「すぐに来るってさ」

「ありがとうございます」

じょうとうへいなる人がクリスさんかどうかは知らないけど、中
に居る人なら彼女を知っているかもしれない。

東国の辺境からここまで来たのだと言うと、それは大変だったな
と気のいいおじさんとお兄さんは驚いたようにお茶を出してくれた。
ああ、なんか懐かしい。こののんびりした感じ、東国だ。それをの
んびりすすっていたら、門の内側でドカンッと爆発音がして、大門
の脇にある小さなドアがバタンと開く。

「ヨウコ…！」

栗毛の女の子が飛び出てきて、がしりと私に抱きついてきた。

格好はチャリムでもメイド服でもなくて、詰襟みたいな服だったけど、顔を上げた碧眼は、

「久し振り。クリスさん」

相も変わらず可愛いクリスさんだ。

彼女はなぜか泣きそうな顔で可愛い顔をしわくちゃんにしまった。

「よく、西国の戦場から生きて…っ」

あ、そうか。私、あの戦場でよく生きてたよね。

「でもよく知ってたね」

私は色々あったけど、連絡したのは南国からが初めてだから、今でも東の国のクソババアの元に居ると思われているのかとあったよ。

クリスさんは、今度こそ泣きそうになってたけれど、はっと息を詰める。

もしかして、私が東国に来るとまづかったのかな。

その思いつめた顔を見てたら気の毒になって、私は口早に用件を言うことにした。

「あのね、私、しゃ、じゃなくて北城宰相に会いに来たんだ。ちょ

つと前まで北国に居ただけで、元の世界に帰る方法わかったから」

それ話したらすぐに出ていくから、と言った私を難しい顔でクリスさんは見つめて、覚悟を決めるように大きく息を吐いた。

「分かりました。お連れします」

サリーは連れて行けないからと、大きな荷物を預けて守衛のおじさんにサリーのお相手してもらうことになって、私はクリスさんと城門の中へと入ることになった。

クリスさんは城門の脇に私を連れてくると、見憶えのある方陣の中に私と一緒に立った。

あ、これは。

「待ってクリスさん。私、特殊体質らしくて、魔術効かないの」

何かを唱えようとしていたクリスさんは驚いたように作業を止めて、私をまた泣きそうな顔で見つめる。でも思inaおしたように「こちらへ」と私の手を引いて城へ続く橋を渡らず、門の脇から階段を降りていった。

やっぱり迷惑だったのかもしれない。

でもまあ、社長のところに連れて行ってくれるんだから、と私はクリスさんの後ろから階段をくだった。

要塞の周りは堀みたいな湖なので、橋を渡らなければ当然ほとりだ。石造りの城壁のひと際暗い場所へ行くと、クリスさんは何事かを口の中で呟いて、城壁に積んである石の一つを手で押した。

すると、ゴゴと小さな音がして、ふわりとアーチの入口が現れた。そのトンネルは長いようで、晴れた日の光もほとんど入らない。

「こちらから、北城閣下のところへお連れします」

ここから？

私の疑問が分かったのだろう。クリスさんは頷く。

「魔術でお連れできない今、安全にお連れできるのはこの道だけなのです。――私を信じて下さいませんか」

そう手を握る彼女があまりにも真剣だったので、私は大人しく頷いた。

トンネルは暗くて、クリスさんが魔術で作った明かりさえも三メートル先の暗闇に呑みこまれる。足音だけが響く中で、私は何となく気づまりで話しかけることにした。

「北城宰相は元気ですか？」

クリスさんはますます押し黙る。質問が悪かったかな。

でも、しばらく黙り込んだあと、彼女はおずおずという風に答えてくれた。

「――閣下は今、すべての力を奪われて軟禁されています」

え、

「何それ」

権力なかったらただのわがままお坊ちゃんじゃないか。あの人。

「どうしてそんなことに？」

「通常の宰相の業務はこなされています。でも、意見することはおろか、城から出ることさえ禁じられています」

「そんな、どうして……」

そんな面白いことに。……おっと失礼。不幸っぽいことに。

クリスさんは続きを促す私を横目に、二股に分かれたトンネルの先にあった扉を無言で開く。

わずかぶりの陽光に目を細めて出ると、そこはいつか私が通ったような気がする要塞の中の廊下だった。

クリスさんは迷いのない足取りで歩きだすので、それについて歩いて行くと、幸い誰にも会わずに一番奥の観音開きのドアまで辿りついた。

「入ります。閣下」

ノックもそこそこにドアを開けてクリスさんに促されたので、私は忍びこむみたいに部屋へと入る。

そこには、見憶えのない男が机の上でうつ伏せになっていた。

元は整えられていたと思われる部屋は、机と簡単な棚しかなくて、書類や酒瓶であふれて酒臭い。部屋同様に荒れた机の上に突っ伏しているのは、乱れた詰襟の無精ひげの男だ。その手にはやっぱり酒瓶。昼間っから良い御身分だな。

「――閣下。北城閣下」

男に近寄ったクリスさんに肩を揺らされて起こされると、彼女の手を酒瓶が、

ぶん！

と払いのける。クリスさんに当たりはしなかったけど、この酔っ払いめ。

男はのっそりと体を持ち上げ、がりがりと頭を掻いたかと思っただけ、部屋で呆れた顔をしている私を見て、動きを止めた。

「……まさか、葉子か？」

この偉そうな声。まさか、

「社長？」

あのエリートまっしぐらな上等そうな外面が見る影もない！社長はおもむろに席を立つと、酒がまわっているのか多少ふらつきながら私のところへ走り寄ってきて、

「なぜ、今戻ってきた！」

ああ、やっぱり社長だ。この偉そうな感じ。

「なんでって、元の世界に戻る方法見つけてきたんで、お知らせに社長の無精ひげ顔が今度こそ派手に歪む。いったい何なんだよ。むっとした私を見て、何か言おうとしてたけど、今度は大きな溜息をついた。ここに返ってきたら何かよく溜息つかれるな。」

「——どうして、陛下のところへ真っ先に行かなかったんだ！」

アンタこそ会えて嬉しいとか、無事で良かったとか社交辞令はな

いのか真っ先に。

「どうして私が陛下なんかに会わなくちゃならないんですか」

あ、まあお世話にはなったから言伝ぐらいは預けておこう。

ますます不可解な生き物を見るような目で私を見て、社長は溜息交じりに頭を搔く。風呂に入れ酔っ払い。

「陛下って結婚したんですよね。おめでとうございますって言うておいてください。それより、元の世界に帰る方法をあなたに話したら出ていきますから」

仕事を干され気味だっていうからちよっと同情した私の時間と心を返せ。お望みならとつと出てってやる。

「そんなことはどうでもいい！ 早くここから逃げろ！」

「はあ？」

私の肩に掴みかからんばかりの社長は、不審顔の私に怒鳴りつけるように続ける。

「元の世界へ帰る方法が見つかったなら、君はその方法で早く帰れ！」

「忘れたんですか。私、あなたの車に轢かれそうになってこの世界に来ちゃったんですよ」

うっと唸ったところを見ると忘れかけてたらしい。どうした。昼間っから酒なんか飲んでるから頭がまともに働いていないんじゃないかな

いのか。

「元の世界に帰れないなら、すぐにこの国を出て、どこでもいいから匿ってもらえ！」

どこでもいいって大雑把な。

「何なんですか。さっきから。どうして私が逃げなくちゃならないんですか？」

「いいか？ 君は、今、自分で思っている以上にこの世界の事情に深く関わってしまっているんだ。不幸な目に遭いたくないなら、すぐにこの国を出ろ」

おかたにしてすべからく、巡ってくる不運には見舞われておりますが。

不信顔の私にそう言って、社長は何かを思い出したのか、荒れた棚をござごとひっかきまわして、子犬でも入りそうな箱を取り出してきた。

「――預かっていた」

差しだされたのは、見覚えのある鞆だった。

「これ、私の……」

あちらの世界から一緒に落とされた私の荷物だ。

「全部ちゃんとあると思うが、確かめてくれ」

言われるまま、箱の中の鞆を手にとった。少しくたびれた合成の布が懐かしくて何度も撫でる。中には財布と携帯、手帳とハンカチ、化粧直しのポーチまであって、あのとき買っていたはずのビールとおにぎり以外は全て揃っていた。それから、あのとき着ていたジーンズとセーターとコートもスニーカーもある。

ああ、私の物だ。

もう捨てられていたと思っていたのに。

こうして手元に戻ってくると、何だか他人の物みたいに見えた。手に取った手帳を広げる手は、あの頃とは比べものにならないほど日に焼けて節くれている。

手帳をめくってみると、書きかけの日記のようなものを見つけた。この世界に来て二日目。二日酔いの私を書いたやつだ。

あの頃の私には、今の私は到底想像なんか出来なかっただろう。日付を見ると、あの時からすでに一年近く。

スケジュール帳の日付はすでに足りなくて、小さなカレンダーを見ると、

「――今日、私の誕生日だ」

原稿書いたりするために、伯爵の手帳に今までのことを書き出していたから何となくの換算だけど、それがあっているなら、今日はちょうど私の産まれた日だった。

落とされる前の誕生日は残業やらが重なって、深夜のコンビニで一人淋しくケーキを買ってくるというわびしいものだった。友人や弟からのおめでとうメールを見ながら、ビール片手に自分に乾杯したのは何だか遠い日だ。

日付を指でなぞっていた私の耳に、静かなノックが鳴った。

そして、

「北城宰相、よろしいでしょうか」

返事を待たずに扉を開いたのは、眼鏡をかけた上品な男だった。

三つ編みとドロップキック

まずいな。

表面上はにこやかな男が荒れた部屋に入ってくるのを見ながら、私は内心慌てた。

だってさー、私、正式な手続きして堂々と要塞に潜入したわけじゃないからさ。守衛のおじさん達は証言してくれるだろうけど。

でも、男は私を横目で一瞥したものの何も言わずに、私よりも顔を引き攣らせた社長とクリスさんに向き合った。

「陛下がこの方との謁見を望んでおられます。お借りしても？」

社長は青筋立ててるし、クリスさんは怒鳴り出しそうな厳しい顔をしてるのに、やたらと静かな男だ。

私は自分に矛先が向いていないのをいいことに、上品だが強引にやってきた男を改めて観察した。

暗い色の裾の長いチャリムと拾の着物を着て腰には灰皿箱みたいなものをぶら下げている。赤銅色の髪の一房だけの三つ編みが背中が長くうねっていて、東国では珍しい眼鏡をかけている。一見すると穏やかな紳士にも見えるけど、醸し出す空気は何となくすら寒い。きっと眼鏡の奥は笑っていないんだろう。

観察していたら、ふと男が私を見てきたので、口笛吹いてごまかすように視線を明後日の方向へ飛ばす。

すると、彼は口の端だけ上げて笑い、

「葉子・君島さんですね？」

驚いたことに私の名前をきちんと発音した。
私が応えないでいると、男は勝手に続ける。

「私は、ラウヘル・ショウセツ・トーレアリングと申します。以後
お見知りおきを」

丁寧な礼をされたけど、ミカエリ・ジョーンズ以上の殷勤無礼だ。
胡散臭い。

「ヘイキリング陛下が謁見の間でお待ちです。お連れいたしますの
で、こちらへ」

私に拒否権はないらしい。

社長とクリスさんを振り返ると、彼女たちは苦々しい顔をしてい
る。

「あの」

「はい」

男に呼びかけると、彼は丁寧に返事をしてくる。まったくもって
胡散臭いなあ。

「私、殺されるんですか？」

なんだかんだと東国ではよく命を狙われたり死にかけたのだ。
でもこの問いかけの何が面白いのか、ラウヘルと名乗った男は面
白がるように目を細めた。

「とんでもない。あなたは陛下のお客様です。私が保証いたしますよ」

胡散臭いアンタに保証されてもな。
社長とクリスさんに振り返ったら、

「――今のところは、大丈夫だ」

今のところって何だ。社長。嘘でもいいから確実に言ってくれ。
一気に何だか気が重いよ。
そんな私に社長は私物の詰まった箱を手渡してくる。

「長い間ありがとうございました」

一応、礼を言っておこう。預かってくれてたわけだし。
でも社長は何か言いたげな顔でそれしか取り柄がないのに整った
顔を歪めた。

なんだよ。私が何だかいじめてるみたいじゃないか。

「大丈夫ですよ。また話に來ますから」

「――ああ」

ようやく苦笑するように緩めたよこの人。

「無事で良かった」

不器用な言葉は相変わらずだ。

ラウヘルに促されたので、私は彼について箱を持ったまま社長の

部屋を後にした。

「――北城宰相と仲がよろしいんですね」

私の先導の道行き、胡散臭い男がそんな風に訊ねてくるので、鼻で笑うのをこらえた。

「同じ迷い人なので、話しやすいですよ」

そもそも私がこの世界に来てしまった原因だしね。責任は存分にとってもらったのに、なんだかんだと私の方が面倒みてないか。

「そうですか。宰相と共にあなたは这个世界に落ちてきてしまいましたからね」

かつかつと、静かな靴音と共に廊下を進む目の前の男の三つ編みが揺れるのを、思わず凝視した。

「落ちてきた時、あなたは三日も目を覚まさなくて。こちらに落ちてきた迷い人が死ぬという事例は無かったものですから、驚きましたよ。北城宰相が意識を取り戻す前にあなたと引き離すことが出来て良かった」

赤銅色の髪が日に透けて、まるで紅茶のように深く赤い色にも見えた。

まるで、

「此岸花畑に放り出したというのに、まさか陛下に会おうとは思

もしませんでしたけれど」

血の色だ。

ゆっくりとこちらを振り返るその双眸も、眼鏡の奥で脈打つ鮮やかな血の結晶のよう。

「よく今まで生きていましたねえ。葉子さん」

まるで、世間話の延長のような口調で、男は続ける。

「この私が自分の手を汚してまで殺そうとしたのに」

何者だ。この男。

ただ一つ分かったのは、この男が私をこの世界に落とした張本人だということ。

それから、どういう道順で謁見の間に辿りついたのかわからない。気がつけば、ひと気のない広い部屋でひざまずいていた。

「葉子」

低い声に目が覚める。

ああ、懐かしい。本当に。

顔を上げると、湖面のような瞳が私を映していた。

記憶にあるよりも少し痩せただろうか。

黒髪を首の後ろでまとめているせいかな、より精悍に見えた。

飾りのついた詰襟服でひざまずいた私よりも一段高い椅子に腰掛ける姿は、やっぱりこの人は王様だったのだと思った。

ふとその隣を見ると、長い黒髪の奇麗な人が座っている。美人というより可愛らしい感じの人で、白い肌、ふっくらと淡いピンクの唇が愛らしい。小動物を思わせる容姿だが、丸みを帯びた紫の瞳はちゃんとした意思を持っていることが窺えた。首までゆったりとレースで隠すようなドレスをまとった姿は間違いなく女で、一目で彼女が女として愛されていることが分かった。

この人が奥さんだろう。
奇麗な人だ。

思わず顔が綻んだ。

幸せなんだ。俊藍。

きつとこの人は、俊藍のあの呪いも受け入れてくれたんだ。

ほっとした。

いつか迎えに来てくれるとか、そういう約束を諸々破られたってことだけど、あれは俊藍が一方的に約束していっただけだ。

「良かった」

自分の思いが口から漏れたのかと思った。

でも、爽やかな香り包まれて、初めて抱き締められているのだと分かった。

暗い色の服がぎゅぎゅうと二度と放すまいというように私にまとわり、私は懐かしさに鍛えられた腕を少しだけ掴んだ。

俊藍がいつの間にか私のそばで同じようにひざまずいて私を抱き

締めている。

いつかの、雨の日を思い出した。
味方になると言っていたあの日。

恋じゃない。

そう思ったのは、間違いじゃない。

この腕に抱かれて私はようやく自分の何かが戻ってきたような心地になる。

それは、やっぱり今も同じだった。

私を確かめるようにぎゅうぎゅうとしがみついてくる大きな体は、
まるで大きな子供だった。

「――大丈夫。生きてるよ。俊藍」

肩を叩いてやると、今にも泣きそうな呻き声が聞こえた。
大の男が泣くなよ。

「すまない」

小さく溜息が私の耳元で囁いた。

「すまない。葉子」

すまないと繰り返す声が本当に泣き出しそうだ。

「――どうしてお前ばかりをこんな目に……」

えと。どういふことかな。

思わず顔を引き攣らせて俊藍の腕を引きはがした。

何だ何だ、みんなして。

逃げろだの、こんな目だの。

俊藍の肩越しに少し驚いた顔の奥さんと目が合った。おっといけない。この人スキンシップ多いけど、妻帯者だったっけ。

私は奥さんにニコリと笑いかけて、俊藍を今度こそ引きはがす。名残惜しげに私の肩に手を置いたけど、俊藍は大人しく離れてくれた。よしよし。女の嫉妬とかシャレにならないからな。正氣に戻れ。

「元氣そうで良かったよ。俊藍」

「……まだ、その名で呼んでくれるのだな」

あ、しまった。俊藍って奥さんしか呼ばない名前だったっけ。忘れてた。

「忘れてた。御無沙汰しております。ハイキリング陛下」

「今更繕うな」

思わず、というように整った顔が苦笑する。表情筋も動いているみたいだし、大丈夫だろ。でも、私の安心をよそに、俊藍は再び笑みを消した。

何か、結婚おめでどう、とか言える顔じゃないんですが……。

俊藍は、覚悟を決めたような顔でしばらく黙りこんだけれど、苦渋の選択を呑みこむように口を開いた。

「――葉子、お前には、そのラウヘルと結婚してもらう」

は？

そろりと首を動かした。

俊藍の声は続く。

「その男は、我が国のもう一人の宰相で、お前をこの世界に落とし
た首謀者だ」

それは知ってる。でも、

「五年前、私に獣化の呪いをかけ、内政を混乱させて私を王位から
追い落とし」

振り返ると、赤銅色が目に入った。

「国境でハイラントと結託し、炎の女神を量産し」

あの赤い瞳には私の間抜けな顔が見える。

「東と西に戦争を起こさせた裏切り者だ」

だが、と俊藍は吐き捨てるように続ける。

「この者は、表向きには戦争を終結させた功労者だ。表向きには罪
には問えない。それでも、この男を野放しにはできない」

まさか、この、何だか縁側でひなたぼっこするみたいに笑ってる
人が。

「私に忠誠を誓うかわりに、お前を妻に迎えたいと言ってきた」

えっと。

私は私の隣で大人しくひざまずいている男を改めて見た。

にっこり笑ってるけど、目は笑ってない。うすら寒いよあなた。

それから俊藍を見た。彼は何だか自分がこいつと結婚しろと言われたみたいで顔で今にも泣きそうだ。泣くなよ。泣きたいのはこっちだ。

私は混乱する頭の中で、俊藍がほざいた衝撃の事実をまとめることにした。

えっと、このメガネが私を異世界に落とした張本人で、俊藍にも呪いをかけてて、有害銀髪と知り合いで、アンジェさん達を……

体が言うことを効かなかった。

でも、止まれとも思わなかった。

気がついたら、俊藍の腕を振り払って、隣の男に殴りかかっていた。

渾身の一撃だったにも関わらず、男は軽々と私の拳を受け止めてしまったが。

私は舌打ちして蹴りを繰り出したがそれも駄目。いつの間にか立ち上がった彼に拳を受け止めたのとは反対の手で弁慶の泣き所を抑えられてしまう。

もう最後の手段だ！

ええい！

ほとんど目をつぶったまま私は頭を大きく振りかぶって、男めがけてスイング！

ごん！

命中したはいいけど、自分も痛い。涙目になって目を開くと、ドアップで眼鏡の奥の赤い目が笑っていた。

私の額と自分の額を合わせたまま、まるで恋人が睦言を囁くように、男は口の端を上げる。

「噂どおり、元気の良い方ですね」

私の決死のストリートファイトを元気がいいで片付けやがったよ。

「この鬼悪魔！ 鬼畜！ 人外魔境！ ドエス眼鏡！」

叫んでいたら、顔が熱い。いつまでも涼しい顔したこの顔が憎かった。

「人殺し！」

そう叫んだら、ようやく返事がかえってきた。

「――それは、炎の女神たちのことですか？」

「それ以外も全部！」

大雑把なことをおっしゃる、と男は初めて笑みを崩して、

「彼女たちは自ら望んで女神になったのですよ？」

そうかもしれない。

彼女たちは最後まで誰ひとりとして逃げようなんてしなかった。
でも、それは、

「アンジェさん達は、死ぬ以外に救いが見えなかったただけだよ」

死んでも死にきれないほど絶望して、あの家で癒されていたのだ。

「あの家以外に、帰る場所がないのに、どうやって逃げることなんか出来たの」

泣くな。

俊藍の前でも泣かなかったのに、目の中が水の膜に覆われるのを感じる。

でも、「ちっ」と小さく舌打ちが聞こえた。

顔を上げると、今までどんな言葉を受けても表情なんて笑顔以外忘れたみたいな男の顔が、忌々しそうに歪んでいる。

私の不思議そうな顔を見とめて、今度こそ男は大きく舌打ちした。

「私だって、あなたを妻にしたいわけじゃありませんよ。ですが、私の計画にことごとく入り込んで小さな綻びを作っていくわ、殺そうとしても何故か生き残るわ、あなたのような人を野放しにしておけないですよ」

散々な言われようだ。

どうして、こんなラスボスみたいな男にこんな言い草並べられないきゃならないんだ。

「どうしても殺せないなら、いつそ取りこんでしまおうしかないでしょう」

どういう理屈だそれは。

啞然としている私の両腕を万歳させるように掴んだかと思えば、男はそれこそ子供の二、三人はさらっていそうな人の悪い笑みを浮かべる。

「嫌よ嫌よはお互いさまです。どの道、あなたは私の妻になるしかありませんよ」

覚悟を決めたようなクリスさん。

逃げろと喚いた社長。

すまないと繰り返した俊藍。

何だか全部、繋がるのは気のせいですか。

確かに逃げたいわ。

ラスボスの嫁になれとか。

でも、

「この！」

男の腹めがけてドロップキックをくれてやると、両腕は自由になった。

はっはっはっはー。伊達に弟の上に君臨している姉じゃないんだぞ！ 時には力も必要なのです。

悪人面で私を睨みつけてくるこの赤目。

とんでもなく凶悪で、どうしようもない人なんだけど。

面白いと思ってしまった。

この極悪人が私のためにその涼しい顔色を崩すのだ。
面白くないはずがない。

「俊藍」

半ば啞然と私と極悪人のやりとりを見ていた俊藍が、私の呼びかけに「あ、ああ」と生返事をした。

「私、この人の所にお嫁に行ってもいいよ」

今度こそ、黒髪の綺麗な王様の顔が凍った。

なんだよ、アンタが行けって言っただんでしょうが。

すぐには動きそうもない俊藍を尻目に、私は再び赤銅色の悪魔を振り返る。

既に笑みを湛えている悪魔は、私を見つめて目を細めた。

この悪魔には私の許しも妥協も要らないんだろう。だったら、せいぜい、これからしばらく嫌がってもらいましょう。

きっと私もこの極悪人と大差ない凶悪な顔で笑っていることだろう。

「これからよろしく。ダーリン」

こんな感じで、私は誕生日に好きでもない初対面の男とめでたく結婚することになりました。

まったく、なんて誕生日だ。

凶星と茶番

美形が驚き過ぎて口をあんどり間抜けに開けていると、何故だか可哀想になってくる。

初めて知ったよ。

今、目の前に居るからね。

「俊藍」

私と同じ魂を持った、私とは正反対の綺麗な人は私の声にようやく我に返ったようで、床に座り込んだまま、いまだ繕うことができない戸惑いの視線を上げてきた。

おいおい、まるで私が悪いみたいじゃないか。

泣けばいいの？ 泣けば誰かが許してくれる？

そんなこと許されてるのは、美人と可愛いお嬢ちゃんだけだ。それに、女のわざとらしい涙は八割方が嘘八百か自分がかわいそうで泣いてるって相場が決まってる。

だから泣いていいのは、この場合、俊藍ってことになるのか。

私はうんざりして肩を竦めた。

世の中ってホントに不公平。

「お嫁にいくのは私。あんたじゃないの」

うっと口を噤むのも奇麗に見えるんだから、余計に哀れだ。相変わらずむかつくな。

でも、うんざりした私の手首をいつかの冷たい手がかんだ。

「――行くな」

切なそうな、この世で自分が一番不幸だとも言うような。

あーもう。

私はとうとう俊藍の前ではやらなかった乱暴な仕草で自分の頭をかきむしってしまった。

くそー社長の汚れが移ったのか。

「いけって言ったり、行くなって言ったり、あんたは何がしたいの。俊藍」

そう言うと、奇麗な人の奇麗な瞳が傷ついたように眇められる。もう殴っていいかな。

「私が行きたくないって言えば、全部丸く収まるの？　それで大丈夫になるの？」

それで私は私が助かるなら思う存分泣き叫んで言ってやる。でも、

「私はあなたの味方だって言ったけど、私は私を助けるために精一杯だから、俊藍の助けには絶対になれないよ」

常に味方になることと、助けることは違う。

俊藍は、常に助けの欲しい人だ。そんな人の助けには、私はなれない。

何故なら、私も人の助けが必要だからだ。

悲しいことに同じ魂ということは、そういうこと。

「――およしなさい」

静かな女性の声が部屋に響いた。

見上げた先には、高いところからこちらを見下ろしている可愛ら

しい女性。

俊藍の奥さんだ。

「陛下は、あなたのことを常に案じておられました。まるで御自分のことのように、あれこれと気をかけられ、あなたを東の果ての魔女に預けたことを悔いておられ：」

そうなんだろう。そうでしょうよ。

私は完全に悪者だな。

いつだってそう。

「自分の失敗を悔いるのは当たり前のことでしょ」

絶句した奥さんを、つい冷やかな目で見てしまう。

分かっている？

今ね、私、相当腹立ってるんだけど。

「今、私に行くなって言ってるのは自分の物だと思ってたのに、それがあっさり他人の、しかも鼻持ちならない相手が欲しがってるものだから、それが気に入らないだけ」

俊藍の肩がびくりと震える。

そうだよ。凶星だ。

私には、この人の普段は絶対見せない後ろ暗い部分もよく分かる。私は、せいぜい欲張りな性分なので、他人に自分が左右されるのが非常に嫌いだ。

常に自分が自分を操り、手持ちの物を確認しているような、ごくつくばり。

弱い人間だ。

王様はそんなところ見せられない。でも、私にはそれが分かるから、

「自分のことをよく知って、分かってくれる人間が側に居るってことは確かにとっても心地いいし、楽だと思う。でもね」

私と同じ、でも私とは正反対の人を見つめる。

湖面のような蒼い瞳に私が映りこんでいる。

「どうしたって分からない人とか、どうやったって言葉の通じない人とか、そんな人ごまんと居るのに、耳に心地いいことばかり言う人ばかりと付き合っていくわけにはいかないんだよ」

次に奥さんを眺めると、彼女は眉をぴくりとしかめた。まだ若いんだ。

「見た目よりも気難しいけど、分かってうとすれば応えてくれると思うから、この人の味方でいてあげて」

どんなになったって、優しい人だから。

ほら、と手を差し出すと、私よりも大きな手が私の手をすっぽりと握りこんで、私はその手ごと引っ張って立たせてやった。

手間のかかる子供持ったような気分だ。

アホらしい。茶番だ茶番。

まだしよげた顔している俊藍の二の腕を、

ぱーん！

と叩いた。

くそ。硬い。

どうして私が慰めなきゃならない。

「奥さんとお幸せに。あ、子供生まれたりしたら教えてよねー。御祝いぐらいは言うからさ」

「……痩せたな」

まだ私の手を握ったままの俊藍は、私の目も見ず、視線を落としている。聞けよこの美形。

「当たり前でしょ。これでも砂漠で死にかけたこともあるんだから」

今、あの女どうしてるかな。どうか不幸でありますように。

私が不埒なお願いごとを唱えている間も、俊藍はまるで自分のことのように顔を歪めている。

「俊藍」

この名前を呼ぶのは最後だろう。

だから、少しだけ顔を上げた蒼い瞳を捕えてじっと見た。

「助けてくれたことには感謝してる。東の魔女のところまで届けてくれたことにもね。魔女があんたを裏切っていたのは、そのあいつが悪いわけだし」

あいつ、と顎で指すと、あの悪魔は口の端を上げた。性格悪いな
I。

「戦争に巻き込まれたのも、砂漠で死にかけたのも、全部私に振りがかったことであって、あんたのせいでも、あんたのお陰でもない」

蒼い綺麗な瞳を見るのも、これで最後だ。

「私はある物の物じゃない。私もある物の物じゃない。ひとりの人間だよ。何考えてるのか分からない人間。私は他人より少し俊藍と近いだけで、同じじゃない」

だから、

「私は俊藍を恨んでない」

口に出してみても、何だかこれに言いに来たような気もした。

助けてくれた。心配してくれた。それだけで充分だ。それ以上は望まないし、いらない。

たくさん、望まれている人だから。

不意に、手からぬくもりが消えた。

俊藍の手が離れている。

それを淋しいと思うのは、やっぱり彼が私の魂の片割れだからだろう。

「元気でね」

淋しそうな顔だったけれど、まだ納得していない顔だったけれど、俊藍は、いつかくれたように、暖かく微笑んだ。

「お前も、元気で」

ええ。せいぜい元気にやらせてもらいます。

「奥さん大事にしてね」

どうしてそこで渋い顔をする。新妻だぞ。なんて素敵なお響き。

「奥さんもお幸せにね。面倒な人だけど面倒見てあげて」

可愛い奥さんも渋い顔だ。とりやしないよ。こんな面倒な人。

挨拶もそこそこに、くるりと振り返ると悪魔が待ちくたびれたように笑っていた。

ああ、腹立つ顔だ。

だから、わざとらしくにっこり笑ってやる。

「行きましようか。旦那さま」

悪魔も心得たもので、私ににっこりと微笑んでくる。

「ええ。私の可愛いひと」

この悪魔に絶対ぎゃふんと言わせてやる。

夫婦とお見合い

「あー、そうだ。北城宰相に会いに行っていていいですか？ クリスさんも心配しているでしょうし」

「ええ、構いません。ご案内しましょう」

謁見室を出てから、そんなやりとりをして、およそこれから夫婦になろうという雰囲気でもないまま、私は赤銅色の三つ編みにさっきクリスさんに連れられた社長の部屋に案内された。その道行きで、人が廊下を全然通らないことを尋ねたら、何でもこの区域は人の出入りが禁止されているそうで、常に監視の魔術がかけられているんだって。

うわー、本当に監禁されてるんだ。社長。

「北城宰相、何かやっただんですか？」

「何も。ただ、私が帰ってきてしまったので、気を回した誰かが私から彼を守るために閉じ込めているのですよ」

その誰か、というのもきつと知っているんだろう。悪魔の背中から冷気が漂ってくる。

「……もしかして、迷い人がお嫌いですか」

何となく、の質問だったのに、三つ編みがちらりと振り返るから驚いた。

「ええ。嫌いです」

嫌いな人間と結婚しようだなんて、つくづくわけのわからない男だ。

そんな廊下での寒いお見合いのあと、私は社長の部屋に通された。部屋に入った途端、「大丈夫か!」と言われるから、この人も成長するんだなと妙に生暖かい気持ちになった。

「大丈夫です」

答えると、一緒にここに居たらしいクリスマスさんまで泣きそうな顔だった。

あの男、本当に何やった。

「あの人と結婚することになりました」

部屋の外で煙草でも吹かしてるだろう悪魔を指さすと、二人とも絶句した。

今日はよく絶句される日だな。

「そ、それでいいのか!？」

考え直せといわんばかりの勢いで、社長に肩を掴まれた。

「痛いです」

「あ、すまない……」

「嫌だと言ったら、お嫁さんにさらってくれるとでも？ 世界中敵に回したらしいあれを黙らせて」

よしよし。黙れ社長。

「お逃げになるのでしたら、私がお手伝いいたします」

そう言ってくれたのはクリスマスさん。

「やめた方がいいと思うなー。私もあの鼻っ面へし折ろうと思って奇襲かけたけど、にこにこ笑って止めてくれたし。冗談でなく、邪魔したら鼻歌歌いながら人殺すよ。あの人」

あの心底冷めた目をした男だ。

殺されるだけならいいが、どんなことをふっかけられるかもわからない。

クリスマスさんは私よりもそれが分かっているようで、悔しそうに押し黙った。

「どうして私を嫁になんて考えついたのか全然わかんないんだけど、今のところ私を殺すとか、飼い殺しにしようとかいう感じじゃないから」

だって、騙そうと思う人に嫌いだなんて言わないでしょ。たぶん。

「大丈夫だって。いらなくなったら放り出すだろうし、困ったら誰かに頼るから。その時は助けてください」

そう言って笑うと、ようやくクリスマスさんが苦笑した。うんうん。美人は笑う方がいいよ。

社長は大きく溜息をついて、自分の汚い机の上からさつき私に渡してきた箱を取り出してきた。中には私の私物が入ってる。

手渡されて、嬉しくなった。やっぱり私は欲張りなんだろう。

あ、そうだ。お礼と言っちゃあれだけど、元々、社長にこれ伝えに来たんだった。

「北国に行けば、帰れますから。座標とかいうので、こちらの世界に落ちた時にまで戻してくれるみたいですから。北国に行く費用とかは自力でどうにかしなくちゃいけないんですけど、北国での生活やあちらに送り届ける費用なんかは全部保障してくれるみたいです」

社長は、そうかとだけ頷いて、

「ありがとう」

と、苦笑する。

素直な人は好きだけど、これだけ素直な社長は微妙だ。

コンコン、とここから連れ出されるときのようにドアが鳴った。早くしろってことか。面倒臭いけど腹をくくろう。

「じゃ、お元気で。部屋も片付けて、腐らないで仕事してください。帰るって言えば、あの悪魔も止めないでしょうから」

だって、邪魔なものがいなくなるだけでいいんだから、別に殺す必要なんかない。こちらに来ることは、ごくごく稀なことなんだから。

「クリスマスもお元気で」

「ヨウコ様」

待ってというように手を取られ、何かを握らされた。
何かの小瓶だ。

「どうしても、耐えられない時にお使いください。方法はお任せします」

その、無色透明な液体の正体を知って、私は小瓶を見つめた。
私は、申し訳ない気持ちになった。

私のために、ここまで追い詰められることなんてないのに。

私は、クリスさんの白い手を握り返した。

——ホントにアンタは何をした。悪魔め。

毒薬と取扱説明書

「何をもらったのですか？」

社長の部屋から出てきた私に、細長いパイプで煙草を吸っていた悪魔が言った。

ホントに吸ってたよ。ただ単純に悪役のイメージだったんだけど。煙草って嫌いなんだよねえ。

「ここに置きっぱなしだった私の荷物です」

「一緒に毒薬はもらわなかったのですか」

天気の話でもするみたいに物騒な話をする男だな。

私はもう、この男があっさり千里眼みたいなことを言っても驚かなくなっていた。要するに、自分の考えつかないほど頭がいいと思っておけばいいから。

「もらっていません」

歩きだした男のあとをついて行きながら、私はわざとらしく煙草の煙を口笛を吹くように拭き散らす。煙は何だかコーヒーのような苦い匂いがした。

「どうしてもらわなかったのです？ 私から身を守りたくないのですか？」

「人を殺す道具は嫌いです」

「お人好しなことだ」

「人を治す薬なら幾らでも持ちます。恩を売った方が幾らか自分の気分がマシです」

「そういえば、薬草を東の魔女のところと、あの屋敷で習っていたようですね」

この男は、どこまで知っているのだろう。まるで、すべて見ていたような。

「――もしかして、私のこと、ずっと見ていたんですか？」

「そうだと言ったら？」

煙草の煙をくゆらせて、今度の三つ編みは振り返らなかった。

これ以上、私の質問に答えてくれるような気配はない。

珍しくあからさまな拒絶に、私は赤銅色の頭を眺めた。
ますますよく分からない男だ。

「ところでこれから何処に行くんですか？」

あとをついて歩いているだけなので、迷いのない彼の行く先を聞いていなかった。

「私の領地は今、極寒の冬でしてね。その間はこの王都で冬を越すので別宅があるのですよ」

とりあえずそこに、ということらしい。

ついていくだけの私は、門番のおじさんたちに荷物を口八丁で受

け取る悪魔を見ながら、不機嫌なサリーの首を撫でるだけだ。

あつという間の手際で手続きを終えると、旦那さまとなった悪魔は自前だという馬車、というか竜車を呼んだ。竜車って初めて知ったよ。でも物知らずな新妻に一つ一つ答える夫は傍目には印象が良かったようで、竜車がやってくる頃には門番のおじさんたちはすっかりこの悪魔を信用して、暖かいお祝いの言葉をくれた。

サリーは、にこりともしない御者のおじさんに引かれて竜車に繋がれてしまった。

ええええ、悪魔と竜車に相乗りしなきゃならないの？ 勘弁してよ。

荷台に私の荷物が乗せられて、私は促されるまま車中の人となってしまう。気分はドナドナ。歌ってやろうか。

「――私と結婚するにあたって、忠告があります」

遠ざかっていく要塞城を見ながらドナドナを頭の中でリピートしていた私に、夫となる悪魔がおもむろに切り出した。

なんだよ。悪魔の取り扱い説明書？

「私はあなたと子を成すことを望みません。ですから、あなたを指一本汚さないと誓いましょう。あなたも望むところでしょうが」

おうよ！

大きく頷くと、悪魔もよしと言うように頷いて続ける。

「基本的にあなたの行動を制限したりはしません。私の妻となる以外に、あなたに制約を課したりはしません。あなたの望むことなら、世界征服も厭いませんよ」

情熱的な冗談に聞こえるけど、この、世界を手玉にとった悪魔が
言うと言われない。

「そんな手に余るものはいりませんが、私もお忠告が」

私が言うと、悪魔は「おや」という顔になったけど、黙って聞いてくれる態勢になった。

「私もあなたの行動に口出しはしないつもりです。さすがに愛人が
押し掛けてきて別れてちょうだいとか迷惑なのでそのあたりは上手
くやってください」

「私の愛妻はあなただけですから、そんなことにはなりませんよ」

くそ。やりかえそうにもこっぴどく甘えたセリフが出てこ
ない。口から生まれてきただろうアンタ。

私はとりあえず、悪魔のコントへのつつこみは避けることにした。

「それと、嘘をつかないでください」

ひとと、紅い瞳を見つめる。静かな冷たい瞳に映ると、瞳の中の
私は心細いだけのただの小娘だった。

「嘘は嫌いです。どんなことでも。だから誓ってください。さっき
の、あなたの忠告をあなたが守ると」

こちらの世界でもたくさん騙された。言いたくないことは言わな
くていい。

ただ、嘘について欲しくない。

眼鏡の奥の瞳がすうと細くなったと思うと、口元の笑みが消えて悪魔が小さく頷いた。

「誓いましょう」

たった一言。

それだけの返答だったけれど、この人はこの誓いを守ってくれると思った。

嘘をつかない。

だから、きっと、私も嘘をつかなくて済む。

「あなたが私の可愛い人だということも嘘ではありませんからね」

そういう軽口は許すよ。物静かな外面だけど、黙ってたら息が出来ないタチなんだろう。

「あー、それから、これはなんとか本気で忠告です」

仮にも夫になるんだ。知っておいて損はないだろう。

「実はですね、私、ものすごく口が悪いんですよ」

俊藍にもいつか言われたことがあるけど、本当言うと彼は私の口の悪さを十分の一も体験していない。人間言っていないことと悪いことがあると思うんだ。

「悪態とか凄くてですね。あなたのことも、この眼鏡悪魔とか思ってます」

悪魔は一瞬、ぽかんと目を丸くしたけど、次に笑い声を上げた。

「隠さなくても知っていますよ」

遠慮なくどうぞ、と言われて、今度は私の方がぽかんとなってしまった。

何故だか、この性格が最悪な悪魔と上手くやっていけるような気がしたから。

サバンナとアンドロイド

病める時も貧しい時も夫を支えると誓いますか。

わざとらしいほど厳かな口調で尋ねる神父に、ヴェールを被った花嫁は恥じらうように答えます。

はい、誓います。

やがて隣の夫となる人と向かい合い、誓いの口づけを交わす。

なんてことは異世界ではありません。

でも、どこの世界にも結婚式というやつはあるわけで。

ほんの数日で整えられた段取りは、まあ、何と言うか超略式つてやつなんだろう。

私の夫となる眼鏡悪魔が用意したのは、私の花嫁衣装と、結婚証明書というやつだけだった。

この東国での結婚式は、まず神と見立てた祖先に報告し、それから親類縁者に報告すればオッケーというもので、神聖なんだかそうでないんだかよくわからない。

王様はまあ、ご先祖様がやたら多いしその他もろもろの報告が面倒だから全部、親類縁者の立会ってってことになるらしいんだけど。うわーめんどくさい。

で、私かというと、ただいま白チャリムに身を包んで悪魔のご先祖様が眠るという石室にも似た石造りの神殿の中で旦那待ち。

白い糸で複雑な模様の刺繍が入った裾の長いチャリムは奇麗だし、宝石のついたティアラと一緒に被せられたヴェールは複雑なレース編みで、その下の私の顔も特殊メイクで別人になっている。

いいんだ。白チャリムは呪いのアイテムだから。悪魔との結婚には持ってこいだ。

石室神殿は半地下になっているけど、窓が大きくて日の光はいっぱい入る。だから、意匠をこらした窓の隙間から光のカーテンみたいな陰影が灰色の石の上に落ちてオーロラみたいで奇麗だ。

昔から憧れてたウェディングドレスはきっと幸せいっぱいに着てやるんだと思っていたから、物珍しさばかりが先立つこの結婚に私はそれほど感慨を持っていらないようで、神官と呼ばれる立会人と一緒に、黒づくめのチャリム姿の旦那となる人が入ってきてても大した感動も落胆もなかった。

ただ、白チャリムじゃなくて良かったなと思った。

いやだって、あの人赤銅色の髪に赤い目なんですよ？ 悪魔のくせにどんだけおめでたい組み合わせよ。

黒チャリムの旦那さまはちらりと私の方を見ていつものように笑ったかと思えば、ご先祖様の名前がずらりと並んだ石碑の前で私と並ぶ。

そうしてこちらは白と黒の合わせ布のチャリムを着た神官だというおじさんが私たちの後ろから祝詞のような呪文のような言葉を朗々とそらんじて、それが終わったら拳と拳を合わせて三人同時に礼をする。

それで結婚証明書にサインして結婚完了！ あー肩凝った。

かと思ったら、ふいに隣の夫のなったばかりの旦那さまが私のヴェールの裾を持ち上げて、私の顔を覗き込んできた。

「……なんですか。旦那さま」

あからさまな不機嫌な顔だというのに、赤い目の悪魔はにっこりと笑う。

「いつもあなたは美しいけれど、今日は特に綺麗ですよ。私の可愛い人」

——こうして、私のふざけた結婚生活は幕を開けた。

宰相という立場でありながら、悪魔の棲む御屋敷は要塞城からずいぶんと離れた場所にあった。

王都でも端になるというこの辺りは広大な森に囲まれて、庭との境がとんでもなく怪しい。でかでかとした門扉を竜車でくぐって、それからしばらく走らなければ屋敷に着かないから、あれが全部敷地らしい。金持ちの考えることはわからない。

けれど、そのただ広い庭はただ本当に広いだけで、何かオブジェがあるとか花が咲いてるとかそういうものは一切ない。森を抜けるとただのただっ広いだけの芝生だ。屋敷まで続く一本道の他にはところどころに木がぽつぽつと立っているだけの様子は、まるでサバンのようだった。何をしたくてこんな庭にしたのだろうか。

屋敷に帰る道すがら、竜車の車中で正面に座る式服姿の旦那さまに尋ねてみると、

「代々、庭に頓着するような当主が居なかったもので。結局、私の代までこの様子ですよ」

つまりこの悪魔も庭とやらには興味がないわけだ。今更ながらにご趣味はと訊いてみたくなったので、続けて問うと、

「世界征服でしょうか？」

趣味で征服されたら世界も報われまい。

馬鹿話をしている間に竜車は石造りの屋敷に辿りついて、相変わらず無愛想な御者が丁寧さの欠片もなくドアを開き、先に旦那さまが降りて私に手を差し出してきた。普段なら絶対に取らないが、今日は結婚式から帰ったばかりで足はゆったりしたズボンだけど裾が長くて歩きにくい白チャリムだ。仕方がないので見た目よりも広い手に自分の手を置いた。

そのまま手を引かれて私は深い茶色の屋根がついた屋敷に招き入れられる。

観音開きの戸を開かれて、

「お帰りなさいませ」

三十人ばかりだろうか。

お仕着せのメイド服やスーツに身を包んだ老若男女が玄関ホールで出迎えてくれる。

その中から白髪混じりのナイスミドルが進み出て、

「無事のご結婚おめでとうございます。使用人一同心よりお喜び申し上げます」

彼がお辞儀をすると同時に他の人たちも続いてこちらに頭を下げた。

私も同じように「よろしく願います」とだけ応えた。

ここ数日お世話になっている人たちだ。

この人たちは愛想っていうものを忘れてきたように、機械みたいに働いているものだから、世間話をしようにも取りつく島もない。だから、数日経った今では、私はコミュニケーションを取る努力を半ば放棄している。

疲れた私はメイド長に連れられて旦那さまと別れて、とつと自分にあてがわれた部屋に戻ることにした。普通のメイドとは違う裾の長いドレスの彼女は中年に見えるけど奇麗に髪を結いあげた凛とした女性で、顔は、そうあれだ。ロッテンマイヤーさん。

何くれと世話してくれるが、意見が一致したことも世間話をしたこともない。ミセス・アンドロイド。

私を与えられたのは、正面のサバンナ庭がよく見える、日当たりのいい部屋だ。

どんなお姫様仕様だと言いたくなる天蓋付きのベッドや、象牙色の細かい彫刻が施された化粧台なんかの家具類を見たときはうんざりしたが、よくよく見れば灰色のお屋敷によく馴染んでいて、青で統一されたカーテンも絨毯も何故か温かみさえもある。

住めば都とはよく言ったものだ。

私はまだほとんど空のはずのクローゼットを引き開けて、閉じた。えーと。何だこれ。

もう一度見てみよう。見間違いかもしれないし。

戸を引き開ける。

夢じゃないのか。これ。

昨日までは異彩を放っていたクローゼットの隅の私の旅荷物が霞んで見える。

私はそれをひつつかむと、部屋についてきていた無表情なメイド長にわななく口元を抑えながら訊ねることにした。

「なんですか、これは」

「今夜が奥さまと旦那さまの初夜にあたりますので、ご用意させていただきますました」

にこりもしないで応えてくれる機械仕掛けの口調が憎い。

誰かに抗議しようとして、私ははたと気がついた。

旦那となった悪魔の部屋を知らない。

バカな。

「旦那さまの部屋を教えてください。ちょっとお話があるんです」

「こちらのしきたりでは、結婚式を終えられて初夜までは夫となる方と顔を合わせることは禁じられています」

そこを何とか！

と言っても、この融通のきかないアンドロイドが聞きいれてくれるはずもなく。

結局私は自分を罵りながら仕方なく、夜まで待つことにした。

かくして、旦那さまは夕食が終わったなという頃に私の部屋へとやってきた。

サバンナとアンドロイド（後書き）

誤字訂正しました。

下着と萌

これから寝る体勢なのが一目瞭然な着流し姿でぶらぶらと来た彼は、窓辺に置いた小さなテーブルとイスで仏頂面のまま酒をちびちびとやっている私を見て首を傾げる。

「どうしたんですか？ 昼間よりもご機嫌ななめのようなのですが」

赤銅色の頭をちらりと見てから、私は何も言わずに机の上に放り出した衣装を指さした。

「ああ、誰かが気を回したのでしょうか」

物珍しそうに悪魔が手にしたのは、局部だけを申し訳程度に隠したすけすけの下着だ。これとパンツだけ履いてお出迎えしろといわれました。ふざけんな。どんなお迎えだ。

今の私は悪魔と同じような着流しです。

「着てみますか」

「あなたがどうぞ」

そう言ったら「そうですか？」と着流しの襟を緩めるので慌てて止める。何考えてるんだこいつは。

「男のスケスケなんて見たかないですよ！ 器量よしのお姉さん呼んでください！ 出るところ出たお姉さんが着てこそその衣装なんですよ！」

「そうですか？ 痩せた方が着ても男を刺激するには充分だと思いますがね」

「だって、この布地の少なさが肝なんですよ？ 見えそうで見えないのがいいんじゃないですか！ 絶対領域万歳」

「見え隠れすることに神秘性を見出すのは肯けますが、それは反応を楽しむための趣向なのでは？」

どうして旦那となった人とスケスケ下着を挟んで、萌談義せねばならん。そしてアンタはなんでそうドエスなの！

私は思わず頭を抱えた。

なんてことだ。何か早まった気がする。趣味が合わないことも含めて。

泣きそうな気分で、本日めでたく旦那さまとなった人を見上げた。いつもは背中泳がせている赤銅色の三つ編みを肩にかけて、眼鏡をかけた姿は優しそうに見えなくもない。年は、聞けば三十になったばかりとかで、老獪な手腕を持つ宰相にしては思いのほかまだ若い。

近くで見ると、その横顔は綺麗だった。

白い肌の顔のパーツは一つ一つが精巧で、面長の顔はまるで月を思わせた。何も知らずに出会っていれば、月からやってきたと言われても信じてしまいそうだ。

私の視線に気づいた赤い瞳が面白がるように細められても、どうしてかこの人を美しいと思った。

「あーあーあー早まった！」

「何をです？」

「アンタと結婚するのは早まった！ あれですよ、頭にカーツときただけなんですよ。まっげで影ができるような人と結婚するなんてどうかしてると思えない！」

「私はあなたのような美しい方と結婚できて嬉しく思いますよ」

「その面白がってるようにしか思えない顔で言われて誰が信じると思うか！ ああああ馬鹿だ！ 私は馬鹿！」

「そういうところも可愛いですよ」

「いちいち相の手入れしないで！ 自分を罵倒してるんですから！ すみませんが今からでもナシにできませんかこの結婚！ いーじゃないですか、私は迷い人だしあなたに嫌われてるし元の世界に帰ったっていえば皆納得しますって！」

「私が納得しません」

「どうして！」

すい、と手をすくい取られた。

私の指が震えたことに気がついたはずなのに、白くて広い手はゆっくりと私の手を包みこんでしまう。

「すでに、あなたは私と契約したのですよ」

まるで、本物の悪魔が目の前に現れたようだった。
赤い瞳はにこりともせず、暖かい掌で私の手を包んだまま静かに言う。

「あなたを汚さないと誓いましょう。ですから、あなたは最低一年、この世界にあって私の妻であってください。一年を過ぎれば、あなたがあちらの世界に帰るのなら必ず帰して差し上げます」

「一年……」

「陛下があなたを諦める期間です」

男の声を初めて聞いたような心地になった。

見上げると、そこには悪魔ではなく、一人の真摯な男が居た。

「あなたは、陛下と出会ってはいけなかった。たとえば、魂の片割れだとしてもね。私があるを誤ってこちらの世界に招いてしまったことが原因ですが、私は、否応なく引かれ合う魂というものを見誤っていた」

男はゆっくりと目を閉じた。

「あなたには、許してほしいとは思わない。憎んで、恨んでくださって結構です。ただ、私はあなたのことを尊重し、どんな願いも叶え、必ず守ると誓いましょう」

飾り気も、何もない。

ひどく真っ直ぐな、懇願だ。

私はいたたまれなくなって、泣きそうになった。

「陛下は、これからのこの世界に必要な方です。そうであるためには、異世界からの訪問者であるあなたを手に入れてしまっただけならいいのです」

知っていますか、とつぶやくように男は言う。

「北城一族がこの東国に出来てから数百年、加速度的に東国は腐敗しました。かの一族の才を疑わず、重用し続けた。その結果、東国の国力は落ち、西国との小競り合いを繰り返すようになった」

つまり、迷い人のせいで、東国は駄目になっていったということだ。

それは、

「――それが、私が陛下と会ってはいけなかった理由ですか」

「そうです」

頷く紅い目の男を見ながら、私は呑み込んだ言葉を心に落とした。だから、あなたは私を嫌いなのか、と。

まるで嫌われたくないかのような言葉だ。自分は、この悪魔を嫌いなのに。

「ご心配なく。あなたのことは、私がきちんと面倒を見ますから」

私の複雑な顔を見られたらしく、悪魔に戻った男は目を細めた。

「悪魔のアナタに心配されても嬉しくありません」

そうですか、と笑う悪魔が、やっぱりわけの分からない人間に見える。

でも、考えるだけ無駄な気もする。

「あの、早速お願いがあるんですけど」

「名前で呼んでくれるようになったら聞いて差し上げましょう」

「いつの間に条件付きになったんですか」

「今です」

理不尽なことを言って悪魔は私の手を放すと大きく伸びをする。

「私の名前はしょうせつ、小さな雪と書いて小雪といっています」

これは、

「……それって、アザナってやつ……」

「よく知っていますね」

にやりと笑った顔は、まさしく悪魔だった。

いつか聞いた話だ。アザナは、親しい恋人か夫婦の間で使う名前
で。

「めでたく夫婦になったのですから、アザナで呼んでください」

そういつて、早々と私のベッドに入ろうとするから慌てて引きと
めた。

「なんでここで寝るんですか!」

「私の部屋には仮眠用のベッドしか無いんですよ。どうしてこのベ
ッドがこんなに広いとっているんですか」

「大人四、五人が遊んでも大丈夫な広さだなとは思っていたけど……！」

「そうですよ。ここが私たちの寝室です」

あんまりにもあんまりな事実をつきつけたかと思うと、私を放って悪魔の旦那さまはベッドの右端に陣取って布団を被ってしまう。サイドテーブルに眼鏡を置いて、にっこり笑うと、

「あなたもおやすみなさい。起こしてなんかあげませんよ」

「話はまだ終わってない……っ！」

慌ててベッドに飛び乗った私は、旦那の肩を揺すりながら名前を呼ぶことを強制され、不承不承呼んでから、話を聞いてもらうことになった。

やっぱりこいつは悪魔だ。

行ってきますと行ってらっしゃい

朝食の席で、私は給仕についてくれていたミセス・アンドロイドに挨拶と一緒に言付けた。

この家中の使用人の人に集まってもらうことにしたのだ。

昨夜、旦那さまにしたお願いの一つだ。いかがわしいことは一切ないベッドでの攻防ですでにぐったりしていたが、約束を取り付けさせた。こっちが苦勞した割にいとも簡単に頷いたので、何だか私が負けたような気分になったのはご愛敬としておく。腹立つから。

朝、ベッドの端っこで寝ていて（結局疲れ果てて同じベッドで寝るはめになった）起きたらすっかり身形を整えた悪魔が椅子に座ってのんびりこちらを眺めながら本を読んでいたのは、寝ぼけた悪夢だと思うことにした。精神衛生上、正しい判断だと思っている。

涼しい顔で「おはようございます」とのたまった三つ編み悪魔を叩きだしておばちゃんチャリムに身を包んで身形を整えたら、時間を計っていたのかというほど直後にミセス・アンドロイドが迎えに来て、旦那さまと二人で使うには広すぎるダイニングまで案内された。ここ数日通ってるから道順は覚えましたがよ、と言ったら、寄り道をされたら食事が冷めると返された。ここに来たばかりの頃、どんなキッチンなのかと探検したのがよろしくなかったらしい。

そんなわけで日の光のいっぱい入るダイニングの細長いダイニングテーブルで上座の旦那さまの脇で卵と菜っ葉の入った朝がゆ（何故か悪魔は和食が好きだ）を食べてお茶を飲んでから、私はミセス・アンドロイドに連れられて、玄関ホールに入る。

この短い時間にどんな手段かミセスは使用人全員を集めてくれたようだ。

ざっと見渡してから、これから何が始まるのかとこちらを眺めている使用人の人たちに向かって私は口を開いた。

「えー、改めましておはようございます。昨日からこの主人の嫁になりました、葉子です」

こんな切り出しを聞いた人たちは誰も彼も訝るような顔になった。まあ当然だ。だって私はここ数日この屋敷に暮らしていたし、彼らも私を奥様になる方として一応扱ってくれていたのだから。

「つきましては、ごあいさつと同時に、みなさんのご希望も伺っておこうかと思ひまして、お忙しいとは思いますが集まっていたきました」

私の投げやりな敬語にもほとんど表情の動かない彼らはなかなか不気味だ。

まあ、慣れたけど。

「これから私がこの御屋敷、引いてはトーレアリング家を切り盛りしていくにあたり、気に入らないことが多々、というかたくさん出てくると思います。そこで、ここで希望退職を募ろうと思ひます」

ここで初めて他の使用人たちから少し離れて私の右脇に控えていたミセス・アンドロイドがちらりとこちらに視線を寄越してきた。私は構わず続ける。

「再就職先はちゃんと用意します。退職金も出します。無理して気に入らない奥様の元で働くことはありません」

「――御言葉ですが」

私の言葉の端を捕まえたのは、案の定ミセス・アンドロイドだった。

「わたくし共、使用人はあなた様のことをまだよく知りません。あなた様もそうでしょ。この短期間でお互いのことを理解し合うことは不可能だと思われます」

「よく知らないのに苦手意識がついてしまう相手っていうのは、よく居ると思いますよ」

「そうであつたとしても」

今度はミセスじゃなかった。発言主を探せば、私より少し年上だろうお姉さんメイドだった。美人だけど気が強そうだ。

「奥様の御言葉は我々、使用人に対しての侮辱とも取られかねないお言葉です」

おお、涼しい顔して結構怒ってるな。見回せば、彼女の周りには同じような顔の人たちが老若男女と揃っている。

「私は旦那さまから好きに過ごしていいと言われています。だから、この規則に縛られるつもりはないし、悪いと思えばそう言います。私にとって、あなた方はただの道具でも物でもなく、一緒に暮らしている家族のようなものになると思います。だから、私が悪いと思えば、あなた方も私に注意して欲しい」

何故か少しひるんだ使用人たちを見回して、私は続けた。

「私はそれを鼻で笑うような人たちとは暮らせない。だから、お互いの気持ちの整理が簡単につくだろう、この初日に希望退職を募ります」

静まり返ってしまった玄関ホールに、私の声が響く。

「期限は三日。直接私に申し出てください。それが嫌なら旦那さまでもいいです。旦那さまにも話は通してあります。別にあとのこと悪いようには絶対しませんから、よく考えて答えを出して下さい」

言い終えると、肩から吐き出すような溜息が出た。人事の仕事の人ってえらいわ。これは肩が凝る。

「――葉子」

測ったようなタイミングで、悪魔の声が玄関ホールに流れ込んできた。

流れるように私の隣に立つと、使用人たちの顔を悪魔はさらりと見渡してから、ミセス・アンドロイドに顔を向ける。

「ロッテンマイヤー。あとは君に任せるよ。他は妻が言ったとおりだ」

「――かしこまりました」

まだ何か言いたそうだったミセスが礼をとる。
だけど、私は別のことに気を取られていた。

まじか。まじでロッテンマイヤーさん！

ここ数日お世話になってたのにまともに名前も覚えてないのかお前と言われたら面目ないとか言いようがないけど、あっけに取られた私の手を取った悪魔が「さあ行きますよ」と言ってくれなきゃ、

目が覚めなかったかもしれない。頭の中じゃ、あの某山の上の空中ブランコ娘が歌っていたから。

ひっそり私たちと一緒に玄関ホールを出てきた無愛想な御者のおじさんが竜車が用意して帰ってくるまで、私のリピートは続いた。何だか車いすから立ちあがってみたい気分だ。

「私は、城での仕事がありますから、その間に行ってみるといいですよ」

まるで子供を遊ばせる親みたいなことを言って、悪魔はゆったりと竜車の座席にもたれかかる。

向かい合わせに座る今日も暗い色のチャリムの悪魔を見ながら、私は眉をひそめた。

「子供の使いみたいな話をしてますが、いいですか？ 本当に」

私の疑問を解消してくれる気はないのか、悪魔はのんびりと腰の煙草入れに手をかける。私が睨むと苦笑しながら箱から手を放したが。

「手続きは済ませてあります。あとはあなたが詰所に行くだけです」

手持無沙汰な顔の三つ編み悪魔は、そのまま車窓の外に視線を向けた。

確かにこの悪魔は怨みはたくさん買ってそうだけど、こいつが死ぬと困る人間もごまん居るんだろう。この仕事の速さから、その一端を垣間見れた気がする。

私が使用人を解雇したいと言った時もだ。彼の決断はものの数秒だった。

私には、三十人から居る使用人を全て把握しきることはできない

と思った。だから、最低限の使用人に出来ないかと言ったのだ。そうしたら、明日にも使用人の前で自分で説明しろと言われた。てっきり悪魔がどうかしてくるものと思っていたから、その時、自分の甘さをつきつけられたような気がした。

これが仕事の出来る奴と出来ない奴の違いか。忌々しい。

「たぶん、私、しばらく城に通うと思います」

「だったら、しばらく私と一緒に出勤ですね」

それは嫌だと思ったのが顔に出ていたらしい。

悪魔は面白がるように笑った。

「面白いことじゃないですよ。全然」

悪魔に頼んだ私のもう一つのお願いは、全く面白いものでも簡単なものでもない。

日が三階建ての建物より高く昇った頃、竜車は要塞城に辿りつき、旦那さまたる悪魔は優雅に箱から降りて私に手を貸してくる。気障な態度だけどこれが習慣らしいので付きあうことにしている。手の甲にキスとかは却下だが。

要塞城は基本的に竜車も入れなければ、出入口も一つしかないの
で、私は旦那さまと一緒に堀にかかる橋をのんびりと渡ることになる。普通の人は魔術でぱっと目的地まで行っちゃうらしい。便利
なもんだ。

私は今日ばかりは旦那さまに案内してもらわなければならないの
で、目的地の入口まで案内してもらった。その薄暗い詰所の前で、
仕事に行くという悪魔はにっこりと笑う。

「行ってきます」

「……行っっちゃい」

不承不承言ったのが気に入らないのか、何故かその場から動かない。

「もう一度」

「は？」

「やり直し」

行っっちゃいを？ どうしろと！

「名前を呼んでくださいと言ったはずですよ。昨夜、可愛く呼んでくれたじゃないですか」

エロい言い方に聞き耳立てるなよ。詰所のお兄さん。見えてるよ！

「いかがわしい言い方しないでくださいこの悪魔」

「悪魔、じゃないでしょう？」

くっ。何なんだこいつは。

私は盛大に舌打ちして、昨夜の根負けした自分を罵った。

「……………行っっちゃい。雪」

小雪、と呼ぶのは非常に癪に障ったので、雪と改名してやったの

だが、

「行ってきます」

どことなく嬉しそうに笑うものだから、気に入らない。ちっ。今度から雪ちゃんと呼んでやる。空中ブランコに乗ってやる！

三つ編みを翻して仕事場に悪魔を見送って、私は詰所の窓口を振り返る。

そこに居た今にも化けて出そうなほど陰気な顔したお兄さんは、だらりとした動きで私の呼びかけに応えた。不気味すぎる。

「面会の申し込みをした者です」

「ああ」と肯いて、痩せて青白いお化け顔のお兄さんは意外なほど手早く書類をめくって言った。

「バーリム死刑囚と、ハイラント受刑囚の面会ですね」

書類を見ながらお兄さんは詰所の隣にある厳つい鉄格子の鍵を開けて、私に入るよう促した。

「独房になっていますが、他の房に迷いこまないように。身の安全は保障しませんよ」

まあ、死刑囚の独房は静かなものですがね、と不気味な声でお兄さんは言い、私の前に立って石造りの冷たい廊下を指す。

牢屋に続くとは思えないほど、明かり取りの窓から日の光が注ぐ廊下は静謐だった。

このお兄さんが掃除でもしているのだろうか。廊下に埃は少なかった。

この先に。

そう思うと、少しだけ足が竦んだ。

悪魔に頼んだ二つのお願い。

それは屋敷の使用人のことと、この面会。こちらはもう少し時間がかかるだろうと思っていたから、翌日にはもう会えると言われて驚いた。

だから、ほとんど心の準備はない。

暗い色の詰襟のお兄さんについて、廊下を歩きながら私は眩暈がしそうだった。

昨夜悪魔に告げられた事実は、私には重い事実だったから。

アンジェさん達を戦場に送り出した十一人の陽気で、優しく、残酷な騎士と、絵の中にでも入っていそうな人形めいた魔術師。

彼らに会いたいと言った私に悪魔は微笑むことなく静かに告げた。

魔術師は決して生きては出られないという北の塔にあり、十一人の騎士のうち、残っているのは一人だけ。

他の騎士達は、すでに処刑された後だった。

時間と石畳

彼らは、抵抗らしい抵抗も見せなかったという。

静かに激昂する王にほとんど言い訳らしい言い訳もせず、粛々とその処罰に身を任せた。

総隊長だったという、行商を装っていたヨルダおじさんだけは自分だけに処罰をと言ったらしけれど、結局聞き入れられず、一番最初に断頭台に上がった。

騎士という人たちにとって、重罪人と同じように首を断たれてしまふことははりつけの刑よりも屈辱的なことらしく、さすがにその刑に隊長が処されたことに他の騎士たちからも怨嗟の声が上がったらしいが、王は聞き入れなかった。

アンジェさん達のような一般市民の女性に、違法ぎりぎりの術をかけて戦場に送り出していたという事実は許しがたい罪だ。

でも、彼らの尊厳まで無視する必要はあったのか。

何も知らない王が。

「時間になったら、迎えに来ます」

不気味な顔のお兄さんはそう言い残して、私を静かな独房の前に残して立ち去って行った。

いいのかな。私一人残して。

遠ざかっていく靴音を聞きながら、ひよろりとした背中を見送って、目の前のライオンの檻のような独房に視線を向けた。

独房は本当に一つの階につきりで、他に牢屋はない。他の牢屋は連なっているそうだが、ここはまた特別なようだ。じめじめはしているけれど、思っていたよりも異臭がするとかそういうものはな

い。鉄格子の向こうはちよつとした部屋のように、粗末なベッドとトイレと、それから、いつか見たような本と書類が所狭しと放り込まれていて、ベッドに寝転がるその人は今にも埋もれそうだ。

「バーリム先生」

人の声が珍しいのか、ベッドの上の人は少しだけ驚いたようだ。肩をわずかに震わせて、のっそりと顔を上げる。

「――……ヨウコ？」

そんなに太っていたわけでもないのにいくらか痩せてしまったのだろうか。

こけた頬には無精ひげが目立って、以前のドエスぷりが抜けてしまっているが、顔立ちはやはり今でも奇麗だった。

「お久しぶりです。先生」

茫然と、まるで幽霊でも見るような眼だったバーリム先生は、やがて本を放り出して鉄格子のところまでやってきた。

「どうして生きて……」

笑っているのか、泣いているのかわからないような顔で唇を震わせる。

いつか、あの屋敷で薬草をドエスたっぷりに教えてくれていたのが嘘のようだ。

「話せば長いんですけど、生きてますよ」

おばちゃんチャリムの両腕を広げて見せると、先生は少しだけ笑ってくれた。

「……変わらない。本当にあなたなのですね。ヨウコ」

「私だけ、死に損っただけです」

誰もかれもが私に生きろと言って、置いていってしまったのだ。たくさんの愛情と、私一人残して。

「アンジェさんや、他の皆が生かしてくれました」

あの悪魔にあの屋敷の騎士たちに会いたいと言ったら、会ってどうするつもりなのかと訊かれた。

罵るつもりなのか、恨み言をいうつもりなのか。

そうだとしたら、やめなさいと言われた。生き残っているのはすでに一人だけ。静かに死なせてやることも、できないほど恨んでいるのかと。

わからなかった。

会ったら自分が何を言うのか分からない。

そう思っていたけれど、

「アンジェ……」

彼女たちのことを私と一緒に覚えているのは、彼らだけなのだ。アンジェさんの名前を本当の意味で哀しく呼べるのは。

「アンジェさんに、屋敷を出る前に言われました。あなた達を恨んではいけないって。先生たちの私たちに対する優しさも、同情も、全部本物だからって」

恨んじやいけない。

そう、彼女はそう言った。

バーリム先生は目を細めて穏やかに微笑んだ。

とても嬉しそうに。

「――楽しかったですか？ あの屋敷での生活は」

「はい」

とても楽しかった。

あの屋敷はどこかおかしくて、歪んでいて、希望も何もなかったけれど、楽しかった。

勉強して、笑い合って、いつでも誰かが微笑んでいた。

あの穏やかな時間は、決して無駄な時間じゃない。

世の中から弾き出されてしまった彼女たちの、最期の穏やかな時間だ。

残酷な、でも優しい時間だった。

「良かった」

バーリム先生は鉄格子に呟いて、目を閉じた。

「良かった。私たちは、彼女たちにそれを聞くことが最期まで出来なかった」

それが、心残りだったのです。

独房の冷たい石畳に差し込む日の光に、先生の眩きが溶けた。
私は先生の顔を見ないように、その光をじっと見つめる。

「よく、生きて……私に会いに来てくれてありがとう。ヨウコ」

私たちはしばらくそのまま、黙って静かな石畳の中で立っていた。

遺伝子と冒険譚

やがて、日の光の傾きが変わる頃には、私は石床の上に座り込んでいた。

バーリム先生は、いつもの調子でやめなさいとたしなめたけれど、別に汚れても構わないおばちゃんチャリムだ。気にしないでもらうことにした。話は長いから足が棒になる。

「――では、あなたはトーレアリング宰相の奥方になったのですか」

看守が一向に様子を見に来ないことをいいことに、私は自分の長い冒険譚（不幸譚とも言う）をかいつまんで聞かせた。聞き終えた先生は呆れ顔で感想を述べてくれる。

「波瀾万丈というのか、あなたはつくづく妙な星の元に生まれてきたようですね」

「――他人に指摘されると実感が湧くのでやめてもらえませんか」

とりあえず、白チャリムの呪いは悪魔と結婚したからチャラになったと思いたい。

「しかし、ラウヘルがあなたとねえ」

こちらも独房の中で床に座り込んだ格好の先生は、呆れたような納得するような顔で立て膝をついた足の上にだらしなく腕を乗せる。

「バーリム先生は、えーと旦那さまとお知り合いなんですか？」

「いつも、旦那さまとは呼んでいないようですね。いつたい何と呼んでいるのか」

なんだなんだ、ドエス協会でもあるのか。あの悪魔が会長で、このバーリム先生が副会長とか。

「私はラウヘルの兄です」

え。

「ええええええええ！」

「そこまで驚かなくてください」

「いえ、納得しました！」

思わずそう返すと、今度はバリーム先生の方が微妙に押し黙ってしまった。なぜ。

少し息をついてから、先生は続けた。

「私の正式な名前はバーリム・らくえん・トーレアリング。騎士団では母方のエヴァ姓を名乗っていましたが、ラウヘルとは腹違いの兄弟ですよ」

腹違いでもドエスの遺伝子はしっかりと受け継がれるらしい。

「私たちの父は艶福家でしてね。愛人の一人に産ませた子が私というわけです。ラウヘルは正妻の子です」

ということとは、

「あなたは私の義理の妹というわけですか」

魔のドエストライアングルに落ちた気分です。

世間って狭い！ もっと広がってもいいと思う。

でも、それって、

「――実の兄を、見捨てたってことなんですか」

私が顔を上げると、先生は困った子供を見るような眼で微笑む。

あの悪魔が、バーリム先生と有害銀髪ハイラントを使って、アンジェさん達を炎の妖精に変えたのだ。

それを、

「私を死罪と決めたのは、陛下です」

目の前が真っ赤になりかけた私の耳に、まるで水を注ぐようにバーリム先生は静かに言った。

「嘘ではありませんよ。目の前でそう告げられたのですから」

王なら、あの暴走は罰してしかるべきだろう。

でも、

「私はね」

先生は私の困惑をなだめるように、ゆっくりと口を開いた。

「愛人の子であつたために、父にはトーレリング家としては扱ってもらえませんでした。ですから、私は騎士団に入った。家督の継げない者は己で身を立てるしかありませんからね」

先生は、反対されたという。

お母さんは愛人の子とはいえ、長男である先生に家督を継がせたかったらしい。

「それを、ラウヘルが説得してくれたのです。……まあ、あの弟のことですから、脅迫まがいのことも交えながらでしょうが」

ああ、まあ。悪魔だし。

妙に納得した私を見つめて、バーリム先生は笑った。

「それまでお互い大して仲が良いわけでもなかったのですがね。あのことには、私は彼にとっても感謝しているのです」

たった一度、それだけのことで命を賭けられるのだろうか。

私の疑問が顔に出ていたのか、先生は笑みを消して少し目を細める。

「――私には、ハイラント少尉からの指示だけで、ラウヘルが関わっていることなど知らされてはいませんでした。ですから、私が隊員の選別対象になったことが、彼が関わっていたのか、預かり知らないことなのか、それは分かりません」

ただ、と先生は呟く。

「身内の鼯鼠目なのかもしれませんが、私がハイラント少尉の選別対象になったことをラウヘルは知らなかったのではないかと思って

います」

まさか。

「……どうして、そう思うんですか？」

あの悪魔の知らないことなどあるのだろうか。

「さあ。蟲肩目ですから」

バーリム先生は応えてくれる気はないらしく、余裕たっぷりに笑うと、

「あれでいて、ラウヘルは不器用な男なんですよ」

「不器用……？」

あれだけ小器用に何でも出来て、不器用。

真の不器用さんに刺されると思うんだけど。

不満顔の私をバーリム先生は小さく笑う。

「口先ばかりで、不器用な男です。———本当に」

あんまり優しく先生が笑うので、私は少しだけ不満を呑みこんだ。
家族、なんだ。

先生と、あの悪魔は。

「兄の私は、ただひたすら愚かな男です。似た者兄弟なのでしょうかね」

自嘲するように口元を歪ませたと思ったら、先生はからかうように私を見た。

「あなたもとんでもない家に嫁にきたものですね。これから大変ですよ」

「結婚して初日に後悔しました」

後悔ってたまには先に立って欲しいものだ。

バーリム先生はよほどおかしかったらしく、ひとしきり笑ったあと、優しいあの笑みを口元に乗せる。

それから、私たちは屋敷であったことをあれやこれやとただ楽しく話した。

もう、すでにこの世にない人たちのことを、自分の記憶に書きつけるように。

気がついたときには、日が傾いていて、恥ずかしいことに私のお腹が鳴った。

そういやお昼御飯食べてない。

私のお腹の虫の叫びが聞こえたのか、バーリム先生は小さく笑いながら、「もう帰りなさい」と告げてきた。

そうさせてもらった方がいいのかもしれない。

悪魔が迎えに来ると言うのと、先生も立ち上がって私を見下ろして微笑んでくる。

「出来の悪い弟をよろしくお願いします」

「――善処します」

「結構」

バーリム先生は満点をとった生徒に向けるように、満足そうに微笑んだ。

「先生」

再び先生を呼んだ私の耳に、今まではことりとしなかった廊下から足音がやってくる。あのお化け看守だろうか。

バーリム先生も気付いたのだろう。そちらに視線を少し向けてから、私を促すように見つめてくる。

「バーリム先生って、アンジェさんのこと好きだったでしょ」

無精ひげに囲まれていても美しい双眸が少しだけ丸くなって、微笑んだ。

「秘密ですよ」

いつもの微笑みが、どこか照れていたような気がして私は満足した。

アンジェさんの言葉を伝えた時に悲しげに微笑んだのだ。

先生は、きっと、アンジェさんを愛していた。

迎えに来たのはやっぱりあの看守で、私と先生が何を話したのかも聞かないで、出入口のある詰所まで連れて戻ってきた。

「あの」

退出のサインをしろと促されてペンを持たされた私が顔を上げると、お化け看守は今にも死にそうな顔で「何ですか」と応えた。

「ここで死んだ人のお墓ってどこにあるんですか？」

私がお会えたのはバーリム先生だけだ。せめてお墓だけでも挨拶に行きたい。

「ありませんよ」

「え？」

「死刑になった罪人には、個人の墓はありません。死体は焼かれてまとめて共同墓に葬られるんです」

そんな。

返す言葉をなくした私に、死人顔の看守は続けた。

「バーリム死刑囚の刑の執行は明日ですから、明日なら供養する神官にくっついていけば、顔ぐらいは見られるんじゃないですか」

誰かを訳もなく罵ってやりたくなった。

誰も、私には教えてくれなかった。

どうして、実の兄を助けないのか。

「――葉子」

詰所に現われた、鉄格子の向こうの似て非なる兄弟を見た途端、叫び出しそうになった。

でも、どうしても言えなかった。

「助けてと、誰も言わなかったから？」

いや、違う。

それでも助けてほしいと、どうしても私が言えないからだ。

どうして、こんなに弱いんだろう。

どうしてこんなに、私は醜いんだろう。

バーリム先生は、私に笑ってくれたのに。

悔しくて、たまらなくて唇を噛んだ。

煮物とおやつ

私は、誰かを容易く憎む。

それは人の精神安定のためのほとんど本能的なものだと思っている。

でも、それが人の死まで関わってくると、ためらってしまうのだ。その憎しみは、本当に正当なものなのか。

心の弱い私は、人の死が重いのだ。

私は結局、夕焼けに追われるように竜車に乗り、目の前に陣取った悪魔と一言も口を利かずに屋敷へと帰った。

それは夕食のときも同じで、肉じゃがによく似た煮物と温かい根菜のスープも口あたりのいい塩だけのかゆもほとんど味わうことなく、悪魔の澄ました顔も見ないで部屋へと戻ることにした。

就寝時間になっても、それは変わらなくて出来るだけ悪魔の顔を見たくないと思っていたら、彼はどういうわけか、月が高くのぼっても寝室にやって来なかった。

ミス・アンドロイド、ロッテンマイヤーさんに訊ねようかと思っただが、馬鹿馬鹿しいと思って就寝準備をしていった彼女をそのまま見送った。

広いベッドに寝転がってみた私は、ぼんやりとしたまま目をつむる。

布団を被ってみても、何だか肌寒い気がした。

冬が近いのかもしれない。

悪魔が言うことには、冬の間はここに居るといふから、あの悪魔の領地は相当寒いのだろう。

つらつらと取り留めないことを考えていた私は、いつの間にか眠

りに落ちて、夢を見た。

あの、屋敷に居た頃の夢。

その日、私はぎっしりと詰まった本棚と標本を片付けさせられていた。

私は決して劣等生でも不良生徒でもなかったが、よく叱られる生徒だったので、この日も先生に罰を言いつけられて、腐界の部屋の整理を申し渡されたのだ。

「そこの標本はこちらへ」

埃の舞う部屋の中で涼しい顔して埃除けの三角巾を顔と頭につけて泥棒のような私に、大量に積まれた標本箱を持ってくるよう申しつけたのは、およそこの部屋の主には似合わない美しいたたずまいの人だ。

「……いい加減にしてくださいよ。バーリム先生」

私は言い付けられた標本の箱を覗き込んで顔をしかめた。以前手伝わされた時には無かった植物標本だ。また増やしたのか。この片付けられない男は。

「自分の部屋がにっちもさっちもいなくなったら、私に罰をくれ

てるような気がするのには気のせいですか」

ちなみに今日の罰の理由は、私が遅刻をしたせいだ。たった五分、雑草拔きに夢中で遅れただけで、この鬼畜教師は私に罰を言い渡した。普段なら、ほとんどの生徒は許されるというのに。

「まさか。私はいつも公平ですよ」

綺麗な顔で埃にまみれている様子もない先生は本棚の本を一冊ずつ分類しながら言った。

嘘だ。

あんたの公平は、他人にとっちゃ不公平だ。

「――また手伝わされているのかい」

埃臭い部屋のドアを開けていたのは、チャリム姿の赤毛の美女。

「この子が素直だからって、ヨウコをこき使うのは止めな。バーリム」

「こき使ってなどいませんよ。アンジェ」

アンジェさんは涼しい顔したバーリム先生に「どうだかね」と苦笑して、私に視線を向けてくる。

「ここの整理はほどほどにして、おやつにしよう。ヨウコ。スクリームがケーキを焼いてくれてね。セレットと待ってるんだよ」

料理長のスクリームさんのケーキとなれば人気が高そうだ。あの人の作るものは何でも美味しい。すぐにでも行きたい。

そう思つてバーリム先生を見上げると、先生は呆れたような顔で笑う。

「行つてもいいですよ」

「え」

「ただし、お茶を飲んだら私にもお茶を持って帰つてらっしゃい。片付けの続きをお願いします」

アンタ、ドエスの星からやってきただろう。

アンジェさんも悪ガキをたしなめるような顔で笑つて、私に「おいで」と声をかけた。

私は標本箱を倒れないように積み直して（貴重だと思われる標本を無造作に積み重ねているのだ。あの先生は）三角巾を外すとやっぱり部屋は埃臭かった。

嫌味の一つも言つてやろうと先生を振り返ると、

「アンジェ」

「片付けはあんた一人で進めておきな。あとでお茶を持ってきてやるから」

呼びとめた先生にアンジェさんはそう言つて笑う。そんな彼女に、先生も穏やかに微笑んだ。

「では、ヨウコ。またあとで」

私はうげつと声を上げながら、何だか温かい家族の中に混じりこんだような心地になった。アンジェさんがお母さんでバーリム先生

がお父さんなら、さながら私は手間のかかる子供というところか。
あの先生がお父さんだったら私の反抗期はひどかったことだろう。

アンジェさんと食堂にやってきたら、意外にもセレットさんとマ
ツチヨな教師のリカインド先生しか居なかった。

「よう、来たな」

リカインド先生は片手を上げて私たちに自分たちの近くの席を勧
める。

「てっきり女の子が群がってると思ったのに」

私の呟きが聞こえたらしく、リカインド先生は「ああ」と笑う。

「俺が昼飯のあと、個人的に頼んだからな。それをセレットに聞か
れたわけだ」

「スクリームはせっかくだから大きなケーキ作ってくれるって言う
んだもの。一人で食えることないでしょう？」

紫髪の妖艶なセレットさんに微笑まれ、リカインド先生は苦笑す
る。

「そろそろヴェイユがキュルが採れるって言ってたね」

茶器でお茶を入れてくれたアンジェさんが、私に湯呑をくれた。

「そう。だから今日はキュルのケーキだよ」

人の顔よりも大きなケーキを持って現れたのは、金髪天使のスクリームさんだった。

スポンジケーキにはたっぷりとしたクリームが乗って、その上にはキュルという果物らしい赤いフルーツが奇麗に並べられている。

「美味しそう！」

私たちが歓声を上げると、天使はそのまま額縁に入れたくなるような顔で微笑む。

「お、やってるな」

そう食堂にやってきたのは、珍しい眼鏡の農夫だ。普段は畑からほとんど出てこないというのに。チャリムの肩に手拭いを乗せた姿はまったく農夫だけど、この人も顔が整っているのでどこか似合わない。

「まだこのキュルは甘くなかっただろう」

ケーキを覗き込んで、ヴェイユさんはしげしげと果物を眺める。

「だから、砂糖と酒とで煮詰めて乗せてみたんだ。食べてみてよ。ヴェイユ」

ヴェイユさんも席についたところでスクリームさんが切り分けてくれたケーキは美味しかった。スポンジは口に入れるとふんわりと溶けて、クリームはじゅわつと舌を滑り、キュルはほんのりとお酒の味と相まって、甘く喉へと消えていく。

ああ、幸せの味。

私の顔がよっぱどやにさがっていたのか、スクリームさんは面白

がるように笑う。

「そんなに美味しそうに食べてくれると、作りがいがあるよ」

「おいおい。このケーキを頼んだのは俺だぞ」

意外にも甘党らしいリカインド先生の抗議に、みんなで笑った。

ひとしきり談笑してケーキがあと一切れになったころ、私はアンジェさんと一緒にあの埃臭い部屋へ戻ることにした。行かないと後でうるさいんだ。森で薬草探してこいと言われる。……ええ。経験談です。

「せんせー。お茶ですよー」

ドアをノックすると簡潔に返事が返ってきたので、遠慮なく開けると理不尽な教師は愛用の椅子に腰かけてのんびりと読書していた。整理はどうしたんだい。

「ああ、ありがとうございます」

「整理はどうしたんだい」

「整理中ですよ。この本の内容を思い出せなくて」

アンジェさんは呆れながらバースリム先生が座っている隣の机の物を脇に寄せて、ケーキと茶器の乗ったお盆を乗せる。

とことんまで、整理の駄目な人らしい。整理と言いながら、ついつい他に目がいつて整理できない人の典型だ。他人のことは言えないけれど。

茶が冷めるというのに、本から顔を上げない先生に、アンジェさんは「まったく」と溜息をつきながら笑った。

その後、先生に茶を飲むようせつついて、整理をしていたら夕食の時間になってしまっていたらしく、私たちを呼びに来たザイラスさんも巻き込んでようやく片付けは終わった。標本箱はひとまとめにされて、本棚は先生の気に入る並びになったようだ。

終わったところには熊顔のザイラスさんも、さすがに無愛想な顔に疲労を滲ませていて、「これだから、こいつの部屋に行くのは嫌なんだ」と子供のような文句を言った。

お菓子と約束

思い出の中の彼らは、いつも笑っている。
悲しい顔は一つも見当たらなかった。

ただ、もうこの思い出を持っているのが、私だけになってしまう
という事実が悲しいだけで。

ふと、苦い香りが鼻をついた。

それで私は、自分が夢から覚めたのだと知った。

香りに揺り起こされるような感覚で目蓋を開けると、月明かりに
照らされた部屋にゆっくりと煙がけぶっていた。

部屋の暗闇にうっすらと溶け込んでいくそれを眺めていた
ら、ベッドの端に腰かけていたらしい人がこちらを向いた。

その人は、細いパイプから口を放して紅い視線をこちらに落とす。

「――起こしてしまいましたか」

静かな声でそう言って、彼はパイプを片手にベッドから立つと、
近くの窓をそっと開けた。

いつもなら文句を言い募る煙の香りがどういうわけか、私の気分
を落ち着かせていて、長い三つ編みの人をぼんやりと眺める。

私の視線に気付いたのか、彼は私の寝ているベッドまで戻り、再
びゆったりと腰かけた。

改めて見ると、彼はいつものチャリム姿のままだ。夕食のあと、
何所かへ行っていたのだろうか。

寝起きのせいかな、煙草の煙のせいかな。ぼんやりとしたままの私を

しばらく眺めていた彼は、らしくない優しい手付きでそっと私の頭を撫でた。冷たい指が私の髪の上を滑り、更に私を落ち着かせていく。

「……夢を見たの」

小さな子供のように脈絡のない言葉を紡いだ私に、彼は静かに「どんな」と尋ねた。

「アンジェさんとセレットさんと、リカインド先生と、ヴェイユさんと、スクリームさんと一緒にケーキを食べた夢」

何も言わないで、私の頭を冷たい手が撫でていく。

「今年初めてのキュルのケーキで、とても美味しかった。甘いものが嫌いなバーリム先生も、スクリームさんの作ったケーキだけは食べるんだって」

「そうですか」と冷たい手は微かに笑ったような気がした。

「バーリム先生の部屋はいつも汚くて、いつも片付けを手伝わされていたの。でも、終わった後は決まってお菓子をくれるの。あの人、私が五歳かそこらの子供だと思っていたんだと思う」

「それは酷いですね」

「でも、くれるお菓子はいつも美味しかった。だから、アンジェさんとセレットさんと、リアミスさんと分けて食べて」

思い出は尽きなかった。

もう、あの人たちは居ないだけで。

あの場所も、もう無いのだろう。

「私、騎竜の世話するの好きだった。それと、ヴェイユさんが大事にしていた畑作業も楽しかった。目をつけられてたけどバーリム先生の授業も面白かったし、ヨアヒム先生のセッションも嫌いじゃなかった。ヨルダおじさんの昔話も面白かったし、セレットさんにリース編み教えてもらうのは苦手だったけど楽しかった。それから」

「葉子」

楽しかったのだ。本当に。
だって、

「家族だったの」

家族みたいだと思っていた。

私は長女で、あまり甘やかされた経験が無かった。両親は人並みに愛情を注いでくれたんだろうけれど、それをありがたく思うには私はまだ幼かったし、私は人並みに長女として育てられていたから、甘やかされるというよりも我慢しなさいと言われる方が多かった。

だから、十一人のお兄さんやお姉さん、三人のお姉さんたち、それからたくさん妹たちに囲まれた生活はまるで大きな家族の中に放り込まれたようで、楽しかったのだ。

私は迷い人だけれど、あの屋敷ではそんな事実はこの次で、決して一人ではなかった。

淋しさなんか感じなかった。

たとえ、歪んだ計画の中の、間違った家族の形であったとしても、私はあの屋敷での生活を忘れるはしない。

一人じゃない。

そう思わせてくれたのだから。

一人となってしまうた私の、確かな心の支えになった。

「葉子」

静かな声が私を撫でた。

「私はそばに居ますから」

嘘だという言葉が、何故か喉元にひっかかる。
代わりに漏れたのは、

「本当？」

冷たい指は髪を滑って、私の頬をゆるやかに撫でる。

「ええ。約束しますよ」

甘やかすような言葉とは違って、声は静かだった。

「私は、あなたのそばに必ず居ます」

離れたたり、置いてきぼりにしたりしない。
そう呟く声が優しく、私は目を閉じた。

まどろみの中で、静かな声が泣きたくなるほど優しい声で言った。

「――兄のために泣いてくれて、ありがとう」

翌朝、曇り空を睨みながら起きた私は、すっかり身形を整えて涼しい顔をした旦那さまに尋ねられた。

「今日は、城へ行きますか？」

「行きます」

今日は、行かなくてはならない。

それが、どんなに苦しくても、私は見届けなくてはならないと思
った。

「あの」

「何ですか？」

着変えるために部屋を追い出しかけた私を振り返って、悪魔はい
つものように飄々と返してくる。

だから、私は次の問いかけをまた腹の中に落さなければならな
かった。

昨日の夜、私の頭を撫で続けてくれたのは、どうしてなのか、

と。

ある兄の死

自分の人生は、振り返ってみてもさほど面白いものではなかった。

名門の貴族だが妾腹に生まれたがために、本妻に疎まれ続け、父と母、他の愛人共々彼女らが続けざまに死んだあともトーレアリング家の妾腹の長男という事実はついて回った。

騎士団に入ったのは、彼女らに対する僅かな反抗に過ぎなかったが、生来の研究好きが邪魔をしてついに出世にも興味を持てなかった。

そんなバーリムをまるで面白がるように付き合ってくれていたのは、二歳下の弟だった。

彼は本妻の息子であり、彼が産まれた時から家督は彼が継ぐことになっていた。母は反対したが、弟は優秀であり、口うるさい親戚連中からも反対意見は全くといっていいほど出ることはなかった。

優秀すぎる弟とは、他の弟妹と同じように、バーリムと特別仲が良かったわけでもない。むしろ、自分たちの母がいがいあっていたので、同じ屋敷に住んでいても顔を合わせることもほとんどない。だから、バーリムが十五の年、屋敷の植物園で初めて声をかけられたことに驚いたものだ。

その頃から、バーリムは植物や野草に興味があり、領地にある草花を探し歩いては標本にしている、本当なら研究所にでも務めることを望んだが、貴族の身ではそれも叶わない。仕方なく騎士団に入隊することを望んだが、母に酷く反対されて手を焼いていた。十五にもなると、親の扱いにも慣れてきたもので、家督を継げと金切り声を上げる母と新しい愛人を作ることに夢中な家のことに興味ない父に、決して頼ってはならないことをよく理解していた。そんなバーリムに、十三になったばかりの弟は、僕に任せてくれませんか

持ちかけてきた。自分が父と、バーリムの母を説得してみせると。確かにバーリムが居なくなれば、弟の家での地位は確かなものとなる。優秀だけではない、弟の狡猾で野心的な面を見た思いになったが、次に弟が言いだしたことに、バーリムはまた驚いた。バーリムが趣味で集めている標本を見せてほしいと言ってきたのだ。

弟は、結局ものの数日で父と母の説得をしてみせると、バーリムの部屋の顔を覗かせるようになった。それは、バーリムが騎士団に入ってからと同じで、時折、宿舎にやってきては、バーリムが溜めこんだ標本を興味深そうに見ては、雑談をしていくようになった。兄弟なのだから、別に雑談をすることに抵抗はないが、不思議でならなかったバーリムに、ある時、弟はぽつりと言った。

「ずっと、こうして話してみたかった」

すでにその狡猾さの片鱗を見せ始めていた弟の言葉と取れば、それはバーリムを利用しようというような言葉だったが、バーリムにはそうは聞こえなかった。

利用するつもりだろうと、ただの駒として扱われようと、彼はやはり弟だったのかと思った。

きつと、弟は本当にバーリムと話してみただけなのだ。

やがて、弟が十五になり、彼が幼い王子の世話係として登城するようになると、バーリムと標本を片手に話す機会は減っていく。

それでも、時々バーリムの宿舎の部屋にやってきては、溜まった標本を眺めていく。

しかし、それもある時期からぱたりと無くなり、弟と顔を合わせたのは、それから実に十年の月日が流れたあとだった。

その間、騎士団の中でもそれなりの地位を築いたバーリムは、ハイルント中尉に特別部隊に組み込まれ、残虐極まりない計画の中で一人の女と出会った。

彼女は路地裏でまるで捨てられた人形のように座り込んでいた。話しかけても生返事しか返ってこない。

それでも根気よく話しかけていると、男に捨てられて行くところもないという。

バーリムは計画のために女を調達してくるよう命令されていた。人を人とも思わない、非道な計画のために。

ここで連れていけば、この憐れな女は一時的には救われるだろうが、そのあとに待っているのは確実な死だ。

だが、バーリムがこの女を連れて帰るわけにもいかない。話を聞きながら、バーリムは女の死んだような碧眼を見て迷った。

「――あんた、騎士かい？」

唐突に、理性を宿した瞳で女が言った。今のバーリムは甲冑も制服も着ていない。だが、女が言うには、腰に剣をぶら下げて真面目くさった男は大抵騎士なのだと笑った。

「だったら、私を殺してとすがりつくわけにはいかないね」

騎士はお堅いのが常だから、と薄汚れた顔に笑みを浮かべる。

自分では、この女を救えないのだろうか。

騎士だ貴族だと言っても、女一人救えない。

それが惨めでならなかった。

「――死ぬ覚悟はあるのか？」

バーリムが問うと、女は顔を上げて目を丸くした。

そして、次に顔を歪めた。

「……死なせてくれるのかい？」

すぎる手が無いのなら、差し出そう。

それが死神の手だと、彼女は知っている。

「私は、バーリム。あなたは？」

そんなお上品に訊かないでくれと彼女は笑って、

「アンジェだよ」

バーリムが彼女を連れ帰ったことで、計画は本格的に動き出すことになった。

女たちに炎の呪いを刻んで、戦争に送り出すという、残酷な計画が。

バーリム達の計画をすべて知っても、微笑んでくれたアンジェの顔がいつまでも忘れられなかった。

非道な計画に中であって、いつしか彼女はバーリムの心の拠り所となっていた。

たとえば、彼女がいつか、戦場で死ぬとしても。

西国と東国の不仲の歴史は長い。だが、互いに国と国の間に設けられている戦場で様子を見る程度で、大則を犯してまで国を侵犯するほどではなかったはずだ。

ハイラント中尉が違法な何かのために炎の呪いを開発したことは明白だったが、バーリム達は国のためだと言われ、それがすでに議

会を通された命令だと知れば、拒むことなど出来はしない。誰もが
おかしいと分かっていた。だが、東国の王は失踪し、この国の実権
を握ろうとしているのは、迷い人の末裔である北城一族。そしてそ
れと対立する先の王の末の息子であるまだ幼い王太子の一派。彼ら
は互いを牽制し合い、その混乱ですでにこの国の政治の根幹は腐敗
してほとんど機能していない。

誰もが、この国は滅びると感じていた。

そんな混沌の皇都を離れたバーリム達は国境にほど近い森に屋敷
を構え、集めてきた娘たちとの静かな生活を始め、炎の妖精を戦場
へ送り続けることになった。

彼女たちとの生活は、静かだった。

バーリムは趣味である研究に時間の許す限り没頭し、いつか夢見
た研究者のように、時折娘たちに教鞭を取りながら過ごした。

他の者たちも、騎士団でも行われている中枢の権力争いに嫌気が
差していたようで、片田舎で静かに過ごす日々を愛し、だが、数か
月単位で行われる娘たちの術の発動に心を重くしていった。

穏やかで残酷な日々が五年続いたある日、それは唐突に終わりを
告げた。

かつては仲間であつた騎士たちが東国王ヘイキリング陛下が戻つ
たと告げ、バーリム達を反逆罪として捕えたのだ。

命令のために、この身を裂くような五年を過ごしたというのに、
反逆だという。

だが、誰も抵抗はしなかった。

これで、もう、女たちを戦場に送りこむようなことをしなくて済
むと、むしろ誰もが息をついた。隊長であつたヨルダは、まだ若い
バーリム達が死ぬことはないと言ってくれたが、仲間の誰もがすで
に罪を償うことを決めていた。

だから、王から直々に死罪を告げられた時にも、誰も抵抗などしなかった。

最も重罪の死刑囚が入れられる独房から、刑場の鐘楼から響く重苦しい鐘の音で、一人、また一人と仲間が死んでいったことを知る。

だが、副隊長だったはずのバーリムの順番はなぜか回ってこない。

すでに聞いた鐘は十を数え、バーリムは最後の一人だと知れたがその理由は分らない。

この独房を管理している看守は優秀らしく、バーリムに情報の一切を与えようとはしなかったのだ。

そのかわり、バーリムが望めばすぐに本は手に入り、読みたい論文は翌日には届けられる。

そんな奇妙な独房生活を送っていたバーリムに、ある日、面会人が来ると珍しく看守が告げてきた。

すぐに弟の顔が浮かんだが、翌日やってきたのは、あの屋敷での生徒であった迷い人の女性だった。

実年齢よりも幼げに見えた彼女は、戦場を生き延びたせいか記憶よりも痩せていた。

話を聞いていくと、彼女はなんと弟の嫁となったらしい。

彼女と時を忘れて話した。

時間の感覚が衰えていたバーリムは、彼女の長い冒険の話に、思いのほか長い時間この独房に居たことを知る。

鐘楼の鐘を聞かなくなって、すでに久しい。

次に断頭台に上るのは自分だというのに、その期日が意図的に延

ばされているような気がしてならなかった。

弟が宰相となったのは、バーリムと顔を合わせた最後の年だ。

彼が執行を引きのばしているのだろうか。

何のために。

彼女が夕暮れ時に帰ったあと、夕食を持ってきた看守が静かに告げた。

刑の執行は明日。

バーリムは静かに頷いた。

気配を感じて視線を上げると、幾らか年を経た弟が立っていた。ランプの明かりだけの薄暗い牢屋の中で鉄格子越しに久しぶりに見た彼は、静かにベッドに持たれかかっているバーリムを見下ろし、「兄さん」

その声が奇妙なほど静かで、バーリムは思わず笑ってしまった。それに釣られるように弟も引き結んでいた口元を緩める。

「相変わらずですね。こんな時にまで読書だなんて」

そう言われても、この本はまだ読みかけだ。あと少しで読み終わる。

そう告げると、弟は頷いて、

「では、読んでしまってください。私はここで待っています」

夜半の牢屋に、しかも死刑を待つ死刑囚の独房にどうやって入ったのか、時折、魔法使いのようなことを平然としてみせる弟は相変わらずであるらしい。

バーリムは遠慮なく残されたページをめくることにした。

やがて、牢の外の月が地平線に沈みかける頃、本を読み終わったバーリムは、以前は嗜んでいなかった煙草をゆったりとくゆらせている弟を見遣る。

「――どうした、ラウヘル」

本を閉じたバーリムをじっと眺めて、弟のラウヘルは珍しいことにひと時押し黙り、ようやく口を開いたかと思えば、その口調は重かった。

「……兄さんに、話しておかなければならないことが、あります」

「お前が、東国と西国の戦争を引き起こしたのか」

バーリムがそう言うと、「葉子ですね」と弟は苦笑する。

それから、「彼女には嫌われていますから」とも溢して、眼鏡の奥の目を細める。

「嫌われていると分かっていて、彼女を迎えたんだらう？」

「はい」

そう簡潔に応えたものの、ラウヘルの表情は歪んだままだった。

「まったく、しょうのない弟だ」

バーリムが笑うと、ラウヘルは訝るように顔を上げた。

「お前は、私がハイラント中尉の部隊に選別されたことを知らなかったんだろう」

ハイラント中尉がバーリムとラウヘルの関係を知っていたなら、恐らく部隊に入れることは無かった。ハイラント中尉は、このバーリムによって才を伸ばされたのだ。恩義ある人の兄弟を殺すような人間ではない。

そして、恐らく世界中を敵に回している、この弟も。

「お前には感謝しているよ。ラウヘル。私の好きな本をここまで知っている人間は他に居ないからね。それに、ヨウコに会わせてくれた」

そう言うと、弟の視線が鋭くなったような気がして、バーリムは笑う。

「彼女は私の最後の生徒でね。話せて良かった。本当に」

「泣いていましたよ。彼女は」

責めるように言うので、バーリムは一層おかしくなって笑った。ヨウコは、本当に不思議な女性だ。

まるで世界に見捨てられたような顔をしていたこの弟に、こんなことを言わせるなんて。

「義妹ともっと話をしてみたかったがね」

弟は眉根を寄せて、目をきつく細めた。

「兄さん、私は――」

「お前のやったことを、私は間違っているとは思わない」

ラウヘルは、時として非情で冷酷でさえあるが、バーリムはそれだけではないことを知っている。彼は、己の欲望のためにその非情さを使うことは一切ない。

バーリムとラウヘルは、成長の過程で弟妹、父母や祖父母にいたるまで、すでに無い。

わずかに残った親戚は年に幾度か顔を合わせる程度で、家族と呼べるのは、兄弟二人となっている。

そんな弟から、兄を奪うというのか。

死にたくない。

だが、それは許されることではない。

罪科は等しく償うべきだ。

それは、この弟も同じく。

「お前は死んではならない。生き延びろ」

弟の罪科は死んだぐらいで償われるものではない。

「生きて、お前の罪科を見つめて、償え」

バーリムを真っ直ぐ見詰めた弟は、深く頷く。

「いくら罪深くても私はいつまでも、お前の味方だ」

「――それは、違いますよ。兄さん」

弟は笑うことに失敗したような顔で苦笑する。

「そばに居ない味方なんて、それは、ただの気安めなんです」

味方はその人のそばに居てこそ。

確かに、その通りだ。

バーリムは何も言わずに頷いた。

「私の標本や本は全部お前に譲ってやる」

バーリムがそう言うのと、弟はようやくいつものように笑った。

「葉子が喜びそうです」

それは良かったと言うと、ラウヘルは「兄さん」ともう一度呼んだ。

「あなたが兄で、良かった」

不器用な弟はそう言って、白み始めた牢屋を去って行った。

何を言っている。

いびつで、不器用な弟め。

己の罪に苛まれ続けた兄を最期まで救ってくれたのは、お前の方だ。

執行をわざと延ばし、彼女に会わせてくれた。

それにどれほど救われたか。

もしも仲間に会うことができたなら、きっと惜し気もなくお前を自慢しただろう。

面白味の欠けた、ただ研究に没頭し続けた人生だったが、幸せな人生だったと思える。

あの狡猾で不器用で、世間では非情と呼ばれる弟が初めて会った少年の時のように声を震わせていた。

こうして話をしてみたかった。

そう言った時のように。

アンジェ。

君は私を憎んでいないと言ってくれた。

ありがとう。

君が最期にそう言った意味を、私は未だに分からずにいた。

きっと、いつのまにか君を愛していたのに。

憎んでいないというのなら、私は最期に願ってもいいだろうか。

あの不器用な弟の、幸せを。

珍獣と客間

カンカンカンという甲高い音に、汚れた囚人服でもいつかとほとんど変わらない顔でその銀髪はこちらに振り向いた。

その人は私のことを見て、目を丸くしたかと思ったがゆっくりとした優雅な動作で腰かけていたベッドから立ち上がってこちらにやってくる。

鉄格子越しに私を見下ろすと、まるで珍獣が芸でもしたかのような顔で笑う。

「お久しぶりですね。ヨウコさん」

有害銀髪はそう言って「どうやって生き残ったんですか」と不躰なことを聞いてくる。

だからアンタは有害銀髪なんだよ。

「何でここに居るのかは聞かないんですか？」

「どうせ陛下と結婚でもしたのでしょう？」

どうしてあのドッペルゲンガーもどきと結婚しなくちゃならない。

「ぶっぶー。はずれー。私はトーレアリングていう悪魔と結婚しましたー」

今度こそ有害銀髪は目を剥いて「どうして！」と叫んだ。こればかりは答えられない。それは私が聞きたいからだ。

「そんなことはあの悪魔に聞いて下さい」

そう言うのと、有害銀髪は柳眉をひそめて私を睨む。おお、怖い。

「私だって、別に来たくて来たんじゃないんですよ。ただ、あなたの師匠に頼まれてですね」

「まさか、あの飲んだくれにも会ったのですか」

飲んだくれって。アンタの師匠さまでしょうが。バルガーさんは。確かにお酒は強かったけれど。

「北国に行ったときに助けられたんですよ。まあ、結局あの悪魔に捕まって嫁になりましたが」

「――あなたの論法は時々、私の理解を超えます」

「だーかーらー、私じゃなくて、あの悪魔に言ってください」

何も私が結婚なんていう強引な手段思いついたわけじゃない。承諾しただけだ。

あの人呼びましようかって言ったら、有害銀髪は黙りこんでしまった。

まあ当然か。あいつのせいでこんな牢屋に入れられているんだから。

どうやら、この銀髪は相当お高い御身分だそうで、死刑にはならないらしいけれど。

妾腹だつてことで死刑になっちゃうってどういう理屈なんだろう。アホらしい。

「バーリム先生が、今日、亡くなりました」

黙り込んだ銀髪にそう言った。

今日はこれを言いに来た。

こいつは外からの情報を全く聞かされていないと、あの悪魔は言っていたから。

「他の騎士の人たちはもう、全員亡くなっています」

静かに言った私に視線を落として、有害銀髪は何か言おうと口を開いたが、やがて口を閉じた。

「私は、明日にでもお墓参りに行こうと思います」

刑の執行のあと、先生は仲間と一緒に共同墓に入るというから、花でも持って行くつもりだ。明日。

「――今日は行かないのですか」

私は有害銀髪を見つめ、首を横に振る。

「昨日、話したからいいんです」

ちゃんと笑顔が記憶に残っている。私には、それだけでいい。

ゴーン。

ゴーン。

遠くから鐘が聞こえる。

この鐘が、執行を告げる音だとあの悪魔が教えてくれた。

要塞城の敷地の最も北にあるこの塔にも聞こえるのなら、きっと、この銀髪も知っているのだろう。

どうして、死ななくちゃならない人なんかいるんだろう。
どうして、私の知っている人がその人だったんだろう。

私は自分でも理屈の合わないと分かっていることを思って、目を閉じた。

ゴーン。
ゴーン。

鐘が終わったら。

ゴーン。
ゴーン。

終わってしまったら。

ゴーン。
ゴーン。

先生とは、もう二度と話せない。

鐘の余韻を感じながら、目の奥が熱くなるのを感じて目蓋をきつく閉じた。

泣くな。

私は、泣いちゃいけない。

私は被害者で、たった一人の生き残りだ。

「ヨウコさん」

呼ぶな。

我慢中なんだから。

「私を憎んでいいですよ」

思わず目を開いた。

そうしたら、我慢していた何かが零れ落ちていく。

悔しくなって、手に持っていたものを鉄格子に投げつけた。

カン！ と甲高い音と一緒に銀髪が目を見開くのが見えた。

「どうして憎まなくちゃならないの！」

誰もかれも、甘えるな。

「憎めとか、怒れとか、そういうのはめっちゃくちゃ疲れるんだからね！」

私は確かに誰かを憎んでいいのかもしれない。でもそれは、そういうのは、

「もう、そういうのはうんざりなのよ！ 憎んだり、憎まれたり、怒られるのも、怒るのもうんざり！ 憎まれたきや、勝手に憎まれてると思ってなさいよ！」

罵倒されたいドエムな連中のことなんか知ったこっちゃない。

「……もう、誰も憎みたくなんかない」

誰もが笑って暮らせるなんて、とんだ夢物語だろう。
でも、それを願っちゃいけないなんて法律はない。
みんな勝手だ。勝手すぎる。

私が、憎めと言われてどれだけ傷ついているのか、知らないのだ。

「――あなたは、本当にお人好しですね」

「何よ！」

「ほら、また怒った」

有害銀髪の子供のような台詞に肩の力が抜けた。馬鹿らしい。

銀髪は私の足元にしゃがむと鉄格子越しに、私が投げた棒きれを
拾い上げる。

「手紙ですね。誰から預かったのですか。罰せられますよ」

「……だったら、私の旦那さまが罪を被るべきね」

この有害銀髪に会いに行くと言ったら、竜車で渡されたのだ。ないがしろにするつもりはなかったが、銀髪が「少し歪んでいますね」と言うので、ぐっと口を噤んだ。

そんな私を見上げて、再び立ちあがった銀髪は鉄の棒きれを摘み上げて棒の端をカチリと回す。すると、まるでホログラムのように空中に文面が浮かび上がる。四国回った私でも見たことのない文字だったけれど、銀髪は一通り読んだのか私に棒きれを返してきた。受け取った棒を手の平で転がしてみても、どういう仕組みなのか考えただけで、どうせ北国か南国のものだろうから、仕組みが一朝一夕で分かるわけもないと早々に諦めた。

「それで、私の師のバルガーからは何と？」

手紙の内容を言うつもりはないのか、銀髪は私を見下ろして常の高慢さを取り戻していた。まあ、手紙の内容なんてろくでもない内容だろうから知りたくもないけれど。

「厄介なことに関わっているだろうから、元気かどうか教えてくれる。まあ元気そうで良かったです」

私の言葉に肩を竦めると、犬猫を追い払うように有害銀髪は手を振った。

「私は元気でやっているとお伝えておいてください。あなたの心配なさるようなことは何もないと」

牢屋に入れられてそう言える元気があるんだから、まあ心配は無いんだろう。

「じゃ、帰ります」

「ええ、お元気で」

突き放した言い方は、まるで二度と来ないでくれと言うようだ。

「また来ます」

そう言ったら、有害銀髪の優雅な鉄仮面が微妙に歪む。これはいい。

また来ることにしよう。

新たな嫌がらせを思いついた私は、それだけに満足して塔の階段を降りた。

完全に塔の階段を降りてから、あの有害銀髪にからかわれて少しだけ気分が浮上していたのに気付いて嫌な気分になったけれど。

だって、そんなこと考えたくない。

あの銀髪が、私をどうにか元気づけようとしたなんて。

その日は悪魔を待たずに屋敷に帰ることにした。

でも、それが今日に限ってはいけなかったと、自分を恨んだのは屋敷に着いて無愛想な御者の操る竜車から飛び降りてからだ。

屋敷の前には見慣れない馬車が止まっていて、嫌な予感がひしひしとしつつ、使用人を待たずに屋敷に入ると、ミセス・アンドロイドが珍しく困った顔を私に向けてきた。

なんだなんだ。何事だ。

今、あの悪魔は城で仕事をしているのでいないから、面倒事の責任は必然的に私がとることになる。

面倒臭いことじゃなきゃいいんだけど、と思いながら「こちらでお客さまがお待ちです」といつまでたっても困り顔のミセス・アンドロイドに客間に通されて、ようやく嫌な予感の元を見つけた。

「やあ、久しぶりだね。ヨウコ」

黄緑頭に面頬を縦に走る入れ墨の紳士。

「伯爵！」

「お父様と呼ばないか。我が娘」

西国の辺境伯爵、メフィステニス伯爵は、他人の屋敷なのにまるで自分の屋敷に招き入れるように両腕を広げて見せた。

傍らにはいつものように、にっこり微笑む金髪メイドのガリアさん。

ああ、まずい。

私は思わず懐かしい顔を見て後ずさった。

「どうしたんだ。ヨウコ。私の顔を見て後ずさるなんて」

わざとらしい伯爵の笑顔が今日は何とも恐ろしい。

「ああ」と伯爵は納得したように頷いて、私がじりじり逃げている理由を言い当ててくれた。

「私に内緒で結婚を決めたことを、悔やんでいるのだね」

そう。

そうなのだ。私はこのお世話になった伯爵になんの一報も入れないまま結婚してしまった。一時の激情に流されたと言えば劇的だが、要はキレて頷いただけ。そうは言っても後の祭りだ。

連絡入れようかどうしようか迷ってる間にあっちから来ちゃったよ！

私は泣きそうになりながら、心の中で叫んだ。

バーリム先生、ごめんなさい。

今日はあなたの喪に服そうかと思ってたけど、そんなシリアス展開、誰も待っちゃくれなかった。

人間、生きてる人の方が恐ろしい。

ココナッツとパンナコッタ

「まったく、悲しいことだよ。自分の娘に忘れられているなんて」

何所かアジア風味な東国の屋敷の中にあつて、三つ揃えのフロックコート姿の優雅な紳士はその容姿に似合いの仕草で手に取ったティーカップのお茶をすすった。何だか浮いてる。

まだ養子になることも肯いてないうちから砂漠に一人放り出された私は悲しくないとでもいうのだろうか。

生きてるから、まあいいけど。

でも、そういえば伯爵とこうして目の前で話すのは久し振りだ。

最後に顔を見たのは砂漠に居る時だったから、三か月は経つのかな。西国語で話すのも久しぶりだった。

客間のソファを、お客さんである伯爵に勧められるまま伯爵はす向かいに腰かけて、控えていたミセス・アンドロイドにお茶を入れてもらった私は、ようやく自分も目の前のお茶を飲んだ。帰ってきたばかりだし、ここのお茶は緑茶に似ていて好きだ。お茶受けのココナッツによく似た木の実をすりおろして団子にして揚げたお菓子は、悪魔の家で出てくるお菓子の中で私の一番のお気に入りになっていた。乳白色の丸い団子は口に入れるとほのかに甘くて口の中で雪みたいに溶ける。

「――君の順応能力の高さは一目置いていたがね」

お菓子を食べていた私を見ながら、伯爵はのんびりと籐に似た蔓で編まれた造りのソファにぎしりと凭れかかる。

「楽しくやっているようで、安心したよ」

楽しい、のだろうか。

よく分からない。

そう答えたら、君らしいねと笑われた。

私らしい？

何だか中学生みたいな質問をしたくなる。

私らしいって何だ。

「……今日、知り合いの人が死刑になりました」

お葬式なんかから帰ってきたらだと塩を撒いたりするけど、そんなことをする気にもならなかった。

お化けの類は総じて苦手だけれど、バーリム先生のお化けなら怖くない気がする。

伯爵は「そうか」とだけ呟いて、カップをテーブルに置く。

それ以上は何も言わないで、ソファに深くもたれかかったまま手を組んで目をつむってしまった。

私はそんな伯爵を見ていたけれど、何となく客間の大きく取られた窓に目をやった。

この客間は何といっても目当たりがいい。そこから見えるのは、何の面白味もないサバナ庭なのだが、それも目に慣れてくると寒々と広がっていつそ清々しく見えるから変なものだ。この東国の建物様式と西国の建物はよく似ているけれど、少し違う。西国は、バロックとかそういう様式だけど、東国の建物はいうなれば、明治時代の和洋折衷の洋館といった風情がある。だから、装飾も東国のものは派手だけど何所か懐かしい細かい装飾が多かった。西国は総じて

明るい木目の木の家具が中心だったけれど、東国では椅子にしたって、木というよりも籐だったりするし、高そうな家具は黒壇みたいな深い色合いのものだったりする。

「――一度、私たちと一緒に西国に帰るかね？」

どれぐらいそうしてたのだろうか。

黙りこんでいたはずの伯爵がおもむろに口を開いた。

「君は、東国にしがらみが多い。ここで心やすらかに過ごせるとは思えない」

指摘されて、ああそうかと思う。

確かに、短い期間しか居なかったけれど、この東国には私のしがらみが多い。

楽しい思い出半分と、辛い思い出と悲しい思い出のほとんどがここにある。

今度は私が黙りこんでしまうと、伯爵は小さく息をついた。

「……私が、偉そうに言えることではないのだがね」

黙って伯爵の顔を見ると、彼は苦笑した。

「結局、私は、彼に君を預けることに頷いたのだからね」

彼、とここで挙がるのなら、

「――伯爵は、私がああ、トーレアリング宰相と結婚することを知っていたんですか？」

私の問いかけに伯爵は肯く。

「君を妻に迎えたいと養い親として承諾を求められた」

どこまで根回しすれば気が済むんだ。あの悪魔は。
でも私の呆れ顔に伯爵は顔をしかめる。

「あの時、誰も君を守ることはできなかった。――我々の敵であつたあの男以外」

敵、と聞いて私は目を瞬かせた。
何の事だ。あいつはまた何をやらかした。
頭を抱えたくなった。

伯爵は飄々としていて、誇り高い人だ。矜持を食べて生きてるような人に敵と言わせるなんて、何をした。

「えっと……あの、あの悪魔が何をしたか知らないんですが、一応、妻として謝罪いたします……」

目を泳がせながらの謝罪だったが、伯爵の片眼鏡で目を丸くしていた。え、あの不肖の悪魔のために土下座でもしろと。そこまで義理はないよ。

ヨウコと呼ばれて頬が引き攣った。勘弁してやってください。

「君は、あの男が憎くないのかね？」

「大嫌いです」

おっといけない。思わず本音が。

伯爵が呆れたようなお顔だ。えええ。何かまずいこと言った？

「君を辛い目に遭わせたのは、ほとんどがあの男の、ラウヘル・小雪・トーレアリングが元凶だよ」

ええ。だから、

「嫌いですってば。人を小馬鹿にしたみたいな態度も、あいつの吸ってる煙草も嫌いです」

ついでに言うなら、女性の萌ポイントも違うから根本的に性に合わない。ここまで趣味が違うんだし、好きに過ごしていいと言ったんだから、放っておいてくれてもいいはずなのに、あの悪魔は私にかまって、約束までする。

「……憎いと言ったら、会ったら罵倒したくなるのは、実は西国の王様なんです」

私は頭のいい方ではないので、裏で糸を引いてたのが全部あいっだと言われても、あまりピンと来ないのだ。

「私の家族を最期に斬り裂いたのは、アウトロッソ陛下です」

もう妖精として意識のなかったアンジェさんだったけれど、きっと彼女は確かに私を守りに来てくれた。その彼女を切り裂いた。

「あの悪魔が引き起こしたことが原因で、私は大変な目に遭わされたみたいです、いつだって殺そうとしていたと、初めて会った時に言われました」

それがいつだったかなんて知らない。でも、

「東国に連れてこられた時に、私を一番に疑ったのは北城宰相でした。他の人たちはみんな彼の言いなりで、命令一つで殺されるだろうってことは分かりました」

そもそも、あの社長の車に轢かれそうになって、こちらの世界に落されたのだ。私にしてみたら、社長が元凶と言ってもいい。

「誘拐されて殺されそうになりましたし、東国王陛下を狙った刺客に殺されそうにもなりました。陛下が私を魔女の所に置いていったから、私は戦場でも殺されそうになりました」

こう並べてみると、きつとあの悪魔は初めて会った時の言葉どおり、私をずっと殺そうとしていたのだと思った。

「砂漠で死にそうにもなりましたし、北国でも殺されそうになりました」

砂漠で置いてきぼりにされるわ、変態魔術師にホルマリン漬けにされそうになるわ。

……どうしよう。何だか目に汗が。

でも、

「変なんです」

並べてみればみるほど、何だかおかしい。

あの悪魔のことだ。

いつだって、本気で私を殺そうとすれば出来たはずなのだ。

それが、私は五体満足で犯されもせずにこうして東国で妻なんかやってる。

「あの悪魔が本気なら、私はすぐにでも殺されているか、元の世界に帰っていたはずなんです」

私との約束なんて、破ろうと思えばいつだって破れる。

そばに居ると約束した。

そんな、子供との約束みたいなことを、守るなんて思えない。

私を懐柔したところで、何が変わるわけでもない。

私は、何もできない皆の厄介者で、誰かにいつだって守ってもらわなくちゃ生きていられない面倒な人間だ。世間知らずだし、不愉快だけどお人好しだってことも何となく分かっている。私を騙すなんて容易いことだろう。

だから、

「あの悪魔が、私を騙したりする理由が見当たらないんです」

計画に邪魔なら、私を自分の側に置く理由ではないはずだ。

思い返せば思い返すほど、私の旅は不可解だ。

何だか、うまく進み過ぎているような。

でも、その理由を知ったら、私はお腹の中に落とした幾つかの言葉に名前をつけなくてはならないような気がした。

頭が混乱してきた私をじっと見ていた伯爵は、長く溜息をついた。

やはり君はお人好しだ。

そう言って口の端を上げる。

「悪魔のお守りに飽きたら、いつでも帰ってきて良いよ」

実家に帰っていいのは、結婚何日目からなんだろう。

夕方の、いつもより早い時間にお帰りになった悪魔こと旦那さまは、突然の舅の訪問にもまったく顔色を変えることなく歓迎の言葉を述べた。

そういうソツのなさはいったいいつから身に付くものなのだろうか。生まれつきだったら、私はもう手遅れだ。

夕食はいつもよりも少し豪華で、ちよっといとお酒も出た。鳥の丸焼きに始まり、色鮮やかなサラダや盛り合わせが長いテーブルに並んで、いつもなら伯爵の脇に控えているガリアさんも今日はお客様ということで私の隣に並んで座ってくれた。美人は食べ方もお綺麗です。久しぶりの美人の隣は癒されます。

伯爵は西国とは違う料理を如才なく屋敷の主人に褒め言葉を述べて、悪魔が帰ってくるまでに聞いた敵対関係とかいうあんまり和やかでない話とは裏腹に、少なくとも私の目には始終和やかに進んだ。お酒も、私の好きなピンクのお酒から青や緑や色とりどりのお酒が勧められた。飲んだことないお酒もあったから、私はついつい端から順にチャンポンしてしまった。

だから、いつもだったらふわふわするぐらいの頭が今日はぐらぐらする。いかん。お客様が居るというのに飲み過ぎた。

「ヨウコさま、今日は早めに休まれては？」

ガリアさんにそんなお気づかいまでされる始末。

結局私は、パンナコッタに良く似たデザートを食べ終わってから席を立たせてもらうことになった。……すみません。調子に乗りました。

寝支度もそこそこに、私はミセス・アンドロイドに促されるままベッドに寝転がって重い目蓋を閉じた。

夢は、見なかった。

夜更けのパーティ

「さて」

夕食の片づけを言いつけて、先に辞したヨウコを除いた三人はダイニングの隣に設けられているシガールームに通された。深い緑で統一された応接セットが一基だけ置かれたその部屋は広くも狭くもなかったが、この三人で入ると息苦しくもある。

葉巻でも、と勧められたが、コロラル・ド・メフィステニスとはほどまでの和やかさをどこかに忘れたような冷たさで断った。

その変化にすぐに気付いた目の前の男は、口の端を上げただけで何も言わずに自分の懷から愛用のパイプを取り出すと刻み煙草を詰める。

「――随分と、使用人が少ないようだが？」

流れるようにパイプに火を入れる男を眺めながら、コロラルは肘掛け椅子に腰かけた。その脇にガリアが影のように控えて、じつと赤銅色の髪 of 男を見据えている。

この男、ラウヘル・小雪・トーレリングは、ほとんど誰にも知られることなく、ものの数日でコロラルの養い子であるヨウコの夫に納まった。あまりの手際の良さに、コロラルが部下から報告を受けたときは、すでに彼女たちの結婚式が終わったあとだった。

ラウヘルは煙を吐きだしたあと、ゆっくりと再び吸いこんでようやく二人に目を向ける。

「これから更に減る予定なのですよ」

「何？」

小さいとはいえ、数十の部屋があると思しき屋敷と森まで擁する敷地を管理するのに、コローラルが見た使用人はたった数人。ガリアの見た限りでは三十人にも満たないという。

この屋敷とほぼ規模は同じだろう、コローラル自身の屋敷の使用人、七十人余りでも少ないと思われるというのに、だ。

「妻の希望でしてね。明日には希望退職者がここを出ていくことになるっています」

大人数を自分ですべて把握できないからという理由だという。退職後の仕事の斡旋などはしっかりと行おうというところはあの娘らしいが。

「……貴族の妻になるということは、そういう人心掌握も出来てしかるべきだ。それを教えてやらなかったのかね？」

貴族に嫁入するということは、その家の女主人となるということだ。だから、普通は姑が厳しく嫁を指導するものだし、使用人の扱いにも慣れなくてはならない。

ヨウコは頭のいい娘ではあるが、貴族の生活というものに馴染んではない。

コローラルの屋敷で好きに過ごさせていたのは、彼女の心の安定がまず不可欠だと判断したからだった。

「私にとっても都合が良かったのですよ」

紫煙を吐きだしながら、不本意ながらコローラルの義理の息子となった男はパイプを手元に戻したかと思うと、備え付けの棚に並んだ酒瓶の一つを取って栓を開けると、掃除された絨毯の上に垂らす。

すると、絨毯から酒ではありえない不自然な煙が上がった。

察したガリアが急いで手近な窓を開ける。

「毒か」

椅子に腰かけたまま、無残に溶けた絨毯をコロラルは見つめ、そして酒瓶を逆さにしたまま肩を竦めた男を見遣る。

「幾ら使用人を選別しようが、こういう輩が紛れ込むものでしてね」

ほとんどが小遣い稼ぎ程度の意識なのでしょうが、と笑うラウヘルは最後の一滴まで酒だったものを流し落としてすっかり中身を絨毯に空けられた酒瓶だけを棚に再び戻した。

「使用人の数が減れば対処はしやすい。持つべきものは、勘のいい妻というわけでしょうかね」

いつも同じはずの笑顔が、どこか朗らかにも見えて、コロラルは意外な心持ちになった。この男は、はなからヨウコを妻に迎えようとしていたわけではなかったはずだ。

「――やはり、我が家へ連れ帰るべきでは」

珍しく、使用人の禁を破ったガリアは、探るように赤銅色の悪魔を睨みつけている。それでも、コロラルが白手袋の手を振ると、静かに影へと戻った。

そのやりとりを興味深そうに見ていたラウヘルは、パイプの煙を燻らせて笑っただけだった。

「君が狙われているだけならまだしも、ヨウコまで狙われるようなら、私たちは今すぐにも彼女を連れて帰るが？」

「まあ、確かに。七十七師団の方々が睨みを利かせていれば、よほどの馬鹿で無い限り葉子に手をかけようとは思わないでしょうが」

刻み煙草の灰を取りだした灰皿に落として、ラウヘルは最後の煙を吐きだす。

「彼女と約束をしたのですよ」

「約束？」

「彼女の望みは何でも叶え、何物からも守り、ずっとそばに居ると」

特別大きな声でもないラウヘルの声が、部屋に静かに残った。

まるで神に誓いを立てるような声に、コロールは黙って男を見据える。

「ヨウコから奪うばかりの君に、何が出来るとも思えないがね」

コロールの言葉に、男は少しだけ目を伏せた。それは一瞬だったが、ラウヘルの、いつもの人を食ったような風いだ。雰囲気は何故か揺らいで、苛立ったように見えた。

「――あの娘が、本当に強いばかりの娘だとでも？」

「何？」

「葉子という娘から、何かが奪えるとしても？」

はつきりとした強い口調に、コロールは娘が自分の屋敷に居た頃の部下の報告を思い出す。

ヨウコは、記憶を取り戻したものの、時折、意識を無くすことがあった。

本人は意識をしていない、もしくは覚えてもいないようであるし、ほんの一瞬、物を取り落したり、青い顔で立ちつくしていたりするだけで、生活に支障をきたすほどのものではなかったが、それが戦場での経験の後遺症だということはすぐに知れた。

ごく普通の娘なのだ。

特別な訓練を受けたわけでもない、それほど強い意思を持つわけでもない、ごく平凡な。

「私は、彼女から何か欲しいわけではありませんよ」

静かな吐露は、目の前のラウヘルという男のごくごく珍しい本音のようにも取れて、コロールは思わず目を瞬かせた。

まるで、ずっと彼女のことを知っているような。

変なんです、と娘は言った。うまく旅が進み過ぎたのではないかと。彼女の旅路は簡単なものではなかったはずだ。それでも、怪我ひとつせずに東国までたどり着いたのは、おかしい、と。

「伯爵がわざわざおいでくださったのは、こちらとしても有難いことでした。あなたの正式なサインをいただけませんか」

コロールが深い思索に耽るのを拒むように差しだされたのは、東国の婚姻証明書だった。西国でもそうだが、東国でも親、もしくは

は後見人の直筆のサインが必要だ。

テーブルの上に置かれた証明書に、娘の文字を見つけてコロラルは理由のない安堵を覚えた。これが、思索の答えようにも思えた。何の変哲もなく、愛情も、恋情も、憎悪や嫌悪さえもなく、唐突に決まっただけの、誰も反対できなかっただけの結婚の証明書が、どこか温かに見えたのだ。

たかが紙一枚の契約書が人の情すら持つとしたら、それは何と不思議なことか。

コロラルを、非難するような視線でガリアが見つめている。

この証明書にコロラルがサインをしなければ、いくら式を挙げなくても書類上では正式に結婚したことにはならない。

世界の情勢を好き勝手に弄ぶような男は、娘婿には決して向かない。

それでも、思索の答えはコロラルを裏切らないような気がした。

コロラルが懷から万年筆を取り出し、ガリアに魔術印を出すように言うと、彼女は驚いたような顔をした。次いで、咎めるような視線がコロラルを追いかけてくるが、それに反論する理由を持たなかったので、逸らすことであえて黙殺する。

ヨウコは幸せになるだろうか。

コロラルは彼女に選択肢を与えた。それが養い親としての領分だと思っていたし、今でもその考えは変わらない。メフィステニス家を継がせようとしたことも嘘でも酔狂でもない。それには、彼女には過酷な試験が必要であったし、それが彼女のためでもあった。

だが、それが本当に、彼女にとって良いことだったのかと問われれば、コロラルは疑問を持つ。公的には出せない私情であるので誰にも話すことなどないが、伯爵として、養い親としての言動が、娘にとって本当に幸せだったのか。いつも疑問を抱いてきた。

守ってやることもできる。生活も、少なくとも貴族としての贅沢はさせてやれる。

だが、それだけで本当に良かったのか。

サインをし終えたタイル張りの万年筆を見つめて、コロラールは片眼鏡の奥の目を細める。

「良い万年筆ですね」

いつの間にか書面を受け取ったラウヘルが万年筆に目を止めたようだった。

「――娘が、ヨウコが、旅先から領地に送ってくれたものだよ」

北国に身一つで飛ばされた彼女が、南国からどうしてこの万年筆を送ってこられたのかは分からない。あのときは、コロラールさえもこのラウヘルという男の後手に回ってしまい、部下が南国に入り込んだときには、すでに彼女の痕跡は何者かに消されたあとだった。次に部下が彼女の姿を報告してきたのは、東国に単独で辿りついた後のこと。その頃には、彼女は愛用していたはずの旅行鞆を無くし、路銀を稼ぎながらこの東国の王都に辿りついたという。呆れた娘だ。自分の明日さえ分からないという時に、助けて欲しいというわけでもなく、旅先の土産を実家に送るだけで。

ふと、視線を上げると娘の夫となった男がじっとコロラールの万年筆を見つめている。

「……これも、娘もくれてはやらないよ」

娘は貸し出すだけだと言うと、ラウヘルは何も答えず証明書を丁

寧に丸めて懷にしまいこむ。その姿は悪行を重ねてきた冷酷な悪魔には見えない。

ふいに、子供の仕草を思い出す。

まさか、拗ねているのか。

年の近い義理の息子を見つめると、初めて目にする奇妙な生き物に見えた。

周囲は敵ばかりのこの男の隣に居る娘は、不満を言いながら何故か笑っているように思えるから不思議でならない。

決して言っただんやらないが。

コロラルは含み笑いを口元に留めて、娘のくれた万年筆を懷に仕舞った。

墓地と馬鹿

翌朝、悪魔の旦那さまに寝顔を眺められたことを散々愚痴り倒して、朝食を終えたあと、伯爵は領地にお帰りになると言ってきた。

「そんな、もっとゆっくりしていてもいいじゃないですか」

東国の観光でも。私もしたことないんですが。

そういう私に伯爵は昨日とは違うスリーピースのフロックコート姿で優雅に笑う。

「私もガリアも西国の立て直しに忙しくてね。名残惜しいが、今度は手土産でも持って遊びにくるよ」

そうそう、と伯爵は慌ただしく身支度を整えて玄関ホールまで歩を進めながら、自分の懐から見憶えのある万年筆を取り出した。

「あ！」

「そうだよ。君の送ってくれた万年筆だ。良いものをありがとう」

なけなしのお金で送った甲斐があるというものだ。

「お茶も美味しゅうございましたわ。使用人にはもったいないお気づかい、ありがとうございます」

ガリアさん達、皆で飲んでくれたらしい。実はけっこう大量だったのです。

「あのグラスは旦那さまのお気に入りなのですよ」

と、教えてくれるので伯爵を見遣ると、伯爵は珍しく少し照れたように笑って、

「娘からの贈り物は、存外嬉しいものなのだよ」

嬉しいことを言ってくれた。

カルチェも耳飾りを喜んでくれたようで、私の連絡先が固定されたから近々知らせてくれると伯爵は言ってくれた。そうか。カルチェも気に入ってくれたのか。砂漠の国のお姫様に気に入ってもらえるか分からなかったけれど、あの細かい細工のついたイヤリングは彼女にぴったりだと思ったんだ。

南国から東国に行く途中、旅先で手に入れたほとんどの物は成り行きで捨ててきてしまったから、先に送っておいて本当に良かった。これはクルピエに感謝だな。

伯爵は自前の馬車でやってきたらしく、すでに屋敷の玄関に横づけされていた馬車に乗り、御者は何とガリアさんだった。他の皆は本当に忙しいらしい。

「忙しいのに、会いに来てくださってありがとうございます」

「元気で。いつでも帰っておいで」

そう言って伯爵は私の頭を撫でて、馬車に乗り込んだ。

「伯爵も、ガリアさんもお気をつけて！」

私は二人の馬車が、屋敷を覆う森に見えなくなるまで手を振った。

ほとんど裏切ったような私を、まだ家族と見てくれる人がいる。それだけが、嬉しかった。

続けて、旦那さまが城に行くというので、私も便乗することにする。私用に童車を出してくれるとも言うが、不愉快だが相乗りする方が効率がいいから仕方ない。

いつものように、ロッテンマイヤーさんにだけ見送られて童車に乗り込む。

私が希望退職宣言してから、あまり他の使用人さん達と顔を合わさなくなっていた。まあ、気持ちは分からんでもない。リストラを狙っている人事担当の顔は、なるべく見たくないものだ。

「今日は、どちらへ？」

伯爵と私の会話にまるで透明人間になったかのように割りこんでもこなかった悪魔が、童車の箱に揺られながら、ようやく口を開いた。あんまり影薄くしてるから誰かと思ったよ。

「今日は、共同墓に行きます」

皆に会いに行くには花束一つ持っていないけど。だって、悪魔の庭には色気のある花一本生えていない。悪魔に頼むのも癪に障るし。

当の悪魔は「そうですか」とだけ呟くように言って、普段なら私が怒鳴るから吸わない煙草のパイプを取り出す。睨んでみても、どこ吹く風だ。素知らぬ顔であつという間に刻み煙草をパイプの先に詰めてマッチで火をつけてしまう。

もわり、と煙が上がって、私は童車の窓を開けた。

「……止めてください。煙草」

嫌いなんです、と続けると、悪魔がようやく私を見た。そういえば、この男、さっきからお得意の胡散臭い笑顔じゃない。無表情に私を見て、ふっと煙を吐く。

何だか、怒っているような、苛立っているような。

原因は？ 私か？ 伯爵か？

どちらにしたって、何かやった覚えもないから八当たり等に等しい。

「煙草を止めたら、私は何かただけるんですか？」

は？

言われた言葉が何だかよくわからない。噛み砕くようによく考えてみた。

あいつが、煙草を止めたら。私があいつに何かくれてやらなくちゃならない？

「ふざけんな！」

「では、私が煙草を止める必要はありませんね」

ぷかりと紫煙を竜車の箱の中でくるらせる目の前の男が分からない。い。

窓を開けていても、苦い香りが箱の中に充満した。ああ、イライラする！

どうしてこの香りに落ち着けたりしたんだろう一昨日の私！

「あーもうわかりましたよ！ そんなに欲しけりゃ、煙草止めさせ

る物くれてやる！」

気がついたらこんなことを口走っていた。

私の馬鹿。

望みの解答を引き出せたからか、要塞城に着く頃にはどこか上機嫌になっていた旦那さまが竜車を降りてから（後ろ姿に舌を出してバーカってやってたらばっちり見られた）私は無愛想な御者に連れられて、要塞城から離れた。

城を囲む森の奥深く。人里もあるかわからないような場所にそれはあった。

いつもならすぐに帰ってしまう御者のおじさんは、私を降ろしてもその門の前から去ろうとはしなかった。待っていてくれるらしい。振り返ると、さっさと行けというように手をしっしとやられた。犬猫の扱いだったけど、待っていてくれるなら有難い。こんな場所に放り出されたらどうやって帰ればいいのか分からない。

低い石壁の間の小さなを門の隣には、金属のプレートで小さく書かれている。

犯罪者墓地。

罪人ばかりが葬られるという墓地。

ツタの絡みついた門を自分が通れるほど開く。鍵はないようだ。門の中に滑り込んだら、そこは、広大な墓の庭だった。

日本の墓石とは違う、正方形に近い四角い墓石が視界いっぱいに並んでいる。周りは深い森だけど、ここだけは野原のようで、思いのほか整備された道は明るかった。ところどころにある木々も明るい色をしている。

まあ、夜には来られないだろうけど。

花さえ持っていない私は何をしにきた人に見えるのだろうか。

私は墓地の奥にあるという、共同墓を探して辺りを見回す。

墓石があるのは、北の塔で死んだ貴族の罪人のものだ。

貴族と認められない者は墓地の奥にある共同墓に葬られるという。ずらりと並んだ墓の野原は、広い。

これだけの人が、無念のうちに死んだというのか。

誰もが無念というわけではなかったのかもしれないが、天寿をまっとうしたとは言えないだろう。

もつとも、私の基準で図れるものではないだろうから、何ともいえないが。

「あら、珍しい」

誰もいないと思っていた墓地で、後ろから声をかけられたとしよ
う。

大声で叫ばないのは、心臓に毛が生えてる奴だけで。

私は例に洩れず、大声を張り上げた。

「ぎや ああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ

あああああああああああああああああああああああああ
あああああつつつつ！！！！」

なむあみだぶつ、悪霊退散！ 私は食べても美味しくありません！

最後の方は自分でも何を言っているのかわからなくなっていたが、とにかく声が枯れそうなほど叫んだ。

一通り私のボキャブラリーが出尽くした頃、声の主はのんびりと私に再び声をかけてきた。

「落ち着いたあ？」

慣れているのか声の主は落ち着いている。よく聞けば、女の人だ。私はすっかり乱れた息を整えながら、振り返る。

およそ、墓場に立っているのが想像のつかない女の人だった。

金色の髪にピンクのメッシュを入れた髪は芸術ですかと言いたくなるほど奇麗に巻かれ、風にふんわりとなびいている。白い小顔には垂れた鳶色の瞳、オレンジのルージュの引かれた唇。ポリウームのあり過ぎる肢体を包むのは、真っ黒なチャリムだった。どこのお水のご商売の方ですかという出で立ちだが、その白い指にはホウキとちりとりが握られている。

「いらっしゃあい。珍しいお客様」

彼女は間延びした口調でにっこりと笑って、墓石の隣に掃除用具を置いた。

「さっき、竜車で来た人お？」

「あ、はい」

落ち着きを取り戻すうちに、ようやく私は彼女がホラーの主演ではないことを認めた。このあらがいのない日本の女子高生的な存在感でホラーだったらびっくりするわ。

「どんな御用お？」

とろんと居眠りしているみたいな彼女は豊かな胸の前で腕を組んで微笑む。谷。チャリムに谷が出来てる。すごい。……おっと、失敬。

「共同墓を探してるんです」

「共同墓お？」

そう言っ、彼女は小首を傾げた。どうやっても男をそそるようにはしか見えない女もいるもんだ。すごいな。

「共同墓はあ、けっこういっぱいあるからあ。いつの共同墓？」

いつ？ いつとな！

そんなにあるのか。

何だかショックを受けながら、私は「一番新しいのは」と尋ねた。

「それならこっち」

案内してくれるらしい。

私は美女の妖艶な丸いお尻くつついて、墓地の奥へと向かった。

「あのねえ、共同墓に来る人って珍しいのよお」

前に行く真っ黒チャリムの美女は華奢な肩越しに私を振り返って言う。

「犯罪者なんかのお墓に来るってえ、とっても変な目で見られるからあ、家族でも全然来ないのお」

そう、なのかもしれない。犯罪を犯した家族を、見舞おうという人は少ないだろう。

「たまに来るのはねえ」

鳶色の瞳が細くなったような気がした。

「恨みを持つ人」

死んだことを確認しに来るように来る。

私もそう思われているのだろうか。

事実、そうなのかもしれない。死んだことの確認。

私は、不思議と静かな気分で美女の瞳を見た。

墓地の奥の日の射す森に入ると、美女は私から視線を外して、それきり何も言わなかった。

共同墓は、森に入っただけであつた。

日の射す森の中を横一列に、石を積み上げたかまくらみたいな墓が丸い古墳みたいに並んでいる。

どこまでも続くその先を、私は結局目では辿ることはできなかった。

「こっちよお」

美女はその墓の列を右に私を誘って「ここ」と案内してくれる。墓の列の一番右端。

その前には、先客が居た。

美女を見遣ると彼女も少し驚いているようだった。

「いつのまに來たのかしらあ？」

細い首をひねっているから、美女の知らない間にやってきたらしい。

かまくら墓の前に置かれた石碑をなぞっている男には、見憶えがある。

首の後ろで藍色の髪をくくった、長身の色男。きっとその目は藍色だ。

それが騎士の制服だと知ったのはごく最近だったけれど、黒の詰襟服の人はこの森では異質だった。

「ウィリアムさん」

いつか、私を愛人に言った色男は、私を見止めて少しだけ驚いて、やがて悲しげに微笑んだ。

人と石碑

「生きていたんだね」

オーラが眩しかったはずの色男がなりをひそめ、彼は暗い瞳で私を見た。

間違っても、私が生きていることを喜んでいる瞳じゃない。

それが分かったから、私は必要以上には近寄らず、一緒に来た美女の隣で立ち止まる。

そのことに気がついたはずのウィリアムさんも、何も言わなかった。

「お久しぶりです」

私がそう言うと、ウィリアムさんは少しだけ笑う。

「元氣そうだね」

「おかげさまで」

社長とだってこんな寒い再会の挨拶じゃなかった。

私は奥歯を密かに噛んだ。

対するウィリアムさんも、何かに耐えるように目をつむってからやがて口を開く。

「結婚したんだってね。おめでとう」

「いえ」

今、何をしているのか、とか、どうして社長のそばには居ないのか、とか尋ねることはたくさんあるはずなのに、私は質問一つ口にもぼらせることができなかった。

森の真ん中の新しい墓の前で、石碑に刻まれた名前をなぞっている人に、何を言うことができるだろうか。

私が、墓の前の石碑を見ていることに気がついたのだろうか。ウイリアムさんは少しだけ自分の体を引いて、再び石碑に視線を落とした。

「これを見に来たの？」

見に来た、というよりも会いに来たんです。

そう答えると、彼はまた少しだけ目を丸くした。

「誰か、知り合いが？」

「十一人居るんです」

私の答えに満足したのかは知らないが、ウイリアムさんは少しだけ納得したのか「どうぞ」とだけ言って墓から少し離れてくれた。

そちらへ行けということか。

知っている、それもそれほど険悪な関係ではなかったはずの人に私は緊張したが、墓から一步、また一步と遠ざかるウイリアムさんを見ながら墓に近づいた。

かまくらによく似た墓は、目の前に立つと存外大きかった。決して小さくはない私の背からも見上げるほどで、周囲は大人が何人か手を繋いでも足りないほどだろう。

まだ草もあまり周りにない新しい墓には手向けられた花もなく、ただ真新しい石碑だけが置かれていた。

彫り込まれている名前を順に目で追って、見憶えのある名前を十人見つけた。

ああ。

溜息が洩れた。

彼らは、本当にこんな風に死ななくてはならなかったのだろうか。私もウィリアムさんと同じように石碑の名前をなぞらずにはいられなかった。

いつも優しかったヨルダのおじさん。

いつだって楽しくおしゃべりしてくれたウエンダ青年。派手だったけど温かく指導してくれたヨアヒム先生。

いつも美味しい料理と笑顔で迎えてくれたスクリームさん。

頭は軽かったけど馬鹿話と一緒に盛り上がったフリエル。

無口だったけど意外と優しかったクーリガン先生。

優しくて奇麗で優しく見守ってくれてたセルジュワ先生。

マツチヨでおおらかな良い先生だったリカインド先生。

熊みたいだったけど面倒見の良かったザイラスさん。

畑談義で語り明かした変人だけど優しかったヴェイユさん。

そして、ドエスで義理のお兄さんの、バーリム先生。

誰も罪から逃れる気はなかったと言った。

罰と聞いて誰もが、安堵の息をついたとも。

それでも、いくら生前、彼らの言葉を聞いても、残った人は死んだ人のことを悔やまずにはいられないのだろう。

それはもう、戻ってくることはないから余計に。

「――君が、悪くないことは知っている」

低い声が、しゃがみこんだ私の頭の上から響いた。

私の背から暗い影がひっそりと覆うように立っている。

「でも、君がいなければ、彼らは死罪にはならなかったかもしれない」

私が。

私のせい？

「君が、陛下と出会わなければ、陛下はこれほどの罪を彼らに告げなかったかもしれない」

私が、俊藍と、出会ったから、先生たちは？

「君が、陛下に愛されなければ」

セルジュワは死ななかったかもしれない。

喉が凍った。

「セルジュは、君を恨んでいなかったよ。いつだって悪いことをしたと悔やんで、自分の罪は当然だと言った」

でも、それでも。

彼女には生きていて欲しかった。

「だから、私は愚かだから、生き残った君を恨んだ」

森が鳴る。

陰影が揺れて、ざわめいた。

すまない。

消えゆくような声が聞こえる。

愚かだと分かっているが、止められないものがある。

「ヨウコ、君を目の前にしたら、私は己を抑えることができない」

闇に溶けていくような声に、私は場違いにも聴き惚れた。

その声は、とても、とても儚くて美しい。

「セルジュワは、私の婚約者だったんだ」

家と家同士が決めた、美しいが堅物の彼女を疎んで何人もの愛人を作った。それでも彼女はその美しい相好を崩さない。

けれど、

「最期の日、彼女は笑ったよ。君が生きていることを知って。私が教えた」

それがとても悔しかった。

夜が引いていくように暗い声は私の背から消えていき、あとには元の明るい森が戻った。

私は闇に魅入られたように振り返らなかった。

ただ悲しくて石碑を何度もなぞる。

なんて、愚かなんだろう。

私も、人も。

花と灰皿

どれぐらいそうしていただろうか。

墓の前に座り込んでいた私は、自分が森の中で長い時間我を失くしていたことをお尻の痛みで知った。

何か、めっちゃ痛いんですけど。

ようやく動き出した私を見つけたのか、「やっと動いたあ」とひと掃除終えてきたらしい美女がずっと私の隣に座り込んできた。おお、すごい揺れる。胸の地震だ。……私の思考は残念です。ごめんなさい。

名前をローゼだと名乗った美女は、私のいかがわしい目線をもともせず、とろんとした目で私を眺めてくる。

「あなた、もうここに来ない方がいいよ」

今度は、私がローゼを黙って見つめた。

「ここにはねえ、ああいう人が来るところなの」

ああいう、というのはいつの間にか居なくなったあの人のことだろうか。

そうなのかもしれない。

思い出に囚われて、忘れられない過去を見つめる場所。それがこの墓地なんだろう。

「――また来ます」

しびれた足腰を叱咤して、私はどうにか立ち上がる。

ウィリアムさんは、私を殺そうと思えば殺せる。

でも、殺さなかった。今日は。

また会ってしまったら、彼は腰の剣に手をかけずにいられるだろうか。

彼は、私の姿を見るたびに、きっと婚約者だったセルジュワさんを思い出す。

それが辛いのだ。

何もできない私に、恨み言を言わずにはいられないほど。

ローゼさんは私をおっとりと眺めて「変わってるわねえ」と笑った。

そうかもしれない。

でも、

「今度は、花を持ってきます」

私は物言わぬ墓にもすがらないと、自分を救えない愚か者だから。

竜車まで戻ると、御者のおじさんはのんびりと本を読んでいた。

「お待たせしました」

特別強面というわけではないが、ひげ面のこのおじさんはとにかくぴくりとも表情を動かさないから、いつも何を話しているかわからない。

「あの」

無駄口を叩こうとしてもおじさんは早く乗れと言わんばかりに顎で竜車の箱を指す。

仕方なく荷台に乗り込もうとタラップに足をかけて、ふと訊ねた
いことが浮かぶ。

「サリー、元気ですか」

要塞城から連れてこられてからこのかた、厩舎が分からないから
会えていない。

「屋敷の西の厩舎に居る」

一瞬、誰が喋ったのか分からなかった。でもおじさんが不機嫌に
顔を背けたので、あっと思う。おじさんが喋った！

「会いに行ってもいいですか!？」

「ああ」

おじさんが頷くのだ。彼女はきつと元気だろう。

何の根拠もなく、ほっとした。

珍しく「どこへ行くんだ」と言われて「帰ります」と答えたら、
竜車はゆっくりと動き出す。

座席に腰を落ち着けてみると、長い溜息が口をついた。

緊張していたのか。

指先が小さく震えているような気がする。

ウィリアムさんは言った。

私が東国王である俊藍、いや、ヘイキング陛下に愛されなければ、セルジュワさんは死ななくて済んだかもしれないと。

彼は、あの戦場で私が死んだと知って、騎士と有害銀髪を罰したのだろうか。なら、あの東の魔女はどうなったんだ。

知らないこと、知りたくないことが多すぎる。

今までは、生きるだけで精一杯だった。

だから、考えるのは自分のことだけで良かったし、助けてくれた人に感謝するだけで良かった。

でも、私の周りの世界は常に変化し続けていて、その変化を私は今になって目の当たりにしつつある。

私が生きて戻らなければ良かったのだろうか。

少なくとも、私があの悪魔と結婚して東国に長く留まることにならなければ。

いっそ、私が死んでいれば。

もう指の先の感覚は残っていなかった。

ただ、絶望にも似た暗い思考の渦に呑みこまれて、私の意識は途切れた。

生きろ、と言われた。

だから生きようと思った。

訳の分からないことで殺されてたまるかとも思った。

それは、誰かの命を犠牲にしてもと願ったことではないはずだった。

誰かが死ぬなんて嫌だ。

私は、その命の重みに耐えられない。

数なんて関係ない。

彼らは全員、血の通った人間で、みんな温かい手をしていたのだから。

ふと、苦い香りに目が覚める。

またか。

でもここは、屋敷のベッドじゃない。

身を起こしてみると、長椅子だった。でもワイン色のそれに見覚えはない。

ぱさりと紙をめくるような音がして、私はようやく他人の存在を知る。

窓の光をよく取り入れるように置かれているのは書斎机というやつで、その大きな机でひたすら紙をめくっている赤銅色の髪を見つけて、溜息が出る。

道理でこの匂いがするわけだ。

「――どこですか。ここ」

泥だらけだったはずのチャリムの上着がない。最近ではチャリム一枚だと少し肌寒いのに、この部屋は少し涼しい程度の感覚だった。見慣れてしまった赤銅色の頭はこちらをちらりと見たけれど、紙

に目線を落とす。

「城の、私の執務室ですよ」

私は屋敷に帰ると言ったはずだが。

私の不貞腐れた気分が伝わったのか、お仕事中の旦那さまは傍らに置いたままだったパイプをひと吸いする。

「ベンデルが連絡を寄越してきたのですよ。奥様がうんともすんとも言わないとね」

ベンデルって名前なのか。あの御者のおじさん。

というか、寝てたのか。私。

でも寝ていたにしては気分は重い。お腹の中に何かが溜まりこんでいるように。

体もだるかった。

そもそも荷台で寝ていたなら、屋敷まで連れて帰って叩き起こしてくれればいいのに。

そう愚痴を口にしても、悪魔の仕事の手は止まらず、私は少しだけ不満を覚えた。

何故だ。無視は上等なはず。

疑問が頭の中を巡るのに、何故か物足りない。

あの夜のように、宥めるように悪魔が私の頭を撫でていないからか。

馬鹿馬鹿しい。

自分の寒い答えを振り払うように立ち上がると、少し立ちくらみがする。そういやランチがまだだった。

「じゃあ、帰ります」

「待ちなさい」

呼びとめられて、振り返って、後悔した。
パイプを手にした悪魔が、胡散臭い笑みをやめてこちらを見ている。

「墓地で誰かに会いましたね？」

ここで私が答えなくても知っているだろうに、あえて私の応えを待つようにこちらを眺める紅い目が急に怖くなった。

でも、ここで黙りこんでもどうしたって、私はこの悪魔に応えさせられるような気がする。

私は小さく息を吸いこんで、重い気分と一緒に吐きだす。

「ウィリアムさんに、会いました」

眼鏡の奥の紅い目がすがめられる。

「ウィリアム・文月・バークランドですね」

この悪魔は、彼の事情すら知っているのだろうか。
知っていても、きっと顔色など変えることなどないだろうが。

「墓地へ行くのは、しばらく控えなさい」

「嫌です」

いつもよりも強い口調で言われたというのに、さっきの怖くなっ

た心を忘れたように私ははつきりと応えていた。

「花を持って行くって、約束したんです」

そう言った私と、悪魔はしばらく睨み合った。

でも、どうしたわけか、悪魔の方が先に紅い目を逸らせてしまう。溜息について吐き出すように言う。

「――私は、あなたの望みは叶えたと約束しましたからね」

溜息をつきたいのはこっちだ。こんな気分の重くなることばかり。

「教えてください」

知りたくない。でも、

「どうして、バーリム先生たちは死ななくちゃいけなかったんですか？ どうして私は、あなたに殺されなくちゃ、いけなかったんですか？」

泣いてしまう前に、知らなくてはならない。

紅い目の悪魔は、私をじっと見つめてからパイプの灰を灰皿に落とした。そして席を立つと、私の前までやってくる。

腕を伸ばせば私に触れられるかどうかというところに立って、こちらを見下ろしてくる。

「……あなたを陛下に会わせたのは、私の落ち度です」

前とは違う。

会ってはいけなかった。前はそう言い切った。

言い切ったのに。

触れ合ってもいないのに、まるで私の震えが伝わったかのように紅い目が細められている。だからだろうか。私の指の震えはひどくなるばかりだ。

「バーリム達の罪は、間接的とはいえ戦争を引き起こした重いものです。ですから陛下のご判断は正当であつたと思います」

ですが、と静かな応えは続ける。

「陛下は、元凶である私を生かした。だから、バーリム達に与えた罪が正当ではなくなってしまった」

泣きたくなった。

この悪魔を殺せなかったことで、俊藍は目を曇らせていたことが誰の目にも明らかになってしまったのだ。

正当な判断だった。けれど、その判断に誰もが疑問を抱いてしまった。

私のせい。

私のせいなのか。

「あなたのせいではありませんよ」

そう、すがりつきたくなるようなことを悪魔が囁く。

耳を塞ぎたくなって、実際に私は耳を塞いだ。

でも、くぐもった声が聞こえる。

私以外の、誰のせいでもありません、と静かに悪魔は言う。

「だから、あなたは私を憎んでいいんですよ」

嫌だ。

そんなものに、自分を支配されたくない。

支配されたらどうなるのか、もう見てきた。

自分の感情だけに押し流されて、自分の周りは真っ暗になって、思い出も未来も望みも何も見えなくなってしまう。

どうして今、そばに居るのがこの人なんだろう。

この人の隣に居ると、私は自分の暗闇を否応なく取り出して見せつけられる。

それがとても嫌だというのに、今一番、私の近くで私の話を黙って聞いてくれるのは、この人だけだ。

「あなたの知りたいことは、何でも教えてさしあげます」

まるで契約を迫る悪魔のように見えるのに、私に腕を差し出すその人の囁きはどこまでも静かだった。ゆっくりと私の視界を暗闇に閉ざして冷たい夜に誘うというのに。

それが、とても優しく感じるほど。

花と灰皿（後書き）

一部改訂しました。

ニートと落ち葉

気を失うように眠った私が目覚めたのは、翌朝だった。

屋敷のベッドに寝かされていた私が起きた時にはすでに悪魔の姿はなくて、身支度を整えた私を迎えたのは、ミセス・アンドロイドだった。

いつもならば何人かの使用人の人たちとすれ違うが今日はそれがない。

そうか。

理由は分かっている。

私は朝食を終えたら玄関ホールまで来るようミセスに言い渡されて、広いダイニングで一人朝がゆを食べることになった。薄く塩で味付けされたおかゆは冷めていて、どろりとしたそれがまるで鉛のようにも思える。でもそれを無理矢理お茶で流し込むように食べて、おぼつかない足で玄関ホールに出向いた。

大勢の人が並んでいた。

その人たち全員が私を睨みつけている。

それをどこか他人事のように眺めて、私は隣に並んだミセス・アンドロイドを促した。

「————総勢二十八名が今日を持ちまして、お屋敷を辞すことになりました」

ミセスの応えを聞いてから、私は荷造りを終えて思い思いのチャリムや洋服に身を包んでいる人たちをざっと見渡した。彼らの名前

はほとんど知らない。

人を人とも認識しない私はひどい雇用者なんだろう。

「短い間でしたが、お世話になりました。新天地に行っても皆さんお元気で」

私を睨んでいた女性の一人が舌打ちするように踵を返す。当然だ。私の身勝手で辞めさせられるのだから。

ぞろぞろと屋敷から出ていく使用人たちを見送って、最後に執事だと名乗ったおじさんがチャリム姿で私に深く礼を取った。

「奥方様もご健勝であられますよう」

「ありがとうございます」

短く応えても、おじさんはやっぱりにこりもしなかった。

そうして彼が玄関のドアを閉めると、私の口から溜息が洩れた。分かっていたことだ。

でも、笑わない人たちに笑顔を振りまくのは、想像以上に私にとってはストレスだったし、私はそれに耐えられなかった。社会人失格だ。ああもう働きたくない。ニートと呼んでください。

「――本日はお休みになられますか？」

隣から平板過ぎる声が聞こえて思わず顔を向ける。

「――あなたが一番にここを出ていくと思っていました」

私の意外そうな言葉にも、今日も麗しい家庭教師姿のロッテンマイヤーさんは神経質そうに目を細めただけだった。

「仕事に誇りを持ってない者は、その仕事に従事するに値しません」

心臓を抉られるような言葉だ。

私は、これまで自分の仕事に誇りなんか持ったことはない。

食べるために働いて、生きるために食べるだけだ。誇りと矜持なんかでお腹は膨れないし、仕事はいつだって嫌いだった。

生きるために食べ、食べるために働き。

——私って、文明人になれないのかもしれない。

「旦那さまはもうお城に行っただけですよ？」

「はい」

「じゃあ、今日は屋敷に居ます」

「はい」

はい、会話終了！。

三日も周りの人がこんな感じだったら心が折れるって誰か共感してくれないかな。そしてまともに会話になるのはあの悪魔だけ。なんて環境！

「この屋敷に残ってる使用人の人たちって、どれだけ居ますか？」

しかしてミセス・アンドロイドは優秀で、私の一の言葉を聞けば十返ってくる。

「御者のベンデル、料理人のゲミュゼ、メイドのフェン、そしてわたくしの四名です」

実動人数、私含めて五人で、このおっそろしく無駄に広いお屋敷の管理か。帰ってきたらあの悪魔も使うしかないな。

私は、間違ったのかもしれない。

時間をかければ、私はお屋敷に馴染めたかもしれない。貴族ってやつになれたかも。

でも私の後ろに帰る道はなくて、やたら視界の悪い前に道が何となくあるだけだ。

人生、五里霧中。

後悔は先にやってこない。

もしもの話は、あくまでももしもの話であって、現実にはならない。

「よっしゃ！」

ぱーん！

思い切り自分の頬を両手で叩いてやった。

泣いててお腹が膨れるか？ ノーだ。

落ち込んで部屋が綺麗になるか？ これもノー。

ふざけていても墓持ち土地持ち屋敷持ちのこの国の宰相さまと結婚してるから、食うに困ることはないだろう。足りてないのは人手と人望だ。それがすぐさま戻るわけでも返ってくるわけでも手に入れられるものでもない。

あの悪魔は一年と言った。

一年、悪魔と結婚生活をすれば元の世界に返してくれると。

私は、本当に帰れるのだろうか。

生きようとする意思を、本当は失くしかけている、この私が。

「それから大変だったんですよ」

お屋敷の使っていない部屋からかっぱらってきたクッションを座布団にして、私は石畳の上でお昼ご飯に作った卵のサンドイッチを広げて頬張った。パンは自分で焼いてみた。私が台所に入ることが固辞してた彼だったが、私の情熱に負けた（異世界の食事に興味はないかと脅したともいう）料理長のゲミユゼさんと試行錯誤した成果です。

「貴族のお屋敷ってどうしてあんなに広いんでしょうね？ 馬鹿じゃないですか？ 毎日メイドさん達はあのお屋敷の窓という窓を拭くんだそうですよ。あんな辺鄙な場所に建ってるお屋敷の窓なんか誰も見ないって！ 使っていない部屋も月イチで掃除するっていうんだから、脱帽ものですよねえ。あ、でも発見もしたんですよ。だっ広いだけの庭ばかりだと思っていたらそれは外庭ってやつで屋敷の中側にある内庭は料理長が農園やっててですね。草抜き手伝ったら野菜食べさせてくれるっていうんで、これから毎朝農作業ですよ。朝の五時起き。えーとこちらの時間だと、」

「辰の刻ですね」

「そうそれ」

相槌を調子良く打ったはずなのに、目の前の銀髪は溜息をついた。なんだよ。サンドイッチはあげないよ。

昨日、使用人たちを解雇してから本当に大変だった。まずあのミセス・アンドロイドとコミュニケーションを図るのが大変。あの片言で喋る彼女から、お屋敷での仕事を聞きだすのは一苦労だった。一を言えば十応えてくれるが、それはこちらが質問した時だけだ。質問は私が考える必要がある。それから御者のベンデルさんは言うまでもなく、料理長のゲミュゼさんには参った。台所は奥様の入るところではないの一点張りで、昼食前の一番の空腹を抱えたままあの手この手で了解を取るのは馬鹿みたいに変で、ようやく夕食のときに中庭の農園のことを聞きだして取引条件として草抜きを買って出たのだ。メイドのフェンはこの屋敷に来て、というか奉公自体が初めてとかで新米中の新米で洗濯も薪割りも出来ない。だから私と一緒にミセス・アンドロイドのお掃除レクチャーを昼間中受け続け、二人揃って音を上げた。あの悪魔が本気でベッドの上でマッサージしようとするほど（もちろん蹴って断った）体も悲鳴を上げた。（実際に悲鳴も上げた）そういうわけで、今日は休養しろと無理矢理、旦那さまに城に連れてこられたので、有害銀髪をからかいに……面会にきた次第。

「どうして、私はあなたの平凡な日常を聞かされなくてはならないんですか」

「暇そうだから」

有害銀髪は疲れたようにまた溜息をつく。幸せ逃げるよ？

「もう来ないでください」

「いいじゃない。あなた暇だし」

「罪人は時間を浪費することも、罰の内なですよ」

真面目に言われて何となく驚いた。

「罪の意識、あったんだ」

銀髪はあからさまに機嫌を損ねて口をへし曲げた。唯一の美德のお綺麗な顔になってことを。

「――あなたに言われる筋合いはありません」

そうかもしれない。

北の塔と呼ばれるここには各階に一つしか牢屋はなくて、今のところこの塔に入っているのはこの有害銀髪だけだ。

何階まであるのかは知らないが、有害銀髪の独房は最上階に近い。窓は一つしかなくて、外の景色は空だけで、聞こえるのは刑場の鐘の音だけ。

こんな場所、一週間もいたら私だったらどうにかなっていそうなのに、この有害銀髪は以前と変わらず私をそこらの野良猫を眺めるような視線のままだ。

本来なら、あの悪魔もここに閉じ込められていたはずなのだ。

宰相といってもどんな仕事をしているのか知らないが、あいつは犯罪者だ。そんな犯罪者と結婚した私は、あいつと同格か、それ以上の愚か者か。

いずれにせよ、私は自分が生きるためにあの悪魔を利用している。それが罪なのか、罰なのか。

サンドイッチを食べ終えて、ミセス・アンドロイドに用意してもらった水筒のお茶を飲む。こちらでの名前は知らないけどいわゆる竹水筒です。栓に口をつけると、お茶が心なしか甘い。昨日のおかゆに続いて今朝も、あまり食べられなかったことを見られていたんだろうか。

前の私だったら感謝するだけだったのに、今は、優しくされたらどうしていいのか分からなくなる。

黙って私の様子を見ていた有害銀髪は、ふと息をついてこちらを今度は睨んできた。

「何を中身のない頭で悩んでいるのか知りませんが」

一言余計な銀髪だ。

睨み返すと鼻で笑われた。くそ。有害のくせに。

「あなたは図々しく生きていればいいのですよ」

生きて？

「——本当にそれでいいの？」

口を突いて出た言葉はもう戻らない。

過去は、何も戻ってはこないのだ。

何を、良い気になっていたんだろうと思う。

伯爵に養子に望まれて、カルチェに感謝されて、ステファンを北国に連れて行って。

何もかも上手くいきすぎていたんだと思う。

「アンジェさん達も、バリム先生もセルジュワ先生もみんな死んじゃって、私だけあの悪魔に生かされて、それで本当に良いっていうの？」

何も、自分の力では解決できないくせに、偉そうなことばかり言っ、頑張っ。

「だからといって、あなたが死んで何か意味があるのですか？」

有害のくせにやたらと澄んだ碧眼が私を見つめてくる。

「死んだ者は返らない。たとえあなたが悪魔に魂を売ったとしても、人ひとりに購えるものではありませんよ」

悪魔に一切合財支払って願ったところで、叶わないこともある。もう返らないから人はそれを惜しむのだ。

返らないと分かっているでも生きている者を憎んで恨んですら、返せと願う。

私のせいじゃない。

何度も言われて悲しくなる。

だって、それは私には見えない罪を示すことと同じだから。

結局私は、有害銀髪に何も言い返すことが出来ずに、荷物をまとめて北の塔を出た。

要塞城の端にあるこの北の塔には、ほとんど人は近付かない。人が居るのは独房の出入り口にある不気味な看守の詰所だけで、あとは罪人の有害銀髪だけ。

人の少ない塔だというのに、外の風が少し冷たかった。

塔の下まで降りると林に囲まれているので、落ち葉で彩った木々が見える。もうじきあの葉も落ちるのだろう。

死刑囚の収容される独房からも回廊で離れている北の塔は本当に孤立しているので、今やあれが銀髪の家に見えるのだから不思議なものだ。

何気なく回廊の先に視界を戻すと詰所が続く廊下の暗がりには、人が居る。

あの看守だろうか。

でもその人は、私を見つけたらしく、あのひよろりとした看守ではありえないすっかりとした足取りで回廊へと向かってくる。

新しいマントを羽織った詰襟姿のその人は、声がようやく届くかというところで立ち止まる。

「葉子」

静かに呼ばれて泣きたくなる。

これだから、空気を読まない男は大嫌いだ。

艶やかな黒の髪をゆるく結ったその人は、私を湖面のような青い瞳で見下ろしてくる。

「……俊藍」

今、このときだけは、会いたくなかった。

弁当箱とキャリアウーマン

ざっと、風が吹く。

回廊に数枚の葉っぱが流れてきて、私の足元でわだかまった。

ふんわりと落ちてきた葉っぱを見て、そうして私はちょっと現実逃避したかったのかもしれない。

でも、私の前の長い影は立ち去ろうともせず、じっと私を見下ろしている。さっさとどっか行ってくれ。

「葉子」

私の名前を呼ぶその声が懐かしい。そう感じるほど離れていたんだ。唐突にそう感じた。

彼の形見だったはずのマントは私の相棒となり、彼はすでに新しいマントを身につけている。それぐらい長い時間、離れていた。

それが悲しいとも、淋しいとも思わない自分にちよっと呆れる。現金な自分に心が折れそうだ。

「何ですか。ハイキリング陛下」

そう顔を上げると、奇麗な顔が歪んだ。

城に行けば会うこともあるとは思っていたけど、わざわざ来るとは思わないじゃないか。迷惑も考えろ。

何も応えないので私が訝ると、俊藍は（もうこの呼び名で慣れたからこれでいく）バツが悪そうな顔をして、少し話をしないかと言った。

私には、話すことなど何もない。

余計なことは言わないで、静かにしてくれと怒鳴りたくもある。

だから、

「王妃様と一緒になら、いいですよ」

王様の垂れた尻尾が見えた気がした。

回廊を出て看守に一声かけると、彼は俊藍に向かって大仰な礼をとる。ああ、やっぱり王様なんだな。

妙な感心をしながら後をついていくと、城に帰る途中で彼はメイド服の女官を捕まえて王妃様を呼んで来るよう言付けた。それから王様自らのご案内で辿りついたのは、要塞城には似合わない花の咲き誇った庭だった。

秋も終わり、冬も近いだろうというのに、その庭にはあまり見たことのない品種の草木が整然と植えられていて、見事なシンメトリーを作っている。イングリッシュガーデンというやつはこんな感じなのだろうか。その木陰に設けられた瀟洒な椅子とテーブルに招かれて、今更ながら自分の格好がとんでもなく場違いなことに気がついた。チャリムだよ。しかもおぼちゃんを着るようなよりもよって小豆色。

思わずうめいた私をよそに、しずしずとかしずきを何人か従えたドレス姿の女性がやってくる。長い裾が汚れないようにかしずきの人がまず草の上に絨毯引くんだよ。すごいな。

涙みたいな水色ドレス姿のその人は、私を見るやその柳眉をわずかに歪ませたけど、すぐに取り繕って陛下に礼をとる。

俊藍の隣に並ぶと小柄な彼女は絵になった。艶やかな黒髪を今日は結いあげていて、細くて白いうなじが折れそうだ。まつげに縁取られた紫の瞳は宝石のよう。まあ、つまり美少女ってわけだ。美女って感じはしない。おいおい、まさかまだ十代じゃなかるうな。

「――改めて紹介しよう。彼女はマルモア。北城宰相とは遠縁にあたる」

じゃあ、迷い人の末裔なのか。物珍しげな私の視線が気に入らないらしく、彼女は気位の高いお嬢様らしく口を引き結んだままだったが、

「……ヨウコ・キミジマ様ですね？　北城宰相とこちらに落ちてこられた迷い人とか」

静かな声で確認してきた。肯くと、彼女は貞淑な妻の見本みたいに王様にやるみたい私に頭を下げてくる。やめてくれ。

「先日は、ご挨拶も出来ずに申し訳ありません。陛下からは常々、あなた様のことを聞き及んでおりました」

何を言った。この空気読まない美形は。

私は「こちらこそご挨拶も出来ずに申し訳ございません」とおざなりな挨拶に留めておいた。

寒い挨拶を終えて私は空の弁当箱と水筒が入った風呂敷を持ったまま勧められた席につく。場違いだよ。泣きたい。帰っていい？

ちやうど三角形になるように丸いテーブルに座ったんで角は立たないけど、二人の視線が嫌だ。帰りたい。

マルモア王妃のかしずきの人がティーカップを並べて紅茶を入れたら「どうぞ」と言われたけどお礼だけ言って手はつけない。

王妃様直々に「どうぞ」と言ってくれるけど、やんわり「緊張で喉を通りませんので」と断った。

経験上、この城の中で持参した物以外は口に入れないことに決めている。

俊藍とマルモア王妃が口をつけてから、微妙な沈黙が流れたけれど、おもむろに口を開いたのは俊藍だった。

「……元気か？」

「あまり」

ここから帰ればまだマシかもーと言わない私は大人だと思う。でも、俊藍にはずばりの言葉だったようで、また口を噤んでしまった。面倒な。

「使用人を解雇してしまったので、だだっ広いお屋敷を自分で掃除しなくちゃならなくて。今日も帰ったら掃除です」

誰も話題提供しないから、わざわざしたくもない近況報告したっていうのに王様夫婦は私を不思議な生き物を発見したように見ている。マルモア王妃は思わずと言った風に訊ねてきた。

「……それは、どうして……」

「料理作ってくれる人と御者の人と何か手伝ってくれる人が居れば、まあやっていきますから」

理由にならない理由を教えてやると、案の定複雑な顔で黙りこんだ。この人、ホントに生粋のお姫様なんだな。

よく俊藍のお嫁さんになってくれたね。

「ラウヘル、は何も言わないのか？」

言いにくそうに俊藍が言うので肩を竦める。あんまり苛めてやる

なよ。悪魔め。

「あの人が許可したので」

俊藍の肩が震える。

「――幸せか？」

ああ。

今一番、聞かれたくないことを、聞いてくるんだね。
やっぱり、嫌いだ。そういうところ。

答えたくない。

でも、私を伺う青い瞳も、私を疑う紫の瞳も、答えを聞くまで納得しないんだろう。

「……あの人はいくつか私に約束しました」

約束ならたくさんの人とした。

目の前の青い瞳の王様とも。

でも、この人との約束は、何一つ守られることはないだろうと思っていた。

「その中に、私を幸せにするっていう約束はありません」

だから、何も知らない目の前の夫婦が私の目の前で眉をひそめるのに、少し呆れた。

悪魔は、私の願いは何でも叶えると言った。何物からも、己からも守ると約束した。でも、幸せにするとは約束してない。

「葉子」

「私は」

何も聞きたくない。弁解なんか要らないし、同情なんかもつと要らない。同情するなら金をくれ。

「一度も、あなたとの未来を思い描けなかった」

静かな湖面のような瞳がさざめいている。それでも、言わずにはいられなかった。

「あなたと出会ったことは、私にとっては幸運だったけど、あなたはたくさんの人に求められる人で、必要とされる人だから、私のたった一人のひとにはなりえないことが、分かっていたから」

ティーカップの紅茶が風に揺らぐ。波紋で自分の顔が歪んで、今まさにこんな醜い顔なんだろうと思った。

「あなたは何でも持っているのに、何も持っていない私から、いたい何が欲しいの？」

見開かれた瞳に映った私は、うろのような眼をしていた。

瞳が細められると、いつかのように抱き寄せられそうで私は怯える。

この王様はいつだって選択を間違わない。

私は尋ねてはいけないのだ。

この人の奪った命が、私にとってどれほどのものだったかを語るわけにもいかない。

彼らのせいでたくさんの人が死んだ事実は現実で、変えようもないことだ。

だから、もう。

触らないで。

声にならない声が震える。

私はこんなにも臆病だったのだろうか。

気が狂いそうで、私は慌てて頭を下げて席を立った。

どこへ行けばいいのかわからないまま、走り出す。

簡単に私を翻弄するあの人が嫌いだ。

いつも私は何かに翻弄され続けているのに、俊藍に関わるとすぐに渦中に放り込まれてしまう。

静かでいたい。

何のざわめきも聞こえないほど。

どれぐらい走っただろう。

息が切れて足ががくがくになると、私は手近な暗がりにはまり込んでうずくまった。

庭の中なのか、またどこかの違う庭なのか。

とにかくそういう草むらに居ることだけは確かだ。

芝生の敷き詰められた庭に雑草はまったくない。

草木に慣れ親しんでいたはずなのに、私はまるで初めて触れた草花をぼんやりと眺める。花壇に並んだ名前も知らない薄ピンクの花

が風にゆらゆら揺れている。

ああ、異世界なんだな。

何故だかそう実感する。

どこへ行っても異質だったはずの私が、今更馴染めるはずもなかったのか。

「ヨウコ、さん？」

聞き覚えのあるような女の人の声に顔を上げると、やっぱり見覚えのある美人だった。

優雅な肢体を詰襟服に押し込んで、書類を持った姿はまさしくキヤリアウーマン。

「……カリアーツァさん」

いつか、俊藍と騎竜を買いに行ったときに出会った褐色の美女だ。彼女を驚きと共に見上げたけれど、カリアーツァさんの方は立ち直りが早かった。

「——なぜここに？」

射抜くような疑いの視線が痛い。

私がよろよろと立ち上がると目線は同じほどになったけれど、彼女は私への警戒を解かなかった。

「あなたは、陛下を裏切った方でしょう」

裏切った。

彼女を見つめると、美女の顔が歪む。今日はこんな顔ばかり見ている気がする。

「あなたは、陛下にあれば恩を受けながら、王太子派のトーレアリング卿の下にくだった」

おうたいしは。何それ。

不思議そうな私が気に入らないのだろう。キャリアツアさんは苛々と言い募る。

「陛下と対立する北城一族と、ノルデンシュロス家が推す先王陛下の後妻の御子であるメルツ殿下を王にする、王太子派。その先鋒であるトーレアリング家に嫁がれたあなたが、王の私的な庭であるここにどうして居るのかと聞いているのです」

えーと、そんなややこしい立ち位置なのね。あの悪魔。

俊藍もそんなよくもまあ、そんなややこしい家の嫁をこんなところに連れてきたもんだ。頭の中で呆れていると、目の前の美女はそうはとらなかったようで、

「王太子派の力が弱まってきた今頃、陛下に擦り寄ろうとしても意味はありませんよ。ここに、あなたの居場所はありません」

そんなこと、要塞城に連れてこられた時から知ってます。

キャリアツアさんは、あの悪魔が色んな元凶だと知っているわけではないらしい。そうでなかったら、私にこんなに文句言えないしね。何せあの悪魔、色んなところの弱味を握ってるみたいだし。

だから私は素直に尋ねることにした。俊藍に会ったことはもちろん言わない。

「北の塔から帰る途中、この庭が見えたんでうろろうしてたら迷ったんです。出口どちらか教えてもらえませんか？」

出ていかせたきゃ、とつとと道教えろ。

心の声が漏れたのか、キャリアーツアさんは顔をしかめて黙ってしまふ。黙るんじゃない。言ってくれ。でも彼女は答えず、

「キャリアーツア」

応えたのは別の声だった。

「彼女は私が送る。お前は執務に戻れ」

こちらでも聞き覚えがある。

キャリアーツアさんのちょうど後ろから現れた白髪には見覚えがある。あるにはあるが、それはこんな精悍な顔つきの美青年ではありませんでした。ひげ面のおっさんだったよ。

「……ミリアントさん」

口に出してみると、キャリアーツアさんと似たような詰襟服の彼は記憶にはない、困ったような顔で口の端を上げた。

まだ何か言いたげなキャリアーツアさんをその場から去らせると、ミリアントさんは形だけ作っていた笑みの形を消す。

「―――弟に、会ってくれているようだね」

「……お二人とも、騎士だったんですね」

質問に答えないで返すと、ミリアントさんは苦笑する。

「そう。ヘイキリングが王城に戻って、我々も城へ戻ることにした。あいつの身辺警護をしている」

じゃあ、あれかな。近衛騎士とか。それより、

「弟って、まさか」

「ハイラント。僕の弟」

世間が狭いのは、ドエス兄弟だけにしてほしいんだけど。

「……似てないですね」

かたや精悍なお兄さん。かたや有害なまでの美人。

「僕は父似でね。弟は母似」

なるほど。

「ところで、どうして弟に会いに来てるの？」

質問を戻された。

どう応えようか迷っていたら、相手の方が早かった。

「君を陥れたあいつに、恨み言でも？」

嫌がらせのつもりですが。

そう真面目に言ったら人格疑いそうだな。真面目そうだし。

「……興味本位なら、もうやめてほしい」

少し高いところにある彼の目には、決然とした拒絶があった。

「弟はすでに重罪人だ。北の塔は軽々しく他人が会いに行っている場所じゃない」

次に言われる言葉は予想していたけれど、思っていた以上に私の心を深く抉った。

「君にも、もう城に近寄ってほしくない。僕らは君を目にするたびに、仲間だった彼らを思い出す」

いい奴らだったよ。

眩くその声に眩暈がする。

私は、どうして生き残ったんだろう。

駅前留学と家庭菜園

盛大に落ち込んで帰ったからといって、私を甘やかす状況なんて待っているはずもなく。

仕事を終えて帰ってきた旦那さまに少し城に行くのを控えようと思うと夕食時に話したら、

「では、私も少し休暇を取りますよ」

は？

「ひと月ほど。そのあいだに言葉の勉強をしましょう」

おはようからおやすみまでまず手始めに北国の言葉だけ使って生活すれば、すぐに覚えますね。

と、駅前留学もびっくりな提案をされました。

悪魔だと思っていたけど、鬼でもあったか。

外国語や文化にも堪能な我が旦那さまは、口から生まれてきただけあって有言実行の人でもありました。

……まじで休み取ってきたんですよ。休暇ってやつを。

結局その日から北国語暮らしになりました。ペナルティこそ設けられなかったものの、言えるまで言いなおしをさせられます。

「ポ、ポドリア……レペ？」

「ポドリア・レペティールロ？」

「……アブレ・マス・デスパシ……」

「ポドリア・レペティールロ？」

呪文ではありません。

北国語です。ちなみに旦那さまが繰り返しているのは「もう一度」という言葉です。情け容赦という言葉を知っていますか。この悪魔。

北国語に慣れてきたら今度は南国語にとって代わりました。

おかげで私は四か国語を操れるようになりました。

日常会話なら困らない。

鬼だ。

日常生活も大変です。

何しろ人がいませんからね。

「フェーン！」

屋敷の廊下を駆け抜けて、私は同僚を呼ぶと彼女は「はい」とおっとり応えた。使用人さんたちとの会話は東国語で許されています。全部、外国語会話だったらブチ切れる。

屋敷の朝はまず掃除から始まる。

日の出と共に起き、私とフェーンは使っている部屋と使われていない部屋を順番に掃除する。今日は三階建ての屋敷のうちの二階部分。客間と悪魔の執務室がある。

窓掃除を終えたらしい灰色の髪を二つにくくったそばかすの少女は、バケツを抱えて私と廊下で合流する。

「フェーンの方は終わった？」

「はい。ヨウコ様の方も終わられたのですね」

フェンは、小柄で黒に近い焦げ茶の瞳が丸くて、印象としてはリスに見える。顔立ちは地味だけど私と違ってメイド服がよく似合う。……ええ、着てみたら似合わなかったのも私はやっぱりおばちゃんチャリムです。新人だった彼女がこの屋敷を辞めなかったのは、他の屋敷でやっていく自信がなかったとかで。

ミセス・アンドロイドに仕込まれた今ならどこへ出しても良いようにも思えるんですがね。

窓なんざ誰も見てないでしょうと抗議したら、ミセス・アンドロイドは「急なお客様がご覧になられます」ともっともらしい理由を答えてくれた。要は、つべこべ言わずにやれってことだ。ミセスはただいま客間のベッドメイキングをされています。

掃除が終わったら、私は一階に降りて料理長と合流する。

「今日はタンゲンが採れ頃ですからね。そのあたりを抜いてくださ
い」

ゲミューゼ料理長は今日もその痩せこけた頬で朝日を受けながら、中庭の家庭菜園で作業を開始した。彼はこの東国では珍しく短く刈りあげている髪が（東国では老若男女髪を長くしてるものなのであのベンデルさんも頭の後ろでくくってます）クリーム色なので青白い顔が余計に白く見える。それに白いチャリムを着てみてください。病人に見えます。おまけに目は灰青色だから死んだ魚の目に似てる。半分寝たような顔は城の看守といい勝負の不気味顔だ。あの顔で健康食作るんだからどうして血色がよくなるのか謎だ。かといって、本人はいたって健康らしい。

雑草抜きだけを買って出た私だったが、最近では収穫も命じられる。まあ楽しいからいいけど。タンゲンというのは赤いカブみたいな野菜で食べるとニンジンみたいな甘い味がする。畑の土から顔だしている頭の先からぐぐつと抜くと、丸々太った顔を出す。

美味しそうな野菜たちを収穫して料理長と一緒に台所に運ぶと私は早々に台所を追い出され、いつのまにか待ち構えているミセス・アンドロイドに連れられてダイニングでお茶を飲んでる旦那さまと顔を合わせる。

「ボンジュ」

「ボンジュ」

南国語で挨拶するのもこの三週間でもう慣れた。これが済まない朝食にありつけない。

「ケ・レ・ラ・プロジェ・オジュドゥーイ？」

今日の予定はなんですか、と訊いたら、

「ジュ・スイ・プリ」

予定があります、と旦那さまは応えた。

私が席に着くといつもの暗い色のチャリムの旦那さまは静かに湯呑をテーブルに置く。

「今日は城から呼ばれていましたね。朝食を食べ終えたら行きますよ」

休暇もまだ終わっていないというのに、と呟く旦那さまから久しぶりに東国語を聞いた気がする。不思議そうに見ていたんだろう。悪魔は少し笑って、

「だいぶ言葉に慣れてきましたからね。今日でおしまいにしましよう」

「マジですか！」

やったー！ と諸手を挙げた私を悪魔はのんびりと眺めて笑った。

あんたは私の先生か。いや先生だったけどね。

でもこれであのまるで呪文唱えるみたいな毎日から解放される！

今ではこれがないとなーと思うほど慣れてしまった朝がゆを食べると（意外と腹もちがいいんです）旦那さまが出かけるというのでお見送りに強制参加。

まあ、見送りぐらいはしてあげよう。

今日まで、城から逃げ帰った私に何があったのか、聞かないでいてくれたから。

きつと、何があったのかなんて知っていたはずなのに。

この休暇期間に変わったこともある。使用人が一人増えたのだ。御者のベンデルさんは厩舎の仕事で忙しいし、ゲミュゼさんも畑仕事や庭の手入れで忙しい。（この屋敷では一人一つ以上の仕事を兼務しています）だから、ミセス・アンドロイドやフェンや私だけではどうにもならない男手というやつが足りなかった。重い物動かすのも結構大変だからね。それを見越したのかどうかは知らないけど、ある日、悪魔は人が来ると言って出迎えをミセスに命じた。そ

うしてやってきたのが、

「おはようございます。旦那さま。奥さま」

柔らかい茶色の毛を撫でつけた茶髪の青年だ。見た目も物腰も柔らかな彼は以前のお屋敷では見られなかったタイプ。彼はフットマンと庭師を兼務している。今日も朝から森の小屋に行ってきたんだろう。人間の手の入った森は定期的に手入れをしなくちゃならないから。

「おはよう。ヒンテン」

私が声をかけるとにこりと微笑んでくれる。なんか人間と会話できてる気分だ。

「ロッテンマイヤー、ヒンテン。今日は夕方まで戻らないから、後のことは頼んだよ」

悪魔はそう二人に言って、私に振りかえる。

「行ってきます。くれぐれも、やんちゃは控えるようにね」

まるで私がおてんばみたいな言い方はやめてほしい。

ぶすつとした顔で「行ってらっしゃい」と言う鼻で笑われた。

ベンデルさんが操る竜車に乗り込んだ悪魔を見送って屋敷に入るとヒンテンに尋ねられる。

「今日はいかがなさいますか？」

ミセス・アンドロイドと同じ台詞なんだけど、笑顔が伴うところなにも違うものなのか。彼が来てから何だか新鮮だ。ヒンテンは他の無愛想を地で行く方々とも上手くやっているらしく、その対人能力の高さを見せつけてくれた。やっぱり、私の努力が足りなかったのか。

「今日は、どこの掃除だっけ」

「あとは少し埃を払うだけです。奥様は本日は少しお休みください」

フェンは少しだけ微笑んでくれるけど、やっぱり気安さとは違うんだよな。

私はフェンの応えにありがたく頷くことにした。要は、今日は私は邪魔だってことだ。

ヒンテンに図書室に行くと言っただけ言って、私は一人お屋敷を歩きまわる。

最初の頃は、ミセスがどこへ行くにもくっついてきていたんだけど、最近では私が慣れたことや彼女が忙しいこともあって一人で歩くことが多い。

お屋敷に来たばかりの頃は、勝手に出歩くこともたしなめられていたことが多かったから、大きな進歩だろう。

出歩くと言われても、探検に繰り出した私にミセスがとうとう折れたとも言いかもしれないが。

屋敷の図書室は一階の端にあって、一日中、日当たりが悪い。本が焼けるし当然なんだけど、夜にまず通りたくない薄暗さがある。同じ屋敷でも私の部屋（寝室の隣にちょっとした部屋を作った）は日当たりがいいから、太陽の向きを考えて作ったんだろう。

ぶらぶらとたどり着いた図書室はちょっとした在庫がある。二階分をぶちぬいた本棚に階段と渡り廊下がつけられていて、四角い部屋を延々と蔵書が埋めて尽くしている。

何でも、二代前ぐらいの当主が無類の本好きで、世界中から集めたのだという。

図書室の司書も雇っていたというから本格的だ。悪魔の父親の代でその趣味は廃れて司書も置かれなくなったようなんだけど、本は古い物から新しい物までよく整理されている。誰が整理しているのかは、思い当たる節がある。

あの三つ編み悪魔だ。

時々、二階の執務室からお気に入りの一階のシガールームからも姿が消えることがあるのだ。

図書室に、バーリム先生が持っていた本もあると教えてくれたのも、悪魔だった。

貰い受けたそうだ。

私は植物関係の本が並んでいる棚を目指して階段と回廊を登り、棚の隣でめばしい本を見つけて座り込む。

図書室は日当たりは悪いが、天窓がついているので上に行くほど明るい。昼間、本を読むには困らないほどの明るさはある。

私は結局、この休暇中に城で言われたことを悪魔に尋ねなかった。

トーレアリング家が王太子派だとか、俊藍と対立してるとか、どういうことなのか。

あの悪魔は言っていたはずだ。

俊藍はこれからのこの世界に必要だって。

あいつは、俊藍の敵じゃない。

バーリム先生は言った。

あいつは私欲のために、自分の非情な力を使うことはないって。そばに居て、何となくそれは分かる。

傍若無人で悪魔で鬼だけど、あいつに私利私欲はない。底意地の悪さはこの際、問題じゃない。

私を殺そうとしたのは、俊藍のためだ。俊藍に、迷い人である私を結びつけないため。

そして、今、私をこうして嫁として自分の家に縛り付けているのも。

何か、変だ。

本当に、あの悪魔はみんなの敵なんだろうか。

何気なく開いていた本のページに何だか見覚えのある木の挿絵があった。

説明書きを読んでも、何でも、苦い実をつける珍しい木なんだそう。

この赤い実、どこかで見たような。

つか、この木、屋敷の庭になかったっけ？

そう思ったら探しに行きたくなるのが人情です。

私は本を片付けて図書室を飛び出すと、メイド長の部屋で帳簿をつけていたミセス・アンドロイドにサリーの散歩の許可を取った。私の言葉にちょっと驚いた様子だったけど、ミセスは溜息ついでに許可してくれた。森には入らないと私に念書まで書かせたから、いつもとそれほど変わりはないけど。

そうして厩舎に飛び込んだ私は、何匹か残って柵の中でだらだらしている騎竜の中からサリーを呼んだ。ここ最近はいに行ったりしているのに機嫌はいいけど、一週間ぐらいほったらかしだった頃はそれはもう嫌われましたよ。

私の呼びかけに応じてくれたサリーに久しぶりに鞍を乗せると、ちよっと前、旅していた頃に戻った気分になった。そういえば、騎竜に乗るのも久しぶりだ。

早く乗れと言わんばかりのサリーに乗ると、私はサバンナ庭に向かった。

屋敷の庭は、広い。

どれぐらい広いかっていうと、千メートルトラックが八つぐらい入る感じ？

簡潔に言くと、見渡す限り芝生なんです。

森の近くまで行くと、屋敷がぽつんとあるような。

あの屋敷も狭くないんだけどな。だって、部屋数全部で無駄に百以上あるんです。でも悪魔はこの屋敷を狭い方だと言います。本拠地の本宅は、何でもこの三倍はあるそうで。……どうやって掃除しよう。

先の不安を追いやって、私はよく晴れた空の下、サバンナ庭にぽつぽつ立ってる木を見て回った。

何かね、この庭にあった気がするんだよ。あの凶鑑の木。

結局、私は昼食にフェンに呼びに来られるまで探した。

ハンモックと標本

本日の昼食はタングンのスープに白魚のソテーでした。王都は微妙に海が近いから海の幸もこうして食卓に並ぶ。

あー、それにしてもあの木の実、なんだっけ。

見たことある。

唸りながら食事をしていたので、見かねたヒンテンに具合でも悪いのかと尋ねられてしまった。何でもないとおざなりに応えた私は、午後サバナ庭に繰り出した。

ああ、何だっけ。

気になる。

日も傾き始めた頃には私は庭を一周してしまうところまでやってきていた。

図鑑の木は見つからない。

いったいどこで見んだ。

さすがのサリーもお疲れ気味で、私は手近な木の元でサリーを休ませることにした。

あれ、あんなところに一本道が見える。

えっと。

何気なく見上げてみたら見覚えのある実が。

葉っぱとか、これ図鑑通りの！

なんだこんな近くにあったのか！

……厩舎は屋敷の西側にあって、時計回りに回ってきたから屋敷の南側にある一本道までたどり着くのに時間がかかったらしいです。

くそ。そうだよ。私が見たことあるんだったら、この一本道で竜車に乗ってる時しかないし！ どうして気がつかないかな！

私は自分を罵りながら木を仰いでちょうど成っている実を眺めた。やっぱりあの赤い実どこかで見たことがある。

気になったら確かめてみたいのが人情です。

私は木に足をかけた。そんなに高くないけど幹がしっかりしてるから登れそうだ。

はっはっはー。小さい頃はよく登って遊びました。弟もそのかして一緒に登ったらよく怒られたっけなあ。……いえ、私、別におてんば娘じゃなかったですよ。それはもうインドアで。でもアウトドア好きの父の影響で登らざるをなかったというか。ほら、テント張るとかハンモック吊るすとか。

そんな感じだったんで、昔とった杵柄で私は比較的するすると木を登ることに成功した。目についた太い枝に腰を降ろして、下から見上げるより近くにある実を取る。

うーん、この実やっぱり見たことある。

それに匂い。何か青臭いけど嗅いだことあるような。

「奥様！」

あ、やべ。

実の中身を取り出そうとしていた私は思わず下を見る。

結構高いな。

「奥様！ 降りてらしてくださいませ！ 危ないですよ！」

のんびり顔のサリーの脇で、フェンが泣きそうになっている。

「大丈夫だって。自分で登ったし」

「でも、降りられなくなったら……！」

私は子猫か。

呆れていたら、フェンの隣につんとした顔の女性が現れる。

「降りてらっしゃいませ」

うわあ、ミセス！

ミセス・アンドロイドが冷やかな目でこっち見てる！

どうしよう。森には行ってないけど、絶対怒られる。

ミセスの怒り方は半端泣く怖いんだよ。

声を荒げもしないでただ静かに反省点を私に言わせて謝罪させる。
あの重くて冷たい空気といったら、ガリアさんの絶対零度の笑顔に
匹敵する恐ろしさ。

怖い。

「大丈夫ですか。奥さま。降りられますか？」

良心的な問いかけをしてくれたのはヒンテン青年。お仕着せの上
着を脱いでシャツ一枚になると腕をまくって私に手を差し伸べてく
れる。使用人の鑑だけど、そこまでしなくていい。

「大丈夫だって。一人で降りられ…」

る。

あ、やばい。

手がすべった。

足でふんばるけど、靴も滑る。

「葉子！」

怒ったような声が聞こえる。

バランスを崩した私の体が、近くの枝を折った。

ふ、太ったつもりはなかったんだけど！

痩せた痩せたって言われるから、油断してたのか！？

転がる視界に目を回しそうになっても、私は目すら閉じられなかった。

あ、駄目だ。

落ちる。

バキバキバキ！

小枝と葉っぱを蹴散らして、私の体は自由落下。

怪我で済んだらめっけもんだけど、痛いのは勘弁だ！

ようやく目を閉じたら、どういうわけかいつまで経っても痛みも悲鳴も聞こえなかった。

痛みを感じる間もないのか？

ゆっくりと目を開けると同時に、何だか自分の体がふわふわする
ような心地に襲われた。

天国？

いや、でも私を見下ろしているのは、

「天使にでもなる練習ですか？」

眼鏡をかけた紅い目の悪魔だった。

そのクサイ例えは何だと言い返そうとして、私は体が浮いていることに気がついた。

悪魔に抱えられている。
横抱きに。

「ぎゃあ！ 攫われる！」

悪魔にお姫様抱っこされるとか嫌過ぎる。

「それだけ元気なら怪我也なさそうですね」

暴れる私を悪魔は器用に抱えたまま、使用人たちに指示を飛ばす。

「フェン、サリーを厩舎へ。ロッテンマイヤーは夕食の準備を。ヒンテンは風呂の用意を。ベンデル、竜車を出しなさい」

かしこまりました、と彼らが頷くのを確認してから、悪魔は私を抱えて竜車に乗りこんでしまう。

「おーろーしーてー！」

座席についてまで私を自分の膝に乗せるから暴れてやったら、長い溜息をつかれた。何だ！

「目を放すとすぐこれだ」

「何が！」

「今日は何に夢中だったんですか。私の可愛い奥様」

覗きこまれて思い知る。小さくはないはずの私を抱えて軽々と今も私を膝に乗せている悪魔は小揺るぎもしない。触ったこともない硬い体があったよりも大きくて丈夫で、私の嫌な記憶を呼び起こした。

簡単に私を抑えつけた、あの夜の。

肩を抱き寄せられて震えた私に気付いただろう。

それでも悪魔は私を膝から降ろさなかった。

ただ抱きよせて、冷たい指で私の手をさする。

悪魔のくせに彼の周りの空気は何故か水のように冷たくて、澄んでいる。冬の朝の空気を纏うようで、まるで人の気配を感じさせない。

男に抱き寄せられている感覚を、私から徐々に奪っていく。

「……この実を採ろうとしていたんですね」

耳元の声が静かで、毛羽立っていたはずの私の気分を撫でつける。鼻に届いた吐息がふわりと苦い。

あ。

「これ、コーヒーの実！」

「コーヒー？」

聞きなれない単語だろうに、すぐに私の発音を理解したらしい旦那さまだったが、それでも不思議そうに私を見る。

「あの木は、カフェという名前ですよ」

なんだ、そのもっともらしい木の名前は！

「ああ、そういえば」と悪魔も何か思い当たったらしく、赤い実を見ながら説明してくれる。

「あの木は何代か前の当主が北城一族の宰相から譲られた木だそうですよ」

「それだ！」

北城一族は迷い人の一族だ。だとしたら、

「あの木、私の世界にあった木かもしれない！」

「それで、その実をどうするのですか？」

「コーヒーが飲める！」

あの苦くてまずい黒い飲み物が！

うっとりしてたら、またも不思議そうな顔で悪魔が見てきたけど、

「枯らさない限りは、どう使っていたでもいいですよ」

あっさり許可をくれた。

こういう気前のいいところは好きだよ。

竜車が止まって降りようとすると、また抱えられた。

「降ろして！」

「もう少し大人しくなるまでお仕置きです」

玄関で出迎えてくれたミセスとヒンテンに珍獣を見るような眼で見送られ、私はお姫様抱っこのまま悪魔に連れ去られた。

「どこまで行くんですか！」

文句を言いつばなしの私に「はいはい」とおざなりに相槌を打ちながら悪魔が連れてきたのは、彼の書斎。

部屋の前まで来てようやく降ろされると、なんだか地面がぐらぐらする。

それでも「どうぞ」と悪魔が手招きするのでどうにか自分の足を動かした。また抱えられたら目も当てられない。

そういえば、書斎に入るのは初めてだ。

別に用もないし、屋敷に居るときにわざわざこの悪魔を探して回る用事もなかったから知っていたのは場所だけ。

招き入れられて、まず目についたのは、

「あ」

棚に飾られた植物標本だった。

見やすいように一列に並べられていて、よく見ると季節順に並んでいる。

思わず駆け寄った私を後ろから笑って追いかけてきた悪魔は、標本の一つを指さした。

「カフェの標本ですよ」

その標本は、葉や実、そして実を分解したものまで標本にしてある。この見憶えのある種。やっぱりコーヒーの木だ。

「この屋敷にあるあの木を珍しがりましてね。確か観察記もあるはずですよ」

ワンルームマンションがすっぽり入りそうな部屋に、びっしりと並んだ本棚から悪魔は一冊の手記を取り出して、自分が使っているらしい窓際の執務机に並べて見せてくれた。そもそもこの部屋には机はこれしかない。他人を入れるために作っていないんだろう。

その手記の字には、見憶えがあった。

「これって」

「兄の物です」

見上げた紅い目が、思っていたよりも近くて驚いた。

私は思わず後ずさるけど、悪魔はそれほど気にした様子もなく並べた標本を見回した。

「この標本も全部そうです。貰い受けてきました」

そういえば、この標本片付けたことがあるかもしれない。

墓も、名前も、きっと先生は忘れられていく。
でも、私は忘れない。

そしてきつと、この冷酷非情な悪魔も。

「兄は、カッフェの実は薬になるかもしれないと研究していたようですが、この実をどうやってコーヒーとやらにして飲むのですか？」

純粹に興味があるようで、私の持ってきた赤い実を長い指でとると悪魔はしげしげと眺めている。

悪魔を驚かせるのも面白いかもしれぬ。

「実の中の種を取り出して、火であぶって粉にするんです」

問題はこのコーヒーっていう概念がない世界でどうやって焙煎して粉にするか、だ。

「どんな味なんですか？」

「それは、」

答えかけて、やめる。

苦くてどこか香ばしい香りの正体が分かった。

この悪魔の好きな煙草の匂いだ。

「出来たら、一番に飲ませてあげますよ」

意地の悪い顔で笑ってやったというのに、悪魔も心得たものでいつものように胡散臭く笑う。

「楽しみにしていますよ」

絶対コーヒーを作ってる。

悪魔の微笑みがどこか優しく見えたのが悔しいから。

洋食とスパイ

コーヒーの木の正体が分かった翌日、悪魔の旦那さまに無理矢理、竜車に乗せられた。

「目を放すと何をするか分からないことがよく分かりました」

あんたは私のお父さんか！

「今日は一日城で大人しくしていなさい。大丈夫ですよ。遊び相手も探してありますから」

まるで聞きわけのない小さな子を相手にするみたいに私の頭を撫でると、悪魔はにっこりと笑った。

「言うことを聞かないなら、陛下の御前に連れて行ってあげましょうね」

ごめんなさい。勘弁してください。

大人しくなった私によしよしと肯いて、悪魔は悠々とお勤めに行かれました。

くそ。目が笑ってなかったんだけど！

約一か月ぶりに要塞城に訪れた私は、悪魔に連れてこられた部屋の前に立たされてげんなりと溜息をつく。

ここ、見覚えある。

でも、夕方迎えに来るといふ悪魔に私がここに居ないことが知れ

たら、マジで俊藍の前に引っぱり出されて何をされるかわからない。腹をくくってノックをすると、控え目に返事が返ってきたので。

「葉子です」

応えてすぐ、ドアは開けられた。

「ヨウコさま！」

抱きつかんばかりに歓迎してくれたのは、詰襟制服姿のクリスさんだった。

そうです。ここ、社長の部屋です。

迎えられた社長の仕事部屋は、以前と違って奇麗に整頓されていた。社長の元の性格を表すように机と応接セット以外の余計なものは一切ないけど、奇麗なことは良いことだ。

「久し振りだな」

ヒゲも髪も整えてすっかり以前の坊ちゃん面を取り戻した社長は、チャリム姿で机の前で書類を睨んでいたけど私を見て顔を上げた。おお、進歩したね！

「お久しぶりです」

「今日はここでゆっくりしていくといい。トーレアリング宰相からのお達しだ」

なるほど。今日の遊び相手は、社長ですか。

社長はまだ御しやすいとはいえ、この人も頭いいからなあ。ちつ、悪魔め。

「そろそろ、冷えてきましたものね」

と、クリスさんは私が出がけに着せられた綿入れを脱ぐよう促した。社長の部屋だとちよつと暑いんだよね。大人しく脱ぐと、クリスさんは私の上着を見てちよつと唸る。

「……大事にされているんですね」

「何を？」

私の持ち物といったら、機能してるのあんまり無いんだけど。

「ヨウコさまです。この上掛け、ヨウコさまの寸法にぴったりです」

いつもの格好で竜車に乗り込もうとしたら、ちよつと寒くてくしやみしたら用意されただけです。……いかん。自分がちっちゃな子供に思えてきた。私、もう二十五歳のいい大人ですよ。

「あの悪魔の領地が寒いらしいから、チャリムと一緒に作ったんですよ」

チャリムの採寸をした時に一緒に注文していたらしい。私がフードつきがいいといったので、ダッフルコートみたいな上着にはちゃんとフードもついてます。

私の衣装ダンスにはお陰さまでおばちゃんチャリムが満載で、一度採寸しただけなんだけど、季節の折々にミセス・アンドロイドが着るものくてですね。……大人じゃないわ。この生活。

屋敷のこととかが忙しくて全然意識が向いてなかったけど、私の年頃なら買物だってしたい！はずだ。間違っても掃除と家庭菜園で泥だらけになって、木登りして落っこちるとか野性児な生活が憧れだったはずではない。今度、悪魔に森に連れてってもらう約束して喜んだりしてちゃダメなはずだ。

自分の生活を振り返って、ようやく屋敷の外の人と話す重要性を思い知った。牢屋とかしか行ってなかったよね……。

社長はお仕事なので、クリスさんにお茶を入れてもらって応接セツトに二人で座りこむ。でも、やっぱりお茶を飲むのはためらってしまった。ああ、ほんとにトラウマになってる。

そんな私を申し訳なさそうに見ながらも、クリスさんは私の話に驚いたりしながら聞いてくれた。

「では、ヨウコさまもお屋敷の雑用をなさるのですか？」

「そうですね。朝から晩まで。暇なときは散歩したり図書室に籠もってるかなあ」

雨の日は掃除も半分だし、家庭菜園も収穫できないから。

結構長く話したから喉は乾いたけれど、やっぱり私はお茶に手をつけられない。

あの時も、そうだった。

「……やはり、飲めませんか」

クリスさんが目の前で飲んでみせてくれるけれど、私はお茶に手を出せなかった。

あの日と同じだ。

俊藍に連れられてマルモア妃殿下に会って、逃げだして、カリアーツァさんに裏切り者と言われた。そして、ミリアントさんにも、もう来るなど。

「ああ」

私の呟くような声に、クリスさんは妙に納得した顔で頷いた。

「カリアーツァは仕方ありません」

仕方ない？

「どうして？」

「彼女は、貴族ですが陛下にその才を見出されて騎士団に入った者ですから、陛下に対する忠誠心が誰よりも強いのです」

今は近衛騎士ですしね、と付け加えてクリスさんは肩を竦める。

「ミリアントは王家に近い貴族の出身です。彼は陛下の護衛騎士として乳兄弟のように育ってきた者ですから、どうしても偏るのですよ」

そういうクリスさんはどういう立場なんだろう。訊ねてみるとあっさり応えは返ってきた。

「私は、元は王太子派の貴族に飼われていた間諜ですが、今は陛下に地位を与えられてこうして北城宰相の補佐役を務めています」

間諜って。

「スパイ？」

「すばい、という者がどういものかは存じませんが、孤児だった私は幼い頃に拾われましたから」

家名はないのです、という彼女は別に出自を気にした様子もなかった。

「私のような子供はたくさん居ます。私は、人を殺すこともやってきました」

王太子派というものがどういものかは知らない。でも、それが俊藍とは対立していて、時に命の奪い合いをするような関係だということとは分かった。

美女に、憎々しげに裏切り者と吐き捨てられるほど。

「ヨウコさまこそ、私が恐ろしくなったのではありませんか？」

お茶をじっと見つめるクリスさんの顔を見ると、何だかおかしくなってしまった。

「私、王妃様が勧めてくれたお茶も飲めなかったんだよ」

そう言ったら、クリスさんの顔が豆鉄砲くらった鳩みたいになった。

ああ、そうだ。

お昼用にお弁当持たされてたんだった。

風呂敷包みを開いてみると、私がリクエストした品が入っている。

「一緒に食べませんか。おにぎりですよ」

おかゆにする米を煮ないで炊いてもらって、私の指導の元、私よりも上手く料理長が作ってくれたのだ。

ほどよく塩のきいたおにぎりを、誰より喜んだのは社長だった。見かけはちよつと離れてても日本人だったんだね。

「この城じゃ、洋食が基本だからな」

そういえば社長はこの城から出たこともないっていうから、ただ世間知らずだ。お姫様がキミは。

砂漠の真ん中で味噌や醤油を発見したことを話すと、ひどく羨ましがられた。おかかも作ったんだぞ！

ああ、懐かしいな。

というか、この王都は海が近いんだから、魚で具とか作れないものか。

研究する価値は充分ある。

クリスさんもおにぎりに喜んでくれた。

「サルをこんな風に食べるなんて……。ヨウコさまの国の風習は面白いですね」

東国のこの辺りじゃ、おかゆにしないと食べないらしい。

あの悪魔のおかゆ習慣もこのせいだったのか。

今度、あの有害銀髪にも持って行って見せびらかしてやろう。

そんな悪戯をちよつと口にしたら、クリスさんが連れて行ってくれると提案してくれた。

「いいんですか？」

「はい」と彼女はこともなげに肯いてくれる。

「陛下に見つからなければいいんですから」

この広い城で待ち伏せでもない限りは出会うことなんてあんまり無い。でも、

「いいの？　怒られたりしない？」

私は、ここには居ていけないようだから。

よっぽど不安そうにしていたのだろうか。

クリスさんは、優しく笑った。

「内緒ですよ」

私を甘やかしても、何も出ないよ。

憎まれ口を叩いて、私は不覚にも泣きそうになった。

きんぴらごぼうとエスパー

それから、クリスさんは私を時々連れ出してくれるようになった。休暇を終えたらしい悪魔は頻繁に城に出かけるようになったので、私はそれに付き合って連れていかれるようになってしまったから、必ず社長のところに預けられるようになってしまった。託児所か。

でも、

「あ、ここ間違えてる」

たまたま覗き込んだ書類の文字間違いを悪戯半分に指摘したら、社長に驚かれた。

「……これは、西国語だぞ」

今や四か国語操るトリリンガルですが何か。

それからたまに、書類整理を命じられるようになってしまった。

まあ、暇だし働くけどさあ。

そんな感じで仕事が早く片付くので、社長も私と一緒に部屋から抜け出すようになってしまった。クリスさんは社長の監視役兼護衛でもあるらしいから、仕方ないっちゃないんだけど。

「……今度はまた、大人数ですね」

有害銀髪の嫌がらせにはなるからヨシとする。

大人三人の雁首揃えて北の塔に遊びに行ったら、相変わらずの銀

髪は長い溜息をついた。

「帰ってください」

「お昼食べたらね」

そうしてさらに嫌な顔をする有害銀髪を眺めながらおにぎりを頬張る。

牢屋でくさい飯を優雅に食べている銀髪に、

「欲しい？」

「いりません」

おにぎりを差し出すとご機嫌が更に急降下。
ああ、楽しい。

「ハイラントは、意外と短気だったのか」

社長の呟きにも不愉快そうにするから、大人数で来て良かった。

「もう来ないと思っていましたよ」

言われて、ちょっと驚く。

一か月ほど来なかったことをちょっとは気にしてたのか。

「来て嬉しいでしょう？」

「二度と、来ないでください」

怒られた。冗談通じないなあもう。

「あなたのお兄さんにも、あなたに会いに来るなって言われましたよ」

「兄にまで会ったのですか」

もうこれ以上ないというほど呆れた顔で有害銀髪で私を見てくる。失礼な。

「ええ、まあ」

「どうせ、城にも来るなど言われたのでしょうか」

有害のくせに貴様エスパーなのか。

「そういう人ですからね。目障りなものは目に入れたくない、少しでも自分の気分を害するものは特に」

「……うわーそっくり」

呟いたら蛇みたいに睨まれた。私は蛙じゃありません。

でも、溜息をついたあと、有害銀髪は薄く笑う。

お兄さん、目が笑っていませんよ。

「あの人が嫌がるのなら、あなたがここに来るのも悪いことではありませんね」

うわ、性格悪い。

……あれ、でもこの嫌がらせどこかで聞いたことあるような。

「お兄さん、嫌いなんですか」

普通に話すにはいいお兄さんなだけだな。

有害銀髪はふんと鼻で笑って口を歪めた。

「嫌いというよりも、優秀な兄に比べられて育ったものでして。せっかく北国に骨を埋めようとしていた私を呼び戻したのも兄です。どうやら、陛下の補佐として使いたがっていたようですがね……」

それが嫌で王太子派についてやりました、とこの人も何の追い目もなく言ってくれる。性格悪い、悪いと思ってたけど、相当ですね。

じゃあ、

「北城さんも王太子派ってやつなんですか？」

「そうなるらしい」

社長は料理長お手製のおにぎりを遠慮なく食べながら答えてくれた。ちよつとは遠慮してよ。そのきんぴらごぼうの入ったおにぎりそれで最後なんだぞ。

何でも、王太子派というのは迷い人の血が入った一族から出てきた王子様を王様に！ という一派らしくて、前王陛下の後妻の息子らしい。えっと、俊藍の腹違いの弟？

うわあ、ぐだぐだの泥沼だ。

嫌な顔した私に、有害銀髪は「何を他人事のように」と目を細める。

「トーレアリング宰相の家は迷い人の血が入っていないことから、

優秀ながら冷遇され続けた家です。純血淘汰の時代には一族を滅ぼされそうにもなっていて、一族再興のためにようやく王族の元に送りこまれたのが、あなたのご夫君です」

あいつが？

「優秀な方ですからね」と有害銀髪は呟いて、

「ですが、あの方は王太子派についた。誰もが彼の判断を疑い、暗愚と罵りましたが、王太子派はこれ幸いと彼を重用し、彼は宰相という地位を手に入れたのですよ」

そうして迷い人の一番濃い血を受け継ぐ北城一族の子孫を、こちらの世界に呼び出すことになった。

北城一族の力を確固たるものにするために。

で、

「巻き込まれたのが私ですか……」

マジでとぼちりじゃないか。

でも、と思う。

あいつは、言ったはずだ。

迷い人は嫌いだって。

迷い人のせいで国が滅びそうになったから、居てはいけなないと。

だったら、どうして呼び出したりしたんだろう。

止める機会なんて、いくらでもあったはずなのに。

「まあ、あなたが出てきた時には驚きましたよ」

まさか。

見上げた銀髪はあっさりと頷いた。

「ええ。私も魔術師としてあなた達を呼び出す儀式に参加していましたから」

お前もかブルータス。

私は、また会いに来ると嫌がる銀髪に一方的に約束した。

手と雨

その日は、社長の仕事を立て込んでいて、私はクリスマスさんと二人で出かけることになった。朝っぱらから降り続いている雨は止む気配はなくて、雫はもう冷たい。冬が近い。

山側に位置するそこは、平野よりも更に寒くて、雨避けのマントの下に綿入りの上掛けも着こまなくてはいけないほどだった。

「あらあ、久しぶりい」

雨の日も掃除を欠かさないらしいローゼさんが、相変わらずな黒装束で挨拶してくれた。

マントも当然黒なので、しとしと降っている雨の中にあると何となく幽霊にも見える。思わずそう言ったら間違えられたこともあるという。ずいぶん美人な幽霊だな。

「もう来ないと思ってたわあ」

無理矢理、悪魔に連れてこられなきや、そうだったかもしれない。でも、この犯罪者墓地には私の知人が眠っている。

私は手に持った白い花束を見せた。

「綺麗ねえ。そのヒンセク」

にこやかに言って、ローゼさんが手招きする。どうやら案内してくれるらしい。

クリスマスさんはここに来るのは初めてらしく、何気なく周囲を見回

していた。

明るかったはずの墓地の周りの森は雨雲を映したかのように暗かった。

どんよりと、でも静かに前と同じくかまくら型の墓が並んでいる。

そうして、前と同じように一人の男がぼつんと立っていた。

暗い色のマントを羽織ったその姿はまさしく亡霊のようで、彼が顔を上げててもその印象は薄れることはない。

ざっと、クリスさんが私の前に立った。

でも、そのことも彼にとってはどうでもいいことのように、藍色の目だけをこちらにやって溜息のように「ああ」とだけ呟いた。

彼は、今日も花を持っていなかった。

「ウィリアムさん」

声をかけると、クリスさんが首を横に振る。話しかけるなどということか。

でも、

「どうして、花を持ってこないんですか？」

暗闇ばかり映していた藍色の目が瞬いた。

そうして、私の持っている白い花に目をやって、もう一度「ああ」と彼はかすれた声を上げた。

「セルジュワさんの好きな花は、何だったんですか？」

今度持つてきますよ、と言うと、今度は藍色の瞳が細くなる。わずかに口の端が上がったから、少し笑ったのかもしれない。

「知らないんだ」

雨音に消えるような声で呟いて、ウィリアムさんは静かに踵を返した。

彼が森を出ていくまで私を庇っていたクリスさんは、ほっと息をつく。

「ヨウコさま」

「……ウィリアムさん、今、どうしてるの？」

今の今まで聞けなかったことが、するりと口から出た。
私は、なんてお人好しなんだろう。

「今は休職していると聞いています。……始終、あのような様子なので」

彼が消えていった森の出入り口をじっと見てみると、ぼんやりとローゼさんが口を開いた。

「彼ねえ、毎日来てるのよ」

あんなになっても、答えなんかないのにねえ。

ふんわりとした呟きが雨と一緒に私の耳に降る。

そうだ。

答えなんかない。

答えがあつたとしてもそれは生きている人の答えだ。

そして、生きている人にしか、答えは出せない。

花を供えてお参りしている間、ローゼさんとクリスさんは黙って付き合ってくれた。

寒いから社長のところに顔を出しても、社長も何も言わなかった。

結局雨は止まなかったので、社長をからかいながら社長の部屋でぼんやりとしていたらいつものように、三つ編みの悪魔が迎えに来た。

「今日はどこへ行っていたんですか？」

私に上掛けを着るよう言って、自分もマントを羽織った悪魔が城の前で竜車を待つ少しの間にそんなことを言ってきた。

私の行動は筒抜けですか。

応えないでいると、ふと指先を取られる。

「冷たいですね。帰ったら、温かいお茶でも飲みましょう」

私は、まだ城の中でお茶を飲むことができない。

だから、墓地から帰っても上掛けを着こんでうずくまっているしか温まる方法は無かった。

そんなことまで知っているとさえ思えなかったが、悪魔の旦那さま

は私の手を握りこんで胡散臭く笑う。

寒いから。

そう理由を自分でつけて、私は振り払わなかった。

いつもは冷たい悪魔の手が、今日に限って温かったから。

手と雨（後書き）

題名を少し変更しました。

キノコと森小屋

落葉樹に色づいた葉っぱがほとんど落ちる頃、旦那さまは短い休暇をとってきた。なんでも、仕事が一段落ついたとか。どんな仕事しているのか今更ながらに知らないんだけど。

屋敷に居るときの悪魔はたいてい煙草を吹かしているか書斎で寛いでいるか。たまに私にせっつかれて窓拭きなんかも手伝わされているけど、屋敷の主らしくほとんど何もしていないように見える。

だから、休暇をとってきた旦那さまに私はかねてからの約束を果たしてもらったことにした。

「あまり離れないように。走らなくても何も逃げませんよ」

まるで引率の先生みたいなことを言って、悪魔は私に持たされたバスケットを片手にパイプを咥えた。本日の悪魔はいつものチャリムに、皮靴ではなくてブーツだ。私もその格好に、上着を羽織らされている。

たまの休暇でも冬から秋に差し掛かる季節には雨が多いらしく、天候に恵まれなかったので、今日みたいな秋晴れの日は珍しい。

屋敷の周りの森に入らせてもらう約束をして早一か月以上。ようやく私は未踏の森へと入ることができた。だってさー、みんなして止めるんだよ。ミセスは言わずもがな、料理長やベンデルさんまで止めるから、一人で入るのは我慢していました。

原生林歩き回ったことのある身としては、これくらいの森は雑木林みたいなものなんだけど、やっぱり東国の森は西国とは違う。西国はどこへ行っても日が差ししてくるような明るい森ばかりだった。伯爵の領地しか知らないんだけど、あれが一般的だっていうから他もあんな感じなんだろう。東国の森は、ほとんどが日の光を受け付けない、緑の濃い森だ。むっとくるほどの緑の匂いが漂い、水を湛

えた苔が水辺もないのにびっしりとそこかしこを埋めていて、落ち葉を踏んでもぱさぱさとなんか音はしない。湿気を含んだ感触だ。落葉樹とはいえ木の背丈は総じて高く、人を寄せ付けないような雰囲気がある。日があまり届かないせいか木の根元に草木はあまり無くて、木と木の間の視界は開けているように見えるけど、そもそも光が足りていないから数メートル先は薄暗くてよく見えない。

森の空気を吸うと、懐かしくなった。

私が薬草を学んだ場所だ。

「楽しそうですね」

含み笑いをしながら私の隣に並んだ旦那さまはふうと煙を吐く。この人がついて行くからと何とかミセス・アンドロイドから許可をもらったのだ。仕方ない。

大嫌いな煙草の煙は、冬の近いじつとりとした森の冷氣に含まれて溶けていった。これなら気にならずに済みそうだ。

「伯爵のお屋敷では、屋敷の周りの森で薬草を採ってたんです」

歩きながらつつい草を探して回るのはもう癖だ。そういう風に教え込まれたから。

もつとも、伯爵のお屋敷では庭にも薬草を植えていたから、あんまり森に入るということは無かったんだけど。

あ、あの赤いキノコ。猛毒の奴だ。というか、さっきから毒の野草しか見ないんだけど。土地柄ですか。

悪魔の屋敷の森は、人が踏み固めただけの道が一つあるだけであとは自然のままに任せているらしい。倒れた木なんかもあるけど、そのままだ。ヒンテンがこの先の森小屋に毎日通って小屋のあたりだけを整理したりしてるみたい。

本日の目的地もそこです。

高い木を見上げてみると、短い間だったけど叩きこまれた薬草と文字のありがたみを思い出す。結構、あれで救われた。何も分らないよりも、何か一つでも分かるっていうことが私の確かな支えになったから。

でも、

「元の世界じゃ全然興味は無かったから、この世界限定の知識だなあ」

こっちの世界の植物をたくさん知っても、元の世界ではまるで違うはずだ。たまにコーヒーの木みたいなものがあるのかもしれないけど、自然にはあまり無いだろう。

「覚えることを覚えたのですから、あちらの世界に帰ってもすんなり頭に入ると思いますよ」

私の何気ない呟きを聞いていたのか、悪魔がそんなことを言う。

「一度、興味をあなたは覚えたのですから、大丈夫ですよ」

興味がある、ということを感じたから元の世界の植物も、言葉も覚えられるだろうか。

そうだな。いいな。

それが出来れば、こちらでもそうだったように、私はきっと世界のことがより美しく見えてくるだろうから。

広い二つの世界を跨いだのだ。私の世界は他人様よりちょっと広いはず。

だから、つまらない仕事も、運の悪い毎日も、ちょっとは素敵に見えるかもしれないか。

帰るの、楽しみになってきたかもしれない。
もちろん、淋しくないわけじゃない。

昨日、カルチェから手紙が届いた。

丁寧に、耳飾りのお礼と近況が綴られていて、最後にまた遊びにおいでと締めくくられていた。どうやら、アグリがカルチェを口説いている真っ最中らしい。戸惑う彼女の気持ちも書かれていた。適当に焦らしてやるといい。あくまで適当に。アグリは自主我慢は好きだけど餌をちらつかせられたらこらえ性があまり無いと見た。

彼女は、私が結婚したということを知らないらしいから、伯爵は本当に私の現住所だけ教えたようだ。自分で報告しろと。今から、手紙の内容を悩まなくては。

南国の王女さまのポリテイクと、クルピエからも手紙が来た。

ポリテイクは結婚を儀礼的におめでとうと書いてくれていて、最近南国で流行っているお菓子の話なんかを綴っていた。

クルピエは、結婚おめでとうございます、とか、妹が会いたがっている、とか言い訳じみたことを書いて、最後に自分も会いたいと書いていた。もう謝らないってことか。それとも会ったらまた謝るつもりか。

ポリテイク嬢には会いたいけど、クルピエにはまだ会いたくないなあ。

クルピエの手紙の内容だけ珍しく訊ねてきた悪魔は、私の応えに「あなたらしい」と言っただけ笑った。

「――東の果ての魔女は元気なんですか？」

東国の文字、森の歩き方、薬草、お金の使い方、料理の仕方。今思うと、北国風な料理を教わっていたんだと分かるけど、俊藍に教えられたサバイバル知識とはまた違うことを彼女に教えられた。

気丈で、意地悪で、最後の最後まで私を嫌いだった、魔女。

「エバ・シエルヴァは」

私の脈絡のない質問に、悪魔は平然と口火を切る。

「東国に捕えられ尋問された後、北国に強制送還されました。その後、病に倒れて療養所に入ったそうですよ」

いつも思う。

「今では自分が何者であるのかさえ分からない状態だと聞いています」

この悪魔は、自分に関わって巻き込まれた人や死んだ人のことを全て知っているのではないだろうか。

緋色に近い冷たい瞳で、自分の罪を全て見つめているような。

気が狂いそうだ。そんなこと。

自分が殺した人の顔を逐一数えて覚えていたら、きっと正気ではられない。

でも、悪魔から狂気の色は全く感じられない。
それが恐ろしいのか、だからこそ悪魔と呼ばれるのか。

その得体のしれない男は、今日も私の隣に居る。

「この辺りでは雪はあまり降りませんがね。私の領地ではもう雪の季節ですよ」

天気の話と物騒な話を同じ口調で話す男が。

森の冷たい空気を思い切り吸うと、肺が痛んだ。

山小屋についた私たちは、料理長が作ってくれたおにぎりを食べることにした。すっかり昼食メニュー入りしたおにぎりは、思いのほかおかゆ好きの悪魔にも好評だった。

「かつお、という魚はいませんが、話にあるような魚ならいたかしれませんか」

博学な悪魔がそんな情報を提供してくれたので、鰹節を作るのも時間の問題かもしれない。先日すったもんだの末、手に入れたコーヒーはあの木だけでコーヒーがいくらとれるのか分からなかったもので、苗木を育ててみることにした。とりあえず農園に十本分の種を植えてみたから、運が良ければ苗木が作れる。とりあえず手の平に乗るぐらい採ってみて、今はあの豆を乾燥させてみている。

昼食をのんびり終えたら、私たちはさらに森の奥へと入った。

屋敷をぐるりと囲んでいるという森だが、敷地の中には天然の湖もあるという。なんと。屋敷で使っている水源はまた別だが、こちらも予備水源として埋めたりせずに残しているとか。

……なんだか豆の乾燥とかに比べて壮大な計画です。

旦那さまはよろちよろする私によく付き合ってくれた。

最終的には私の方がくたびれて音を上げて木の幹にもたれかかる、悪魔の方は疲れた様子もなく笑ってパイプに火を入れる。

「よく付き合ったものですから」

ああそうか。

悪魔の柄にもない穏やかな顔に、納得した。

私でもこんなに楽しいんだから、先生ならひとしおだっただろう。くたびれたけど、懐かしい葉草がたくさん採れた。

俊藍と原生林を歩きまわったときに教えてもらった葉草もある。

東国は、本当に思い出だらけだ。

もしも私が元の世界に帰ることができたら、この知識を誰かのために役に立てることができただろうか。

私がこんなにアウトドア派になって帰ったら、きっと父は喜ぶだろう。家庭菜園を始めたいと言っていた母にいいアドバイスができるかもしれない。

人生経験を積んでちょっと大人になった私を弟は見直すかも。というか姉上さまは敬え。

私は、たくさんの人に生かされた。

それは比喻でも揶揄でもなくて、本当にたくさんの方の力で生きてこられた。

だから、生きて帰ろう。

先のことなんて分からない。

でも、私は生かされた。

自分の力でもない、神様でもない、運でもない。今まで出会ったたくさんの方に、憎まれて甘やかされて、生かされたのだ。

そして、この悪魔にも。

私が見上げると、紅い目がすうと細くなった。

「今度は、湖まで連れて行ってあげますよ」

そう言って、子供にするみたいに私の頭を悪魔は撫でる。近頃、これが癖なのか頻繁に撫でてくる。

こいつは私を殺そうとした。それはきつと事実だ。本気だったんだろう。

でも、約束をした。

必ず私を元の世界に帰すと。

約束は、守られない。

それが私の人生においての常識だ。

でも、それでも。

「楽しみにしています！」

大きな手を振り払った私を、楽しげに見下ろす性悪悪魔だけは、きつと。

私との約束を、守ってくれるような気がした。

きつと、必ず。

キノコと森小屋（後書き）

ご指摘いただいた誤字を修正いたしました。ありがとうございます。

ヒットと平手打ち

屋敷に帰った私は、夕食を食べながら舟を漕ぐという器用さを披露した。

私を存分に笑った悪魔はデザートも食後酒もそこそこに、ミセス・アンドロイドに私を部屋へ連れていくように言って、自分はいつものようにダイニングの隣のシガールームに落ち着いた。

久しぶりの山道は、結構こたえたらしい。運動不足なんだろうか。ふらふらと歩いていた私は時々ミセスに「しつかりなさいませ」と怒られながら寝室に辿り着く。すんません。

襲い来る眠気と格闘しながらチャリムのボタンに手をかける。

その時だった。

バチン！

変な火花が散るみたいな音と一緒に、部屋の明かりが消える。

目が覚めた。

この屋敷の明かりは、全部、魔術で精製された燃料石だ。使用人と私が総出で必要なところに明かり石というもので明かりを灯していく。だから、一斉に消えることは、まず無い。

ミセスはどこだろう。

今日は月のない日だ。

灯りが消えたら、何も見えない。

暗闇に目が慣れてきて、ぼんやりと物の位置が分かってくると、ミセスがドアの前で直立不動になっていると知れた。

「あの、」

大丈夫ですか、と声を掛けかけて、止める。

彼女がこちらに走ってきたのだ。ありえない。どんなに急いでも廊下は走らないを実践している人なのに。

走りこんできた勢いのまま、肩を押され、ミセスは私を自分の背中に庇うように立った。

え。

私が目を見開いたのは一瞬。

その瞬きのあいだに、

ガン！

重い金属音が耳をつんざく。

ミセスの前に誰か居る。

いつのまに。

黒い塊みたいな奴が突き出した恐らく物騒なものを、ミセスが片

腕で受け止めていた。

喉が引き攣った。

悲鳴が体を駆け巡って、辺りを視線が彷徨う。

とにかく、彼女からあいつを引きはがさないで。

何か、投げる物でも何でもいいから無いの！

私の焦りをよそに、ミセスは一言の悲鳴も上げない。

それどころか、黒塊を、一風ぎに押し返す！

ガキン！

人の腕からはありえない音がした。

飛びのいた黒塊は、離れて見ると男のようだ。黒装束には嫌な記憶しかないから、知らずに顔をしかめる。

ミセスは腕を払った。

ブン！

何か物凄い風圧がくるんですけど！

妙齢の女性が出ていい音じゃない。

この異様なミセスを見ても、黒装束はひるまなかった。

再び、さっき突き出した、たぶん刃物を閃かせる。

ミセスは私を自分の背中に追いやったまま、腕をひと振り。

淡く指の先が光ったかと思うと、その肘から先が人の形を失くす。

手品のように現れたのは、とってつけたような大振りのナイフだった。

私の驚きを放って、刃物と刃物が再び甲高い叫び声を上げる。

ミセスのナイフは、黒装束のそれより大振りだ。

そして、彼女の力も黒装束より強かった。二振り三振りするうちに黒装束の刃は削られて、

バキン！

折れた。

それでも黒装束はひるまない。

手を固く握りこんだかと思うと、その中から目を焼くような光が出てくる。私は思わず目を細めたけど、ミセスも躊躇したりしなかった。

黒装束に斬りかかる勢いのまま、腕を前に出したかと思うと、ナイフとは反対の手の指が再び光る。

ドン。

ミセスの人差し指が一瞬光ったかと思うと、黒装束は拳を握りこんだままぐらりと揺れて、眩い光も消える。ミセスの足元に倒れた黒装束は、もがきもしないでそのまま動かなくなった。

それを見送ったミセスは、腕をひと振りして、ナイフを仕舞った。

半ば茫然とそれを眺めていた私をミセスはちらりと見たけれど、そのまま黙ってドアを少しだけ開ける。

外の様子を見ているようだ。

「あの」

声を掛けると、黙れというように睨まれる。……はい。すみません。

再び様子を伺う彼女の後ろで、私はさっき倒れた男を眺めた。

息は、ある。

肩が揺れてるから。

でも、

「うがあああああ！」

突然、男が自分の喉をかきむしり始めたから私はとっさにミセスの腕を取って離れる。

何だろう。

何が起こってるんだ。

混乱しっぱなしの私だったけど、目の前の男が泡を吹き始めたから、今は襲われないと思った。

毒だ。

どういうわけか知らないけど、この男は毒を飲まされたらしい。

「何か飲ませたんですか？」

ミセスは首を横に振った。

なら、この男は死なせられない。

私は男の方へと駆け寄った。

ミセスの制止が聞こえたけれど、呻き声でかき消される。

「明かりを！」

私の声にミセスは一瞬ためらった。でもそれは一瞬で、普段の冷静さですぐに私の願いを叶えてくれた。

彼女が灯してくれたのは、部屋の燃料石だ。なんと、明かりをつけると普通の人なら熱くて触れないそれを、明かりをつけたまま手に乗せて。

熱くないのかと驚いたけど、ミセスは平然としている。

手の平は怪我をしているようでもなかったから、聞きたいことは後回しにして、私は苦しむ男を床に抑えつけようとした。

でも、無理！

男の力に勝てるはずもなかった。

暴れる男に困っていたら、すっと腕が伸びてきた。

ミセスが片腕一本で男の首を抑えつけたのだ。暴れるから締められるけど、死なない程度だ。私は手早く男の目と顔色を見た。

遅行性の毒の症状に似てるけど、目が充血しているだけで他の異常らしい異常もなく、こんな泡食って暴れる毒なんか知らない。

なんだ、これ。

訳が分からなくて唸っていたら、男がひととき大きく叫んだ。

「殺せ！」

うるさい。

そう思ったら手が出ていた。

パーン！

自分でも小気味いいほど平手打ちが男の横っ面にヒットした。殴られなかっただけマシだと思え。でもちよつと驚いた。

確かに腕を振り切るほどクリーンヒットしたけど、何も気絶するほどじゃなかったはずだ。

私に平手打ちされた男は、そのまま白目をむいて床に転がった。

え、何。死んだ？

うそうそ。やめてよね。

慌てて首の脈を見たら、生きてる。良かった。犯罪者にならずに済んだ。いや、私は被害者なんだし、ましてや殺されそうになったんだから、正当防衛成立？

混沌としたままだったが、私はほっと息をついた。

とりあえず、締め上げる要員は確保した。

ええ、まあ私は仏様でも神様でもないので楽に死なせてやる気はありません。

せめて私に存分に嫌がらせされてから死んでくれ。

「奥様」

床に座り込んでいた私に、ミセスは手を貸してくれた。

この男はしばらく目を覚ましそうにもない。

立ちあがったら、ミセスが怒ったような顔をしていた。

「……危ない真似はおやめください」

いつもの覇気がない。

どうしたんだろう、と思いつつ私はミセスの手に目がいった。

あの手、どういう仕組みなんだろう。

それに、燃料石乗せても火傷一つなかった。

私の不躰な視線にすぐ気付いたらしいミセスは、私をいつもの何の感情も浮かばない顔で眺めてくる。

「……ごめんなさい。ロツテンマイヤーさん」

何だか触れてほしくなさそうだったから謝ったのに、当の本人は納得したように頷いた。

「わたくしに、敬称は必要ありません」

淡々と言って、彼女は自分の腕を撫でる。

「わたくしは、大昔事故に遭い、体の機能のほとんどを失ったので、南国で作리카えられたのです」

え。

それって、

「わたくしの体の半分以上は、機械で出来ております」

ミセス・アンドロイドは、本当にアンドロイドだったようです。
マジですか。

「でも、敬称はいらないってどういうことですか？」

「生身に近い形で作りなოსこともできましたが、わたくしはあえて機械の体となりました。ですから、電算式の電気信号でほとんどを賄う者を人間とは呼びません」

機械に敬称はいらないのです。

どうだろう。

それでも、

「私は、ロッテンマイヤーさんを、人としか見られないんですけれど」

いくら機械仕掛けみたいだからって、ミセスは機械じゃない。怒ったり呆れたり、

「――奥様は、本当に変わった方ですね」

ごくごく稀に、微笑んだりする。

口元が緩んだだけの笑みだったけど、とても優しかった。

「葉子」

ドアが開いたかと思うと、屋敷に明かりが戻った。明るい光に照らされると、乱闘の跡が生々しい。

「無事ですか」

入ってきたのは三つ編み悪魔だ。

どこか疲れたような顔で私の前までやってきたが、私がこいつは何だと指した黒装束を見てちょっと目を丸くした。

「……どうやって生かしたのですか？」

こう、平手打ちをですネ。

そう解説したら、思い切り笑われた。

「あなたという人は、本当に面白い人ですね」

ひとしきり笑われたあと、悪魔はあの毒は魔術の術式によるものだと言った。

「魔術？」

「はい。誰かに敗れたり、捕えられそうになると呼吸を徐々に奪う術式です」

顔をしかめた私を尻目に、悪魔は白目をむいている男を見下ろす。

「厄介事に巻きこんで申し訳ないのですが、この男を捕えてくださってありがとうございます」

悪魔はまるで最高のプレゼントをもらったみたいに笑わない目で微笑むから、私は肩を竦めてやった。

「たぶん、それ、」

私に魔術が効かないから、と言おうとして私の口元に長い人差し

指が当てられた。

指の持ち主の悪魔は微笑んだまま、自分の口を閉じる。

黙れということか。

「それにしても」

私の口先から人差し指を離した悪魔は、それをくるりと魔法使いのように回す。

「今度は何をやったんです。あなたまで狙われるなんて」

そんなこと、神様にでも訊いてくれ。

長椅子と狸

ああいうことがあったので、私の自由はほとんど無くなった。
というのも、

「暇なんですけど」

城勤めの旦那さまの仕事場まで連れてこられてしまうようになったから。

私の生かした黒装束を悪魔はにこにこどこかに連れていった。
——少なくとも、あの屋敷から出していない。警察の役割もあるらしい騎士も来ないから、通報していいのだ。

同じ屋敷に居て、どこに居るのか分からないのは気持ち悪いから悪魔に訊いてみたけれど「元気にしていますよ」と場所は教えられなかった。

どうなっただろうあの黒装束。普通に結果が怖いんだけど。

「もう少し待って下さい。ゲームでもしましょう」

仕事中なはずなのに、のんびりと悪魔は笑った。

お父さんと呼んでいいかな。

黒装束をどこかに閉じ込めて帰ってきたこいつは何というか今まで見たこと無いほど、にこやかだった。やっぱり悪魔だ。

この悪魔はあの手この手で私をこの部屋から出さないようにしているの、私はここ数日のあいだ悪魔とにらめっこして過ごしている。昨日暇つぶしにやったボードゲームは悪魔の十勝一引き分けだったからもうやらない。どうやっても勝てないし勝負にならないことがよくわかった。

私は書類をちゃんと見ているのか次々片付けていく悪魔を見ながら、机の前のワイン色のソファで寝そべった。窓をかたかたとすっかり冷えてきた風が揺すっている。部屋に注ぐ日差しは暖かいけれど、窓を開ければきつと寒いぐらい。

この仕事部屋は要塞城の結構高いところにあるから、普通に地面で感じるよりもちよつと寒い。ええ、開けたんです。旦那さまが休憩に吸う煙草が嫌で。そしたら寒いんだよこの部屋！

私は大人しくここへ連れてこられる代わりに、悪魔に煙草禁止令を取りしました。だから屋敷から入れてきた冷めたお茶を飲みながら、閉め切った部屋で日向ぼっこしてられる。あの北の塔、そろそろ寒いんじゃないかな。有害銀髪も布団かぶってるかな。ここ数日は、あの有害銀髪に会いに行っていない。

「……私、何に狙われたんですか」

敵が多い悪魔なら、暗殺とかありそうだなと思ってたけど、目の当たりにしてこなかったのは、きつと、私には隠していたせい。

「知りたいですか？」

仕事を一段落させたらしい悪魔が席を立ててこちらにゆっくりやってくる。寝そべっていた私のそばに座ろうとするので、私は仕方なく起き上がる。向こうにも長椅子あるじゃないか。

悪魔は睨む私に笑みを一つ落としただけで、三つ編みまでゆったりと寛がせて裾の長いチャリムから覗くゆったりしたズボンの足を組む。足が長くてムカつきます。

「あまり」

足の長さを比べられるような気がして私はソファの上で小さく体

操座りした。少々汚れようがしるもんか。ここ最近、昼日中この部屋に閉じ込められているのだ。何だか鬱になる。

膝小僧に頬を乗せたら、隣から伸びてきた手が私の頭を撫でる。悪魔がついでのように口にしたのは、私の質問の応えじゃなかった。

「少し髪が伸びたのではないですか？」

一度切って襟足が隠れるほどだった私の髪は、うなじを覆うほどになっている。そろそろ結うか切るかした方がいいかもしれない。でも、私はそのままにしている。だから、時々こうして悪魔に頭を撫でられることになっているんだろうけれど、どうにかする気はあまりない。

私の頭を長い指が滑り、視線をやれば悪魔が胡散臭く笑う。

それがどういうわけか、気持ちを落ち着かせてしまうからだろうか。

「……怖いか、とか、聞かないんですか」

悪魔は私を気遣おうとはしなかった。

大丈夫、とか、守る、とか。そういう、私を安心させるようなことは何も言わなくて。

「怖くて当たり前でしょう」

あっさりと笑った。

「どうして、当たり前なんですか？」

「私も怖いからですよ」

にこにことして、楽しそうにしか見えないんですが。

「命を狙われて、怖くない者なんて居ませんよ」

「嘘つき」

「私はあなたに嘘なんかつきませんよ」

「その顔が嘘つき！」

「あなたに顔色を読まれるようになっては、私は商売できません」

確かに小娘に動揺を見破られるようじゃ、宰相なんて狸な商売は務まらないでしょうが。

「怖いなら、怖いと言ってください」

囁くように悪魔は溜息をついた。

「その方が、私は安心できます」

「――どうして？」

長い指が私の頭を離れていくのを目で追ってしまった。
でも、悪魔はくすりと笑っていなかった。

紅い瞳が私を静かに捕えて見つめている。

何故だか、動けなくなった。

私の息まで絡め取るような。

「私も、あなたの言うことなら信用するからですよ」

私の肺の残量を見計らうように、悪魔はいつものように笑う。
一本の糸の上に全体重を乗せるような緊張は一瞬だった。
余韻を吐きだすように息をつくとき、体から力が抜けた。
思っていたよりも、緊張していたらしい。
そう思ったら、今度は眠気が湧いてきた。

「……どうして、王太子派から宰相になったのに、陛下を助けるようなことをしたんですか？」

うとうとと重い目蓋にあの日見た俊藍の私を悼むような顔が思い出された。

アンタは全然不幸でも何でもないのに、どうしてそんな顔をするの。

「――生きるために必要だったんです」

ためらいもない短い答えが悲しくなった。
不幸なんて、世の中から全部消えてなくなればいいのに。

そうすれば、馬鹿なことばかりやって、楽しく生きられるはずなのに。

そのまま私は眠ったらしい。

目が覚めたら、書類片手の旦那さまに膝枕されていました。
「ぎゃあ!」と叫んで飛び起きたら、「気持ち良かったですか？」

と微笑まれた。目覚めが悪すぎる。

悪魔が仕事を終えるのは、夕方のちょっと前だ。お弁当タイムを挟んで午後を過ぎるとひっきりなしに人がやってくるので、私は部屋の隅で小さくなって本を読んでいる。最初の日は悪魔の部下らしい人たちに不思議そうに見られていたけれど、最近じゃ悪魔のついでに挨拶される。

「可愛い奥様ですね」

「どんな本を読んでるのかな。おじさんにも教えて？」

「今度お菓子を持ってきてあげようねえ」

私はどこの良い子ですか。

でも、私の頭を撫でようとする人にはすかさず悪魔がキラキラと効果音でもついてるんじゃないかっていうほどの微笑みで呼び戻す。何か、怖いんだけど。

そんな感じで仕事が終わると、私はお昼御飯の風呂敷を持って上着を着せられ、旦那さまと一緒に仕事部屋を後にする。鍵を閉める彼に、

「宰相って、会議とか無いんですか？」

私が来てからこのかた、この悪魔が会議や視察に出かけたことは一度もない。そういうので忙しいんじゃないのか。

でも、悪魔の旦那さまはにっこり笑って言いました。

「会議で決めるようなことを、即断できないような部下はいりませんから」

必要な折衝はするけど、無駄な会議はお嫌いなようです。うわあ。敵が多いのも頷けます。それでも、どこへ行っても人当たりだけはいいいもんだから、見た目には悪魔は八方美人だと言えた。少なくとも部下で嫌っているような人はいないように見える。

悪魔を嫌っているのは、あくまでこいつと根本的に主義主張が合わない人たちだけだ。

私も合っているとは言えない一人なんですが。

あー、悪魔と屋敷の人たち以外と喋りたいなあ。

城に出てきてるのに、クリスさんともお喋りできないなんて。

「今日は、ガミユゼが大きな魚を仕入れてくるようですから。夕食のメインが楽しみですですね」

ささくれだっている私の頭を大きな手の平が宥めるから、何故だか文句は出てこない。

代わりに私は口を曲げる。

慣れた事実が嫌なのか、それともこの扱いが嫌なのか。

その答えは、いつまでも出してはいけないような気がする。

帰る時間が違うのか、要塞城の前の車溜まりはいつも閑散としていて、竜車を待っている悪魔と私以外に今日も誰も居なかった。

やがて竜車の音を聞きつけて姿を探すと、御者に見慣れない人が座っていた。

茶髪の爽やか好青年、ヒンテンだ。

黒いマントを羽織った彼は私と悪魔の前に竜車を横づけして御者台を降りてくると、にこやかに「おかえりなさいませ」と言った。

「ベンデルはどうした？」

悪魔の、何気ない声がどこか針を含んでいる。

彼はさりげなく私の前に立って、ヒンテンを見下ろす。

「――さあ。脇腹を刺されて動けるなら、化け物だね」

えっ。

爽やかなはずのヒンテンの顔が凶悪に歪んだと思ったら、私は誰かに抱えられて竜車の箱目掛けて放り投げられた。

ぶつかる！

そう思ったら竜車の扉が開いて座席の間にどっと倒れこむ。

何なんだ！

「悪く思わないでくれよ。奥様」

痛む腕をさすって起き上がると、悪魔の後ろからヒンテンが顔を出して笑っていた。

「これも仕事だ」

「あ、あんたの仕事はお屋敷の雑用でしょ！」

言ってやったらヒンテンは目を丸くしてから、けたけたと笑った。

「奥様のお守りも確かに面白かったけどね」

そう言いながら悪魔に目配せして、短く「乗れ」と言う男は、すでに私の知っている彼ではなかった。

悪魔が私に手を貸して座席に座らせて、もう一度ヒンテンを見たら、彼の手には剣が握られていた。

「ごきげんよう。旦那さま、奥様」

いつものように微笑んだヒンテンによって、竜車のドアが閉められる。窓がどういうわけか黒く曇って外の景色は見えなくなった。

そうして、竜車は走りだす。

いつもなら低く聞こえる車輪の音すら聞こえない。

まるで箱だけが移動しているようだ。

辛うじて伝わってくる振動だけが、まだ竜車に居ることを思わせた。

悪魔が手を翳して魔術で明かりをつけてくれる。

私は混乱しているのにどうしてアンタはそう落ち着いているんですかさすが悪魔ですね！

ええと、状況を整理しようではありませんか。

ようは、私たち、

「誘拐されましたね」

ですよ。

体を失くした貴婦人

ロッテンマイヤーの記憶は、生体カプセルの保存液の中から始まる。

国境で起こった、ひどい墜落事故でほとんどの体の機能は失ったものの、奇跡的に脳の機能だけ残ったために文字通り保存されていたのだ。

彼女が拾われた先も良かったのかもしれない。

世界の魔術の叡智が集まるのが北国であれば、この南国には機械の叡智が集まる。

彼女が拾われたのは、南国だった。

北国であれば、人道よりも研究に重きを置く魔術師どもの研究材料にされてロッテンマイヤーの生は失われていただろう。

人道を第一とする南国であつたからこそ、彼女は脳以外に残った数少ない体の一部と共に保存されたのだ。

しかし、彼女を再び元の形に戻そうという者はいなかった。

脳にわずかに残った事故の記憶では、すでに彼女に家族はなく、また名乗り出る親類も居なかった。

だから、カプセルの保存液越しに時折、彼女の様子を見に来る研究者以外と話すことはなく、そうして二十年の歳月を過ごした。

カプセルの中の栄養素のお陰で死ぬことは無かったが、ロッテンマイヤーは自身で動くことすらままならず、また、その様子は人間の嫌悪感しか生むことはなかったので、彼女を訪れる人も次第に減った。

そうしてほとんどの研究者にすら忘れ去られた頃、一人の男がやってきた。

研究者ではない。

南国で作られる眼鏡の調整でやってきたという彼は、ロッテンマイヤーのおぞましい姿にも眉ひとつ動かさず、それどころか無遠慮に話しかけたことを詫びさえた。

時々やってくる彼はロッテンマイヤーに色々な話を聞かせた。

家族のこと。

兄のこと。

それから、世界のこと。

彼が非常に頭の良いことはすぐに知れた。だが、それ以上に彼は孤独だということも次第に分かった。

人の重みで歪んだ世界。

魔術や知識に支配され、人形のように心を失くしていく人々。

それをまるで外側から見ているように、馴染めない自分。

憐れだと思った。

動く体もなく、親しい友人もなく、小間切れの記憶しか持たないロッテンマイヤーですら、彼を憐れだと思った。

同時に、ロッテンマイヤーにまで憐れに思われる彼のことは、きつと理解してやれないと思った。

そばに居てやることもできるだろう。話を聞いてやることもできる。

だが、ロッテンマイヤーは南国に生かされた世界の一部であって、外側の人間ではない。

だから、どんなに心を碎いたところで彼の孤独は癒されることはないことも分かった。

それでも、ロッテンマイヤーは彼にここから出してくれと頼んだ。

彼は何も言わずに頷いてくれた。生きている人間と変わらない機能を持つ生体擬態を用意すると言ってはくれたが、あえて軍用に強

化された変形製鉄の機械人形の体を選んだ。

彼はロッテンマイヤー自身も忘れていた過去を調べて教えてくれないが、彼女は新たな体で祖国に戻ることをしなかった。

「マダム」

保存液越しではない彼はひどく若かった。

「敬称はいりません。旦那さま」

ロッテンマイヤーの応えに彼はわずかに苦笑した。

それから、また二十年の歳月が経った。

「おい」

静かに夜の暗い廊下を歩いていたロッテンマイヤーが振り返ると、青白い顔をした男が幽霊のように現れる。

「動いたぞ」

「そうですか。では、後のことはよろしくお願いしますね」

「分かった」

片言だけ喋って、普段は料理長を務める男は再びゆらりと暗闇に

消える。

ロッテンマイヤーの熱感知すらすり抜けて消えた男を見送って、彼女は廊下を静かに歩く。

「――門のところに人が来たよ」

普段の大人しい形を捨てた新しいメイドがはすっぱな、だがどこか兵士を思わせるような口ぶりで廊下の先からやってくる。

「十、二十、三十は堅いかな」

「予想の範囲です」

「言ってくれるね。おばさん」

「その言葉づかいはおやめなさいと言ったはずですよ」

ロッテンマイヤーの冷やかな視線を鼻で笑って、メイドは肩を竦めた。

「奥様の前じゃ、イイ子ちゃんしてるだろ？」

それに、とロッテンマイヤーを見上げた眼光は、大人しい少女のものではない。

「あたしはこういう時のために雇われたはずだ。他は見逃してほしいねえ」

「すべてを含めた報酬です。別にあなたでなくとも良かったのですよ」

「何をしている。仕事をしているのは俺だけか」

静かに睨みあう彼女たちの後ろからずるずると何かを引きずる音と共にやってきたのは背虫の男だった。

ごつごつとした右手に掴んでいるのは、男の襟首だ。

「こいつも捕えておけとの、旦那さまのお言いつけだ」

軽々と廊下に放り出したのは、最近新しく雇った茶髪の従僕だ。

彼は暗闇でも分かるほど青白い顔で「許してくれ」と床にうずくまる。

「始終この調子で、連れてくるのに疲れた」

そういう背虫の男の腹には剣が根元まで突き刺さっており、剣先は背中を突きでていると思われた。だが、血は一滴も流れていない。

「その姿で捕えに行ったのですか」

表情は変わらないが呆れたようなロツテンマイヤーの声に背虫の男はふんと鼻を鳴らす。

「突然刺されたんだ」

言い訳じみた応えに、ただ単に抜くのが面倒だったただけだとロツテンマイヤーは目を細める。

「身形を整えて、次の仕事に向かってください」

「だったら」

背虫の男は大きく背をそらした。ゴキリと嫌な音まで立てて、骨を次々と外していく。そうして、顔の顎まで崩した彼の姿は、中年の陰気な男ではない。最後に腹に刺さった剣を抜気取るさまは、まるで薄気味悪い奇術師だった。

「行きがけの駄賃だ。外の人間は片付けておこう」

美しい彫刻のような男だ。

闇のように黒く長い髪を掻きあげ、にやりと口の端を上げる。彼は背虫の男だった頃の御者のお仕着せの上着を翻し、廊下の窓を開けるとひと飛びに夜の闇へと消えていった。

「魔物の類を見るのは初めてでしたか」

黒髪の男を呆前と見送っていたメイドにロッテンマイヤーが声をかけると、彼女は早口でまくしたてる。

「魔物！？ そんなものが本当にいるっていいのか！」

「ではあなたが今見たことを説明してごらんなさい」

言葉に詰まったメイドをロッテンマイヤーは見下ろして続ける。

「あなたの見えている世界がすべてではないのですよ」

普段は御者をしているあの男は、この屋敷の主が連れてきた。北国から来たということだけしか知らないが、ふと漏らした話によれば、数百年を生きる人ではない者であるらしい。昼間は擬態しなけ

れば動けないという彼は、この屋敷に来てからこのかた一つも姿が変わらない。

「さあ、仕事の時間です」

新しいメイドは舌打ちをして、自分が背負っていた長いバレルのついた銃を構えた。

窓の外には、屋敷に入り込んだ招かれざる客がうごめき始めている。

主の計画では屋敷を襲撃させろということだったが、本当にめちやくちやにされるわけにもいかない。何しろ、後片付けをするのはロッテンマイヤー達なのだ。

招いてもいない客を見つけてメイドは口笛を吹いた。

「団体さんのご到着だ！」

あとは頼みましたよ、とだけ言い残して、床にうずくまったままの男を掴んで去ろうとしたロッテンマイヤーだったが、ふと思いついて足を止める。

「奥様の木一本たりとも、傷つけてはいけませんよ」

毎日のようにあの木の周りをうろうろしている新しい奥方の姿を思い出した。

何をするにも、ほとんど使用人に相談するということがないロッテンマイヤーの雇用主だが、何の前触れもなく花嫁を連れてきたことには、さすがのロッテンマイヤーも驚かされたものだ。それが、

東国ではほとんど居ないという迷い人だというから、更に驚いた。

東国では迷い人の存在はそれほど世に知られていない。というのも、この国にはほとんど迷い人自体が居ないからだ。正確な実態は大則を守らなければならない王族や貴族のみに知らされているものだ。だが、迷い人の多い西国では慣習として周知されていると同時に、差別の対象でもある。

その西国からかすり傷一つ負わずにやってきたという、ヨウコ・キミジマという新しい主は、やはり風変わりだった。

目新しいものを見つけると子供のように飛びつき、冷酷非情として名高い夫に真っ向からケンカを挑む。当然のことながら、使用人たちには受け入れられなかった。彼女は女主人としては自由過ぎ、そしてお人好し過ぎた。

しかし、そんなまるで小さな少女のような彼女を、主はこれ以上ないほど甘やかす。

それが更に反発を生んだが、ロッテンマイヤーは夢のような心地だった。

かつて彼女のカプセルの前で世界に嫌われたと呟いた彼が、まるで親鳥のように彼女を慈しんでいたから。

今夜の計画は、すべて主の計画通りに進んでいる。

ロッテンマイヤーが今手にしている従僕は、招かれた裏切り者だ。この男を捕えれば、ロッテンマイヤーの仕事は終わりだ。

この男の先に居る人物との交渉は、主の仕事となる。

それでも。

「御無事で」

そっと呟かれた声は、暗闇に消えた。

襟とスマイル

暗闇に浮かぶ光を眺めながら、目の前の悪魔はうっすらと笑った。その姿はどんな凶悪犯より恐ろしいだろう。

ただいま誘拐されております。ただし、誘拐犯は目の前の悪魔ではありません。

「お腹空いたなー」

「今日はガミyuゼの魚料理だったのに、残念ですね」

会話が場にそぐわないことは承知しております。ええ。でも、やつぱりお腹はすくんだよ！

「それで、どうしてそう悪い顔で笑っているんですか」

おかしくてたまらないというようにニヤニヤと、何だか寒気のする笑みを浮かべている悪魔は不気味だ。どうしてこの人と一緒なんだろう。せめて別々にしてほしかった。あとご飯もくれ。

「あの様子だと、ヒンテンって初めから誘拐犯の一味みたいですね」

「ええ」と短く言って、悪魔は人の悪い顔で応えた。

「彼はクライn卿から紹介された人間ですから」

誰それ。

「ガルニアト様の伯父にあたる方です」

だからそれも誰。

「メルツ王太子殿下のお母上ですよ」

ああ、あの噂の王太子派っていう後妻さん！

私の納得顔を見てから、悪魔は嬉しそうに笑う。

「先王陛下がお亡くなりになられてから王宮で絶大な権力を持たれた方で、我が子を王位につけようと親類縁者を大臣や元老院に送り込むなど、涙ぐましい努力を重ねてこられた方でしてね」

何だかとっても嬉しそうですね。寒い方向に。

「あの方自身は派手好きな可愛らしい女性なのですが、何せご親戚が多いので少々骨を折りましたよ」

やっぱり寒いお話でした。

もう少し実のない話をしようよ。お腹空いたよ。

「……一網打尽にする機会を伺ってたんですね」

人聞きの悪い、と悪魔は相変わらず凶悪顔だ。

後妻さんのご親戚とやらがどれだけ王城にいるのか知らないが、この悪魔はその全部を始末する方法を今の今まで虎視眈眈と狙っていて、今夜誘拐されたことでどうやらそれが全部叶うらしい。

ということは、わざと、あのヒンテンを招きいれて、わざわざ誘拐されたってことだ。

「――ヒンテン、いい奴だったんだけどなあ」

「おや、若いツバメを侍らせる趣味があったとは」

あんたこそ人聞きの悪いことを言うな。

「ヒンテンだけだったんですよ。あの屋敷で営業スマイルしてくれるのって」

彼だけはスマイルゼロ円だった。他の人たちはたとえば私が全財産差し出したってにこりもしないだろう。

「私の笑顔だけでは足りませんか」

「何考えてるのか分からない胡散臭い笑顔だけじゃ寒いだけです」

悪魔の笑顔は気持ちちがゼロです。

「だいたい誘拐されるなら一人で誘拐されて下さいよ」

苛立ち紛れに言ってやると「葉子」と短く呼ばれた。

「怖いですか？」

「今聞くんですか！」

にっこり笑った悪魔の顔を張り倒したい。

だって、今、私が答えるとしたら、非常に不愉快な答えだ。

この悪魔が居るから、怖くない、だなんて。

それに特に感情やら気持ちが無くても口が裂けても言えない。
言ってやるもんか！

「――大丈夫ですよ」

暗闇の箱の中、どこへ行くかも分からない。

この悪魔の計画に巻き込まれて不安でたまらないはずなのに、私はひどく落ち着いた気分で見目の前の紅い目を見つめた。

「あなたに怪我なんてさせません」

無事に帰してあげます。

そうやって、凶悪な微笑みではなく、いつものように胡散臭く笑うから、私の心にまた何かが落ちていく。

無事に帰るのは、私だけ？

胸に溜まった息を吐きだしたら、竜車は止まった。

窓に映し出されたのは、どこともつかない森だった。

月明かりさえ届かないのか、木々に覆われていること以外には何も見えなくて、夜行性の鳥の声しか聞こえない。

「降りろ」

短い声と一緒に、竜車のドアが開かれた。同時に竜車の箱についている明かりが入れられたのか、辺りだけは明るくなって、げんやりする。

流行りなんでしょうか。

竜車の降り口から一列に並んで道を作ってる人たちは全員黒装束です。

悪魔は竜車が止まった時に明かりを消してしまったので、視界が悪すぎるんだけど。仕方なく悪魔の手を借りて降りることになってしまった。タラップの先すらよく分からない。

箱の中では上機嫌だった悪魔はあのハイテンションを潜めていて、いつもの何を考えてるのか分からない笑みを浮かべながら私の上着の襟に触れてくる。

「風邪を引くといけませんからね」

私は小さいお子さんですか。振り払うのも面倒なので、悪魔が整えるに任せていると脇に控えていた黒装束が睨んでくる。私がねだったんじゃないやしません。文句ならこの悪魔に言え。

悪魔は軽く私の上着の襟を整えて満足したのか、おっとりと黒装束達に向きなおる。

「それで？」

短い問いかけだったはずなのに、黒装束たちは明らかに悪魔に気圧された。何十人かいる彼らが、たった一人の悪魔に一瞬動きを止められたのだ。

アンタ達、きっと齒向かう人間違えたよ。

「お前はこっちだ」

ぼーっとしてるのが悪いのか、私はどこからか現れた黒装束に腕を掴まれた。いきなり何すんの痛い！

叫んでやろうと口を開くと、気温が一度下がった。

え、さっきまでこんなに寒かったっけ。

「――人質のつもりなら丁重に」

傷でもつけるつもりなら、とうっすら笑った悪魔の顔を見てしまいました。

あなた、本当に悪魔だったんですね。

黒装束の兄ちゃんと一緒になって青ざめた顔でかくかく肯いて、私は一人暗い森の中へと連れていかれることになった。

正直ほっとしたのはご愛敬だ。

立場違いながら、残った黒装束たちに心の中で合掌しておいた。雇われた君たちも大変だ。

これも運命だと受け入れるしか他にない。

だから、心の中から教えておいてあげよう。

あの人ね、情け容赦って言葉を爪の先ほども知らない人なんですよ。

しばらく黙って黒装束の兄ちゃんに連れられて行くと、森の少し開けた場所に頑丈な門構えの御屋敷に辿りついた。正面から外れた小さな扉を開けて入れと言われ、暗い廊下を伝って連れてこられた先は、

「……またこれか」

これまた薄暗い牢屋でした。

石造りのしつかりとしたなかなか広い牢屋で、カビ臭いけど寒くはない。ただ、じめじめする。燃料石の明かりの届かない場所には行きたくありません。

牢屋に連れてこられても泣きも叫びもしない私を不気味そうに見ていた黒装束には何も要求もしなかった。さすがにここでご飯食べるのは嫌だし、知らない人からご飯はもらっちゃ駄目だと学習しています。薄暗いのに悲しいかな慣れて怖くないけど、ここで寝るのは勘弁だわあ。

溜息をついていたら、半地下の牢屋に小さな足音が響いた。

もう悪魔が来たのか？

でも、忍び歩きなんかしなさそうだ。

それに、何だか足音が軽い。

階段を降りてくる人影に目をこらす。

階段前の燃料石にぼんやりと照らされたのは、少年のようだった。黒い髪を肩甲骨あたりまで伸ばしていて、年の頃は十五歳ぐらい。詰襟を着た彼は遠目から見ても育ちが良さげ。

少年は自分を眺めている私に気付くと、辺りを気にしながら私が閉じ込められている牢までやってくる。

鉄格子越しに見ると、私よりも背が低いがやたらと顔立ちの整った少年だと分かった。

「あなたが、ヨウコさん？」

どうして私の名前を、と尋ねる前に少年は真面目そうな印象のまま、礼儀正しく言ってくれた。

「私は、メルツと言います。ヘイキリング王の、弟です」

こんなところで何をしてるんだ。王子様。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4840o/>

とりかえっこ漫遊記

2011年9月30日05時15分発行